青森県埋蔵文化財調査報告書　第160集

家ノ前遺跡Ⅱ・鷹架遺跡Ⅱ

平成5年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書　第160集

家ノ前遺跡Ⅱ・鷹架遺跡Ⅱ

平成5年度

青森県教育委員会

序

本報告書は、むつ小川原開発に伴い、その予定地区に所在する家ノ前遺跡・鷹架遺跡の記録保存のため、家ノ前遺跡は平成4年度・5年度の発掘調査、また鷹架遺跡は平成5年度の試掘調査の結果をまとめたものです。

これらの調査から、家ノ前遺跡は縄文時代、弥生時代、平安時代の複合遺跡であることが分かりました。鷹架遺跡においても縄文時代、平安時代の遺跡であることが確認されました。

特に、家ノ前遺跡では弥生時代後期の土器がまとまって出土し、この時代の北海道地方と東北南半地方との関わりを知る上で貴重な資料と考えます。

本書が、今後の文化財保護や研究にいささかでもお役に立てれば幸と存じます。

この調査の実施及び報告書の作成に当たりまして、関係各位の御指導、御協力を賜りましたことに対し、厚くお礼を申し上げます。

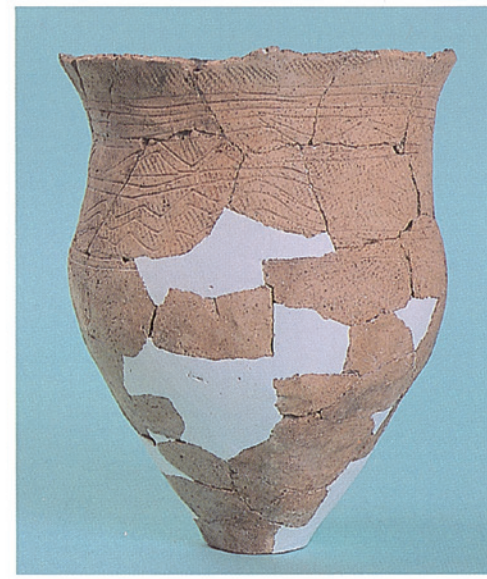
平成6年3月

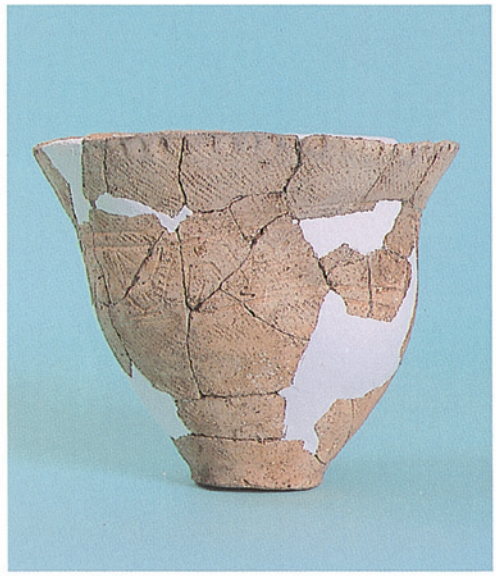
青森県教育委員会

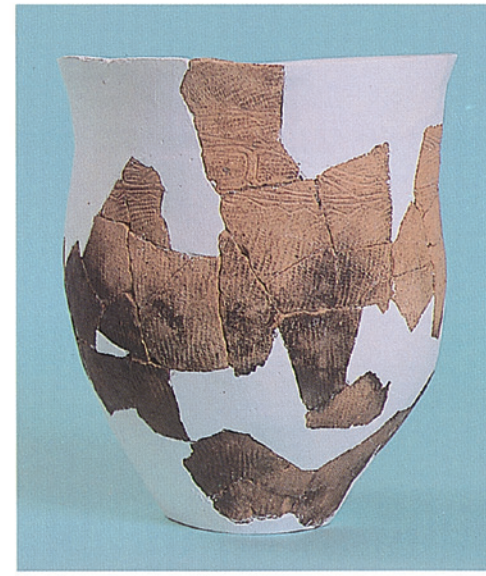
教育長　石　川　正　勝

口絵１　　弥生時代後期の土器と天王山式土器の壺（家ノ前遺跡）

口絵２　　弥生時代後期の土器（甕・鉢と壺・家ノ前遺跡）







例　　言

1　本報告書は、平成４・５年度に実施した六ケ所村家ノ前遺跡の発掘調査ならびに、平成５年度に試掘調査を実施した鷹架遺跡の調査報告書である。なお、家ノ前遺跡は、平成２年度から継続して調査を実施して来たが、平成５年度で本遺跡の調査は終了した。

2　本遺跡の遺跡番号は、家ノ前遺跡－50096・鷹架遺跡－50038である。

3　執筆者の氏名は、依頼原稿については文頭に、ほかは文末に記した。

4　挿図の縮尺は、図ごとに示した。なお、遺物写真の縮尺は不統一である。

5　各遺構の規模については、それぞれ最大値を計測値とした。

6　資料の鑑定及び同定、並びに分析については次ぎの方に依頼した。（敬称略）

火山灰蛍光Ｘ線分析　　奈良教育大学教授　三辻　利一

地形・地質・石器の石質鑑定　　松山　　力

7　家ノ前遺跡の記載した遺構については、以下のように替えた。

平成５年度の発掘調査時において、第１号土坑としたものは→第29号土坑、第２号土坑としたものは→第30号土坑、第３号土坑としたものは→第31号土坑……第35号土坑としたものは→第63号土坑とした。

平成４年度の発掘調査時において第１号住居跡としたものは→第４号住居跡、第２号住居跡としたものは→第５号住居跡……第10号住居跡としたものは→第13号住居跡とした。

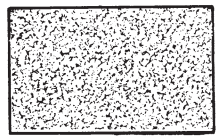
8　遺構内堆積土の注記は、「新版標準土色帖」（小山正忠、竹原秀雄　1987）を用いた。

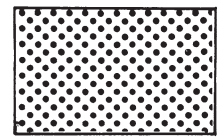
9　石質の略称は、以下のとおりとする。

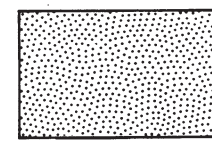
珪頁	珪質頁岩	緑細	緑色細粒凝灰岩	閃緑	閃緑岩
玉珪	玉髄質珪質頁岩	ホル	ホルンフェルス	花閃	花崗蝉緑岩
黒曜	黒曜石	安山	安山岩	班糲	班糲岩
玉髄	玉髄	砂岩	砂岩	輝緑	輝緑岩
頁岩	頁岩	チャ	チャート	流紋	流紋岩
礫岩	礫岩				

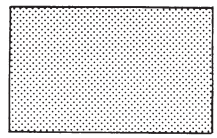
10　引用・参考文献については巻末に収めた。文中に引用した文献名については著者名と西暦年で示した。

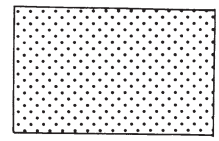
11　図中で表わした遺物実測及びスクリーン・トーンの表示は次のとおりである。

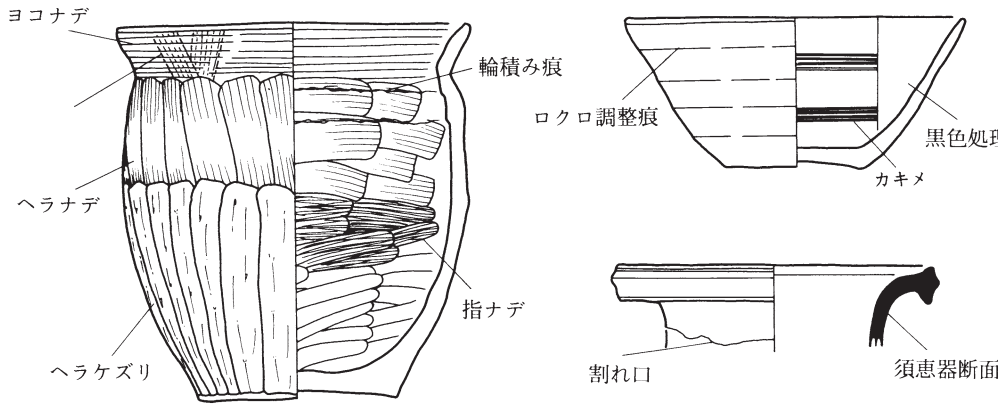

スリ


凹


タタキ


十和田ａ火山灰


白頭山火山灰



12　遺構外出土土器については、実測図、拓影図の下に出土グリッド、出土層位さらに（　　）には整理番号を付した。

13　P_1、P_2…Pit、P1、P2…土器を示す。

14　発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在青森県埋蔵文化財センターで保管している。

15　発掘調査及び報告書の作成にあたり、次ぎの諸氏並びに各機関から御教示、御指導を受けた。

阿部正光・井上雅孝・大矢頭・野口哲也・佐藤信行・佐藤嘉広・鈴鹿良一・山田紘一・鈴木文雄・鑓水実・斎藤邦雄・目黒吉明・三浦英俊・羽賀英一・中村明央・宇部則保(財)岩手県埋蔵文化財センター・(財)福島県埋蔵文化財センター・(財)千葉県埋蔵文化財センター

家ノ前遺跡 Ⅱ

目　　次

序
口　絵
例　言
目　次

第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項
第１節　調査に至る経過…… 1
第２節　平成４年度調査実施要項…… 2
第３節　平成５年度調査実施要項…… 3

第Ⅱ章　調査の方法と経過
第１節　調査の方法…… 5
第２節　平成４年度調査の経過…… 5
第３節　平成５年度調査の経過…… 6

第Ⅲ章　遺跡と周辺の地形・地質…… 7

第Ⅳ章　検出遺構と出土遺物
第１節　検出遺構と遺構内出土遺物…… 14
(1)　住居跡…… 14
(2)　土　坑…… 62
(3)　溝状土坑…… 92
(4)　焼　石…… 96
(5)　集　石…… 96
(6)　埋設土器…… 96
第２節　遺構外出土遺物…… 99
(1)　土　器…… 99
(2)　石　器…… 196
(3)　土製品・石製品…… 231

第Ⅴ章　自然科学的分析

第１節　六ヶ所村家ノ前遺跡出土火山灰の蛍光Ｘ線分析…… 234

第Ⅵ　調査の成果

第１節　縄文時代の土坑について…… 237

第２節　縄文時代の土器について…… 241

第３節　弥生時代の土器について…… 242

第４節　平安時代の遺物と遺構…… 255

写真図版…… 265

付　　図

第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項

第1節　調査に至る経過

平成4年度の発掘調査は、前年度に発掘調査した幸畑（7）遺跡の残りの部分についての発掘調査と家ノ前遺跡の発掘調査が並行して進められることになった。したがって、平成4年5月6日からの発掘調査計画のうち先に幸畑（7）遺跡を完了した後に家ノ前遺跡の発掘調査を6月から行うこととなった。幸畑（7）遺跡については、平成4年度発行の青森県埋蔵文化財調査報告書第148集を参照されたい。

なお、平成4年4月28日には六ケ所村公民館で雇用説明会を開催し、5月6日から本年度の発掘調査を開始したものである。

家ノ前遺跡は、青森県教育委員会が上北郡六ケ所村に所在する遺跡として台帳登録した遺跡（50－96）である。

家ノ前遺跡は、むつ小川原開発事業に関連して青森県教育委員会が昭和53年と平成2年に試掘調査し、平成3年には発掘調査を行っている。

平成2年度の試掘調査では広大な遺跡のうち発掘調査を必要とする範囲を確定した。そのうちの平成3年度発掘調査分を除いた範囲（G区）を平成4年度に発掘調査することになったものである。

このように平成4年度の発掘調査は、G区のうち前年度の発掘調査区の西側隣接地を対象に発掘したものであるが、G区内における防風林解除の問題や発掘調査期間等の関係で委託者であるむつ小川原株式会社からの依頼を受けて、G区のうちの東側約半分（14,500平方メートル）を発掘調査することとなった。

特に、防風林解除の問題については解除後の樹木伐採が本年度にずれ込んでいたため、5月27日に鈴木課長が委託者であるむつ小川原株式会社の職員と協議を行い6月中旬までには完了する約束を取り付け、その間遺跡の発掘調査はとりあえず遺跡内に所在する旧畑地の荒蕪地を発掘してゆくことにした。

また、この遺跡にはこの地方に特有な平安時代の住居後が埋もれきらないで窪みとして残っている箇所があったので、次年度以降に予定される発掘面積をできるだけ少なくするため肉眼で確認できるその住居跡と思われる窪み部分については平成4年度に発掘調査することになった。

平成5年度は、平成4年度の発掘調査に引き続き、残りの調査区域約13,000平方メートルを対象に調査することになった。

（鈴木　克彦）

第2節　平成4年度調査実施要項

1　調 査 目 的

むつ小川原開発事業の実施に先立ち、当該地区に所在する埋蔵文化財の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財活用に資する。

2　調 査 期 間　　平成4年6月8日～平成4年10月28日

3　遺跡名及び所在地　家ノ前遺跡

上北郡六ヶ所村大字尾駮字家ノ前4－1外

4　調 査 面 積　　調査対象面積　23,000平方メートル

調 査 面 積　14,500平方メートル

5　調査委託者　　むつ小川原開発株式会社

6　調査受託者　　青森県教育委員会

7　調査担当機関　　青森県埋蔵文化財調査センター

8　調査協力機関　　六ヶ所村　六ヶ所村教育委員会　上北教育事務所

9　調査参加者

調査指導員

村越　　潔　　弘前大学教授（考古学）

調査協力委員

橋本　　壽　　六ヶ所村教育委員会教育長

調　査　員

小山　陽造　　八戸工業高等専門学校教授（分析化学）

森本　　晋　　奈良国立文化財研究所主任研究官（考古学）

伊東　太作　　奈良国立文化財研究所　情報資料室長（考古学）

瀧澤　幸長　　八戸市文化財審議委員（考古学）

松山　　力　　八戸市文化財審議委員（地質学）

市川　金丸　　青森県立郷土館学芸課課長補佐（考古学）

天間　勝也　　平内町立茂浦小学校教頭（考古学）

10　調査担当者

青森県埋蔵文化財調査センター

調査第三課長　鈴木　克彦

主幹　大湯　卓二

主事　増尾　知彦

調査補助員　　工藤　朝之、岸田　睦子、山田　尚美

第３節　平成５年度調査実施要項

1　調 査 目 的

むつ小川原開発事業の実施に先立ち、当該地区に所存する埋蔵文化財の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財活用に資する。

2　調 査 期 間　　平成５年５月12日～平成５年８月18日

3　遺跡名及び所在地　家ノ前遺跡

上北郡六ケ所村大字尾駮字家ノ前４－１、外

4　調 査 面 積　　調査対象面積　13,000平方メートル

調 査 面 積　8,000平方メートル

5　調査委託者　　むつ小川原開発株式会社

6　調査受託者　　青森県教育委員会

7　調査担当機関　　青森県埋蔵文化財調査センター

8　調査協力機関　　六ケ所村　六ケ所村教育委員会　上北教育事務所

9　調査参加者

調査指導員

村越　　潔　　弘前大学教授（考古学）

調査協力委員

橋本　　壽　　六ヶ所村教育委員会教育長

調　査　員

瀧澤　幸長　　八戸市文化財審議委員（考古学）

松山　　力　　八戸市文化財審議委員（地質学）

市川　金丸　　青森県立郷土館学芸課課長補佐（考古学）

天間　勝也　　平内町立茂浦小学校教頭（考古学）

10　調査担当者

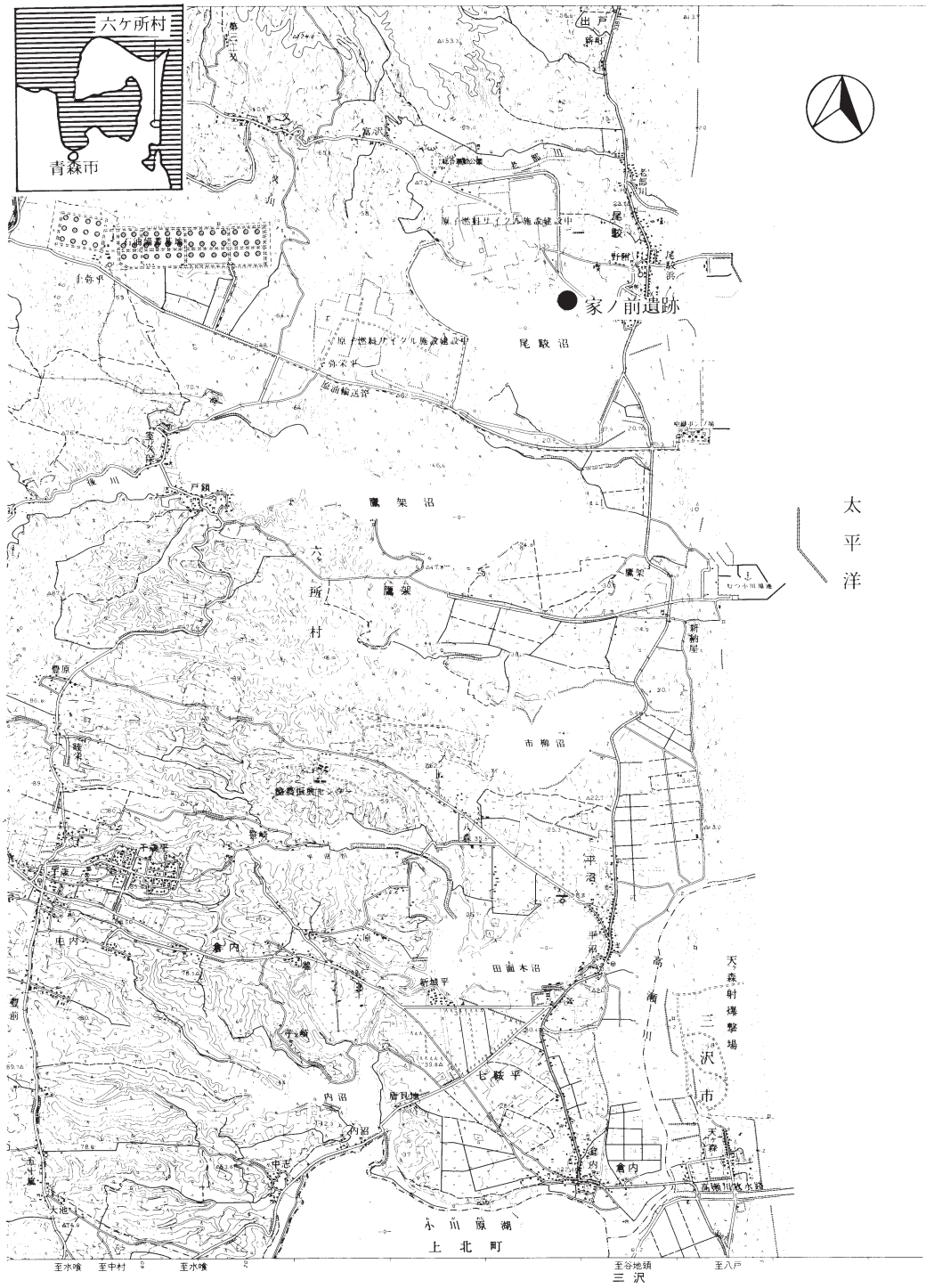
青森県埋蔵文化財調査センター

調査第二課長　三浦　圭介

主幹　大湯　卓二

主事　神　　康夫

調査補助員　　工藤　朝之、本間　　修、山田　尚美



第1図 遺跡位置図

1:50,000 平沼

第Ⅱ章　調査の方法と経過

第1節　調 査 の 方 法

平成4・5年度の発掘調査は、平成3年度に実施したグリッドを延長して設定することとした。グリッドの大きさは、1グリッドが4×4mとし、東から西へ1、2、3と算用数字を、北から南へA、B、Cとアルファベットを付した。グリッドの呼称は、北東隅の交点を使用することとした。なお、アルファベットを付した基準線は、磁北からちょうど東45°にずれている（N－45°－E）。

調査は、グリッド法を用いた分層発掘とし、必要に応じて土層観察用のメインセクションを残した。遺跡の基本層は、上位層から下位層に向かってローマ数字でⅠⅡⅢ層として記録した。土層の色調は、『標準土色帖』を使用し、これに基づきすべての層の注記を行った。

遺構の調査は、住居跡等の規模の大きいものは、4分法を基本とし、規模の小さい遺構は二分法を用い、掘り下げに当たっては層序ごとに掘り進めるように努めた。遺構の実測は、原則として20分1としたが、必要に応じて10分1で行う方法もとった。

遺物については、遺構外のものはグリッド一括として、層位ごとに取り上げた。写真撮影は、カラーリバーサルとモノクロネガフィルムの2種類を使用した。

第2節　平成4年度調査の経過

家ノ前遺跡は、平成3年に引き続き平成4年6月8日から発掘調査を開始した。当初は、六ヶ所村幸畑(7)遺跡の調査と並行して家ノ前遺跡の調査を実施した。発掘調査区域は、家ノ前遺跡の西側に当たる。ここは、かつての畑で、その周辺は松林、杉林で囲まれ、笹が繁茂していた。そのため、調査を進めるに当たり、木の伐採も同時に行った。

6月下旬には、弥生時代の土器破片が見られるようになるが遺構の検出は確認できなかった。

6月30日には、幸畑(7)遺跡の調査が終了したため、家ノ前遺跡に調査スタッフ及び作業員が全員移動した。

7月初旬には、平安時代の住居跡が検出され、精査を開始した。

7月下旬には、遺跡の西区からの遺物、遺構が少なかったので、調査対象とする範囲をさらに東側へ広めることにした。東区の一部は、平成2年の試掘調査の折り、未だ埋まりきらない平安時代の住居跡7軒が存在することがすでに報告されていたので、該期の住居跡の調査を先に行うこととした。このころすでに精査を進めていた第3号住居跡（平安時代）から苫小牧降下火山灰と思われる火山灰が住居跡内に堆積していることが確認された。

8月下旬には、調査区ＢＯ～ＢＱ・72～74周辺から土坑群が検出され、中には第９号、第10号、第11号のように大きな石が土坑に伴っているものも検出された。さらに第１号、第６、第14土坑の中から石鏃、石匙、石斧などが出土した。

９月～10月は、平安時代の住居跡の調査及び西側から東側地区へ調査区を延ばしながら、遺構の検出に努めた。

調査は、10月28日をもって終了し、以下の遺構を精査した。

住居跡10軒、土坑28基、溝状土坑６基、焼石１基。

第３節　平成５年度発掘調査の経過

発掘調査は、５月12日から開始した。調査区域は、平成２・平成３年度に調査した東区と平成４年度に調査した西区の中間地区の調査を実施した。

粗掘は、台地の縁辺に当たるＣＩ～ＣＳ－55～70グリッドから進めた。平安時代の住居跡については、平成４年度に調査を終了しているので、今回はそれよりも古い時代の生活面を中心に調査を進めた。

５月下旬、ＣＩ～ＣＳ－55～70グリッドからは、縄文時代早期、前期、後期及び弥生時代の土器、石器が主に出土したが、遺構は溝状土坑が１基検出したのみである。また、台地南側縁辺には、飛砂（中世・近世期に堆積・無遺物層）が１ｍ～４ｍもの厚さで堆積していることから、この飛砂を重機によって除去した。

６月初旬、ＢＥ～ＢＯ－45～60グリッド（調査区東側）から第１号住居跡～第３号住居跡及び土坑が検出される。住居跡の精査にあたっては、ロームからの掘り込みが浅いため壁の検出が難しかった。第34号土坑からは、縄文時代後期前半の十腰内Ｉ式土器が数固体まとまって出土して見られた。この土坑からは、切断蓋付き土器の蓋の部分も出土した。

７月には、ＢＣ～ＢＨ－55～70グリッドを中心に粗掘りを進めた。周辺から土坑群が検出されたが、遺物を伴うものが少なかった。その中で第51、第52、第53号土坑からは、縄文時代早期終末期の早稲田５類の土器破片がまとまって出土した。この土坑の周辺グリッドからも該時期の土器が認められた。

家ノ前遺跡の発掘調査は、８月18日をもって終了し、検出された遺構は、以下のとおりである。

住居跡３軒、土坑35基、焼石１基、集石１基、溝状土坑４基、埋設土器１基。

なお、平成２年度から継続調査して来た家ノ前遺跡は、平成５年度をもって調査が終了したことになる。

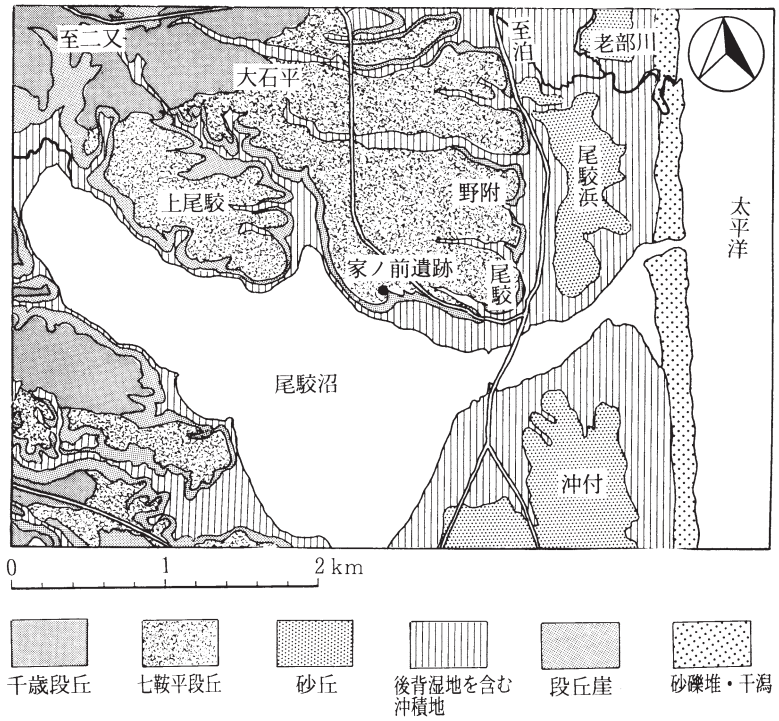
（大湯　卓二）

第Ⅲ章　遺跡と周辺地域の地形・地質

松　山　　力

1．遺跡の地理的環境

太平洋と陸奥湾の間を９～18kmの幅で、50kmの距離を北にのびる下北半島の頸部は、六ケ所村の老部川（おいべかわ）[注1]下流路を東西にのばす線を境に、南部の丘陵地帯と、中央部から北部までの山地帯に分けて見ることができる。南部の丘陵地帯の東側（太平洋側）には、小川原湖、内（うち）沼、田面木（たもぎ）沼、市柳（いちやなぎ）沼、鷹架（たかほこ）沼、尾駮（おぶち）沼など、大小の湖沼群が連なる。中央部から北部にかけての山地帯には、吹越烏帽子岳（ふっこしえぼしだけ、標高508m）、金津山（標高520m）、石川台（標高339m）など、標高200～500m余の三稜が続き、陸奥湾側山麓には比較的幅の広い台地が並行するが、太平洋側の山麓の平地は幅が狭く、中間（尾鮫沼北方15kmの泊付近～19kmの白糠付近）には山塊斜面が海岸に迫り、断崖に白波砕ける岩石海岸となっている部分がある。



第２図[注2]は、家ノ前遺跡をほぼ中心に置いた東西５km、南北ほぼ3.8kmの範囲の地形区分図である。

遺跡は、老部川下流路の南約２km、太平洋岸から西へほぼ２km（陸奥湾岸から約12km）の尾駮沼北岸の段丘崖の縁を中心とした段丘面上に立地している。

遺跡の南側の尾駮沼は、面積3.6平方km2、周囲12.5km、最大水深４ｍの汽水湖である。大鳥が北に頭を向けてはばたくような形の沼は、西の翼端から太平洋への出口までの長さが４km余、南北方向の幅は最大で約２kmある。尾駮沼はかつて、尾駮ニシンの産地として知られていたが近年、核燃料サイクル施設や尾駮浜漁港などの建設により、面影を変えてきた。

遺跡の北方ほぼ２kmには、老部川下流部が東に向けて流れている。老部川は、吹越烏帽子岳から北東方へ3.5km離れた地点に山頂をもつ御宿山（おつくしやま、山頂の標高498ｍ）の南西部を源流とし、吹越烏帽子岳山頂の南東4.1kmを南南西に下ったあと、遺跡の北西７kmで南東に向きを変え、大石平付近から東に向かう河川である。下流部は最近護岸施設が整備されて、河口付近を主として流路が変更された。川の中流部から下流部にかけて、幅100～400ｍの細長い沖積低地が続いている。

尾駮沼西端には、吹越烏帽子岳の南西部に源を発する二又川が流入している。二又川は吹越烏帽子岳山頂の南西方約３kmから、半島頸部の丘陵中軸部を切り裂くように、南方へ約３km下ったのち、尾駮沼西端の北西方５km付近から流路の向きを変え、東、南、東南東方へと屈曲しながら流れ下る。中・下上流部では、幅150ｍ～250ｍの細長い沖積低地が続いている。

尾駮沼周辺を含む上北地方の丘陵は、中川久夫（1969）によって、上位から吹越烏帽子段丘（標高100～140ｍ）、長者久保段丘（90～130ｍ）、甲地段丘（60～100ｍ）、七鞍平段丘（15～50ｍ）の４段に区分されてきたが、山口義伸（青森県教育委員会. 1976）は、六ヶ所村周辺の甲地段丘に相当する段丘を、千歳段丘と命名して南方地域と区別している。

尾駮沼を取り巻く丘陵は千歳段丘と七鞍平段丘とに分けられる。

千歳段丘は、吹越烏帽子岳より南の半島中軸部をつくる段丘である。遺跡付近では、尾駮沼の西端と南方の鷹架沼の中央部を南北に結ぶ線の西側、及び尾駮沼西部北方の大石平付近に分布する。段丘面の高度は、半島頸部の中軸部で80～90ｍ、西と東に高度を下げて、東側の七鞍平段丘に接する段丘縁では45～50ｍ程度になる。千歳段丘は関東地方の多摩段丘、八戸付近の天狗岱段丘に対比できるであろう。

七鞍平段丘は田面木沼と小川原湖の間に広い平坦面をもつ段丘で、尾駮沼付近ではゆるやかに東に傾斜し、段丘面高度は千歳段丘に接する部分で45ｍ前後、東縁で12～15ｍ程度になる。尾駮沼から鷹架沼までの周辺地域では、高度35ｍ前後の部分に、高度差数ｍ程度のやや急な斜面が見られるところが多く、この部分を境界として、やや傾斜の大きい上位面（西側）と、水

平に近い平坦面が広がる下位面（東側）の２つに分かれる。七鞍平段丘は関東の下末吉・武蔵野段丘、八戸付近の高館段丘・根城段丘に対比できるものと考えられる。

老部川と尾駮沼北岸とに挟まれた部分は、上尾駮北西方から尾駮沼北岸の中央部に下る谷を境に、東の尾駮浜に向けて扇状地状に広がる大地と、西部の上尾駮の台地に分岐しているが、大石平付近を除いて大部分が標高50ｍ以下の七鞍平段丘に相当する。この段丘は東方に高度をさげ、遺跡の東方約１㎞ほどを北に向かう段丘縁で12ｍ程度になる。

尾駮沼岸の段丘崖の比高は、東部の段丘末端部で約10ｍ、西方に向かうにつれて高さを増して、尾駮沼先端部付近で40～50ｍとなる。上尾駮の北から尾駮沼北岸の中央部に下る谷の沖積低地は幅50～100ｍ程であるが、奥行は400ｍ程度にすぎない。

尾駮沼から鷹架沼にかけての西方地域には、緩やかな起状でところどころに平坦面がよく残された千歳段丘が広がっている。尾駮沼の南岸と南方の鷹架沼北岸の間は、600ｍまで幅が狭まるが、この間を東西に細長くのびる段丘は七鞍帯段丘である。ほぼ水平な平坦面がよく残されているが、面の標高は20ｍをわずか越す程度である。

東方の段丘縁と太平洋岸とは幅１㎞程度で、この間には洪積世末以降に形成されたと見られる砂丘がある。この砂丘は下北半島北端から三沢付近まで、海岸に沿って並行して続く砂丘の一部に相当し、その頂部の標高はところどころで20ｍを越している。※２に注記したように、現世の砂丘と区別しがたいところが多いので、今後の精査が残された課題である。

２．地 質 の 概 要

遺跡周辺の基盤は、第三紀中新生の泊安山岩類と鷹架層、鮮新生の浜田層、第四紀の野辺地層で、その上に砂礫層・褐色火山灰層群・新旧の砂丘砂層などの段丘構成層がのっている。

泊安山岩類は安山岩質集塊岩、安山岩質角礫岩、安山岩質凝灰岩などで構成される火山性堆積物で、老部川中流域以北に広く分布している。鷹架層は、おもに比較的硬質な塊状シルト質砂岩やシルト岩で構成され、尾駮沼の東岸を除く湖岸全域や老部川下流域の段丘崖下部に露出している。浜田層はおもに半固結状態の砂岩と砂質シルトの互層で、湖岸や河川に沿う段丘崖の随所に露出している。野辺地層は、おもにやや団結した砂岩層・シルトや粘土などの泥岩層で構成されている。浜田層と野辺地層とは周辺地域にもっとも広く分布する地層である。

段丘構成層のうち褐色火山灰層群は厚さ１ｍ未満と薄い。そのうち、最上部の黄褐色ラピリ質浮石層（千曳浮石層）はほぼ全域に連続的ないし断続的に分布しているが、遺跡の直近地域では塊状に集積した部分が点在する程度である。千曳浮石層の降下年代については直接の測定例がなく、十和田湖東方域に広く分布する八戸火山灰層の一部と考えられたこともあったが、最近の各地での調査からみて、八戸火山灰層以後の堆積物とした方が諸資料と調和する。

褐色火山灰群の上位は黒色土（腐植土）層群に漸移する。黒色土層中には飛砂層が挟まれるほか、十和田ａ降下火山灰層や苫小牧火山灰層をレンズ状に挟む部分がある。

3．遺跡の地形と層序

家ノ前遺跡は、上尾駮の北から尾駮沼北岸の中央部に下る谷の、出口の東側段丘崖上から東方500ｍまでの、湖岸と尾駮方面から北西へ向かう道路との間の段丘面上に広がっている。そのうち、北岸中央の谷の出口の沖積地東側に接するところから、南東に向かう段丘崖が北東に折れた先で、襞状に小さく切り込む部分の周囲が、平成２年以来の発掘調査で精査された。

段丘崖は、襞状の切り込み部（襞谷）の手前までは湖岸の汀線間近まで迫っているが、襞谷東方では、湖岸と段丘崖との間に、幅120～200ｍの沖積地がのびている。遺跡直近の段丘崖は急崖をなし、沖積面からの高さは約20ｍになる。遺跡の北側には、現在の道路を斜めに横切る浅い谷の谷頭にあたる凹地が東から入り込み、遺跡の南西側段丘崖の縁には新しい砂丘砂層が１～1.5ｍ以上の厚さでのっていて、緩やかな微高地をつくっている。以上の緩やかな起状をもつ段丘面の標高は、22～28ｍである。襞谷は遺跡南端部の東側から北北西方に100ｍほど食い込み、南半分の谷襞の勾配は段丘崖同様に20～35°と大きいが、谷頭では12～15°とやや緩くなって段丘面へ遷移する。襞谷の東側では10°程度の遷移部まで調査が行われた。

遺跡の土層序を第３図の柱状図（山口義伸・青森県教育委員会・1993）と第４図の標準土層図に示した。

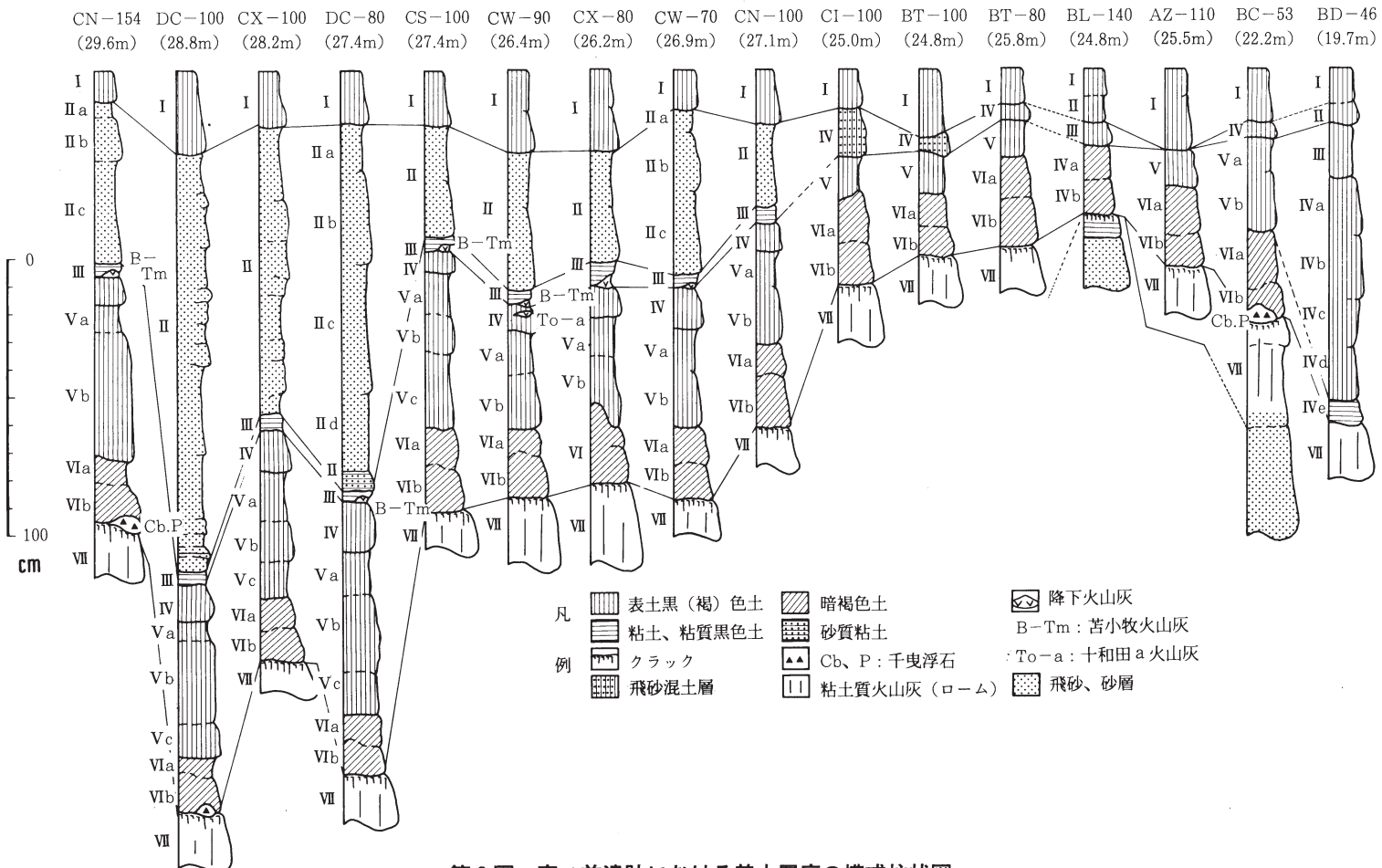
Ⅰ層は厚さ10～30㎝の黒色（10YR2／1）～暗褐色（10YR3／3）の土層である。南部の段丘崖よりでは飛砂が混入してやや厚い砂質暗褐色土となり、段丘崖から遠ざかるにつれてやや粘土質の黒色土に漸移する。

Ⅱ層は飛砂混じりの砂質土であるが、南部の段丘崖よりの部分の微高地では細・中粒の飛砂層と砂質土層との互層となっている。厚さはふつう10㎝程度であるが、飛砂層との互層部では30㎝から150㎝にもなる。砂質土の色調は砂の混入度によって黒色（10YR2／2）・黒褐色（10YR2／3）から暗褐色（10YR3／4）の間を変化し、飛砂層の色調は褐色（10YR4／4）から明褐色（7.5YR5／6）の間を変化する。

Ⅲ層は厚さ10㎝以内の黒色（10YR2／1～2／2）土層で、Ⅱ層の飛砂層部の下位では、下部に粒径２～３㎝程度の黄褐色細流火山灰塊が断続的に含まれる。この火山灰は苫小牧火山灰に相当するもののようである。

Ⅳ層は厚さ５～20㎝の黒褐色（10YR2／2～2／3）土層で、上半部に十和田ａ降下火山灰とみられる青灰色細粒火山灰が１㎝程度の火山灰塊として含まれるところがある。

Ⅴ層は厚さ20～80㎝の粘土質土層である。特徴の変化により、上から下へⅤａ層、Ⅴｂ層、

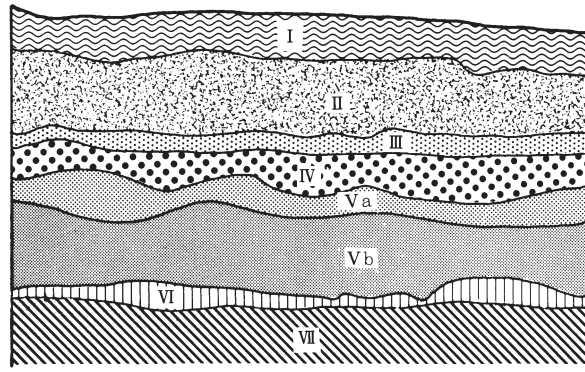


第３図　家ノ前遺跡における基本層序の模式柱状図
（山口義伸・青森県教育委員会・1993）

Ｖｃ層の３層に分けられる。Ｖａ層は厚さ12～18㎝の黒色（10ＹＲ2／1）土層で、よくしまっている。Ｖｂ層は厚さ10～50㎝、黒褐色（10ＹＲ2／2～2／3）ないし暗褐色（10ＹＲ3／3～3／4）の土層で、いくぶんしまりに欠け、ローム質土塊が混入する。Ｖｃ層は厚さ12～15㎝のよくしまった黒色（10ＹＲ1.7／1）土層で、上部にローム質土塊やローム粒が混入する。Ｖｃ層は遺跡南端の段丘崖の縁付近と襞谷の谷頭斜面付近に限って分布する。

Ⅵ層は厚さ15～35㎝、暗褐色（10ＹＲ3／3～3／4）ないし褐色（10ＹＲ4／6）の土層で、下位のローム層への漸移層にあたる。全体的にローム質土塊やローム粒が多く混入し、土壌化して色調が相対的に暗いⅥａ層と、ローム質土塊やローム粒がより多く混入して色調が明るく、かたくしまったⅥｂ層の２つに分けられる。

Ⅶ層は、50㎝以内の厚さの明黄褐色（10ⅦＹＲ6／6～6／8）ローム層で、上部５～10㎝程度が暗色帯となっている。ローム層の直下には灰白色粘土層や段丘砂礫層が存在するが詳細は不明である。また、一部の場所では、Ⅵ層とⅦ層の間に、厚さ10㎝未満の黄褐色ラピリ質浮石層が塊状に挟まれる。これは千曳浮石層に相当する。



第４図　家ノ前遺跡の基本層序

注１　六ケ所村の北に隣接する東通村にも同文字の老部川（おいっぺがわ）があるので要注意。

注２　地形区分にあたっては、最近の核燃料サイクル施設建設やその他の開発による地形の変貌が著しく、原地形がほとんど失われている部分が範囲の50％を越しているので、現地調査結果と1970年測量による国土庁発行の２万５千分の１地形図を区分と記述の基準にした。ただし、図の中央を北方へ直線的に向かったあと、西へ向きを変えて大石平本部に向かう道路は新設の道路である。また、砂丘とした部分は、調査データに乏しく、調査者によって区分のしかた・基準が異なっている。本図では、構成層のほとんどが洪積世末以降の砂丘砂層で、ふつうの沖積地や段丘とは地貌を異にする、標高おおむね５～20ｍの起状地帯を一括して砂丘とした。

引用・参考文献

中川久夫　1969　南部中央地区地質調査報告書　その１　東北農政局計画部。

青森県　1970　むつ小川原開発地域「土地分類基本調査」平沼　国土調査。

青森県教育委員会　1976　千歳遺跡（13）発掘調査報告書　青森県文化財調査報告書第27集。

青森県教育委員会　1993　家ノ前遺跡　幸畑(7)遺跡Ⅱ　青森県文化財調査報告書第148集。

第Ⅳ章　検出遺構と出土遺物

平成４年度・５年度の発掘調査では、縄文時代早期・前期初頭・後期、弥生時代後期、平安時代の各時期の土器が出土した。遺構は、住居跡が13軒（そのうち10軒が平安時代)、土坑63基、溝状土坑10基、集石１基、焼石２基、埋設土器（縄文時代後期前半期）１基が検出した。第１号～第３号住居跡については、縄文時代の住居跡の可能性が強い。第４号～第13号は、平安時代の住居跡である。その他の遺構については、縄文時代の早期末葉から前期初頭期・縄文時代後期前半期の土坑が見られた。弥生時代の天王山式期の遺構については、該時期の土器がまとまって出土したのにかかわらず、遺構として確認されたものはない。(平成４年度、５年度の発掘調査区域及び遺構配置図　付図参照)

第１節　検出遺構と遺構内出土遺物

（１）住　居　跡

第１号住居跡

［位置と確認］ 住居跡は、ＢＨ・ＢＩ－47グリッドからローム面にて確認した。この地区は、調査区の東側に当たり、平成３年度の調査地区と接した位置に当たる。平成３年度調査では、周辺地区から縄文時代の竪穴住居跡（後期前半期）が１軒検出している。

［重複］ 重複は見られない。

［平面形・規模］ 平面のプランは、東壁が明瞭にとらえることが出来なかったが、長軸が350㎝、短軸は推定で350㎝を測る不正円形を呈する。

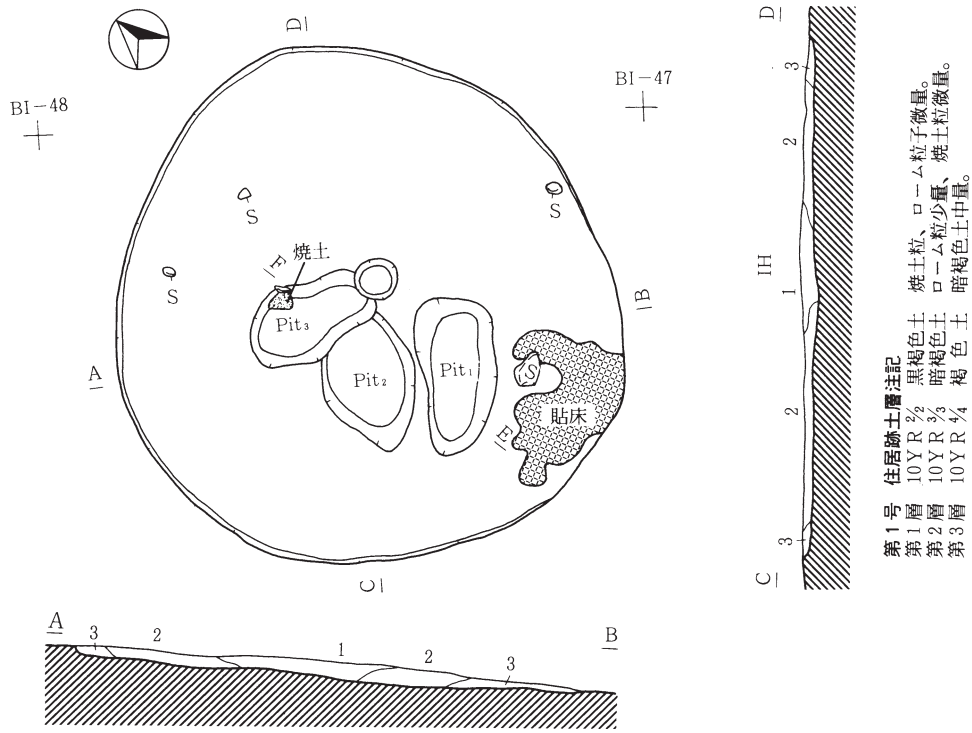
［堆積土］ ３層に分層されたが、覆土の厚さは10㎝も満たないため自然堆積か、人口堆積かについては判断できない。ただ覆土には微量の焼土が全体的に見られた。

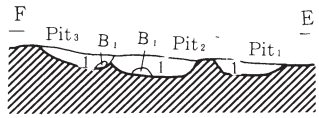
［壁・床面］ 壁は、ロームをほとんど掘り込んでおらず、壁高はローム面からわずか10㎝ほどである。床面は、全体的に平坦で、南壁の一部（100×80㎝）の床がひじょうに堅くなっていた。

［柱穴］ 床面中央には、径25㎝、深さ10㎝ほどのピットがある。主柱穴の一部である可能性が強い。その他の柱穴と思われるピットは、住居跡の外からも確認できなかった。

［付属施設］ 床面中央部には、ピット（108㎝×53㎝)、ピット２（85㎝×65㎝)、ピット３（90㎝×45㎝）が見られ、いずれも10㎝ほどの浅い掘り込みである。この３個のピットからは、いずれも微量の焼土粒及び炭化粒が混在しており、炉としての可能性が考えられる。炉として使われたものとするなら、この３個のピットは、それぞれ時間差が想定される。ピットの重複関係は不明である。

［出土遺物］ 覆土から数点の土器及び石器が出土した。底面からは、10㎝～20㎝大の礫が４個





Pit₁ 土層注記

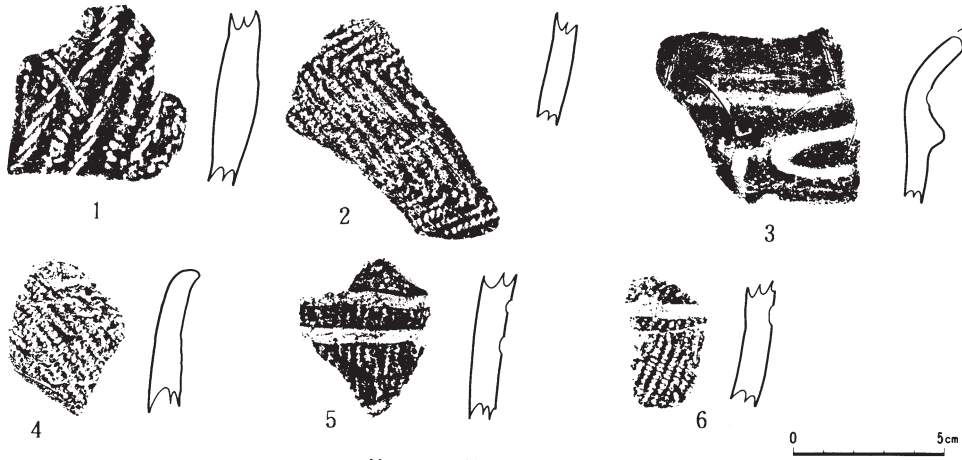
第1層	10YR 2/2	黒褐色土	ローム粒中量、焼土粒底面及び覆土に微量。

Pit₂ 土層注記

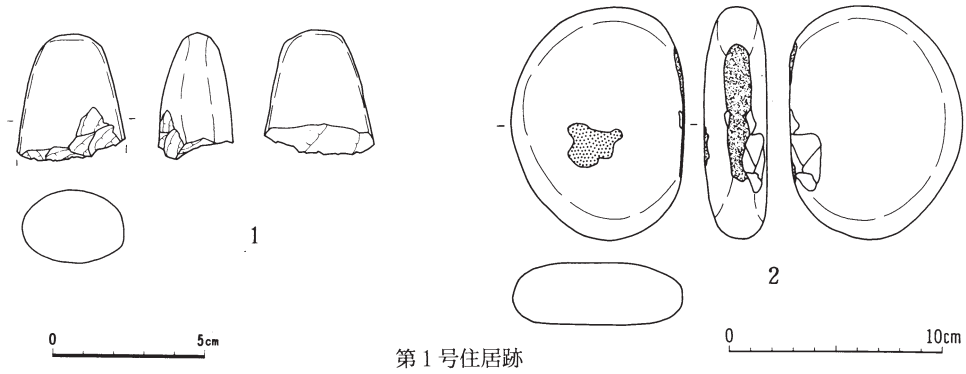
第1層	10YR 3/4	暗褐色土	ローム粒多量、焼土粒覆土上面に微量。
B₁			崩れたLB。

Pit₃ 土層注記

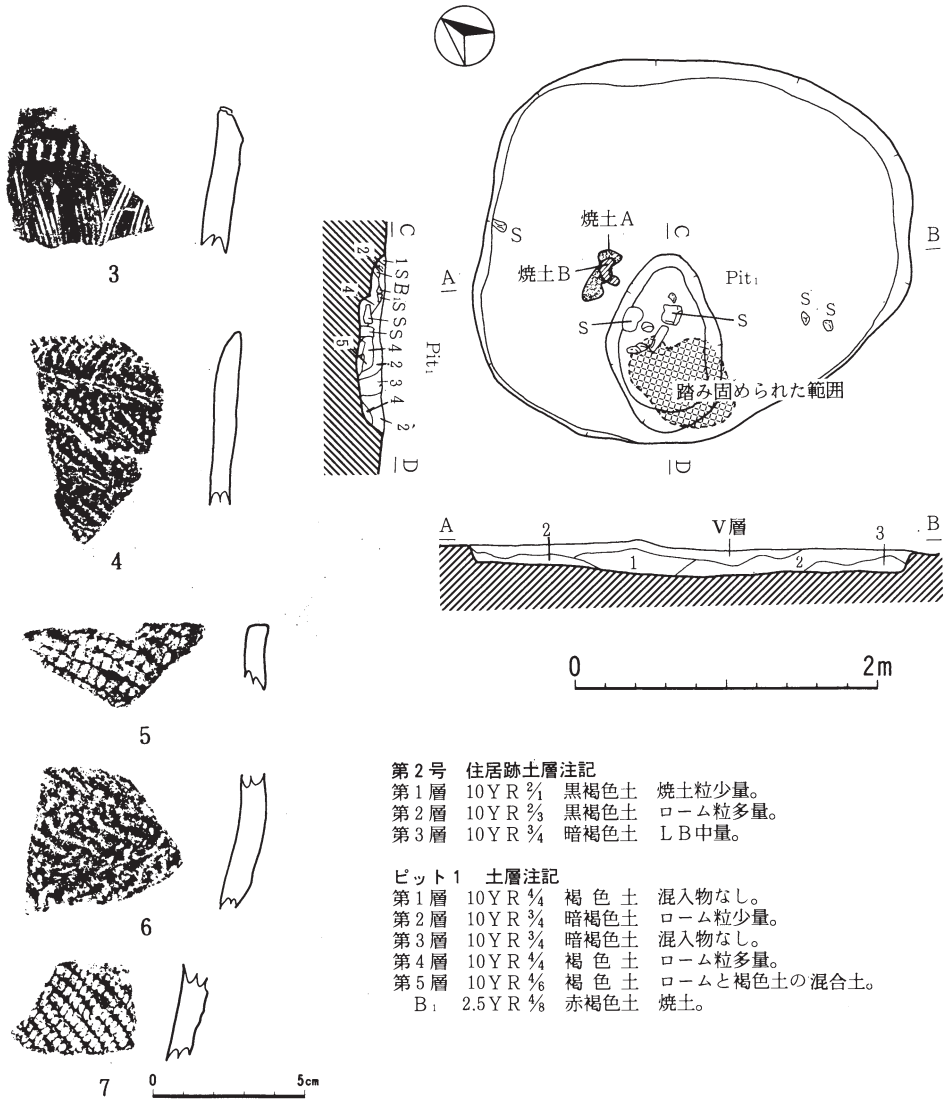
第1層	5YR 2/1	黒褐色土	5ミリ大のローム粒少量、焼土粒微量。
B₁			60ミリ大の焼土B。



第5図　第1号住居跡



第１号住居跡



第２号　住居跡土層注記

第１層　10ＹＲ 2/1　黒褐色土　焼土粒少量。
第２層　10ＹＲ 2/3　黒褐色土　ローム粒多量。
第３層　10ＹＲ 3/4　暗褐色土　ＬＢ中量。

ピット１　土層注記

第１層　10ＹＲ 4/4　褐 色 土　混入物なし。
第２層　10ＹＲ 3/4　暗褐色土　ローム粒少量。
第３層　10ＹＲ 3/4　暗褐色土　混入物なし。
第４層　10ＹＲ 4/4　褐 色 土　ローム粒多量。
第５層　10ＹＲ 4/6　褐 色 土　ロームと褐色土の混合土。
Ｂ1　2.5ＹＲ 4/8　赤褐色土　焼土。

第６図　第２号住居跡

出土した土器、石器については、以下の観察表に記載する。

第１号住居跡内出土土器

図版番号	層	部 位	施　　文　　文　　様	時　　期
第５図１	フク	胴部	綾杉状縄文	早稲田５類
〃　２	フク	胴部	結節羽状縄文	早稲田６類
〃　３	フク	口縁部	沈線文	十腰内Ⅰ式
〃　４	フク	口縁部	綾絡文　縄文（RL）	縄文　早期
〃　５	フク	胴部	縄文（LR）　沈線文	弥生？
〃　６	フク	胴部	縄文（LR）　沈線文	弥生？

第１号住居跡内出土石器

図版番号	層	分類	最　大　計　測　値				石質	備考
			長さ(mm)	幅（mm）	厚さ(mm)	重さ(g)		
第６図１	床面	磨製石斧	(40)	32	25	45	緑凝	折損
〃　２	３層	敲磨器	109	8.1	30	427.3	安山	スリ＋タタキ

第２号住居跡

［位置と確認］ 住居跡は、第１号住居跡から南へ約10ｍほどの緩い斜面に当たるBK－45・46グリッドにて検出した。住居跡は、第Ⅴ層を切って構築している。

［重複］ 重複は見られない。

［平面形・規模］ 長軸280cm、短軸250cmを測る不整楕円形を呈する。

［堆積土］ 覆土は、3層に分層される。２層が全体的に見られ、自然堆積と思われる。

［壁・床面］ 南側の壁は、ほとんど残されていない。北壁で25cm、西壁10cmを測る。床面は全体的に凹凸があり、平坦ではない。南壁近くの床面の一部（75cm×50cm）は、黒色土で非常に堅く踏み固められていた。その下にはピットが造られている。

［柱穴］ 柱穴と推定されるピットは、確認できなかった。

［炉］ 床面中央から西寄りに40cm×10cmほどに広がる地床炉が認められる。焼土の厚さは、８cmほどである。その地床炉の下層には、厚さ５cmほどの一枚の層を挟んで35cm×10cmほどの焼土（焼土B)が検出した。このことから下層(焼土B)の焼土は、古い地床炉である。

［付属施設］ 南壁に接して黒色土の堅い面の下からは、120cm×80cmを測る不整楕円形を呈するピットが検出した。ピット内からは、割れた礫が５個出土し、そのうち４個が接合する。また、ピット内の西壁の一部から焼土が検出した。

［出土遺物］ 床面から小礫が３個ほど見られ、土器片は、覆土から出土した。土器は、以下の観察表に一括する。

第２号住居跡内出土土器

図版番号	層	部 位	施　　文　　文　　様	時　期
第６図３	フク	口縁部	貝殻腹縁文　条痕	縄文早期
〃　４	フク	口縁部	結節羽状縄文	早稲田６類
〃　５	フク	口縁部	縄文（RL）	縄文前期初頭
〃　６	フク	胴部	結節羽状縄文	早稲田６類
〃　７	フク	胴部	縄文（RL）	不明

第３号住居跡

［位置と確認］ ＢＩ－50グリッドにて一部150×110cmほどの範囲で堅い面が確認された。周辺は撹乱され、住居跡としての平面プランが確定出来なかったが、壁及び床面の一部が検出したので第３号住居跡とした。

［重復］ 壁は、東壁の一部を除いてほとんど撹乱されている。３号住居跡は、第46土坑にきられている。

［堆積土］ 住居跡の覆土のほとんどは撹乱されているが、東壁付近の堆積は、７層に分けられた。堆積土中には焼土、炭化粒が見られた。

［平面形・規模］ 不明

［壁・床面］ 東壁で、壁高は10cmほどである。床面と思われる箇所は凹凸である。東壁近くの床面には、ピットがありそのピットを囲むようにして粘土を貼っていた。

［付属施設］ ピット（規模95×75cm、深さ25cm）は不整楕円形をしており、覆土中から焼土がみられた。炉としての可能性も考えられる。

［出土遺物］ この住居跡の床面から礫及び覆土から土器破片が出土しているが、住居跡に伴うものかどうかは疑問である。その他に小形の磨製石斧、石箆が１点ずつ出土した。

出土遺物は、以下のとおり観察表に一括する。

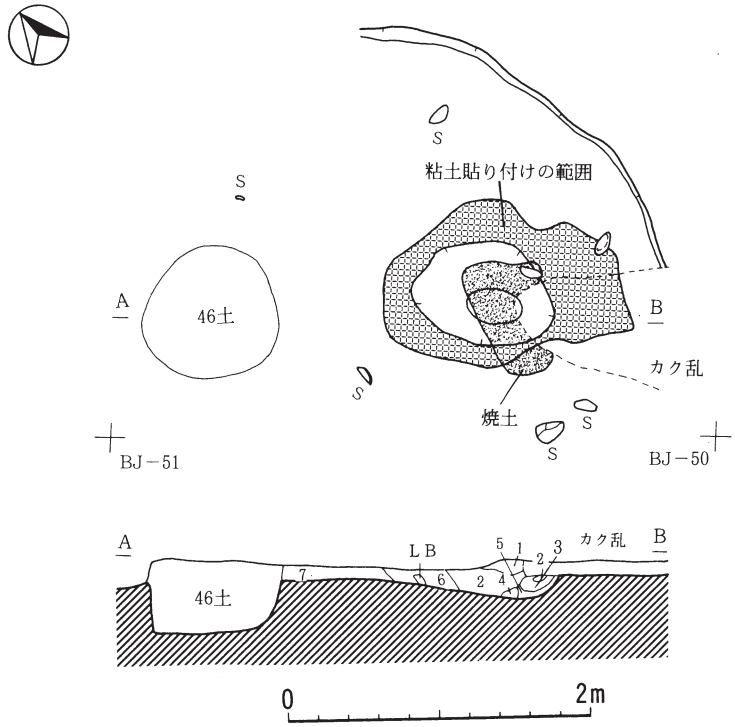
（大湯　卓二）

第３号住居跡内出土土器

図版番号	層	部 位	施　　文　　文　　様	時期
第７図１	フク	胴部	縄文（LR）	縄文後期
〃　２	フク	口縁部	縄文（LR）	縄文後期
〃　３	フク	口縁部	縄文（RL）磨り消し	縄文後期
第８図４	フク	胴部	貼り付け 沈線文	十腰内Ｉ式
〃　５	フク	底部	縄文（RL）	弥生

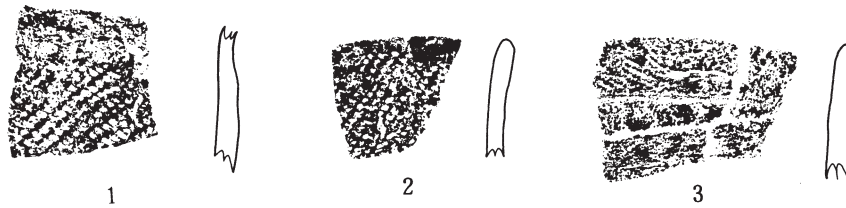
第３号住居跡内出土石器

図版番号	層	分　類	最大計測値				石　質	備　　考
			長さ(mm)	幅（mm）	厚さ(mm)	重さ(g)		
第８図６	床面	敲磨器	180.8	740	640	1420	砂岩	両端にタタキ
〃　７	フク	石斧	55	17	5	8.4	頁岩	小型石斧
〃　８	床面	石箆	72	29	16	31.3	緑ホ	



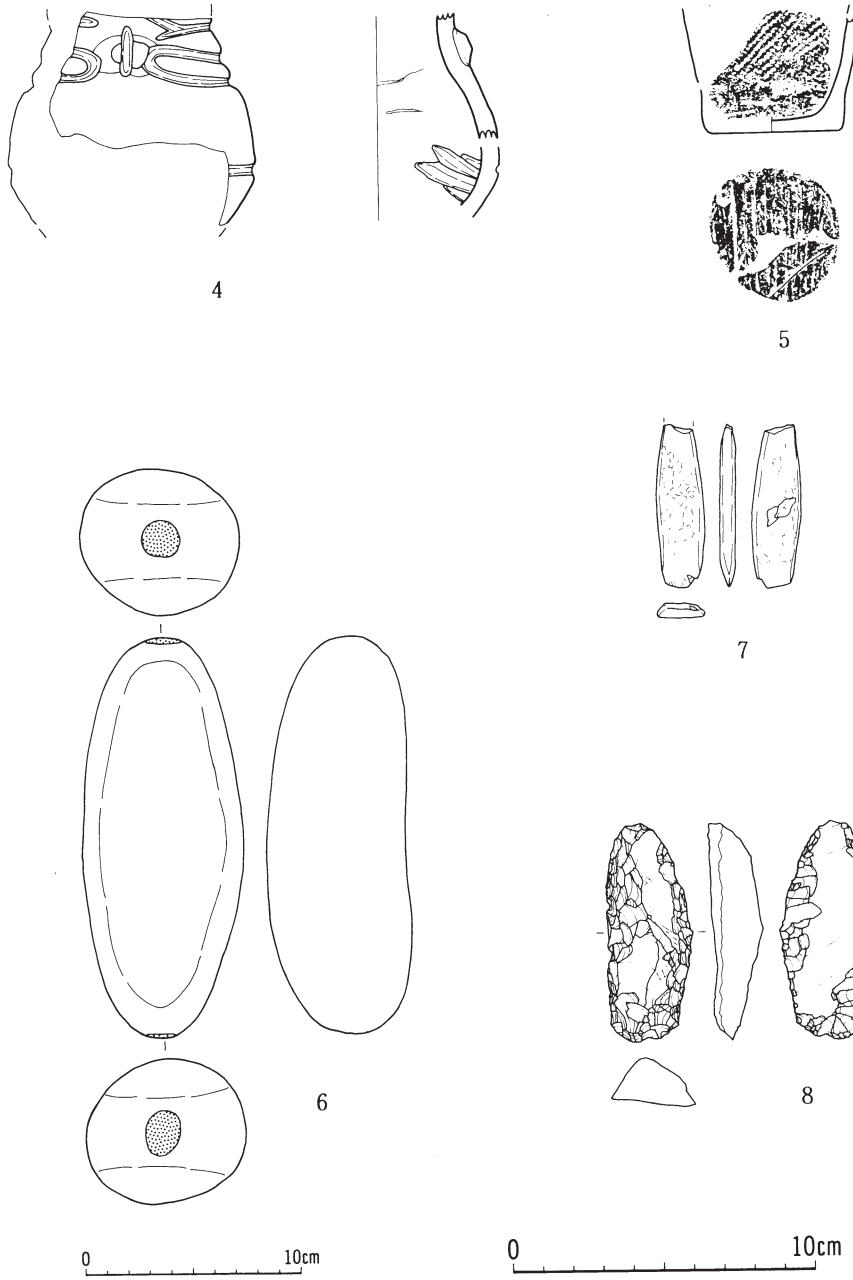
第３号　住居跡土層注記

第１層	５ＹＲ ⁴⁄₈	赤褐色土	焼土、暗褐色土、黒色土混入。
第２層	５ＹＲ ²⁄₁	黒褐色土	炭化物少量、焼土粒、ローム粒微量。
第３層	５ＹＲ ⁴⁄₈	赤褐色土	焼土、暗褐色土、黒色土混入。
第４層	５ＹＲ ⁴⁄₈	赤褐色土	焼土、暗褐色土、黒色土混入。
第５層	7.5ＹＲ ³⁄₃	暗褐色土	焼土粒、ローム粒少量。
第６層	7.5ＹＲ ²⁄₁	黒　色　土	炭化物少量、ローム粒少量。
第７層	10ＹＲ ³⁄₄	暗褐色土	ローム粒微量。



0　5cm

第７図　第３号住居跡



第8図　第3号住居跡

第4号住居跡　＝平成4年度調査第1号住居跡

［位置と確認］　ＣＩ・Ｊ－78・79グリッドに位置する。平成4年度の調査において、第Ⅵ層上面の撹乱土を除去する際に黒色の落ち込みを確認し、第1号住居跡とした。

［改築］　住居跡南側に高さ5㎝ほどで、幅が南北で70㎝、東西で3ｍ30㎝のテラス状の高まりが認められ、住居の拡幅の可能性が強い。また、カマドの再構築も行われており、これに伴った住居拡張とも考えられる。

［平面形・規模］　壁長は、東壁3ｍ98㎝・西壁4ｍ10㎝・南壁3ｍ28㎝・北壁3ｍ24㎝を測り、南北に長い長方形を呈する。床面積は11.19㎡である。テラス部分を除いた場合は、東壁3ｍ31㎝・西壁3ｍ55㎝・南壁3ｍ41㎝・北壁3ｍ24㎝、床面積は9.18㎡であり、当初はこの規模で方形に近い住居であったと思われる。なお、主軸方位は両カマドとも平行でＮ－77°－Ｅである。

［壁・床面］　各壁は、東西南北方向を向いており方位と一致する。壁高は、北から時計回り13㎝・11㎝・9㎝・17㎝である。床面は、第Ⅵ層を掘り下げて造成したもので、テラス部分に段差を持つほかは平坦で、堅い作りである。

［柱穴・ピット］　検出されたピットは3個である。P_1とP_2は平面形では同一ピットにもみえるが、テラスの段差によって中央部で分割され、堆積状態からも2つのピットであると考えた。いずれにしても用途は不明である。

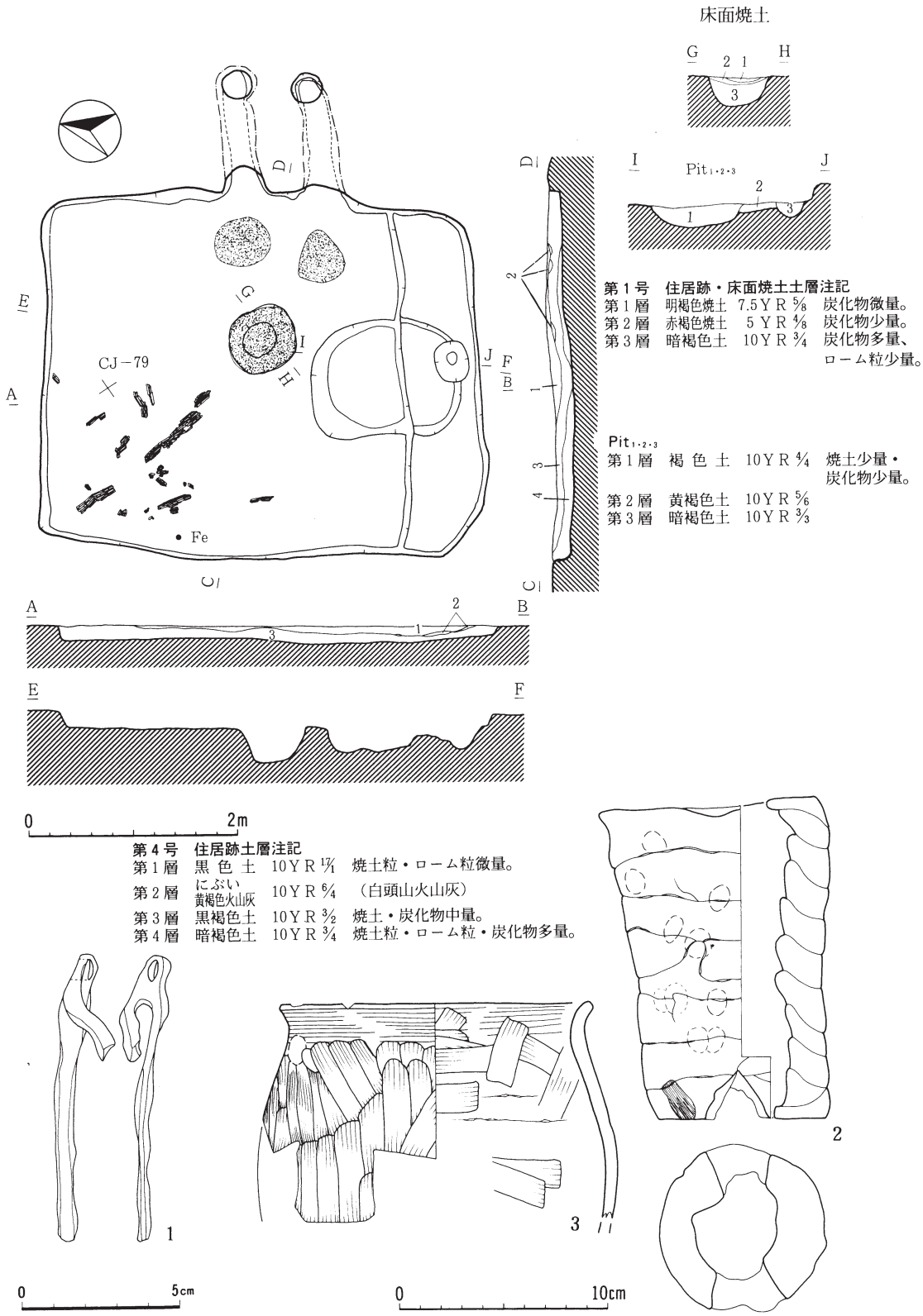
P_1…21㎝、P_2…9㎝、P_3…15㎝である。

［カマド］　東壁に新旧2基のカマドを並列した状態で検出した。便宜上、南側に位置するものを「カマドⅠ」、北側に位置するものを「カマドⅡ」と呼称する。カマドⅠの袖は存在しないが、芯材として使われたと思われるシルト質泥岩が直立し、土師器片が散在する。支脚は地山に埋め込んでローム混じりの暗褐色土で固定している。火焼面はその上に存在することから掘り方が存在することが認められた。煙道部分は第Ⅵ層を掘り込んだトンネル式である。カマドⅡは、Ⅰよりも使用された期間が長かったと思われ、火焼面がしっかりしているものの、袖は認められなかった。煙道部は第Ⅵ層を掘り込んだトンネル式である。新旧関係を明確に捉えることはできなかったが、支脚の有無、袖の芯材の有無等から考えると、カマドⅠの方が新しいものと思われる。

［その他の施設］　床面の中央部に掘り込みを伴う円形の焼土面が認められた。

［堆積土］　5層に分けられた。第2層黒色土下部に白頭山火山灰が部分的に認められた。自然堆積と思われる。

［出土遺物］　土師器の図示し得た個体数は8個で、カマド周辺から集中して出土した。支脚はカマドⅠの炊口部に埋められたままの状態で出土している。鉄製品は西壁際の床面直上から



第１号　住居跡・床面焼土土層注記

第１層	明褐色焼土	7.5ＹＲ 5/8	炭化物微量。
第２層	赤褐色焼土	5ＹＲ 4/8	炭化物少量。
第３層	暗褐色土	10ＹＲ 3/4	炭化物多量、ローム粒少量。

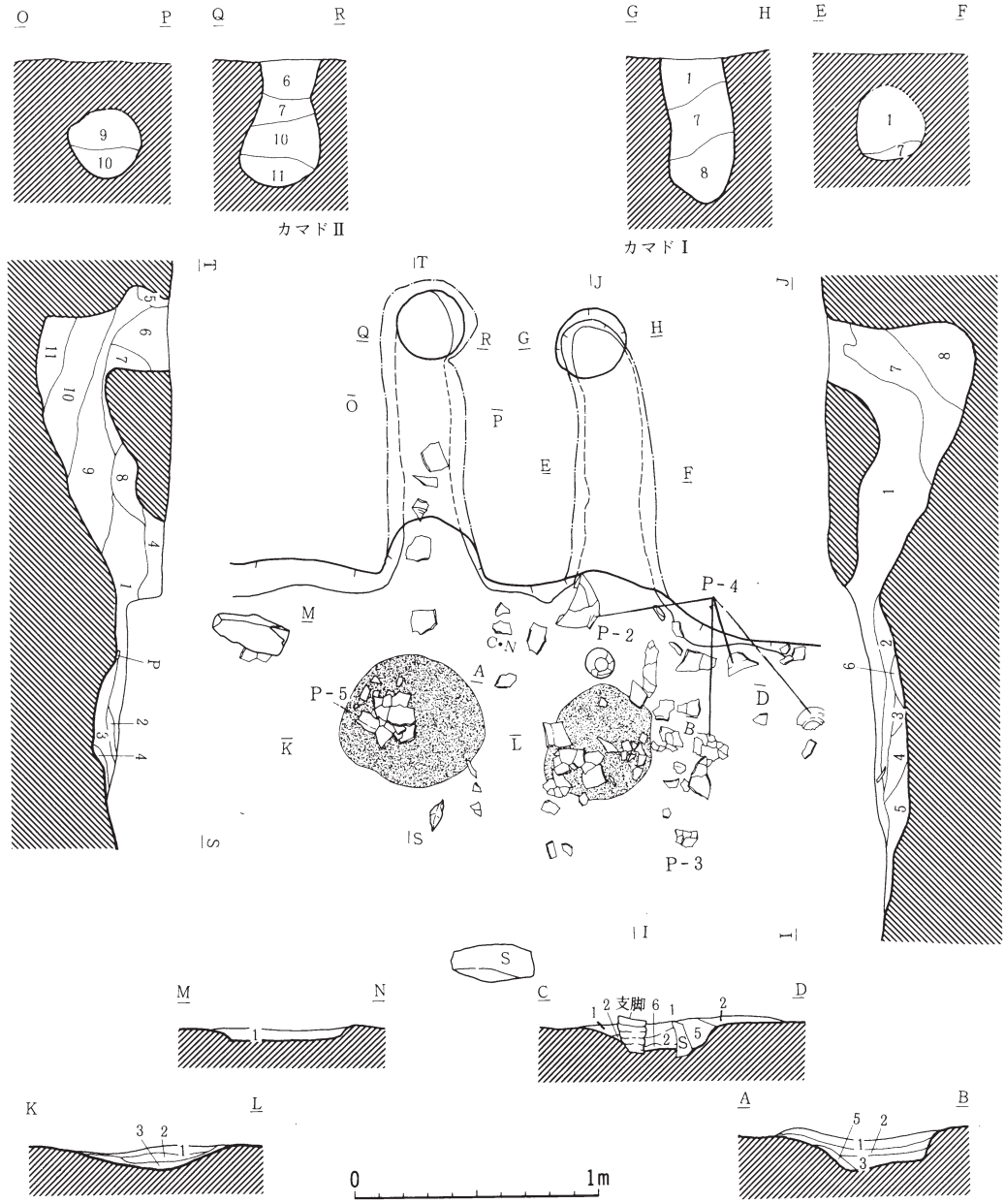
Pit1・2・3

第１層	褐色土	10ＹＲ 4/4	焼土少量・炭化物少量。
第２層	黄褐色土	10ＹＲ 5/6	
第３層	暗褐色土	10ＹＲ 3/3	

第４号　住居跡土層注記

第１層	黒色土	10ＹＲ 17/1	焼土粒・ローム粒微量。
第２層	にぶい黄褐色火山灰	10ＹＲ 6/4	（白頭山火山灰）
第３層	黒褐色土	10ＹＲ 3/2	焼土・炭化物中量。
第４層	暗褐色土	10ＹＲ 3/4	焼土粒・ローム粒・炭化物多量。

第９図　第４号住居跡（１）



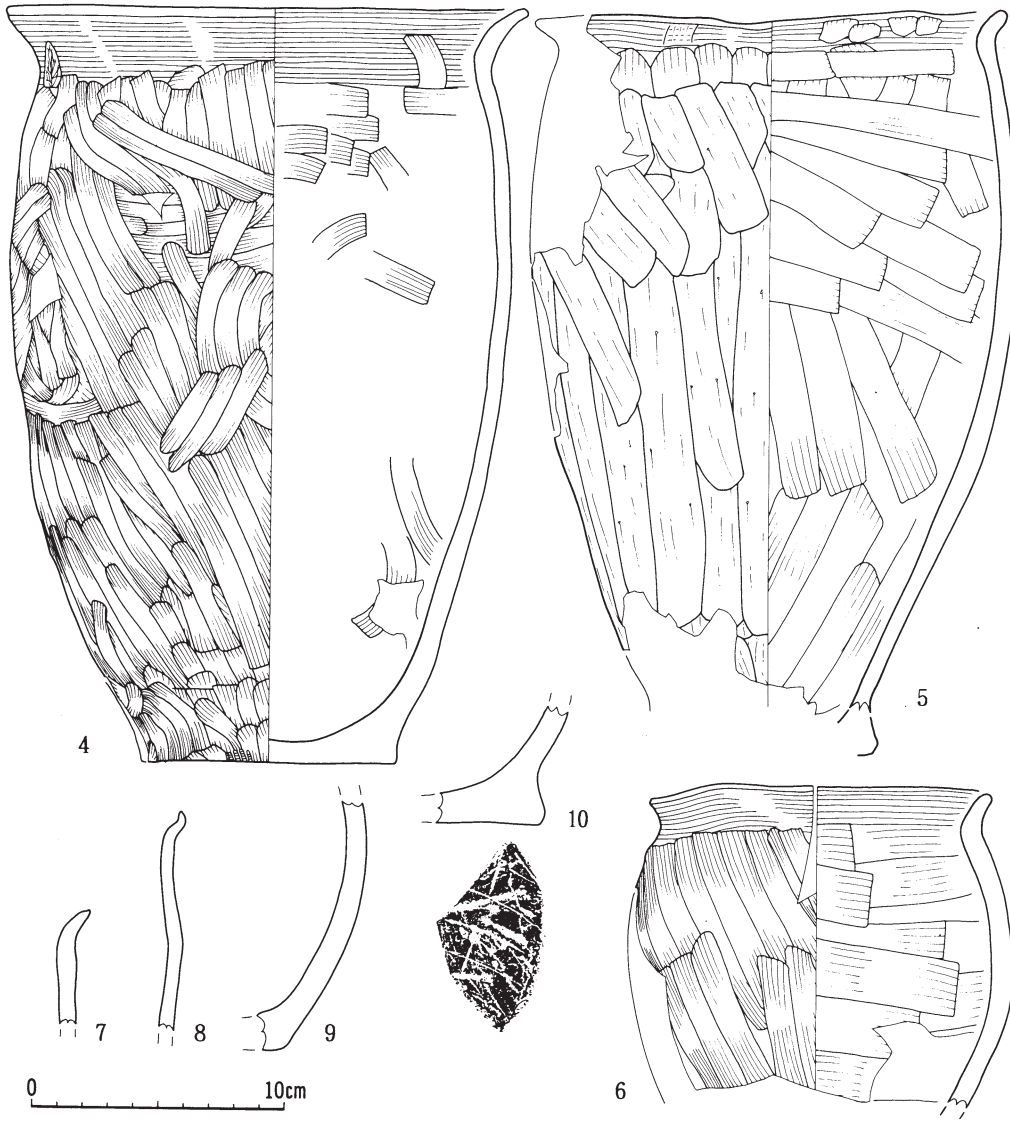
第4号　住居跡カマドⅡ

第1層	暗褐色土	10YR 3/4	焼土粒・炭化物多量。
第2層	赤褐色焼土	5YR 4/8	
第3層	明赤褐色焼土	7.5YR 5/8	
第4層	黒褐色土	10YR 3/2	1～2ミリ大ローム粒少量。
第5層	黄褐色土	10YR 5/6	
第6層	黒褐色土	10YR 2/3	ローム・焼土多量。
第7層	暗褐色土	10YR 3/3	焼土微量。
第8層	暗褐色土	10YR 3/4	φ1～3ミリの焼土粒・ローム粒。
第9層	褐色土	10YR 4/4	ローム粒少量。
第10層	黒褐色土	10YR 2/3	φ10～20ミリの焼土粒多量。
第11層	黒褐色土	10YR 2/3	φ20～30ミリの焼土粒中量。

第4号　住居跡カマドⅠ

第1層	暗褐色土	10YR 3/3	炭化物・焼土粒微量。
第2層	褐色土	10YR 4/6	焼土粒中量、ローム粒少量。
第3層	褐色土	7.5YR 4/6	やや焼土化している。
第4層	明褐色焼土	7.5YR 5/8	
第5層	黄橙色土	10YR 7/8	焼土粒微量。
第6層	暗褐色土	7.5YR 5/6	焼土粒少量・ローム粒中量。
第7層	暗褐色土	10YR 3/4	黄橙色焼土粒、20ミリ大焼土B多量。
第8層	暗褐色土	10YR 3/4	焼土粒・ローム粒中量。

第10図　第4号住居跡（2）



第４号住居跡　土師器観察表　（単位：cm）

番　号	出土層位	機器	部 位	口径	底径	器高	外　面	内　面	底　部	分類	備　考
第９図３	カマド	甕	口縁部	15.0			ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ			
第11図４	〃	〃	完形	20.6	10.0	30.0	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ	ヘラナデ	Ⅰb$_3$	
5	〃	〃	略完形	18.8			ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ		Ⅰb$_3$	
6	〃	〃	口縁部	13.6			ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ			
7	〃	〃	口縁部				ヨコナデ・ナデ	ヘラナデ			
8	〃	〃	〃				ロクロ・ナデ	ナデ			
9	床面	〃	底部				ヘラナデ	ヘラナデ	不明		遺構外28と同一固体か？
10	〃	〃	〃				ナデ	ヘラナデ	木葉痕		

第４号住居跡　土製支脚観察表　（cm）

番　号	出土層位	外面調整	内面調整	外径	内径	残存高
第９図２	カマド	指アツ・指ナデ		12.7	6.2	15.5

第４号住居跡　鉄製品観察表　（mm）

番　号	出土層位	長　さ	幅	厚　さ	種　類	備　考
第９図１	床面	92	3.5	1.2	不明	

第11図　第４号住居跡（３）

出土している。

［時期］　自然堆積と思われる覆土中から白頭山火山灰が検出されており、白頭山火山灰降下以前に構築・廃棄されたもので、出土遺物を加味すると9世紀中葉～9世紀後半にかけてのものと思われる。

［その他］　住居跡が2軒の重複も考えたが、堆積土及びカマドの残存状況から1軒の住居跡で、拡幅とカマドの再構築と考えた。

第5号住居跡　＝平成4年度調査第2号住居跡

［位置と確認］　ＣＪ・Ｋ－80・81グリッドに位置する。平成4年度の調査において、砂利が混入する撹乱土を除去する際に第Ⅵ層で黒色の落ち込みを確認し、第2号住居跡とした。

［改築］　認められなかった。

［平面形・規模］　壁長は東壁3ｍ17㎝・西壁3ｍ07㎝・南壁2ｍ62㎝・北壁3ｍ36㎝を測る北側に開いた台形状を呈する。床面積は8.50㎡である。主軸方位はＮ－75°－Ｅである。

［壁・床面］　各壁は、北から20度ほど西に偏向している。壁高は7～17㎝まで削平されているが、比較的東壁が残存している。床面からの立ち上がりは60～70度前後である。床面は第Ⅵ層を使用しており堅緻であるが小さな起状を伴う。また、部分的に貼床も認められた。

［柱穴・ピット］　住居跡内から検出されたピットは4個である。P_2・P_4は浅いもので柱穴とは考えにくい。P_1も柱痕は確認できず、住居跡外にも柱穴は検出できなかった。P_3はカマドに付属する可能性がある。各ピットの深さは、

P_1…52㎝、P_2…16㎝、P_3…57㎝、P_4…18㎝である。

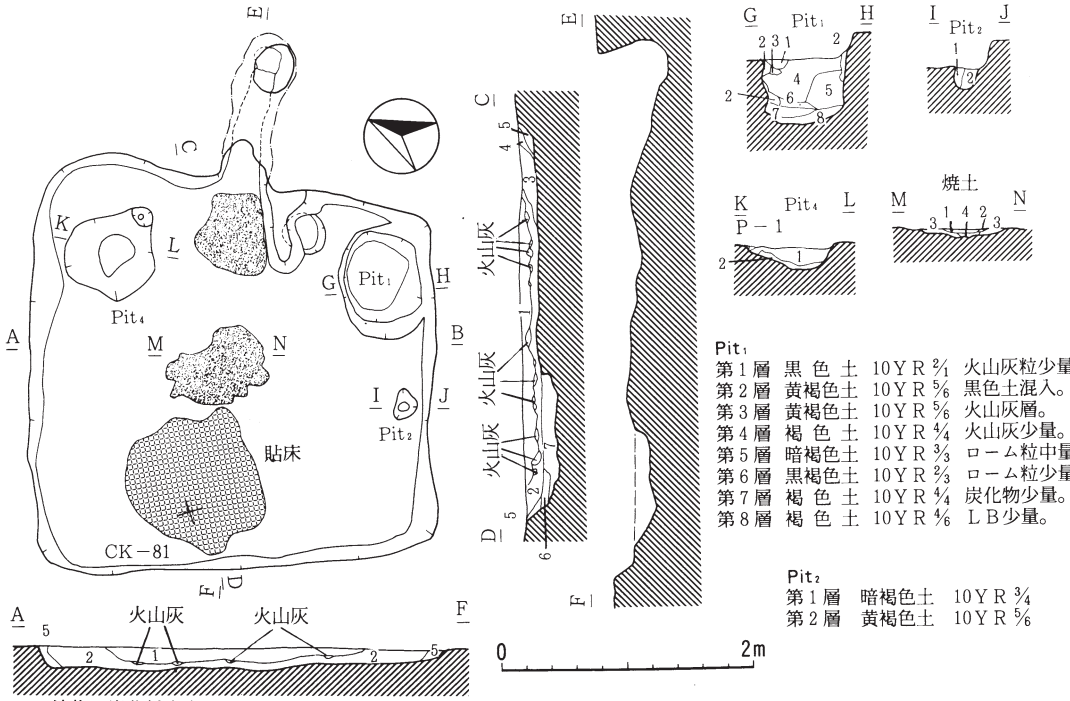
［カマド］　東壁ほぼ中央部に付設される。袖は残存状態が悪く、辛うじて向かって右側だけが確認できた。地山を掘り残した上に、土師器片を芯材として用いたと思われる。支脚は燃焼部中央部に直立し、下部は埋め込まれ固定された状態で出土した。また、天蓋に使用されたと思われる扁平なシルト質岩が、煙道入口部で出土した。煙道部は壁際で若干崩落が認められるが、第Ⅵ層を掘り抜いたトンネル式のものである。

［その他の施設］　住居跡床面中央部に、掘り込みは持たないが非常にしっかりとした火焼面を確認した。

［堆積土］　7層に分層される。第1層黒色土下部に白頭山火山灰部分的に認められた。第6層は貼床に相当するものでしまりはつよい。第7層は黒褐色と褐色ロームの混土で掘り方を埋めたもので、ややしまりにかける。

［出土遺物］　土師器の図示し得た個体は14個体である。カマド周辺及び付属施設と考えられるP_3から多数出土した。支脚はカマド炊口部からの出土である。

［時期］　自然堆積と思われる覆土中から白頭山火山灰が検出されており、白頭山火山灰降下



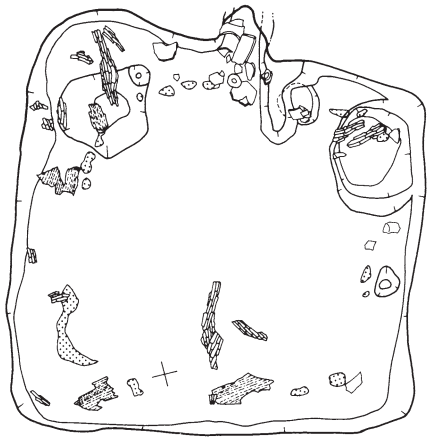
遺物・炭化材出土及び白頭山火山灰検出状況

Pit₁

第１層　黒 色 土　10ＹＲ 2/1　火山灰粒少量。
第２層　黄褐色土　10ＹＲ 5/6　黒色土混入。
第３層　黄褐色土　10ＹＲ 5/6　火山灰層。
第４層　褐 色 土　10ＹＲ 4/4　火山灰少量。
第５層　暗褐色土　10ＹＲ 3/3　ローム粒中量。
第６層　黒褐色土　10ＹＲ 2/3　ローム粒少量。
第７層　褐 色 土　10ＹＲ 4/4　炭化物少量。
第８層　褐 色 土　10ＹＲ 4/6　ＬＢ少量。

Pit₂

第１層　暗褐色土　10ＹＲ 3/4
第２層　黄褐色土　10ＹＲ 5/6



Pit₄

第１層　褐 色 土　10ＹＲ 4/4　焼土粒少量、5～10ミリ大の炭化物少量。
第２層　黄褐色土　10ＹＲ 5/8　黒色土少量。

焼土

第１層　赤褐色土　2.5ＹＲ 4/8　焼土層。
第２層　明赤褐色土　5ＹＲ 5/8　〃
第３層　赤褐色土　5ＹＲ 4/8　〃
第４層　暗赤褐色土　5ＹＲ 3/3　〃

第５号　住居跡土層注記

第１層　黒 色 土　10ＹＲ 1/1　炭化物微量、２ミリ大のローム粒微量。
第２層　黒褐色土　10ＹＲ 3/2　炭化物少量、ローム粒少量。
第３層　暗褐色土　10ＹＲ 3/3　２ミリ～３センチ大の焼土粒多量、炭化物微量。
第４層　黒褐色土　10ＹＲ 2/3　ローム粒多量。
第５層　暗褐色土　10ＹＲ 3/3　ローム粒多量。
第６層　黄褐色土　10ＹＲ 5/8　黒色土少量。（貼床）
第７層　黒褐色土　10ＹＲ 3/2　ローム粒中量。（貼床）

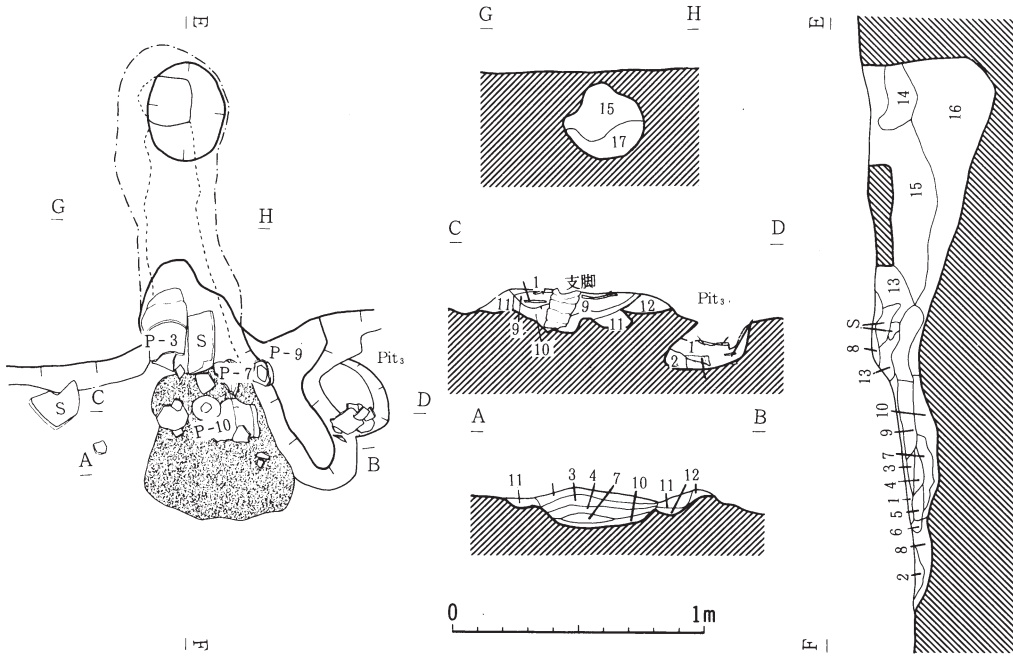
第５号　住居跡土師器観察表　（単位：cm）

番　号	出土層位	器種	部 位	口径	底径	器高	外　面	内　面	底　部	分類	備　考
第13図２	床面	坏	完形	13.2	6.0	6.2	ロクロ	ロクロ	回転糸きり	Ⅱ	
3	カマド	甕	口縁部	13.6			ロクロ・ヘラナデ	ヘラナデ		Ⅰa	
第14図４	床面	広口壺	口縁部	9.2			ヘラナデ	ヘラナデ			
5	Pit３	甕	口縁部	19.7			ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ			
6	床面	〃	底部		9.4		ヘラナデ	指ナデ	木葉痕		
7	カマド	〃	略完形	15.6			ロクロ・ヘラケズリ	ロクロ		Ⅱa	
8	床直	〃	底部		7.8		ヘラナデ	ヘラナデ	木葉痕		
9	床面	〃	完形	15.2	6.8	13.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切・ヘラナデ	Ⅲa	
10	Pit３	〃	口縁部				ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ			
11	Pit３	〃	口縁部				ロクロ・ヘラナデ	ヘラナデ			
12	カマド	〃	口縁部				ヨコナデ・ヘラナデ	ユビナデ・ヘラナデ			
13	床面	〃	口縁部				ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ			
14	覆土	〃	口縁部				ヨコナデ	ヨコナデ			
15	Pit３	〃	底部				ヘラナデ	ヘラナデ	木葉痕		

第５号　住居跡土製支脚観察表（cm）

第　図	出土層位	外面調整	内面調整	外　径	内　径	残存高
第13図１	カマド	指アツ		10.7	5.1	15.3

第12図　第５号住居跡（１）

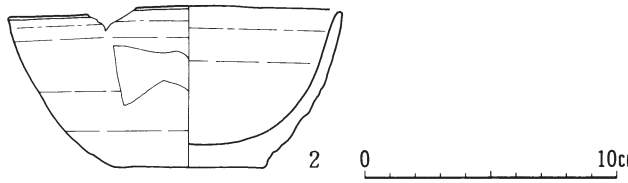


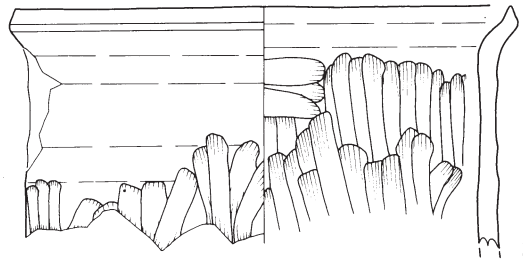
第５号　住居跡カマド土層注記

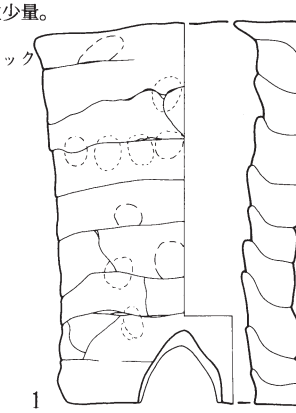
第１層　暗褐色土　10ＹＲ 3/3　１～３センチ大の焼土ブロック多量、炭化物少量。
第２層　暗褐色土　10ＹＲ 3/3　焼土粒子少量、炭化物多量。
第３層　褐 色 土　7.5ＹＲ 4/4　１～３センチ大の焼土ブロック多量。
第４層　明赤褐色焼土　5ＹＲ 5/8
第５層　赤褐色焼土　2.5ＹＲ 4/8
第６層　暗褐色焼土　7.5ＹＲ 3/4
第７層　明赤褐色焼土　2.5ＹＲ 5/8
第８層　褐 色 土　10ＹＲ 4/4　炭化物多量。
第９層　褐 色 土　7.5ＹＲ 4/4　３センチ大の焼土ブロック多量。
第10層　赤褐色土　5ＹＲ 4/8　焼土とロームの混土。
第11層　暗褐色土　10ＹＲ 3/4　焼土粒多量、２センチ大のローム粒多量。
第12層　黄褐色土　10ＹＲ 5/6　焼土粒少量、２ミリ大のローム粒少量。　} 袖崩落土
第13層　暗褐色土　10ＹＲ 3/4　煙道部天井に粘土を貼付。
第14層　明黄褐色土　10ＹＲ 6/6　スス状炭化物少量。
第15層　暗褐色土　10ＹＲ 3/3　ローム粒多量、焼土粒少量。
第16層　黒褐色土　10ＹＲ 2/3　スス状炭化物多量、５センチ大の焼土ブロック多量。

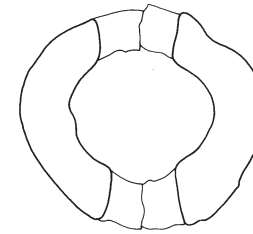
Pit₃

第１層　にぶい黄褐色土　10ＹＲ 4/3　ローム粒しみ状。
第２層　黄褐色土　10ＹＲ 5/8　黒褐色土少量。

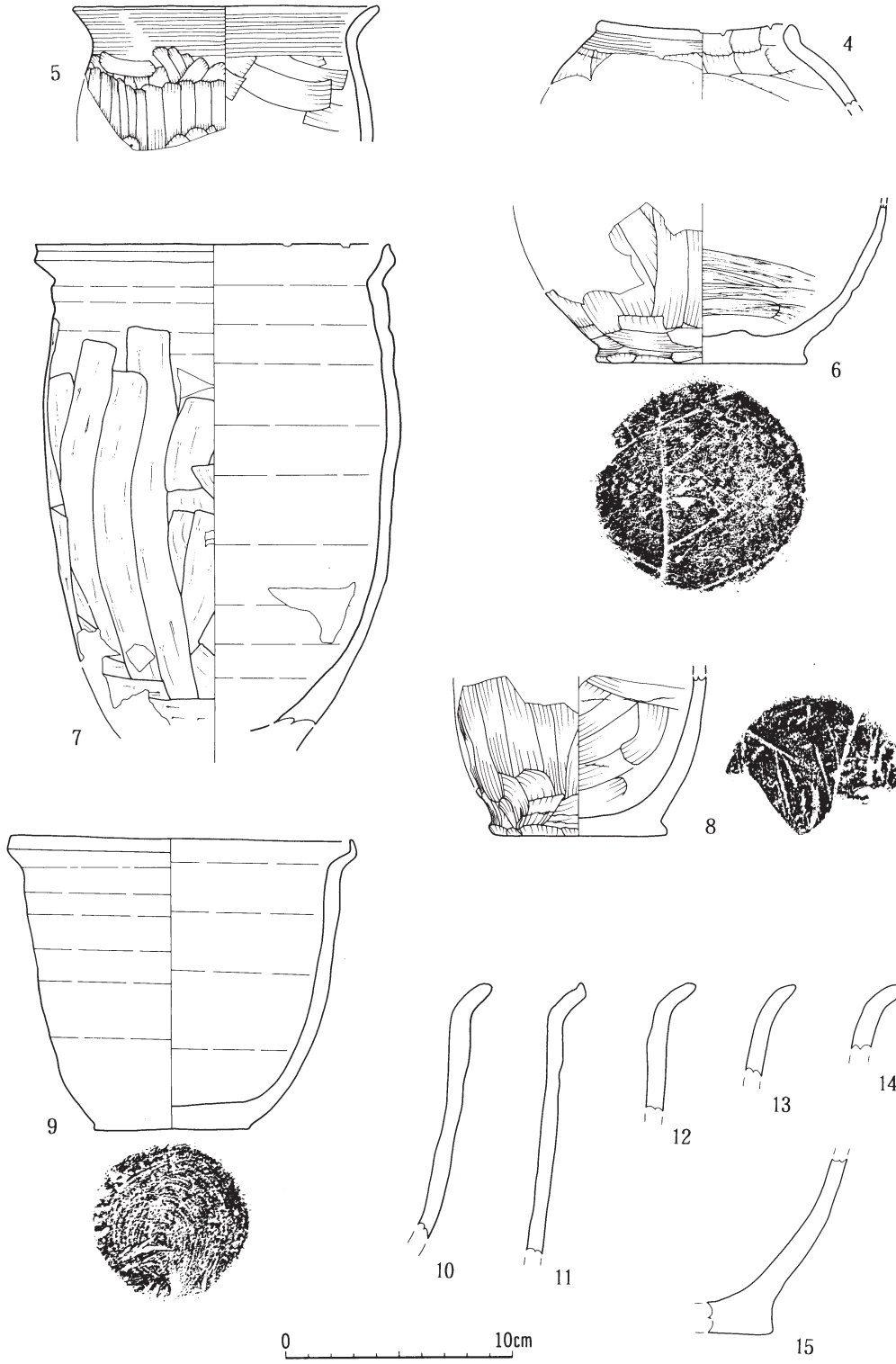








第13図　第５号住居跡（２）



第14図　第５号住居跡（３）

以前に構築・廃棄されたもので、出土遺物から推測すると9世紀中葉～9世紀後半にかけてのものと思われる。

第6号住居跡　＝平成4年度調査第3号住居跡

［位置と確認］　ＣＬ・Ｍ－77～79グリッドに位置し、平成4年度の調査において、第Ⅵ層精査中に黒色の落ち込みを確認し、第3号住居跡とした。

［改築］　カマドの改築が認められた。北側のカマドの煙道部を意図的に埋め、壁として使用し直している。

［平面形・規模］　平面形は隅がかなり丸みを帯びた隅丸方形である。したがった壁長ではなく軸長で計測を試みた。結果は東西軸4ｍ2㎝・南北軸4ｍ58㎝であった。床面積は16.12㎡で、主軸方位はＳ－88°－Ｅである。

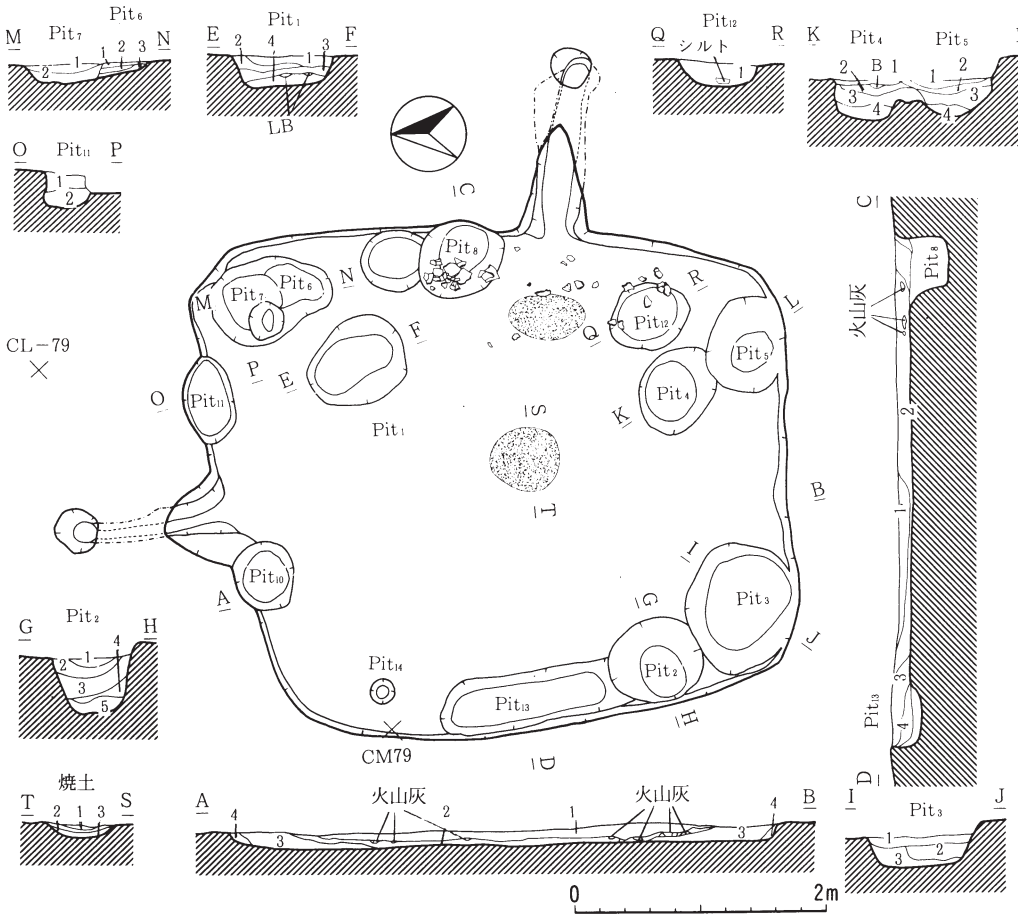
［壁・床面］　各壁の方向は、4方位と一致する。また、第Ⅵ層まで掘り込まれて作られているが、壁の上部は削平されている。壁高は、北から時計回りに11㎝・13㎝・11㎝・17㎝までは確認できた。壁は床面から60～70度前後で立ち上がる。床面は第Ⅵ層を僅かに掘り込んで構築しており、全体的には平坦な作りであるが、若干の凹凸を伴う。

［柱穴・ピット］　検出されたピットは14個である。いずれも柱痕は確認できなかった。ピット内堆積土には焼土ブロック・焼土粒・炭化物を含むものが半数近くある。各ピットの深さはP_1…23㎝、P_2…47㎝、P_3…23㎝、P_4…32㎝、P_5…29㎝、P_6…11㎝、P_7…16㎝、P_8…30㎝、P_9…21㎝、P_{10}…45㎝、P_{11}…10㎝、P_{12}…20㎝、P_{13}… 8㎝、P_{14}…16㎝である。

［カマド］　東壁のやや南寄りと北壁中央部に1基ずつの計2基を検出した。東壁で検出したものが新しく「カマドⅠ」、北壁で検出したものが古く「カマドⅡ」と呼称した。カマドⅠの袖はほとんど残存しなかった。しかし、カマド内、ピット8には袖の崩落土と思われる黄褐色の堆積がみられ、地山を掘り残して袖とした可能性が高い。煙道部は第Ⅴ・Ⅵ層を掘り込んで作ったトンネル式である。カマドⅡの主軸方向はＮ－10°－Ｗで、袖は残存しなかった。カマド2・3層は焼土面に盛土し、床面として使用し、カマド7・8・9・10層は煙道の崩落土に盛土をして壁としたものと考えられる。トンネル部分は残存するが、煙出しの開口部分にもロームとシルト岩で蓋をした痕跡が認められた。以上の点から、カマドⅡの方が古いものと考えられる。

［その他の施設］　床面中央部に、掘り込みを持たない焼土面が検出された。

［堆積土］　4層に分けられる。覆土第1層黒色土下部及び第2層中に白頭山火山灰がブロック状に認められた。



第6号　住居跡土層注記

第1層　10YR 2/1　黒色土　2～5ミリ位の焼土粒とローム粒微量。
第2層　10YR 3/3　暗褐色土　火山灰Bブロック、黒色土混入焼土粒子微量、炭化物微量。
第3層　10YR 3/4　暗褐色土　2～10ミリ位のローム粒焼土粒少量。
第4層　10YR 5/6　黄褐色土　3層の褐色土混入。

Pit1
第1層　10YR 4/4　褐色土　5ミリ大の焼土粒微量。
第2層　10YR 3/4　暗褐色土　5～20ミリ大の焼土粒混入。
第3層　10YR 3/3　暗褐色土　5～10ミリ大の焼土粒多量。
第4層　10YR 5/6　黄褐色土　10ミリ大の焼土粒少量。

Pit2
第1層　10YR 3/3　暗褐色土　火山灰（白頭山）微量。
第2層　10YR 3/3　暗褐色土　炭化物微量。
第3層　10YR 2/3　黒褐色土　火山灰（白頭山）微量。
第4層　10YR 4/4　褐色土　黒褐色土混入。
第5層　10YR 5/4　にぶい黄褐色土　ローム粒少量。

Pit3
第1層　10YR 3/3　暗褐色土　白頭山火山灰微量。
第2層　10YR 5/6　黄褐色土
第3層　10YR 5/8　黄褐色土

Pit4
第1層　黒褐色土　10YR 2/2　炭化物・ローム粒少量。
第2層　褐色土　10YR 4/4　炭化物・焼土ブロック少量。
第3層　褐色土　10YR 4/4　焼土ブロック少量。
第4層　暗褐色土　10YR 3/4　20～50ミリ大の焼土ブロック多量。

Pit5
第1層　黒褐色土　10YR 2/2　炭化物・ローム粒少量。
第2層　暗褐色土　10YR 3/4　10～20ミリ大焼土ブロック多量。
第3層　黒褐色土　10YR 3/2　炭化物・ローム粒子多量。
第4層　暗褐色土　10YR 3/3　炭化物少量。

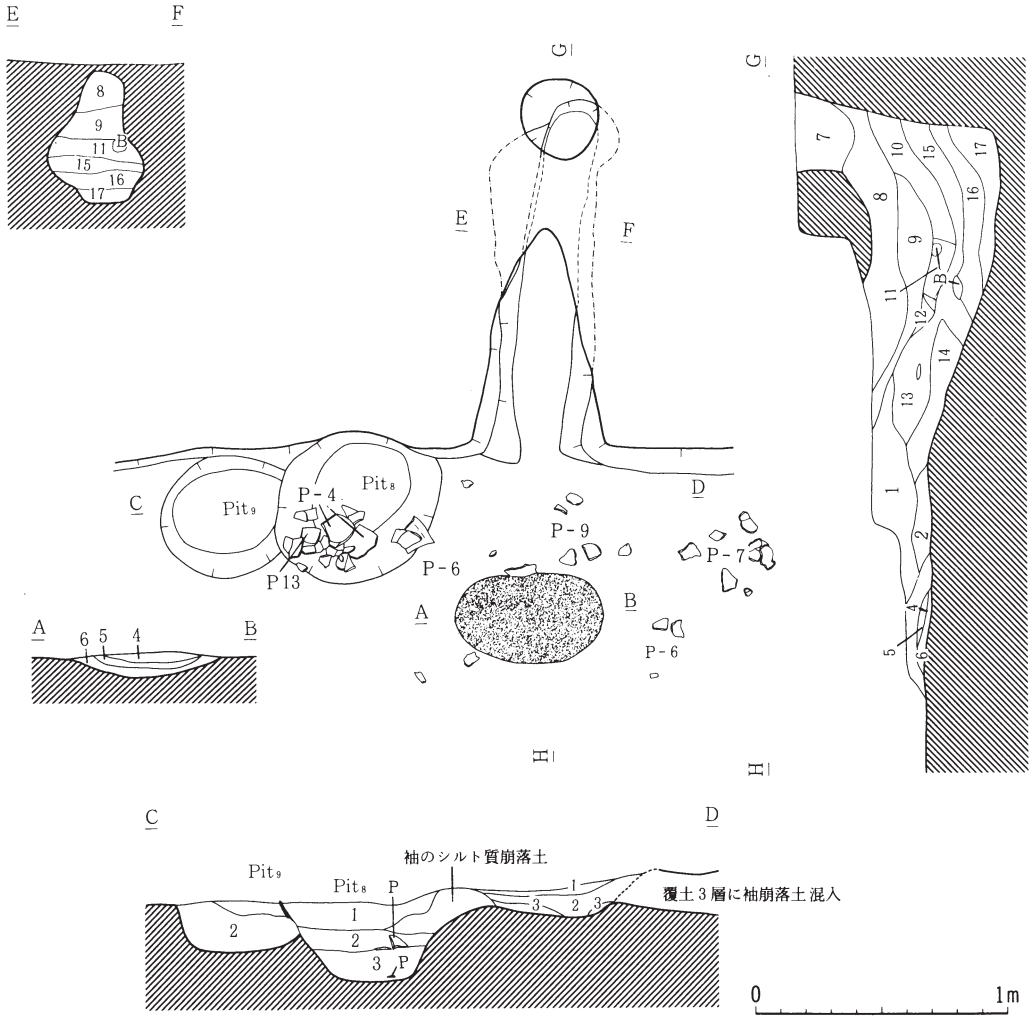
Pit6
第1層　10YR 3/4　暗褐色土
第2層　10YR 4/4　褐色土
第3層　10YR 4/6　褐色土

Pit7
第1層　10YR 2/3　黒褐色土
第2層　10YR 5/6　黄褐色土　白頭山火山灰微量。

Pit11
第1層　10YR 5/6　黄褐色土
第2層　10YR 3/3　暗褐色土

Pit12
第1層　10YR 4/4　褐色土　10ミリ大焼土粒多量、炭化物少量。

第15図　第6号住居跡（1）



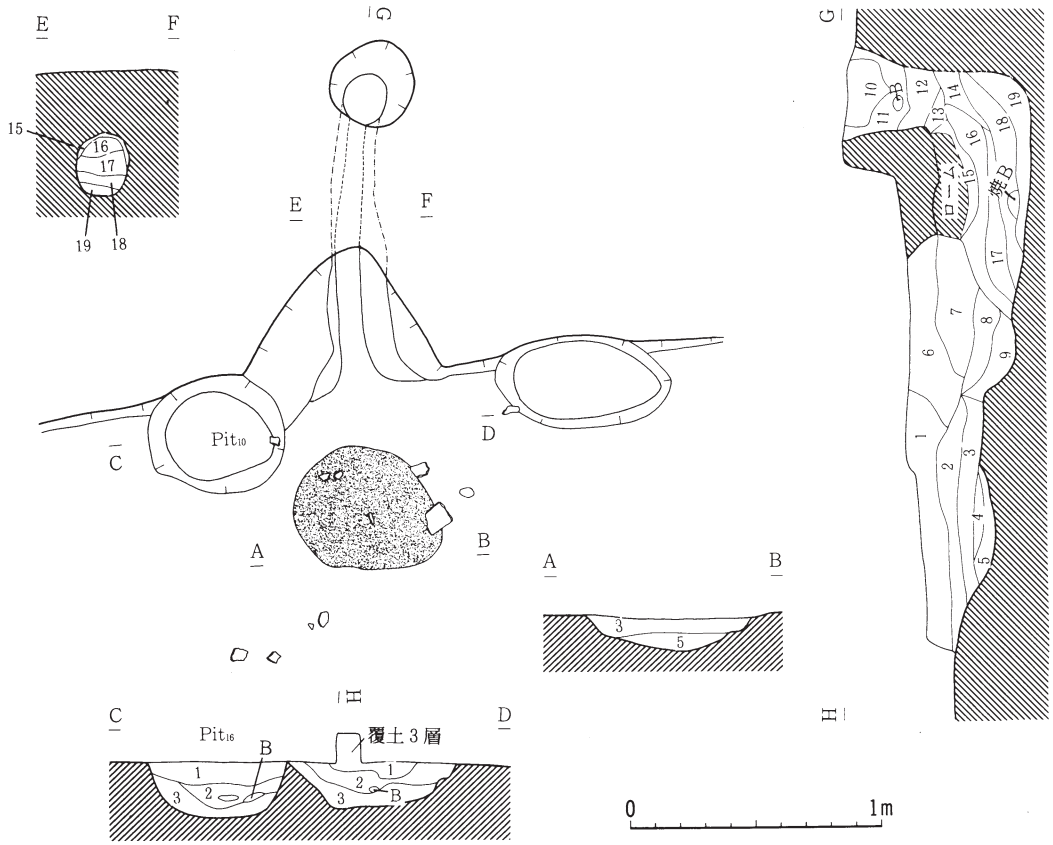
Pit₈
第1層　10YR 3/3　暗褐色土　炭化物微量。
第2層　10YR 4/4　褐色土　30ミリ大の焼土粒Bブロック炭化物少量。
第3層　10YR 4/6　褐色土　炭化物微量、焼土粒微量。

Pit₉
第1層　10YR 3/3　暗褐色土　焼土粒とローム粒少量。
第2層　10YR 5/6　黄褐色土　暗褐色土が全体に少量。

第6号　住居跡カマド(I)土層注記

第1層　暗褐色土　10YR 3/4　焼土粒子少量、炭化物微量。
第2層　褐色土　10YR 4/4　10～20ミリ大の焼土粒少量。
第3層　黄褐色土　10YR 5/6　褐色土少量。
第4層　褐色土　10YR 4/4　焼土粒少量。
第5層　明赤褐色焼土　10YR 5/8
第6層　明赤褐色焼土　5YR 5/8
第7層　暗褐色土　10YR 3/3　焼土粒少量。
第8層　黒褐色土　10YR 2/3　2～3ミリ大のローム粒少量。
第9層　褐色土　10YR 4/4　焼土粒少量、炭化物微量。
第10層　黒褐色土　10YR 2/3　焼土粒多量、炭化物少量。
第11層　褐色土　10YR 4/4　焼土ブロック少量。
第12層　褐色土　10YR 4/4　焼土ブロック多量（天井崩落土）
第13層　黒褐色土　10YR 2/3　10ミリ大の焼土粒少量。
第14層　暗褐色土　7.5YR 3/4　焼土粒多量、焼土ブロック少量。
第15層　褐色土　10YR 4/6　焼土ブロック少量。
第16層　暗褐色土　10YR 3/3　焼土ブロック多量。
第17層　黒褐色土　10YR 2/2　焼土ブロック・炭化物少量。

第16図　第6号住居跡(2)カマドI



第６号　住居跡カマドⅡ土層注記

第１層　暗褐色土　10ＹＲ ¾　（覆土第３層）
第２層　褐 色 土　10ＹＲ ⁴⁄₄　ローム粒・焼土粒少量。
（埋戻しての床面）
第３層　褐 色 土　10ＹＲ ⁴⁄₆　焼土粒多量。２層同様埋戻。
第４層　にぶい黄橙褐色土　10ＹＲ ⁶⁄₄　焼土ブロック少量、炭化物少量。
第５層　橙色焼土　５ＹＲ ⁶⁄₈
第６層　黒褐色土　10ＹＲ ²⁄₃　２～３ミリ大ローム粒少量。
第７層　黄褐色土　10ＹＲ ⁵⁄₆　黒褐色土混入。
第８層　黄褐色土　10ＹＲ ⁵⁄₆　３ミリ大の焼土粒少量。
第９層　黄褐色土　10ＹＲ ⁵⁄₆　10ミリ大の焼土粒少量。
第10層　黄褐色土　10ＹＲ ⁵⁄₆　焼土ブロック多量。
第11層　暗褐色土　10ＹＲ ³⁄₃　焼土ブロック多量。
第12層　暗褐色土　10ＹＲ ³⁄₄　焼土ブロック多量。
第13層　にぶい黄褐色土　10ＹＲ ⁴⁄₃　焼土ブロック少量。
第14層　暗褐色土　10ＹＲ ⁴⁄₃　焼土ブロック少量。
第15層　赤褐色焼土　５ＹＲ ⁵⁄₆　天井部の燃成を受けた焼土。
第16層　褐 色 土　10ＹＲ ⁴⁄₄　10ミリ大の焼土粒多量。
第17層　褐 色 土　10ＹＲ ⁴⁄₆　ローム粒子多量。
第18層　黒褐色土　7.5ＹＲ ²⁄₂　20～30ミリ大の焼土ブロック多量。
第19層　黒褐色土　10ＹＲ ²⁄₃　ローム粒子少量。

Pit10

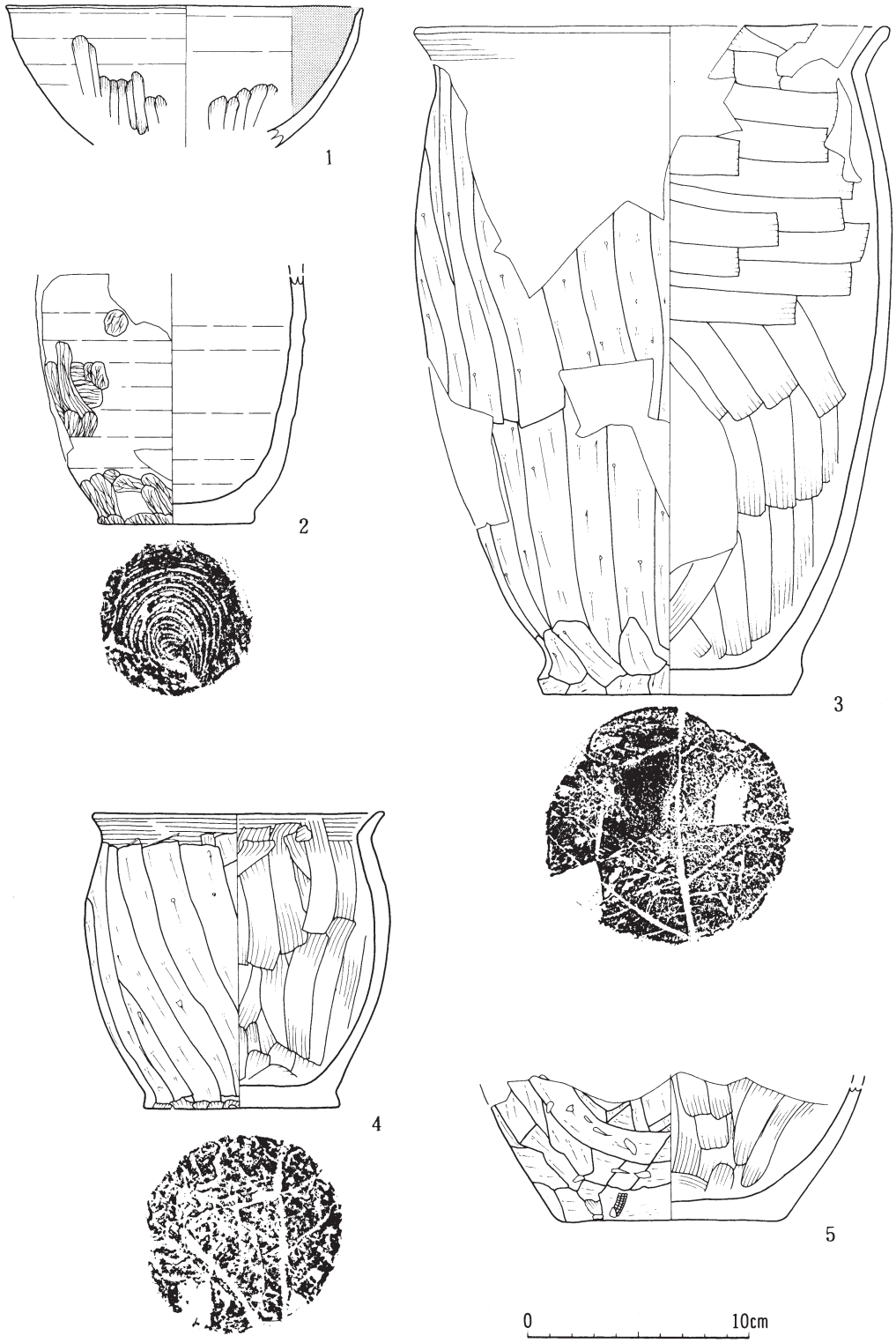
第１層　10ＹＲ ⁴⁄₆　褐 色 土　10ミリ大のローム粒少量。
第２層　10ＹＲ ⁴⁄₄　褐 色 土　10ミリ大の焼土粒少量、炭化物微量。
第３層　10ＹＲ ⁴⁄₄　褐 色 土　５ミリ大の焼土粒少量。

第６号住居跡　土師器観察表

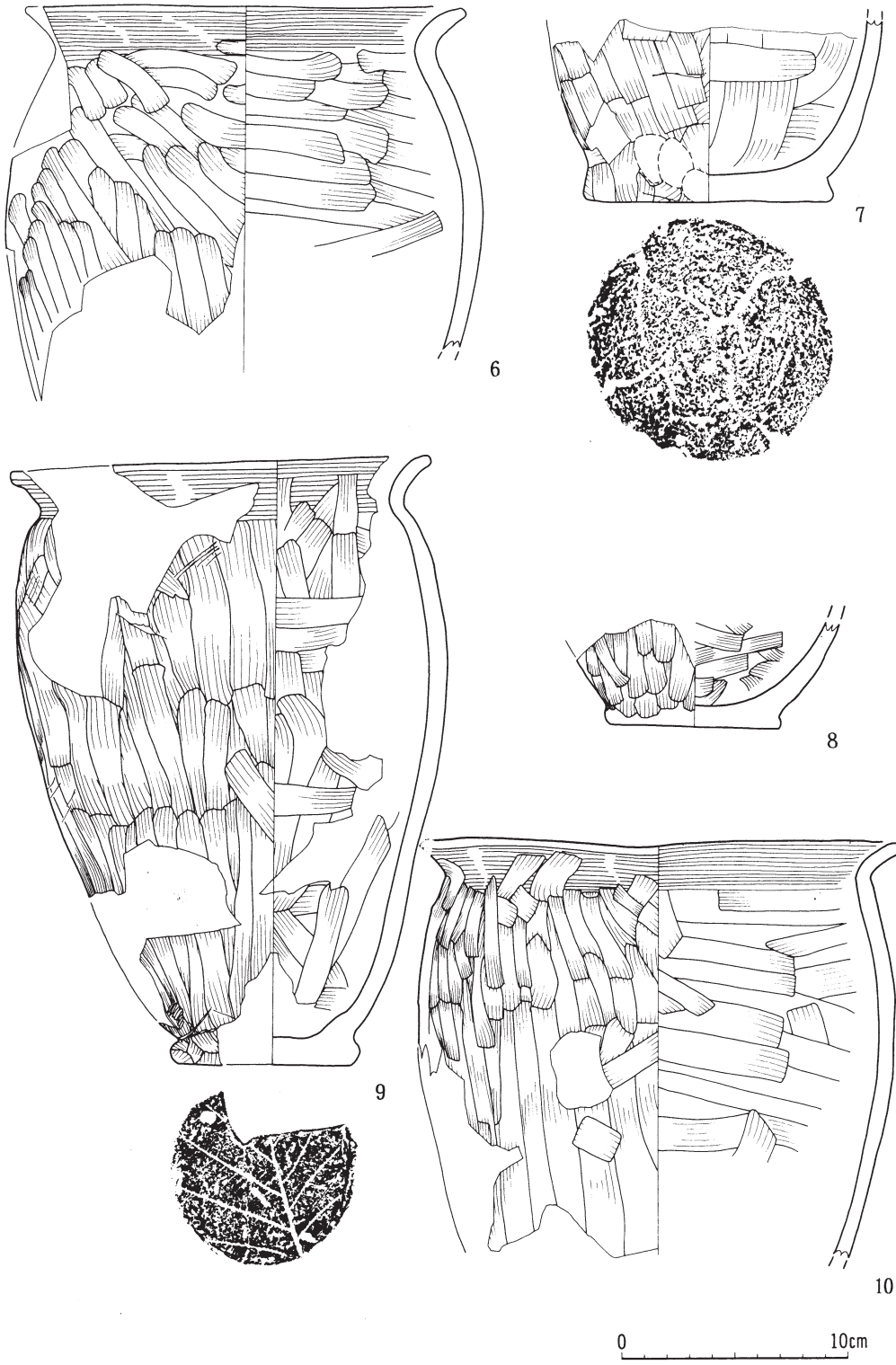
（単位：cm）

番　号	出土層位	器種	部 位	口径	底径	器高	外　　面	内　　面	底　部	分類	備　　考
第18図１	覆土	坏	口縁部	16.0			ロクロ・ヘラナデ	ヘラナデ・黒色処理		Ⅰ	
2	床面	甕	底部		7.0		ロクロ・指ナデ	ロクロ	回転糸切り		
3	カマドⅠ	〃	完形	21.4	11.2	30.1	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラナデ	木葉痕	Ⅰb₃	
4	Pit８	〃	完形	13.1	8.8	13.1	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	木葉痕	Ⅲb	
5	覆土４層	〃	底部		10.6		ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	ヘラナデ		
第19図６	Pit８	〃	口縁部	19.0			ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ		Ⅰb₃	
7	カマドⅠ	〃	底部		11.0		ヘラナデ・指アツ	ヘラナデ	砂		
8	Pit８	〃	底部		7.6		ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ		
9	カマドⅠ	〃	完形	18.5	8.4	26.7	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ	木葉痕	Ⅰb₂	
10	カマドⅡ	〃	口縁部	21.5			ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ		Ⅰb₃	
第20図11	カマドⅡ	〃	底部		9.0		ヘラナデ	ヘラナデ	木＋ヘラナデ		11Ｈカマドと接合
12	床面	〃	底部		8.0		ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ		
13	Pit８	〃	口縁部	14.8			ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ			
14	カマドⅠ	〃	口縁部				ヘラナデ	ヘラナデ			
15	床面	〃	〃				ヨコナデ・ヘラナデ	ヘラナデ			
16	カマドⅠ	〃	〃				ロクロ	ロクロ			
17	カマドⅡ	〃	口縁部				ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ			
18	覆土	〃	〃				ヨコナデ・ヘラナデ	ヘラナデ			

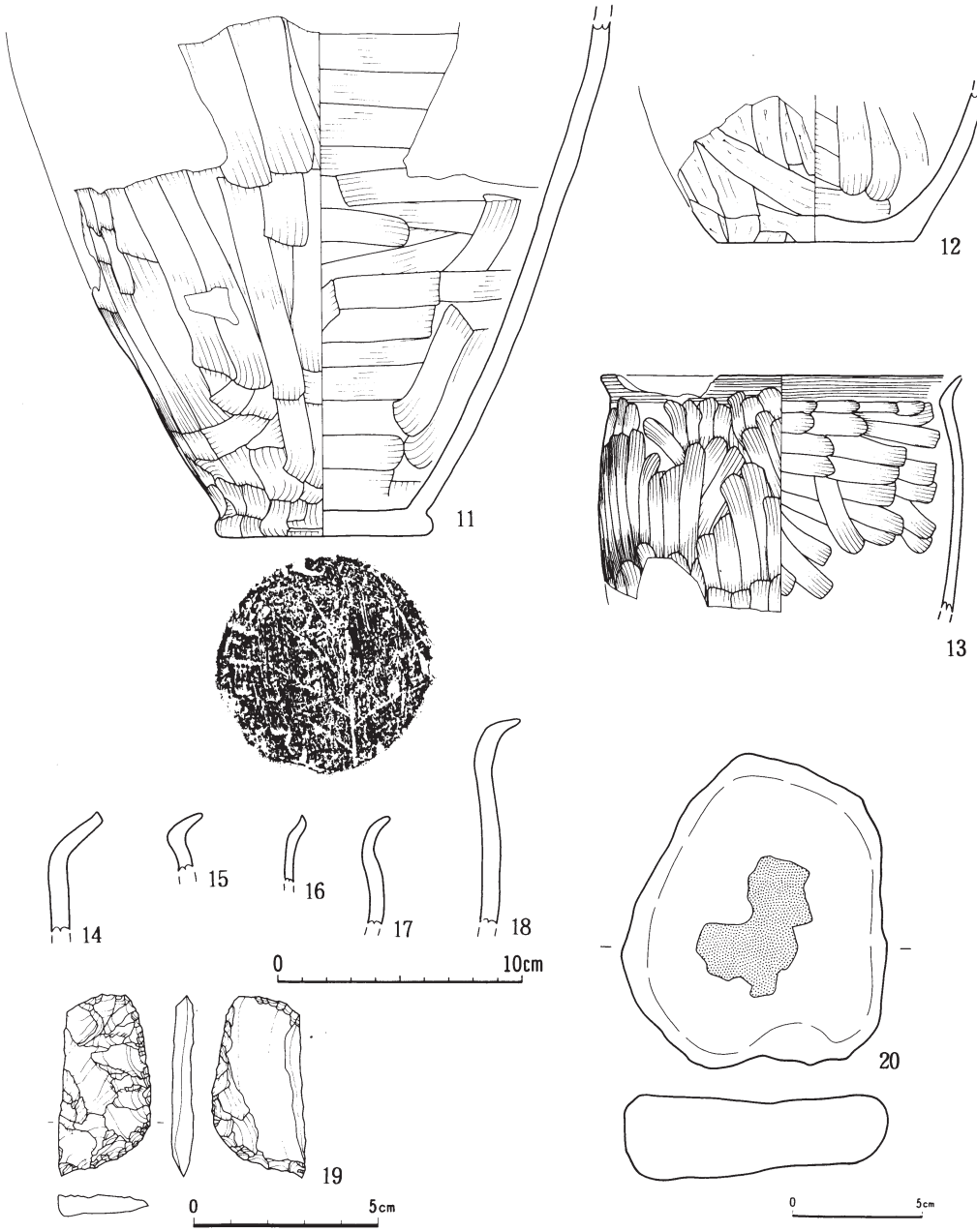
第17図　第６号住居跡（３）カマドⅡ



第18図　第６号住居跡（４）



第19図　第６号住居跡（５）



第６号住居跡　石器観察表　　(cm)

番　号	出土層位	長　さ	幅	厚　さ	重量(g)	石　質	備　考
第　図19	覆土	50	26	6	8.7	珪質頁	不定形
20	Pit 6	123	105	33	660	安山	台石

第20図　第６号住居跡（６）

［出土遺物］　土師器の図示し得た個体数は18個である。カマドⅠ及び付属施設と考えられるピット８から集中して出土した。第20図P11の底部は第11号住居跡カマド出土のものと接合した。

［時期］　自然堆積と思われる覆土中から白頭山火山灰が検出されているため、白頭山火山灰降下前に廃棄されたものと思われる。

第７号住居跡　＝平成４年度調査第４号住居跡

［位置と確認］　ＣＦ・Ｇ－77・78グリッドに位置する。本住居跡以下第13住居跡までは、従来から埋没し切れぬ竪穴状の凹地・住居跡（青森県埋蔵文化財調査報告書第24集1974・青森県埋蔵文化財調査報告書第48集1979・青森県埋蔵文化財調査報告書第148集1993）とされていたものである。平成４年度の調査において、肉眼で落ち込みを確認し第４号住居跡としたものである。

［改築］　認められなかった。

［平面形・規模］　壁長は、東壁２ｍ96cm・西壁２ｍ98cm・南壁３ｍ64cm・北壁３ｍ39cmを測り、平面形はやや東西に長い長方形を呈する。床面積は10.26㎡である。主軸方位はＮ－85°－Ｅである。

［壁・床面］　壁は、第Ⅲ層を掘り込んで、方位と同一方向に作出されている。壁高は、北から時計回りに33cm・34cm・59cm・46cmであるが、第Ⅲ層の広範囲での流れ込みも考えられ、壁はさらに高い可能性もある。立ち上がりは85～90度前後である。床面は第Ⅵ層を使用しており堅緻な作りであるが、起状が見られる。

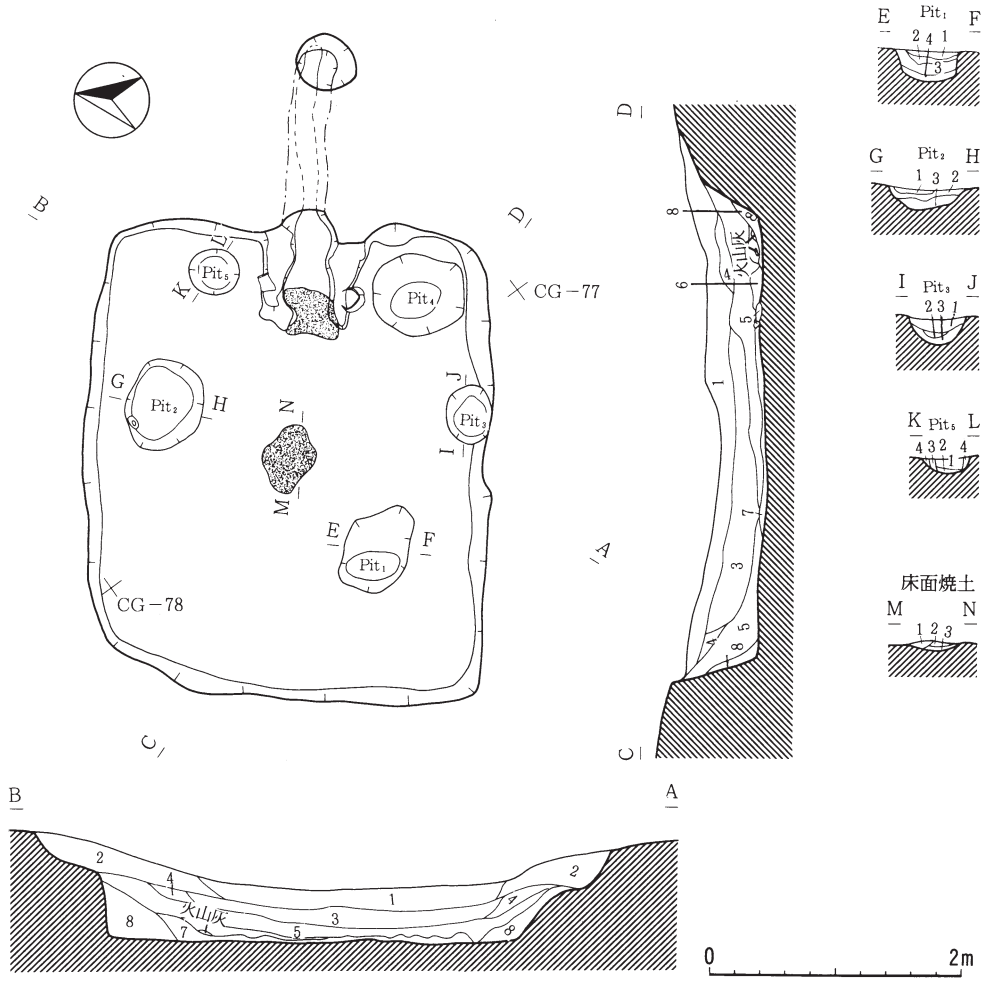
［柱穴・ピット］　検出されたピットは５個である。柱穴と断定できるものはなかった。P_4は、右袖に隣接し上面及び覆土中から土師器片が多数出土している。その他は比較的浅いもので用途は不明である。

P_1…23cm、P_2…21cm、P_3…21cm、P_4…40cm、P_5…12cmである。

［カマド］　東壁中央部に位置する。袖は両側ともシルト質泥岩を粘土で固定したものである。天蓋にも同様の石材を用いたと思われ、カマド中央部から直径20cm大のシルト質泥岩が出土している。煙道部はトンネル式で残存状態は良好である。煙出し付近からは白頭山火山灰が検出された。支脚はカマド右袖部分からの出土である。

［その他の施設］　住居跡床面中央部に、しっかりとした焼土面を確認したが、掘り込みは認められなかった。

［堆積土］　８層に分けられた。周堤を確認するために広範囲にセクションをとったが、周堤の検出はできなかった。第６層中及び上面で白頭山火山灰が、第７層では焼土粒が認められた。自然堆積と思われる。



第７号　住居跡土層注記

第１層　黒褐色土　10ＹＲ 2/2　１ミリ大の砂粒を多量。
第２層　黒褐色土　10ＹＲ 2/3　砂粒少量、毛根多量。
第３層　黒 色 土　10ＹＲ 2/1　砂粒少量、ローム粒子少量。
第４層　黒褐色土　10ＹＲ 2/2　ローム粒子微量。
第５層　黒褐色土　10ＹＲ 2/3　ローム粒子多量。
第６層　黒褐色土　10ＹＲ 2/2　混入物なし。
第７層　褐 色 土　10ＹＲ 4/4　焼土粒子少量。
第８層　暗褐色土　10ＹＲ 3/4　ローム粒子少量。

Pit₁

第１層　黒褐色土　10ＹＲ 2/2　白頭山火山灰多量。
第２層　褐 色 土　10ＹＲ 4/4　焼土Ｂ少量、炭化物少量。
第３層　黄褐色土　10ＹＲ 5/6　焼土Ｂ多量。
第４層　明黄褐色土　10ＹＲ 6/8

Pit₂

第１層　黒褐色土　10ＹＲ 2/2　炭化物多量。
第２層　褐 色 土　10ＹＲ 4/4　焼土Ｂ少量、炭化物少量。
第３層　黄褐色土　10ＹＲ 5/6　焼土Ｂ少量、焼土粒多量。

Pit₃

第１層　褐 色 土　10ＹＲ 4/4　２センチ大の焼土Ｂ多量、炭化物少量。
第２層　暗褐色土　10ＹＲ 3/3　２センチ大の焼土Ｂ多量、炭化物多量。
第３層　明黄褐色土　10ＹＲ 6/8

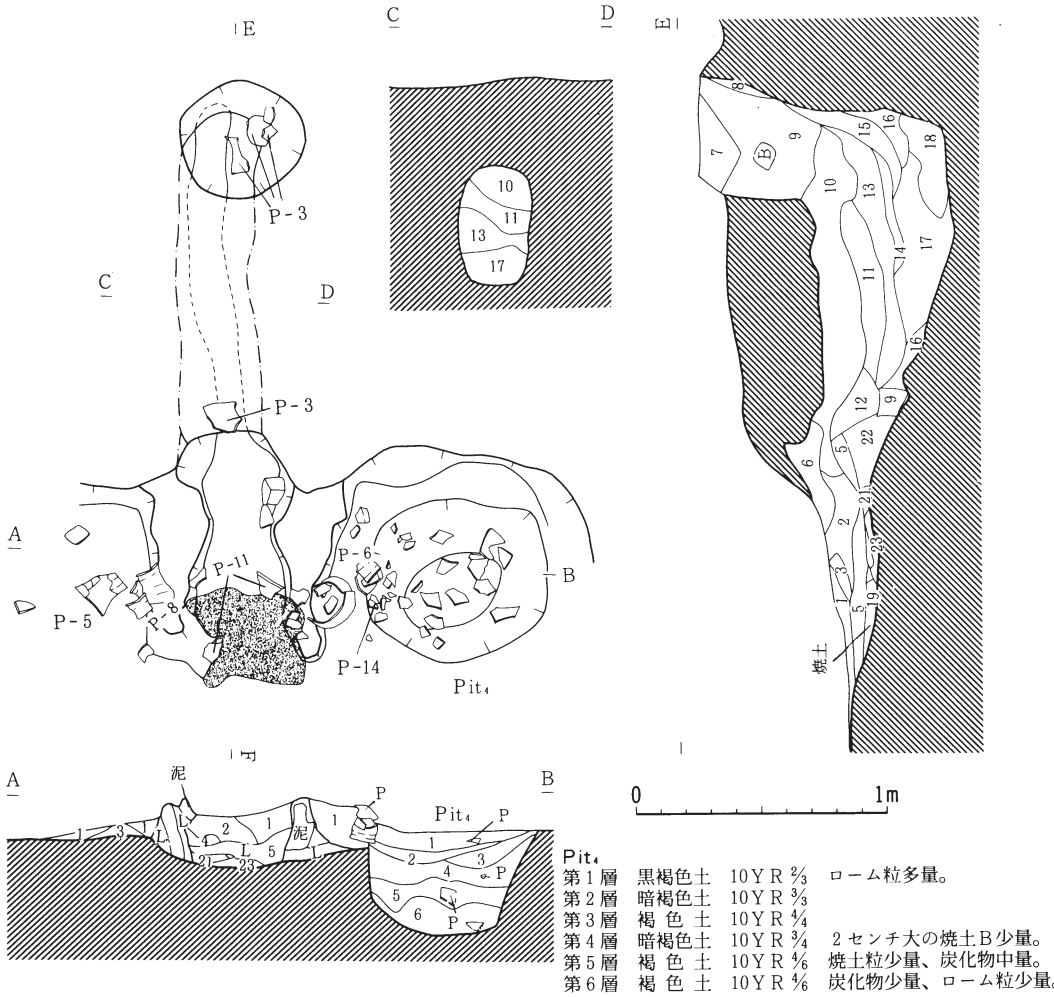
Pit₅

第１層　黒褐色土　10ＹＲ 2/3　焼土粒少量、炭化物少量。
第２層　黄褐色土　10ＹＲ 5/6　焼土粒多量。
第３層　黄褐色土　10ＹＲ 5/8　褐色土少量。
第４層　暗褐色土　10ＹＲ 3/4　ロームがやや多量。

焼土

第１層　黄褐色土　10ＹＲ 5/6　焼土Ｂ少量、ＬＢ少量。
第２層　赤褐色焼土　5ＹＲ 4/8　焼土層に褐色土少量。
第３層　褐 色 土　10ＹＲ 4/6　焼土粒少量。

第21図　第７号住居跡（１）

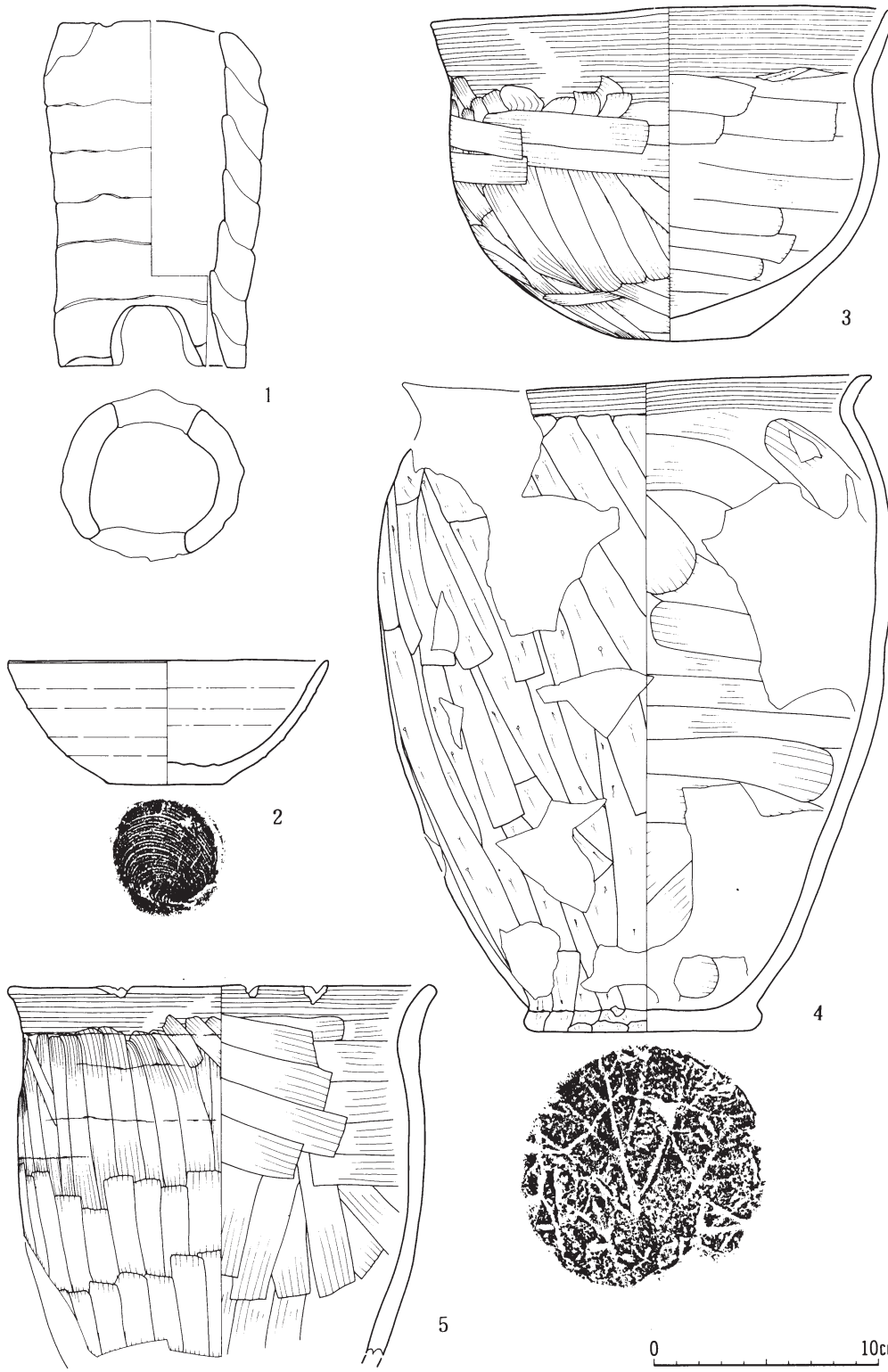


Pit4
第1層　黒褐色土　10YR 2/3　ローム粒多量。
第2層　暗褐色土　10YR 3/3
第3層　褐 色 土　10YR 4/4
第4層　暗褐色土　10YR 3/4　2センチ大の焼土B少量。
第5層　褐 色 土　10YR 4/6　焼土粒少量、炭化物中量。
第6層　褐 色 土　10YR 4/6　炭化物少量、ローム粒少量。

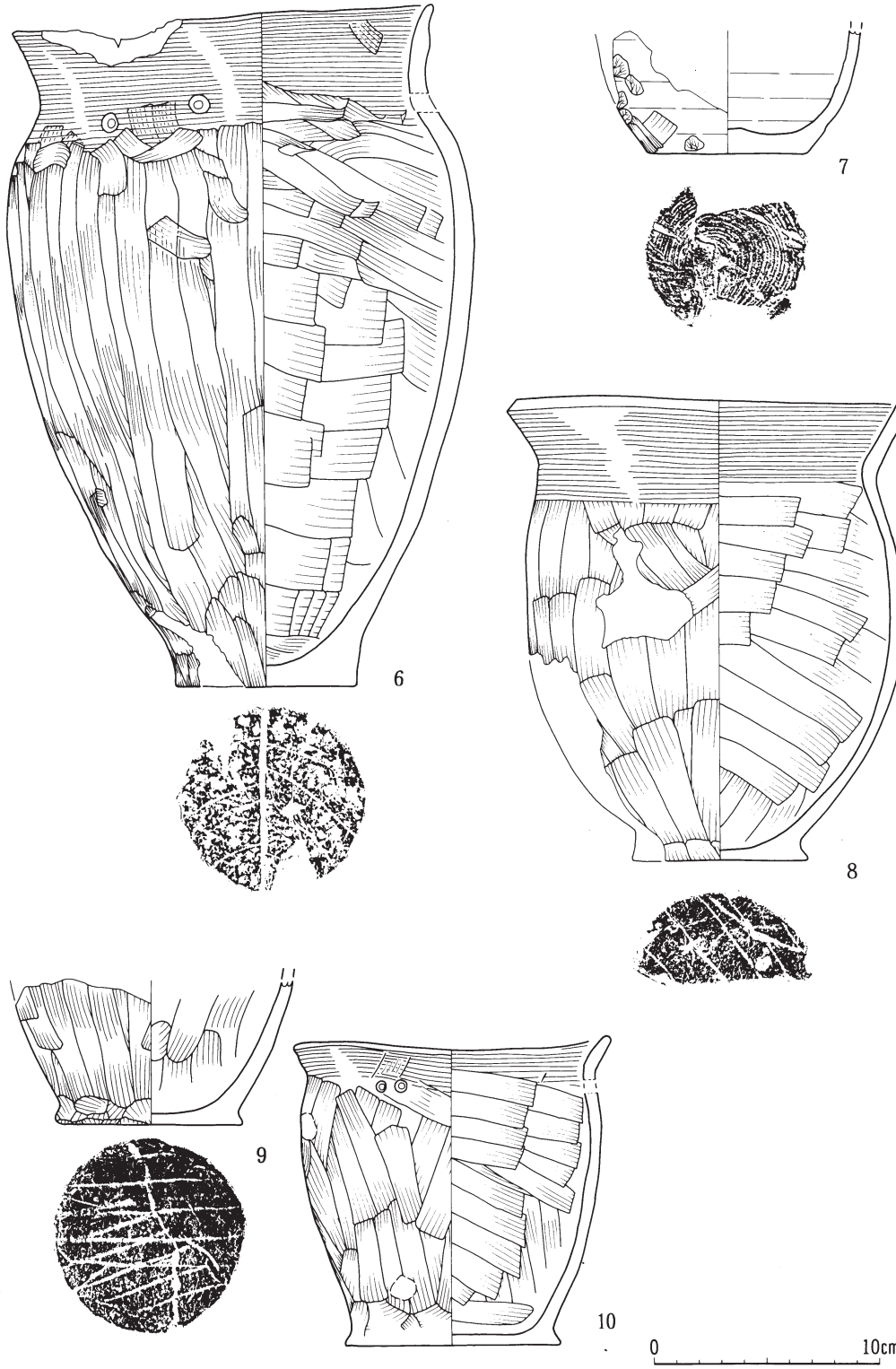
第7号　住居跡カマド土層注記

第1層　黒褐色土　10YR 2/3　2センチ大の焼土ブロック多量、ローム粒多量。
第2層　暗褐色土　7.5YR 3/4　炭化物少量、5ミリ大のローム粒多量。
第3層　褐 色 土　10YR 4/4　2センチ大の焼土ブロック多量、ローム粒子多量。
第4層　暗赤褐色土　5YR 3/4　焼土ブロック多量。
第5層　褐 色 土　10YR 4/6　焼土ブロック多量。
第6層　暗褐色土　10YR 3/3　ローム粒少量。
第7層　褐 色 土　10YR 4/4　5ミリ大のローム粒少量、火山灰（白色）少量。
第8層　暗褐色土　10YR 3/3　ローム粒少量。
第9層　褐 色 土　10YR 4/4　焼土粒少量、1センチ大のローム粒多量、火山灰（白色）少量。
第10層　明黄褐色土　10YR 6/8　褐色土とロームの混土層。
第11層　黄褐色土　10YR 5/8　褐色土少量。
第12層　にぶい黄褐色土　10YR 5/4　5～6センチ大のLB混入。
第13層　暗褐色土　10YR 3/4　焼土ブロック少量、1～2センチ大のLB少量。
第14層　黒褐色土　10YR 3/2　ローム粒少量。
第15層　灰黄褐色土　10YR 4/2　焼土ブロック少量、火山灰（白色）多量。
第16層　暗褐色土　10YR 3/3　焼土粒少量、ローム粒少量。
第17層　暗褐色土　10YR 3/4　ローム粒多量。
第18層　黒褐色土　10YR 2/3　2～3センチ大のLB少量。
第19層　赤褐色土　5YR 5/8　燃焼部。
第20層　褐 色 土　7.5YR 4/6　やや燃焼を受けている。
第21層　褐 色 土　10YR 4/4　3～5ミリ大のローム粒少量。
第22層　暗褐色土　10YR 3/4　5～15ミリ大の焼土粒多量。5ミリ大のローム粒少量。
第23層　褐 色 土　10YR 4/6　褐色土混入。

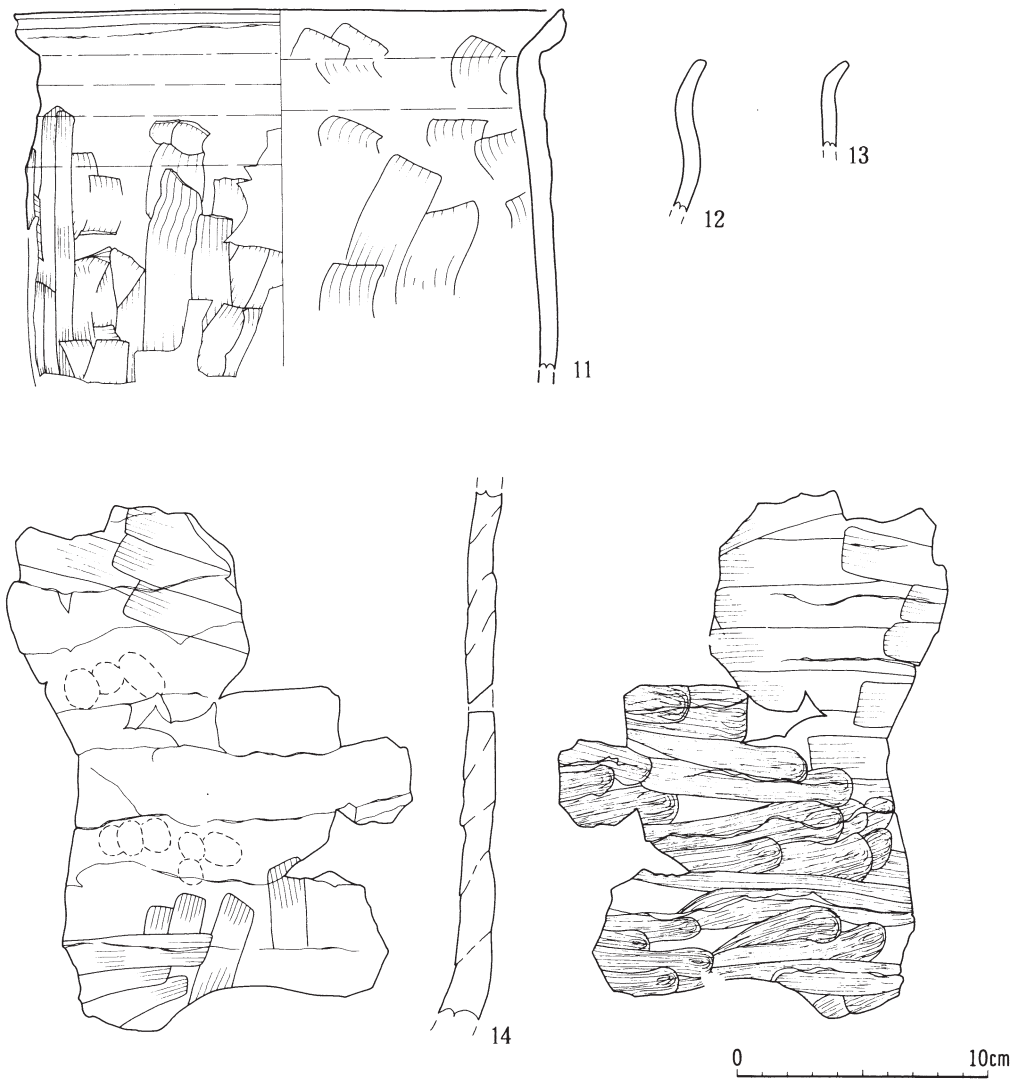
第22図　第7号住居跡（2）



第23図　第７号住居跡（３）



第24図　第７号住居跡（４）



第７号住居跡　土師器観察表　（単位：cm）

番　号	出土層位	器種	部 位	口径	底径	器高	外　面	内　面	底　部	分類	備　考
第23図 2	Pit 4	坏	完形	7.2	5.2	5.5	ロクロ		回転糸切り	Ⅱ	
3	煙道部	鉢	完形	20.6	7.2	14.8	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ	ヘラナデ		
4	Pit	甕	完形	21.0	10.8	29.2	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	木葉痕	Ⅰb$_3$	
5	カマド	〃	口縁部	9.5			ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ			
第24図 6	カマド	〃	完形	18.5	8.0	30.2	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ	木葉痕	Ⅰb$_1$	
7	Pit 4	〃	底部		7.0		ロクロ・ヘラナデ	ロクロ	回転糸切り		
8	カマド	甕	完形	17.6	8.0	20.6	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ	木葉痕	Ⅱb	
9	Pit 4	甕	底部		8.2		ヘラナデ	ヘラナデ	?		
10	カマド	〃	完形	14.1	9.6	13.8	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ	砂	Ⅲb	補修孔
第25図11	カマド	〃	口縁部	21.8			ロクロ・ヘラナデ	ヘラナデ		Ⅰa	
12	カマド	〃	口縁部				ヨコナデ・ヘラナデ	ヘラナデ			
13	床面	〃	〃				ヘラナデ	ヘラナデ			
14	カマド	製塩	胴部				ヘラナデ・指アツ	ヘラナデ・指ナデ			

第７号住居跡　土製支脚観察表　（cm）

番　号	出土層位	外面調整	内面調整	外　径	内　径	残存高
第23図 1	カマド			9.8	6.7	15.3

第25図　第７号住居跡（５）

［出土遺物］　遺物はカマド及び付属施設と思われるピット$_4$から集中して出土した。土師器の図示し得た個体数は12個である。また、製塩土器はカマド及びピット$_{2・4}$から出土のものが接合した。

［時期］　自然堆積と思われる覆土中から白頭山火山灰が検出されており、白頭山火山灰降下以前に構築・廃棄されたものと思われる。出土遺物からみると口縁部が長く外反するものが出土していることから9世紀中葉～9世紀後半にかけてのものと思われる。

第8号住居跡　＝平成4年度調査第5号住居跡

［位置と確認］　ＢＺ・ＣＡ－75・76グリッドに位置する。平成4年度の調査において、埋まり切らないままの落ち込みを表土面で確認し第5号住居跡とした。

［改築］　認められなかった。

［平面形・規模］　平面形は方形で、壁長は、東壁2ｍ88cm・西壁3ｍ4cm・南壁2ｍ95cm・北壁3ｍ7cmを測る。床面積は7.85㎡の規模で、主軸方位はＮ－76°－Ｅである。

［壁・床面］　壁は、各方位と一致する。壁は、第Ⅲ層から掘り込まれ、第Ⅵ層までを使用している。壁高は、北から時計回りに49cm・43cm・47cm・48cmである。なお床面からの立ち上がりは70～80度である。壁の上部にやや外反が目立つが、第Ⅲ層からの掘り込みなので崩落した可能性が強い。床面は第Ⅵ層を使用しており比較的平坦で堅くしまりがある。

［柱穴・ピット］　検出されたピットは11個である。Ｐ$_{1・2・3}$とＰ$_{9・7・5}$はほぼ対称形をなすが、いずれも柱痕は認められなかった。

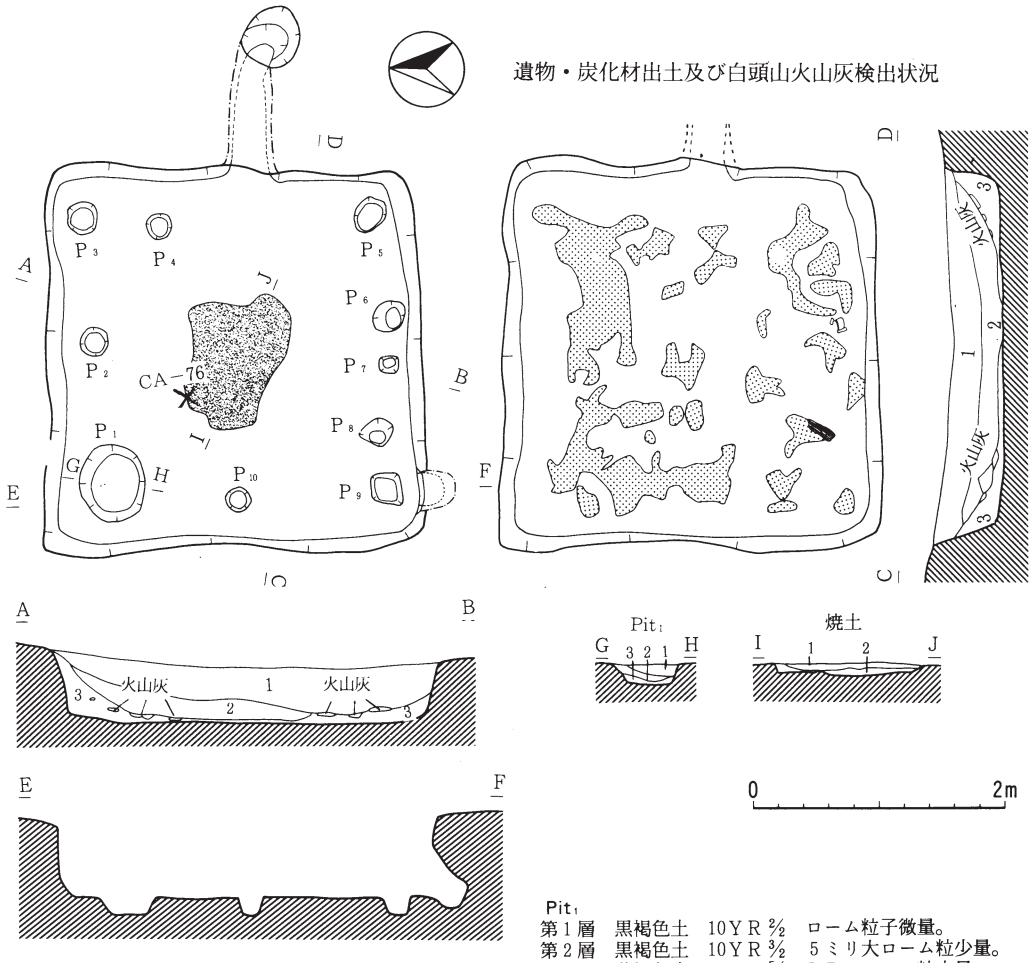
Ｐ$_1$…15cm、Ｐ$_2$…23cm、Ｐ$_3$…10cm、Ｐ$_4$…9cm、Ｐ$_5$…13cm、Ｐ$_6$…11cm、Ｐ$_7$…21cm、Ｐ$_8$…18cm、Ｐ$_9$…15cm、Ｐ$_{10}$…14cm、Ｐ$_{11}$…14cmである。

［カマド］　東壁中央部から、やや南側に構築されている。袖は全く残存しないが、芯材として使用されたと思われる甕形土師器の胴部と小礫が確認できた。また、支脚として使用されたと思われる立方体型の角礫（第28図－７）が、炊口中央に据えられている。煙道部はトンネル式であり、その製作過程を伺い知ることができる。本住居跡のカマドは、煙道部の先端が右方向にカーブし、煙出し開口部も他のものより大きめである。このことから、両側から掘り込んだ際に真っ直ぐつながらず、煙出し部分を大きく広げ、煙道部を急角度で右に曲げたものと考えられる。

［その他の施設］　南壁の西隅に横穴が検出された。第Ⅵ層を掘り込んだものでしっかりとした作りで、貯蔵穴と思われる。

［堆積土］　3層に分層された。第2層黒色土の下部に白頭山火山灰を多量に検出した。自然堆積と思われる。

［出土遺物］　土師器の図示し得た個体数は5個体であり、いずれもカマド及び床面からの出土である。カマド出土のすり石は支脚替わりとして用いられていたと思われる。



第8号　住居跡

第1層　黒褐色土　10YR 2/2　毛根多量。
第2層　黒 色 土　10YR 1/1
第3層　暗褐色土　10YR 3/3　ローム粒微量、火山灰微量。
B　白頭山火山灰ブロック。

Pit1

第1層　黒褐色土　10YR 2/2　ローム粒子微量。
第2層　黒褐色土　10YR 3/2　5ミリ大ローム粒少量。
第3層　黄褐色土　10YR 5/6　LB・ローム粒少量。

焼土

第1層　明褐色焼土　7.5YR 5/8
第2層　黄橙色焼土　7.5YR 7/8　10YR 3/3暗褐色土少量。

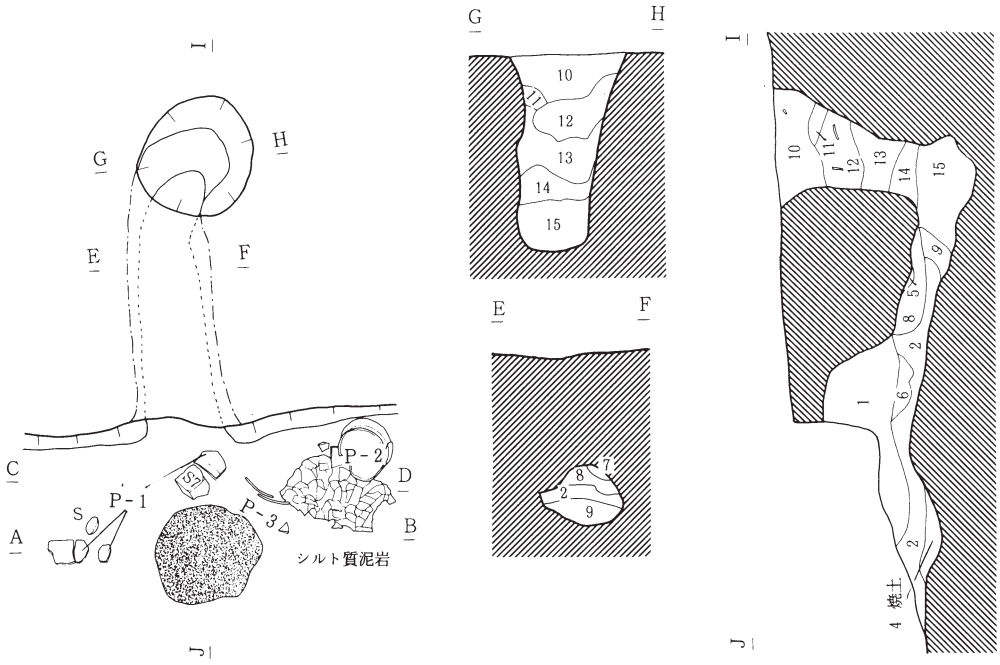
第8号住居跡　土師器観察表　（単位：cm）

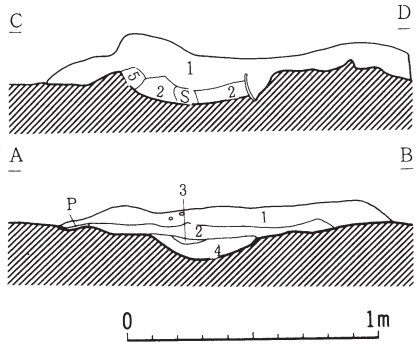
番　号	出土層位	器種	部 位	口径	底径	器高	外　　面	内　　面	底部	分類	備　考
第27図1	カマド	甕	口縁部	23.4			ヘラナデ・指アツ	ヨコナデ・ヘラナデ		Ib3	
第28図2	カマド	〃	完形	21.0	8.6	35.0	ヘラナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	木葉痕	Ib1	
3	カマド	〃	口縁部	17.0			指ナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ			
4	床面	〃	底部				ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ		
5	床面	〃	底部				ヘラナデ	不明	ヘラナデ		

第8号住居跡　石器観察表　（mm）

第　図	出土層位	長　さ	幅	厚　さ	重量(g)	石　質	備　考
第28図6	覆土	35	27	10	9.6	珪質頁	不定形
7	カマド	143	113	96	2205	安山岩	すり石（支脚）

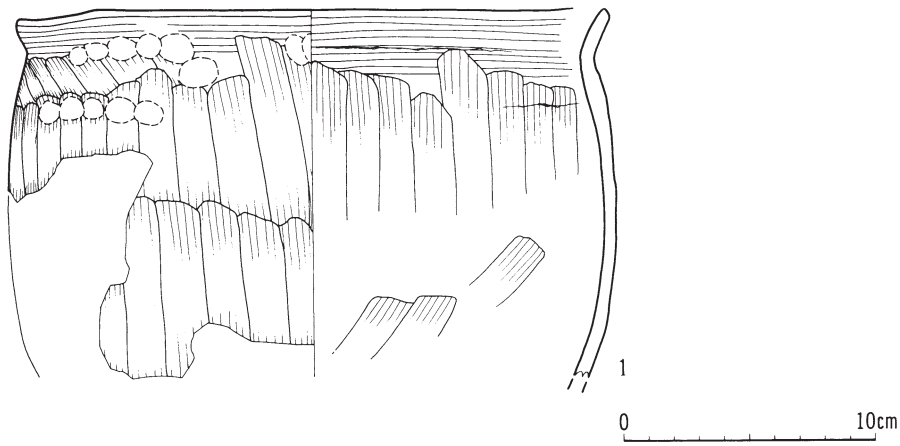
第26図　第8号住居跡（1）



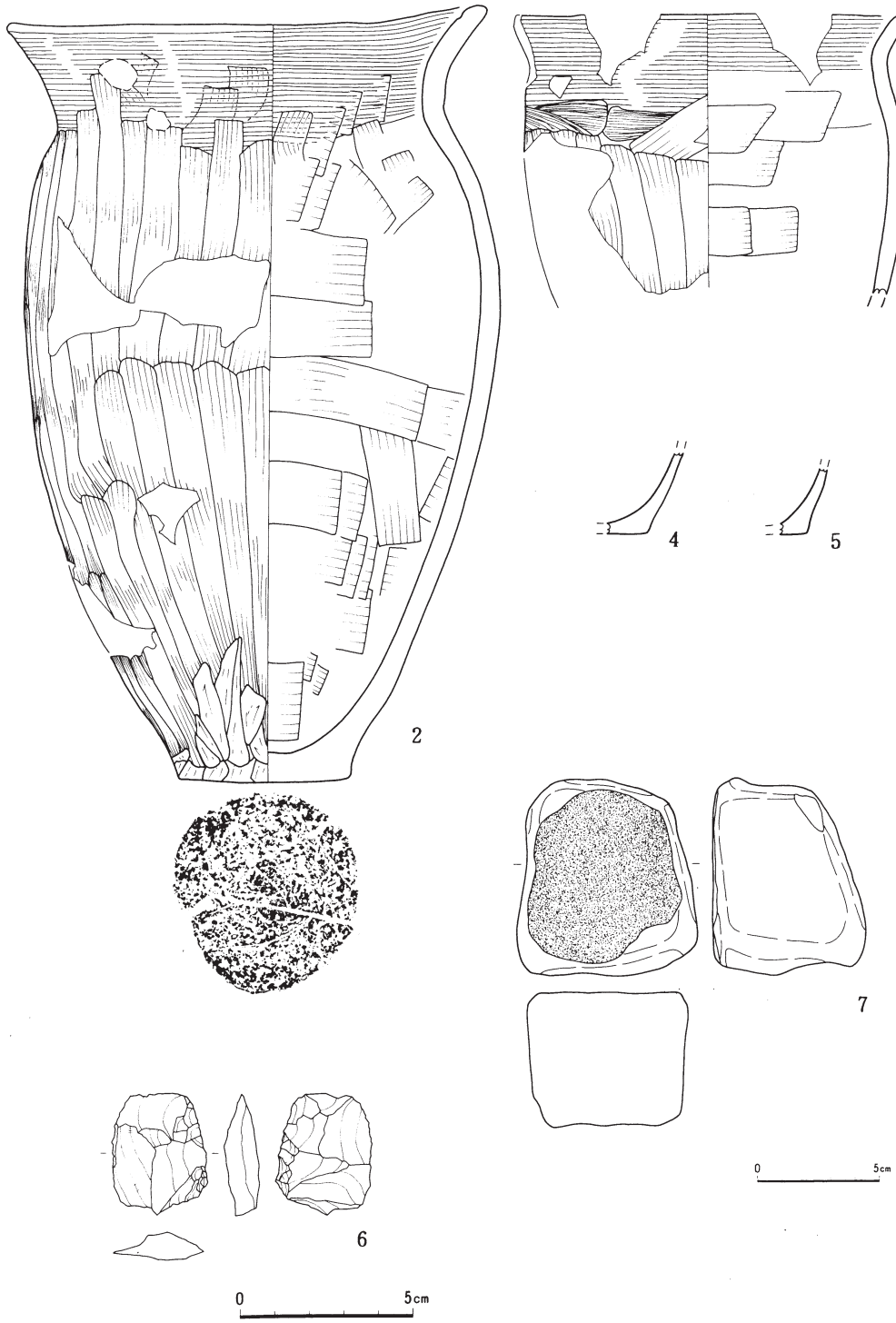


第８号　カマド土層注記

第１層	暗褐色土	10ＹＲ 3/3	白頭山火山灰少量、焼土粒少量。
第２層	褐 色 土	10ＹＲ 4/4	焼土粒中量。
第３層	明褐色焼土	7.5ＹＲ 5/8	
第４層	明赤褐色焼土	5 ＹＲ 5/8	
第５層	明褐色土	7.5ＹＲ 6/8	若干焼成を受けている。
第６層	赤褐色土	5 ＹＲ 4/8	焼土多量。
第７層	暗赤褐色焼土	5 ＹＲ 3/6	天井部の熱による変成焼土。
第８層	黒褐色土	10ＹＲ 2/3	焼土粒少量。
第９層	褐 色 土	10ＹＲ 4/6	焼土粒・ローム粒微量。
第10層	暗褐色土	10ＹＲ 3/4	５～10ミリ大の焼土粒。炭化物多量。
第11層	赤褐色焼土	5 ＹＲ 4/6	焼土ブロック。
第12層	黄褐色土	10ＹＲ 5/6	５ミリ大の焼土粒。炭化物中量。
第13層	褐 色 土	10ＹＲ 4/6	ローム粒微量。
第14層	暗褐色土	10ＹＲ 3/3	ローム粒微量。
第15層	黒褐色土	10ＹＲ 2/3	ローム粒微量。



第27図　第８号住居跡（２）



第28図　第８号住居跡（３）

［時期］　自然堆積と思われる覆土中から白頭山火山灰が検出されており、白頭山火山灰降下以前に構築・廃棄されたもので、口縁部が長く外反する甕が袖の芯材として用いられていることから９世紀中葉～９世紀後半にかけてのものと思われる。

第９号住居跡　＝平成４年度調査第６号住居跡

［位置と確認］　ＣＧ・Ｈ－74グリッドに位置する。平成４年度の調査において、第７・８号住居跡同様埋没し切れぬ落ち込みを表土面で確認し、第６号住居跡として精査した。

［改築］　認められなかった。

［平面形・規模］　平面形は方形で、東壁２ｍ80㎝・西壁２ｍ79㎝・南壁２ｍ72㎝・北壁２ｍ65㎝を測る。床面積は7.24ｍ^{2}である。主軸方位はＳ－２°－Ｗである。

［壁・床面］　各壁の向きは、４方位を向いている。壁高は、北から時計回りに63㎝・38㎝・61㎝・36㎝で、第Ⅲ層から掘り込んで作っている。東壁は木の根で若干壊されているが、その他は残存状態は良好である。床面から立ち上がりは80度以上の急な角度である。床面は第Ⅵ層を使用しており、きれいに整形され平坦である。

［柱穴・ピット］　検出されたピットは５個である。Ｐ$_{2}$～$_{4}$は西壁際に一直線状に並ぶが、対称的な配置がみられず、ピット内堆積土から考えても柱穴の可能性は低い。

Ｐ$_{1}$…32㎝、Ｐ$_{2}$…30㎝、Ｐ$_{3}$…33㎝、Ｐ$_{4}$…22㎝、Ｐ$_{5}$…20㎝である。

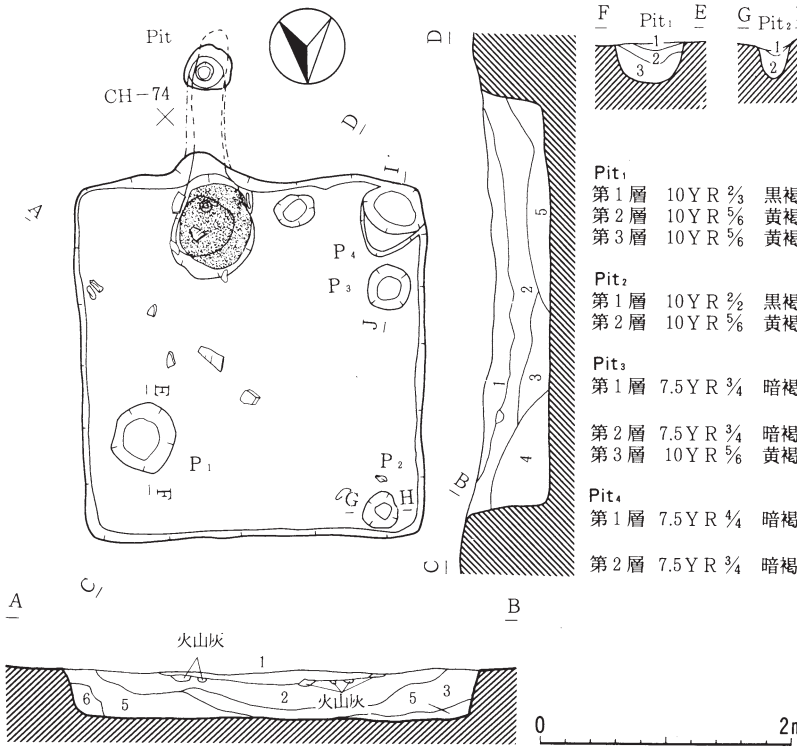
［カマド］　南壁中央からやや東寄りに位置する。袖は向かって右側だけが幾分残存するだけで、左側には芯材として用いたと思われるシルト質泥岩が出土した。支脚は火焼面の中央からやや奥に、直立状態で埋め込まれていた。煙道部はトンネル式で、非常に緩やかな角度で下に向かい、煙出口直下にピットを作出し、張り出し部を残しながら立ち上がる。ピットは雨水等の逆流に備えたものと思われる。

［その他の施設］　認められなかった。

［堆積土］　６層に分層できる。第２層褐色土上面に白頭山火山灰がブロック状に混入する。また、第３・４・５層中は人為的堆積と思われ、十和田ａ火山灰が少量認められた。従って、十和田ａ火山灰降下後に廃棄（埋め戻し）された住居に、白頭山火山灰が自然堆積したものと思われる。

［出土遺物］　図示し得た個体数は６個体である。覆土中から出土した２と７は同一個体の可能性が高い。また、覆土中から製塩土器片が10片出土している。

［時期］　覆土下位から人為的堆積と思われる十和田ａ火山灰、上位から自然堆積と思われる白頭山火山灰が検出されたことから、十和田ａ火山灰降下後から白頭山火山灰降下以前に廃棄された住居と思われる。



Pit1
第1層　10YR 2/3　黒褐色土　5ミリ大のローム粒少量。
第2層　10YR 5/6　黄褐色土　5ミリ大のローム粒少量。
第3層　10YR 5/6　黄褐色土　10ミリ大のローム粒少量。

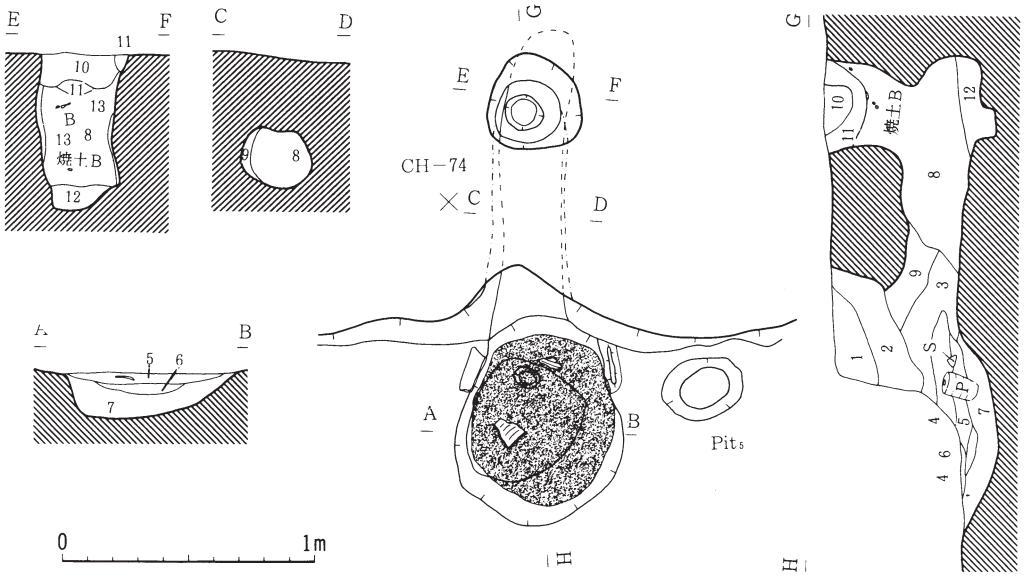
Pit2
第1層　10YR 2/2　黒褐色土　ローム粒少量。
第2層　10YR 5/6　黄褐色土　黒褐色土混入。

Pit3
第1層　7.5YR 3/4　暗褐色土　炭化物微量、10～20ミリ大の焼土粒多量。
第2層　7.5YR 3/4　暗褐色土　20ミリ位の焼土粒少量。
第3層　10YR 5/6　黄褐色土　暗褐色土混入。

Pit4
第1層　7.5YR 4/4　暗褐色土　炭化物微量、5ミリ大の焼土粒多量。
第2層　7.5YR 3/4　暗褐色土　5～10ミリ大の焼土粒・ローム粒多量。

第9号　住居跡土層注記

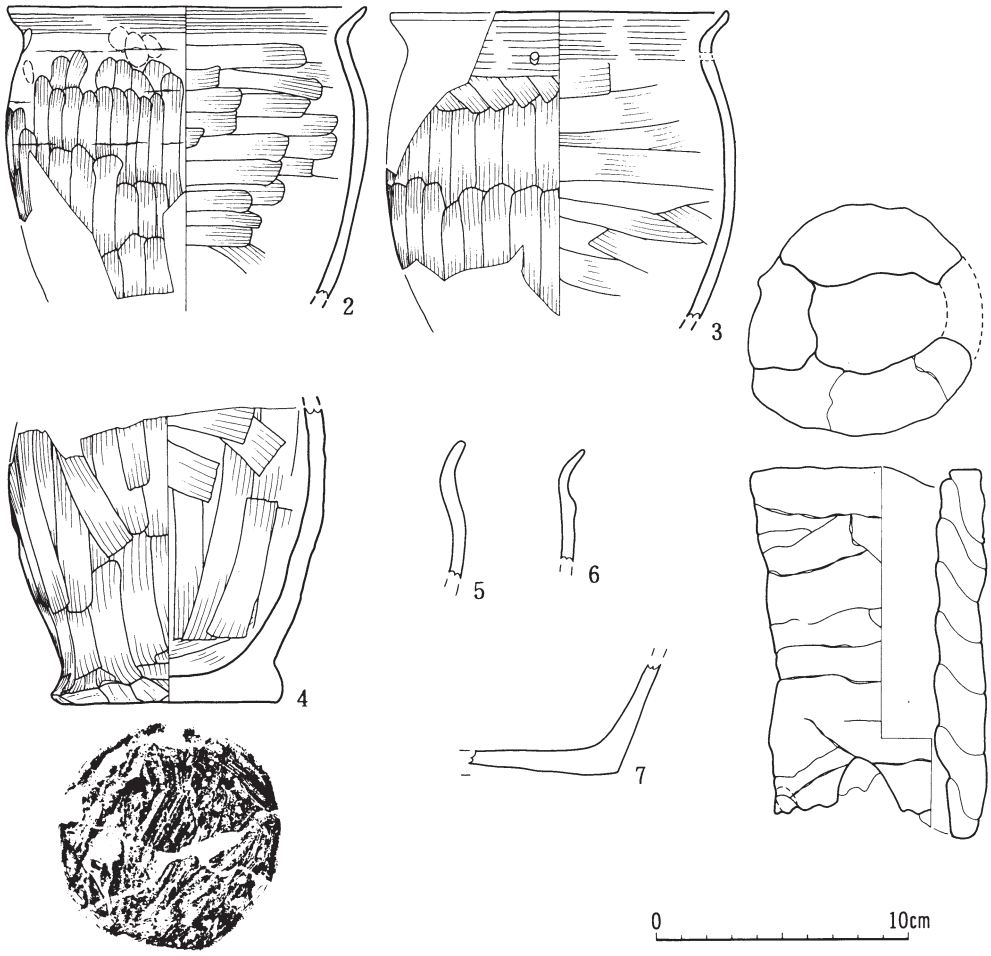
第1層　10YR 2/2　黒褐色土　5ミリ大のローム粒少量。
第2層　10YR 4/4　褐色土　上部に白頭山火山灰。5～20ミリ大の焼土粒少量。5～10ミリ大のローム粒多量
第3層　10YR 3/4　暗褐色土　灰白色の火山灰、ローム粒少量。
第4層　10YR 3/4　暗褐色土　黒褐色土混入、十和田a火山灰少量、10ミリ大のローム粒多量。
第5層　10YR 3/3　暗褐色土　十和田a火山灰、ローム粒少量。
第6層　10YR 2/3　黒褐色土　ローム粒微量。



第29図　第9号住居跡（1）

第９号住居跡　土層注記カマド

第１層　10ＹＲ 4/4　褐 色 土　３ミリ大の焼土粒多量。
第２層　10ＹＲ 3/3　暗褐色土　褐色土混入、火山灰微量、焼土粒少量。
第３層　10ＹＲ 4/4　褐 色 土　５ＹＲ5/8明赤褐色の焼土粒子・Ｂ多量。
第４層　10ＹＲ 4/4　褐 色 土　５～10ミリ大の焼土粒多量。
第５層　7.5ＹＲ 4/6　褐 色 土　炭化物微量、２～３ミリ大の焼土粒少量。
第６層　５ＹＲ 5/8　明赤褐色焼土
第７層　2.5ＹＲ 5/8　赤褐色焼土
第８層　7.5ＹＲ 3/3　暗褐色土　焼土Ｂ少量。
第９層　５ＹＲ 3/6　暗赤褐色土　焼土化した天井部崩落土。
第10層　7.5ＹＲ 3/4　暗褐色土　10～20ミリの焼土Ｂ
第11層　10ＹＲ 5/6　黄褐色土　暗褐色土少量。
第12回　10ＹＲ 3/3　暗褐色土　焼土粒少量。
第13回　５ＹＲ 4/6　赤褐色土　焼土化した壁部。



第９号住居跡　土師器観察表　（単位：cm）

番　号	出土層位	器種	部 位	口径	底径	器高	外　面	内　面	底　部	分類	備　考
第30図 2	カマド	甕	口縁部	14.2			ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ			
3	覆土	〃	口縁部	13.4			ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ			補修孔
4	カマド	〃	底部		9.0		ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ		
5	カマド	〃	口縁部				ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ			
6	覆土	〃	〃				ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ			
7	覆土	〃	底部				ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ？		

第９号住居跡　土製支脚観察表　（cm）

第　図	出土層位	外 面 調 整	内 面 調 整	外 径	内 径	残存高
第　図１				9.3	5.4	14.8

第30図　第９号住居跡（２）

第10号住居跡　＝平成４年度調査第７号住居跡

［位置と確認］　ＣＥ－64・65グリッドに位置する。平成４年度の調査において、第７号住居跡としたものである。本住居跡は、昭和52年の７月～８月にかけて青森県教育委員会文化課で実施した試掘調査の際に、壁及び床の一部を確認している。当時の報告によると「調査区南東部Ｂ－24とＢ－25トレンチの間に、4.1m×4.0mの円形を呈し深さ29cmの凹みを発見し、試掘した結果、次のことが確認できた。この住居跡は第Ⅲ層から掘り込まれ、床面は第Ⅴ層を削って、平坦に作っている。また、この面はかたくしまっているが一部に、暗褐色土がまだらに入り込んでいる。壁直下に巾８cm、深さ10cmの周溝が確認された。壁はやや急な立ち上がりを呈し～。」また、まとめでは「形態から歴史時代と思われる」と記載されている。（青森県埋蔵文化財調査報告第48集1779）

調査中も、試掘調査が行われたことを裏付けるようにセクションにトレンチ跡と思われる攪乱を確認している。

［改築］　認められなかった。

［平面形・規模］　平面形は、ほぼ隅丸方形を呈するが、南壁で緩やかな外湾するカーブを描く。壁長は、東壁２ｍ25cm・西壁２ｍ45cm・南壁２ｍ62cm・北壁２ｍ70cmを測り、床面積は6.28㎡である。主軸方位はＳ－20°－Ｅである。

［壁・床面］　壁は、第Ⅲ層以下を掘り下げて構築したもので、堅くしまりがある。各壁は各方位とほぼ一致して、壁高は、北から時計回りに45cm・53cm・51cm・54cmである。床面からの立ち上がりは70～85度である。床面は第Ⅵ層を掘り込んで構築しており、東から西方向にかけて緩やかに傾斜する。

［壁溝］　カマドの存在する南壁の一部を除いてほぼ全周する。幅は12～17cmで、床面からの深さは４～７cmである。

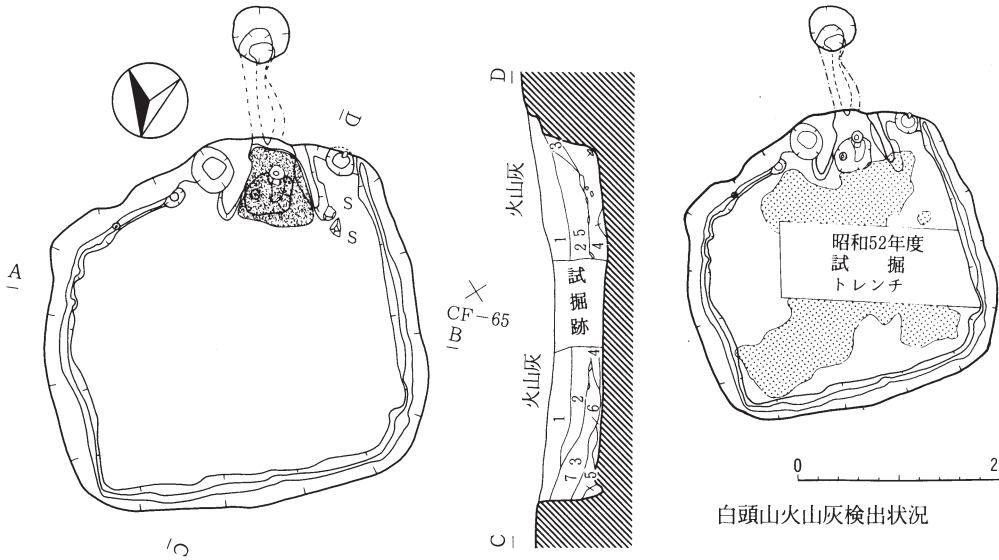
［柱穴・ピット］　検出されたピットは２個である。その他に周溝内にそって小ピットが認められた。P_{1}・$_{2}$とも袖の両脇に付設されており、少量の土器片が出土した。

P_{1}…6cm、P_{2}…４cmである。

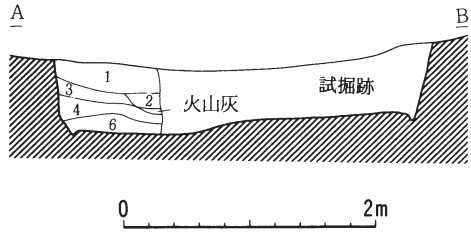
［カマド］　南壁の中央から西寄りに付設されている。袖は地山を掘り残して使用した痕跡は認められたものの、芯材として用いられたと思われる礫がむき出しになっており、原形を留めるには至らない。支脚は、石の上に坏を倒立させて置き使用したと思われる。煙道部は、第Ⅵ層を掘り込んで作ったトンネル式で、残存状態は良好である。

［その他の施設］　認められなかった。

［堆積土］　昭和52年の試掘調査におけるトレンチ跡が明確に認められた。残存する堆積土は７層に分けられた。第３・４層上面に白頭山火山灰が多量に認められた。また、周堤の確認の

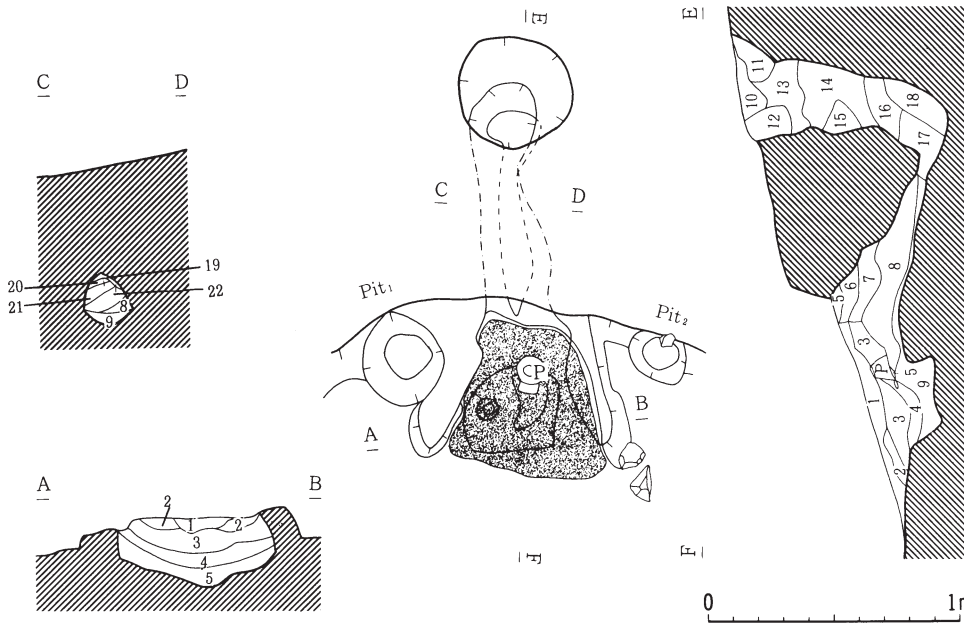


白頭山火山灰検出状況



第10号　住居跡土層注記

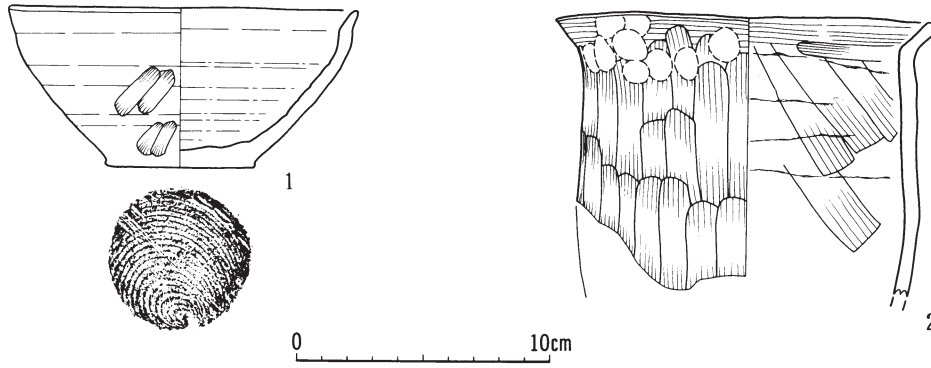
第１層	黒褐色土	10ＹＲ ⅔	毛根多量、砂少量。
第２層	黒 色 土	10ＹＲ ²⁄₁	ローム粒子少量。
第３層	黒褐色土	10ＹＲ ⅔	ローム粒子少量。
第４層	黒褐色土	10ＹＲ ³⁄₂	３ミリ大のローム粒少量、ローム粒子多量。
第５層	黒褐色土	10ＹＲ ⅔	ローム粒少量。
第６層	黒褐色土	10ＹＲ ⅔	ＬＢ多量。
第７層	黄褐色土	10ＹＲ ⅚	黒色土少量。



第31図　第10号住居跡（１）

第10号　住居跡カマド土層注記

第１層	黒褐色土	10ＹＲ 3/2	焼土粒少量。
第２層	褐 色 土	7.5ＹＲ 4/3	５～10ミリ大の焼土Ｂ少量。
第３層	にぶい赤褐色焼土	５ＹＲ 4/4	２センチ大の焼土Ｂ多量、炭化物少量。
第４層	明赤褐色焼土	５ＹＲ 5/8	下部はしまり強く焼土化している。
第５層	明赤褐色土	５ＹＲ 5/8	黒色土微量。
第６層	褐 色 土	10ＹＲ 4/4	焼土粒多量、炭化物少量。
第７層	褐 色 土	7.5ＹＲ 4/4	焼土粒微量。
第８層	赤褐色土	５ＹＲ 4/8	炭化物少量、褐色土微量。
第９層	明黄褐色土	10ＹＲ 6/6	黒色土をしみ状。
第10層	暗褐色土	10ＹＲ 3/4	ローム粒多量。
第11層	褐 色 土	10ＹＲ 4/6	焼土粒多量。
第12層	にぶい黄褐色土	10ＹＲ 5/4	１～２センチ大の焼土Ｂ多量。
第13層	暗褐色土	10ＹＲ 3/3	５～20ミリのＬＢ少量。
第14層	暗褐色土	10ＹＲ 3/3	ローム粒多量。
第15層	黒褐色土	10ＹＲ 3/2	ローム粒少量。
第16層	黒褐色土	10ＹＲ 3/2	焼土Ｂ少量。
第17層	暗褐色土	10ＹＲ 3/3	ローム粒少量。
第18層	暗褐色土	10ＹＲ 3/3	ローム粒少量。黒色土粒少量。
第19層	明赤褐色土	５ＹＲ 5/8	燃成をうけている。
第20層	暗褐色土	10ＹＲ 3/4	焼土粒多量、炭化物微量。
第21層	暗褐色土	10ＹＲ 3/4	５～10ミリ大の焼土粒多量。
第22層	暗褐色土	10ＹＲ 3/3	２ミリ大の焼土粒多量。



第10号住居跡　土師器観察表　（単位：cm）

番　号	出土層位	器種	部 位	口径	底径	器高	外　　面	内　　面	底　部	分類	備　　考
第32図１	カマド	坏	完形	13.8	5.6	6.3	ロクロ・ヘラナデ		回転糸切り	Ⅰ	
2	床面	甕	口縁部	15.0			ヘラナデ・指アツ	ヨコナデ・ヘラナデ			12H覆土と接合

第32図　第10号住居跡（２）

ために住居跡周辺を調査した際に、十和田ａ火山灰が大量に堆積しているのが認められた。

［出土遺物］　図示し得た土師器の個体数は２個体である。坏はカマド内出土で、倒立させて支脚として用いたと思われる。床面から出土した甕は12号住居跡覆土中のものと接合した。

［時期］　住居跡周辺に十和田ａ火山灰が多量に自然堆積しているにも係わらず、住居跡覆土中には白頭山火山灰しか検出されなかったことから、十和田ａ火山灰降下後に構築され、白頭山火山灰降下前に廃絶されたものと思われる。

第11号住居跡　＝平成４年度調査第８号住居跡

［位置と確認］　ＣＫ－67グリッドに位置する。平成４年度の調査において、埋まり切らない状態で落ち込みを確認し、第８号住居跡とした。本調査で検出した住居跡群の南端に位置し、残存状況は良好である。

［改築］　認められなかった。

［平面形・規模］　平面形は隅丸方形で、壁長は東壁２ｍ42㎝・西壁２ｍ50㎝・南壁２ｍ52㎝・北壁２ｍ30㎝を測り、床面積は5.60㎡である。主軸方位はＳ－２°－Ｗである。

［壁・床面］　壁は、第Ⅲ層から第Ⅵまで掘下げて構築され、床面からの立ち上がりは80度前後で急である。壁高は、北から時計回りに45㎝・51㎝・59㎝・54㎝である。床面は第Ⅵ層を掘り下げて構築しており堅緻で平坦な作りである。

［柱・ピット］　検出されたピットは10個である。いずれのピットも主柱穴になりそうな掘り込みではない。ピット内の堆積土には、焼土粒を含みしまりがないものが目立つ。

P_1…15㎝、P_2…11(＋6)㎝、P_3…44㎝、P_4…16㎝、P_5…17㎝、P_6…12㎝、P_7…21㎝、P_8…７㎝、P_9…19㎝、P_{10}…13㎝である。

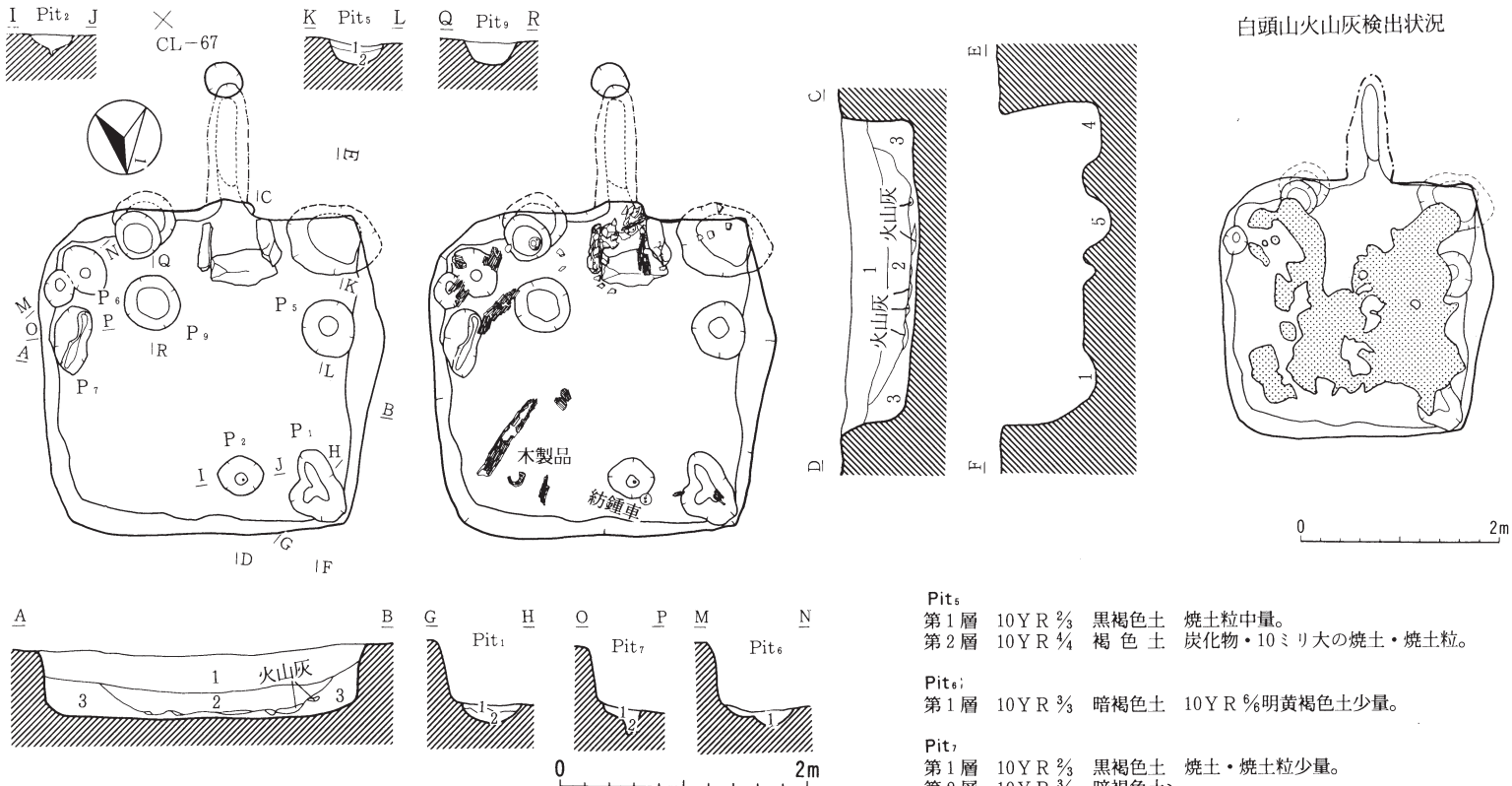
［カマド］　南壁中央部に構築され、比較的良好な残存状況である。袖はシルト質泥岩を床面に埋め込み直立させ、天蓋の崩落と思われるものも同様の石材を用いている。炊口部には、土師器片が多数出土しており、甕形土師器の底部（下半部）を倒立させ支脚として用いた可能性が高い。（第６号住居跡の床面出土遺物と接合し、実測図は、第６号住居跡（20図－12）で掲載した。）煙道部は、堆積状態から見ると火焼面を２枚有するが、天井部の崩落と思われる。

［その他の施設］　認められなかった。

［堆積土］　３層に分けられた。自然堆積と思われ、第３層上面に広範囲で白頭山火山灰の堆積が認められた。

［出土遺物］　図示し得た土師器は６個体であるが、４点は覆土中出土のものである。紡錘車は北壁よりの床面から出土した。また、木製の椀と思われる炭化材も床面より出土した。口縁と見られる外反部分が残存することから、図上復元を試みた。

［時期］　自然堆積と思われる覆土中から白頭山火山灰が検出されており、白頭山火山灰降下以前に構築・廃棄されたもので、第６号住居跡カマド袖芯材と本住居跡カマド内出土土器が接合していることから、第６号住居跡同様10世紀初頭から10世紀第２四半期のものと思われる。



第33図　第11号住居跡（1）

第11号　住居跡土層注記

第1層　10YR 2/2　黒褐色土　草木根多量。
第2層　10YR 1/1　黒色土
第3層　10YR 3/2　黒褐色土　炭化物多量。

Pit1

第1層　10YR 3/3　暗褐色土　10YR 5/6黄褐色土多量。
第2層　10YR 4/6　褐色土　10YR 5/6黄褐色土少量。

Pit2

第1層　10YR 3/3　暗褐色土　10YR 5/6黄褐色土少量。

Pit5

第1層　10YR 2/3　黒褐色土　焼土粒中量。
第2層　10YR 4/4　褐色土　炭化物・10ミリ大の焼土・焼土粒。

Pit6

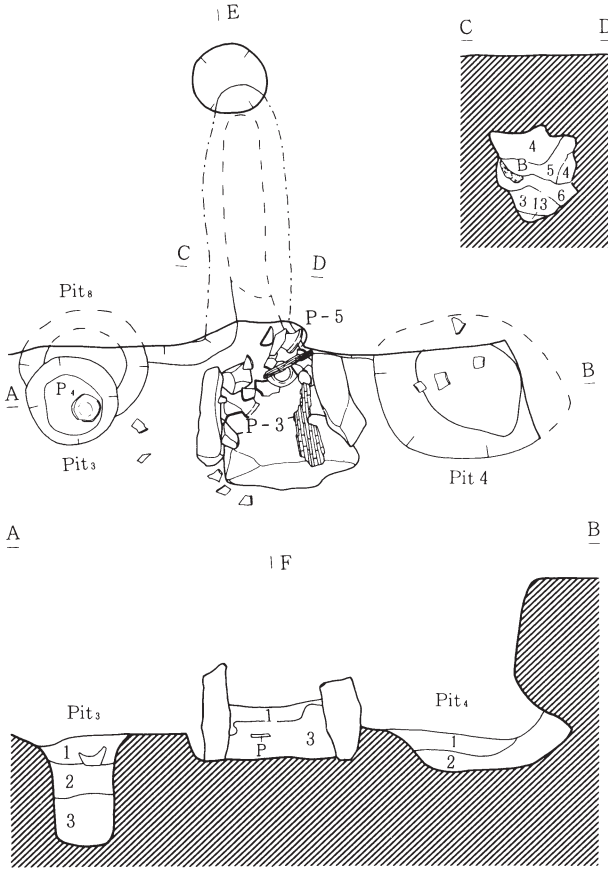
第1層　10YR 3/3　暗褐色土　10YR 6/6明黄褐色土少量。

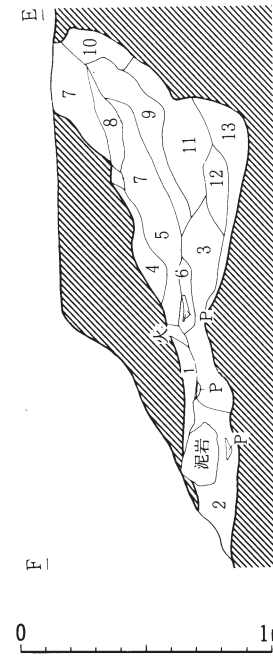
Pit7

第1層　10YR 2/3　黒褐色土　焼土・焼土粒少量。
第2層　10YR 3/3　暗褐色土
　　10YR 6/6　明黄褐色土　混土

Pit9

第1層　暗褐色土　7.5YR 3/3　炭化物少量・焼土粒多量。





第11号　住居跡カマド土層注記

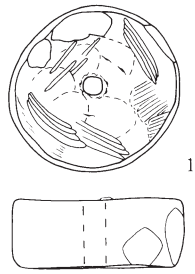
第１層	黒褐色土	10ＹＲ 3/2	覆土３層相当。
第２層	暗褐色土	10ＹＲ 3/4	１ミリ弱の焼土粒少量。
第３層	褐　色　土	10ＹＲ 4/6	３～５ミリ大の焼土粒中量。
第４層	褐　色　土	7.5ＹＲ 4/6	黒褐色土混入 } 天井部崩落土。
第５層	褐　色　土	7.5ＹＲ 4/4	黒褐色土混入 } 天井部崩落土。
第６層	暗赤褐色焼土	５ＹＲ 3/6	
第７層	黒褐色土	10ＹＲ 2/3	１ミリ大の炭化粒・焼土粒微量。
第８層	暗褐色土	7.5ＹＲ 3/4	10ミリ大の焼土粒微量。
第９層	極暗褐色土	7.5ＹＲ 2/3	10ミリ大の焼土粒中量。
第10層	褐　色　土	7.5ＹＲ 4/4	焼土粒・ローム粒多量。
第11層	黒褐色土	10ＹＲ 2/3	焼土粒少量。
第12層	極暗赤褐色土	５ＹＲ 2/4	焼土粒多量。
第13層	黒　色　土	10ＹＲ 2/1	焼土粒微量。
第Ｂ層	明赤褐色焼土	５ＹＲ 5/8	

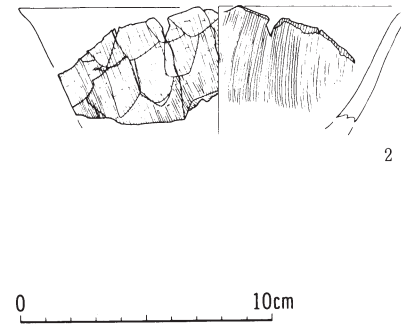
Pit3

第１層	暗褐色土	10ＹＲ 3/3	焼土粒微量。
第２層	明黄褐色土	10ＹＲ 6/6	焼土粒・炭化物微量。
第３層	暗褐色土	10ＹＲ 3/3	10ミリ大の焼土粒、炭化物少量。

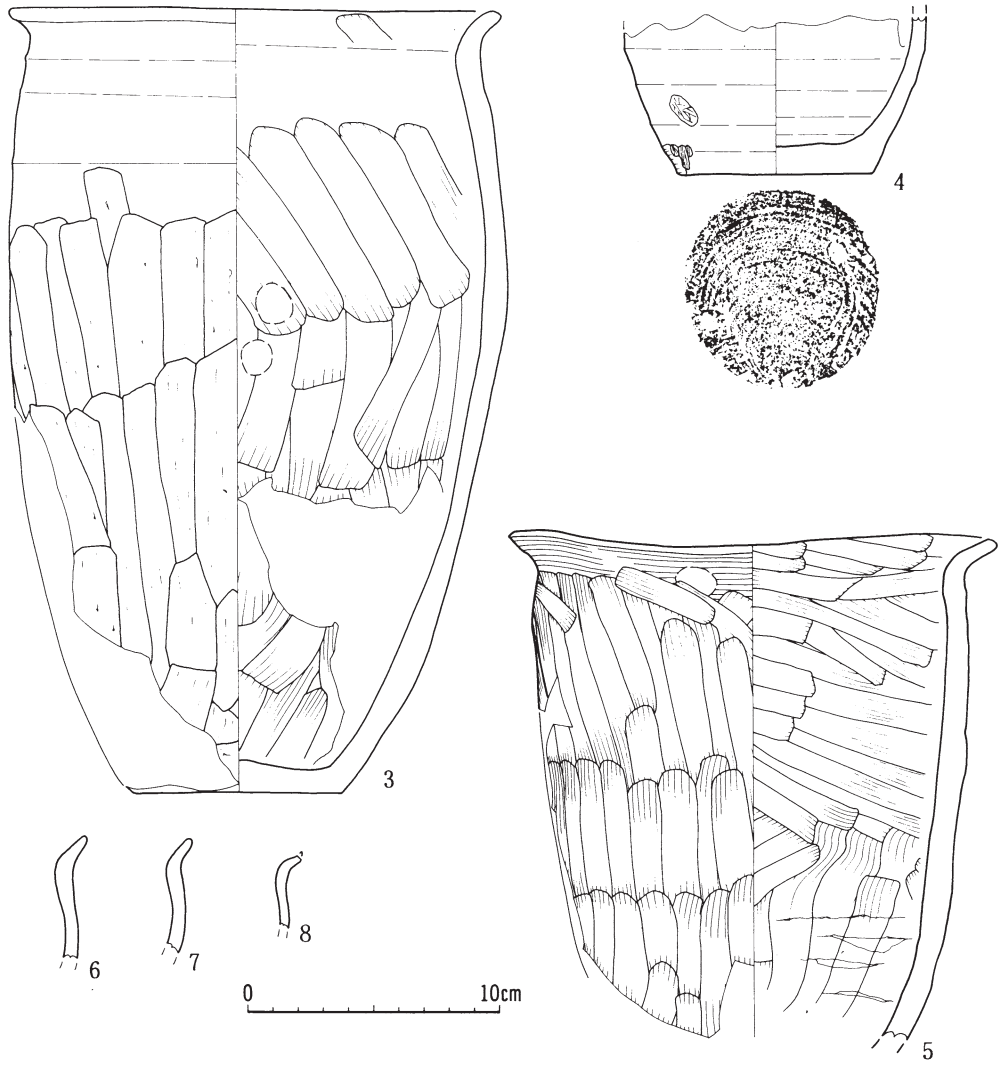
Pit4

第１層	褐　色　土	7.5ＹＲ 4/6	10ミリ大の焼土粒微量。
第２層	暗褐色土	10ＹＲ 3/4	炭化物・焼土粒微量。





第34図　第11号住居跡（２）



第11号住居跡　土師器観察表　（単位：cm）

番　号	出土層位	器種	部 位	口径	底径	器高	外　面	内　面	底　部	分類	備　考
第35図 3	カマド	甕	完形	19.5	8.6	31.2	ロクロ・ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	Ⅰa	
4	覆土	〃	底部		8.0		ロクロ・指アツ		回転糸切り		
5	カマド	〃	口縁部	19.4			ヨコナデ・ヘラナデ	ヘラナデ			
6	覆土	〃	口縁部				ロクロ	ロクロ			
7	〃	〃	〃					ヘラナデ			スス状炭化物
8	〃	〃	頸部				ロクロ	ロクロ			遺構外28と同一個体

第11号住居跡　土製品観察表　（cm）

第　図	出土層位	長 さ	幅	厚 さ	種　類	備　考
第34図 1	床面	6.6		2.5	紡錘車	

第11号住居跡　木製品観察表　（cm）

第　図	出土層位	長 さ	幅	厚 さ	種　類	備　考
第34図 2	床面				椀？	

第35図　第11号住居跡（3）

第12号住居跡　＝平成５年度調査第９号住居跡

［位置と確認］　ＣＧ・Ｈ－69・70グリッドに位置する。平成４年度の調査において、表土上面で埋没し切らない円形の凹地を確認し、第９号住宅跡としたものである。

［改築］　認められない。

［平面形・規模］　各壁の全長は、東壁２ｍ38㎝・西壁２ｍ65㎝・南壁２ｍ52㎝・北壁２ｍ76㎝を計り、西側がやや開く台形様の平面形である。床面積は60.74㎡である。主軸方位はＮ－26°－Ｗである。

［壁・床面］　壁の各隅が、ほぼ各方位方向を向いている。壁は第７～11号住居跡と同様に第Ⅲ層からの掘り込みである。床面からの立ち上がりは75度前後であるが、カマドの位置する北壁は他の壁より急な角度である。壁高は、北から時計回りに65㎝・65㎝・72㎝・73㎝であり、他の住居よりも相対的に壁が高く作られている。床面は第Ⅵ層の使用で掘り方等は認められず、平坦で全体的に堅い作りである。

［柱穴・ピット］　検出されたピットは４個である。北壁にも横穴が１個検出されたが、その他の施設で記載する。いずれも柱痕は認められず、対称形にも組むことはできなかった。P_3は浅めのピットで、土器片が数点出土している。

P_1…15㎝、P_2…31㎝、P_3…15㎝、P_4…21㎝である。

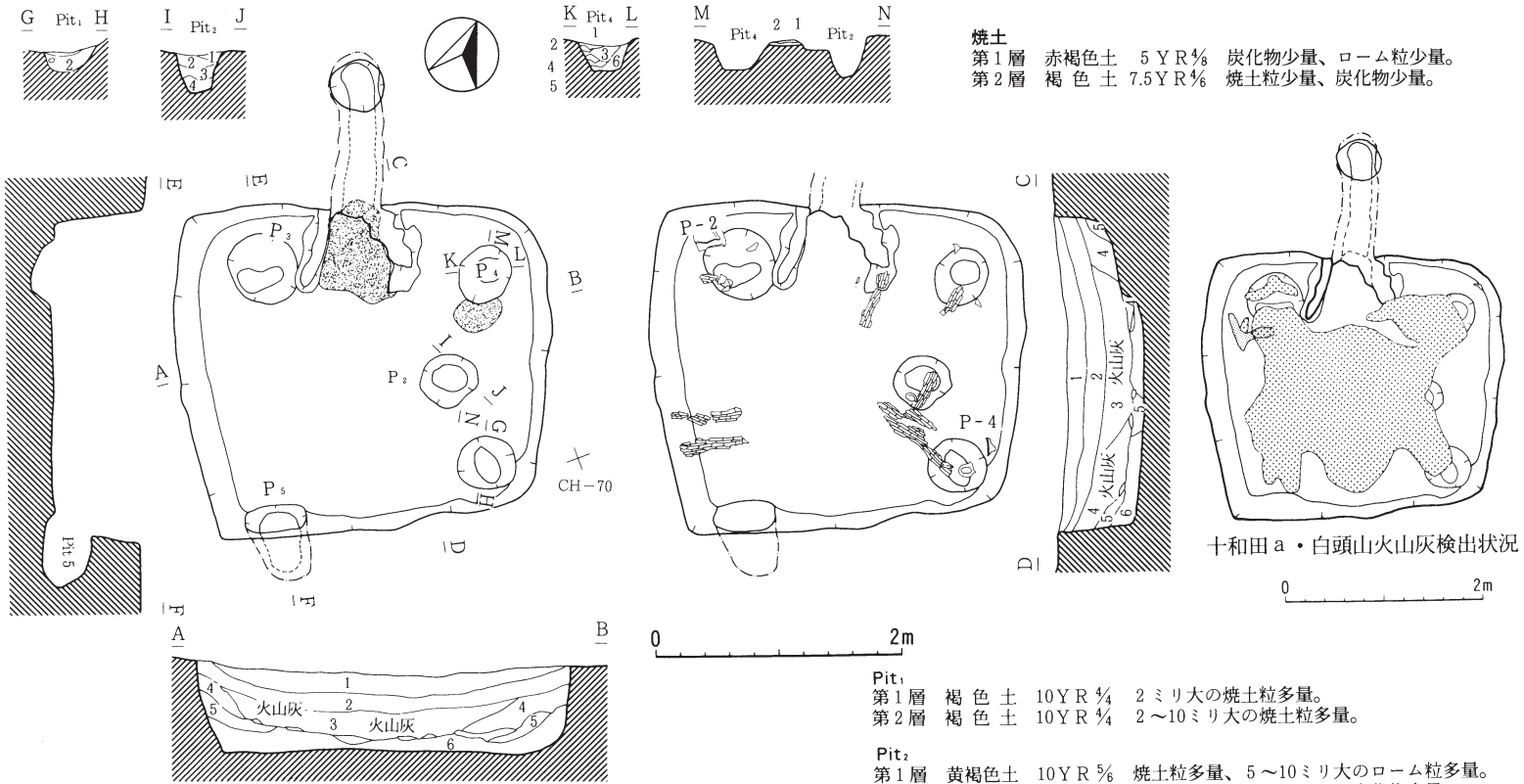
［カマド］　北壁中央部に構築され、袖は地山を掘り残したものに粘土を張り付けたものである。粘土部分は燃焼を受けて明赤褐色に変成している。支脚は残されていない。煙道部は第Ⅵ層を掘り込んだトンネル式で、煙道内には天井部の崩落と思われる赤褐色土ブロックが堆積している。

［その他の施設］　北壁に奥行き40㎝程の横穴が検出された。第Ⅵ層を掘り込んでいるため、しっかりとした作りで、貯蔵穴の可能性がある。

［堆積土］　６層に分けられる。住居跡全面に渡って第５・６層上面に白頭山火山灰が認められた。また、部分的ではあるが、第６層暗褐色土中に十和田ａ火山灰を少量含む。自然堆積と思われる。

［出土遺物］　図示し得た土師器は７個体である。床面からは甕４点、坏口縁部１点の出土である。坏の口縁部は、Pit_2出土の１と同一個体の可能性がある。

［時期］　住居跡覆土中から自然堆積と思われる十和田ａ・白頭山火山灰が検出されているため、十和田ａ火山灰降下前に構築・廃棄されたものと思われる。



焼土
第１層　赤褐色土　５ＹＲ4/8　炭化物少量、ローム粒少量。
第２層　褐 色 土　7.5ＹＲ4/6　焼土粒少量、炭化物少量。

十和田ａ・白頭山火山灰検出状況

第12号　住居跡土層注記表

第１層	黒褐色土	10ＹＲ 3/2	毛根を多量。
第２層	暗褐色土	10ＹＲ 3/3	毛根を少量。
第３層	黒 色 土	10ＹＲ 2/1	５ミリ大のローム粒を少量。
第４層	暗褐色土	10ＹＲ 3/3	１～５ミリのローム粒を多量。
第５層	黒褐色土	10ＹＲ 3/2	ローム粒少量、床面直上で炭化材多量。
第６層	暗褐色土	10ＹＲ 3/4	５～20ミリ大のローム粒・焼土粒多量。炭化物多量。

Pit1

第１層	褐 色 土	10ＹＲ 4/4	２ミリ大の焼土粒多量。
第２層	褐 色 土	10ＹＲ 4/4	２～10ミリ大の焼土粒多量。

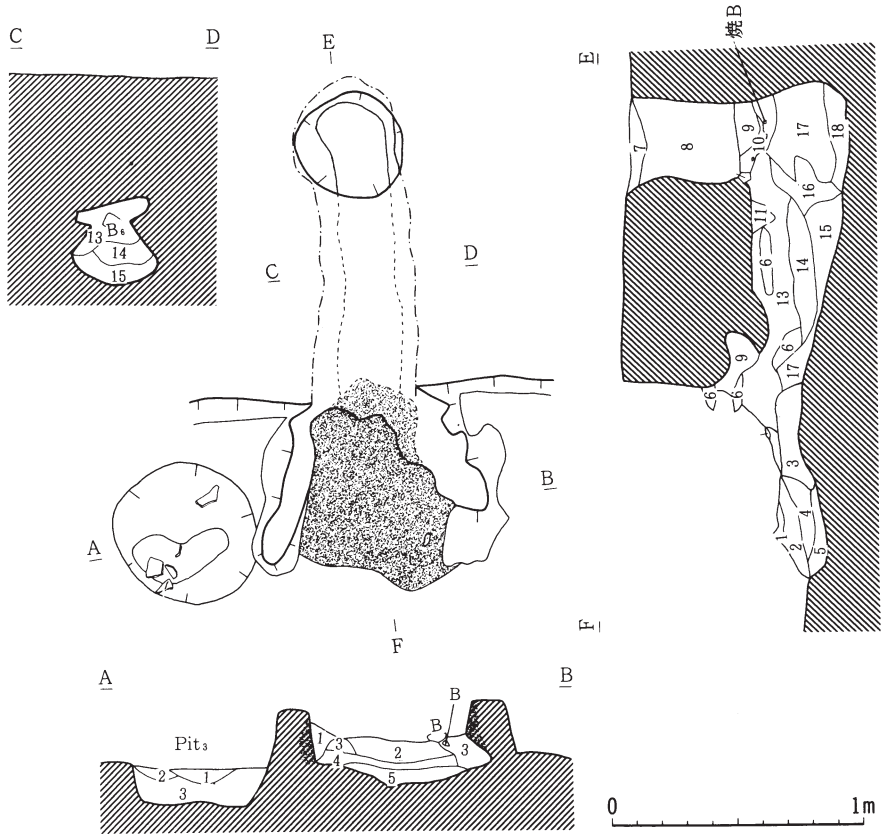
Pit2

第１層	黄褐色土	10ＹＲ 5/6	焼土粒多量、５～10ミリ大のローム粒多量。
第２層	褐 色 土	10ＹＲ 4/4	５ミリ大のローム粒多量、炭化物少量。
第３層	褐 色 土	10ＹＲ 4/4	５～30ミリ大の焼土粒・焼土Ｂ多量。
第４層	褐 色 土	10ＹＲ 4/4	焼土粒少量、ローム粒少量。

Pit4

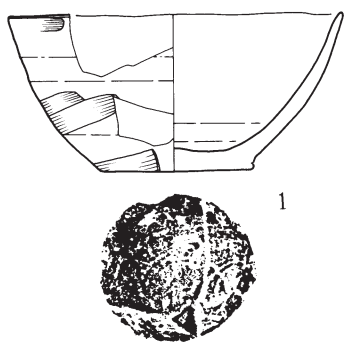
第１層	暗褐色土	10ＹＲ 3/3	炭化物多量、ローム粒多量。
第２層	暗褐色土	10ＹＲ 3/4	焼土粒子多量、炭化物少量。
第３層	暗褐色土	10ＹＲ 3/4	ローム粒子多量。
第４層	暗褐色土	10ＹＲ 3/4	２センチ大のＬＢ多量。
第５層	にぶい黄褐色土	10ＹＲ 4/3	ローム粒子多量。
第６層	褐 色 土	10ＹＲ 4/4	５～15ミリ大の焼土Ｂが少量、ローム粒子多量。

第36図　第12号住居跡（１）



第9号　住居跡カマド土層注記

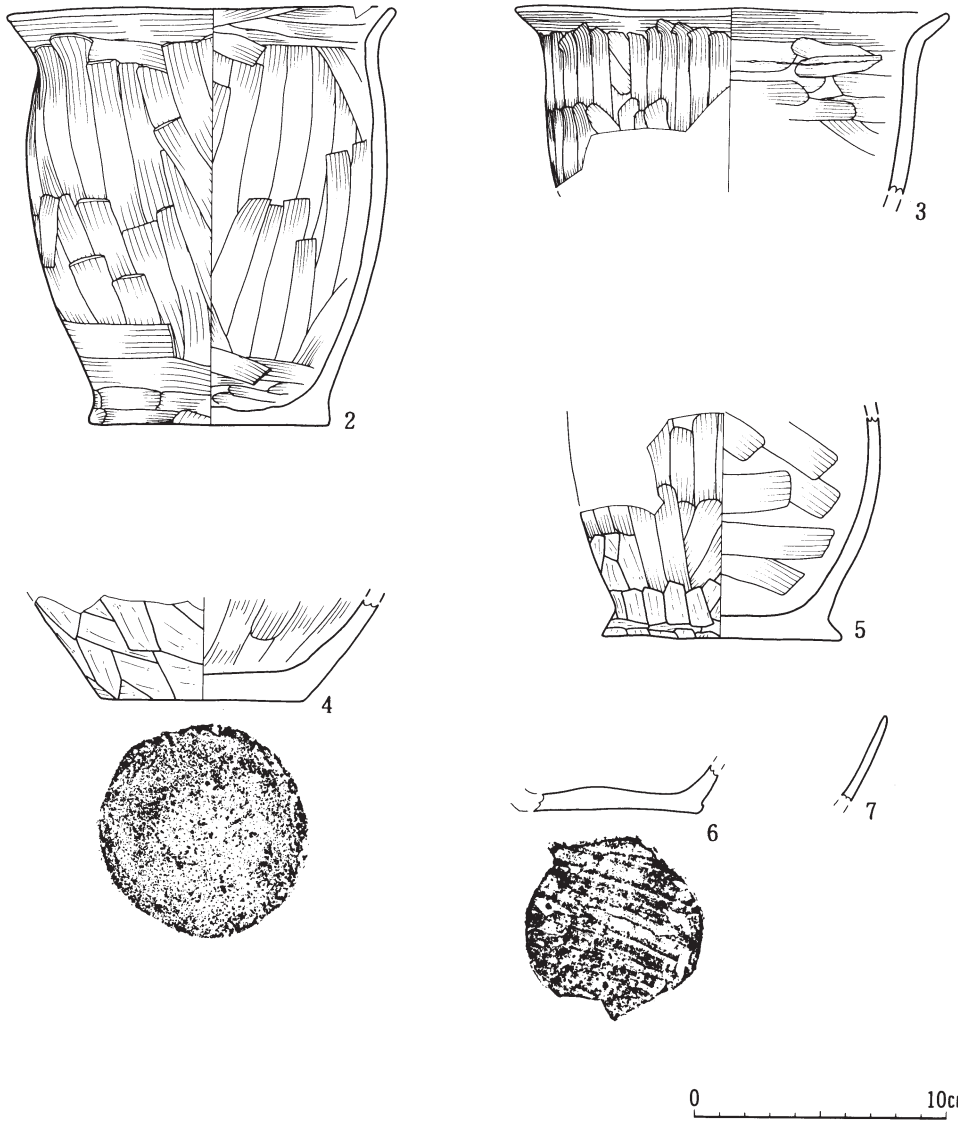
第1層	褐色土	7.5YR 4/6	1～5ミリ大の焼土粒多量。
第2層	褐色土	10YR 4/6	5～10ミリ大の焼土粒多量。
第3層	褐色土	10YR 4/6	5ミリ大の焼土粒少量。
第4層	明赤褐色土	5YR 5/8	焼土層（天井部崩落）。
第5層	赤褐色土	2.5YR 4/8	焼土層。
第6層	赤褐色土	5YR 4/8	焼土層（天井部崩落）。
第7層	暗褐色土	10YR 3/3	1～5ミリ大の焼土粒少量。
第8層	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	5ミリ大の焼土粒少量、ローム粒多量。
第9層	灰黄褐色土	10YR 4/2	焼土ブロック少量、褐色土とロームの混土層。
第10層	黒褐色土	10YR 3/2	2センチ大の焼土ブロック少量、ローム粒少量。
第11層	明黄褐色土	10YR 6/8	褐色土多量。
第12層	赤褐色土	5YR 4/8	1ミリ大の黒色土多量。
第13層	暗褐色土	10YR 3/3	1ミリ大のローム粒多量。
第14層	暗褐色土	10YR 3/3	1～3ミリ大の焼土粒多量。
第15層	暗褐色土	10YR 3/3	焼土ブロック多量。
第16層	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	褐色土とロームの混土層。
第17層	黒褐色土	10YR 3/2	焼土ブロック多量、ローム粒多量。
第18層	黒褐色土	10YR 2/3	2～3ミリ大のローム粒多量。



Pit₃

第1層	黒褐色土	10YR 3/2	炭化物少量、5～10ミリ大のローム粒多量。
第2層	黒褐色土	10YR 3/2	1～2センチ大の焼土ブロック多量、炭化物少量。
第3層	褐色土	7.5YR 4/6	焼土粒多量、1センチ大の炭化物少量。

第37図　第12号住居跡（2）



第12号住居跡　土師器観察表

（単位：cm）

番　号	出土層位	器種	部 位	口径	底径	器高	外　面	内　面	底　部	分類	備　考
第　図1	Pit 2	坏	完形	13.2	6.0	6.2	ロクロ・ヨコナデ		回転糸切り	Ⅰ	
第　図2	床面	甕	完形	15.4	9.6	16.7	ヨコナデ・ヘラナデ	ヘラナデ	砂	Ⅲb	
3	床面	甕	口縁部	16.9			ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ			
4	覆土	〃	底部		8.0		ヘラナデ・ヘラケズリ	ヘラナデ	砂		
5	床面	甕	底部		9.6		ヘラナデ・ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ		
6	床面	〃	底部				ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ		
7	〃	坏	口縁部				ロクロ				

第38図　第12号住居跡（3）

第13号住居跡　＝平成４年度調査第10号住居跡

［位置と確認］　ＣＨ・Ｉ－67グリッドに位置する。第７～12号住居跡同様に埋まり切らない状態で落ち込みを確認したが、他のものより規模が非常に小さかったため、周辺の第Ｖ層を除去し、プランを確認してから精査に入った。平成４年度調査の第10号住居跡である。

［改築］　認められなかった。

［平面形・規模］　壁長は東壁２ｍ３㎝・西壁２ｍ９㎝・南壁２ｍ21㎝・北壁１ｍ98㎝を測り、やや隅丸で南壁が幾分長い台形に近い方形を呈する。床面積は3.86㎡であり、他の住居跡よりも規模は小さい。主軸方位はＳ－１°－Ｗである。

［壁・床面］　壁は、各方位とほぼ一致する。壁高は、確認できた範囲では北から時計回りに14㎝、10㎝、20㎝、14㎝で、床面からの立ち上がり角度は70度前後である。床面は部分的に貼床が認められ、掘り方も確認できた。貼床部分は暗褐色土混じりで、その他は第Ⅵ層を使用している。

［柱穴・ピット］　ピットは検出されなかった。

［カマド］　南壁中央から西寄りに付設されている。袖は向かって左側のみが微高地となって残っており、地山を掘り残して作ったと思われる。また、右側には芯材か補強材として用いたと思われる礫が出土している。支脚と思われるものは出土しなかった。煙道部は第Ⅵ層を緩やかに下方向に掘り込み、ピットを経て斜めに立ち上がるトンネル式である。

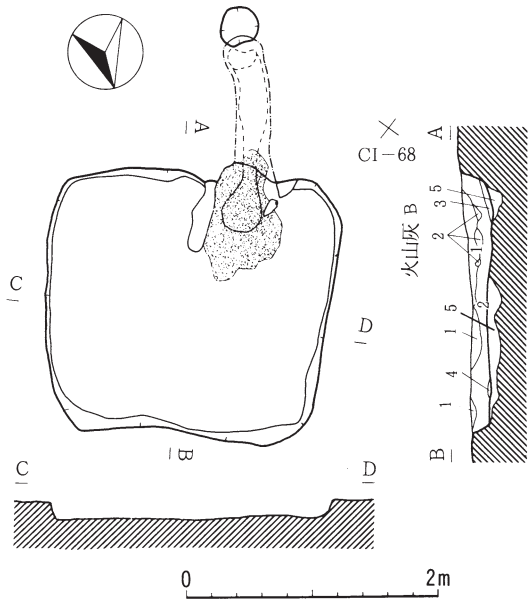
［その他の施設］　認められなかった。

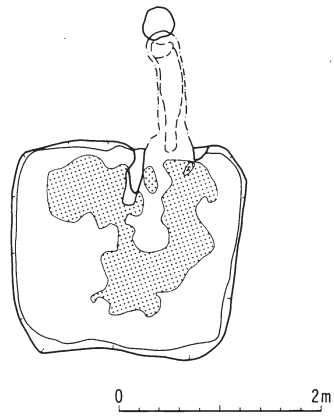
［堆積土］　４層に分層できる。第１層直下で白頭山火山灰を確認した。貼床部分は非常に締まりがあり、ロームと暗褐色土の混土を使用している。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

［時期］　住居跡覆土中から自然堆積と思われる十和田ａ・白頭山火山灰が検出されているため、十和田ａ火山灰降下前に構築・廃棄されたものと思われる。

（増尾　知彦）

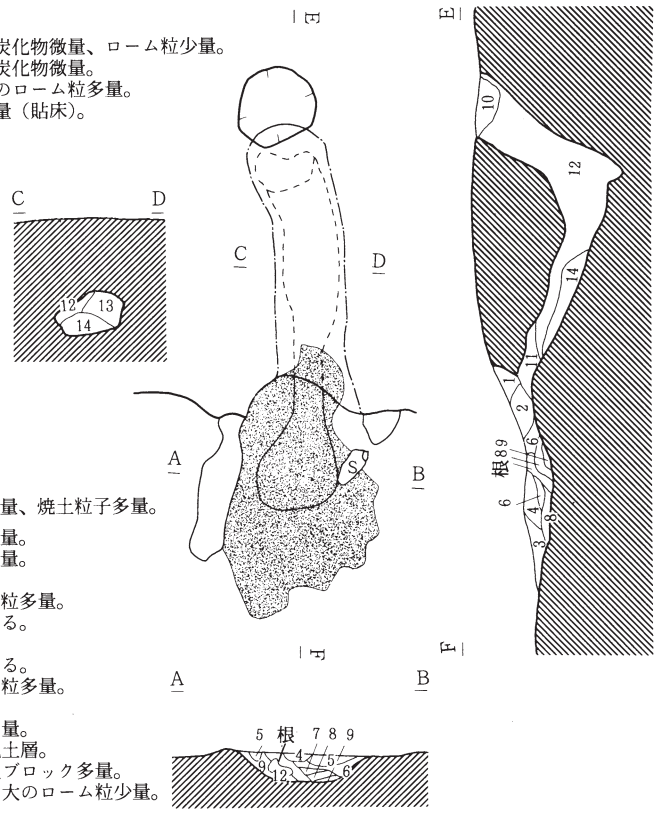




白頭山火山灰検出状況

第13号　住居跡土層注記

第１層	黒 色 土	10ＹＲ 1/1	混入物なし。
第Ｂ層	明黄褐色土	10ＹＲ 6/8	火山灰層。
第２層	黒褐色土	10ＹＲ 2/3	焼土粒微量、炭化物微量、ローム粒少量。
第３層	黒褐色土	10ＹＲ 2/2	焼土粒微量、炭化物微量。
第４層	褐 色 土	10ＹＲ 4/4	１～５ミリ大のローム粒多量。
第５層	暗褐色土	10ＹＲ 3/4	褐色ローム多量（貼床）。



第13号　住居跡カマド土層注記

第１層	赤褐色土	５ＹＲ 4/6	焼土粒多量。
第２層	にぶい赤褐色土	５ＹＲ 4/4	３ミリ大の焼土粒少量、焼土粒子多量。
第３層	暗褐色土	10ＹＲ 3/4	２ミリ大の焼土粒多量。
第４層	褐 色 土	7.5ＹＲ 4/4	５ミリ大の焼土粒多量。
第５層	赤褐色土	５ＹＲ 4/8	焼土層。
第６層	褐 色 土	7.5ＹＲ 4/6	２～５ミリ大の焼土粒多量。
第７層	明褐色土	7.5ＹＲ 5/8	軽く燃焼を受けている。
第８層	明赤褐色土	５ＹＲ 5/8	焼土層。
第９層	褐 色 土	7.5ＹＲ 4/6	軽く燃焼を受けている。
第10層	褐 色 土	10ＹＲ 4/4	焼土粒少量、ローム粒多量。
第11層	赤褐色土	５ＹＲ 4/8	焼土粒子多量。
第12層	暗褐色土	7.5ＹＲ 3/4	５ミリ大の焼土粒多量。
第13層	黄褐色土	10ＹＲ 5/6	褐色土とロームの混土層。
第14層	褐 色 土	7.5ＹＲ 4/4	５～10ミリ大の焼土ブロック多量。
第15層	褐 色 土	10ＹＲ 3/4	炭化物少量、３ミリ大のローム粒少量。

第39図　第13号住居跡

（2）土　　坑

平成４年度・平成５年度の調査では、63基の土坑が確認された。確認面は、第Ⅴ層～第Ⅶ層で検出した。土坑は、主に調査区北側及び東側においてまとまって見られた。（遺構配置図参照　付図）

検出した土坑については、土坑観察表に記載し、出土した遺物についても土器・石器・土製品ごとに観察表に一括した。

（大湯　卓二）

土 坑 観 察 表

土坑番号	図版番号	グリッド	規模 cm			平面形	出土遺物		石の有無	備考
			上端	下端	深さ		土器	石器		
1	第 40 図	BQ－74	170×110	150×100	15	楕円形		○		
2	第 41 図	BP・BQ－74	160×130	134×115	50	不整円形	○	○		
3	第 41 図	BP・BQ－74	95×95	85×85	65	円形			○	
4	第 42 図	BO・BP－74	135×105	121×82	25	不整楕円形			○	
5	第 42 図	BP－74	105×85	85×70	20	不整円形			○	
6	第 42 図	BP－73・74	205×185	180×160	25	不整円形		○	○	
7	第 42 図	BP－74	115×80	60×55	35	不整楕円形				7＞27
8	第 43 図	BQ－75	130×115	100×85	25	不整円形		○	○	
9	第 43 図	BO・BP－73	190×180	170×165	25	不整円形		○	○	
10	第 43 図	BP・BQ－73	280×240	250×180	35	不整楕円形		○	○	
11	第 44 図	BP－72	155×100	85×70	23	楕円形			○	11土と13土切合不明
12	第 44 図	BP－72	140×85	125×70	40	不整楕円形				
13	第 44 図	BP－72	155×135	140×120	30	不整円形			○	
14	第 44 図	BQ－72	170×150	125×100	50	不整円形		○	○	
15	第 46 図	BM－60	170×(160)	100×100	50	(不整円形)	○	○		15＜撹乱
16	第 46 図	BP－77・78	170×65	82×20	35	不整楕円形		○		

土坑番号	図版番号	グリッド	規模 cm			平面形	出土遺物		石の有無	備考
			上端	下端	深さ		土器	石器		
17	第 47 図	BR－78	110×90	90×70	35	不整円形				
18	第 47 図	BP－67・68	160×125	125×75	35	不整楕円形	○			円盤状土製品
19	第 48 図	BO・BP－67	190×182	175×150	65	不整円形	○	○	○	
20	第 47 図	BP－67	215×210	190×185	55	不整円形	○	○		20＞21
21	第 47 図	BP－67	130×(不明)							21土＜20土　21土とTピは不明
22	第 50 図	BP－67	95×75	85×55	35	不整円形		○		
23	第 50 図	BP－67	130×105	105×92	45	不整円形				
24	第 50 図	BJ－67	160×(140)	130×(不明)	113	不整円形				24土と28土との切合不明。底面にピット・放射状溝
25	第 50 図	BJ・K－72	156×116	46×34	60	不整楕円形				
26	第 51 図	AM－89・90	194×190	180×178	114	不整円形				底面に十字状溝・ピット
27	第 42 図	BP－74	73×(不明)	50×(不明)	14	不明				27＜7
28	第 50 図	BJ－67	153×(不明)	100×(不明)	113	不明				24と切合不明
29	第 51 図	BK－56	(215)×122	不明×105	20	不整楕円形	○	○		
30	第 52 図	BL－56	95×95	90×72	45	不整円形				剥片の出土
31	第 52 図	BM・BN－58	130×130	110×103	45	不整円形	○			
32	第 52 図	BP－60・61	135×130	120×110	23	不整円形				
33	第 52 図	BR－57	135×115	68×55	40	不整円形	○			

34	第 53 図	BR－57・58	260×(260)	245×(245)	30	(円形)	○		○	蓋付き土器出土
35	第 54 図	BP－56	150×150	70×62	30	不整円形				
36	第 54 図	BL・BM－51	140×140	105×100	20	不整円形				
37	第 55 図	BL－51	115×85	40×40	43	不整楕円形				チップ出土　37土>38土
38	第 55 図	BL－51	115×110	100×80	25	不整楕円形				チップ出土　38土<37土
39	第 55 図	BL－51	115×110	95×75	23	不整円形	○			
40	第 55 図	BM・BN－49	200×185	187×150	20	不整円形		○		
41	第 55 図	BK・BL－53	190×166	78×66	44	不整円形	○			チップ出土　41土>42土
42	第 55 図	BK・BL－53	138×52	82×不明	32	不明				チップ出土　42土>41土
43	第 56 図	BH－49	180×174	180×168	143	円形			○	底面に十字状溝　43土>44土
44	第 56 図	BH－49	140×不明	98×不明	60	不明				44土<43土
45	第 57 図	BI－49	155×126	100×85	50	不整円形				
46	第 57 図	BI－50	90×90	70×65	50	不整円形	○			46土>3H　土器片錘
47	第 57 図	BQ－66	250×205	225×170	53	不整楕円形			○	47土<48土 底面にピット
48	第 57 図	BQ－66	165×(140)	135×不明	23	不整楕円形				48土>47土
49	第 58 図	BF－65・66	150×不明	不　明	25	不明				49土<50土
50	第 58 図	BF－65・66	190×170	145×不明	30	不整円形			○	
51	第 58 図	BH－67・68	150×不明	不　明	28	不明	○		○	フレーク出土 51土>52土
52	第 58 図	BH－67・68	260×不明	185×不明	70	不明	○		○	51土>52土<53土

土坑番号	図版番号	グリッド	規模 cm			平面形	出土遺物		石の有無	備考
			上端	下端	深さ		土器	石器		
53	第 58 図	BH－67・68	260×不明	225×不明	55	不明	○			53土>52土<53土　土器破片多量出土
54	第 60 図	BD－64	125×108	72×60	35	不整円形			○	
55	第 60 図	BE－62	136×118	100×68	35	不整楕円形	○			
56	第 60 図	BF－66	200×110	145×80	35	不整楕円形	○			56土>57土
57	第 60 図	BF－66	250×不明	不明	35	不明	○			56土>57土<58土
58	第 60 図	BF－66	160×140	95×80	30	不整円形	○			58土>59土
59	第 61 図	BC・BD－63	205×165	135×105	115	不整楕円形			○	
60	第 61 図	BE・BF－62	145×125	105×100	30	不整円形				
61	第 61 図	BD－64	180×165	145×140	135	不整円形				底面にピット
62	第 62 図	BK－60	175×90	150×70	30	不整楕円形				
63	第 62 図	BF・BG－51	162×150	88×70	25	不整円形	○			

土坑内出土土器観察表

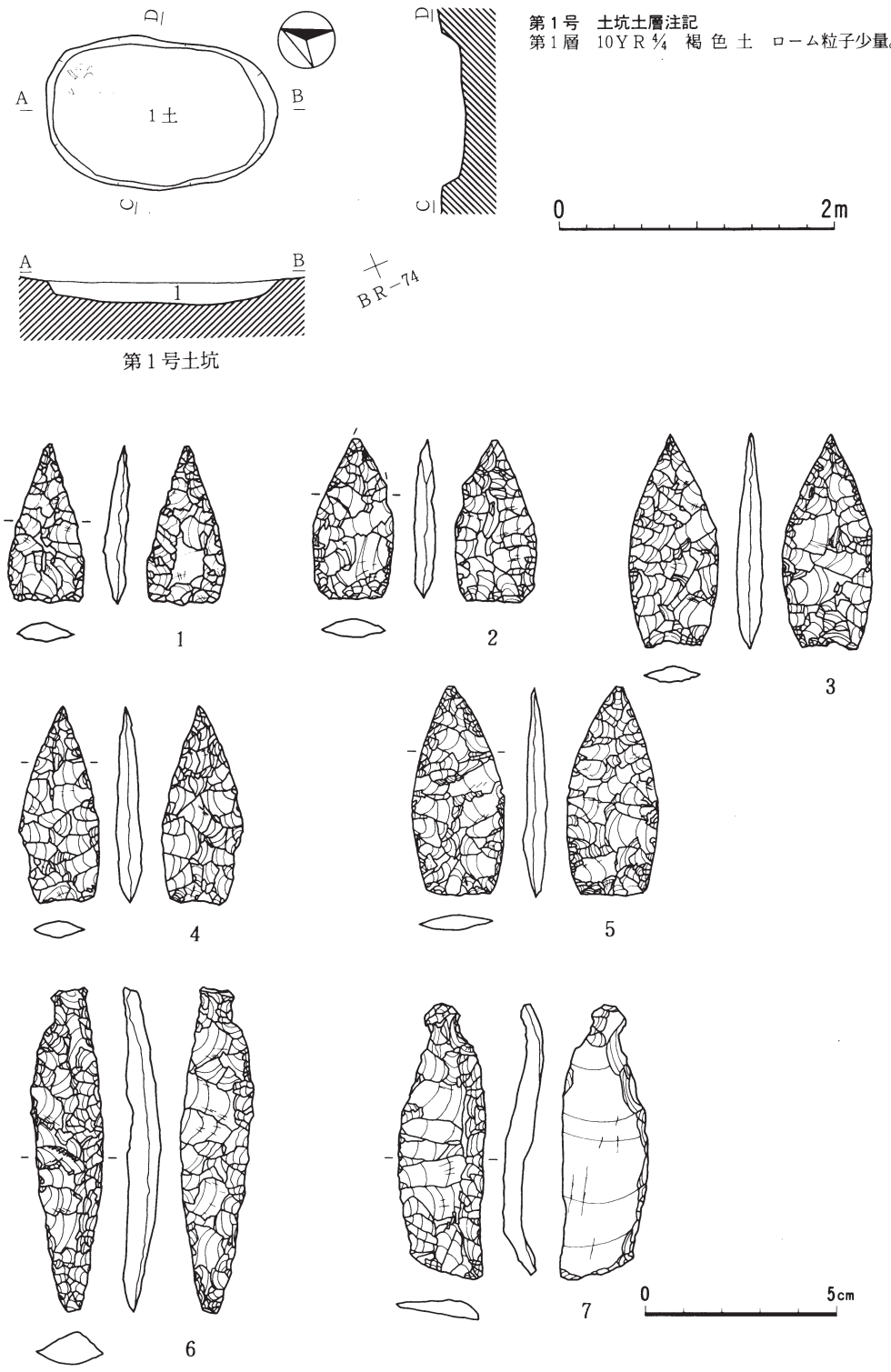
土坑番号	図版番号	層	部位	施文文様	時期
2号	第41図2	フク	略完形	口縁部に3条の横位の撚糸圧痕文(LR・RL)重複縄文	表館XII群
15号	第46図3	フク	胴部	ピッチリ縄文	縄文前期初頭
18号	第47図1	フク	胴部	縄文(LR)	早稲田5類
19号	第48図1	9層	略完形	縄文(LR・RL)	表館XII群
19号	第48図2	フク	口縁部	横位の撚糸圧痕文(LR) 縄文 (LR)	表館XII群
20号	第47図3	フク	胴部	沈線	時期不明
20号	第47図4	フク	胴部	撚糸文	縄文早期～前期
29号	第51図3	1層	口縁部	結節羽状縄文	早稲田6類
29号	第51図4	1層	口縁部	縦に結節羽状縄文	早稲田6類
31号	第52図1	1層	底部	条痕	縄文早期
33号	第52図2	フク	完形	口唇部に双頭突起　縄文(LR)平行・弧状(磨消縄文)	十腰内IV式
34号	第53図1	フク	蓋	楕円状の沈線文	十腰内I式
34号	第53図2	フク	略完形	波状口縁　平行沈線　長楕円状(磨消縄文)	沖附式
34号	第53図3	フク	略完形	折り返し口縁折り返し部(L)胴部・底部(R)	沖附式
34号	第53図4	フク	略完形	折り返し口縁縄文口縁(LR)胴部(RL)平行・長楕円(沈線文)	沖附式
34号	第53図5	フク	略完形	縄文(LR)底面に木葉痕	縄文後期
39号	第55図1	フク	胴部	縄文(RL)	縄文
41号	第55図2	フク	胴部	縄文(LR)	早稲田5類
46号	第57図2	フク	胴部	重複縄文(LR)	早稲田5類
51号	第59図1	フク	胴部	綾杉状縄文	早稲田5類
51号	第59図2	フク	胴部	綾杉状縄文	早稲田5類
51号	第59図3	フク	底部	綾杉状縄文	早稲田5類
51号	第59図4	フク	胴部	綾杉縄文	早稲田5類
52号	第59図5	フク	胴部	縄文(RL)	早稲田5類
52号	第59図6	フク	底部	縄文(LR)	早稲田5類
52号	第59図7	フク	口縁部	縄文	早稲田5類
52号	第59図8	フク	底部	縄文(LR)	早稲田5類
52号	第59図9	フク	口縁部	綾杉状縄文	早稲田5類
53号	第59図10	フク	胴部	縄文(LR)	早稲田5類
53号	第59図11	フク	底部	縄文	早稲田5類
56号	第60図1	フク	底部	縄文(LR)	早稲田5類
56号	第60図2	フク	胴部	綾杉状縄文	早稲田5類
57号	第60図3	フク	胴部	無文	白浜式
58号	第60図4	フク	口縁部	爪状の刺突文	白浜式
58号	第60図5	フク	口縁部	結節羽状縄文	早稲田6類
63号	第62図1	フク	胴部	沈線文・貝殻腹縁文	物見台？

土坑内出土土製品観察表

土坑番号	図版番号	層	分類	最大計測値(mm)				外面施文	備考
				長さ	幅	厚さ	重さ		
18号	第47図2	フク	円盤状土製品	49	44	10	35	縄文	早稲田5類
46号	第57図1	フク	土器片錘	6.7	(3.5)	0.9	(27.5)	結節羽状縄文	破損　早稲田6類

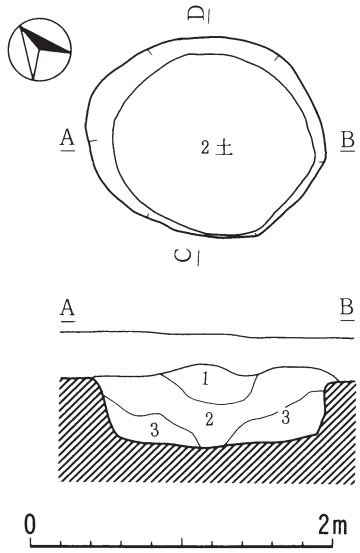
土坑内出土石器観察表

土坑番号	図版番号	層	分類	最大計測値 長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質分類	備考
1号	第40図1	1層	石鏃	42	19.5	6.5	3.6	珪頁	平基無茎鏃
1号	第40図2	1層	石鏃	(43)	21	5	4.7	珪頁	平基無茎鏃
1号	第40図3	1層	石鏃	5.65	23	6.5	8.0	珪頁	平基無茎鏃
1号	第40図4	1層	石鏃	52	21	7	5.4	珪頁	平基無茎鏃
1号	第40図5	1層	石鏃	5.5	24	6	7.6	珪頁	
1号	第40図6	1層	石匙	86	18	8	11.3	珪頁	縦型
1号	第40図7	1層	石匙	72.5	22.5	10	9.1	珪頁	縦型
2号	第41図1	フク	石匙	46	18.5	18.5	4.5	珪頁	縦型
6号	第42図1	1層	石匙	109	29	9	19.3	珪頁	縦型
6号	第42図2	1層	石鏃	18	11.5	2.5	0.4	珪頁	平基無茎鏃
6号	第42図3	1層	石箆	70	33	13	28.6	珪頁	
8号	第43図1	フク	敲磨器	342	113	52	2740	安山	台石 スリ＋タタキ
9号	第43図2	2層	敲磨器	117	70	44	540	安山	スリ＋タタキ
14号	第44図1	フク	打製石斧	148	114	34	800	閃緑	
14号	第45図2	フク	石鏃	34	15	9	3.4	珪頁	凸基有茎鏃
14号	第45図3	フク	石鏃	(26)	(20.5)	5	(1.6)	珪頁	平基無茎鏃
14号	第45図4	フク	石匙	(48.0)	23.5	6	(6.3)	珪頁	折損
14号	第45図5	フク	不定形石器	66	49	15	44.8	珪頁	
14号	第45図6	フク	不定形製品	31.5	22.5	9	3	珪頁	
14号	第45図7	フク	不定形石器	30.5	28	7	6.6	珪頁	
14号	第45図8	フク	不定形石器	28	22.5	6	5	珪頁	
14号	第45図9	フク	不定形石器	33	27	8.5	8.8	珪頁	
15号	第46図1	フク	不定形石器	53	36.5	8	(14.3)	チャ	
15号	第46図2	フク	不定形石器	33.5	23	9	7	玉珪	
16号	第46図4	1層	磨製石斧	89	53	16	104	輝凝	
19号	第48図3	9層	敲磨器	155	101	51	840	安山	スリ
19号	第49図4	9層	敲磨器	148	69	59	880	安山	スリ＋タタキ
19号	第49図5	9層	台石	326	83	38	1400	安山	
19号	第49図6	フク	石鏃	39	9	4	0.9	珪頁	平基無茎鏃
19号	第49図7	フク	石鏃	31	11	7	11	珪頁	先端折損 尖基鏃
19号	第49図8	フク	不定形石器	42	18	4	2.7	珪頁	
19号	第49図9	9層	不定形石器	56	31.5	11	20.3	珪頁	
20号	第47図5	フク	敲磨器	112	80	40	530	安山	スリ＋タタキ
22号	第50図1	底面	敲磨器	145	80	57	940	凝灰	スリ
29号	第51図1	フク	敲磨器	58	97	46	350	凝灰	凹石
29号	第51図2	1層	打製石斧	68	43	24	110	閃緑	
30号	第52図3	1層	不定形石器	35	16	8	3	赤碧玉	
40号	第55図3	1層	不定形石器	41	24	8	8.7	珪頁	

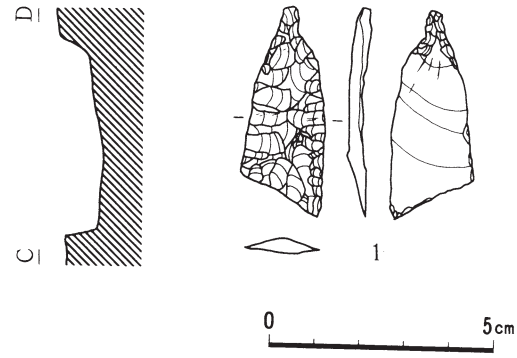


第１号土坑

第40図　第１号土坑

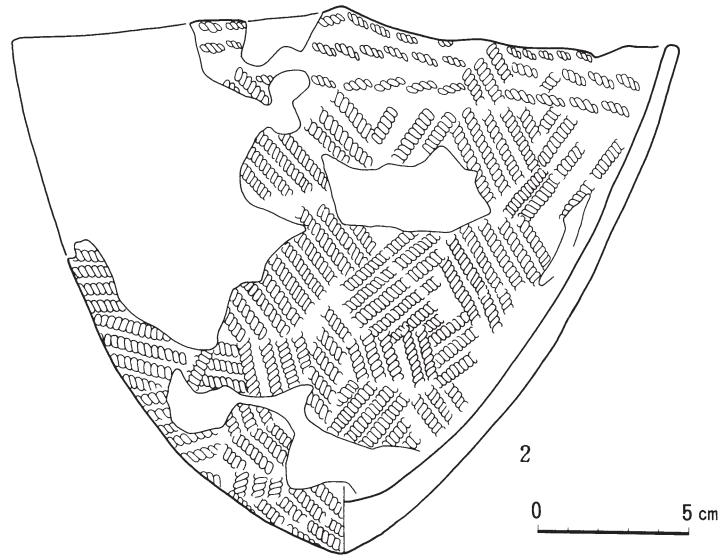


第2号土坑

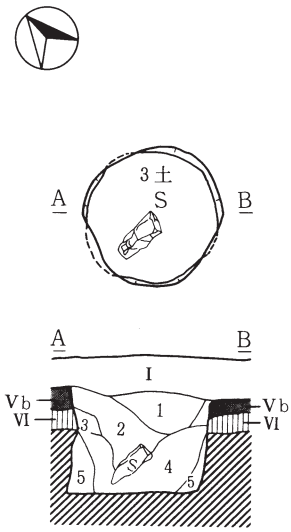


第2号　土坑土層注記

第1層　10YR 2/1　黒色土　炭化物微量、ローム粒子少量。
第2層　10YR 3/2　黒褐色土　ローム粒少量。
第3層　10YR 4/4　褐色土



第2号土坑

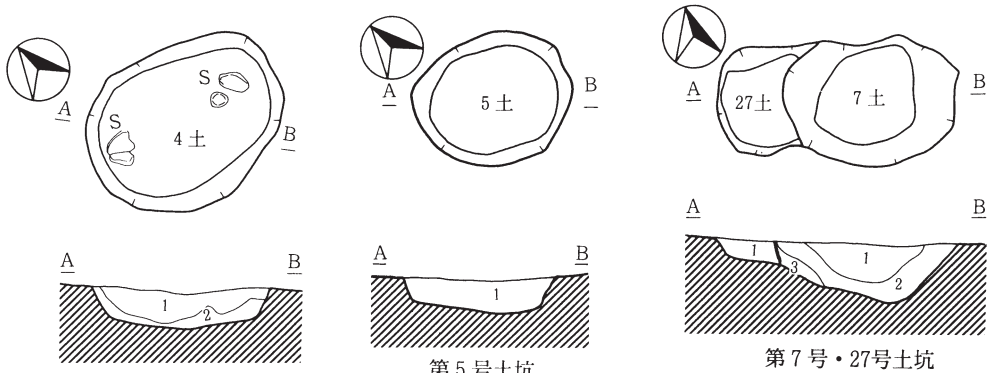


第3号土坑

第3号　土坑土層注記

第1層　10YR 2/2　黒褐色土　炭化物微量、5ミリ大のLB、ローム粒子少量。
第2層　10YR 2/3　黒褐色土　ローム粒少量。
第3層　10YR 4/4　褐色土　ローム粒微量。
第4層　10YR 4/6　褐色土　ローム粒少量。
第5層　10YR 6/8　明黄褐色土

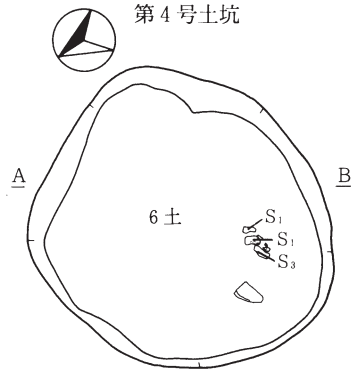
第41図　第2・3号土坑



第4号土坑

第5号土坑

第7号・27号土坑



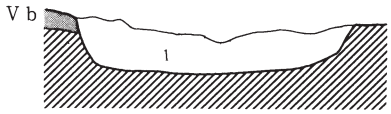
第4号　土坑土層注記
第1層　10YR 4/4　褐色土　1～2ミリ大のローム粒まばらに多量。
第2層　10YR 5/8　黄褐色土

第5号　土坑土層注記
第1層　10YR 5/8　黄褐色土　2～3ミリ大のローム粒子少量。

第6号　土坑土層注記
第1層　10YR 4/6　褐色土　10～20ミリ大のLBをまばらに少量。

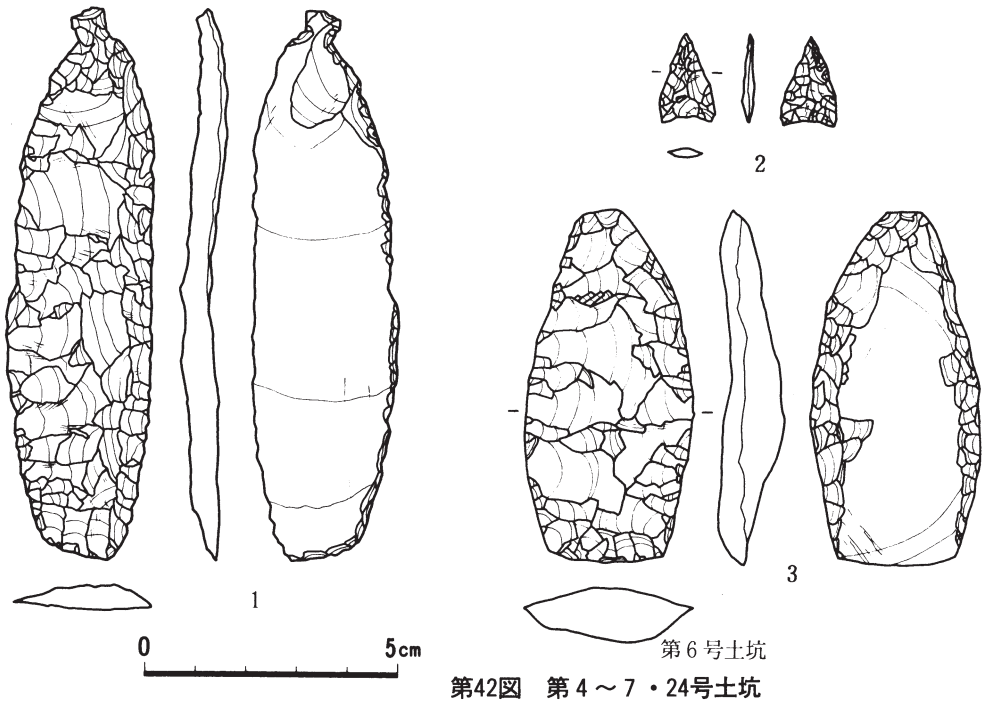
第7号　土坑土層注記
第1層　10YR 3/3　暗褐色土　炭化物微量、10ミリ大のLB少量。
第2層　10YR 4/4　褐色土　炭化物微量、5ミリ大のローム粒少量。
第3層　10YR 6/6　明黄褐色土　5ミリ大のローム粒少量。

第27号　土坑土層注記
第1層　10YR 3/3　暗褐色土　炭化物微量、10ミリ大のLB少量。



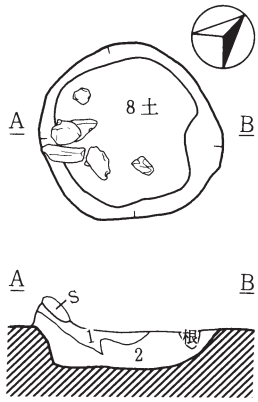
第6号土坑

0　2m

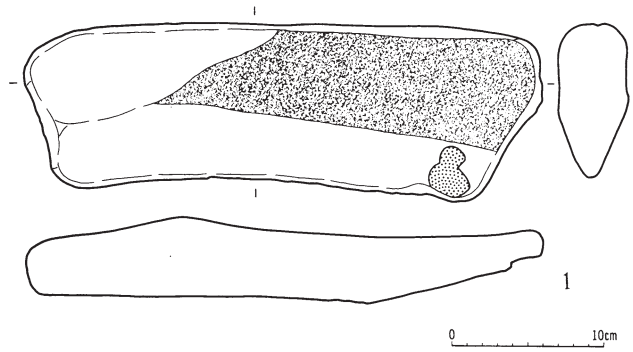


第6号土坑

第42図　第4～7・24号土坑

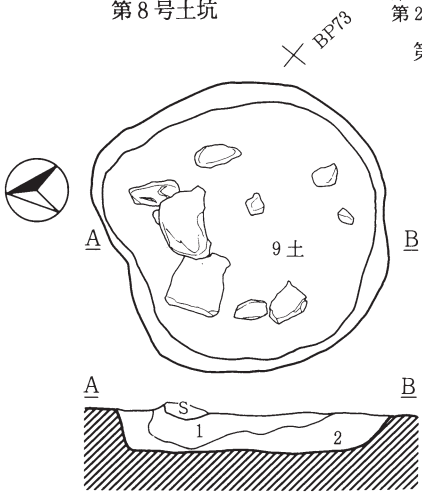


第８号土坑

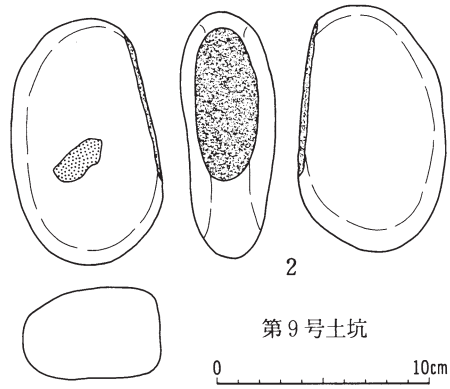


第８号　土坑土層注記
第１層　10ＹＲ ¾　暗褐色土　黒色土多量、ローム粒子少量。
第２層　10ＹＲ ⅚　黄褐色土　黒色土少量、10～20ミリ大のＬＢ少量。

第８号土坑



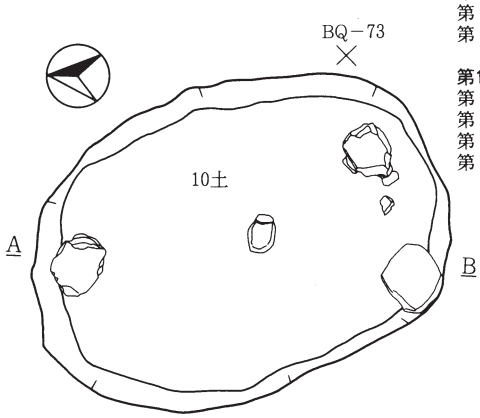
第９号土坑



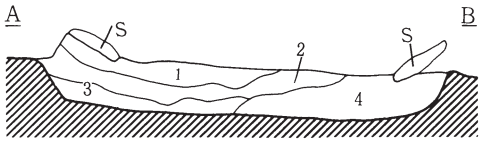
第９号土坑

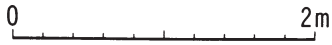
第９号　土坑土層注記
第１層　10ＹＲ ¾　黒褐色土　ＬＢ微量、ローム粒子少量。
第２層　10ＹＲ ⅚　褐 色 土　10～30ミリ大のＬＢ少量、ローム粒微量。

第10号　土坑土層注記
第１層　10ＹＲ ¾　黒褐色土　ローム粒少量。
第２層　10ＹＲ ¾　暗褐色土　黒色土多量、５～10ミリ大のＬＢ・ローム粒子少量。
第３層　10ＹＲ ¾　褐 色 土　２～５ミリ大のＬＢ少量。
第４層　10ＹＲ ⅚　褐 色 土　ＬＢ少量。

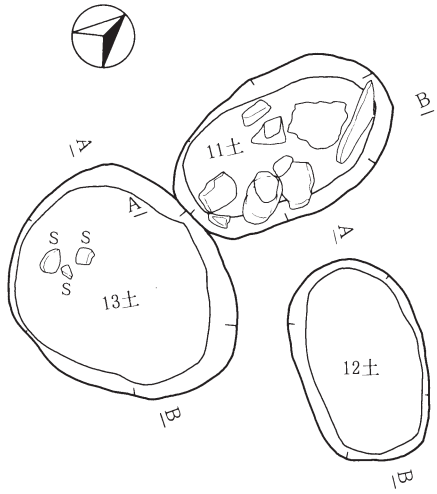


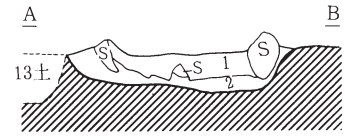
第10号土坑



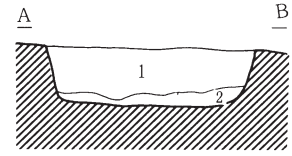


第43図　第８～10号土坑

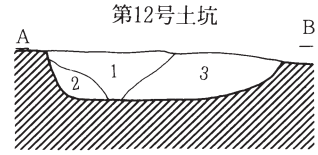




第11号土坑



第12号土坑



第13号土坑

第11号　土坑土層注記

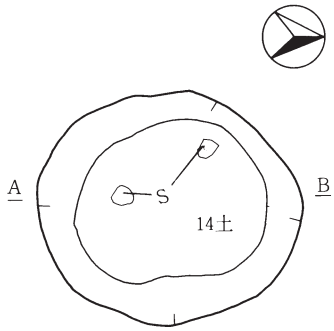
第１層	10ＹＲ 3/4	暗褐色土	ロームとの混土、シルト質。
第２層	10ＹＲ 5/6	黄褐色土	ローム主体の層に黒色土混入。

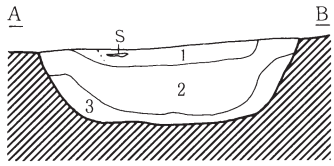
第12号　土坑土層注記

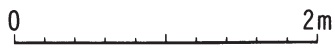
第１層	10ＹＲ 3/3	暗褐色土	黒色土主体の層に１～50ミリ大のＬＢ多量。
第２層	10ＹＲ 5/6	黄褐色土	ローム主体層に黒色土混入、ＬＢ少量。

第13号　土坑土層注記

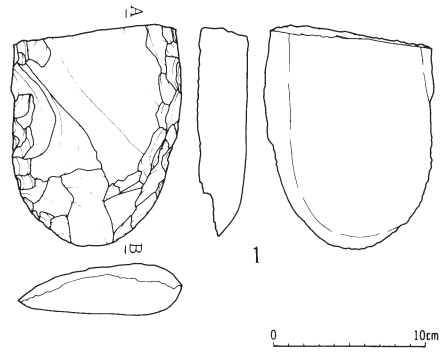
第１層	10ＹＲ 3/2	暗褐色土	黒色土主体の層にローム微量。
第２層	10ＹＲ 4/4	褐色土	ローム主体層に黒色土少量。
第３層	10ＹＲ 5/3	にぶい黄褐色土	ＬＢ、ローム粒微量。







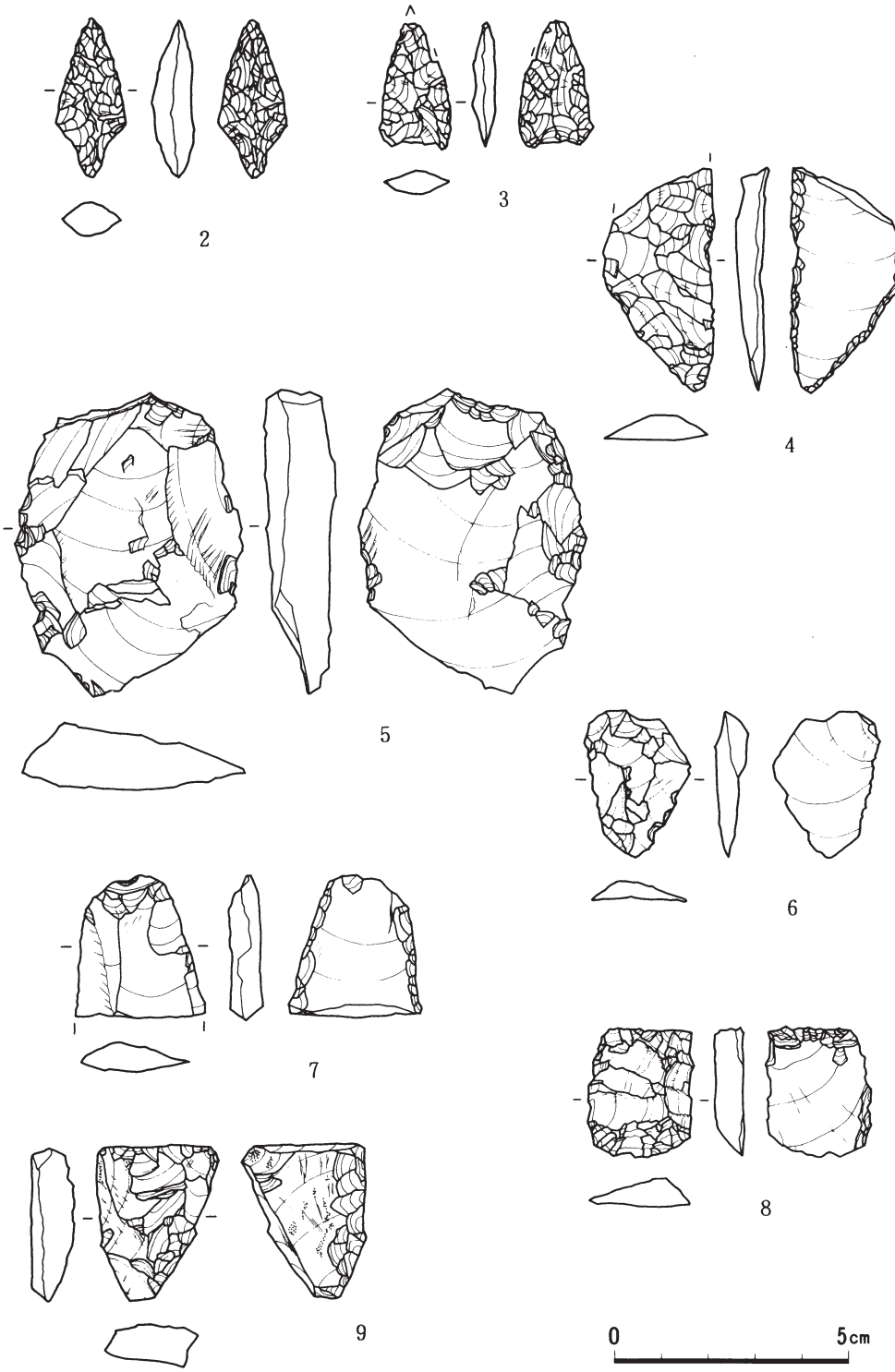
第14号土坑



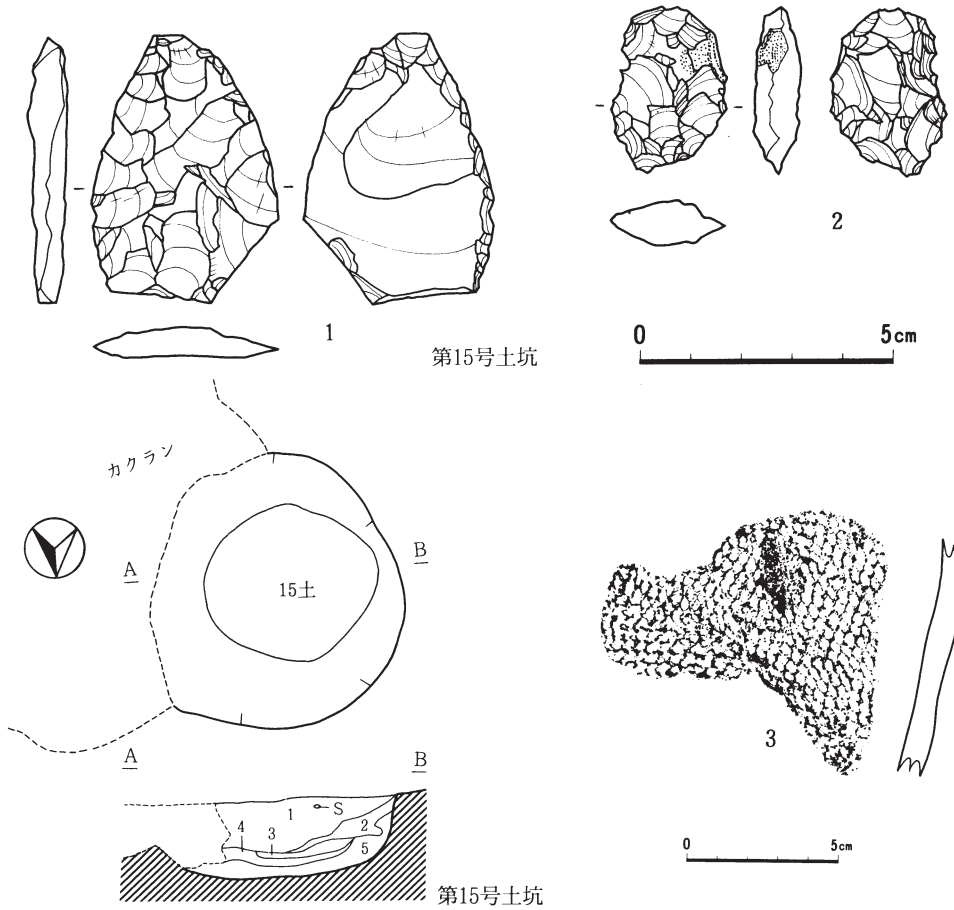
第14号　土坑土層注記

第１層	10ＹＲ 2/3	黒褐色土	シルト質、黒色土層に５～10ミリ大のローム混入。
第２層	10ＹＲ 5/6	黄褐色土	崩れたローム層に腐植土が全体的に混入。（腐植土が強い箇所はやわらかい。）
第３層	10ＹＲ 5/8	黄褐色土	崩れたローム層でやわらかい。

第44図　第11～14号土坑

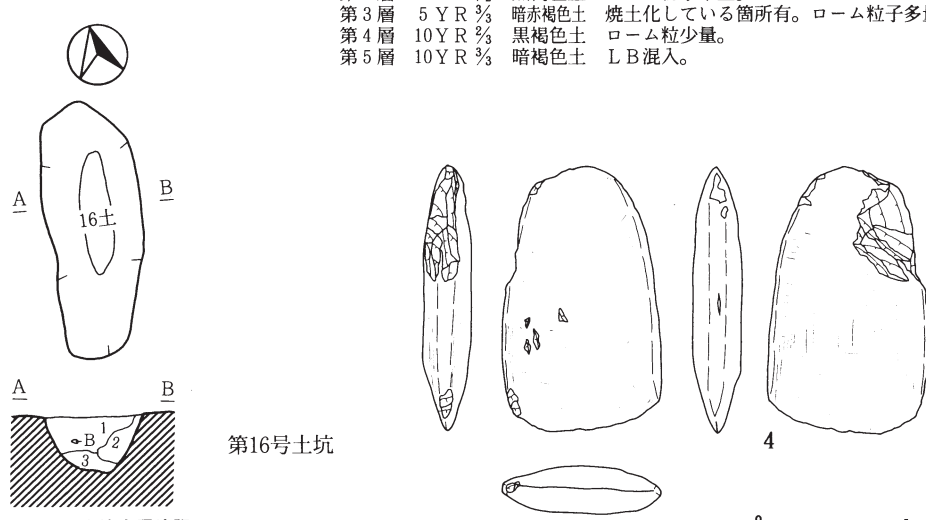


第45図　第14号土坑



第15号　土坑土層注記

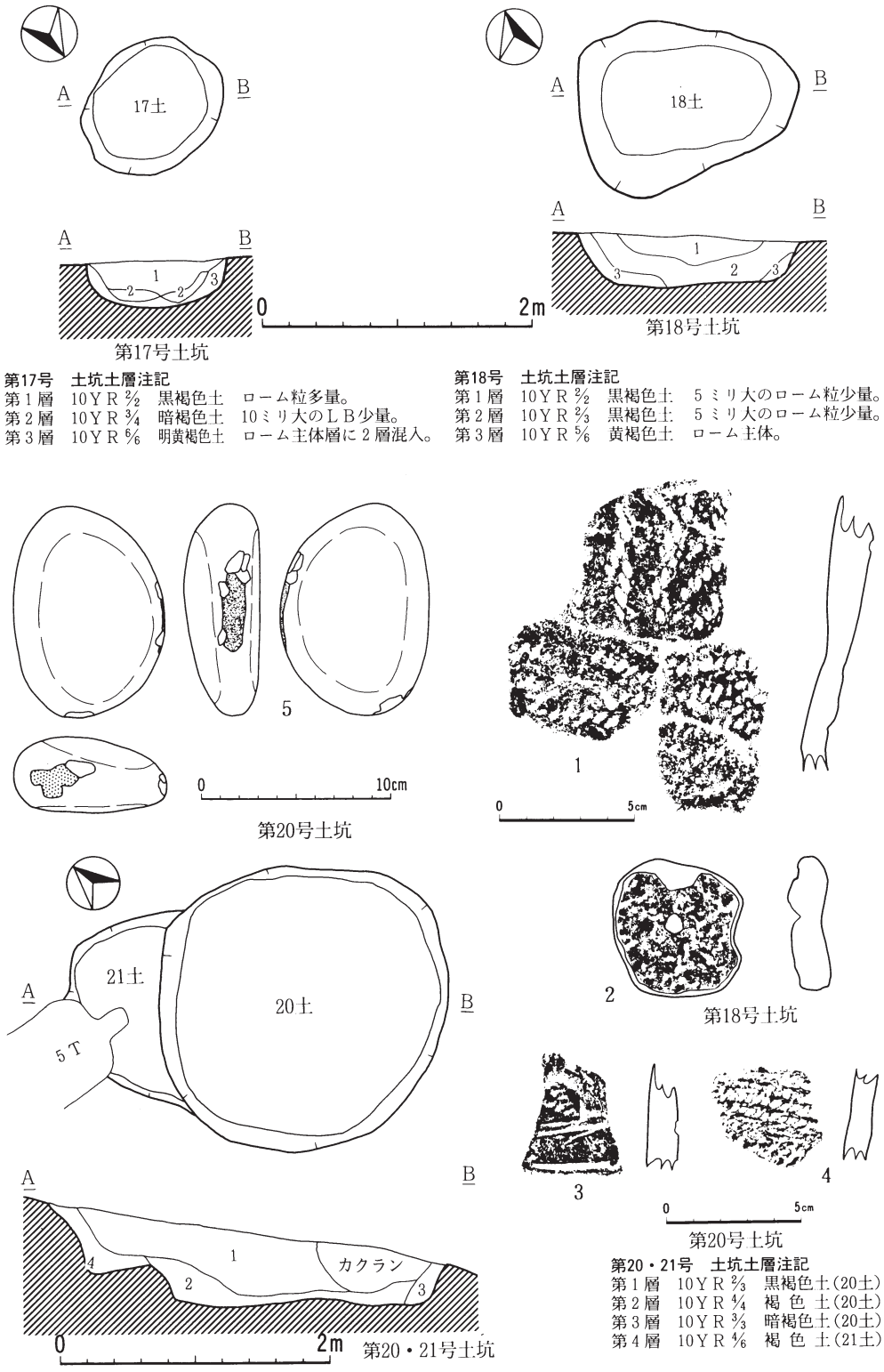
第１層	10ＹＲ ⅔	黒褐色土	５～10ミリのローム粒少量、ローム粒子多量。
第２層	10ＹＲ ⅔	黒褐色土	ローム粒子中量。
第３層	５ＹＲ ⅔	暗赤褐色土	焼土化している箇所有。ローム粒子多量。
第４層	10ＹＲ ⅔	黒褐色土	ローム粒少量。
第５層	10ＹＲ ⅔	暗褐色土	ＬＢ混入。



第16号　土坑土層注記

第１層	10ＹＲ ⅔	黒褐色土	ローム粒子多量。
第２層	10ＹＲ ¾	暗褐色土	ローム粒子多量。
第３層	10ＹＲ ⅔	黒 色 土	ローム粒子少量

第46図　第15～16号土坑



第17号　土坑土層注記

第１層　10ＹＲ 2/2　黒褐色土　ローム粒多量。
第２層　10ＹＲ 3/4　暗褐色土　10ミリ大のＬＢ少量。
第３層　10ＹＲ 6/6　明黄褐色土　ローム主体層に２層混入。

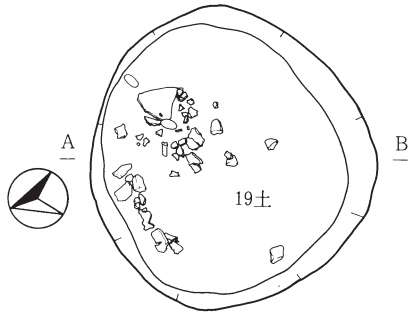
第18号　土坑土層注記

第１層　10ＹＲ 2/2　黒褐色土　５ミリ大のローム粒少量。
第２層　10ＹＲ 2/3　黒褐色土　５ミリ大のローム粒少量。
第３層　10ＹＲ 5/6　黄褐色土　ローム主体。

第20・21号　土坑土層注記

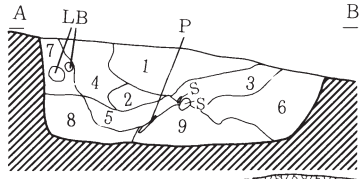
第１層　10ＹＲ 2/3　黒褐色土(20土)
第２層　10ＹＲ 4/4　褐　色　土(20土)
第３層　10ＹＲ 3/3　暗褐色土(20土)
第４層　10ＹＲ 4/6　褐　色　土(21土)

第47図　第17・18・20号土坑

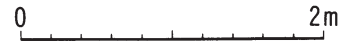


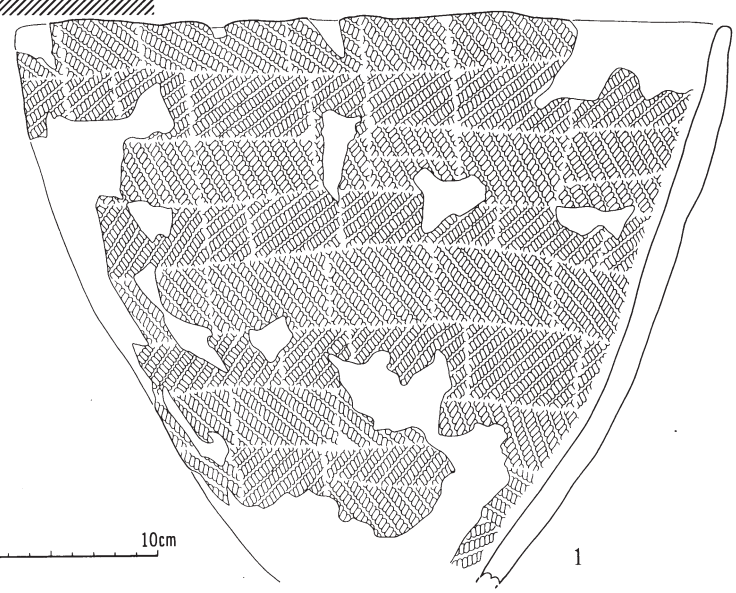
第19号　土坑土層注記

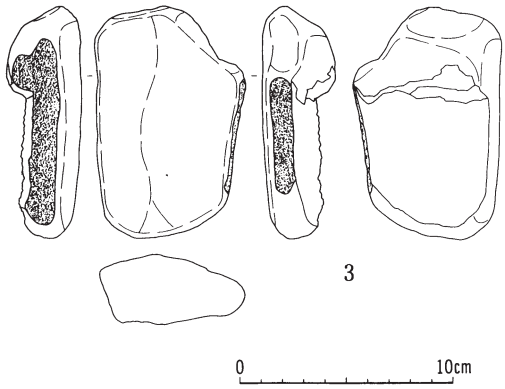
第１層	10ＹＲ 2/3	黒褐色土	ローム粒子少量。
第２層	10ＹＲ 3/4	暗褐色土	黄褐色土混入。
第３層	10ＹＲ 3/3	暗褐色土	ローム粒少量。
第４層	10ＹＲ 2/2	黒褐色土	ローム粒少量。
第５層	10ＹＲ 5/6	黄褐色土	ＬＢ・ローム粒少量。
第６層	10ＹＲ 4/4	褐　色　土	ローム粒少量。
第７層	10ＹＲ 2/3	黒褐色土	暗褐色土混入、ローム粒少量。
第８層	10ＹＲ 3/4	暗褐色土	黄褐色土混入、ローム粒少量。
第９層	10ＹＲ 6/8	明横褐色土	褐色土混入。

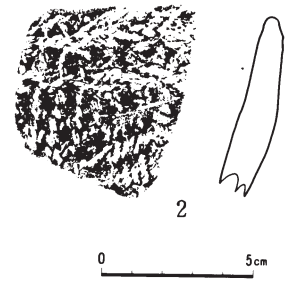


第19号土坑

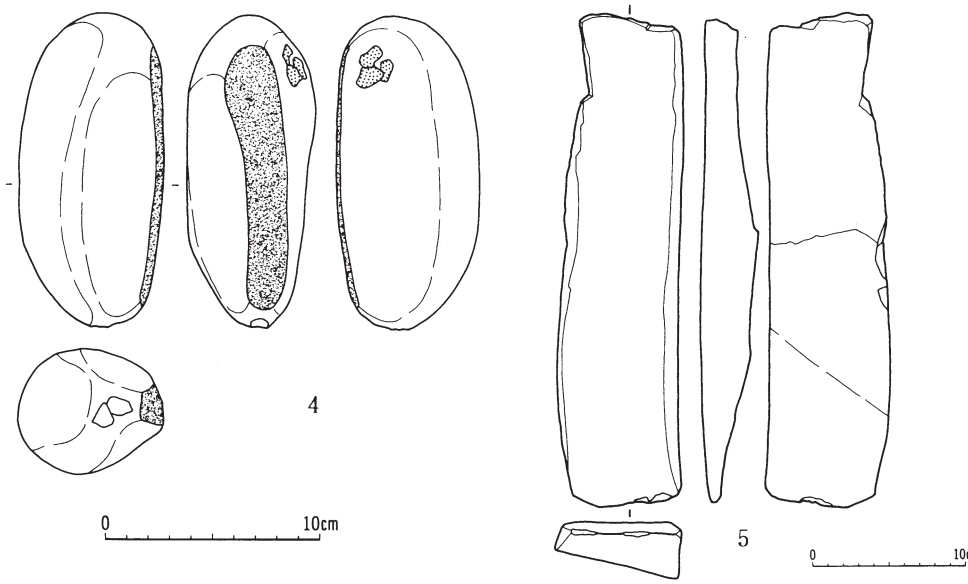




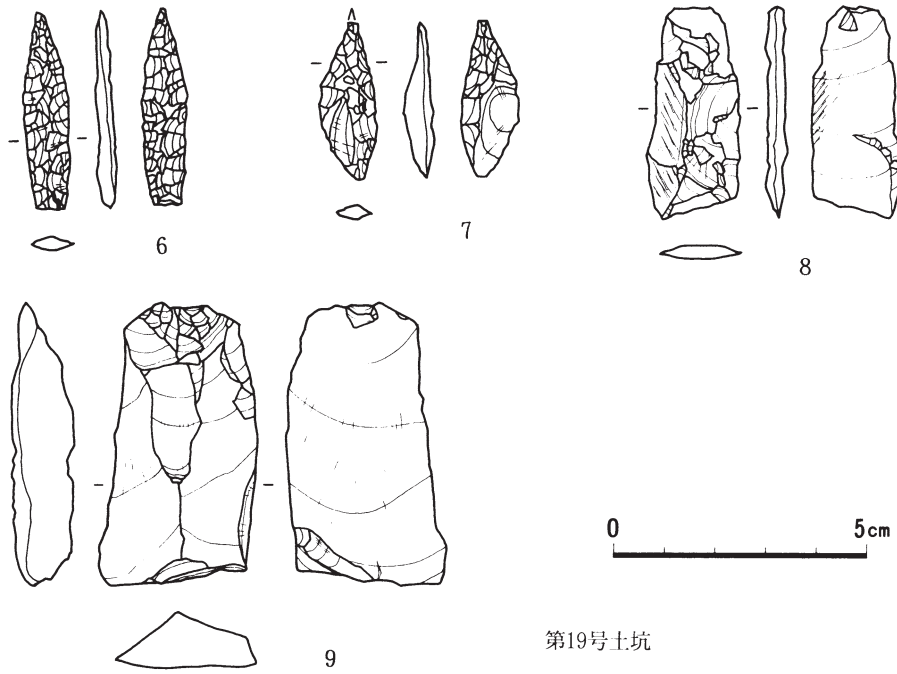




第48図　第19号土坑

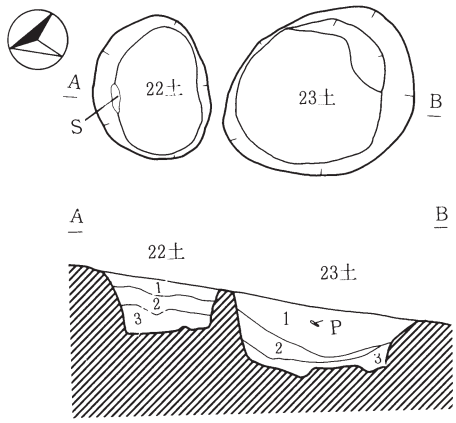


第19号土坑



第19号土坑

第49図　第19号土坑

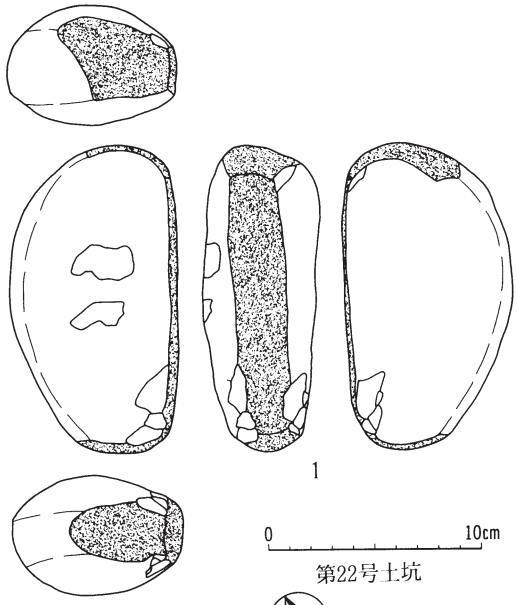


第22号　土坑土層注記

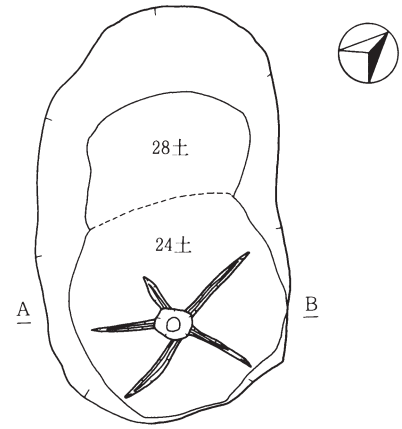
第１層　10ＹＲ 2/3　黒褐色土
第２層　10ＹＲ 3/2　黒褐色土
第３層　10ＹＲ 3/3　暗褐色土　褐色土多量。

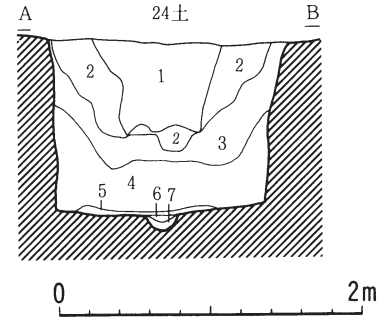
第23号　土坑土層注記

第１層　10ＹＲ 2/3　黒褐色土　暗褐色土少量。
第２層　10ＹＲ 3/3　暗褐色土　褐色土多量。
第３層　10ＹＲ 4/6　褐 色 土

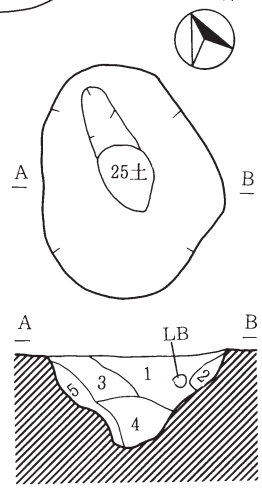


第22号土坑





第24号土坑



第25号土坑

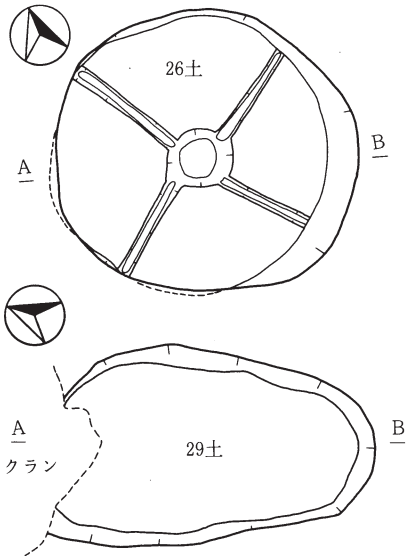
第24号　土坑土層注記

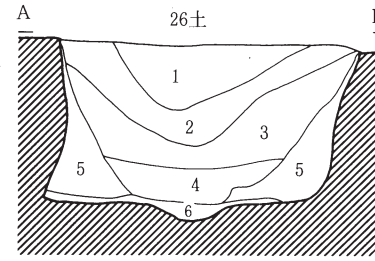
第１層　10ＹＲ 2/3　黒褐色土　１ミリ大のローム粒少量。
第２層　10ＹＲ 4/6　褐 色 土　ローム粒多量。
第３層　10ＹＲ 6/8　明黄褐色土　10ＹＲ 2/3黒褐色土混入。
第４層　10ＹＲ 7/8　黄橙色土
第５層　10ＹＲ 2/2　黒褐色土　４層（10ＹＲ 7/8）混入。
第６層　10ＹＲ 6/8　明黄褐色土
第７層　10ＹＲ 4/4　褐 色 土　６層（10ＹＲ 6/8）混入。

第25号　土坑土層注記

第１層　10ＹＲ 2/2　炭化物微量、ローム粒子少量。
第２層　10ＹＲ 3/3　５～10ミリのＬＢ多量。
第３層　10ＹＲ 3/3　黒色土とロームの混土。炭化物微量。
第４層　10ＹＲ 2/3　３ミリ大のローム粒少量。
第５層　10ＹＲ 5/6　ローム主体層に黒色土混入。

第50図　第22～25・28号土坑

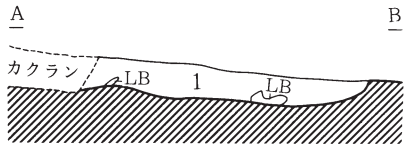




第26号土坑

第26号　土坑土層注記

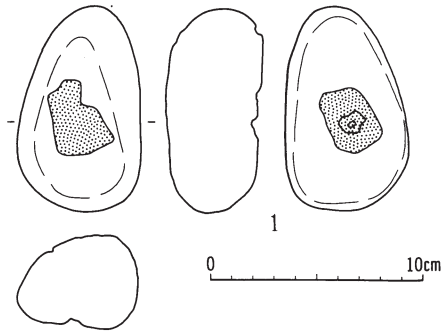
第１層	10ＹＲ 1/1	黒 色 土	ローム粒子微量。
第２層	10ＹＲ 2/3	黒褐色土	１層を主体に３層との混土
第３層	10ＹＲ 4/6	褐 色 土	黒色土がしみ状に混入。
第４層	10ＹＲ 4/4	褐 色 土	砂質、３ミリ大のローム粒少量。
第５層	10ＹＲ 5/6	黄褐色土	褐色土混入。
第６層	10ＹＲ 3/3	暗褐色土	炭化物微量。ローム粒子少量。

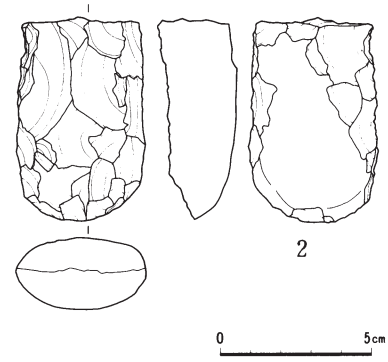


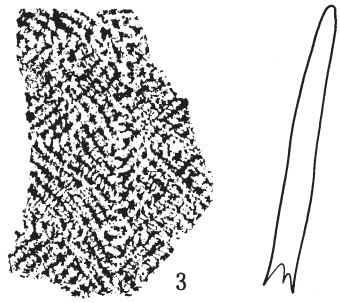
第29号土坑

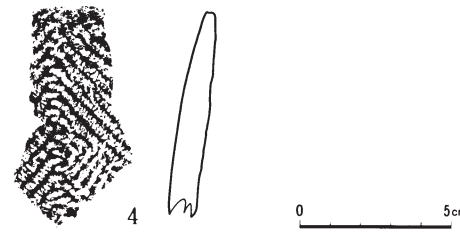
第29号　土坑土層注記

第１層　10ＹＲ 3/4　暗褐色土　ローム粒子微量。



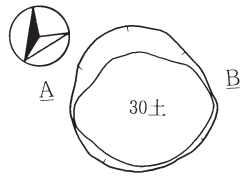


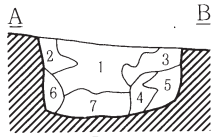




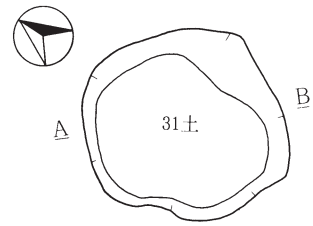
第29号土坑

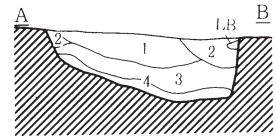
第51図　第26・29号土坑



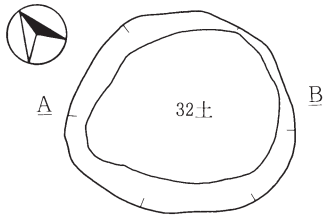


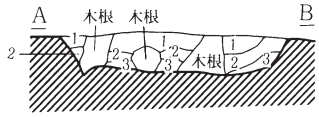
第30号土坑





第31号土坑





第32号土坑

第30号　土坑土層注記

第1層	10YR 3/2	黒褐色土	ローム粒少量。
第2層	10YR 3/4	暗褐色土	褐色土中量。
第3層	10YR 3/3	暗褐色土	ローム粒少量。
第4層	10YR 3/2	黒褐色土	褐色土微量。
第5層	10YR 4/6	褐色土	暗褐色土中量。
第6層	10YR 4/4	褐色土	暗褐色土中量。
第7層	10YR 2/3	黒褐色土	褐色土B、中量。

第31号　土坑土層注記

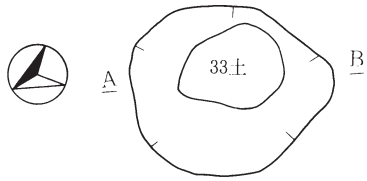
第1層	10YR 3/1	黒褐色土	ローム粒少量。
第2層	10YR 4/2	灰黄褐色土	ローム粒多量。
第3層	10YR 3/1	黒褐色土	ローム粒がブロック状に混入。
第4層	10YR 4/3	にぶい黄褐土色	20ミリ大のLB、ローム粒多量。

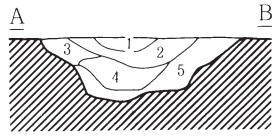
第32号　土坑土層注記

第1層	10YR 2/3	黒褐色土	ローム粒少量。
第2層	10YR 3/3	暗褐色土	ローム粒少量。
第3層	10YR 5/8	黄褐色土	暗褐色土中量。

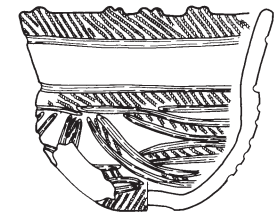
第33号　土坑土層注記

第1層	10YR 3/1	黒褐色土	ローム粒微量。
第2層	10YR 3/2	黒褐色土	ローム粒中量。
第3層	10YR 4/2	灰黄褐色土	炭化物・ローム粒多量。
第4層	10YR 2/2	黒褐色土	炭化物・ローム粒多量。
第5層	10YR 4/3	にぶい黄褐色土	炭化物微量、LB・ローム粒多量。





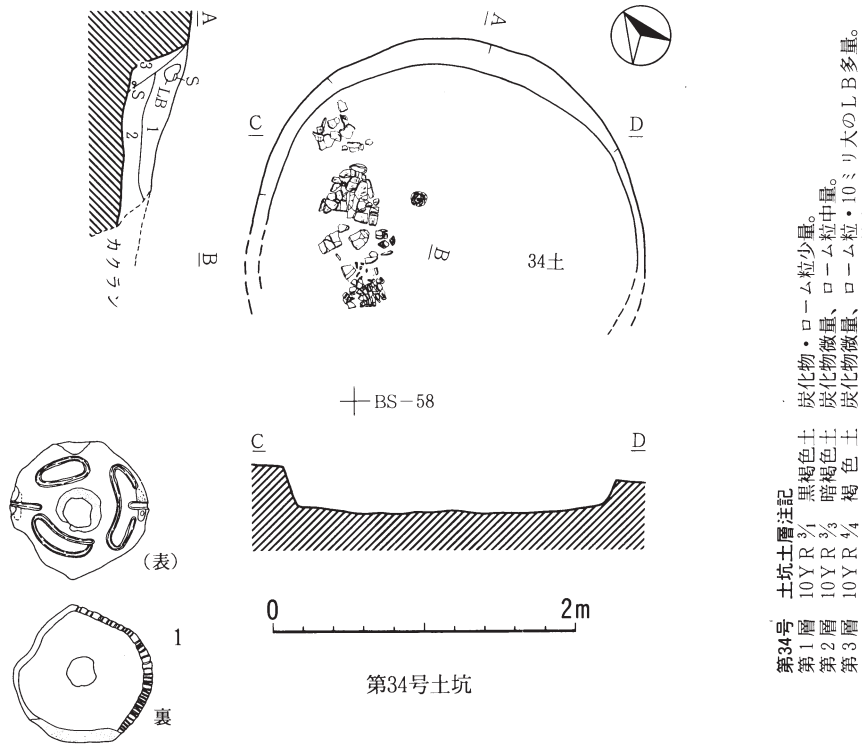
第33号土坑



0　2m

0　5cm

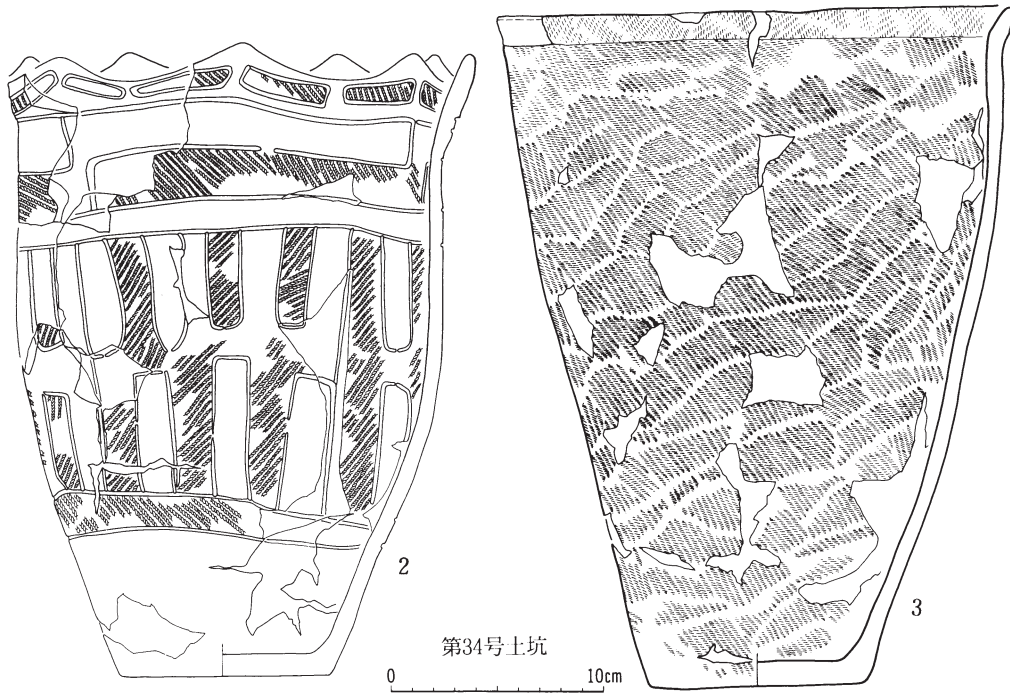
第52図　第30～33号土坑



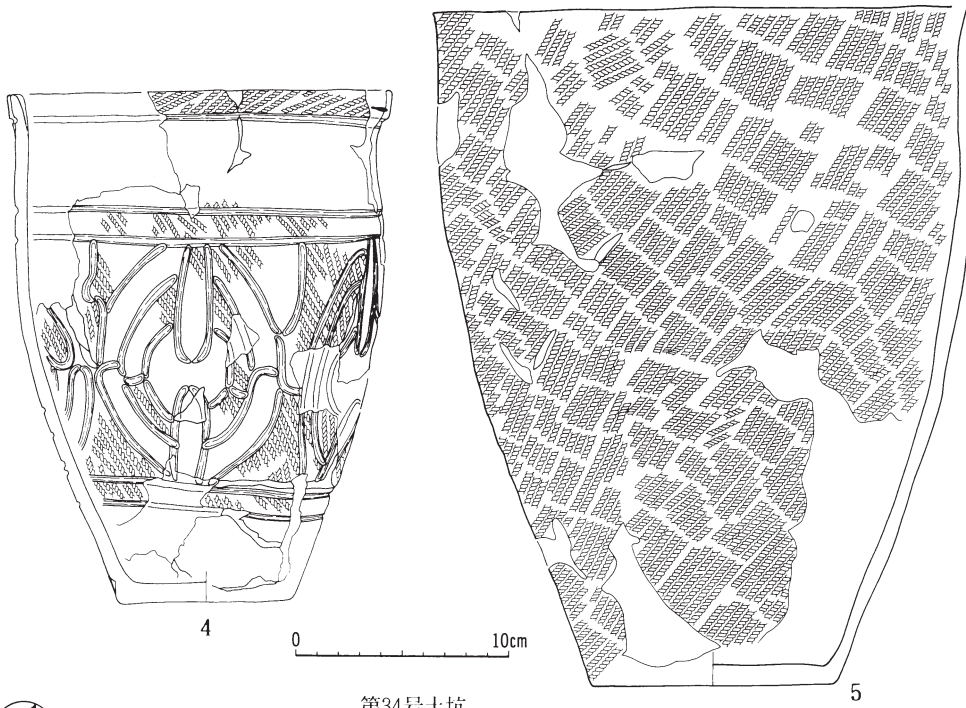
第34号土坑

第34号土坑土層注記

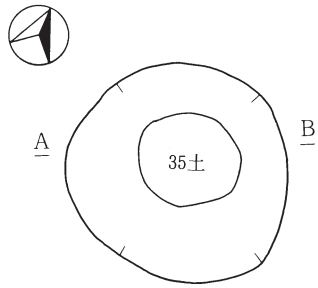
第1層	10YR 3/1 黒褐色土	炭化物・ローム粒少量。
第2層	10YR 3/3 暗褐色土	炭化物微量、ローム粒中量。
第3層	10YR 4/4 褐色土	炭化物微量、ローム粒・10ミリ大のLB多量。

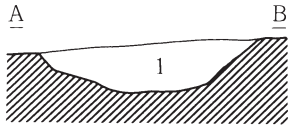


第53図　第34号土坑

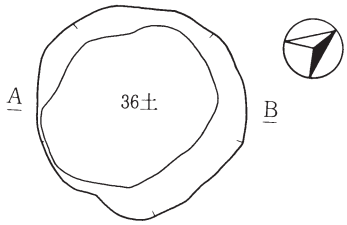


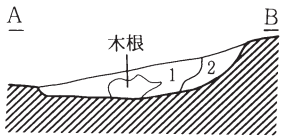
第34号土坑





第35号土坑





第36号土坑

第35号　土坑土層注記

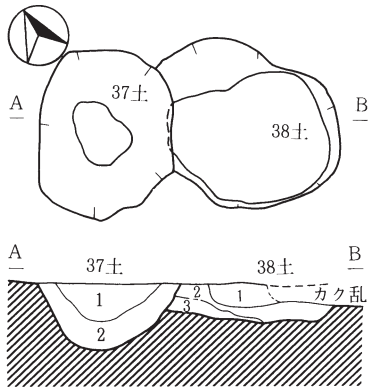
第１層　10ＹＲ ⁴⁄₃　にぶい黄褐色土　炭化物中量、ローム粒多量。

第36号　土坑土層注記

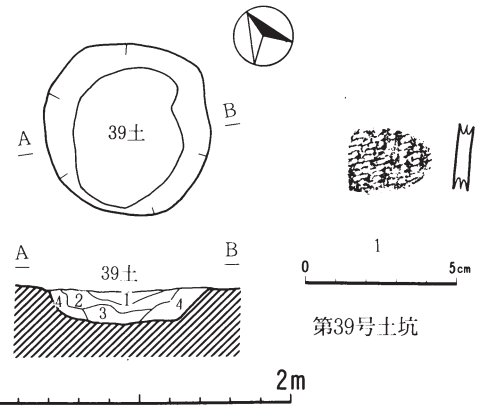
第１層　10ＹＲ ³⁄₃　暗褐色土　黄褐色土混入。

第２層　10ＹＲ ³⁄₄　暗褐色土　混入物なし。

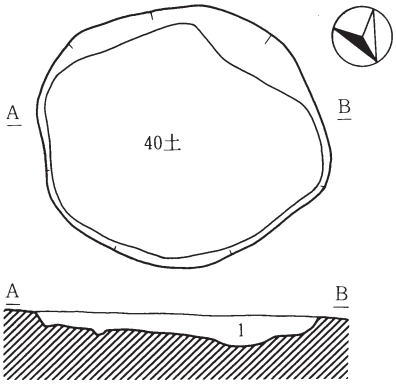
第54図　第34～36号土坑

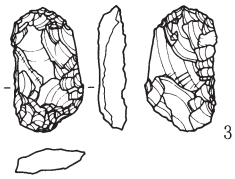


第37号・38号土坑



第39号土坑





第40号土坑

第37号　土坑土層注記

第1層	10YR 2/3	黒褐色土	ローム粒子微量。
第2層	10YR 3/4	暗褐色土	ローム混入。

第38号　土坑土層注記

第1層	10YR 2/3	黒褐色土	ローム粒子微量。
第2層	10YR 3/3	暗褐色土	ローム粒子微量。
第3層	10YR 4/4	褐色土	暗褐色土微量。

第39号　土坑土層注記

第1層	10YR 2/2	黒褐色土	混入物なし。
第2層	10YR 3/3	暗褐色土	黒褐色土少量。
第3層	10YR 3/4	暗褐色土	炭化物少量。
第4層	10YR 3/3	暗褐色土	黄褐色土混入。

第40号　土坑土層注記

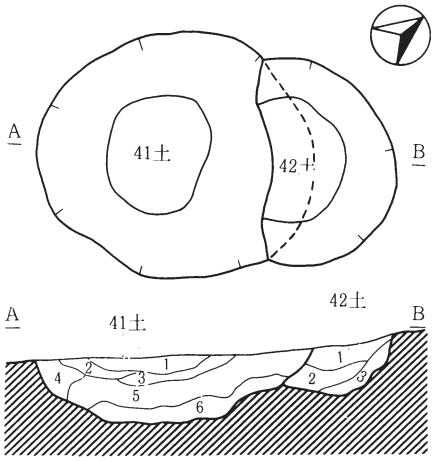
第1層	10YR 3/2	黒褐色土	炭化物微量、ローム粒・LB中量。

第41号　土坑土層注記

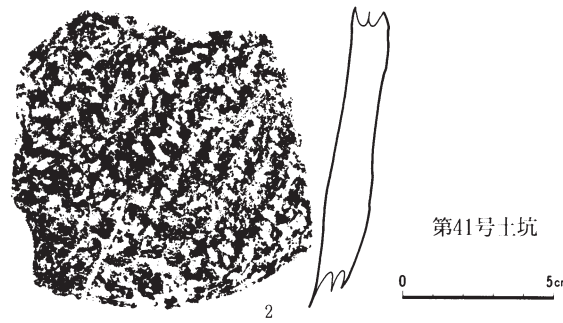
第1層	10YR 3/1	黒褐色土	炭化物、焼土粒・ローム粒微量。
第2層	10YR 4/1	褐灰色土	炭化物微量、ローム粒中量。
第3層	10YR 2/2	黒褐色土	焼土粒、ローム粒少量。
第4層	10YR 4/3	にぶい黄褐色土	ローム粒・LB多量。
第5層	10YR 3/3	暗褐色土	炭化物少量、焼土粒・ローム粒少量。
第6層	10YR 4/4	褐色土	炭化物・焼土粒微量、LB、ローム粒多量。

第42号　土坑土層注記

第1層	10YR 4/2	灰黄褐色土	炭化物中量、ローム粒多量。
第2層	10YR 3/1	黒褐色土	炭化物、ローム粒中量。
第3層	10YR 5/4	にぶい黄褐色土	炭化物少量、ローム粒多量。

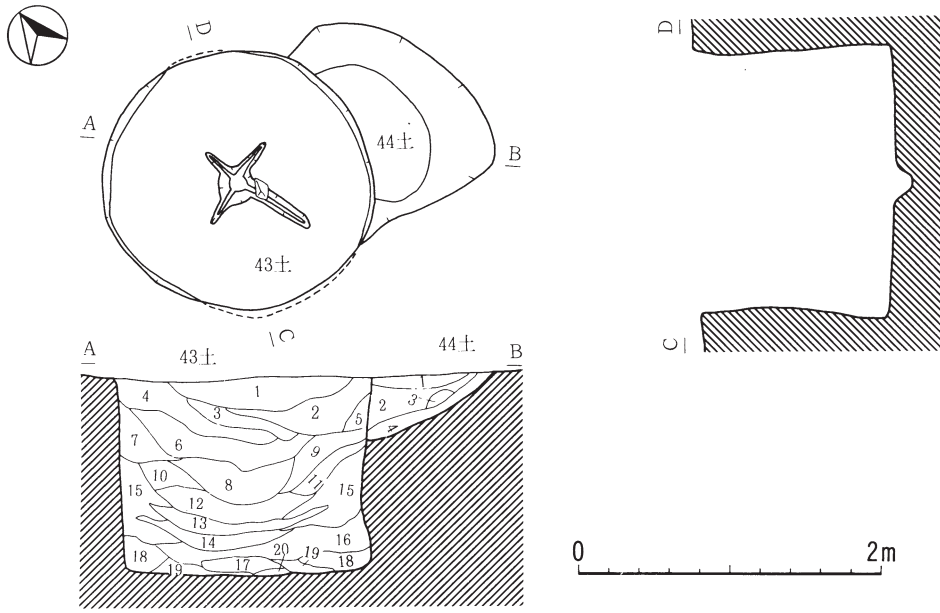


第41号・42号土坑



第41号土坑

第55図　第37～42号土坑



第43号・44号土坑

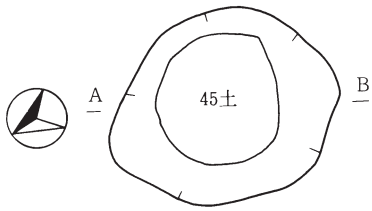
第43号　土坑土層注記

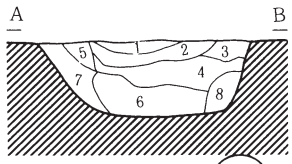
第１層	10ＹＲ 2/1	黒 色 土	１～５ミリ大のローム粒微量。
第２層	10ＹＲ 2/3	黒褐色土	黒色土混入、２～３ミリ大のローム粒多量。
第３層	10ＹＲ 3/3	暗褐色土	ＬＢ多量。
第４層	10ＹＲ 3/3	暗褐色土	黒褐色土混入、５ミリ大のローム粒少量。
第５層	10ＹＲ 3/3	暗褐色土	２～３ミリ大のローム粒微量。
第６層	10ＹＲ 2/3	黒褐色土	炭化物、10ミリ大のローム粒微量。
第７層	10ＹＲ 4/4	褐 色 土	黒色土混入、炭化物、２～３ミリ大のローム粒微量。
第８層	10ＹＲ 3/4	暗褐色土	炭化物微量、５～10ミリ大のローム粒少量。
第９層	10ＹＲ 4/6	褐 色 土	暗褐色土混入、ローム粒微量。
第10層	10ＹＲ 2/2	黒褐色土	炭化物、ローム粒微量。
第11層	10ＹＲ 3/4	褐 色 土	炭化物、ローム粒微量。
第12層	10ＹＲ 2/3	黒褐色土	炭化物微量、ローム粒少量。
第13層	10ＹＲ 4/6	褐 色 土	暗褐色土混入、ローム粒少量。
第14層	10ＹＲ 3/3	暗褐色土	黄褐色土混入、 炭化物微量、ローム粒少量。
第15層	10ＹＲ 5/6	黄褐色土	褐色土まばらに混入。
第16層	10ＹＲ 3/4	暗褐色土	黄褐色土混入、ローム粒多量。
第17層	10ＹＲ 5/6	黄褐色土	暗褐色土微量。
第18層	10ＹＲ 5/6	黄褐色土	混入物なし。
第19層	10ＹＲ 4/6	褐 色 土	暗褐色土混入、 炭化物微量、ローム粒少量。
第20層	10ＹＲ 3/3	暗褐色土	炭化物微量、５ミリ大のローム粒少量。

第44号　土坑土層注記

第１層	10ＹＲ 3/3	暗褐色土	ローム粒微量。
第２層	10ＹＲ 3/4	暗褐色土	ローム粒少量。
第３層	10ＹＲ 2/2	黒褐色土	ローム粒微量。
第４層	10ＹＲ 4/4	黒褐色土混入、ローム粒微量。	

第56図　第43・44号土坑

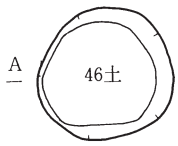


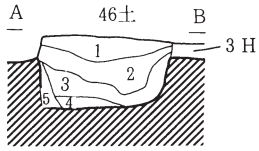


第45号土坑

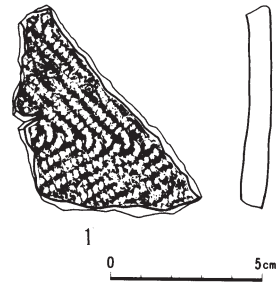
第45号　土坑土層注記

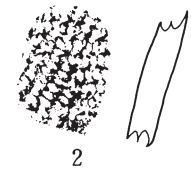
第1層	10YR 2/3	黒褐色土	ローム粒微量。
第2層	10YR 3/3	暗褐色土	10ミリ大のローム粒微量。
第3層	10YR 3/4	暗褐色土	混入物なし。
第4層	10YR 3/4	暗褐色土	LB・ローム粒少量。
第5層	10YR 4/4	褐色土	黄褐色土混入。
第6層	10YR 3/4	暗褐色土	褐色土混入、ローム粒子少量。
第7層	10YR 4/6	褐色土	混入物なし。
第8層	10YR 4/6	褐色土	暗褐色土少量。





第46号土坑

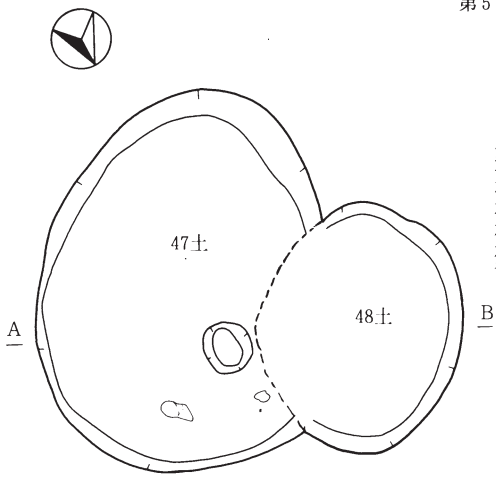




第46号土坑

第46号　土坑土層注記

第1層	10YR 2/2	黒褐色土	ローム粒子少量。
第2層	10YR 2/2	黒褐色土	ローム粒、ローム粒子微量。
第3層	10YR 3/3	暗褐色土	ローム粒少量。
第4層	10YR 5/6	黄褐色土	黒褐色土中量混入。
第5層	10YR 2/2	黒褐色土	黄褐色土中量混入。

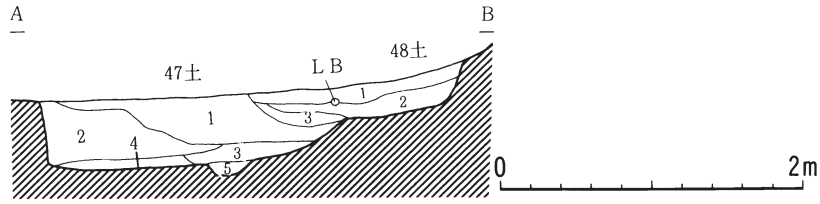


第47号　土坑土層注記

第1層	10YR 3/3	暗褐色土	炭化物微量、ローム粒微量。
第2層	10YR 4/4	褐色土	黄褐色土混入、ローム粒微量。
第3層	10YR 4/6	褐色土	黄褐色土混入。
第4層	10YR 2/1	黒色土	10ミリ大のローム粒少量。
第5層	10YR 2/2	黒褐色土	ローム粒微量。

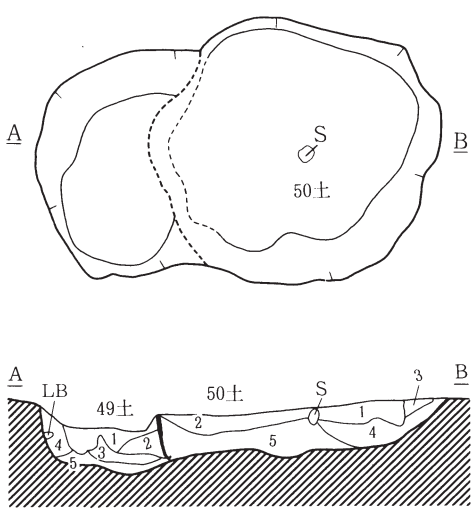
第48号　土坑土層注記

第1層	10YR 3/4	暗褐色土	ローム粒微量。
第2層	10YR 4/4	褐色土	黄褐色土混入。
第3層	10YR 5/6	黄褐色土	褐色土混入。



第47号・48号土坑

第57図　第45～48号土坑



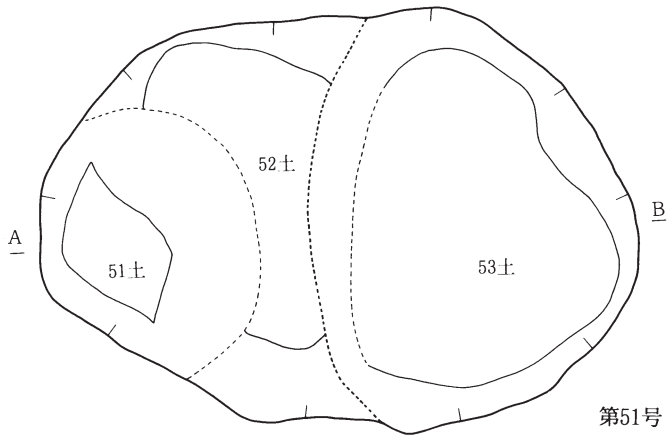
第49号　土坑土層注記

第１層	10ＹＲ 3/3	暗褐色土	ローム粒少量。
第２層	10ＹＲ 3/4	暗褐色土	ローム粒中量。
第３層	10ＹＲ 3/4	暗褐色土	１～２ミリ大のローム粒多量。
第４層	10ＹＲ 4/4	褐　色　土	70ミリ大のＬＢ混入。
第５層	10ＹＲ 4/6	褐　色　土	４層、ローム混入。

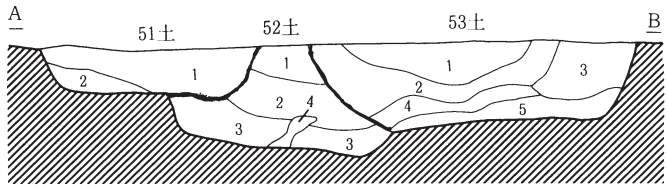
第50号　土坑土層注記

第１層	10ＹＲ 3/3	暗褐色土	ローム粒少量。
第２層	10ＹＲ 4/3	にぶい黄褐色土	ローム粒多量。
第３層	10ＹＲ 3/4	暗褐色土	ローム粒少量。
第４層	10ＹＲ 3/3	暗褐色土	ＬＢ、ローム粒多量。
第５層	10ＹＲ 4/3	にぶい黄褐色土	褐色土とロームの混土。

第49・50号土坑



第51号・52号・53号土坑



第51号　土坑土層注記

第１層	10ＹＲ 3/3	暗褐色土	炭化物・ローム粒微量。
第２層	10ＹＲ 4/2	灰黄褐色土	炭化物微量、ＬＢ、ローム粒中量。

第52号　土坑土層注記

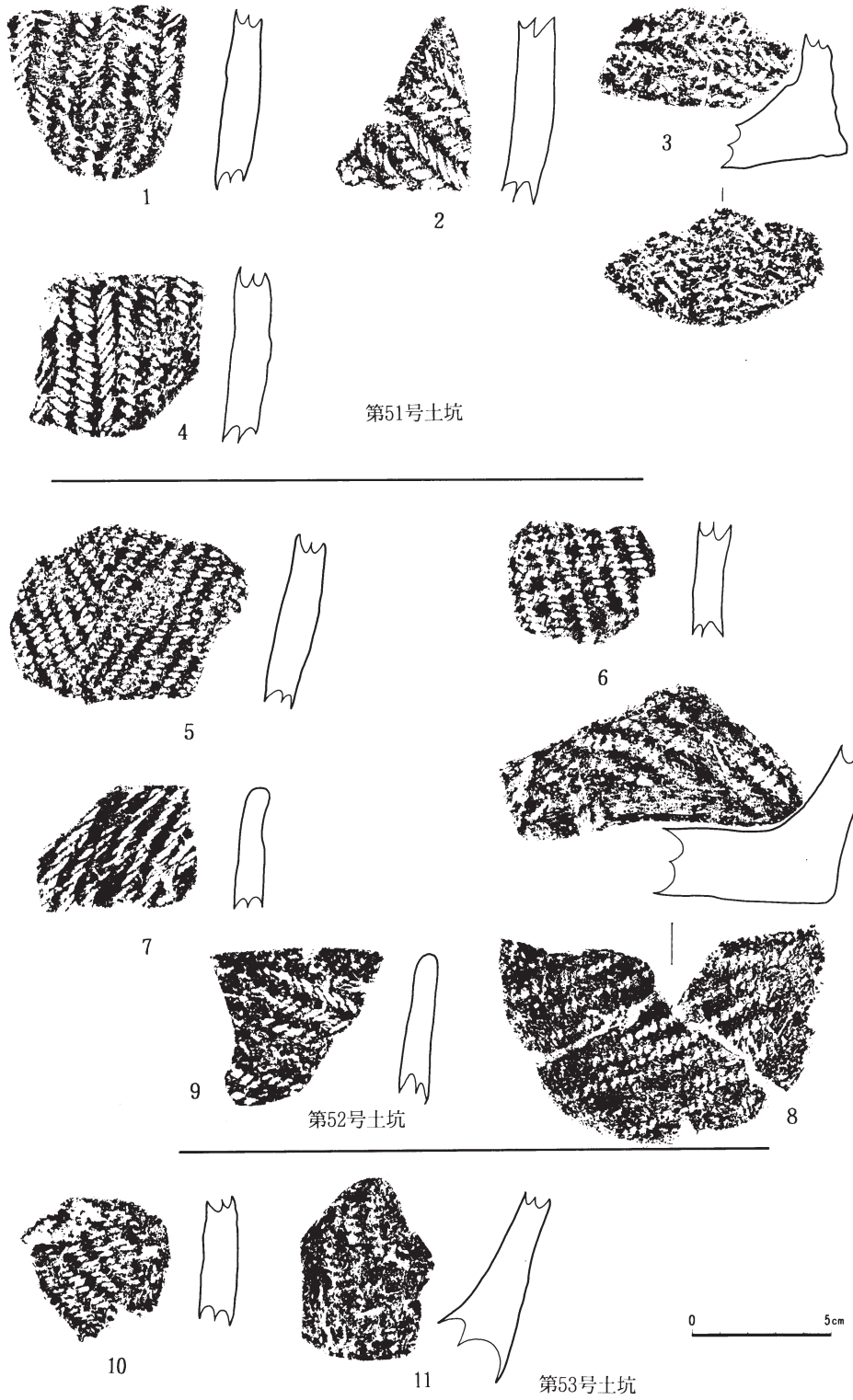
第１層	10ＹＲ 2/2	黒褐色土	炭化物少量、ローム粒少量。
第２層	10ＹＲ 2/3	黒褐色土	炭化物少量、ローム粒中量。
第３層	10ＹＲ 3/2	黒褐色土	ＬＢ、ローム量中量。
第４層	10ＹＲ 4/2	灰黄褐色土	ローム粒多量。

第53号　土坑土層注記

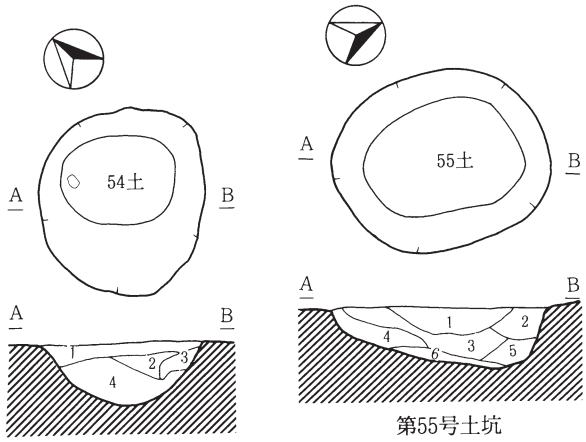
第１層	10ＹＲ 3/3	暗褐色土	炭化物、ローム粒少量。
第２層	10ＹＲ 3/2	黒褐色土	炭化物、ローム粒中量。
第３層	10ＹＲ 3/2	黒褐色土	炭化物、ローム粒中量。
第４層	10ＹＲ 4/2	灰黄褐色土	炭化物少量、ローム粒多量。
第５層	10ＹＲ 4/6	褐　色　土	炭化物少量、ＬＢ・ローム粒多量。

0　2m

第58図　第49～53号土坑

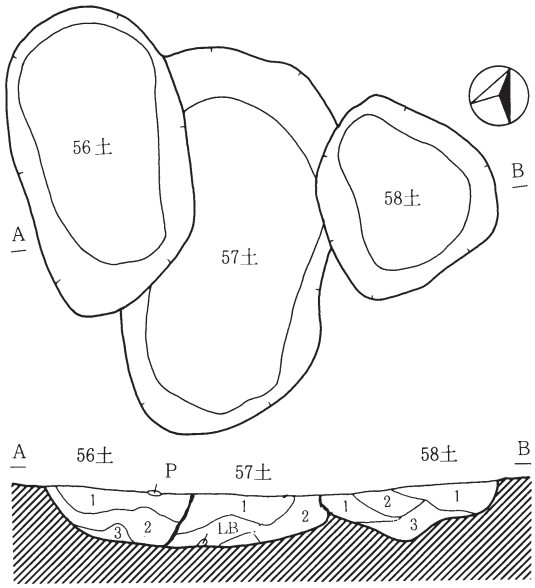


第59図　第51～53号土坑



第54号土坑

第55号土坑



第56号・57号・58号土坑

第54号　土坑土層注記

第1層	10YR 4/3	にぶい黄褐色土	混入物なし。
第2層	10YR 3/2	黒褐色土	10～20ミリ大のローム粒少量。
第3層	10YR 4/3	にぶい黄褐色土	ローム粒多量。
第4層	10YR 3/2	黒褐色土	黒色土混入、ローム粒多量。

第55号　土坑土層注記

第1層	10YR 2/2	黒褐色土	ローム粒子少量。
第2層	10YR 3/3	暗褐色土	褐色土混入、ローム粒子微量。
第3層	10YR 3/3	暗褐色土	ローム粒子中量。
第4層	10YR 3/3	暗褐色土	黄褐色土多量。
第5層	10YR 4/4	褐色土	黄褐色土中量、黒褐色土少量。
第6層	10YR 2/3	黒褐色土	黄褐色土混入。

第56号　土坑土層注記

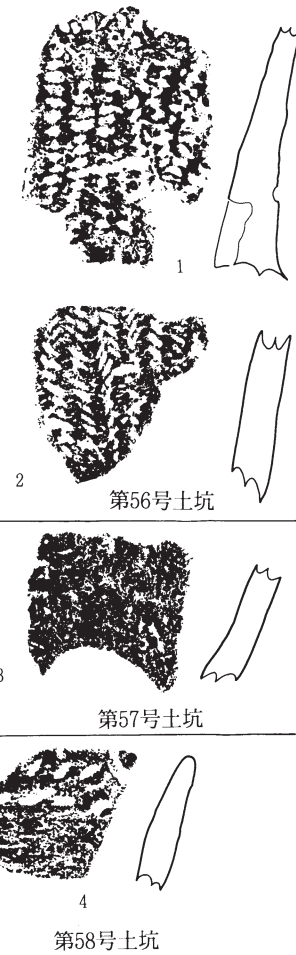
第1層	10YR 3/3	暗褐色土	炭化物、ローム粒少量。
第2層	10YR 4/3	にぶい黄褐色土	炭化物微量、ローム粒中量。
第3層	10YR 4/4	褐色土	炭化物、ローム粒中量。

第57号　土坑土層注記

第1層	10YR 3/4	暗褐色土	炭化物微量、ローム粒少量。
第2層	10YR 4/3	にぶい黄褐色土	炭化物少量、5ミリ大のローム粒。

第58号　土坑土層注記

第1層	10YR 4/3	にぶい黄褐色土	炭化物少量、10ミリ大のLB。
第2層	10YR 3/3	暗褐色土	炭化物、ローム粒中量。
第3層	10YR 4/3	にぶい黄褐色土	炭化物、LB、ローム粒少量。

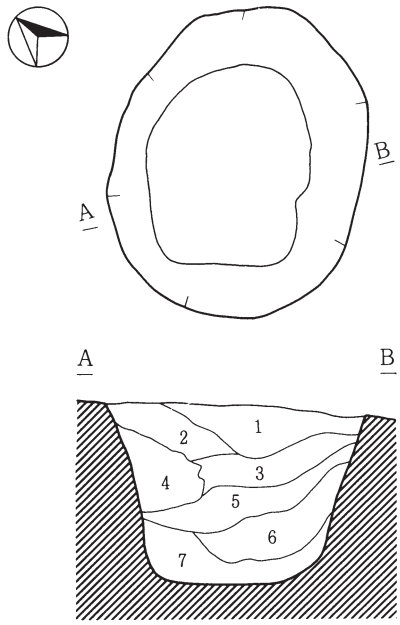


第56号土坑

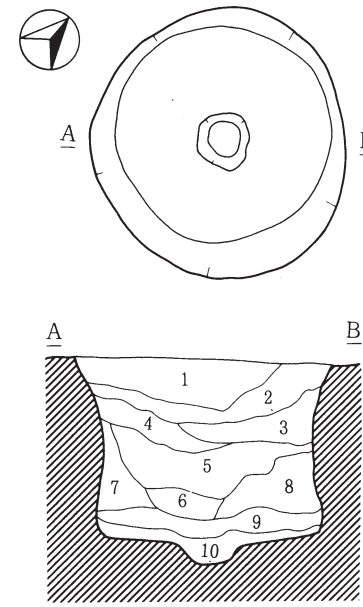
第57号土坑

第58号土坑

第60図　第54～58号土坑



第59号土坑



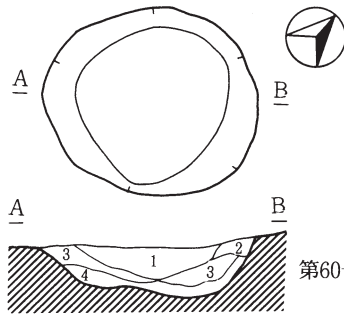
第61号土坑

第59号　土坑土層注記

第１層	10ＹＲ 2/2	黒褐色土	ローム粒子少量。
第２層	10ＹＲ 3/3	暗褐色土	ローム粒子微量。
第３層	10ＹＲ 2/3	黒褐色土	ローム粒微量、ローム粒子少量。
第４層	10ＹＲ 3/4	暗褐色土	10ＹＲ5/6（黄褐色土）・10ＹＲ4/4（褐色土）少量。ローム粒子微量。
第５層	10ＹＲ 2/3	黒褐色土	10ＹＲ4/4中量、ローム粒、ローム粒子微量。
第６層	10ＹＲ 3/4	暗褐色土	10ＹＲ5/6（褐色土）、10ＹＲ3/3中量。ローム粒子微量。
第７層	10ＹＲ 5/6	黄褐色土	10ＹＲ4/6少量。

第61号　土坑土層注記

第１層	10ＹＲ 2/2	黒褐色土	ローム粒子中量。
第２層	10ＹＲ 4/4	褐 色 土	炭化物、ローム粒微量。
第３層	10ＹＲ 3/4	暗褐色土	10ＹＲ5/6（黄褐色土）少量。
第４層	10ＹＲ 3/4	暗褐色土	10ＹＲ5/8（黄褐色土）少量。ローム粒子微量。
第５層	10ＹＲ 3/3	暗褐色土	ローム粒、ローム粒子微量。
第６層	10ＹＲ 3/4	暗褐色土	ローム粒子多量。
第７層	10ＹＲ 5/8	黄褐色土	10ＹＲ2/3（黒褐色土）斑状に少量。
第８層	10ＹＲ 5/6	黄褐色土	
第９層	10ＹＲ 2/3	黒褐色土	
第10層	10ＹＲ 5/6	黄褐色土	



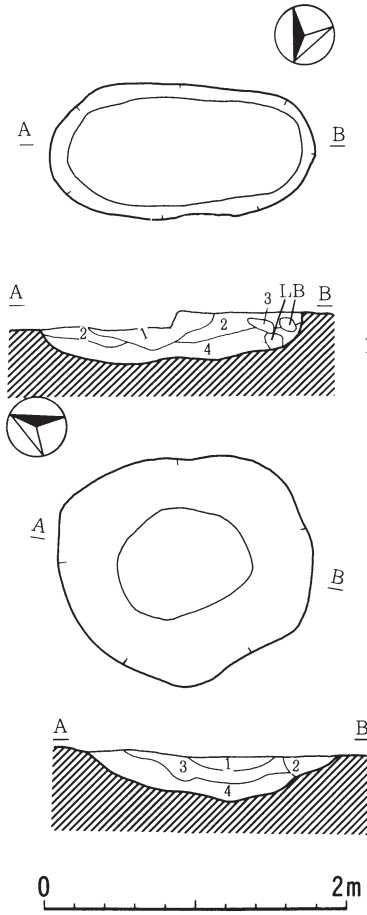
第60号土坑

第60号　土坑土層注記

第１層	10ＹＲ 2/3	黒褐色土	ローム粒微量。
第２層	10ＹＲ 3/3	暗褐色土	ローム粒微量。
第３層	10ＹＲ 2/2	黒褐色土	ローム粒多量。
第４層	10ＹＲ 3/3	暗褐色土	30ミリ大のＬＢ少量、ローム粒多量。

0　2m

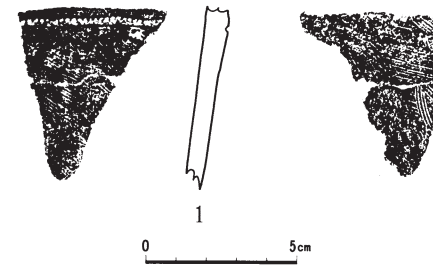
第61図　第59～61号土坑



第62号土坑

第62号　土坑土層注記

第1層	10YR 3/1	黒褐色土	固くしまった土、炭化物混入。
第2層	10YR 3/3	暗褐色土	固くしまった土、炭化物混入。
第3層	2.5YR 5/2	暗灰黄色土	炭化物、ローム粒多量。
第4層	10YR 4/2	灰黄褐色土	固くしまった土、炭化物混入。



第63号土坑

第63号　土坑土層注記

第1層	10YR 2/2	黒褐色土
第2層	10YR 4/4	褐色土
第3層	10YR 2/3	黒褐色土
第4層	10YR 3/3	黒褐色土

第62図　第62・63号土坑

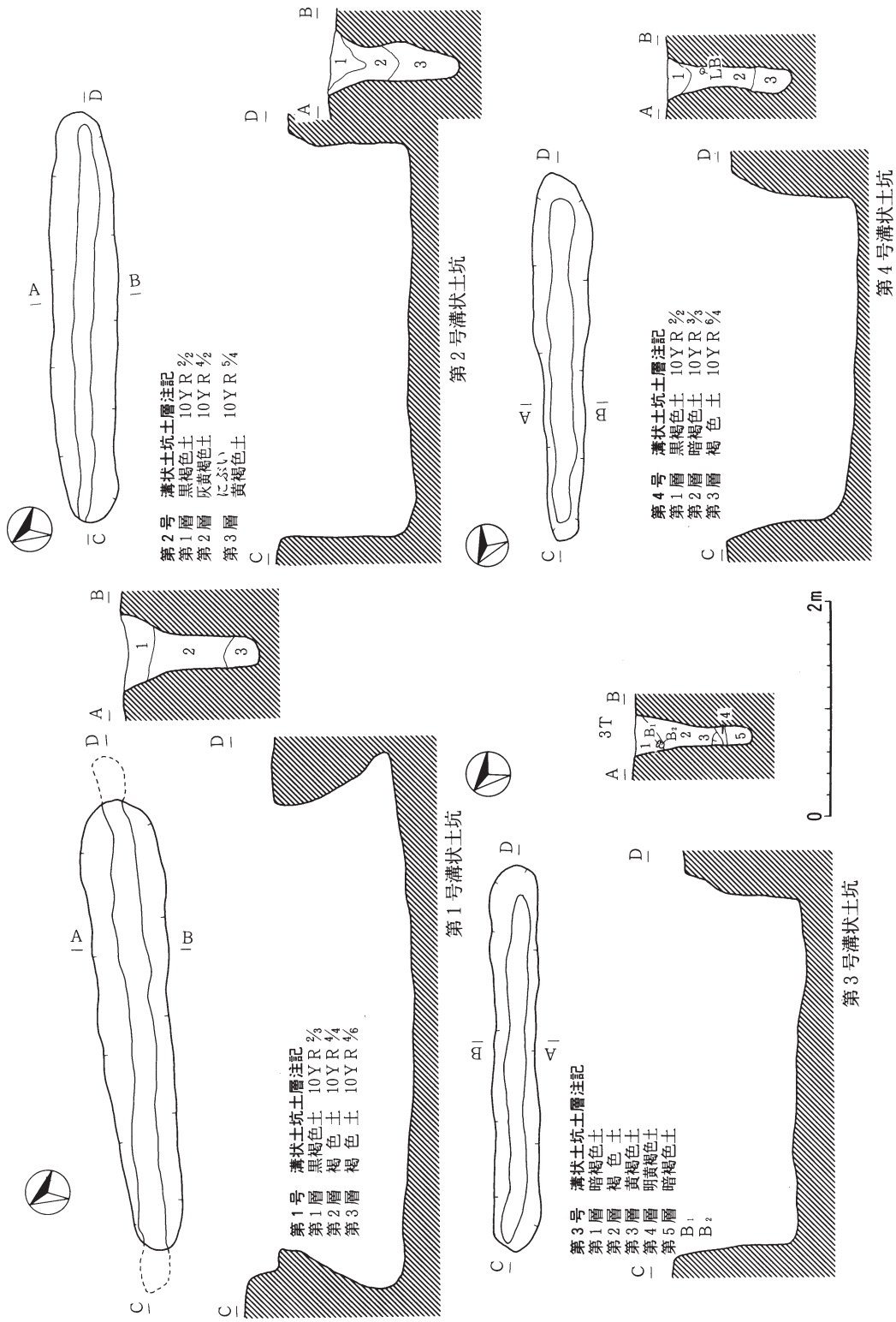
（3）溝状土坑

溝状土坑は、平成４、平成５年の調査で10基検出した。溝状土坑については、溝状土坑観察に一括して記載する。

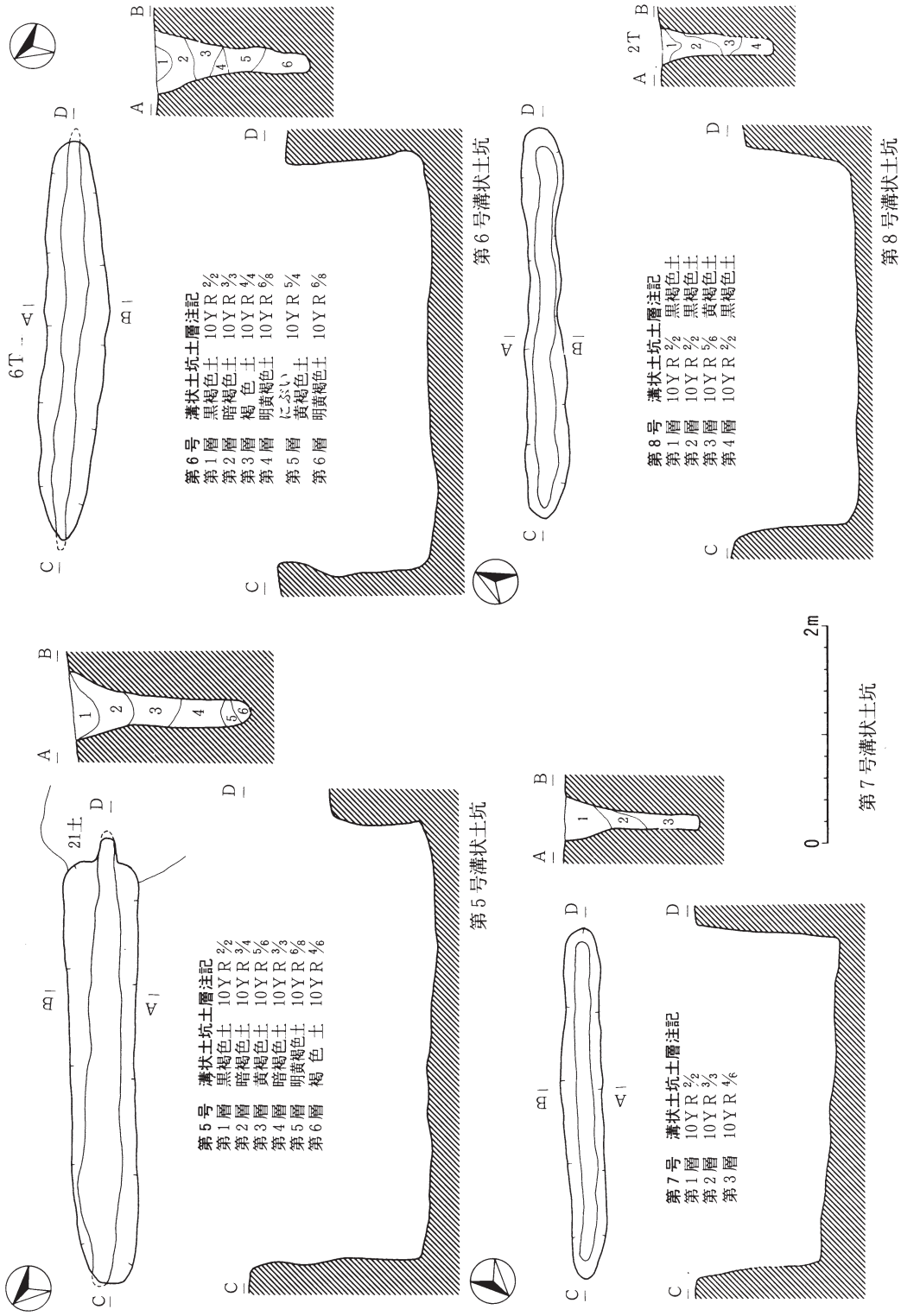
（大湯　卓二）

溝状土坑観察表

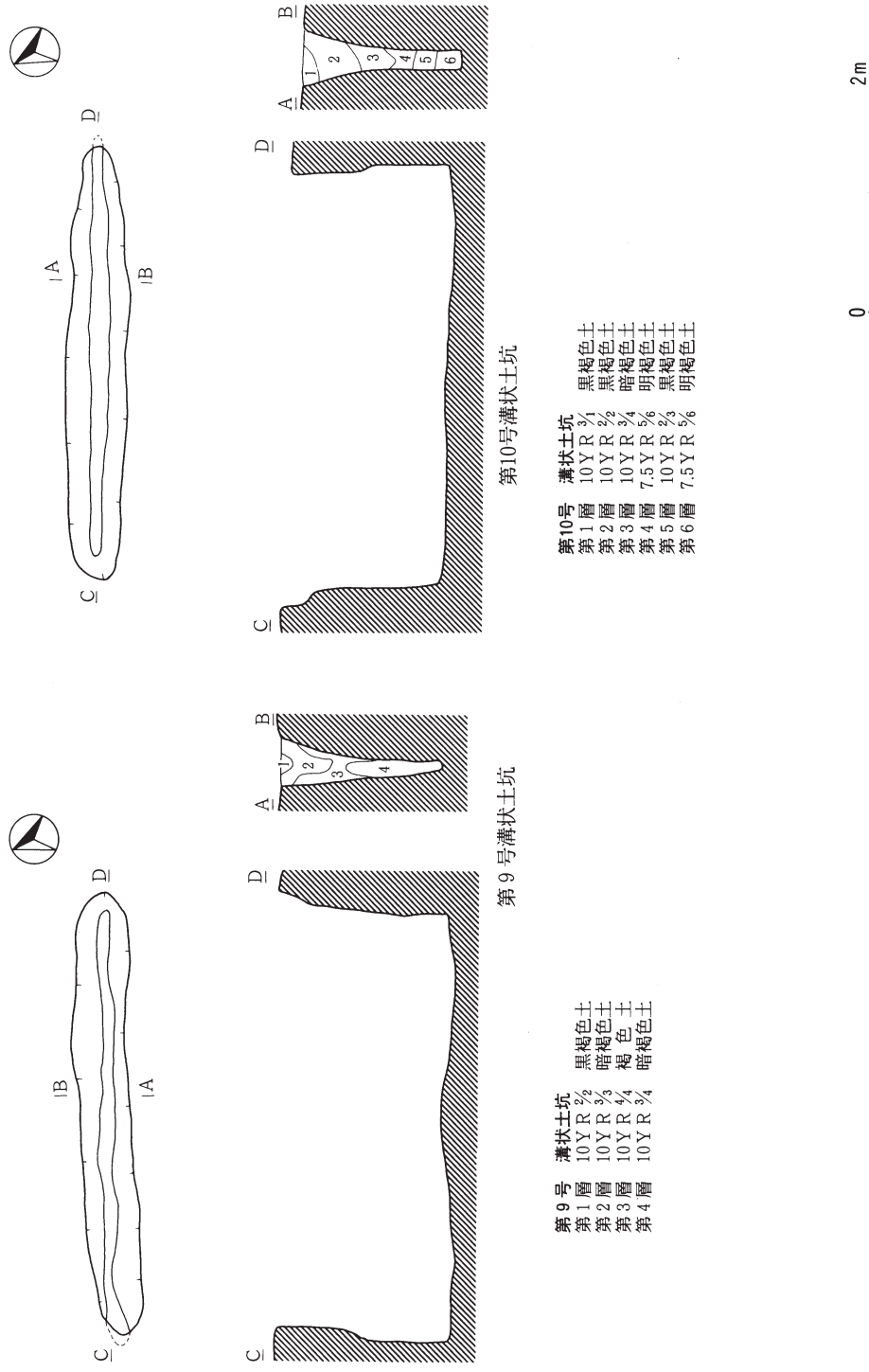
溝状土坑番号	図版	グリッド	規模			平面形	長軸方向	備考
			上端	下端	深さ			
1	第63図	ＢＮ－79	425×65	500×23	120	長楕円形	Ｎ－55°－Ｗ	
2	第63図	ＢＮ－59	380×60	370×20	110	長楕円形	Ｎ－48°－Ｗ	
3	第63図	ＢＯ－71	355×50	325×20	108	長楕円形	Ｎ－37°－Ｗ	
4	第63図	ＢＲ－74	340×50	300×20	110	長楕円形	Ｎ－25°－Ｗ	
5	第64図	ＢＯ－67	408×60	415×18	160	長楕円形	Ｎ－42°－Ｗ	21土との切合不明
6	第64図	ＢＪ－69	365×55	390×20	140	長楕円形	Ｎ－47°－Ｗ	
7	第64図	ＣＮ－62	320×40	290×15	125	長楕円形	Ｎ－48°－Ｗ	
8	第64図	ＣＧ－72	360×33	330×18	110	長楕円形	Ｎ－62°－Ｗ	
9	第65図	ＢＦ－65	370×45	365×15	135	長楕円形	Ｎ－64°－Ｗ	
10	第65図	ＢＫ－63	360×50	350×20	135	長楕円形	Ｎ－57°－Ｗ	



第63図　第１～４号溝状土坑



第64図　第５～８号溝状土坑



第65図　第９～10号溝状土坑

（4）焼　　石（第66図）

第1号焼石

ＤＢ－68グリッドの第Ｖb層から径（15cm～30cm）ほどの焼石が10個ほど散らばった状態で出土した。出土範囲は、ほぼ1グリッド内である。周辺から不安定な平底及び土器破片が見られた。この焼石に共伴する土器は、縄文時代早期赤御堂式から早稲田5類に至る時期と思われる。焼土は確認出来なかった。（1～5）の土器は、同一固体で胎土には植物性繊維が混入している。器形は、不安定な平底で器面に縄文（ＲＬ）を不規則に施している。

第2号焼石

ＣＨ－76グリッド、第Ⅲ層から焼石（10cm～20cm大）が10数個検出した。石の出土した周辺は、少量の焼土及び土師器破片が見られた。石は捨てられたものと思われる。

（5）集　　石（第66図）

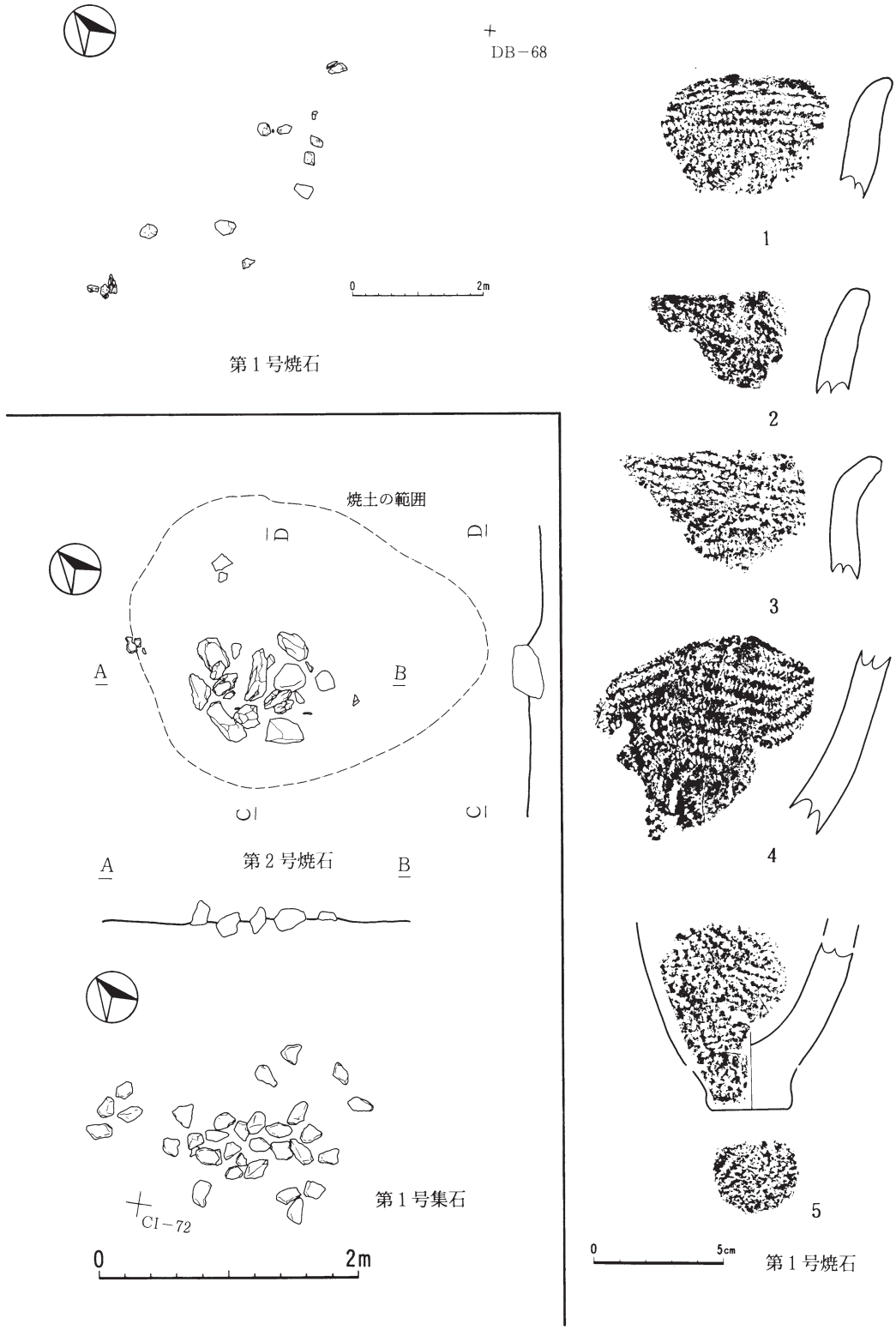
第1号集石

ＣＨ－71・72グリッドの第Ｖ層から径15cm大の礫が33個ほどまとまって出土した。この礫の中には、石器として加工されたものは含まれていない。

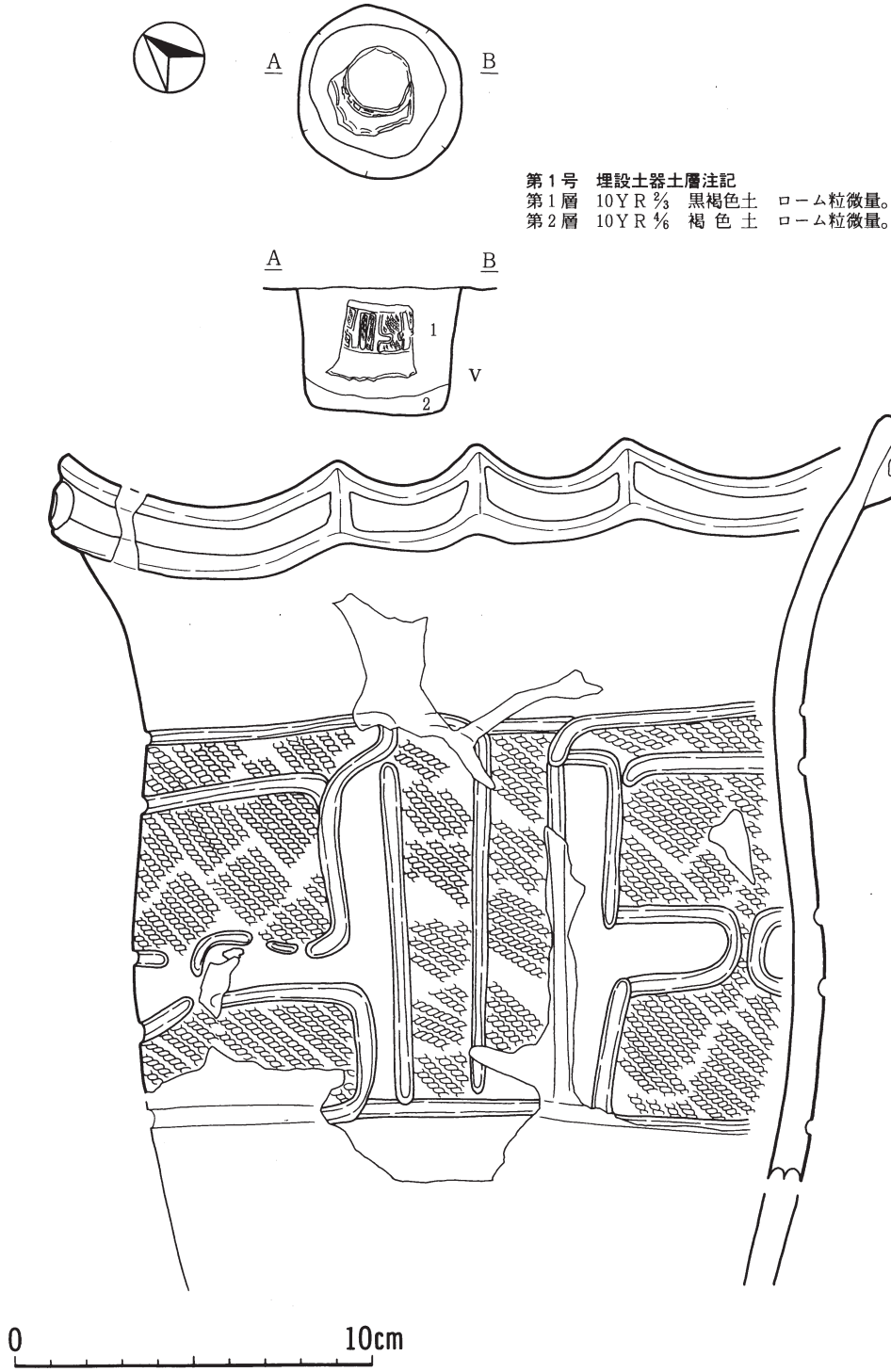
（6）埋設土器遺構（第67図）

ＢＪ－52グリッドの第Ｖ層から埋設土器が1個検出した。土器は逆位の状態で口縁が下になり、底部は欠損していた。土器は、ほぼ円形（径95cmで深さ70cm）の掘り方をもって埋設されていた。覆土は2層に分層され、土器は掘り方の底面から20cmほど浮いていた。土器は、深鉢土器で、口縁部形状は、波状口縁を呈し、口頸部が外反している。口縁部には、ボタン状の突起が見られ、粘土紐によって長方形に区画し、その下は無文部を形成している。胴部は縄文（ＲＬ）を施し、中を沈線で横位、縦位に長方形に区画し、さらに沈線の内側を磨り消している。時期は、縄文時代後期前半沖附(2)式あたりのものと思われる。

（大湯　卓二）



第66図　第１号焼石・集石遺構



第67図　第１号埋設土器

第2節　遺構外出土遺物

（1）　土　　器

家ノ前遺跡では、縄文時代・弥生時代・平安時代の各時期の土器が遺構外から出土した。平安時代の土器の多くは遺構内から出土したため量的には少なく、縄文時代早期後半から前期中葉にかけての時期、縄文時代後期の前半期、弥生時代後期の土器が中心となっている。これら遺構外出土の土器を従来の土器型式等に対応させると、以下の様になる。

第Ⅰ群土器　縄文時代早期の土器

第1類　白浜式に比定される土器

第2類　吹切沢式に比定される土器

第3類　物見台式に比定される土器

第4類　早稲田5類に比定される土器

第Ⅱ群　縄文時代早期末から前期初頭の土器

施文具によって分類したため、型式にあてはめられない。したがって、中にはⅠ群4類ないしはⅡ群各類の範疇に入るものがあると思われる。他に判断できるもので既知の土器型式にあてはめてみると、以下のようになる。第1類の40～44は北海道に分布する東釧路Ⅳ式に類似し、第3類（61）も北海道のコッタロ式との関連が考えられるものである。在地のものでは、条が縦走する縄文を施文している54など表館遺跡第X群土器に類似するものが含まれているものと思われる。

第Ⅲ群　縄文時代前期の土器

第1類　　長七谷地Ⅲ群に比定される土器

第2類　　早稲田6類b種に比定される土器

第3類・第6類　早稲田6類c種に比定される土器

第4類　　表館式に比定される土器

第5類　　早稲田6類もしくは表館式の系統上に位置すると思われる土器

第Ⅳ群　縄文時代中期の土器

第1類　円筒上層d式土器に比定される土器

第2類　大木10式土器に比定される土器

第V群　縄文時代後期の土器

第1類・第2類　牛ケ沢Ⅲ群に比定される土器

第3類・第4類　沖附(2)式に比定される土器

第5類　　弥栄平(2)式に比定される土器

第６類　　沖附(2)式土器の系統上に位置すると思われる土器

第７類　　弥栄平(2)式土器の系統上に位置すると思われる土器

第８類　　十腰内Ｉ式に比定される土器

第９類　　十腰内Ⅳ式に比定される土器

第10類　　後期前半に位置づけられる把手を有する土器

第11類　　後期前半に位置づけられる粗製土器

第Ⅵ群　縄文時代晩期の土器

第１類　大洞ＢＣ式に比定される土器

第２類　大洞Ｃ１式に比定される土器

第Ⅶ群　弥生時代前期の土器

・二枚橋式に比定される土器

第Ⅷ群　弥生時代後期の土器

第Ⅸ群　時期不詳のもの

第Ｘ群　平安時代の土器

各々の土器群について事実記載を行い個々の特徴等を観察表に記した。なお、第Ｉ～Ⅸ群の土器については、図版中にも出土グリット、層位、整理番号を付した。

第Ｉ群（縄文時代早期の土器）

第１類　貝殻条痕が施されるもの（１）

おそらく尖底となる土器の胴部下半で、貝殻条痕による調整が内外面に施されている。器厚は13㎜前後と厚く、重量感がある。植物繊維および砂粒はほとんど含れまず、１㎜以下の細砂粒が極微量混入されるだけである。

第２類　貝殻の連続圧痕文を施文するもの（２～４）

乳房状突起を持つ尖底の土器群で、口縁部は直立しながら先細りする平口縁のようである。器厚は10㎜前後で第１類よりは若干薄く、胎土には植物繊維は含れまず、１㎜前後の細砂粒が微量混入される。２は口縁部破片で、口縁部は横位に、その下部では斜位に貝殻連続圧痕文が施されている。 口唇部にはハマグリ等の腹縁部が滑らかな貝殻によって刻み目を施している。４は尖底部で、先端部には沈線とも調整ともいえない浅い抉りが入り、乳房状突起になっている。

第３類　沈線、貝殻腹縁圧痕文および沈線文等によって文様を表出するもの（５～10）

全体の器形を復元しうる個体はなく、すべて破片資料である。細砂粒が少量混入されているが、植物繊維は含まず、焼成は良好で堅緻である。内外面の器面調整はヘラ状工具によって平

滑に調整され、口唇部は水平に面取りされるものが多い。外面文様は斜位の平行沈線内に貝殻腹縁圧痕文が密に充塡されるもの（5）、円形の刺突を伴う沈線によって区画された区画内を貝殻腹縁圧痕文によって一定の間隔で充塡されるもの（6、8～10）などがある。また内面口縁部に貝殻腹縁圧痕文のあるもの（6）、内面口端部に貝殻腹縁圧痕文のあるもの（5）がある。また、内外面には文様を持たないが、口唇部に貝殻腹縁圧痕文をもつもの（7）もみられる。

第4類　主として縄文によって文様が施文されるもの（11～39）

全体的に調整が雑で、厚ぼったい感がある。特に内面調整はオサエ調整が主流で、ナデ調整がなされていても、十分にはなされず、オサエ調整の痕跡を留めているものが多い。また、内面を縄文によって調整するもの（21•34•35）も見られる。胎土には量の多寡はあれど、すべて植物繊維を混入している。

11～13、18～20は、0段多条の斜行縄文を主体としている。内面調整はナデ・貝殻条痕の手法が用いられてはいるが、オサエを基調とした雑な調整となっている。また、15～17、21は0段多条でない単節斜行縄文が施文され、羽状縄文を施文するもの（36、37）、綾杉状縄文を施文するもの（27～30、33）がある。羽状縄文を施文するものには、同一原体を異方向に回転させることによるもの（36）と結束第1種によるもの（37）とがある。土器内面にも縄文を施文するものは21、34、35の3点である。

地文縄文以外で外面に施文される文様としては、指頭圧痕を施文するもの（22）、原体の側面圧痕文を施文するもの（31、32、34、35）などがある。

口唇部に原体の閉じた縄端の圧痕文が施されているものは、16・17・23の3点で、胴部地文と同じ原体を口唇部に回転施文するものは24、27、28、32、37である。

底部は、2個体を図示しているが、いずれも底部下端をつまみ出している。

第Ⅱ群（縄文時代早期後葉から前期前葉のものと思われる土器）

縄文時代早期後葉から前期前葉のものと思われる土器を一括した。一部の土器はⅠ群4類に属する可能性があるものもあるが、施文文様、内面調整、焼成、器厚などの観点から分離し、一括した。主として外面の施文文様によって7類に分類した。

第1類　絡条体回転文を施文するもの（40～44、47～53）

絡条体回転文を施文する土器に木目状撚糸文はなく、すべて単軸絡条体第1類である。羽状を呈するもの（40～44、50）でも軸に巻く縄の方向を変えた原体を用いることによって羽状を表出しているものと思われる。軸に巻く縄が、RとLという2つの異なった縄をそれぞれ絡めていることから、2種類の原体が用いられているものと思われる。絡めている縄はほとんど1段の縄であるが、48・50は0段の縄である。

第２類　反撚りの縄文を施文するもの（54～56）

54・55はＲＲであるが、55は撚りが緩み、不整な縄文となっている。56のみがＬＬである。

第３類　内外面に原体の側面圧痕文を施文するもの（61）

外面には口縁に平行する側面圧痕文を施し、その下部には斜位方向の側面圧痕文が施文されている。内面は口縁に平行する３条の側面圧痕文が施され、その上下には縦位の側面圧痕文がめぐっている。原体はいずれもＬによるものであり、焼成は良好である。

第４類　円形の刺突文を施文する土器（62）

円形の刺突文を施文する土器は１破片のみで横位に３段巡る刺突列が施されている。地文にはＬＲの斜行縄文を施す。

第５類　刷毛目状工具による条痕を施文するもの（63）

刷毛目状工具による条痕を有する土器は１破片のみで、横位に刷毛目状の条痕文を施文し、下半にはＬＲの斜行縄文を施す。

第６類　１種類の原体によって地文縄文を施文するもの（57～60、64、66、67）

57・58の内面調整は平滑にナデがなされ、オサエの痕跡がまったく残されていないことから本群に分類した。59、60は器厚が薄く、特に60は異質な感がある。64、66、67は丸底を呈し、64は、外面の剥離している面にも表面と同じ原体による縄文が観察できる。

第７類　２種類の原体によって地文縄文を施文するもの（65、68～77）

２種類の原体によって地文縄文を施文する土器には、同じ撚りの原体を２本使用するＬＲ縄文が施文される土器（68）と、ＬＲとＲＬの２種類の原体のよって縄文を施文する土器（65、69～77）とがある。前者（68）は外面の体部上半部が０段多条のＬＲ縄文、胴部が単節のＬＲ縄文であり、口縁部には側面圧痕文が２条巡っている。口唇部には縄文が施され、内面には条痕調整がなされている。後者は、異なった原体を用いることで、回転方向が同じでありながらも縦位あるいは横位の羽状縄文を表出している。また、胴部に側面圧痕文が施されているもの（69・70・72）もある。65、77は尖底風の丸底を呈するものと思われる。

第Ⅲ群（縄文時代前期の土器）

第１類　異原体による整然とした羽状縄文を施文するもの（78～81）

本類土器は口縁部と底部に平行する横走縄文、胴部は０段多条のＬＲ・ＲＬの２種類の原体を用いて整然とした羽状縄文を施文する土器である。羽状縄文は部分的に菱形を呈し、条に沿って指などによってなぞり、節が不明瞭な部分がある。器形は丸底を呈し、そのまま胴部で膨らまずに口縁部が垂直に立ち上がってくるものと思われる。

第２類　沈線文・押し引き沈線文等による口縁部文様帯を持つもの（82～95・143）

波状口縁で、口縁部文様帯を主として半截竹管文の押し引き状沈線によって文様を施文する

土器である。波状口縁の波頂部部分や沈線と沈線の接する部分に刺突がなされるものと刺突がなされないものとがある。前者は菱形文、三角文などといった幾何学的な文様が用いられ、後者は単なる平行沈線となるものが多い。82は胴部にも3段の平行沈線文が施される。地文は羽状縄文（82～85・87・93)、あるいはループ文（86・92）が施され、そののちに沈線文が施文される。また、86が示すように、口縁部には地文が施文されないものもあり、88～91・95の胴部にも地文縄文が施されるものと思われる。94は小さい破片ではあるが、連続する刺突文によって幾何学的文様を表出しているものと思われる。143は押し引き沈線文によって幾何学的文様を描く底部である。

第3類　沈線文による口縁部文様帯を持たないもの（96～109、120、217、237）

波状口縁と平口縁があるようである。結束羽状縄文を施すもの（96・97・99)、結束斜行縄文（結束第1種、LRとLR）を施すもの（98)、結節回転文を施すもの（100～102、104）絡条体回転文を施すもの（101・108)、交差縄文を施すもの（105・217)、複節の異原体による羽状縄文を施すもの（106）、複節の斜行縄文を施すもの（237)、ループ文を施すもの（107・109)、縄文を幾度も重ねて施文したようなもの（120）等がある。

第4類　連続刺突文によって幾何学的文様構成をとるもの（110～119）

本類は第2類と同様半截竹管文によるものと思われるが、施文手法が押し引き状沈線文ではなく、刺突を基本としていることによって区別される。

110～112では2条もしくは3条の平行刺突列に区画された中を山形状、連孤状の刺突列によって充塡している。115は口縁部と口唇部に半截竹管によって連続刺突文を施し、口縁部下端にには棒状工具によって多段の連続刺突列を施文している。116、117は爪形の刺突がなされている。118と119は同一個体の胴部下半部と思われ、横位に連続刺突列が多段に巡り、胴部では原体が不明であるが、縄文が施文されている。119の下端部から、平底になる可能性がある。

第5類　口端部あるいは口唇部に刻みまたは指頭圧痕を持ち、縄文を主体文様とするもの（121～140）

本類土器はほとんど植物繊維を混入し、焼成は堅緻で良好なものが多い。

色調は褐灰色ないし灰褐色を呈するものが多く、黒褐色のものもある。また、焼成のあまりよくないものは橙色を呈している（129)。地文縄文としては側面ループ文（121～124)、組紐縄文（125・126・134)、結束第1種ＲＬとＬＲ（127～132、135)、結束第1種ＲとＲ（132)、結束第1種ＬＲとＬＲ（133)、斜行縄文（136・137)、組縄縄文（138）がある。

口唇部は面取りされて内面に傾斜するもの（121・122・127)、水平に面取りされて指頭圧痕が巡るもの（125)、あるいは刻みが施されるもの（132）がある。口端部には爪形状の刻みが施されるもの（121・122・126)、矢羽根状の刻みが施されるもの（127・128)、口唇部の指頭

圧痕と口端部の指頭圧痕あるいは刻みと組み合わせるもの（130・131・135）とがある。また、先細りする口唇部に刻みを施すだけのもの（136・137）もある。

121～124は同一個体と思われ、口縁部と胴部下半には側面ループ文、胴部にはループ文の一種と思われる縄文が施されている。口端部には縦位の刻みが施されている。口縁は、122の示すように左側が急激に落ちこんで段差がつく、段状の口縁を呈している。なお、図示してはいないが同一個体の口縁部破片が他にもあり、いずれも左側が落ち込むものであり、口縁には複数の段差があるものと思われる。口唇部は内面に傾くように面取りされている。

125・126ともに組紐縄文を主体文様としている。125は口唇部に指頭圧痕を施している。126は口縁に粘土を貼り付け、その後縦位の刻みが施されている。この貼り付けは口唇部が内面方向に傾斜させるためのものと思われる。しかし口唇部の調整が十分になされなかったようで、部分的に段のついている箇所がある。

127・128は口端部に矢羽根状の刻みが施され、結束羽状縄文を地文としている。129は口端部と口唇部に爪形の刻みを施し、胴部には結束羽状縄文原体の結束部分から下半のみを回転施文している。

130・131・133・135は口唇部に指頭圧痕を施し小波状口縁とし、さらに口端部には波頂部分に縦位の刻みを施す事によって、口唇部をより立体的な浮線状波状文とならしめている。132はこれらとは異なり、口唇部には横位の爪形文、口端部には弱い縦位刻みを小刻みに施しているだけで、口唇部の爪形文と口端部の縦位刻みは一致せず、浮線状波状文を強調させるものとはなってはいない。地文は結束による羽状縄文が多いが、135は結束する斜行縄文となっている。

134は波状口縁の波頂部に原体の側面圧痕がなされている。

136・137は口唇部が先細りし、面取りはされていない。136は口唇部と口端部に、137は口端部に細かい刻みが施され、小波状を呈してる。

138・140は、口唇部が水平に面取りされ、組縄縄文が主体文様となっている。

第6類　底部破片（141・142）

いずれも尖底となる底部破片で、器形、焼成等の点から2類もしくは3類に属する可能性が高い。

第Ⅳ群（縄文時代中期の土器）

第1類　細い粘土紐を貼り付けるもの（144～146）

砂粒を比較的多量に含み、焼成はやや不良でもろい。幅5㎜前後の粘土紐を貼り付け、部分的には密着させるべく粘土紐を押しつける部分があるものの、ほとんどは軽く器面に押し当てるのみで、器面と粘土紐の接着面が容易に観察することができる。144は口縁部破片で、波状

口縁を呈している。

第２類　沈線によって、波状文を描くもの（147）

小型の壺形土器１点の出土である。器高5.6cmで胎土に砂粒を少量混入し、全面赤褐色を呈している。胴部下半には１条の波状沈線が施され、その下側及び体部に沈線で区画された文様帯にはＲＬ縄文が充塡される。口縁部は３mmほど残存しているのみであるが、口唇部が滑らかでないこと、口縁部内面の粘土がわずかにめくれていることから、切断蓋付土器の体部下半の可能性がある。

第Ｖ群（縄文時代後期の土器）

第１類　口縁部あるいは口頸部に粘土紐を貼り付けることによって、文様帯を区画するもの（148～153）

全体の器形は、波状口縁をなす深鉢で、口頸部が外反するものと胴部がそのまま直立して口縁部となるものとがある。文様としては無文地に粘土紐による口縁部文様帯と胴部文様帯との明瞭な区画（148～153）がなされる。粘土紐の上下には器面と密着させるためにナデもしくは沈線が粘土紐に沿って巡らされる。

148は、０段多条のＲＬ縄文を粘土紐上および沈線区画内に施文している。波頂部の下側には円形の粘土紐を貼り付け、さらに円形刺突が施されている。149・150は胎土・色調・焼成・施文具などの点から同一個体と思われる。口唇部および口頸部に幅１cmほどの太めの粘土紐を貼り付け、ＲＬ縄文を粘土紐上と胴部文様帯に施文している。口頸部には幅５cmほどの沈線によって縦位波状文が描かれている。

151は幅５mmほどの粘土紐によって渦巻き文を表出し、粘土紐上に縄文を施文する。152・153は口縁に平行して２条の粘土紐の貼り付けがなされ、152は口縁に平行する粘土紐上に縄文を施文したのちに粘土を鰭状に貼り付けている。

第２類　縄文の側面圧痕によって文様帯を区画するもの（154～156）

154～156は同一個体の土器破片で、波状口縁を呈する深鉢と思われる。口縁に平行して２条、胴部文様帯下端に２条の無節Ｌの圧痕文を巡らし、さらに口縁頂部から同じく２条の無節Ｌ圧痕文を施し、方形の区画とするものである。その交点には縦位方向の無節Ｌを押圧した粘土粒を貼り付けている。地文は横位方向の無節Ｒである。

第３類　口縁部文様帯と胴部文様帯が区別でき、胴部文様帯が縦位方向の区画をもち区画内に渦巻き文を持つもの（157～159・163）

頸部がややすぼまって口縁がわずかに外反し、口縁に貼り付けを施し折り返し状口縁を呈する器形である。口縁部文様帯と体部文様帯が区別でき、体部文様帯が４単位程度に分割されるものを一括した。

157は、頸部が若干すぼまり口縁部が外反する器形で、口唇部は折り返し状を呈し、1条の沈線が口縁部中央を一巡する。口唇部はきれいに面取りされる。4単位の口縁波頂部下側の口頸部には縦位楕円形文もしくはU字文が施される。体部文様帯は上下1条の沈線によって区画され、その内側部分に長いU字文もしくは縦位弧状文によって縦に区画され、その部分では地縄文は磨り消されないが、それらの間に描かれる円形文や弧状文の部分では磨り消される。磨り消される文様は6単位で、縦の区画帯の中央部を横切り、磨り消される文様帯が意図的に連結される部分もみられる。

163は、口頸部がややすぼまり、口縁部がやや内湾しながら広がる深鉢である。6単位の波状口縁で、口縁部は若干肥厚し、口頸部には波頂部から垂下する蛇行沈線によって区切られた空白部分によって口縁部文様帯と胴部文様帯に分割されている。胴部には渦巻き文が4単位施文されている。

158・159は口頸部文様帯が縦に連なる円形刺突列によって分割されている。158は平口縁で口縁部が折り返し状口縁となっているが、159は波状口縁で肥厚していない。159は体部文様帯が不明であるが、158では円形刺突列と同調して胴部文様帯も縦に分割されている。

第4類　胴部文様帯に数段に渡って横に長い楕円形を描くもの（160～162）

胴部文様帯に数段に渡って横に長い楕円形を描くものを一括した。器形は本群第3類に近いもの（160）と第5類に近いもの（161・162）とがある。

160～162は横に長い楕円形沈線文を文様モチーフとしている。160は口縁部が肥厚するが、口頸部は無文帯となり、縦の区画が見られない。161・162は破片資料であるため全体の文様構成は不明であるが、口頸部文様区画帯はなく、口縁部の縦に垂下する「の」字状文によって口縁部が区画されるものと思われる。

第5類　沈線による渦巻き状文を主体文様とするもの（164～176）

器形と文様による口縁部文様帯と体部文様帯の区画が不明瞭になり、器形的には頸部がすぼまって口縁部が外反するものもあるが、頸部のくびれが少なくなって胴部から口縁部まで直線的に立ち上がる（164・165・170・176）ものが加わる。口縁は折り返し状口縁となるものは少なくなる。

文様は沈線による渦巻き文が主体文様となり、平行沈線文の先端が渦巻くモチーフが用いられている。文様構成は横位に展開（165～169）し、胴部文様帯に用いられているモチーフが口頸部文様帯にも用いられ、胴部文様が多段化される（165～168）。口縁部では口縁に沿って2ないし3条の沈線文が施されるものが多い。磨消縄文は、用いられているものが多いが、用いられていないもの（164・170）もある。沈線文以外の文様要素としては円形刺突文があるが、168で1つの波頂部の口唇部に用いられているのみで、1個体だけである。

第6類　口縁部文様帯と胴部文様帯の区別がなく、胴部文様帯が方形区画を基調とする文様構成をとるもの（177～186）

2個体と思われるがいずれも頸部がすぼまらず、底部から口縁へ真っ直ぐ立ち上がる器形と思われる。口縁部文様帯と胴部文様帯の区別がなく、全面に縄文を施文して磨消縄文の手法がとられていない。

177・178は同一個体と思われるが、2ないし3条の平行沈線によって方形に区画され、横の区画となる沈線の中心部と交差するようにX字状に多重沈線を配している。交差する箇所には小さな渦巻き文が施される。平口縁で、口唇部は肥厚しない。

179～186は平口縁となる同一個体の破片と思われる。幅1㎝ほどで中央部分を溝状にくぼませた粘土紐を縦位に貼り付け、縦の区画を強調している。その区画を連繋する弧状もしくは斜位の格子目状の平行沈線が描かれ、格子目状の交点には円形の貼り付けが施される。

第7類　口縁部文様帯と胴部文様帯の区別はされるが、渦巻き状文が胴部文様帯の主体文様となる土器（187）

187の1個体のみである。胴部上半でわずかに膨らみ、頸部の屈曲はきつく、口縁部が内湾しながら外反する器形である。平口縁に沿って2条の平行沈線が巡り、頸部には2条の平行沈線間に結束沈線文が施される。胴部文様は横位に連続する渦巻き状文で、磨消縄文の手法は用いられていない。

第8類　基本的に無文地に沈線によって文様を描くもの（188～197）

器形は深鉢形（188・190～194）と壺形（189・195～197）とがある。ほとんどが無文地に沈線文を施文している。これらのうち、193のみは平行沈線間にかなり弱い縄文を施文している。

深鉢形土器には、波状口縁と平口縁とがある。188は6単位の波状口縁で、2条一組の平行沈線によって口縁部では横位の山形状文・弧状文・胴部では二組の縦位波状文によって区画され、その区画ないを縦位の弧状文によって充塡している。191は、「8」字状の貼り付け文が見られ、その上面に連続の刺突が施されている。192は長楕円形の貼り付けがなされ、貼り付けに沿って沈線が巡る口縁部である。194の口縁は折り返し状を呈しており、横位の平行沈線文を基調とし、それを縦位あるいは斜位の平行沈線文によって連携している。

壺形土器は4個体のうち、3個体がヒレ状突起を持ち、189と196のヒレ状突起には紐を通せる貫通孔が開けられている。また、189の底面には笹の葉と思われる圧痕があり、外面から内面に向けて焼成後に穿孔がなされている。

第9類　条の方向が変化する細かい縄文地に沈線文が施文され、磨消縄文の手法が用いられるもの（198・199）

破片2点のみで、同一個体の可能性がある。磨消縄文の手法がとられ、縄文が磨り消されな

い部分が厚くなっており、その部分が張り出す器形のようである。

第10類　把手を有するもの（200～202）

把手を有する土器は2個体出土している。

200・201は同一個体で、把手上面に偏平な「U」字状の沈線文が描かれている。胴部は沈線によって渦巻き状文が描かれている。202は口縁部が強く外反する器形で、把手のような逆「U」字状の粘土が口唇部につけられている。土器との間に1㎝程の間隔があり、指は入らないが、ベルト状のものを通すことはできる。土器と接している部分には外面・上面・内面の3方向から指頭圧痕が施され、それらをつなぐ部分には螺旋状に沈線が巡らされている。

第11類　沈線文を持たず、縄文が主体文様となるもの（45・46・203～216、218～236）

器形は底部から口縁部まで若干広がりながら真っ直ぐ立ち上がるものが主体を占めるが、口縁部が若干内反するもの（207・228～230）、外反するもの（208・255・223・227）、折り返し状口縁となるもの（208～210）などもある。多くは平口縁のようであり、225は4単位の波状口縁である。

文様としては、口縁部に縄の側面圧痕文を持つもの（203～207）、単軸絡条体回転文（第5類、網目状回転圧痕文）を施文するもの（210～213）、口縁部で原体の回転方向を変えて条の流れに違いを持たせるもの（214・215・222）、口唇部に溝状の沈線を巡らせるもの（234）などがある。

これらの内、口縁部に縄の側面圧痕文をもつもの（203～207）、折り返し状口縁となるもの（208～210）は、それぞれの特徴から前者は第2類に、後者は第3類に伴う可能性があると思われる。

第Ⅵ群（縄文時代晩期の土器）

各類精製土器が1個体ずつ出土した。個々に記載していくこととする。

第1類　注口土器（238）

238は注口土器の表部で、下半部が欠損したものである。かなり風化が進んでもろくなっており、全体的ににぶい黄橙色を呈している。表部文様帯は1条の連続沈線によって2段に分割され、上・下段共にX字状文が浮彫技法によって横位に施文される。裏部上面は磨滅が著しく、文様は判然としないが、裏部下面の外端には1条の沈線が巡らされている。

第2類　浅鉢形土器（239）

239は全面黒色を呈し、剥落が著しいが赤色顔料が内外両面に施された痕跡を留めている浅鉢である。器形は全体的に丸みを帯びており、底部と胴部は緩やかに立ち上がって口縁部にて幾分内湾する。底部は上げ底気味になっているのであるが、残存している部分で厚さ2㎜で、非常に薄くなっている。口縁部および胴部下端にはそれぞれ平行沈線内に列点状刺突を1条施

している。胴部文様帯は、磨消縄文の手法によって雲形文が施されており、地文は細かいＬＲ縄文である。

第Ⅶ群（弥生時代前期の土器）

壺形土器１点（240）出土した。図上復元したものであり、底部から口縁部まで接合はしていないが、おそらく最大径は胴部上半にあるものと思われる。頸部は真っ直ぐ立ち上がり、口頸部が若干外反する。口唇部は指頭圧痕がなされ、小波状を呈している。口縁部にはＲＬの斜行縄文が、胴部には縦走するＲＬ縄文が施されている。頸部は上下それぞれ３条の平行沈線文によって無文帯が形成され、下部の平行沈線文の上部には沈線文が１条追加され、その間には結束沈線文が施文される。

第Ⅷ群（弥生時代後期に属すると思われる土器）

本群土器は、器種によって次のように大別した。

（ア）甕　（イ）鉢　（ウ）壺　（エ）小型土器　（オ）蓋　（カ）底部

器種によって甕（鉢・小型土器を含む）、壺、蓋及び器形の不明な底部破片の４つに分け、甕はさらに法量の違いによって大きなものから甕・鉢・小型土器の３つに分類した。したがって、破片資料では、鉢や小型土器としているものにもそれぞれ甕、鉢に含まれたり、壺の胴部破片中にも甕の破片となりうる可能性がある。また、施文順位の観察できたものは、観察表の中で「（前）→（後）」というように矢印によって表現した。

器種別に記載し、それらを主体文様でさらに分類していくこととする。

（ア）甕

推定器高15cm以上の大型のものを甕とし、ここで一括した。頸部は若干くびれるが、屈曲はさほど強くなく、口縁がそのまま外側に開くものが多いが、やや内湾しながら立ち上がるものもある。口縁部に最大径があるもの（241・243・245・248・256）と、胴部上半部と口縁部の径がほぼ同じで、ここに最大径があるもの（244・246・247・249～252）とがある。底部は接合しなかったものが多いが、上げ底風のものが多いようである。

第１類　口頸部および体部上部の主体文様が平行沈線および鋸歯状文が施文されるだけのもの（241～244・268～279）

全体的な器形は底部から口縁へ緩やかに曲線的に変化するものが多く、最大径が胴部上半にあるものが多い。だが、243の口縁部は屈曲をもって外側に張り出し、口唇がやや内湾している。口縁が張り出す内面には明瞭な稜線が観察される。

鋸歯状文を伴わない平行沈線文のみのものは243・268・270・272・279である。270は、押し引き状沈線文である。鋸歯状文を伴うものでも、１条から３条の平行沈線文と鋸歯状文との組み合わせによって文様帯を区画するもの、平行沈線文の間に鋸歯状文をはさみこむもの（276

～278）もある。平行沈線文と鋸歯状文との組み合わせでは、平行沈線文の下位に鋸歯状文が配されるものが多いが、273は、平行沈線文の上位に鋸歯状文が配されている。

面取りされる口唇部には、縄文を施文するもの（241～244・269）、指頭圧痕によって小波状を呈するもの（249）、中央に押圧を加える山形小突起を有するもの（243）、貼り瘤を付けて中央部分に２～３条の刻みをもつもの（244）があり、口端部には縦位刻み目もしくは縦のスリットが施されるもの（242・244・269・272～275）がある。

頸部の地文は、無文となるもの（241、243、269、268、272、278）が多く、頸部が胴部と同じ方向に地文縄文が走るもの（279）、頸部に胴部と異なった方向へ縄文が走るもの（242・244・276）もある。胴部縄文は縦走するものが多い。

ただ244は他のものに比べて幾つか異なった点が見受けられる。器厚が厚く、胎土が精選されていて焼成も堅緻・良好であり、器形の点でも頸部のくびれや胴部の張り出しが非常に強い曲線となっている。地文縄文は密に施文され、頸部文様帯は無文であるが胴部文様帯には地文と同じく単節ＲＬの横走縄文が施される。口唇部に半球状の粘土瘤を貼り付けて縦の刻みを施すことなども他には見られない手法である。

第２類　沈線のみ、鋸歯状文を伴う平行沈線、列点文、連弧文、などによって区画された文様帯内に、円形文、山形文、弧状文、菱形文など多様な文様が施文されるもの（245～252・267・280～320）

平行沈線、平行沈線に鋸歯状文あるいは連弧文の組み合わせ、連弧文などによって、文様帯を区画し、その内部に円形文・山形文・弧状文・菱形文などの、多様な文様要素が加えられるものをここに一括した。

245は２条の平行沈線によって頸部文様帯を区画し、その内部に沈線によって大波状文、乱雑なコ字・ハ字状文の組み合わせ文を施し、部分的に縄文・附加条縄文を充塡している。口端部は指頭によって器壁を挟み込み、右方向へ粘土を断続的に押しやることによって指頭圧痕様の文様になっている。つまみ出されることによって、口縁部の器厚は薄くなっている。地文縄文は斜行縄文で、部分的に磨かれて横位の帯縄文となっている。内面調整は、ヘラケズリ的な手法が用いられているようである。口縁部内面はナデ調整がされて部分的に稜がみられ、さらに斜行縄文が施されている。

246は４単位の突起を有し、口唇には縦位の刻みが全周している。体部上半にみられる縄文は、沈線が施文される前に施文されたものと、沈線が施文されてから施文する充塡縄文の両方が観察できる。体部下半には、縄文が施文された後に磨きに近いナデが施され、つぶれた節が随所にみられる。頸部文様帯は平行沈線文によって区画されるが区画帯としての意味は薄く、区画帯である平行沈線文がそのまま文様要素である山形文あるいは波状文へと繋がり、そのま

ま下端の平行沈線となる。一部には2本同時に施文された可能性もある。

247は頸部はややすぼまって口縁部がわずかに開くが全体的にズンドウで、器壁の薄い土器である。二次火熱を受けたようで、器面は荒れて剥離が随所にみられ、内外面共にスス状炭化物が付着している。口唇部に小波状突起が作出され、その直下には径3㎜ほどの貫通孔が開けられ、炭化物によって塞がっていた。3条の平行沈線文、列点文、1条の沈線文の組み合わせによって頸部と体部文様帯を区画している。頸部文様帯は無文帯となり、体部文様帯には変形した菱形文、T字状沈線文が描かれ、RL縄文が充塡されている。胴部下半の地文縄文は部分的に帯縄文となり、内面の稜から口縁部までの1㎝ほどの部分にも縄文が施文される。

248は接合していないが図上復元したものであり、頸部から外反して口縁が大きく開く甕になるものと思われる。器表面はかなり磨滅してスス状炭化物が付着し、文様がかなり不鮮明になっている。地文縄文として縦走する整然とした帯縄文が用いられ、胴部文様帯には縄文は施文されないようである。口縁部には3条の平行沈線文と、1条の短沈線文に近い列点文が巡り、胴部文様帯は3条の平行沈線文によって上端を、内部に列点文を持つ平行沈線文と下側を向く連弧文によって下端を区画している。その内部には波長の同調しない3条の重連弧文と2条の重連弧文が施文される。口唇部には先の尖ったヘラ状もしくは棒状の工具によって刺突がなされ、口端部には部分的にまとまった縦位の刻みが施される。内面調整はヘラナデ調整され、外面の胴部下半も横位のヘラナデ調整によって帯縄文は磨り消されているようである。

249は、頸部が若干すぼまって口縁部が外側にゆるく開く器形を呈している。頸部は2条の沈線文、胴部上半に下向きの2条の重連弧文によって胴部文様帯が区画され、ブーメラン状の沈線文が上下互い違いに施文される。地文は縦走する単節RLで、体部の一部では磨り消されて帯縄文となっている。胴部文様帯には横走する単節RLが充塡されている部分や、地文縄文が残存している部分があるが、大部分においては無文となっている。口唇部には指頭圧痕が施され、小波状口縁となっている。

250は頸部がややすぼまり、口縁部がわずかに外反する器形である。口縁部では斜行、頸部では横走、胴部では縦走する縄文が地文として密に施文する。地文縄文が施文されたのち頸部に沈線文が施される。1条の沈線文によって頸部文様帯が区画され、胴部との区画にはさらに1条の鋸歯状文が付加される。区画内には眼鏡状沈線文が展開する。磨消縄文・充塡縄文の手法は用いられていない。破片資料の283～285にもこれと同じモチーフが用いられているが、250とは別個体である。内面調整はヘラナデの調整がなされ、口縁部内面に稜線が観察できる。

251の胴部は丸みが強く、頸部がくびれて緩やかに口縁が外反する器形を示している。口唇部には縦の押圧を持つ山形突起を持ち、胴部地文縄文と同じ原体（附加条縄文）が施文されるようである。口縁に沿って竹管様工具による円形刺突文が2段施文されている。口縁部文様帯

と頸部文様帯、胴部文様帯は、２条の平行沈線文と１条の鋸歯状沈線文の組み合わせによって区画され、口縁部文様帯には１条の山形文が、頸部文様帯には２条による重山形文が充塡されているが、胴部文様帯内に沈線による文様は施文されない。これら胴部文様帯より上部には、縄文は施されていない。

252は、条が横走する縦の帯縄文を地文としている。口縁部にかなり近い位置に頸部のくびれがあり、口縁部には山形文が施され、頸部文様帯といえる部分はなく、２条の平行沈線文によって胴部文様帯が区画される。その内部には縦の鋸歯状文をはさむ沈線文や多重の円形文、弧状文が充塡されるようである。沈線は幅広で非常に浅いものである。口唇は面取りがなされ、内面は斜位の刷毛目様調整の痕跡がある。

破片資料では胴部の文様として、山形文（267・309）、重山形文（280～282・293・294・296など）、眼鏡状沈線文（283～285）、口縁部に波状文が施文されるもの（286）、口縁部に縦の沈線文が施文されるもの（287～289）、重菱形文（298・302・314）、長方形様沈線文（301）、平行沈線の間に刻みを施すもの（307・308）、多重連弧文（311）などがある。胴部文様帯の下端区画には平行沈線と重連弧文（317）、平行沈線文と鋸歯状文（318・319）、沈線文のみのもの（320）等がある。口頸部文様帯では口頸部の地文縄文を磨り消さず沈線を直接描くもの（290・301など）もあるが、無文もしくは磨り消した口頸部に沈線で施文し、その区画内に縄文を充塡するものが圧倒的に多い。また、磨消縄文の手法を用いるものはないようである。

口唇部には縄文が施文されるもの（286・291・292・297）があり、地文縄文と同じくほとんどがＲＬ縄文である。283～285は波状口縁に近い山形突起の頂部に、縦位の押圧を加える同一個体の破片であり、眼鏡状沈線文が施されている。口唇部もしくは口端部に縦位の刻みを施すもの（289・290・295）などもある。292は口端部が肥厚し、口端部に上方向からと正面方向からの連続する指頭圧痕、もしくは作りだしによって大きく起伏している。291は折り返し状口縁で、折り返し部分の下端に平行する深い１条の沈線を施し、沈線部分から折り返しの下端部分にかけて縦位の強い押圧を加え、強い凹凸が表出されている。

第３類　刷毛目文を地文とするもの（253）

地文に刷毛目文を施文する土器は253に図示した１個体のみである。器形は胴部でかすかにすぼまるが、全体的には口径が底径よりややひろがる円筒形で、底面はかすかに上げ底風となっている。内面はナデ調整がなされ、胴部内面にわずかな稜線が、口縁部内面には明瞭な稜線が観察できる。外面文様は条痕を縦位に全面施文して口縁部を磨り消し、次に沈線文と器面に対して斜位方向からの刺突文を施している。口縁には、波頂部に縦位の押圧を加える山形小突起を有するようで、そのような破片が２片出土している。

第４類　沈線を施文せず、地文縄文が主たる文様となるもの（254～256、321～339）

254は頸部がややくびれる波状口縁を呈した土器である。口縁部には縦位の刻みが巡って外面文様は節の細かいＲＬ縄文が縦走しており、口縁部内面には部分的に同じＲＬ縄文が斜行している。

255も254と同じく口端部に縦位の刻みが施されるが、若干短く、規則的に密に配されている。255の器形は頸部のくびれが口縁に近い位置にある。地文縄文は縦走するＲＬ縄文で、頸部の一部に縄文の節が潰れていることが確認できることから、縄文施文後頸部を再調整したものと思われる。内面は丁寧に平滑なナデによって調整される。

256は、面取りされた口唇部に縄文を施文し、指頭圧痕による４単位の小突起を有している波状口縁の土器である。底面がかなり小さく、口縁が大きく開く器形になるようである。外面地文・口唇部ともＲＬ縄文である。

破片資料では、321は、頸部が「く」の字状に強く屈曲し、口縁部がやや内湾する器形である。頸部には粘土紐を貼り付け、粘土紐の上下両方向から指頭圧痕を加え、波状隆線文を表出している。地文縄文は閉じた縄端を横位に回転させて斜行する横位の帯縄文とし、口唇部には指頭圧痕が施されて小波状口縁となっている。322～324は折り返し状口縁となっており、折り返し部分の下端部にはいずれも指頭圧痕が加えられる。地文縄文の変化として条の走る方向を意識的に変化させるもの（327・337)、帯縄文を施文するもの（331・334)、頸部を無文帯にするもの（324・330）などがある。口唇部に縄文を施文するものは多く、ほとんどが地文縄文と同一の原体を用いているようである。口唇部の突起形態は、328はつまみ出しただけの小突起で、329は縦位の刻みを持つ山形小突起である。また、329は附加条縄文らしいものが施文され、内面には刷毛目様調整がなされている。336は部分的に、胴部が膨らむ、口縁部内面に稜がみられる、内面にオサエ調整の痕跡を止めているなど、成形が雑な土器である。

第５類　無文のもの（340～343)

外面文様が無文となるものは４個体あるが、いずれも破片資料であって全体の器形を知りうものはない。340はヘラナデ、341～343はナデが観察できる。外面には文様が施文されないが、口唇部には縦位の刻み（340)、指頭圧痕（341)、ＬＲ縄文（342）がそれぞれ施されている。また、343は口唇部が水平に面取りされている。

第６類　底　部（344～346)

器種が甕であると思われる底部を一括した。図示したのは３個体で、いずれも上げ底風である。344・345は胴部の最大径が確認できる。344は残存部が最大径で、頸部に向かってすぼまる状況にある。縄文は、条が縦走する部分と横走する部分が明瞭に分かれている。345の胴部は無文帯となり、体部下半では縦走する帯縄文が施文され、底部付近で条が斜行する。上端にはかすかに沈線文が観察できる。346は胴部に向けて大きく広がり、条が縦走する底部であ

る。

（イ）鉢

推定器高が15cm以下になり、甕より小型のものを鉢としてここで一括する。

第１類　口頸部および体部上部の主体文様が平行沈線および鋸歯状文が施文されるだけのもの（257、347～361）

257は頸部がかすかに屈曲し、口縁部で広がる朝顔形に近い器形の鉢形土器である。頸部は沈線文と鋸歯状文によって無文帯を形成する。頸部にも縦走縄文が最初に施文されたが沈線文施文後、ヨコナデによって縄文が磨り消されている。地文縄文は縦走するＲＬ縄文で、口端部には縦位の刻みが施される。

破片資料では、平行沈線文のみのもの（347・351～353・355・356）と沈線文と鋸歯状文の組み合わせによるもの（348・354・357～361）とがある。口唇部には、縄文が施されるもの（350・352～354・356・360）、口唇に沿って沈線が施されるもの（355・357・358）、縦位の刻みをもつもの（351・359）などがある。地文縄文は、明瞭な帯縄文となるもの（350）や山形に施文したもの（351）もみられる。

第２類　沈線あるいは鋸歯状文を伴う平行沈線によって区画された文様帯に円形文、鋸歯状文、弧状文などの沈線文が施文されるもの（260・362～379）

器形を推定復元できたのは260の１個体のみである。頸部がやや強く屈曲し、口縁部が短く外反する器形である。器壁は薄く、磨きに近い丁寧なナデが施され、内外面の縄文部分には赤色顔料が付着している。外面文様は平行沈線・鋸歯状沈線文等を施文し、横走する縄文を充塡している。口縁部は縦走する縄文、口唇部及び口縁部内面は横走する縄文が施文され、口縁部内面にはさらに押し引き沈線文が２条巡っている。

破片資料に見られるものは、胴部上半が膨らんで頸部で屈曲し、口縁部はそのまま外反するものと口端部が内湾するもの（370）とがある。外面施文文様は、重山形文（362・364）、平行沈線の間に列点を施すもの（363・368・371）、重弧状文（365・367）、重波状文（368）、眼鏡状沈線文風のもの（371・378）、変形工字文風のもの（373）、縦位沈線を施すもの（377）などがある。368は、折り返し状口縁の下端に斜位の刻みを施している。370は胴部に縦の粘土を貼り付け、横位の刻みを施している。同じく胴部には縦位の鋸歯状文あるいは波状文を施文する。368、371の２点は口縁に小突起を有している。口唇部は、縄文を施すもの（364・372・373・375・377）、刻みを施すもの（374・376）がある。また、377は口縁部内面に上向き・下向きの連続弧状文を施している。縄文は圧倒的にＲＬが多い。

第３類　沈線を施文せず、地縄文が主たる文様となるもの（258・259・380～389・438）

258は底径、口径、器高の比率が１：1.67：1.22で湯呑み形といえるものである。上げ底風

の底部から口縁に向けてわずかに開きながら真っ直ぐ立ち上がる。口端部に縦位の刻みが施され、ゆるやかな波状口縁となっているようである。地文縄文は異条によるＲＬ縄文と思われ、条は縦走する。

259は口縁がつまみ出しによって口縁断面が先細りし、小波状口縁をなしている鉢形土器である。地文となるＲＬ縄文は、口縁部では横走し、胴部以下においては斜行する。

破片資料においては、大きく分けて口縁部に刻みを持つものと持たないものとがある。口縁部に縦位の刻みを施すもの（383～387）が多く、384・386は口縁が強く内湾して内面に稜を有している。口唇部に指頭圧痕を施して小波状口縁を作りだしているもの（388）もある。385は縦位の刻みを持つ口縁が薄くなっている土器で、地文が附加条縄文の可能性がある。口縁部に刻みを持たないものでは、胴部上半がややふくらんで口縁部が外反する器形で、口縁部が無文帯となるもの（380）や、口唇部に小突起を作りだし、口縁部が同じく無文帯となるもの（382）もある。389は縦走する帯縄文を施文している。

（ウ）壺

本器種については、弥生時代後期の特徴的な施文手法である交互刺突文を施文する土器群が存在する。したがって、「Ａ　甕」及び「Ｂ　鉢」で分類したような沈線文の文様要素によって分類する前に交互刺突文の手法を用いている土器と用いない土器群とに分類する必要性があると思われる。

また、交互刺突文を施文しないものには大きく沈線文による文様をもつものともたないものとがある。その内、「沈線文による文様をもつもの」は壺という器形を考慮した場合、261から263のように口縁部・頸部・胴部と全体の様相がある程度把握できるものから推察するに、口頸部の文様要素と胴部の文様要素が全く同じである可能性は低いと思われる。そこで「Ａ　甕」及び「Ｂ　鉢」で分類したような「第１類　口頸部および体部上部の主体文様が平行沈線および鋸歯文が施文されるだけのもの」、「第２類　沈線あるいは鋸歯文を伴う平行沈線によって区画された文様帯内に、それら以外の円形文、鋸歯状文、弧状文、菱形文などの文様が施文されるもの」というように沈線文の文様要素によって分類することは不能と判断した。そこでここでは大きく沈線文による文様をもつものともたないものとに分類するに止めることとした。

第１類　交互刺突文を施文するもの（261～263、414、415）

交互刺突文を施文する土器は、図上復元したもの３個体、破片資料２個体の、計５個体にすぎず、本遺跡において出土した弥生時代の土器の中でも特に多いとはいえない。だが、他の器種にはない文様要素であり、本器種の大きな特徴の一つといえる。

261は図上復元したものであり、器高は不明である。頸部と底部付近は無文帯となり、胴部には斜行するＬＲ縄文が施文されている。口縁部は二重に貼り付けがなされ、さらに粘土を貼

り付けて2個一組で3単位の突起が付される。口縁部下端の、頸部より1段高い貼り付け部分に交互刺突文が施される。本土器の交互刺突文は次のように施文されている。交互刺突文の施文される上端に1条の沈線を巡らし、貼り付け部分下端から先の沈線を潰すように上方に押し上げる。その押し上げられた部分によって区画された内部を、沈線に向けて2～4の刻みを加えた結果、交互刺突文となるようである。口縁となるもう一段の貼り付け部分と貼り付けによる突起部分には円形の刺突文と沈線文が組み合わされて用いられている。

262は頸部がすぼまって口縁部はそのまま外反していくが、貼り付け等をもたない壺形土器である。口唇は内湾する形で垂直につまみ上げられ、さらに縦位の刻みを持つ山形突起が8単位あるようであるが磨滅しており、不明瞭である。2列の円形刺突文が口縁に巡り、部分的に上位の刺突列が口唇部に施文されている。頸部は交互刺突文によって区画され、重山形文が施される。2条の交互刺突文は、同一の手法が用いられている。篦状工具等によって約5㎜幅の深く平行する2条の沈線を施し、その内部に交互に刺突を加える。その刺突は、ただ突き刺すだけの刺突ではなく、刺突を加えたときそのまま工具を抜かないで押し上げあるいは押し下げを行い、沈線によって帯状になっている粘土部分を上下に押し寄せて浮線状の波状文を表出するものである。

胴部文様は地文である縦走するＲＬ縄文を施文後、重山形文、先端の尖った工具による連続刺突を内部にもつ重山形文、二重の風構え状沈線文、その間に充塡される波状文や長い楕円形文などの多様な沈線文が施文される。体部上半の地文縄文は縦走するが、底部付近では縦走する部分と斜行する部分とがあり、下端では斜行する。口縁部内面には外面地文と同じくＲＬ縄文が施される。底部は上げ底風である。

263は胴部中央部分に最大径があり、頸部が「く」の字状に強く屈曲してそのまま貼り付け帯を持つ口縁が外反する器形である。交互刺突文は頸部に1条巡り、口縁部下端には交互刺突文とは異なるが、波状隆線文が施文されている。

頸部の交互刺突文は262と同一の手法によっているが若干雑に施文され、刺突の加えられる単位幅も大きなものになっている。胴部文様帯の下端には1条の沈線文と三重の波状文が施されており、下端の2本は同時に施文された可能性がある。頸部の交互刺突文までの区画内には重三角形の懸垂文ならびに鼓状の沈線文がそれぞれ4単位施文されている。重三角状懸垂文の懸垂部と懸垂部との間の空間の上部には横走するＲＬ縄文が充塡されている。体部下半の地文縄文は、部分的に帯縄文となる縦走縄文が施文されている。

口縁部の貼り付け帯は、下端からの棒状工具による上方への押し上げによって波状隆線文を表出している。これは、口縁部にみられる幅の狭い沈線文とは異なった、幅の広い浅い沈線文を施文し、部分的に粘土を押し上げる手法をとっている可能性がある。口唇部には先端が少々

尖った棒状工具による斜位方向からの刻みが巡り、正面から見た場合小波状口縁となっている。

414は口縁部の破片資料で、頸部はすぼまって、口縁が外へ張り出して垂直に立ち上がるようである。垂直に立ち上がっている口縁の下端に交互刺突文が施文されている。交互刺突文は器面に対して斜め上方から円形の刺突を土器の粘土が下側へ寄るように施す。そして寄せた粘土の起伏が鮮明になるように下方から棒状工具を器面に押し当てて、上方に粘土を押し上げる手法がとられている。これは263の口縁部下端における波状隆線文の、粘土を押し上げるという手法に類似している。その上部には平行沈線文が施され、口唇部へ至っている。また、口唇部も外面口端部に縦位の刻みと口唇部から内面口端部にかけての斜位の刻みが交互に施され、波状隆線文とも交互刺突ともとれる文様がみられる。

415は胴部破片で、同心円状の沈線文の外側部分に交互刺突文が施文されているが、他の交互刺突文が施文される土器よりも雑に施文されており、より退化傾向が強いものと考えられる。この交互刺突文も262や263の土器と同様に沈線文の間に用いられているが、沈線によって波状隆線文を表出したりせず、器面に対して垂直方向からの刺突と斜位方向からの刺突という方向を変える２つの刺突を単純に交互に施文するものである。

第２類　交互刺突文を施文しないもの（264～266、390～413）

第１種　沈線文による文様をもつもの（264・265・391・393～413）

264はおそらく胴部の下半部に最大径がある壺と思われる。胴部文様帯は上端が１組の平行沈線、下端は３条による平行沈線と１条の鋸歯状沈線文によって区画され、その区画内に平行沈線による横に連なる風構え状文、そして方形の内部にはハ字状文が施文されている。その後胴部文様帯では部分的にＲＬ縄文が充塡されている。

265は頸部があまりすぼまらないで長く伸び、胴部との差が小さいズンドウの長頸壺といえる器形の土器である。細かいＲＬ縄文を用いて、頸部から胴部上半までは斜行、胴部下半ではあらゆる方向に条を走らせている。その後平行沈線、鋸歯状沈線文を雑に重積して施文していくようである。

391と401は図版作成後接合し、同一個体であることが判明した。頸部が垂直に立ち上がって口縁部が屈曲して強く外反するが、外面には粘土帯を貼り付けている。貼り付け帯にはさらに粘土を縦位に付け足してつまみ出し、ブリッジ状の深い結束沈線のような文様を作りだしている。401の貫通孔は焼成前に開けられたものであるが、391の貫通孔は焼成後に補修孔として開けられたものと思われる。口唇部には地文縄文と同じＲＬ縄文が施されるようである。

393の頸部は垂直に立ち上がって、なめらかに外反していき、口縁部分に粘土帯を貼り付けている。口端部には縦位の荒い刻みを持ち、貼り付け部分に幅の広い１条の横位沈線文、頸部

には同一工具による平行沈線文が施文されている。

394は頸部の屈曲が強く、「く」字状に外反する可能性のある土器である。頸部には3条の平行沈線文が巡るようであるが、部分的に押し引き沈線となっている。体部内面は剥落が著しく、二次火熱を受けたものと思われる。

全体の器形を把握できない破片資料の文様要素を列記する。口頸部の沈線文の文様要素としては、平行沈線文を基調として長方形文を施文するもの（395・396）、平行沈線文と鋸歯状文の組み合わせによるもの（397）、平行沈線文のもの（398）がある。胴部文様の要素としては眼鏡状文（399）、重三角形懸垂文（402）、大波状文（403）、同心円文（404）、重弧状文（405・406）、重三角状文（408）等多様な沈線文がみられる。また、縄線文といわれる原体の側面圧痕文を施すもの（412・413）もある。不明なものもいくつかあるが、多くは沈線文を施文した後に縄文を充塡する手法がとられているようである。頸部文様帯と胴部文様帯との区画文には平行沈線文によるもの（264・394）と平行沈線文と鋸歯状文によるもの（400）とがある。しかし、胴部文様帯の下端には平行沈線文と鋸歯状文の組み合わせが多い（264・403・404・411など）ようである。

第2種　沈線文による文様を持たないもの（266・390・392）

266は頸部がやや強く屈曲し、短い口縁がそのまま立ち上がる土器である。最大径は胴部中央かやや下側になるものと思われる。地文は縦走するＲＬ縄文が施文されるが、口縁部では磨り消されたらしく無文帯となっている。口唇部には1㎝程の間隔で2つの縦位刻みを入れてその内部を指頭圧痕する、突起に代わるようなものが4単位施されている。指頭圧痕部以外の口唇部には外面の地文縄文と同じくＲＬ縄文が施文される。

破片資料で現存部において沈線文を施文していないものは390、392の2個体があり、390は口端部に縦位の刻みが巡る広口壺で、392は口縁部内面に外面地文縄文と同じＲＬ縄文が施されてゆるやかに外反していくようである。

（エ）小型土器（416～421）

小型土器は、器高が5㎝以下と思われる特に小型の土器を一括した。

416は胴部はやや膨らんで頸部が「く」字状に屈曲する器形である。平行沈線文と平行鋸歯状文によって文様が構成されている。地文は、口縁部と胴部下半が縦走し、胴部文様帯は斜行するＲＬ縄文を充塡している。

417と418は、同一個体の可能性がある口縁部破片で、口縁に貼り付けを施し、貼り付け部には斜行縄文、平行沈線文を施し、貼り付け下端には刻みが巡っている。頸部には鋸歯状文、沈線文が観察できる。419は口唇部に刻みが施され、小波状口縁を呈し、420は下向きの連弧文が施され、地文縄文は帯縄文である。

421は丸底に近い土器である。底中央部分に貫通孔があることから蓋の可能性もあるが、外部底面が磨滅しているため、図に示したようになるものと思われる。文様は平行沈線文の間に鋸歯状文が施され、地文縄文は斜行するＲＬ縄文である。

（オ）蓋（422～424・438）

422は蓋の下端部と思われる破片で、外面下端の張り出されている面に１条、接地面（口唇部）に１条の深めの沈線文が施文される。それ以外の部分は無文である。

423は蓋の頂部で、つまみ部には一対の貫通孔が開けられている。つまみ部には平行沈線文が半周し、貫通孔の所で沈線文が止まり、その後次の貫通孔後まで平行沈線文が半周している。その他は内外面共無文である。424も無文の蓋のつまみ部である。438（註）は、つまみ部に３条の沈線文、外面には横走縄文が施されている。

（註）図版作成時において台付甕もしくは台付鉢の台部と思われたため図のように実測図を作成したが、器面調整等を再検討した結果、蓋のつまみ部であるものと思われる。実測図は天地が逆となる。

（カ）底部（425～437）

器種の不明な底部破片を一括した。底部形態としては、平底のもの（425・428・434・435・436）、上げ底風のもの（426・427・430・436）、上げ底のもの（429・431～433）とがある。胴部の器形には、胴部が大きく広がるもの（425）、胴部が直線的に立ち上がるもの（426・427）、底部付近が丸みを有するもの（431・434）、上げ底とならない底部直前に段を有するもの（435）などがある。429は正面からはわからないが台付のような上げ底である。おそらく細い粘土紐を底面の円周に沿って貼り付け、正面からつなぎ目が見えなくなるよう器面を調整し、それを平坦面におしつけた結果４㎜程の高さをもつ脚部となったものと思われる。外面文様は、地文縄文が施されるものとしては、斜行縄文（425～428・435・437）、帯縄文（429）、縦走縄文（430～432）がある。沈線文（433）、無文（434、436）のものもある。437は台部である可能性もあるが蓋になる可能性も高く、判断しかねる。

第Ⅸ群　時期不詳のもの

439と440の２個体がある。

439は、長方形の粘土に、筒状の台がついているものである。筒状の粘土が接合する内面は雑な調整に止まっているため、長方形の粘土面が上面もしくは外面になるものと思われる。文様等は施されておらず、比較的丁寧なナデがなされている。把手の一部と思われるが、蓋のつまみ部、小型土器の器台、天地を逆さにした場合土偶の脚部などの可能性もあり、断定はできない。

440は、上辺において顕著なスリが観察できる。左右両辺にはスリは確認できないが全体と

して方形もしくは長方形に作り出そうとしたものと思われる。下辺は欠損しており、もともと長方形に整形したのち欠損したのか、欠損していた土器片にスリを施して方形にしたのであるかも不明である。土器片自体は胎土に植物繊維を混入し、短い羽状縄文が3段施文されていることから第Ⅱ群第5類もしくは第2類のものと思われ、スリが加えられたのはそれ以降と考えられる。

（神　　康夫）

第Ⅹ群　平成時代の遺物

1　土師器（第116図1～第117図40）

遺構外のものは住居跡周辺の第Ⅲ層からのものが殆どであり、破片資料が大半を占める。図示できたものは、坏5点、甕35点である。坏は住居跡内のものと同様全てロクロ成形である。甕は、ロクロ成形のものは3点（第116図27・28・31）だけである。頸部に段差を有する（第116図9・12・17・21・24）ものが比較的多く含まれる。

2　製塩土器（第117図41～42）

ＣＧ－75地点第Ⅲ層から白砂式製塩土器片がまとまって出土し、底部は図化できるまで接合できた。内面はきれいなナデの痕跡がみられるが、熱によるものか剥落が顕著である。この他にも別個体と思われる底部破片が出土している。41は口縁部で、非常に薄く4㎜ほどである。胴部が接合できなかったため、41・42が同一個体であるかは不明である。

3　須恵器（第117図43～46）

43は大甕と思われ、ＣＡ―72とＣＧ―75の2点からのもので、口縁部から頸部上半部まで接合できた。44はＣＡ―72出土の胴部破片で同一個体の可能性があり、胎土分析は行っていないが持子沢系のものと思われる。外面はタタキ目が施され、内面はアテ具痕が残り、口縁部から頸部にかけては自然釉が観察できる。45は壺の肩部分と思われ、同様に自然釉が観察できた。

4　灰釉陶器（第117図47）

内面に釉が観察できることから灰釉陶器の底部である思われる。沖附(1)遺跡では、折戸53号様式で10世紀前半のものと思われる灰釉陶器が出土しているが、本遺跡のものは底部だけで器形も不明である。

（増尾　知彦）

遺構外出土第Ⅰ群～第Ⅹ群土器観察表

図番号	グリッド	層位	部位	外面施文文様	内面調整	分類	備考	整理番号
第68図 1	ＢＧ－50	Ⅰ	胴部下半	条痕文	条痕	Ⅰ群１類		339
2	ＢＰ－61	Ⅴ	口縁部	貝殻連続圧痕文、刻み（口唇部）	ナデ	Ⅰ群２類		144
3	ＢＰ－59	Ⅴ	胴部	貝殻連続波状圧痕文	ナデ	Ⅰ群２類		353
4	ＢＰ－61	Ⅴ	底部	貝殻連続圧痕文、及び連続波状圧痕文、乳房状突起	条痕	Ⅰ群２類		立27
5	ＢＯ－45	Ⅳ	口縁部	貝殻連続圧痕文、沈線文、貝殻腹縁による刻み（内面上部）	細かい条痕	Ⅰ群３類		350
6	ＢＬ－50	Ⅳ	口縁部	貝殻腹縁圧痕文、沈線文、刺突文、貝殻腹縁による刻み（内面上部）	細かい条痕	Ⅰ群３類		359
7	ＢＨ－48	Ⅳ	口縁部	細かい条痕文、貝殻腹縁圧痕文（口唇部）	ナデ	Ⅰ類３群	珪酸体混入	351
8	ＢＪ－47	Ⅴ	口縁部	貝殻腹縁圧痕文、沈線文、刺突文、貝殻腹縁による刻み（口唇部）	ナデ	Ⅰ群３類	珪酸体混入	355
9	ＢＩ－51	Ⅴ	胴部	貝殻腹縁圧痕文、沈線文、刺突文	細かい条痕	Ⅰ群３類		364
10	ＣＬ－60	Ⅳ	胴部	貝殻腹縁圧痕文、沈線文	条痕	Ⅰ群３類	珪酸体混入	356
第69図 11	ＣＫ－62	Ⅴ	体部上半	結節回転文、斜行縄文（０段多状ＲＬ）	オサエ、ナデ	Ⅰ群４類	植物繊維・珪酸体混入	285
12	ＢＺ－75	Ⅴ	口縁部	斜行縄文、口唇部共に（０段多状ＬＲ）	オサエ、ナデ	Ⅰ群４類	植物繊維混入	166
13	ＣＮ－61	Ⅴ	口縁部	斜行縄文（０段多状ＬＲ）	オサエ、ナデ	Ⅰ群４類	植物繊維混入	313
14	ＣＥ－75	Ⅳ	口縁部	斜行縄文（ＬＲ）、口唇部縄文（ＬＲ）	オサエ、ナデ	Ⅰ群４類	植物繊維混入	127
15	ＢＯ－60	Ⅴ	口縁部	斜行縄文（ＬＲ）	オサエ	Ⅰ群４類	植物繊維混入	94
16	ＢＧ－60	Ⅴ	口縁部	斜行縄文（ＬＲ）、口唇部縄の先端による刺突	オサエ、ナデ	Ⅰ群４類	植物繊維・珪酸体混入	101
17	ＢＦ－62	Ⅴ	口縁部	斜行縄文（ＬＲ）、口唇部縄の先端による刺突	オサエ、ナデ	Ⅰ群４類	植物繊維・珪酸体混入	100
18	ＣＲ－60	Ⅴ	口縁部	交差縄文（ＬＲ）	オサエ	Ⅰ群４類	植物繊維混入、補修孔	159
19	ＢＦ－62	Ⅴ	胴部	斜行縄文（０段多条ＬＲ）	オサエ	Ⅰ群４類	繊維・珪酸体混入、赤色顔料付着	95

図番号	グリッド	層位	部位	外面施文文様	内面調整	分類	備考	整理番号
20	ＢＪ－61	Ⅴ	胴部	斜行縄文（０段多状ＬＲ）、開いた縄端の回転文	オサエ、ナデ	Ⅰ群４類	植物繊維・珪酸体混入	328
21	ＢＫ－65	Ⅴ	胴部	斜行縄文（ＬＲ）	オサエ、縄文（ＬＲ）	Ⅰ群４類	植物繊維・珪酸体混入	324
22	ＢＩ－68	Ⅰ	胴部	指頭圧痕、斜行縄文（ＬＲ）	オサエ、ナデ	Ⅰ群４類	植物繊維・珪酸体混入	175
第70図 23	ＢＭ－59	Ⅴ	口縁部	斜行縄文（Ｒ）、口唇部縄の先端による刺突	オサエ	Ⅰ群４類	植物繊維・珪酸体混入	123
24	ＢＦ－61	Ⅴ	口縁部	地文、口唇部共に附加縄文	オサエ	Ⅰ群４類	植物繊維・珪酸体混入	96
25	ＢＧ－64	Ⅴ	胴部	異段の縄の撚り合わせによる羽状縄文	オサエ	Ⅰ群４類	植物繊維・珪酸体混入	130
26	ＢＧ－62	Ⅴ	胴部	直前段合撚	オサエ	Ⅰ群４類	植物繊維・珪酸体混入	98
27	ＢＪ－47	Ⅰ	口縁部	綾杉状縄文、口唇部同一原体	ナデ	Ⅰ群４類	植物繊維・珪酸体混入、補修孔	329
28	ＢＬ－47	Ⅴ	口縁部	綾杉状縄文、口唇部同一原体	ナデ	Ⅰ群４類	植物繊維・珪酸体混入	337
29	ＢＨ－72	Ⅴ	胴部	綾杉状縄文	ナデ	Ⅰ群４類	植物繊維混入	322
30	ＢＭ－49	Ⅴ	胴部	綾杉状縄文	オサエ、ナデ	Ⅰ群４類	植物繊維・珪酸体混入	321
31	ＢＬ－69	Ⅴ	胴部	綾杉状縄文	オサエ、ナデ	Ⅰ群４類	植物繊維・珪酸体混入	103
32	ＢＧ－61	Ⅴ	口縁部	側面圧痕文（ＬＲ）	オサエ	Ⅰ群４類	植物繊維・珪酸体混入	137
33	ＣＢ－76	Ⅰ	口縁部	側面圧痕文（ＲＬ）、斜行縄文（ＲＬ）、口唇部縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅰ群４類	植物繊維混入	319
34	ＢＨ－73	Ⅴ	胴部	側面圧痕文（ＲＬ）	ナデ、縄文（ＬＲ）	Ⅰ群４類	植物繊維混入	327
35	ＢＭ－67	Ⅴ	口縁部	側面圧痕文（ＬＲ）、斜行縄文（ＬＲ）	オサエ、縄文（ＬＲ）	Ⅰ群４類	植物繊維・珪酸体混入、補修孔	119、133
第71図 36	ＢＭ－68	Ⅴ	胴部	縄文（ＬＲ）を横位に段状施文する羽状縄文	オサエ、ナデ	Ⅰ群４類	植物繊維混入	立62
37	ＢＮ－59	Ⅳ	口縁部	結束第１種（ＲＬとＬＲ）、口唇部縄文（ＲＬ）	オサエ	Ⅰ群４類	植物繊維・珪酸体混入	118
38	ＢＬ－66	Ⅰ	底部	縄文（ＲＬ）、底部縄文（ＬＲ）	オサエ、ナデ	Ⅰ群４類	植物繊維・珪酸体混入	128
39	ＢＭ－67	Ⅴ	底部	剥落著しく、不明	オサエ	Ⅰ群４類	植物繊維・珪酸体混入	120

第72図 40	ＢＰ－59	Ⅴ	胴部	単軸絡条体回転による羽状文（ＲとＬ）	オサエ、ナデ	Ⅱ群１類	植物繊維混入	366
41	ＣＭ－62	Ⅴ	胴部	単軸絡条体回転による羽状文（ＲとＬ）	ナデ	Ⅱ群１類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	363－Ａ
42	ＣＭ－62	Ⅴ	胴部	単軸絡条体回転による羽状文（ＲとＬ）	ナデ	Ⅱ群１類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	363－Ｃ
43	ＣＭ－62	Ⅴ	胴部下半	単軸絡条体回転による羽状文（第１類、ＲとＬ）	オサエ、ナデ	Ⅱ群１類	植物繊維・珪酸体共に微量混入	363－Ｄ
44	ＣＭ－62	Ⅴ	胴部	単軸絡条体回転による羽状文（第１類、ＲとＬ）	ナデ	Ⅱ群１類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	363－Ｂ
45	ＣＡ－72	Ⅳ	口縁部	斜行縄文（ＬＲＬ）	ナデ	Ⅴ群１類	珪酸体混入	216－ａ
46	ＣＡ－72	Ⅳ	口縁部	斜行縄文（ＬＲＬ）	ナデ	Ⅴ群１類	珪酸体混入	216－ｂ
47	ＢＬ－66	Ⅰ	口縁部	単軸絡条体回転文（第１類、Ｒ）	条痕	Ⅱ群１類	植物繊維混入	129
48	ＣＯ－76	Ⅴ	胴部	単軸絡条体回転文（第１類、ｒ）	ナデ	Ⅱ群１類	植物繊維・珪酸体混入	167
49	ＢＦ－62	Ⅴ	口縁部	単軸絡条体回転文（第１類、Ｌ）	オサエ	Ⅱ群１類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	89、92
50	ＢＧ－62	Ⅴ	胴部	単軸絡条体回転文（第１類、ｒ）	オサエ、ナデ	Ⅱ群１類	植物繊維混入	90
51	ＢＬ－65	Ⅴ	胴部	単軸絡条体回転文（第１類、Ｒ）	ナデ	Ⅱ群１類	珪酸体混入	318
52	ＢＨ－71	Ⅴ	口縁部	単軸絡条体回転による羽状文（第１類、ＲとＬ）、口唇部単軸絡条体回転文（第１類、Ｌ）	条痕	Ⅱ群１類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	111
53	ＢＨ－71	Ⅴ	胴部	単軸絡条体回転による羽状文（第１類、ＲとＬ）	条痕	Ⅱ群１類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	113
54	ＢＩ－71	Ⅴ	胴部	直前段反撚（ＲＲ）	オサエ、ナデ	Ⅱ群２類	珪酸体混入	325
55	表面採集		口縁部	直前段反撚（ＬＬ）	オサエ	Ⅱ群２類	植物繊維・珪酸体混入	173
56	ＢＪ－70	Ⅴ	胴部	直前段反撚（ＲＲ）	オサエ、ナデ	Ⅱ群２類	植物繊維・珪酸体混入	650
第73図 57	ＢＨ－73	Ⅴ	口縁部	斜行縄文（ＲＬ）、口唇部刺突	平滑なナデ	Ⅱ群６類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	126
58	ＢＩ－46	Ⅴ	口縁部	斜行縄文（ＬＲ）	ナデ	Ⅱ群６類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	332
59	ＢＬ－66	Ⅳ	口縁部	斜行縄文（ＬＲ）	ナデ	Ⅱ群６類	植物繊維混入、補修孔あり	330
60	ＣＢ－83	Ⅴ	口縁部	直前段合撚	ナデ	Ⅱ群６類	植物繊維混入	132

図番号	グリッド	層位	部位	外面施文文様	内面調整	分類	備考	整理番号
61	ＢＧ－67	Ⅴ	口縁部	内外面とも側面圧痕文（Ｌ）	（ナデ）	Ⅱ群３類	植物繊維混入	134
62	ＣＰ－62	Ⅴ	口縁部	刺突文、斜行縄文（ＬＲ）	ナデ	Ⅱ群４類	植物繊維混入	182
63	ＣＭ－62	Ⅳb	胴部	刷毛目状沈線、斜行縄文（ＬＲ）	ナデ	Ⅱ群５類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	344
64	ＣＦ－78	Ⅴ	体部下半	斜行縄文（ＬＲ）	オサエ、ナデ	Ⅱ群６類	植物繊維混入	立22
65	ＢＫ－47	Ⅳ	底部	斜行縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅱ群７類	植物繊維・珪酸体混入	343
66	ＢＬ－66	Ⅰ	底部	縄文（ＲＬ、ＬＲ）	オサエ、ナデ	Ⅱ群６類	植物繊維混入	314
67	ＢＺ－82	Ⅳ	体部下半	斜行縄文（０段多条ＬＲ）	オサエ、ナデ	Ⅱ群６類	植物繊維混入	立40
第74図 68	ＣＢ－84	Ⅴ	体部上半	側面圧痕文（ＬＲ）、斜行縄文（上半０段多条ＬＲ、下半ＬＲ）、口唇部０段多条ＬＲ	条痕	Ⅱ群７類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	立56
69	ＢＪ－66	Ⅴ	口縁部	側面圧痕文（縦位ＲＬ、横位ＲＬとＬＲ）、縦位羽状縄文（ＲＬとＬＲ）	ナデ	Ⅱ群７類	植物繊維混入	106
70	ＢＨ－73	Ⅴ	胴部	側面圧痕文（縦位ＬＲ、横位上部ＲＬ、横位下部ＬＲ）、縦位羽状縄文（ＲＬとＬＲ）	ナデ	Ⅱ群７類	植物繊維混入	109
71	ＢＨ－72	Ⅴ	口縁部	側面圧痕文（ＬＲ）、羽状縄文（ＲＬとＬＲ）、口唇部縄文（ＬＲ）	条痕	Ⅱ群７類	植物繊維混入	108
72	ＢＨ－73	Ⅴ	胴部	側面圧痕文（ＲＬ）、羽状縄文（ＲＬとＬＲ）	ナデ	Ⅱ群７類	植物繊維混入	117
第75図 73	ＢＫ－65	Ⅴ	口縁部	横位羽状縄文（ＲＬとＬＲ）、口唇部縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅱ群７類		139
74	ＢＪ－51	Ⅳ	胴部	横位羽状縄文（ＬＲと０段多条ＲＬ）	ナデ	Ⅱ群７類	植物繊維混入	315
75	ＢＨ－72	Ⅴ	胴部	縄文（ＲＬと０段多条ＬＲ）	条痕	Ⅱ群７類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	114
76	ＣＡ－70	Ⅴ	胴部下半	横位羽状縄文（ＲＬと０段多条ＬＲ）	ナデ	Ⅱ群７類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	299
77	ＢＨ－73	Ⅴ	底部	縄文（ＲＬと０段多条ＬＲ）	条痕	Ⅱ群７類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	326
78	表面採集		口縁部	口縁部０段多条ＲＬ、胴部０段多条ＬＲ	ナデ	Ⅲ群１類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	163
79	表面採集		口縁部	口縁部０段多条ＲＬ、胴部０段多条ＲＬ	ナデ	Ⅲ群１類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	164
80	表面採集		口縁部	口縁部０段多条ＲＬ、胴部０段多条ＬＲと０段多条ＲＬによる羽状縄文	ナデ	Ⅲ群１類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	146

81	表面採集		胴部下半	胴部０段多条ＬＲと０段多条ＲＬによる羽状縄文、底部０段多条ＲＬ	ナデ	Ⅲ群１類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	165
第76図 82	ＢＦ－49	Ⅳ	体部上半	沈線文、押し引き沈線文、刺突文、結束第１種（ＲＬとＬＲ）	ナデ	Ⅲ群２類	植物繊維混入	450－Ｄ
83	ＢＮ－59	Ⅳ	胴部上半	沈線文、刺突文、結束第１種（ＲＬとＬＲ）	ナデ	Ⅲ群２類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	154
84	ＢＦ－49	Ⅳ	口縁部	沈線文、結束第１種（ＲＬとＬＲ）	ナデ	Ⅲ群２類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	451－Ｂ
85	ＢＨ－49	Ⅰ	口縁部	沈線文、刺突文、結束第１種（ＲＬとＬＲ）	ナデ	Ⅲ群２類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	451－Ａ
86	ＢＨ－49	Ⅴ	体部上半	沈線文、押し引き沈線文、刺突文、ループ文（ＲＬ）	ナデ	Ⅲ群２類	植物繊維混入	447
87	ＢＥ－65	Ⅴ	口縁部	沈線文、刺突文、結束第１種（ＲＬとＬＲ）	ナデ	Ⅲ群２類	植物繊維混入	142
88	ＢＭ－55	Ⅰ	口縁部	沈線文、刺突文	ナデ	Ⅲ群２類	植物繊維混入	449
89	ＢＪ－54	Ⅳ	口縁部	押し引き沈線文、刺突文	平滑なナデ	Ⅲ群２類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	448
90	ＢＬ－48	Ⅴ	口縁部	押し引き沈線文、刺突文	ナデ	Ⅲ群２類	植物繊維・珪酸体混入	444
91	ＢＭ－60	Ⅴ	口縁部	押し引き沈線文、刺突文	平滑なナデ	Ⅲ群２類	植物繊維混入	145
第77図 92	ＢＨ－52	Ⅴ	口縁部	沈線文、ループ文（ＲＬ）	ナデ	Ⅲ群２類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	436
93	ＢＫ－50	Ⅴ	口縁部	沈線文、結束第１種（ＲＬとＬＲ）	ナデ	Ⅲ群２類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	445
94	ＢＭ－50	Ⅴ	胴部上半	沈線文、刺突文	ナデ	Ⅲ群２類	植物繊維混入	227
95	ＢＱ－70	Ⅴ	口縁部	押し引き沈線文	平滑なナデ	Ⅲ群２類	植物繊維混入	13
96	ＢＭ－58	Ⅴ	体部上半	結束第１種（ＲＬとＬＲ）	ナデ	Ⅲ群３類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	300
97	ＢＬ－65	Ⅴ	口縁部	結束第１種（ＲＬとＬＲ）	ナデ	Ⅲ群３類	植物繊維混入	148
98	ＢＰ－60	Ⅴ	口縁部	結束第１種（ＬＲとＬＲ）	ナデ	Ⅲ群３類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	138
99	ＢＮ－59	Ⅳ	体部上半	結束第１種（ＲＬとＬＲ）	ナデ	Ⅲ群３類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	301
第78図100	ＢＫ－43	Ⅴ	口縁部	結節回転文（ＲＬ）、斜行縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅲ群３類	植物繊維混入	443
101	ＣＭ－63	Ⅳ	体部上半	結節回転文（０段多条ＲＬ）、絡条回転文（Ｌ）	ナデ	Ⅲ群３類	植物繊維・珪酸体混入	169

図番号	グリッド	層位	部位	外面施文文様	内面調整	分類	備考	整理番号
102	ＣＬ－57	Ⅳb	口縁部	結節回転文（０段多条ＲＬ）	ナデ	Ⅲ群３類	植物繊維・珪酸体混入	168
103	ＣＶ－67	Ⅴ	口縁部	他条によって縄端を結束した文様、斜行縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅲ群３類	植物繊維混入、補修孔入	88
104	ＣＩ－63	Ⅴ	口縁部	結節回転文（ＲＬ）	ナデ	Ⅲ群３類	植物繊維混入	172
105	ＢＩ－63	Ⅴ	口縁部	交差縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅲ群３類	植物繊維混入	218
106	ＣＭ－63	Ⅴ	胴部	羽状縄文（ＬＲＬとＲＬＲ）、ＬＲＬの縄端圧痕	オサエ、ナデ	Ⅲ群３類	植物繊維混入	317
107	ＢＫ－45	Ⅰ	口縁部	プール文（ＬＲ）	ナデ	Ⅲ群３類	植物繊維混入	438
108	ＣＰ－64	Ⅴ	体部上半	絡条回転文（Ｌ）	オサエ、ナデ	Ⅲ群３類	植物繊維混入	立7
109	ＢＩ－46	Ⅴ	口縁部	プール文（ＬＲ）	ナデ	Ⅲ群３類	植物繊維混入	228
第79図110	ＢＫ－65	Ⅴ	口縁部	押し引き状刺突列	ナデ	Ⅲ群４類		155
111	ＢＩ－69	Ⅴ	口縁部	刺突列、口唇部刺突	ナデ	Ⅲ群４類		224
112	ＢＪ－72	Ⅴ	口縁部	刺突列、口唇部刺突	ナデ	Ⅲ群４類		143
113	ＢＦ－66	Ⅴ	胴部	刺突列	ナデ	Ⅲ群４類		231
114	ＢＦ－66	Ⅴ	胴部	刺突列	ナデ	Ⅲ群４類		221
115	ＢＫ－62	Ⅴ	口縁部	刺突列、口唇部刺突	ナデ	Ⅲ群４類	植物繊維混入	225
116	ＣＧ－63	Ⅴ	胴部	刺突列	ナデ	Ⅲ群４類		220
117	ＢＬ－69	Ⅴ	胴部	刺突列	ナデ	Ⅲ群４類		239
118	ＣＭ－66	Ⅴ	胴部下半	刺突列、縄文	ナデ	Ⅲ群４類	植物繊維・珪酸体混入	153－a
119	ＣＭ－66	Ⅴ	胴部下半	刺突列	ナデ	Ⅲ群４類	植物繊維・珪酸体混入	153－b
120	ＣＭ－60	Ⅴ	体部上半	縄文（０段多条ＲＬ）	ナデ	Ⅲ群３類	植物繊維混入	立24
第80図121	ＣＧ－72	Ⅴ	口縁部	側面ループ文、口端部爪形文	ナデ	Ⅲ群５類	植物繊維混入	241－b

122	ＣＧ－72	Ⅴ	口縁部	側面ループ文、口端部爪形文	ナデ	Ⅲ群５類	植物繊維混入、補修孔	241－ａ
123	ＣＧ－72	Ⅴ	胴部	ループ文の一種	ナデ	Ⅲ群５類	植物繊維混入	241－ｃ
124	ＣＧ－72	Ⅴ	胴部下半	側面ループ文	ナデ	Ⅲ群５類	植物繊維・珪酸体共に微量混入	230
125	ＢＩ－46	Ⅴ	体部上半	組紐縄文、口唇部指頭圧痕	ナデ	Ⅲ群５類	植物繊維・珪酸体混入	240
126	ＣＲ－65	Ⅳ	体部上半	組紐縄文、口端部爪形文	ナデ	Ⅲ群５類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	242
第81図127	ＢＭ－44	Ⅰ	口縁部	爪形文、結束第１種（ＲＬとＬＲ）	ナデ	Ⅲ群５類	植物繊維・珪酸体混入	235
128	ＢＭ－60	Ⅴ	口縁部	爪形文、結束第１種（ＲとＬ）、口唇部縦位刻み	ナデ	Ⅲ群５類	植物繊維混入	141
129	ＢＰ－45	Ⅴ	口縁部	爪形文、結束第１種（ＲＬとＬＲ）、口唇部縦位刻み	ナデ	Ⅲ群５類	植物繊維混入	238
130	ＢＭ－50	Ⅰ	口縁部	爪形文、結束第１種（ＲとＬ）、口唇部指頭圧痕・横位刻み	ナデ	Ⅲ群５類	植物繊維混入	233
131	ＢＬ－45	Ⅰ	口縁部	爪形文、結束第１種（ＲＬとＬＲ）、口唇部指頭圧痕	ナデ	Ⅲ群５類	植物繊維混入	237
132	ＢＬ－43	Ⅴ	口縁部	刻み、結束第１種（ＲとＲ）、口唇部横位刻み	ナデ	Ⅲ群５類	植物繊維混入	181
133	ＢＦ－66	Ⅴ	口縁部	結束第１種（ＬＲとＬＲ）、口唇部指頭圧痕	ナデ	Ⅲ群５類	植物繊維・珪酸体混入	161
134	ＢＧ－64	Ⅴ	口縁部	組紐縄文	ナデ	Ⅲ群５類	植物繊維混入	222
135	ＣＯ－62	Ⅴ	口縁部	爪形文、結束第１種（ＬＲとＬＲ）、他条によって縄端を結束した文様、口唇部指頭圧痕？？	オサエ、ナデ	Ⅲ群５類	植物繊維混入	223
136	ＢＭ－44	Ⅴ	口縁部	斜行縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅲ群５類	植物繊維混入	234
137	ＢＬ－44	Ⅰ	口縁部	斜行縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅲ群５類	植物繊維混入	229
138	ＢＨ－63	Ⅴ	口縁部	組縄縄文	ナデ	Ⅲ群５類		147
139	ＢＪ－60	Ⅴ	口縁部	（原体不明）	ナデ	Ⅲ群５類	植物繊維混入	158
140	ＢＪ－60	Ⅴ	口縁部	組縄縄文	ナデ	Ⅲ群５類	植物繊維混入、補修孔	149
141	ＢＨ－52	Ⅴ	底部	斜行縄文（０段多条ＲＬ）	ナデ	Ⅲ群６類	植物繊維・珪酸体（微量）混入	442
142	ＢＭ－50	Ⅰ	底部	押し引き状刺突文、斜行縄文（０段多条ＲＬ）	ナデ	Ⅲ群６類	植物繊維・珪酸体混入	440

図番号	グリッド	層位	部位	外面施文文様	内面調整	分類	備考	整理番号
143	ＢＩ－69	Ⅴ	底部	押し引き沈線文	ナデ	Ⅲ群２類	植物繊維・珪酸体混入	441
144	ＢＭ－49	Ⅴ	口縁部	隆帯	ナデ	Ⅳ群１類		345
145	ＢＭ－49	Ⅴ	胴部	隆帯、斜行縄文（原体不明）	ナデ	Ⅳ群１類		341
146	ＢＭ－49	Ⅴ	胴部	隆帯、斜行縄文（原体不明）	ナデ	Ⅳ群１類		346
147	ＣＯ－75	Ⅳ	体部下半	沈線文、磨消縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅳ群２類		立48
第82図148	ＣＭ－55	Ⅴ	口縁部	隆帯、刺突文、沈線文、縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅴ群１類		263
149	ＢＪ－51	Ⅴ	口縁部	隆帯、沈線文、縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群１類		276
150	ＢＪ－51	Ⅴ	胴部	隆帯、沈線文、縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群１類		267
151	ＢＳ－71	Ⅴ	口縁部	隆帯、縄文（原体不明）	平滑なナデ	Ⅴ群１類		71
152	ＢＵ－70	Ⅴ	口縁部	隆帯、鰭状貼り付け、縄文（原体不明）	平滑なナデ	Ⅴ群１類	珪酸体微量混入	22
153	ＢＵ－70	Ⅴ	口縁部	隆帯、縄文（原体不明）	平滑なナデ	Ⅴ群１類	珪酸体微量混入	24
154	ＣＡ－73	Ⅰ	口縁部	ボタン状貼り付け、側面圧痕文（Ｌ）、斜行縄文（Ｒ）	ナデ	Ⅴ群２類		264
155	ＣＡ－73	Ⅰ	口縁部	ボタン状貼り付け、側面圧痕文（Ｌ）、斜行縄文（Ｒ）	ナデ	Ⅴ群２類		274
156	ＣＡ－73	Ⅰ	口縁部	（ボタン状貼り付け）、側面圧痕文（Ｌ）、斜行縄文（Ｒ）	ナデ	Ⅴ群２類		271
157	ＢＬ－66	Ⅰ	略完形	折り返し状口縁、沈線文、磨消縄文（ＲＬ）、結節回転文（Ｒ）	平滑なナデ	Ⅴ群３類		立4
158	ＢＰ－56	Ⅴ	体部上半	折り返し状口縁、刺突文、沈線文、磨消縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群３類	補修孔	73
159	ＢＭ－45	Ⅴ	口縁部	刺突文、沈線文、縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群３類		279
第83図160	ＣＧ－73	Ⅴ	略完形	折り返し状口縁、沈線文、縄文（ＬＲ）	平滑なナデ	Ⅴ群４類		立15
161	ＣＬ－80	Ⅰ	口縁部	沈線文、斜行縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群４類		28
162	ＣＬ－80	Ⅰ	口縁部	沈線文、磨消縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群４類		16

163	ＣＳ－61	Ⅴ	体部上半	６単位の波状口縁、折り返し口縁、刺突文、沈線文、縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群３類	珪酸体微量混入	立20
第84図164	ＣＫ－72	Ⅴ	略完形	４単位の波状口縁、沈線文、縄文（ＲＬ）、底面縄文？	平滑なナデ	Ⅴ群５類		立18
165	ＣＮ－78	Ⅴ	口縁部	沈線文、磨消縄文（ＬＲ）、底面縄文??	平滑なナデ	Ⅴ群５類		294
166	ＢＪ－51	Ⅴ	胴部	沈線文、斜行縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群５類		273
167	ＢＰ－75	Ⅳ	体部上半	８単位の波状口縁、沈線文、磨消縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群５類		立1
168	ＢＪ－44	Ⅴ	体部上半	口縁波頂部にボタン状貼り付け・直上口唇に刺突文、沈線文、縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群５類		265、278
第85図169	ＣＮ－65	Ⅴ	略完形	４単位の口縁突起、沈線文、磨消縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群５類		立23
170	ＣＫ－71	Ⅴ	口縁部	沈線文、斜行縄文（ＬＲ）	平滑なナデ	Ⅴ群５類		295
171	ＣＨ－65	Ⅴ	口縁部	沈線文、磨消縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群５類		63
172	表面採集		口縁部	沈線文、斜行縄文（原体不明）	平滑なナデ	Ⅴ群５類		70
173	ＣＫ－72	Ⅴ	口縁部	沈線文、磨消縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群５類		66
174	ＣＮ－78	Ⅴ	胴部	沈線文、磨消縄文（ＬＲ）	平滑なナデ	Ⅴ群５類		14
175	ＢＰ－75	Ⅳ	胴部	沈線文、斜行縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群５類		30
176	ＣＨ－63	Ⅳ	口縁部	沈線文、磨消縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群５類		75
第86図177	ＣＮ－76	Ⅴ	口縁部	沈線文、斜行縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群６類		302
178	ＣＮ－76	Ⅴ	口縁部	沈線文、斜行縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群６類		304
179	ＢＬ－67	Ⅴ	口縁部	隆帯、沈線文、斜行縄文（ＬＲ）	平滑なナデ	Ⅴ群６類		82－1
180	ＢＬ－67	Ⅴ	胴部	隆帯、沈線文、斜行縄文（ＬＲ）	平滑なナデ	Ⅴ群６類		82－5
181	ＢＬ－67	Ⅴ	口縁部	隆帯、突起、沈線文、斜行縄文（ＬＲ）	平滑なナデ	Ⅴ群６類		283－Ａ
182	ＢＬ－67	Ⅴ	胴部	隆帯、ボタン状貼り付け、沈線文、斜行縄文（ＬＲ）	平滑なナデ	Ⅴ群６類		284
183	ＢＬ－67	Ⅴ	胴部	沈線文、斜行縄文（ＬＲ）	平滑なナデ	Ⅴ群６類		82－4

図番号	グリッド	層位	部位	外面施文文様	内面調整	分類	備考	整理番号
184	ＢＬ－67	Ⅴ	胴部	隆帯、沈線文、斜行縄文（ＬＲ）	平滑なナデ	Ⅴ群６類		283－Ｂ
185	ＢＬ－67	Ⅴ	胴部	隆帯、沈線文、斜行縄文（ＬＲ）	平滑なナデ	Ⅴ群６類		82－3
186	ＢＬ－67	Ⅴ	胴部	隆帯、沈線文、斜行縄文（ＬＲ）	平滑なナデ	Ⅴ群６類		82－6
187	ＣＲ－65	Ⅳ	体部上半	連続短沈線文、沈線文、斜行縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群７類	珪酸体混入	277
第87図188	ＣＬ－57	Ⅴ	体部上半	６単位の波状口縁、沈線文	平滑なナデ	Ⅴ群８類		立46
189	ＣＪ－76	Ⅳ	体部上半	沈線文	平滑なナデ	Ⅴ群８類		立14
190	ＣＩ－61	Ⅳ	口縁部	８の字状貼り付け、連続刺突、沈線文	平滑なナデ	Ⅴ群８類		270
191	ＢＱ－75	Ⅳ	口縁部	隆帯、沈線文	ナデ	Ⅴ群８類		19
192	ＢＱ－57	Ⅴ	口縁部	沈線文、磨消縄文（ＬＲ）	平滑なナデ	Ⅴ群８類		207
193	ＢＰ－57	Ⅴ	口縁部	折り返し状口縁、沈線文	平滑なナデ	Ⅴ群８類		215
194	ＣＳ－61	Ⅴ	略完形	貫通孔のある突起、沈線文、底面穿孔・笹の葉の圧痕文？	平滑なナデ	Ⅴ群８類	底面外側から穿孔、外面赤色顔料	立42
195	ＢＩ－50	Ⅳ	胴部	突起、沈線文	平滑なナデ	Ⅴ群８類	珪酸体混入	259、262
第88図196	ＣＳ－61	Ⅴ	体部下半	貫通孔のある突起、沈線文	平滑なナデ	Ⅴ群８類	外面に赤色顔料付着	立21
197	ＣＥ－73	Ⅴ	胴部	沈線文	平滑なナデ	Ⅴ群８類	珪酸体混入	76
198	ＢＫ－52	Ⅰ	胴部	沈線文、縄文（ＬＲ）	平滑なナデ	Ⅴ群９類		194
199	ＢＫ－52	Ⅰ	胴部	沈線文、縄文（ＬＲ）、ＲＬ？	平滑なナデ	Ⅴ群９類		272
200	ＣＨ－65	Ⅴ	口縁部	焼成前の貫通孔、沈線文、磨消縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群10類		83－2
201	ＣＨ－65	Ⅴ	口縁部	焼成前の貫通孔、沈線文、磨消縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群10類		83－1
202	ＣＰ－69	Ⅴ	口縁部	把手、刺突文、沈線文、磨消縄文（ＬＲ）	平滑なナデ	Ⅴ群10類		74
第89図203	ＣＩ－72	Ⅴ	体部上半	側面圧痕文（Ｌ）、斜行縄文（Ｌ）	ナデ	Ⅴ群11類	珪酸体混入	立49

204	ＢＬ－43	Ⅴ	口縁部	側面圧痕文（Ｌ）、斜行縄文（Ｌ？）	平滑なナデ	Ⅴ群11類	珪酸体混入	258
205	ＢＶ－78	Ⅳ	口縁部	側面圧痕文（Ｌ）、斜行縄文（ＬＲ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類	珪酸体微量混入	256
206	ＣＬ－80	Ⅰ	口縁部	側面圧痕文（Ｌ）、斜行縄文（Ｌ）	ナデ	Ⅴ群11類	珪酸体混入	125
207	ＣＩ－71	Ⅴ	口縁部	側面圧痕文（Ｌ）、斜行縄文（Ｌ）	ナデ	Ⅴ群11類	珪酸体微量混入	72、248
208	ＢＧ－64	Ⅴ	口縁部	折り返し口縁、斜行縄文（ＬＲ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類	珪酸体微量混入	266
209	ＣＧ－63	Ⅳ	口縁部	折り返し口縁、斜行縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類		39
210	ＢＯ－44	Ⅰ	口縁部	折り返し口縁、単軸絡条体回転文（第５類、Ｌ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類		184
211	ＣＭ－68	Ⅳ	口縁部	単軸絡条体回転文（第５類、Ｌ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類		179
212	ＣＭ－72	Ⅳ	口縁部	単軸絡条体回転文（第５類、Ｒ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類	珪酸体微量混入	59
213	ＢＱ－75	Ⅳ	胴部	単軸絡条体回転文（第５類、Ｒ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類		52
214	ＢＪ－51	Ⅳ	口縁部	斜行縄文（Ｌ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類	珪酸体微量混入	251
215	ＢＪ－51	Ⅰ	口縁部	斜行縄文（Ｌ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類		243
216	表面採集		口縁部	磨消縄文（Ｌ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類		255
217	ＢＮ－44	Ⅰ	口縁部	交差縄文（０段多条ＬＲ）	ナデ	Ⅲ群３類	植物繊維混入	250
218	ＣＨ－63	Ⅳ	口縁部	斜行縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類		43
219	ＢＴ－73	Ⅴ	口縁部	斜行縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類		11
第90図220	ＣＭ－63	Ⅳ	略完形	閉じた縄端の回転圧痕、斜行縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類		立38
221	ＣＬ－80	Ⅰ	口縁部	閉じた縄端の回転圧痕、斜行縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類		64
222	ＢＰ－79	Ⅳ	体部上半	単軸絡条体回転文（第５類、ｒ）、斜行縄文（ＬＲ）	ナデ	Ⅴ群11類	珪酸体微量混入	261
223	ＣＭ－72	Ⅳ	口縁部	閉じた縄端の回転圧痕、斜行縄文（ＬＲ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類		51
224	ＣＧ－68	Ⅴ	口縁部	斜行縄文（異ったＬ２本によるＲＬ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類		17

図番号	グリッド	層位	部位	外面施文文様	内面調整	分類	備考	整理番号
225	ＣＫ－63	Ⅳ	体部上半	４単位の波状口縁、斜行縄文（ＬＲ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類		立35
226	ＣＥ－76	Ⅳ	体部上半	斜行縄文（異条によるＬＲ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類		立34
227	ＢＲ－70	Ⅴ	口縁部	斜行縄文（ＬＲ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類		1
228	ＢＰ－72	Ⅴ	口縁部	斜行縄文（Ｌ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類	珪酸体混入	249
229	ＣＪ－60	Ⅳ	口縁部	斜行縄文（ＬＲ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類		296
230	ＢＲ－78	Ⅳ	口縁部	斜行縄文（ＬＲ）	ナデ	Ⅴ群11類		2
231	ＣＮ－77	Ⅰ	口縁部	斜行縄文（Ｌ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類		32
第91図232	ＣＭ－79	Ⅰ	口縁部	斜行縄文（ＬＲ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類	珪酸体混入	49
233	ＢＱ－78	Ⅴ	口縁部	斜行縄文（ＬＲ）	オサエ、ナデ	Ⅴ群11類	珪酸体混入、補修孔	9
234	ＣＩ－70	Ⅴ	口縁部	斜行縄文（ＬＲ）、口唇部横位沈線	平滑なナデ	Ⅴ群11類		47
235	ＣＭ－60	Ⅴ	口縁部	斜行縄文（Ｌ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類	珪酸体混入	254
236	ＣＭ－59	Ⅴ	口縁部	斜行縄文（Ｌ）、口唇部縄文（Ｌ）	平滑なナデ	Ⅴ群11類	珪酸体混入	252
237	ＢＱ－70	Ⅴ	口縁部	斜行縄文（ＲＬＲ）	平滑なナデ	Ⅲ群３類	植物繊維、珪酸体混入	12
238	ＣＱ－82	Ⅳ	体部上半	沈線文（Ｘ字文、連続短沈線）	平滑なナデ	Ⅵ群１類	磨滅著しい	361
239	ＣＰ－63	Ⅳb	略完形	刻み、沈線文（雲形文）、縄文（ＬＲ）	ミガキ	Ⅵ群２類	内外面に赤色顔料付着	362
第92図240	ＢＲ－84	？	略完形	平行沈線文、結束沈線文、縦走縄文（ＲＬ）、口唇部指頭圧痕	ナデ	Ⅶ群１類		立61
第93図241	ＣＮ－60	Ⅳ	略完形	平行・鋸歯状沈線文→縞縄文・斜行縄文・口唇部（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア１類	珪酸体混入	立26
242	ＢＫ－48	Ⅳb	略完形	平行・鋸歯状沈線文、縦位刻み、地文・口唇部（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅷ群ア１類	珪酸体混入	367
第94図243	ＢＦ－74	Ⅳ	略完形	平行沈線文、６単位の小突起縦位押圧、縞縄文・口唇部（ＲＬ）	ヘタナデ	Ⅷ群ア１類	珪酸体混入	立58
244	ＢＨ－49	Ⅳ	略完形	平行沈線文、鋸歯状文、貼り付け状突起縦位刻み、地文・口唇部（ＲＬ）	ミガキ	Ⅷ群ア１類		309、310

第95図245	ＢＩ－49	Ⅳ	略完形	地文縄文→平行・コ字状・ハ字状沈線文→充塡縄文（ＲＬ、附加条縄文）、口縁部指頭圧痕、内面縄文（ＲＬ）	ナデ、ヘラケズリ？	Ⅷ群ア２類	珪酸体混入	立30
246	ＢＳ－74	Ⅳ	略完形	地文縄文（ＲＬ）→平行・波状・山形沈線文、体部下半平滑なナデ、一部の縄文充塡（ＲＬ）、４単位の小突起、口唇部縦位刻み	ヘラナデ	Ⅷ群ア２類	珪酸体混入	立8
第96図247	ＤＡ－74	Ⅳ	体部上半	口縁部、胴部下半地文（ＲＬ）→平行・鋸歯状・Ｔ字状・三角状沈線文、列点文→胴部充塡縄文（ＲＬ）、小突起縦位押圧、突起下に小貫通孔あり、口縁部内面縄文（ＲＬ）	ヘラナデ	Ⅷ群ア２類	珪酸体微量混入	立29
248	ＢＳ－74	Ⅳ	体部上半	平行沈線文、連孤文、列点文、縞縄文（ＲＬ）、口縁部縦位刻み、口唇部横位のヘラ状刺突	ヘラナデ	Ⅷ群ア２類	珪酸体混入	立53、508
249	ＣＲ－82	Ⅳ	体部上半	口縁部・胴部下半地文（ＲＬ）→連孤文、ブーメラン状文→充塡縄文（ＲＬ）、口唇部指頭圧痕	ヘラナデ	Ⅷ群ア２類	珪酸体混入	立60
第97図250	ＣＴ－65	Ⅳ	略完形	地文縄文（ＲＬ）→平行・鋸歯状・眼鏡状沈線文	ヘラナデ	Ⅷ群ア２類	珪酸体混入	立13
251	ＢＨ－50	Ⅳ	体部上半	竹管様工具による刺突文、鋸歯状・平行沈線文、地文・口唇部附加縄文、小突起縦位押圧	ナデ	Ⅷ群ア２類	珪酸体混入	立51
252	ＣＩ－84	Ⅳ	体部上半	地文縄文（ＲＬ）→平行・山形状・環状沈線文	刷毛目？	Ⅷ群ア２類	珪酸体混入	立36
第98図253	ＣＭ－66	Ⅳ	略完形	地文刷毛目文→平行・孤状沈線文、刺突文、小突起縦位押圧	ナデ	Ⅷ群ア３類		立54
254	ＣＬ－57	Ⅳ	略完形	地文縞縄文（ＲＬ）→縦位刻み、口唇部指頭圧痕、口縁部内面縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア４類	珪酸体混入	立19
255	ＢＫ－46	Ⅳ	略完形	縦走縄文（ＲＬ）、口唇部縦位刻み	平滑なナデ	Ⅷ群ア４類	珪酸体混入	立25
第99図256	ＢＧ－48	Ⅰ	略完形	地文縦走縄文・口唇部縄文（ＲＬ）、４単位の小突起内指頭圧痕	刷毛目？	Ⅷ群ア４類	珪酸体混入	立44
257	ＣＯ－68	Ⅳ	略完形	平行・鋸歯状沈線文、地文縦走縄文、口唇部縦位刻み	ナデ	Ⅷ群イ１類	珪酸体微量混入	立28
258	ＣＫ－65	Ⅳ	略完形	異状縄文（ＲＬ）、口唇部縦位刻み	ナデ	Ⅷ群イ３類	珪酸体混入	立11
第100図259	ＢＴ－74	Ⅳ	略完形	地文縄文（ＲＬ）、口唇部つまみ出しによる小波状口縁	ナデ	Ⅷ群イ３類	珪酸体混入	立33
260	ＣＯ－65	Ⅳ	体部上半	平行・鋸歯状沈線文→口縁部・胴部充塡縄文（ＲＬ）、口唇部・口縁部内面縄文（ＲＬ）→押し引き沈線２条	平滑なナデ	Ⅷ群イ２類	縄文部分に赤色顔料付着（内外面共）	215
261	ＣＱ－63	Ⅳ	体部上半・底部	２個一組の突起が３単位、刺突文、平行沈線文、交互刺突文、斜行縄文（ＬＲ）	ナデ	Ⅷ群ウ１類	珪酸体微量混入	305～308
第101図262	ＣＬ－56	Ⅳ	体部上半・底部	地文縦走縄文（ＲＬ）→交互刺突文、連続刺突文、風がまえ状・重山形状・平行等の沈線文、口唇部２条の刺突列、口縁内面縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ウ１類	珪酸体混入	立12、434
第102図263	ＣＬ－56	Ⅳ	略完形	地文縦走縄文（ＲＬ）→平行・三角懸垂・波状沈線文、浮線波状文、交互刺突文→充塡縄文（ＲＬ）口唇部刺突文	ナデ	Ⅷ群ウ１類	珪酸体混入	立17
第103図264	ＣＮ－68	Ⅳ	胴部	胴部下半縦走縄文（ＲＬ）→平行・鋸歯状・風がまえ状・ハ字状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	ヘラナデ	Ⅷ群ウ２類	珪酸体微量混入	625

図番号	グリッド	層位	部位	外面施文文様	内面調整	分類	備考	整理番号
265	ＣＲ－68	Ⅳ	胴部	地文縄文（ＲＬ）→平行・鋸歯状沈線文	ナデ	Ⅷ群ウ２類		立47
266	ＢＴ－74	Ⅳ	体部上半	地文縦走縄文・口唇部（ＲＬ）、口頸部縄端回転文　口唇部縦位刻み内を指頭圧痕	ナデ	Ⅷ群ウ２類		立32
第104図267	ＣＯ－67	Ⅳ	体部上半	地文縄文（ＲＬ）→押し引き状平行・鋸歯状沈線文　口唇部指頭圧痕	ナデ	Ⅷ群ア２類		185
268	ＢＩ－46	Ⅰ	体部上半	地文縦走縄文（ＲＬ）→平行沈線文　口唇部縄文（ＬＲ）	ナデ	Ⅷ群ア１類		192
269	ＢＨ－50	Ⅳ	体部上半	地文縦走縄文（ＲＬ）→平行沈線文　口唇部縦位刻み　口唇部（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア１類		186
270	ＣＮ－60	Ⅳ	胴部	地文縄文（ＲＬ）→押し引き状平行沈線文	ナデ	Ⅷ群ア１類		610
271	ＤＢ－66	Ⅳ	口縁部	地文縄文（ＲＬ）、単・平行沈線文	ナデ	Ⅷ群ア１類		406－Ｂ
272	ＢＫ－56	Ⅰ	口縁部	地文縦走縄文（ＲＬ）、平行沈線文→口端部縦位刻み	ナデ	Ⅷ群ア１類		459
273	ＢＫ－47	Ⅳb	口縁部	地文縦走縄文（ＲＬ）→平行・鋸歯状沈線文、口端部縦位刻み	ナデ	Ⅷ群ア１類	珪酸体混入	636
274	ＤＢ－66	Ⅳ	口縁部	地文縦走縄文（ＲＬ）→平行波状沈線文、口端部縦位刻み口縁部内面平行波状沈線文	ナデ	Ⅷ群ア１類		530
275	ＤＢ－66	Ⅳ	口縁部	地文縦走縄文（ＲＬ）→平行波状沈線文、口端部縦位刻み口縁部内面平行波状沈線文、縦位刻み	ナデ	Ⅷ群ア１類		529
276	ＢＨ－48	Ⅳ	胴部	最下部地文縦走縄文（ＲＬ）→平行・鋸歯状沈線文→沈線区画内充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア１類		205
277	ＢＨ－48	Ⅳ	胴部	最下部地文縦走縄文（ＲＬ）→平行・鋸歯状沈線文→沈線区画内充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア１類		603
278	ＣＰ－66	Ⅳ	胴部	平行・鋸歯状沈線文	ナデ	Ⅷ群ア１類		204
279	ＢＴ－74	Ⅳ	胴部	平行沈線文→縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア１類	珪酸体混入	196
第105図280	ＢＪ－47	Ⅰ	体部上半	口縁部斜行縄文（ＲＬ）→平行・重山形状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類		260－Ｂ
281	ＢＪ－47	Ⅰ	胴部	口縁部・胴部下半斜行縄文（ＲＬ）→平行・重山形状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類		260－Ａ
282	ＢＪ－47	Ⅰ	胴部下半	胴部下半斜行縄文（ＲＬ）→平行・重山形状沈線文	ナデ	Ⅷ群ア２類		260－Ｃ
283	ＢＰ－56	Ⅳ	口縁部	眼鏡状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）口縁部小突起縦位押圧	ナデ	Ⅷ群ア２類		622－Ａ
284	ＢＰ－56	Ⅳ	口縁部	眼鏡状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）口縁部小突起縦位押圧	ナデ	Ⅷ群ア２類		622－Ｂ

285	ＢＰ－56	Ⅳ	胴部	眼鏡状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類		622－Ｃ
286	ＣＬ－56	Ⅳ	口縁部	縦走縄文（ＲＬ？）、単・波状沈線文　口唇部縄文（ＲＬ？）縦位刻み	ナデ	Ⅷ群ア２類	珪酸体微量混入	478
287	ＢＨ－50	Ⅳ	口縁部	平行・縦位沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類	珪酸体微量混入	635
288	ＢＫ－47	Ⅳ	口縁部	地文縦走縄文（ＲＬ）→平行・縦位沈線文　内面沈線文・斜行縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類		210
289	ＣＮ	Ⅳ	口縁部	地文縦走縄文（ＲＬ）→平行・縦位沈線文、口唇部刻み	ナデ	Ⅷ群ア２類	珪酸体微量混入	475
290	ＣＱ－87	Ⅳ	口縁部	地文縦走縄文（ＲＬ）→平行沈線文→孤状沈線文　口唇部縦位押圧	ナデ	Ⅷ群ア２類	珪酸体混入	504
291	ＣＶ－84	Ⅳ	口縁部	折り返し口縁、横位沈線文、縦位刻み、地文・口唇部縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類	珪酸体混入	606
第106図292	ＢＩ－49	Ⅳ	口縁部	平行・鋸歯状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）口端部２回の指頭圧痕による連続圧痕　口唇部（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類		633
293	ＢＫ－48	Ⅰ	口縁部	平行・重山形状沈線文、地文縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類		629－Ａ
294	ＢＫ－48	Ⅰ	胴部	重山形状沈線文	ナデ	Ⅷ群ア２類		629－Ｂ
295	ＤＢ－66	Ⅳ	口縁部	平行・鋸歯状沈線文、斜行縄文（ＲＬ）、口端部縦位刻み	ナデ	Ⅷ群ア２類		406－Ｅ
296	ＤＢ－66	Ⅳ	胴部	平行・重山形状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類		406－Ａ
297	ＣＮ－62	Ⅳ	口縁部	縦走縄文（ＲＬ）、平行沈線文、口唇部縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類	補修孔	618－Ａ
298	ＢＨ－50	Ⅳ	胴部	平行・重山形状・連孤状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類		187
299	ＢＪ－50	？	胴部	孤状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類	珪酸体混入	390
300	ＢＨ－50	Ⅳ	胴部	平行・重山形状・連孤状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類		479
301	ＣＯ－60	Ⅳ	胴部	地文斜行縄文（ＲＬ）→平行沈線文	ナデ	Ⅷ群ア２類	珪酸体微量混入	642－Ａ
302	ＢＧ－48	Ⅰ	胴部	菱形状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類	珪酸体微量混入	621－Ａ
303	ＢＩ－46	Ⅰ	胴部	菱形状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類	珪酸体微量混入	621－Ｃ
304	ＢＨ－48	Ⅳ	胴部	菱形状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類	珪酸体微量混入	621－Ｂ
305	ＢＧ－48	Ⅰ	胴部	地文縦走縞縄文（ＲＬ）→菱形・山形・単沈線文→充塡斜行縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類		377

図番号	グリッド	層位	部位	外面施文文様	内面調整	分類	備考	整理番号
306	ＢＨ－50	Ⅳ	胴部	下半斜行縄文（ＲＬ）、平行・重弧状・重鋸歯状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類		193
307	ＢＫ－48	Ⅳ	胴部	平行・重弧状沈線文、刻み列	ナデ	Ⅷ群ア２類		623－Ａ
308	ＢＫ－48	Ⅳ	胴部	平行・鋸歯状沈線文、刻み列、地文斜行縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類		623－Ｂ
第107図309	ＣＭ－68	Ⅳ	口縁部	地文縄文（ＲＬ）→平行・鋸歯状沈線文　口端部刻み列	ナデ	Ⅷ群ア２類		653
310	表面採集		胴部	連続三角状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	平滑なナデ	Ⅷ群orＶ群		200
311	ＢＴ－76	Ⅳ	胴部	平行・重連弧沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類		206
312	ＤＡ－74	Ⅳ	胴部	平行・鋸歯状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類		493
313	ＣＱ－85	Ⅳ	胴部	平行・鋸歯状・山形状沈線文、状文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類		456
314	ＣＮ－62	Ⅳ	胴部	重菱形状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類		618－Ｃ
315	ＣＮ－62	Ⅳ	胴部	重菱形状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類		618－Ｂ
316	ＣＭ－63	Ⅳ	胴部	胴部下半附加縄文→平行・鋸歯状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類		618－Ｅ
317	ＣＡ－76	Ⅳ	胴部下半	地文縦走縄文（ＲＬ）→平行・弧状沈線文	ナデ	Ⅷ群ア２類		404
318	ＤＢ－67	Ⅳ	胴部下半	下半縦走縄文（ＲＬ）、平行・鋸歯状・弧状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア２類	珪酸体混入	620－Ａ
319	ＢＨ－50	Ⅳ	胴部下半	下半縞縄文（ＲＬ）→平行・鋸歯状沈線文	ナデ	Ⅷ群ア２類		453
320	ＢＨ－49	Ⅰ	胴部下半	平行・菱形状沈線文、地文縦走縄文（附加条縄文？）	ナデ	Ⅷ群ア２類	珪酸体混入	371
321	ＢＳ－74	Ⅳ	胴部上半	口頸部粘土貼り付け→指頭圧痕、地文縄文（ＲＬ）口唇部指頭圧痕	ナデ	Ⅷ群ア４類	珪酸体混入	501
322	ＢＩ－50	Ⅳ	口縁部	折り返し口縁→指頭圧痕、地文口唇部縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア４類		531
323	ＢＨ－50	Ⅰ	口縁部	折り返し状口縁→ヘラ状工具による圧痕、帯・斜行縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア４類	珪酸体混入	405－Ａ
第108図324	ＢＩ－46	Ⅰ	口縁部	口端部貼り付け→斜行縄文（ＬＲ）→指頭圧痕　口唇部指頭圧痕	ナデ	Ⅷ群ア４類		630
325	ＣＨ－65	Ⅳ	口縁部	地文・口唇部縄文（ＲＬ）→口端部縦位刻み	ナデ	Ⅷ群ア４類		507

326	ＣＳ－84	Ⅳ	口縁部	地文縞縄文（ＲＬ）→口端部縦位刻み	ナデ	Ⅷ群ア４類		513
327	ＢＫ－45	Ⅳ	口縁部	縞縄文・斜行縄文（ＲＬ）、口唇部縦位刻み	ナデ	Ⅷ群ア４類		468、470
328	ＢＫ－48	Ⅳb	口縁部	地文縦走縄文・口唇部縄文（ＲＬ）、口唇部指頭圧痕によって小突起作出	ナデ	Ⅷ群ア４類		188
329	ＢＮ－58	Ⅳ	口縁部	地文・口縁部内面附加縄文、小突起縦位押圧	刷毛目？	Ⅷ群ア４類		502
330	ＣＵ－64	Ⅰ	口縁部	地文・口唇部縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア４類		190
331	ＣＳ－84	Ⅳ	口縁部	縞縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア４類	珪酸体混入	505
332	ＣＪ－65	Ⅳb	口縁部	地文縦走縄文・口唇部縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア４類		407－Ａ
333	ＣＳ－84	Ⅳ	口縁部	斜行縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア４類	珪酸体微量混入	506
第109図334	ＣＭ－64	Ⅳb	口縁部	地文縞縄文・口唇部縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア４類		27－Ｂ
335	ＢＫ－48	Ⅳ	口縁部	地文縦走縄文・口唇部縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア４類		189
336	ＢＫ－47	Ⅳb	体部上半	地文斜行縄文・口唇部縄文（ＬＲ）	オサエ、ナデ	Ⅷ群ア４類	珪酸体混入	立50
337	ＣＳ－63	Ⅳ	胴部	縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア４類		393
338	ＣＳ－84	Ⅳ	胴部	縄文（上半原体不明、下半ＬＲ）	刷毛目？	Ⅷ群ア４類		473
339	ＣＪ－65	Ⅳb	胴部下半	縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア４類		407－Ｂ
340	ＣＱ－68	Ⅳ	口縁部	刷毛目？、口唇部縦位刻み	刷毛目？	Ⅷ群ア５類		517
第110図341	ＣＯ－62	Ⅳ	口縁部	ナデ、口唇部指頭圧痕	ナデ	Ⅷ群ア５類		457
342	ＣＫ－67	Ⅰ	口縁部	ナデ、口唇部縄文（ＬＲ）	ヘラナデ	Ⅷ群ア５類		62
343	ＢＫ－46	Ⅳb	体部上半	ヘラナデ、（焼成前の貫通孔２個）	ヘラナデ	Ⅷ群ア５類	珪酸体混入	625
344	ＣＭ－64	Ⅳb	体部下半	縦走・横走縄文（ＲＬ）、下部斜行縄文・調整痕	ナデ	Ⅷ群ア６類		27－Ａ
345	ＤＡ－73	Ⅳ	体部下半	平行沈線文、上半ヨコナデ、下半縞縄文（ＲＬ）	刷毛目？	Ⅷ群ア６類	珪酸体混入	646
346	ＤＡ－74	Ⅳ	体部下半	縦走縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ア６類		645

図番号	グリッド	層位	部位	外面施文文様	内面調整	分類	備考	整理番号
第111図347	ＣＳ－63	Ⅳ	口縁部	地文斜行・縦走縄文（ＲＬ）→平行沈線文	ナデ	Ⅷ群イ１類		197
348	ＣＫ－62	Ⅳ	口縁部	斜行縄文（ＬＲ）→平行・鋸歯状沈線文	ナデ	Ⅷ群イ１類	珪酸体混入	482
349	ＢＪ－47	Ⅰ	口縁部	波状口縁　斜行縄文（Ｌ）→沈線文	平滑なナデ	Ⅷ群イ１類	珪酸体微量混入	488
350	ＢＮ－63	Ⅳ	口縁部	平行沈線文、縞縄文・口唇部縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群イ１類		466
351	ＢＳ－74	Ⅳ	口縁部	平行沈線文→縞縄文（ＲＬ）　口唇部縦位刻み	ナデ	Ⅷ群イ１類	珪酸体混入	514
352	ＢＨ－49	Ⅳ	口縁部	地縄文（ＲＬ）→平行沈線文　口唇部縄文（原体不明）波状口縁	ナデ	Ⅷ群イ１類	珪酸体微量混入	494
353	ＣＶ－63	Ⅳ	口縁部	地文縦走・口唇部縄文（ＲＬ）→平行・結束沈線文　口縁部小突起縦位押圧	ナデ	Ⅷ群イ１類		602
354	ＢＳ－74	Ⅳ	口縁部	地文縦走・口唇部縄文（ＲＬ）→平行・鋸歯状沈線文	ナデ	Ⅷ群イ１類		525
355	ＢＩ－44	Ⅳ	口縁部	口唇部横位沈線文→口端部縦位刻み→平行沈線文　横走縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群イ１類	珪酸体混入	471
356	ＣＡ－75	Ⅳ	口縁部	縦走縄文（ＲＬ）→平行沈線文、口端部縦位刻み	ナデ	Ⅷ群イ１類		492
357	ＣＭ－62	?	口縁部	鋸歯状・単・変形鋸歯状沈線文　口唇部沈線文	ナデ	Ⅷ群イ１類	珪酸体混入	400
358	ＣＮ－62	Ⅳ	口縁部	鋸歯状・単沈線文　口唇部沈線文	ナデ	Ⅷ群イ１類	珪酸体混入	499
359	ＢＱ－57	Ⅳ	口縁部	単・鋸歯状沈線文　口唇部斜位刻み	ナデ	Ⅷ群イ１類		515
360	ＣＡ－66	Ⅳ	口縁部	地文縦走縄文（ＲＬ）→平行・鋸歯状沈線文　口唇部（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群イ１類		643
361	ＢＪ－59	Ⅳ	口縁部	横走縄文（ＲＬ）、平行・鋸歯状沈線文	ナデ	Ⅷ群イ１類		369
第112図362	ＣＩ－95	Ⅳ	口縁部	斜行縄文（ＲＬ）→平行沈線文→山形状沈線文	ナデ	Ⅷ群イ２類		512
363	ＢＬ－45	Ⅰ	口縁部	地文斜行縄文（ＬＲ）→平行沈線文→連続刺突文　口縁部小突起	ナデ	Ⅷ群イ２類		411
364	ＣＢ－76	Ⅰ	口縁部	地文縦走縄文（ＲＬ）→重山形状沈線文　口唇部縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群イ２類		516
365	ＢＫ－48	Ⅰ	口縁部	平行沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群イ２類		469
366	ＢＫ－65	Ⅳ	口縁部	斜行縄文（ＲＬ）→平行沈線文	ナデ	Ⅷ群イ２類	珪酸体混入	490

367	ＤＢ－67	Ⅳ	口縁部	口端部縦位刻み目、鋸歯状・重弧状沈線文	ナデ	Ⅷ群イ２類	珪酸体混入	620－Ｂ
368	ＣＦ－93	Ⅳ	口縁部	口端部貼付・斜位刻み目、平行・重山形状沈線文、刺突列、斜行縄文（ＲＬ）、小突起縦位押圧	ナデ	Ⅷ群イ２類	珪酸体混入	527
369	ＣＨ－65	Ⅳ	口縁部	平行沈線文	ナデ	Ⅷ群イ２類	珪酸体混入	79
370	ＣＯ－65	Ⅳb	体部上半	平行沈線文→縦位山形状沈線文　縦位貼り付け→横位刻み目	ナデ	Ⅷ群イ２類		184
371	ＢＪ－51	Ⅳ	体部上半	地文縄文（ＲＬ）→平行沈線文→連続刺突文→山形状沈線文→山形文内縦位沈線文→充塡縄文（ＲＬ）、口唇部斜行縄文（ＲＬ）、口唇部小突起	ナデ	Ⅷ群イ２類		207
372	ＢＧ－48	Ⅰ	口縁部	沈線文→充塡縄文・口縁部・口唇部縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群イ２類		212
373	ＢＨ－48	Ⅳ	口縁部	沈線文、斜行縄文・口唇部縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群イ２類		395
374	ＢＫ－47	Ⅳ	口縁部	鋸歯状・平行・弧状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）口唇部縦位刻み	ナデ	Ⅷ群イ２類		632
375	ＢＨ－48	Ⅳ	口縁部	沈線文、斜行縄文・口唇部縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群イ２類		415
376	ＤＢ－66	Ⅳ	口縁部	沈線文、口縁部斜行縄文（ＬＲ）、口唇部縦位刻み	ナデ	Ⅷ群イ２類		383
377	ＣＯ－60	Ⅳ	口縁部	平行・縦位沈線文、口縁部・口唇部・沈線区画内縄文（ＲＬ）口縁部内面沈線文	ナデ	Ⅷ群イ２類		463
378	ＢＨ－49	Ⅰ	胴部	眼鏡状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群イ２類		381
379	ＢＧ－49	Ⅳ	胴部下半	平行沈線文、縦走縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群イ２類		419
第113図380	ＣＯ－63	Ⅳ	体部上半	縦走縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群イ３類		199
381	ＣＥ－75	Ⅳ	口縁部	斜行縄文・口唇部縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群イ３類		208
382	ＢＫ－47	Ⅳb	口縁部	縦走縄文（ＲＬ）、口唇部指頭圧痕による小突起	ナデ	Ⅷ群イ３類		484
383	ＣＯ－65	Ⅳb	口縁部	地文縄文（ＲＬ）→口端部縄の側面圧痕文　口唇部（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群イ３類	珪酸体混入	474
384	ＣＯ－63	Ⅳb	口縁部	地文縦走縄文（ＲＬ）、口縁部縦位刻み	ナデ	Ⅷ群イ３類	珪酸体混入	397
385	ＢＫ－47	Ⅳb	口縁部	附加条縄文　口縁部縦位刻み	ナデ	Ⅷ群イ３類		489
386	ＣＯ－63	Ⅳ	口縁部	縦走縄文・口唇部縄文（ＲＬ）、口縁部縦位刻み	ナデ	Ⅷ群イ３類		520
387	ＢＨ－48	Ⅳ	口縁部	縦走縄文・口唇部縄文（ＲＬ）、口縁部縦位刻み	ナデ	Ⅷ群イ３類	珪酸体微量混入	379

図番号	グリッド	層位	部位	外面施文文様	内面調整	分類	備考	整理番号
388	ＢＫ－50	Ⅳ	口縁部	縦走縄文（ＲＬ）、口端部指頭圧痕による小波状口縁	ナデ	Ⅷ群イ３類	珪酸体微量混入	401
389	ＣＳ－84	Ⅳ	口縁部	縞縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群イ３類	珪酸体混入	481
390	ＣＡ－75	Ⅳ	口縁部	斜行縄文・口唇部縄文（ＲＬ）、口端部縦位刻み	ナデ	Ⅷ群ウ２類	珪酸体混入	503
391	ＣＮ－62	Ⅳ	口縁部	口縁部貼り付け・粘土の補充とつまみ出しによるブリッジ状仕切り、縦走縄文・口唇部縄文（ＲＬ）	オサエ、ナデ	Ⅷ群ウ２類	補修孔、焼成前の孔、401と接合	628
392	ＣＯ－62	Ⅳ	口縁部	地文縦走縄文・口縁部内面横走縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ウ２類		465
393	ＢＫ－47	Ⅳb	口縁部	口縁部貼り付け、口端部縦位刻み・１条の横位沈線、口頸部平行沈線	ナデ	Ⅷ群ウ３類		627
394	ＢＺ－83	Ⅳ	口頸部	沈線文、押し引き沈線文、縦走沈線文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ウ２類	体部内面剥落顕著	282
第114図395	ＣＲ－68	Ⅳ	口縁部	平行沈線文、地文斜行縄文・口唇部・口縁部内面縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ウ２類		626
396	ＣＲ－68	Ⅳ	口縁部	平行沈線文、地文斜行縄文・口唇部・口縁部内面縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ウ２類		627
397	ＣＯ－58	Ⅳb	口縁部	口唇部縄文（ＲＬ）→平行・鋸歯状沈線文	ナデ	Ⅷ群ウ２類		201
398	ＤＢ－66	Ⅳ	口縁部	口唇部縦走縄文（ＲＬ）、平行沈線文	ナデ	Ⅷ群ウ２類	珪酸体混入	500
399	ＢＪ－45	Ⅰ	口頸部	眼鏡状沈線文、横走縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ウ２類	珪酸体混入	370
400	ＢＨ－48	Ⅳ	口頸部	平行・鋸歯状等沈線文、横走縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ウ２類		391
401	ＢＪ－51	Ⅳ	口頸部	口頸部縦走縄文（ＲＬ）・平行・弧状沈線文→充塡斜行縄文（ＲＬ）焼成前の貫通孔	ナデ	Ⅷ群ウ２類	391と接合	202
402	ＣＯ－58	Ⅳ	口頸部	弧状・三角懸垂状沈線文→充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ウ２類		519
403	ＣＯ－63	Ⅳ	胴部上半	地文斜行縄文（ＲＬ）→平行・鋸歯状・波状沈線文	ナデ	Ⅷ群ウ２類		191
404	ＣＰ－82	Ⅳ	胴部下半	斜行縄文（ＲＬ）、平行・連弧状・環状沈線文	ナデ	Ⅷ群ウ２類		518
405	ＣＯ－85	Ⅳ	胴部	重連弧状沈線文、斜行縄文（ＬＲ）	ナデ	Ⅷ群ウ２類	珪酸体微量混入	455
406	ＣＯ－85	Ⅳ	胴部	重連弧状沈線文、斜行縄文（ＬＲ）	ナデ	Ⅷ群ウ２類	珪酸体微量混入	631
407	ＢＩ－49	Ⅳ	胴部	平行沈線文、斜行縄文	ナデ	Ⅷ群ア２類	珪酸体混入	648

408	ＢＶ－78	Ⅳ	胴部	縦走縄文（ＲＬ）→重三角状文→磨消縄文	ナデ	Ⅷ群ウ２類	珪酸体混入、無文地赤色	477
409	ＢＬ－45	Ⅰ	胴部	斜行・横走縄文（ＲＬ）、弧状沈線文	ナデ	Ⅷ群ウ２類		619－Ｂ
410	ＢＬ－45	Ⅰ	胴部	縞縄文・横走縄文（ＲＬ）、平行・鋸歯状・弧状沈線文	ナデ	Ⅷ群ウ２類		619－Ｃ
411	ＢＬ－45	Ⅰ	胴部	縞縄文・横走縄文（ＲＬ）、平行・鋸歯状・弧状沈線文	ナデ	Ⅷ群ウ２類		619－Ａ
412	ＢＫ－49	Ⅳ	口頸部	平行・波状沈線文、縦走縄文（ＲＬ）、側面圧痕文（Ｌ）	ナデ	Ⅷ群ウ２類	珪酸体微量混入	495
413	ＢＫ－48	Ⅳb	胴部	平行沈線文、側面圧痕文（Ｌ）斜行縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群ウ２類	珪酸体混入	378
414	ＢＭ－67	Ⅳ	口縁部	平行沈線文、交互刺突文、口端部・口唇部交互に刻み	ナデ	Ⅷ群ウ１類	珪酸体混入	607
415	ＢＩ－46	Ⅳ	胴部	交互刺突文、重環状沈線文	ナデ	Ⅷ群ウ１類	珪酸体混入	386
第115図416	ＣＳ－63	Ⅳ	体部上半	口縁部・胴部下半縄文（ＲＬ）→平行・重波状文→充塡縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群エ		412
417	ＢＨ－48	Ⅳ	口縁部	口縁部貼り付け・縦位刻み→斜行縄文（ＲＬ）→平行沈線文　鋸歯状沈線文　口唇部（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群エ		408－Ａ
418	ＢＩ－49	Ⅳ	口縁部	口縁部貼り付け・斜位刻み→斜行縄文（ＲＬ）→平行沈線文　鋸歯状沈線文	ナデ	Ⅷ群エ		408－Ｂ
419	ＢＫ－50	Ⅳ	口縁部	縦走縄文（ＲＬ）、口唇部刻みによる小波状口縁	ナデ	Ⅷ群エ	珪酸体混入	399
420	ＢＩ－50	Ⅳ	胴部	縦走縄文（ＲＬ）、単・弧状沈線文	ナデ	Ⅷ群エ		414
421	ＢＫ－47	Ⅳb	体部下半	平行・鋸歯状沈線文、斜行縄文（ＲＬ）、底部に焼成前の貫通孔	ナデ	Ⅷ群エ	珪酸体微量混入	638
422	ＣＯ－65	Ⅳ	下端部	外面下端・口唇部にそれぞれ１条の沈線	ナデ	Ⅷ群オ		376
423	ＢＫ－46	Ⅳ	つまみ部	平行沈線文、焼成前の貫通孔が中心を通る直線上に１対	ナデ	Ⅷ群オ	珪酸体混入	ホ
424	ＢＨ－49	Ⅳ	つまみ部	（無文）	ナデ	Ⅷ群オ	珪酸体混入	メ
425	ＢＨ－69	Ⅳ	底部	斜行縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群カ		641
426	ＣＦ－93	Ⅳ	底部	斜行縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群カ	珪酸体混入	526
427	ＣＳ－63	Ⅳ	底部	斜行縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群カ		410
428	ＣＡ－76	Ⅳ	底部	斜行縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群カ		433

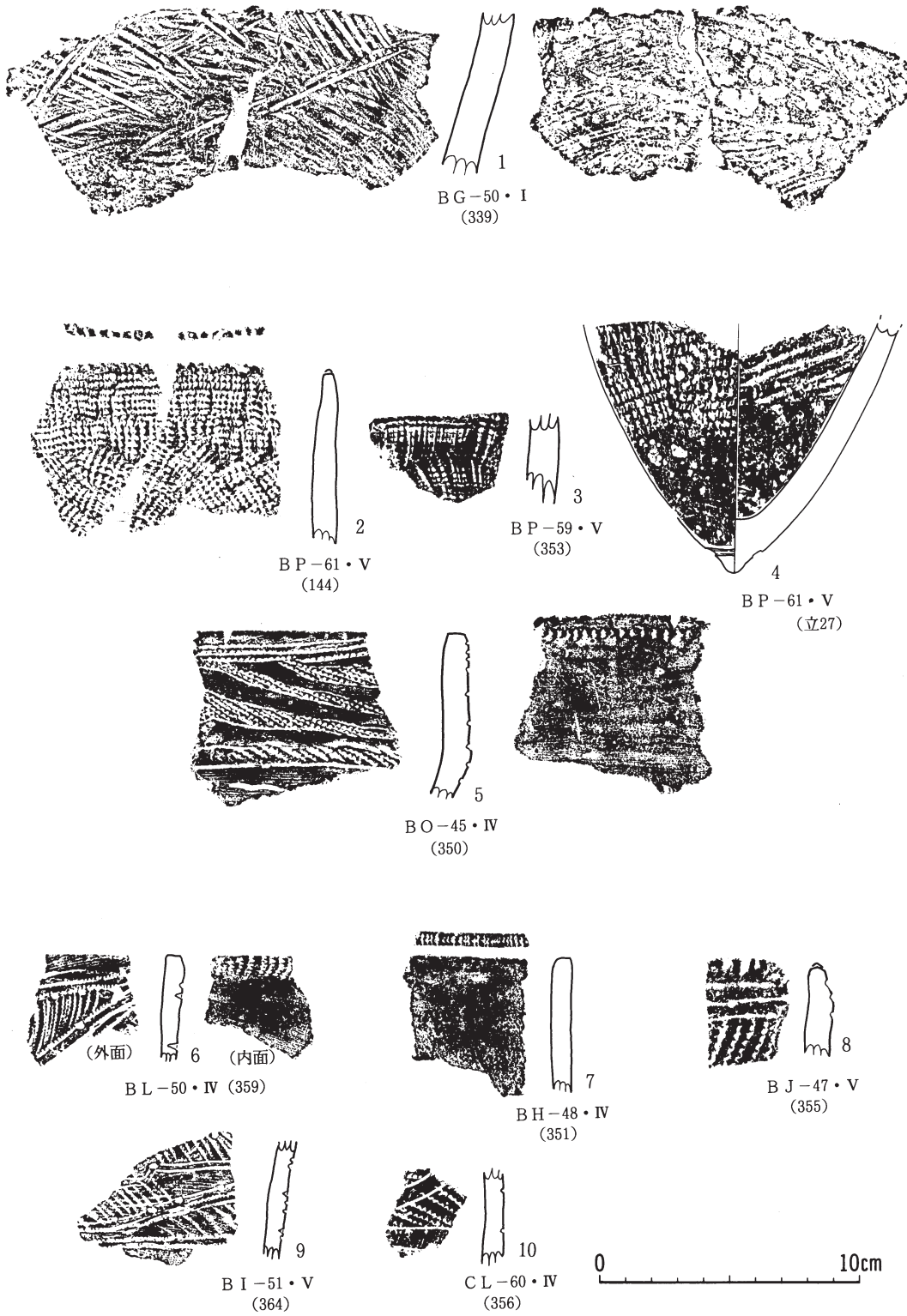
図番号	グリッド	層位	部位	外面施文文様	内面調整	分類	備考	整理番号
429	ＢＩ－50	Ⅳ	底部	縞縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群カ	珪酸体混入	639
430	ＣＮ－60	Ⅳ	底部	縦走縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群カ	珪酸体混入	422
431	ＢＬ－45	Ⅳ	底部	縦走縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群カ		429
432	ＤＢ－66	Ⅳ	底部	縦走縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群カ	珪酸体混入	424
433	ＣＳ－63	Ⅳ	底部	単・弧状沈線文	ナデ	Ⅷ群カ		409
434	ＢＧ－50	Ⅳ	底部	（無文）	ナデ	Ⅷ群カ	珪酸体混入	432
435	ＢＭ－50	Ⅰ	底部	斜行縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群カ		421
436	ＣＺ－73	Ⅳ	底部	（無文）	ナデ	Ⅷ群カ	珪酸体混入	431
437	ＣＱ－82	Ⅳ	底部	斜行縄文（ＲＬ）	ナデ	Ⅷ群オorカ	珪酸体混入	425
438	ＣＪ－63	Ⅳb	つまみ部	平行沈線文、横走縄文（ＬＲ）	ナデ	Ⅷ群オ		640
439	ＢＫ－48	Ⅳb	底部	（無文）	ナデ	Ⅸ群		モ
440	ＢＬ－43	Ⅴ	胴部	結束第１種（ＲＬとＬＲ）、断面に顕著な擦り	ナデ	Ⅸ群	植物繊維、珪酸体混入	180

遺構外出土第Ｘ群土器・須恵器（第116・117図 1～47）観察表

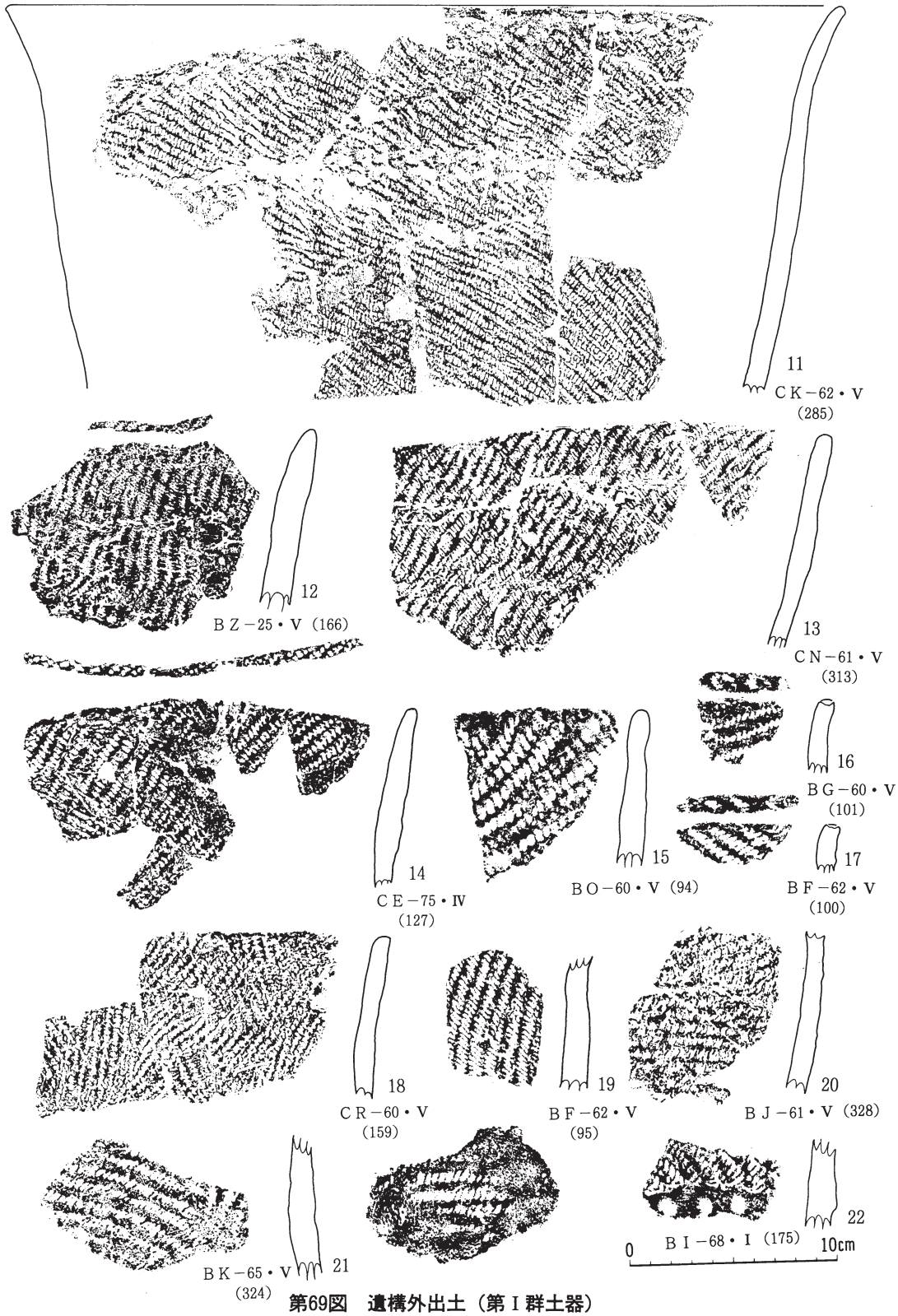
番号	出土地点		計測値（cm）			器種	部位	外面	内面	底部	分類	備考
	グリッド	層位	口径	底径	器高							
1	ＣＢ－76	Ⅰ	13.4	5.4	5.7	坏	完形	ロクロ・ナデ	カキメ	回転糸切	Ⅰ	土師器
2	ＣＨ－75	Ⅰ				〃	口縁部	ロクロ・ナデ			Ⅰ	〃
3	ＣＨ－79	Ⅲ				〃	〃	ロクロ・ナデ			Ⅰ	〃
4	ＣＨ－75	Ⅲ				〃	〃	ロクロ			Ⅱ	〃
5	ＣＨ－75	Ⅰ				〃	底部	ロクロ		回転糸切		〃
6	ＣＨ－68	Ⅲ	18.4			甕	口縁部	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ			〃
7	ＣＧ－77	Ⅲ	21.0			〃	〃	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ			〃
8	ＣＧ－77	Ⅲ	16.4			〃	〃	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ			〃
9	ＣＢ－72	Ⅲ	17.2			〃	〃	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ			〃
10	ＣＨ－68	Ⅲ	22.0			〃	〃	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ			〃
11	ＣＦ－76	Ⅲ				〃	〃	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ナデ			〃
12	ＣＨ－70	Ⅰ				〃	〃	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ			〃
13	ＣＨ－75	Ⅰ				〃	〃	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ			〃
14	ＣＫ－79	Ⅲ				〃	〃	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ナデ			〃
15	ＢＮ－68	表採				〃	〃	ナデ	ナデ			〃
16	ＣＦ－76	Ⅲ				〃	〃	ヘラナデ	ナデ			〃
17	ＣＫ－67	Ⅰ				〃	〃	ヨコナデ・ヘラナデ	ナデ			〃
18	ＣＩ－77	Ⅲ				〃	〃	ヨコナデ	ナデ			〃

番号	出土地点		計測値（cm）			器種	部位	外面	内面	底部	分類	備考
	グリッド	層位	口径	底径	器高							
19	CF−76	Ⅲ				甕	口縁部	ナデ	ナデ			土師器
20	CH−76	Ⅲ				〃	〃	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ			〃
21	CK−79	Ⅲ				〃	〃	ナデ	ヨコナデ・ナデ			〃
22	CH−70	Ⅰ				〃	〃	ヨコナデ・ヘラナデ	ヘラナデ・ナデ			〃
23	CJ−76	Ⅲ				〃	〃	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ			〃
24	CR−61	Ⅲ				〃	〃	ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラナデ			〃
25	BK−63	Ⅲ				〃	〃	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ヘラナデ			〃
26	CH−70	Ⅲ				〃	〃	ヨコナデ	ナデ			〃
27	CK−79	Ⅲ				〃	〃	ロクロ・指ナデ	ナデ			〃
28	CK−64	Ⅲ				〃	〃	ロクロ				〃　8H-6Tと同一個体
29	CF−76	Ⅲ		7.0		〃	底部	ヘラナデ	指ナデ・ナデ	木葉痕・ヘラナデ		〃
30	CK−65	Ⅲ		5.0		〃	〃	ナデ	ナデ	砂		〃
31	CH−70	Ⅰ				〃	〃	ロクロ・ナデ	ナデ	糸切・ヘラナデ		〃
32	CG−74	Ⅲ				〃	〃	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ		〃
33	BH−72	Ⅲ				〃	〃	?	ヘラナデ	木葉痕		〃
34	CK−79	Ⅲ				〃	〃	ヘラナデ	ナデ	木葉痕		〃
35	CF−76	Ⅲ				〃	〃	ヘラナデ	指ナデ	ヘラナデ		〃
36	CS−68	Ⅲ				〃	〃	指ナデ	ナデ	ヘラナデ		〃
37	CF−90	Ⅲ				〃	〃	ナデ	ナデ			〃

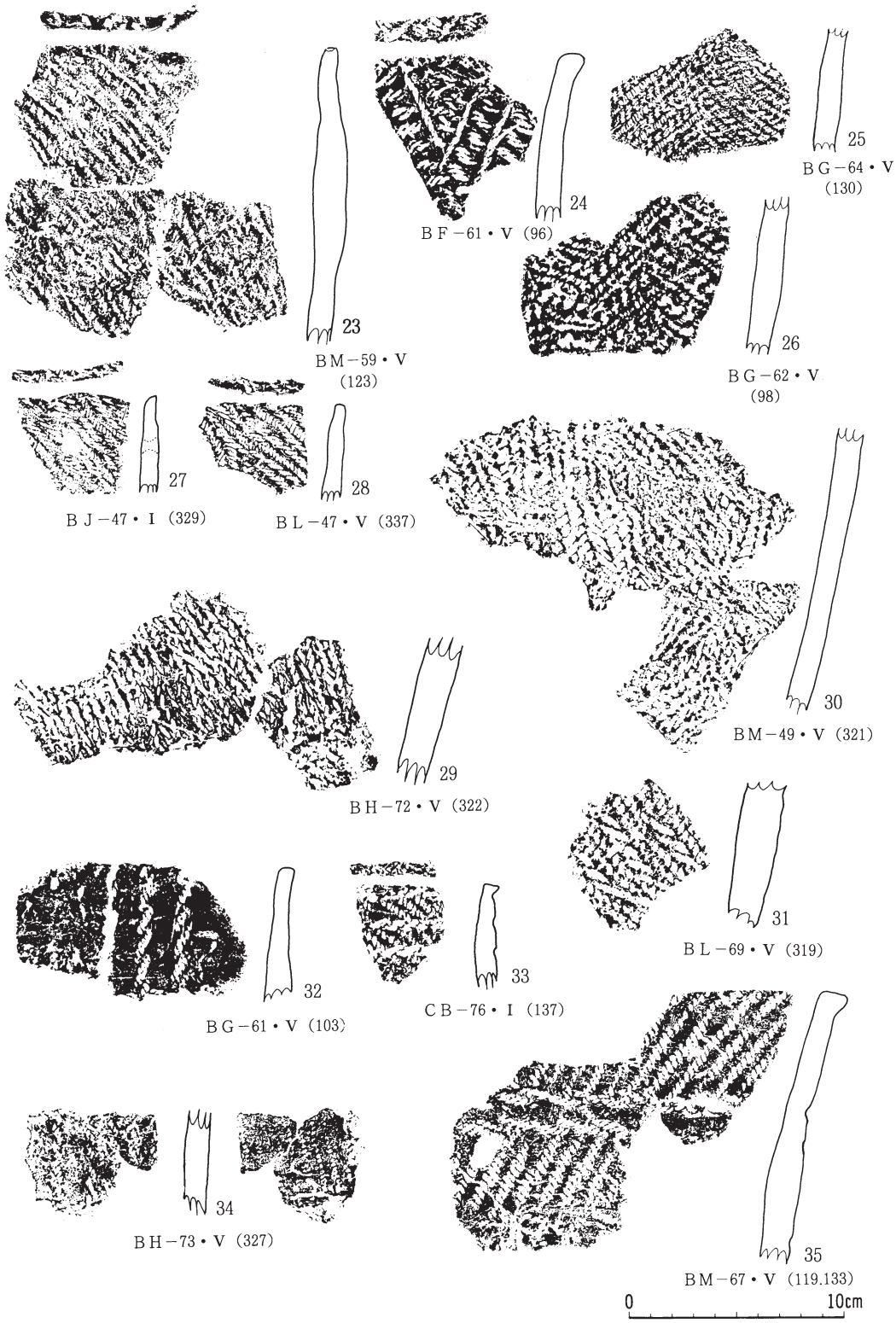
38	ＢＮ－68	表採				〃	〃	ヘラナデ	指ナデ	砂		〃
39	ＣＮ－77	表採				?	〃	ナデ	ナデ	繊維		〃
40	ＣＧ－75	Ⅲ		10.8		甕	〃	ヘラナデ	ヘラナデ	木葉痕		〃
41	ＣＧ－75	Ⅲ				製　塩	口縁部					
42	ＣＧ－75	Ⅲ		19.2		〃	底　部					
43	ＣＡ－72	Ⅱ	19.1			甕	口縁部	タタキメ	アテグ痕			須恵器
44	ＣＡ－72	Ⅱ				〃	胴　部	タタキメ				〃　№43と同一個体
45	ＢＮ－59	Ⅲ				〃	〃	自然釉				〃
46	ＢＳ－60	表採				〃	〃	タタキメ				〃
47	ＣＭ－84	Ⅲ		4.3		?	底　部	ロクロ				灰釉陶器



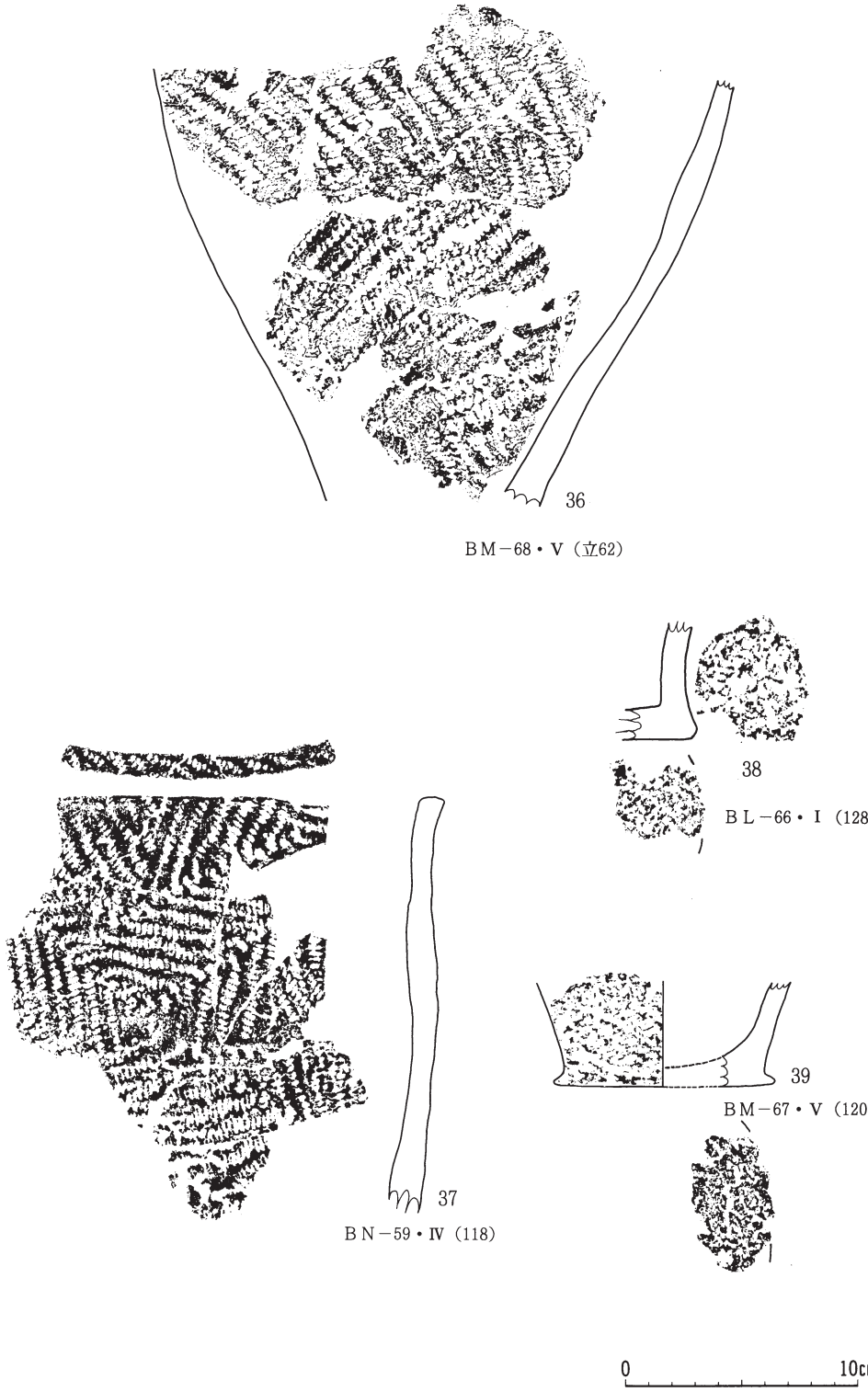
第68図　遺構外出土（第Ⅰ群土器）



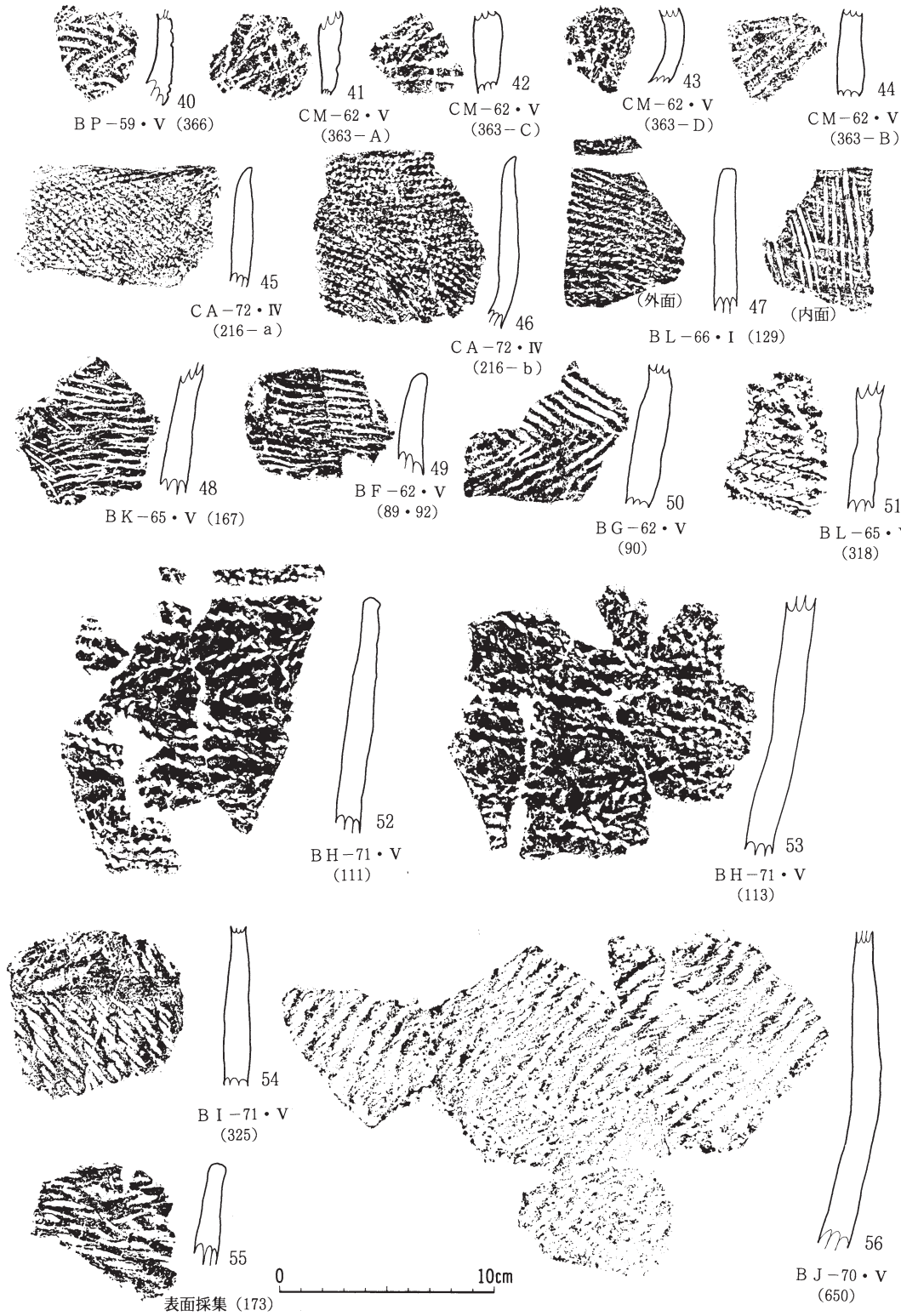
第69図　遺構外出土（第Ⅰ群土器）



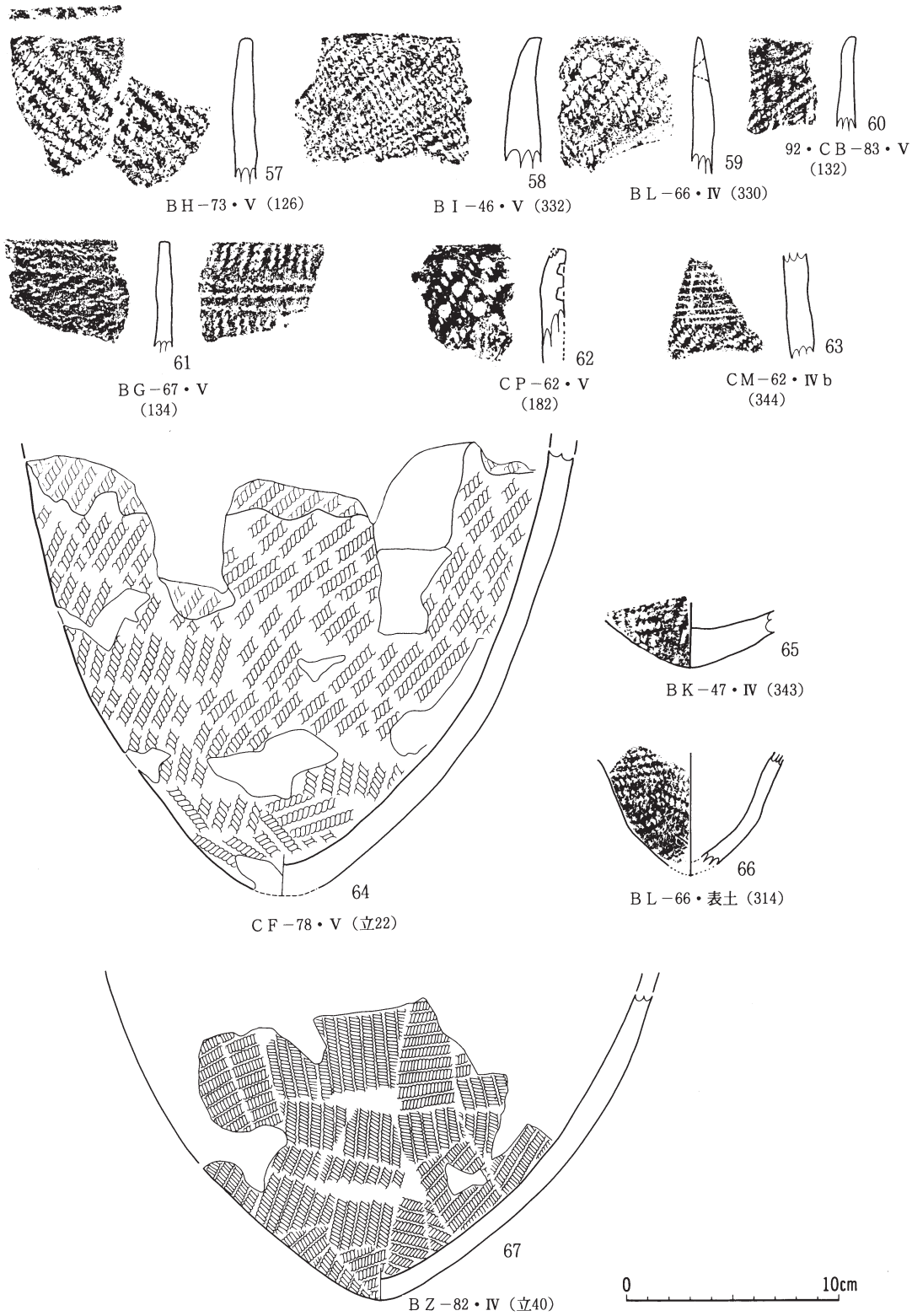
第70図　遺構外出土（第Ⅰ群土器）



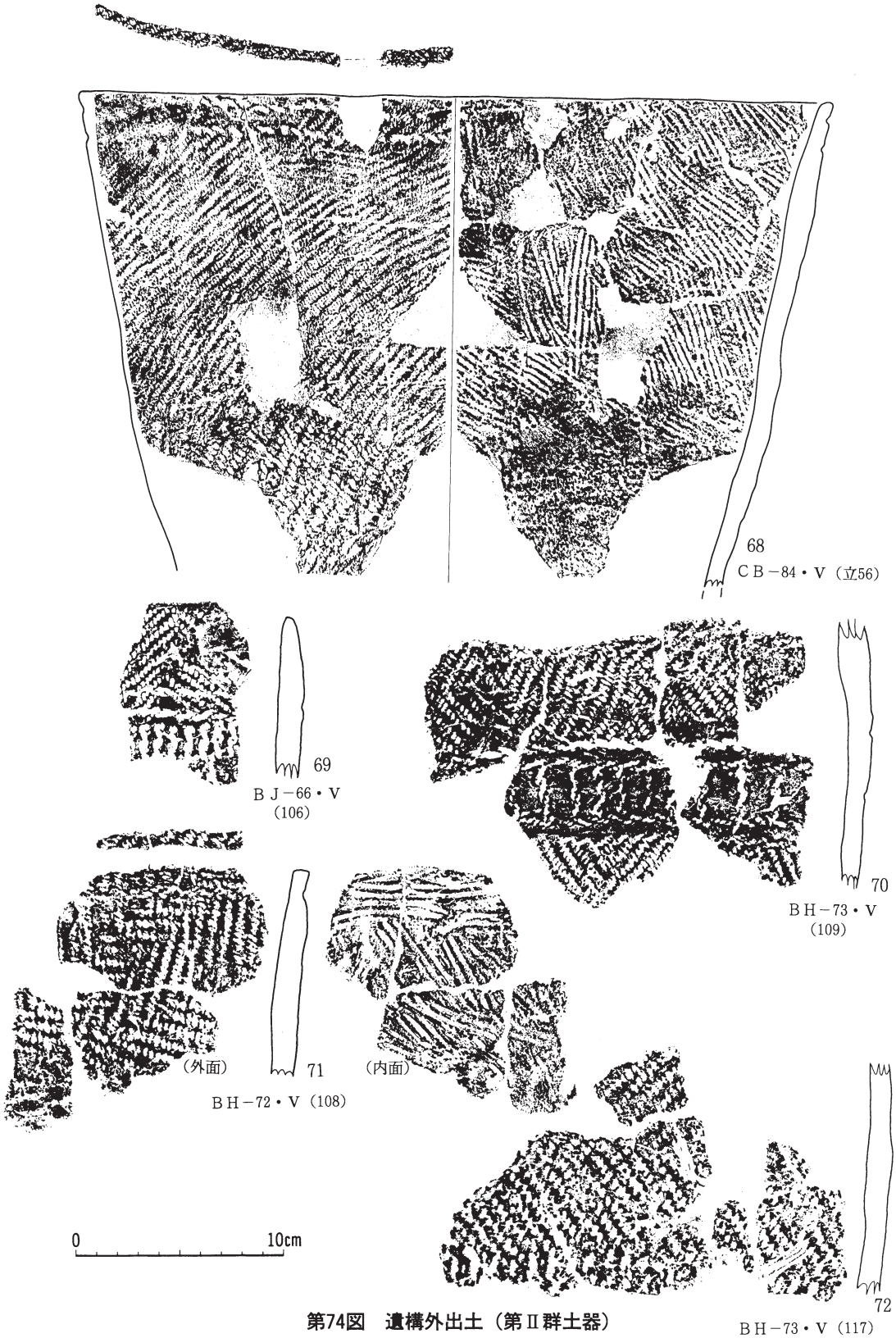
第71図　遺構外出土（第Ⅰ群土器）



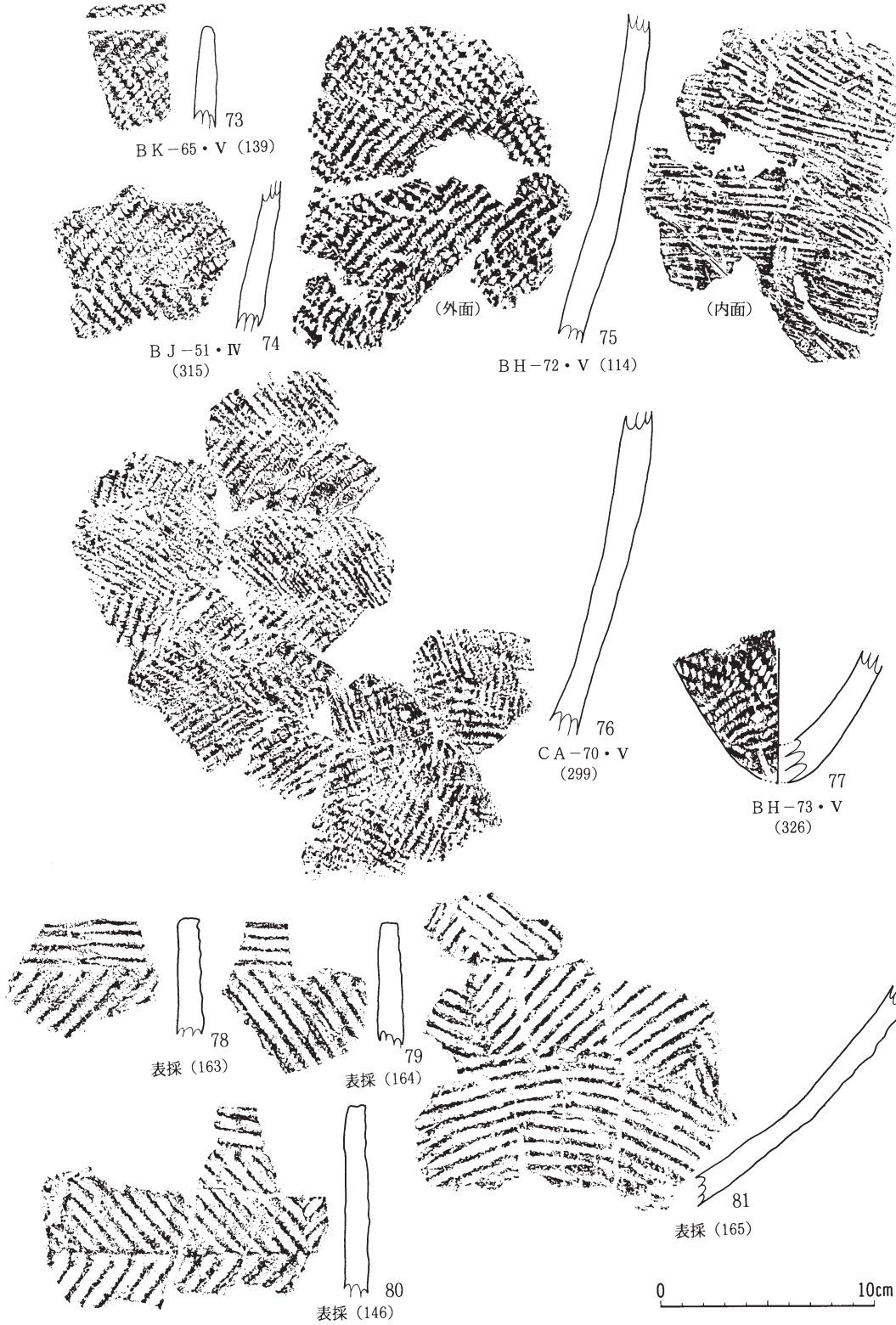
第72図　遺構外出土（第Ⅱ群土器）



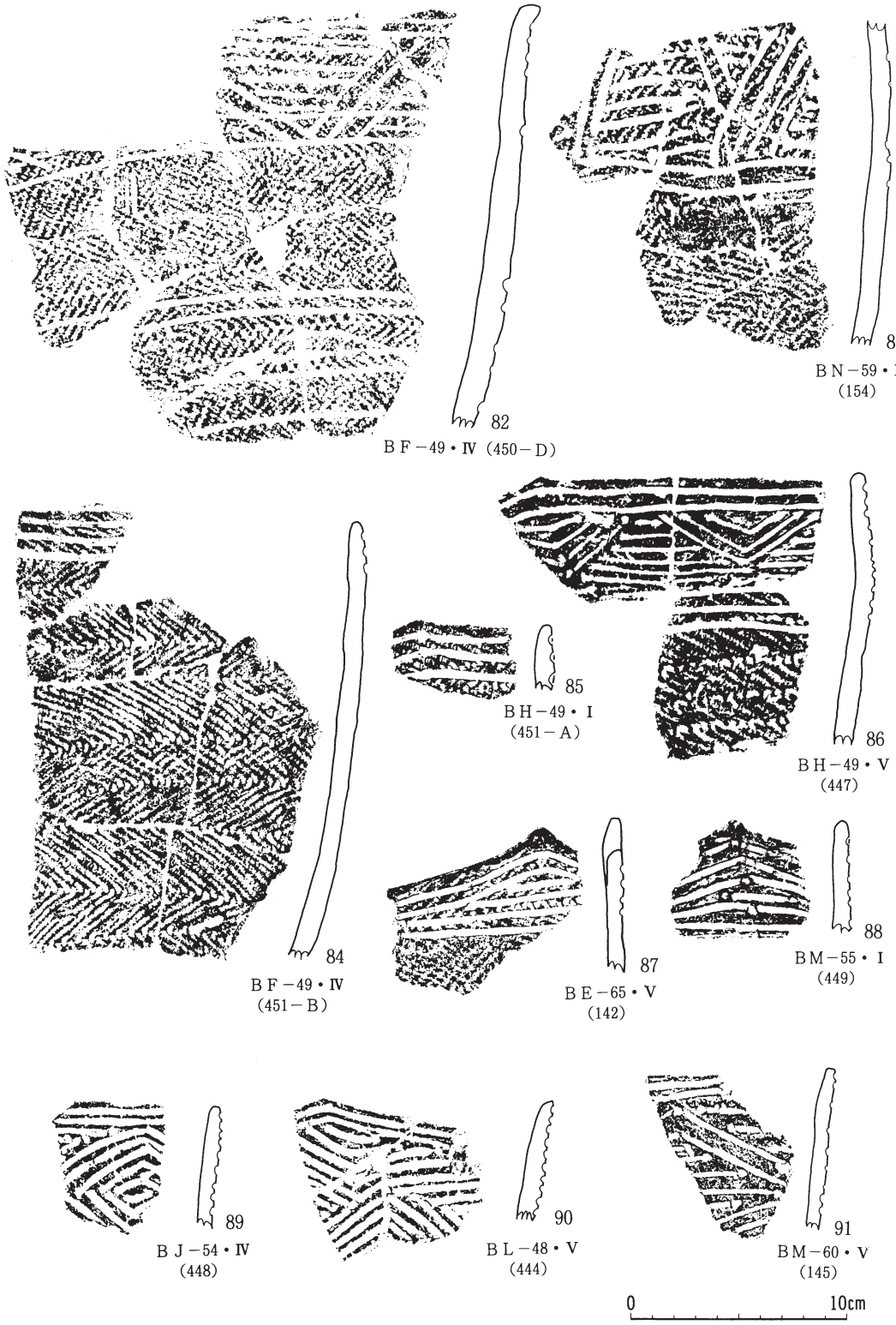
第73図　遺構外出土（第Ⅱ群土器）



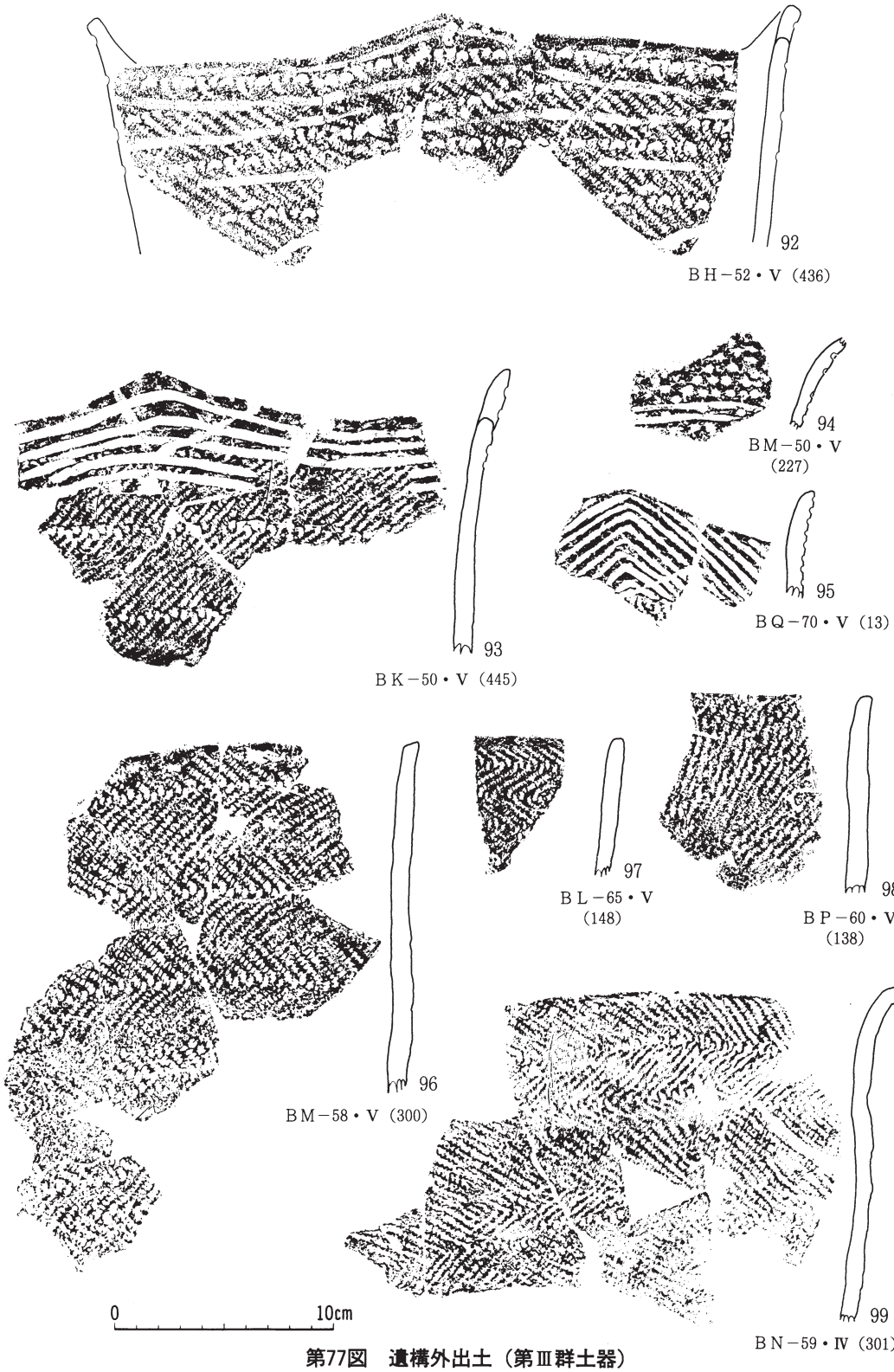
第74図　遺構外出土（第Ⅱ群土器）



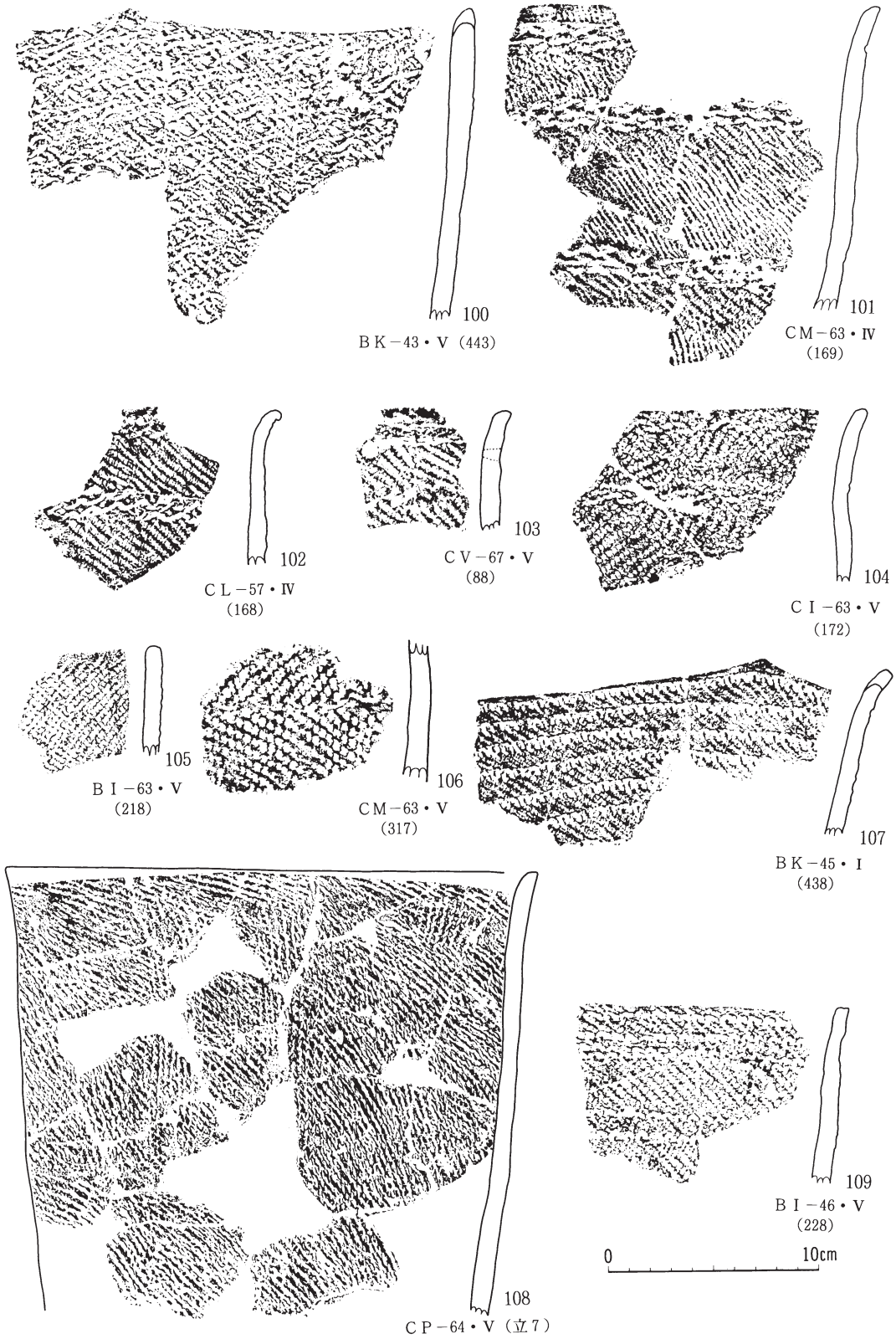
第75図　遺構外出土（第Ⅱ・Ⅲ群土器）



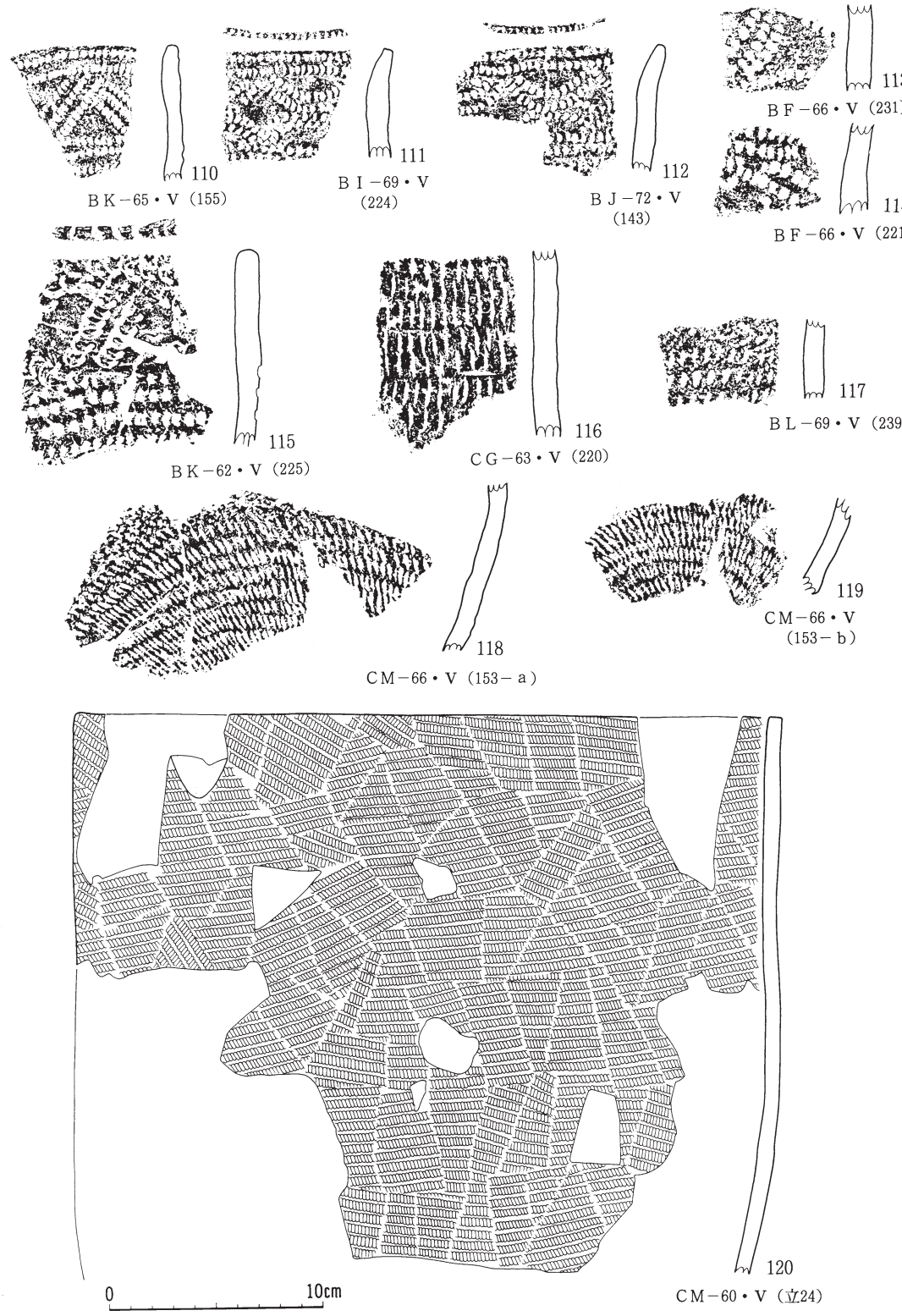
第76図　遺構外出土（第Ⅲ群土器）



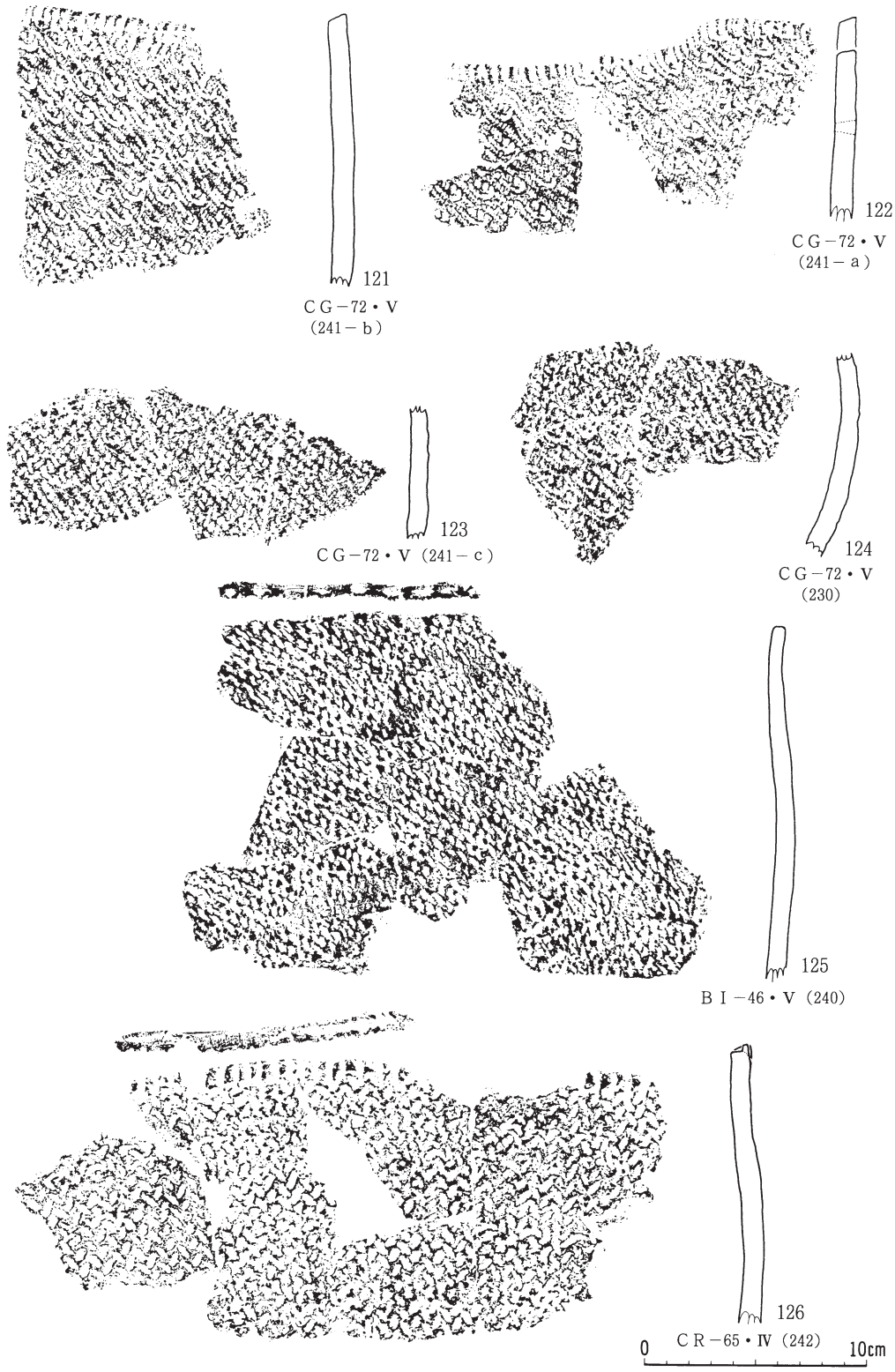
第77図　遺構外出土（第Ⅲ群土器）



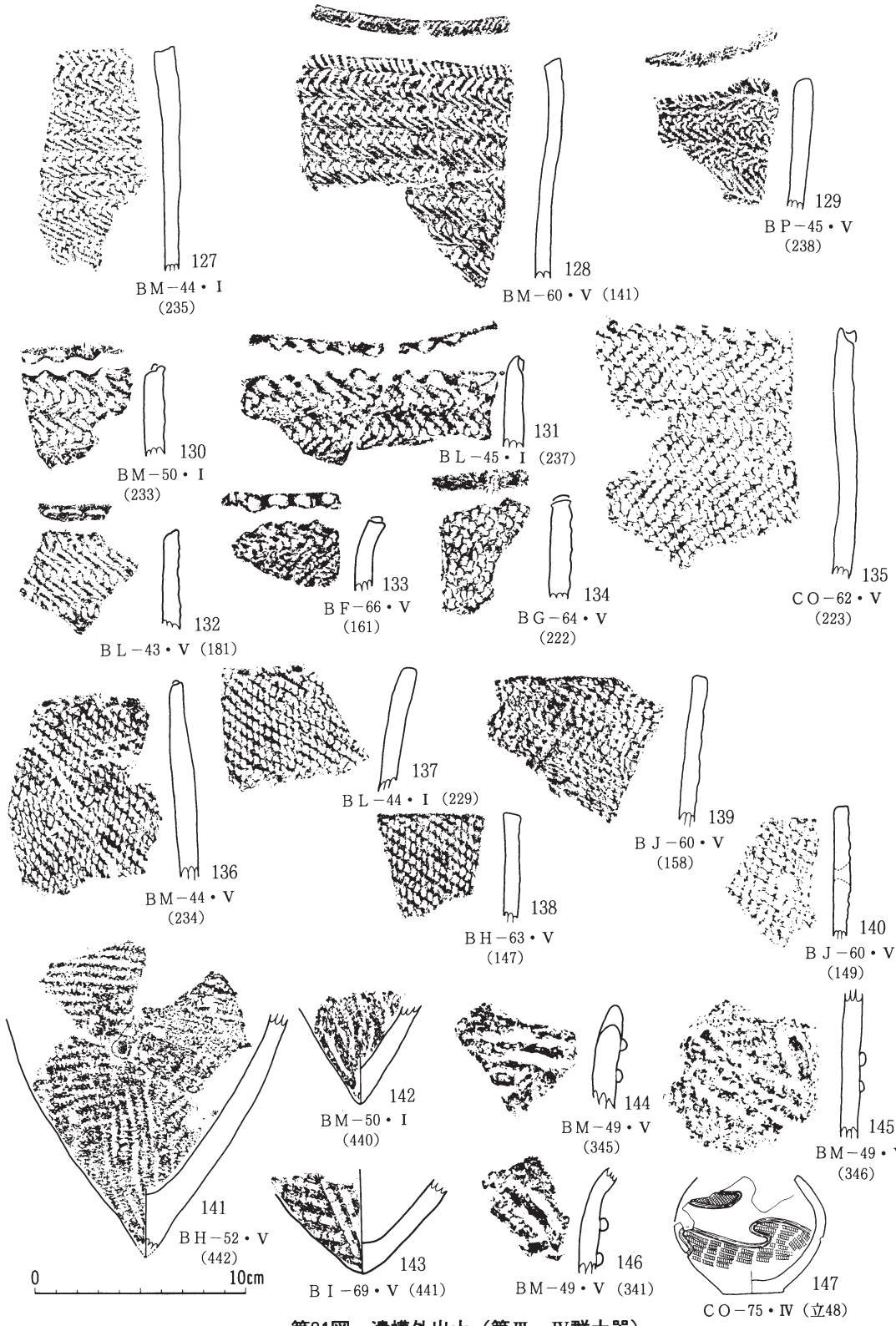
第78図　遺構外出土（第Ⅲ群土器）



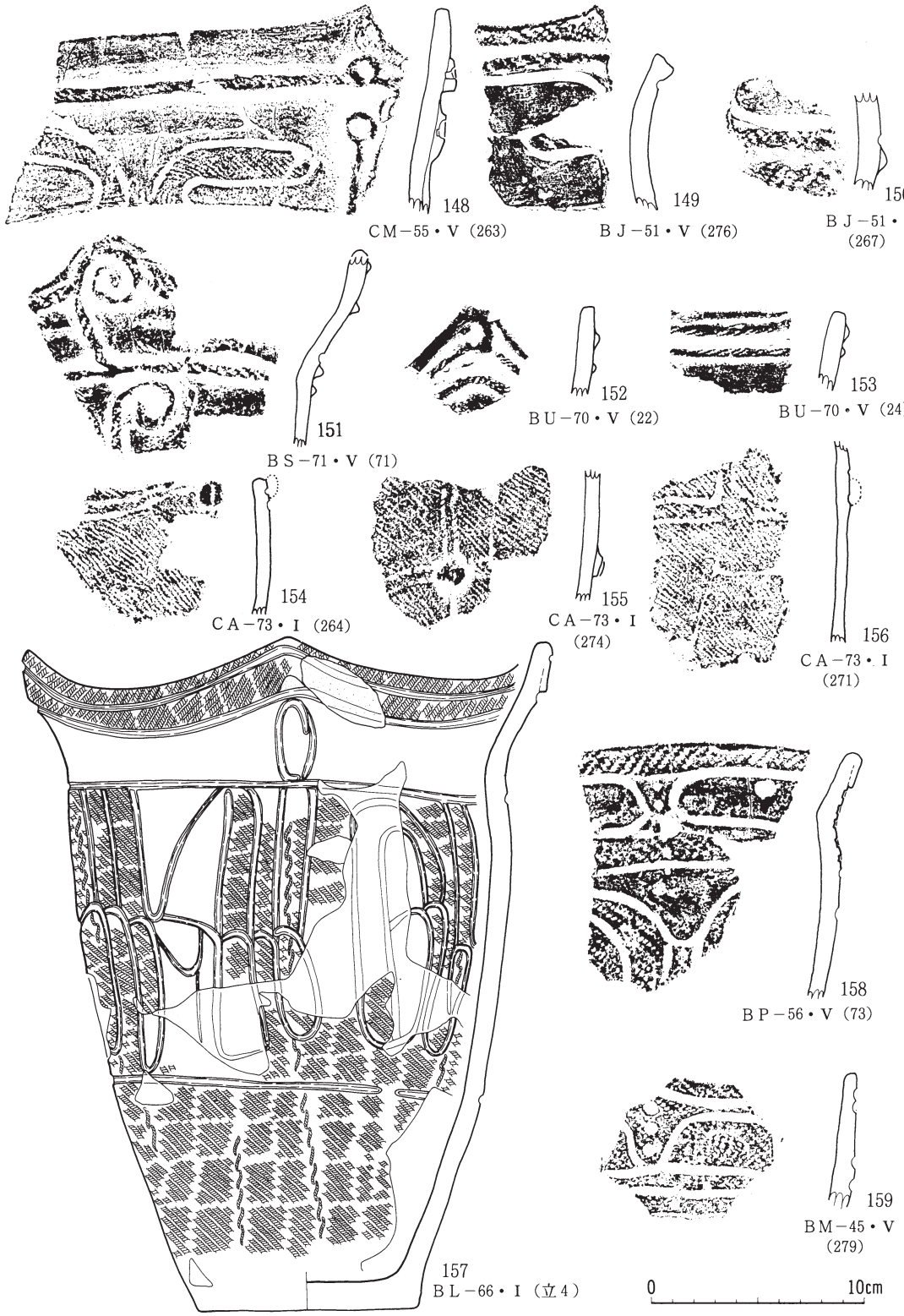
第79図　遺構外出土（第Ⅲ群土器）



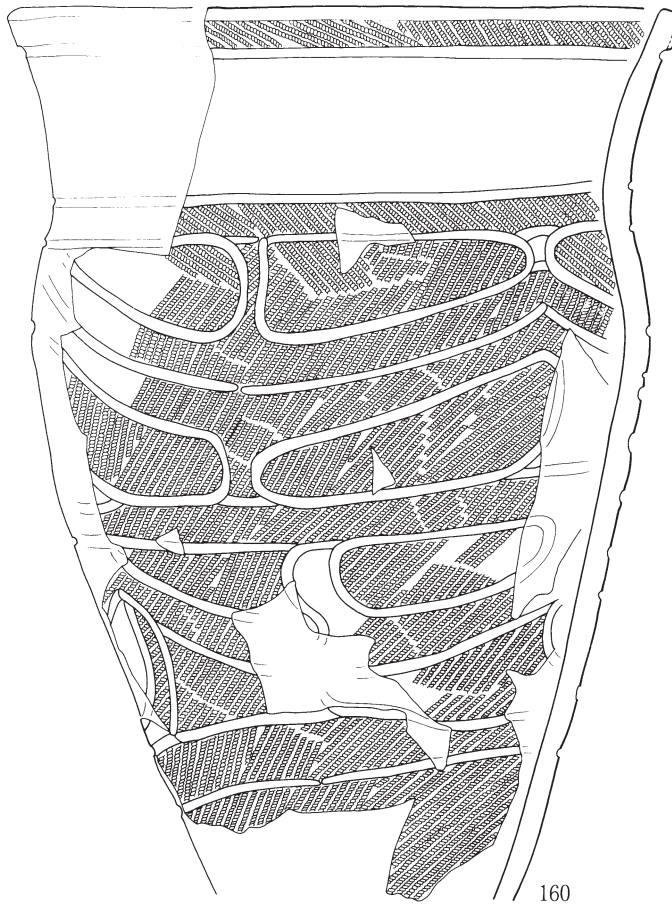
第80図　遺構外出土（第Ⅲ群土器）



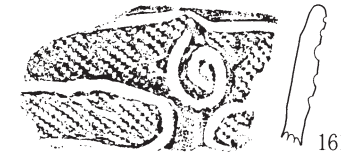
第81図　遺構外出土（第Ⅲ・Ⅳ群土器）



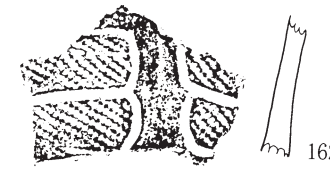
第82図　遺構外出土（第Ⅴ群土器）



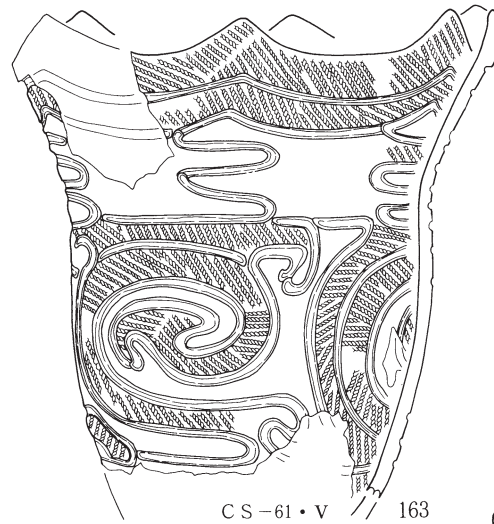
160
ＣＧ－73・Ｖ（立15）



161
ＣＬ－80・Ⅰ
（28）



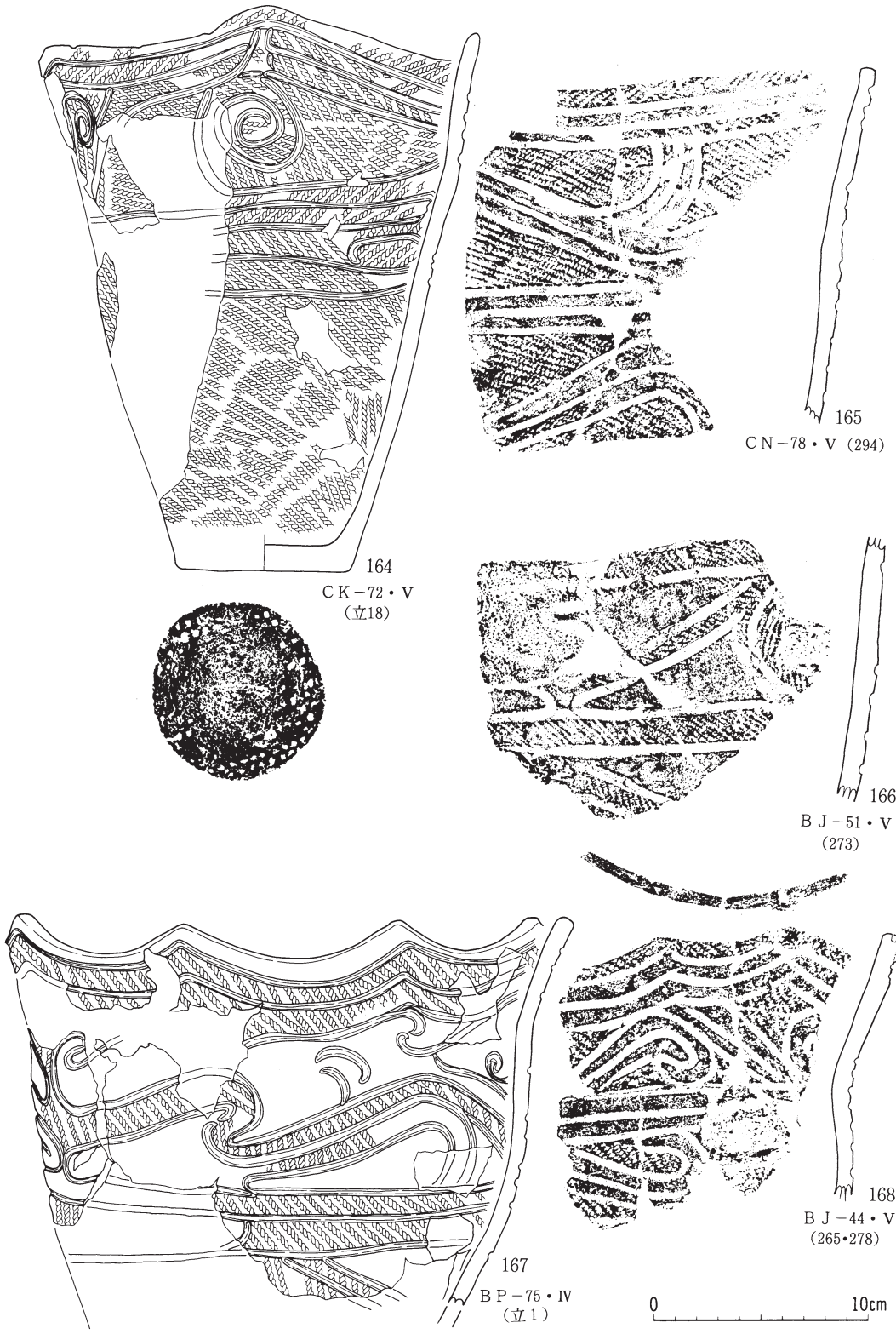
162
ＣＬ－80・Ⅰ
（16）



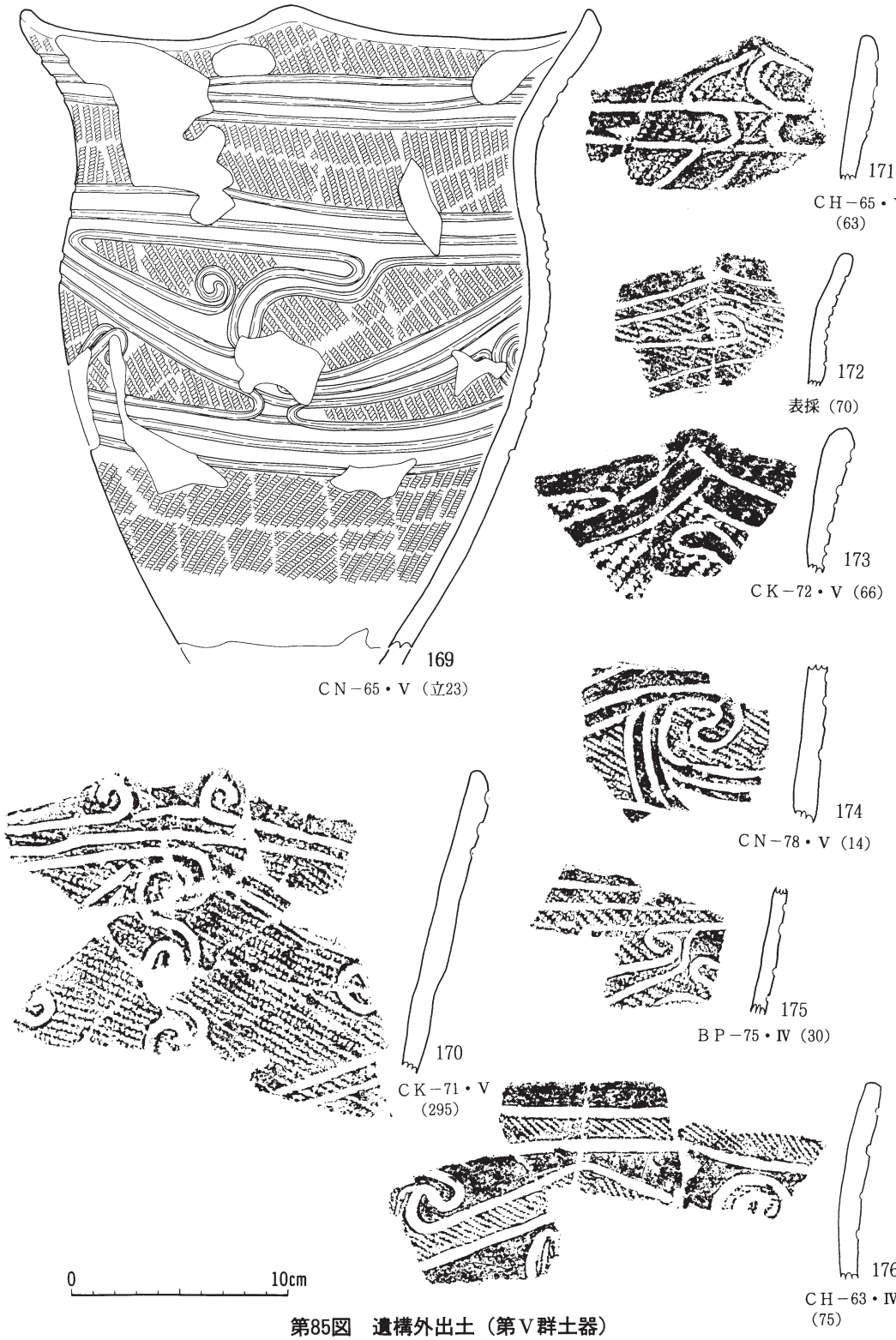
ＣＳ－61・Ⅴ
（立20）
163

0　10cm

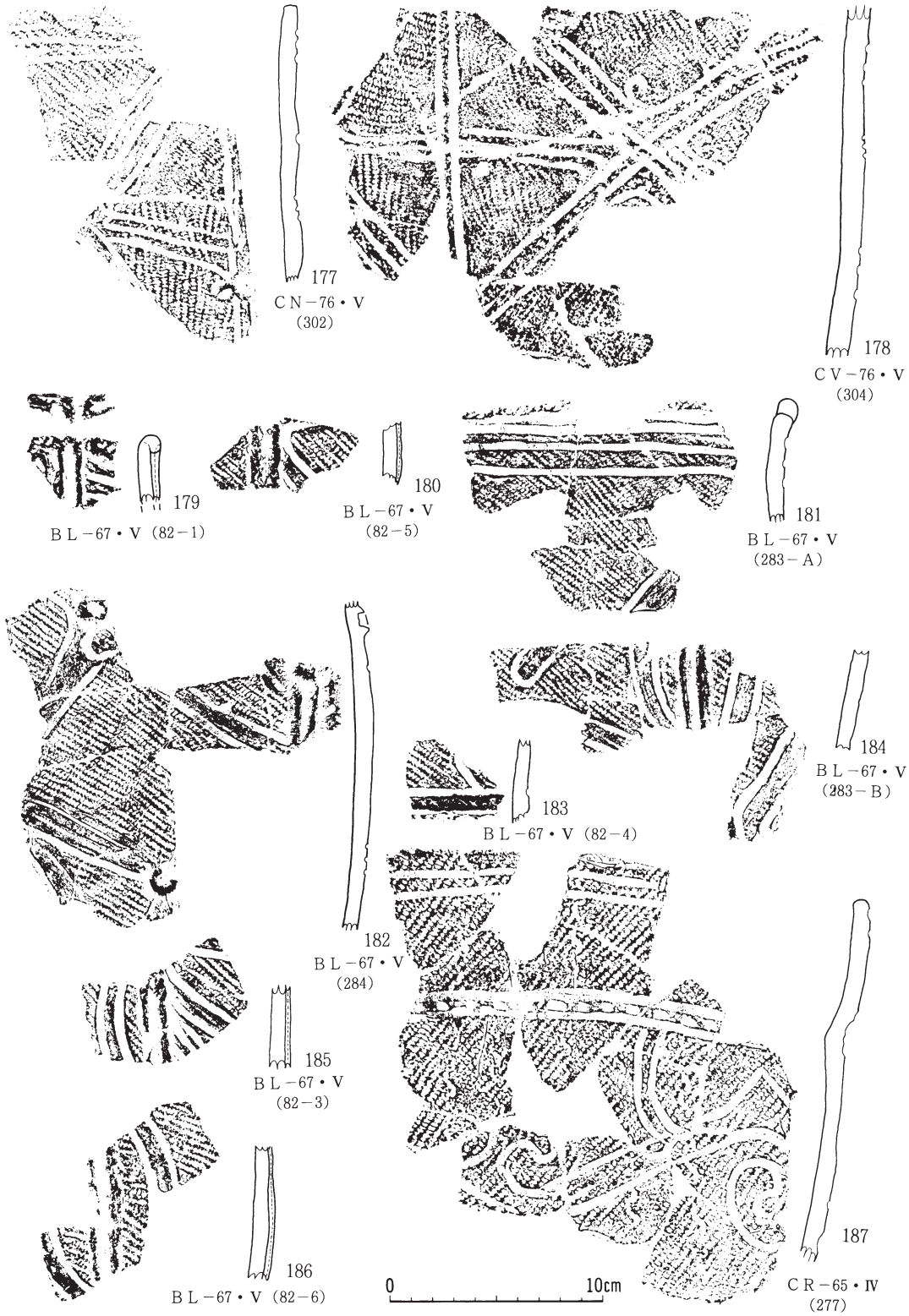
第83図　遺構外出土（第Ⅴ群土器）



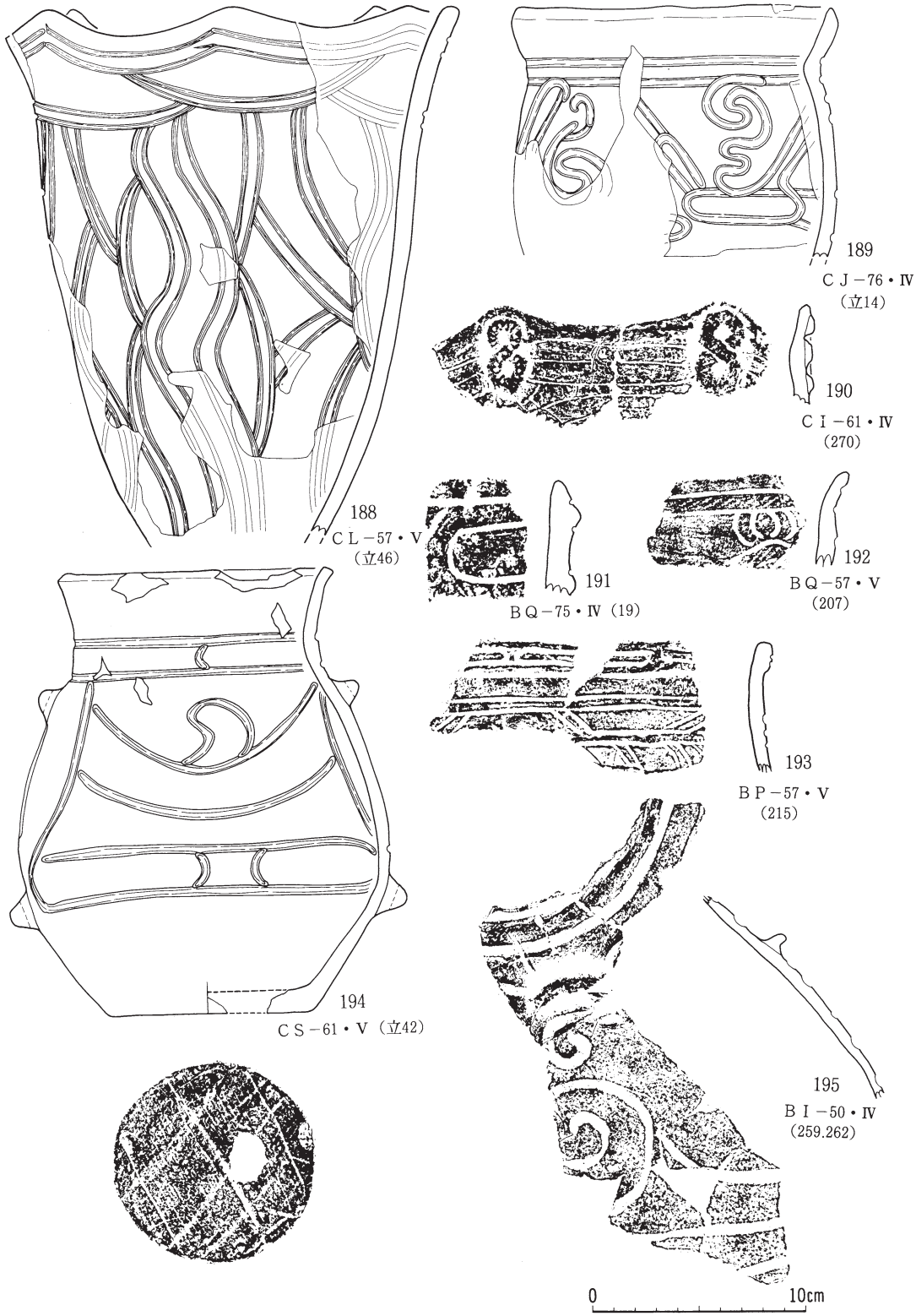
第84図　遺構外出土（第Ⅴ群土器）



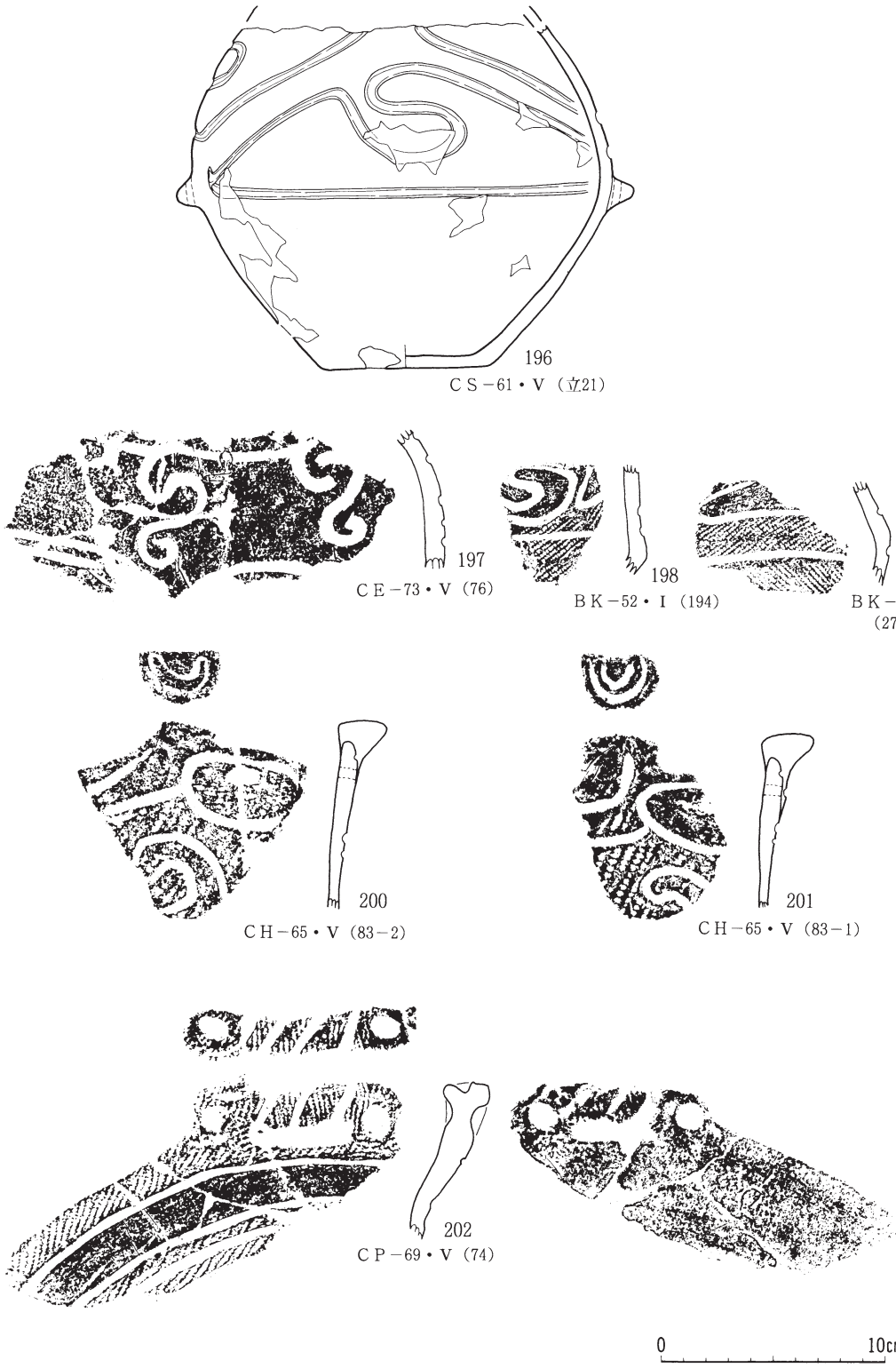
第85図　遺構外出土（第Ⅴ群土器）



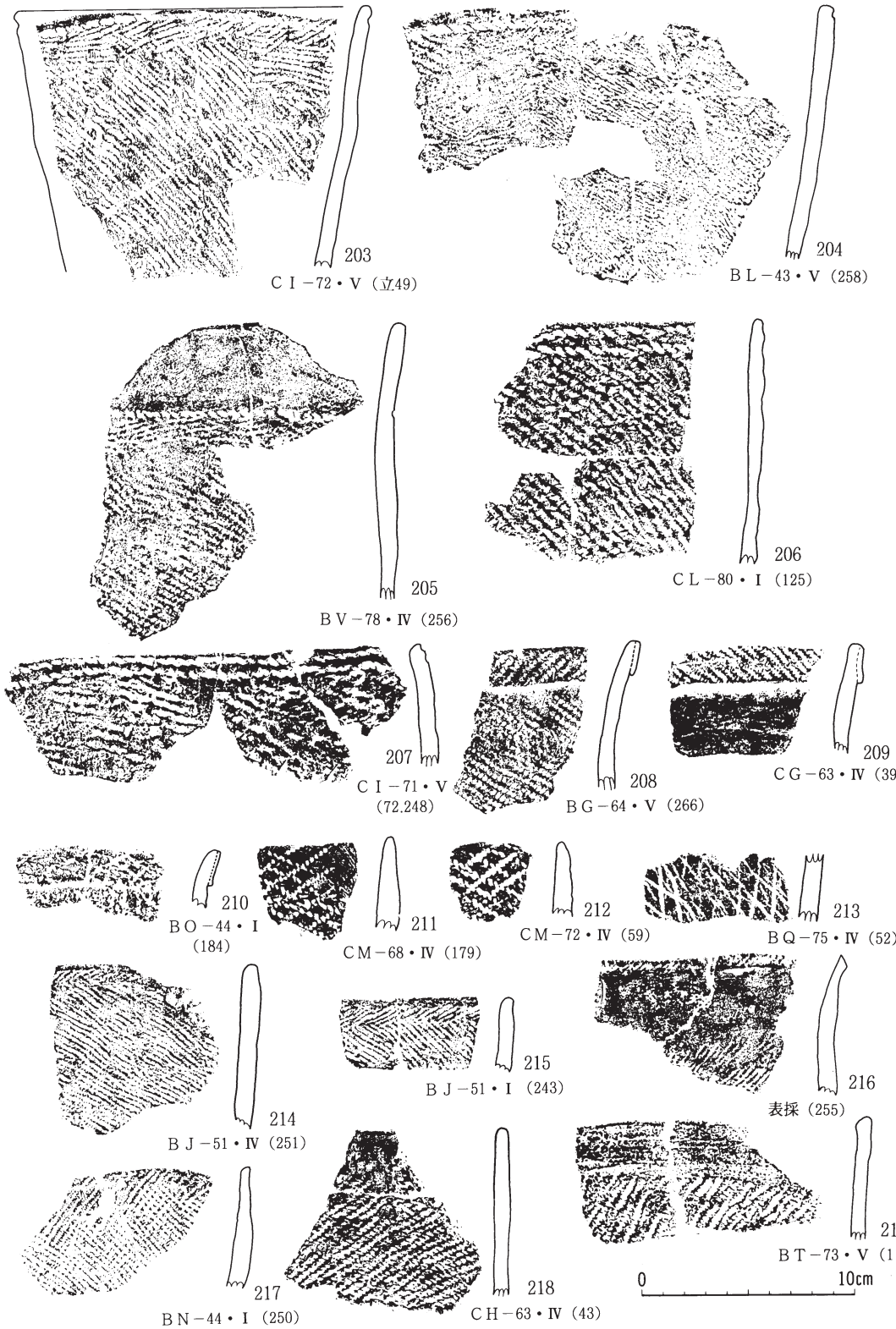
第86図　遺構外出土（第Ⅴ群土器）



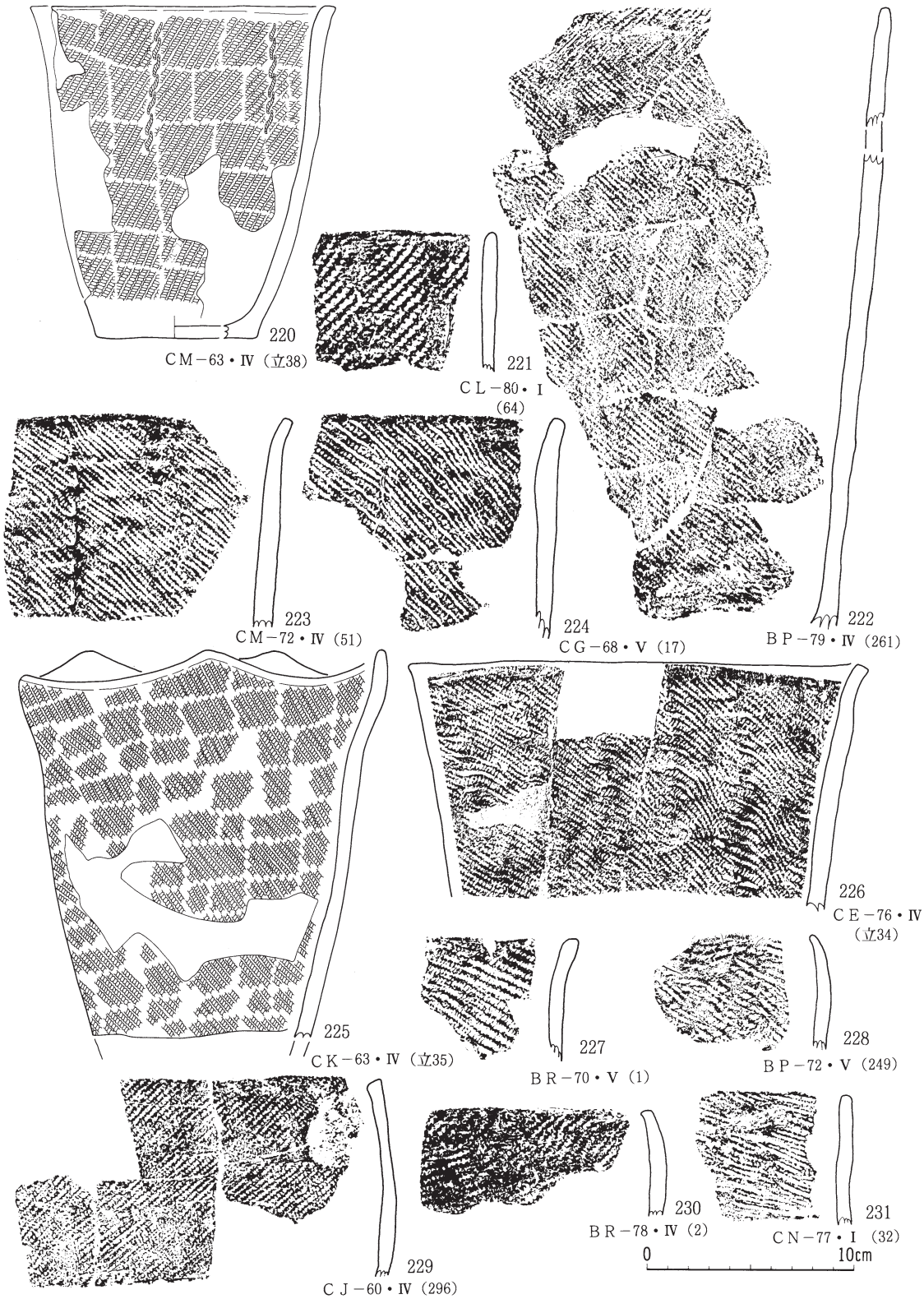
第87図　遺構外出土（第Ⅴ群土器）



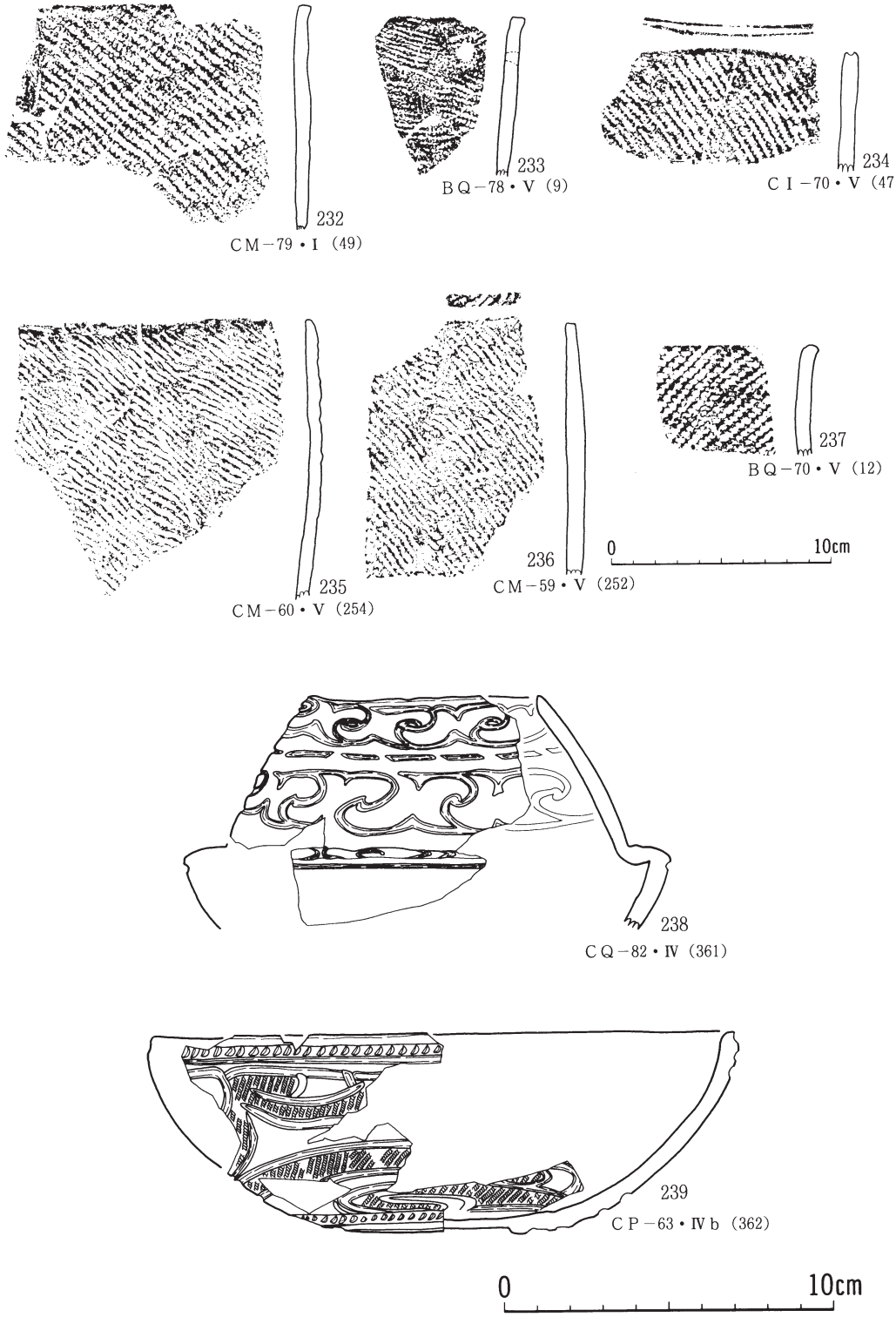
第88図　遺構外出土（第V群土器）



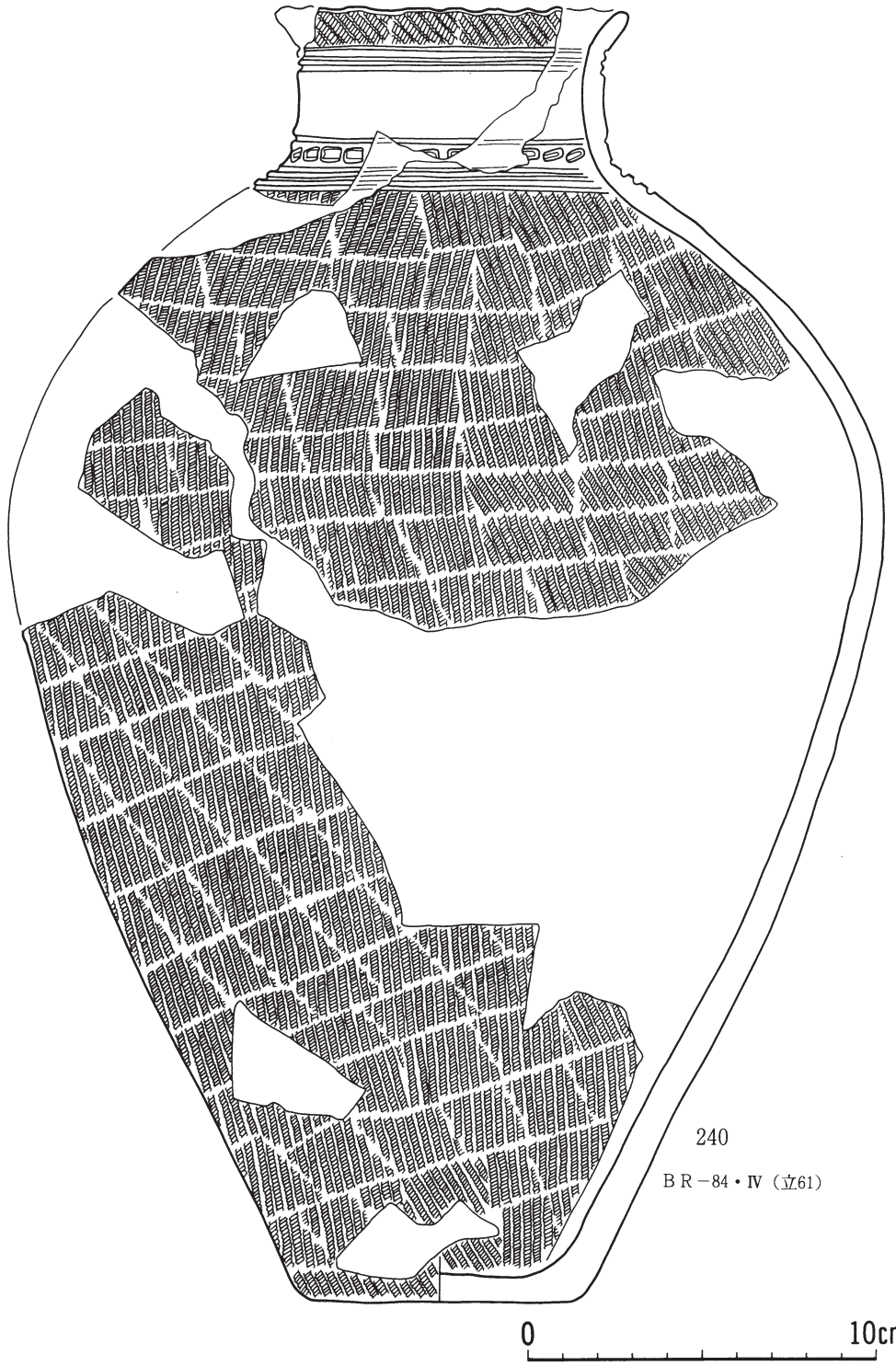
第89図　遺構外出土（第Ⅴ群土器）



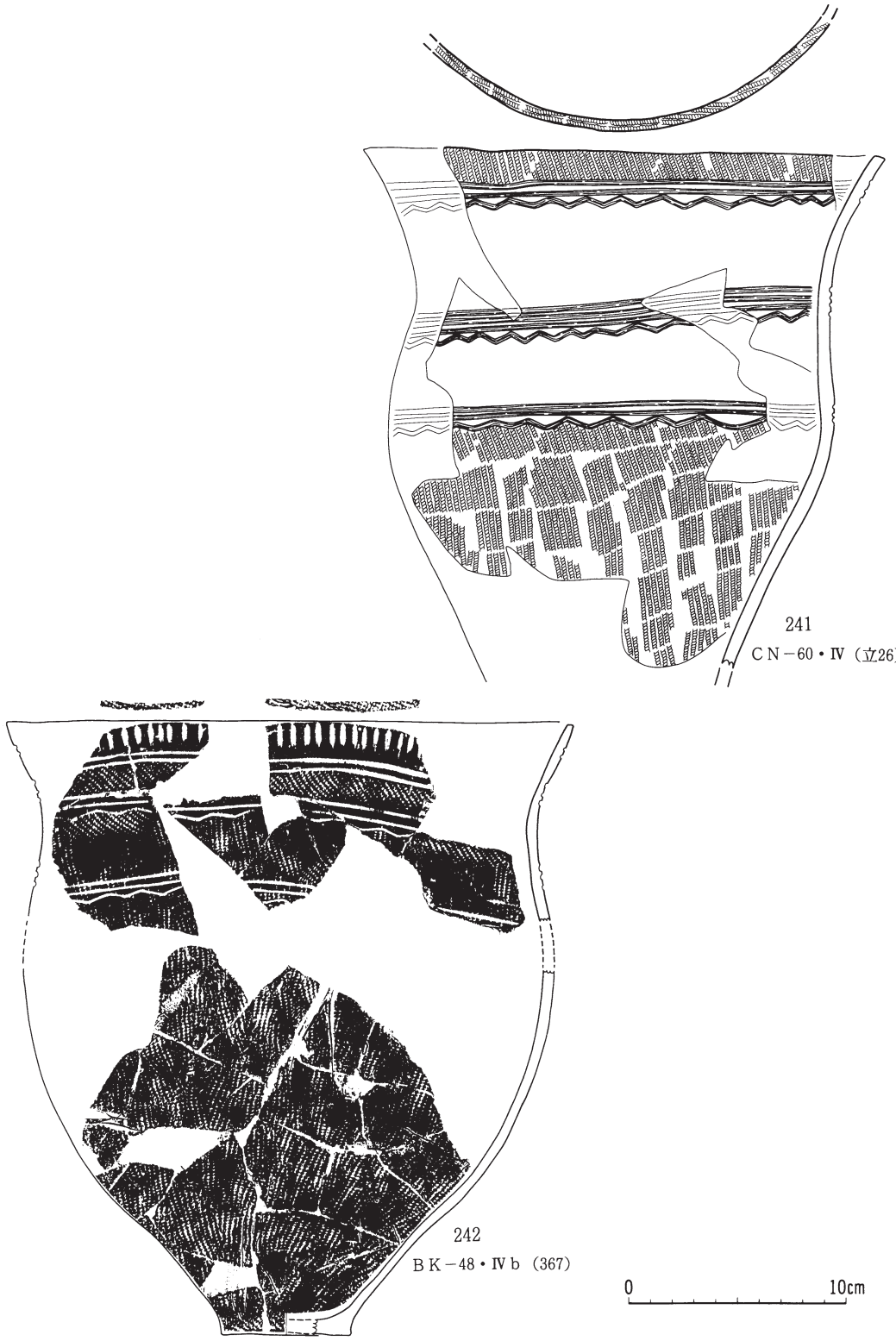
第90図　遺構外出土（第Ⅴ群土器）



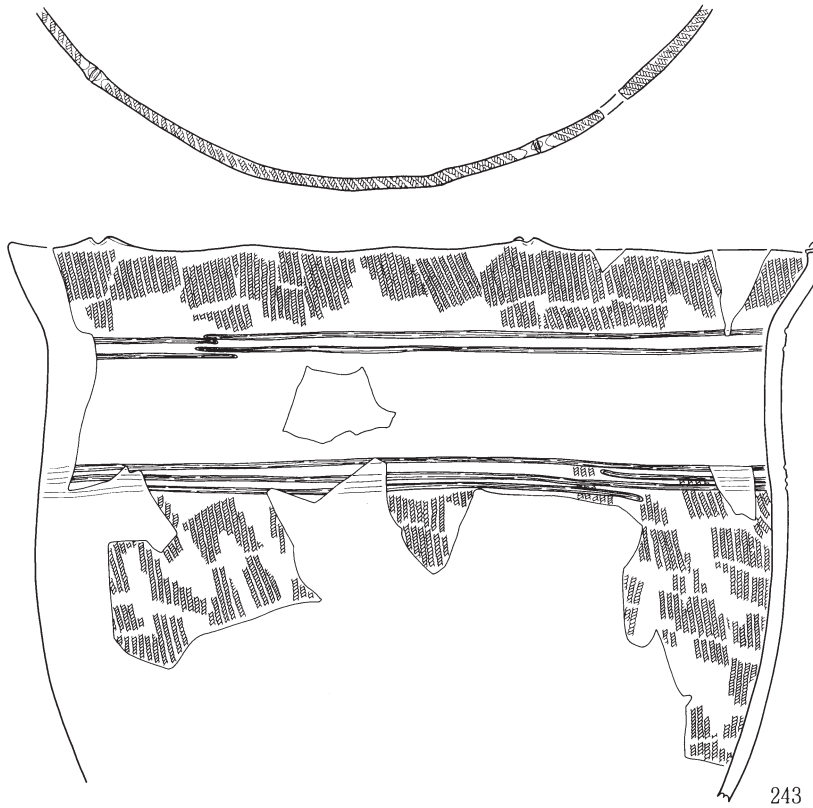
第91図　遺構外出土（第Ⅴ・Ⅵ群土器）



第92図　遺構外出土（第Ⅶ群土器）

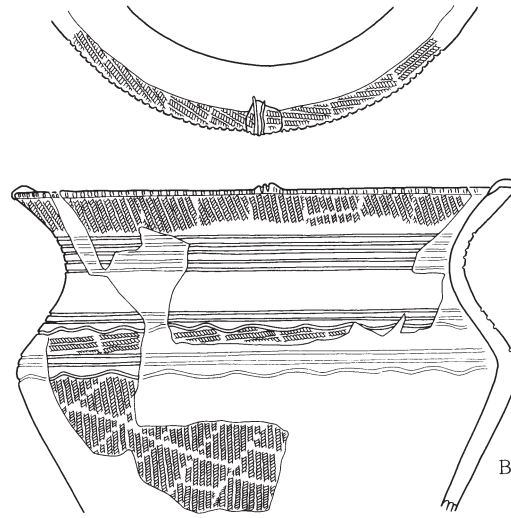


第93図　遺構外出土（第Ⅷ群土器ア）



243

ＢＴ－74・Ⅳ（立58）

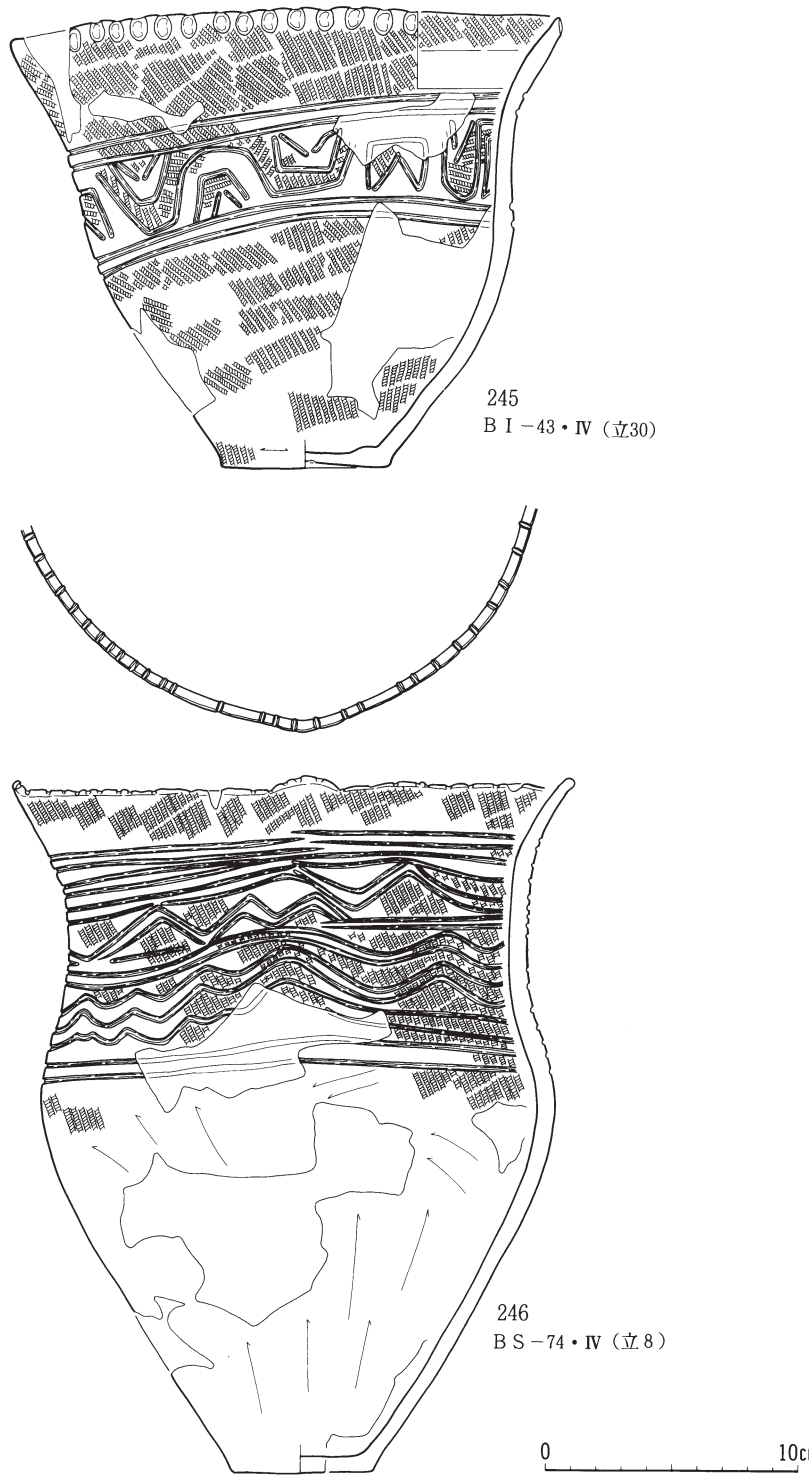


244

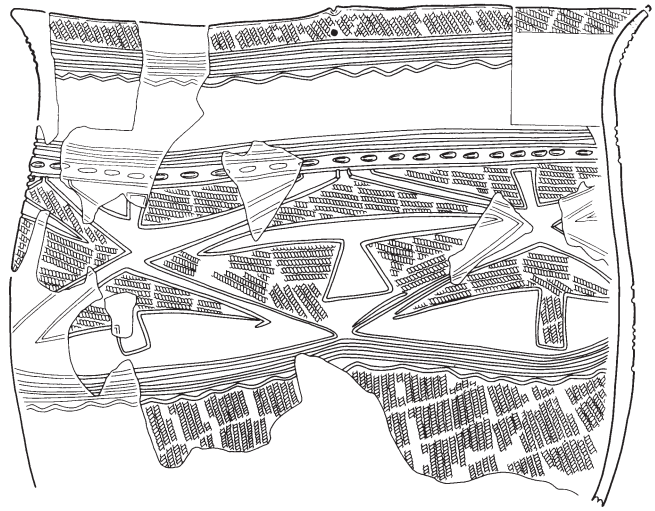
ＢＨ－49・Ⅳ（309.310）

0　　10cm

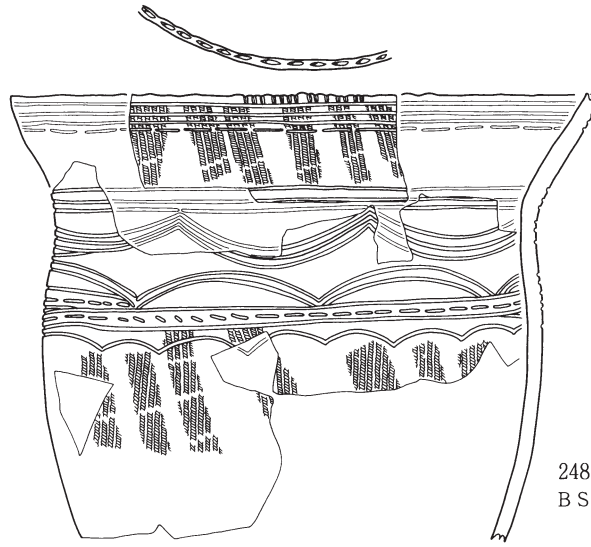
第94図　遺構外出土（第Ⅷ群土器ア）



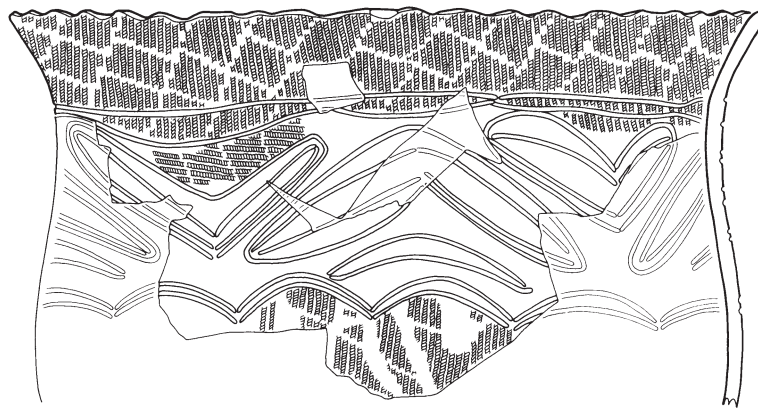
第95図　遺構外出土（第Ⅷ群土器ア）



247
ＤＡ－74・Ⅳ（立29）



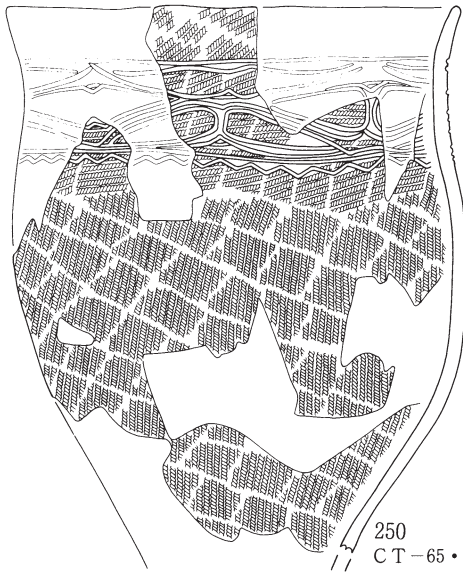
248
ＢＳ－74・Ⅳ（立53.508）



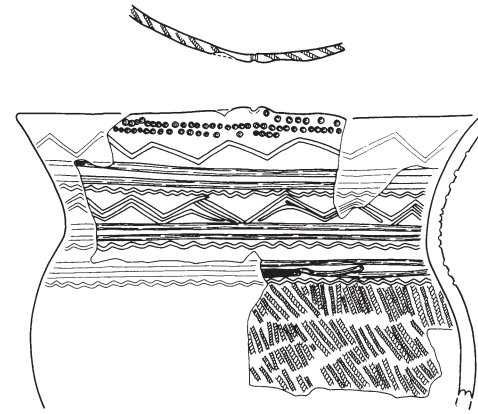
249
ＣＲ－82・Ⅳ（立60）

0　　10cm

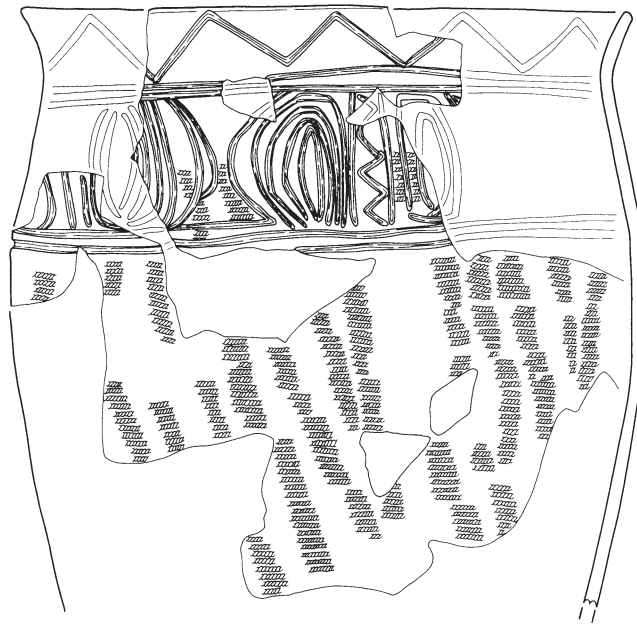
第96図　遺構外出土（第Ⅷ群土器ア）



250
ＣＴ－65・Ⅳ（立13）



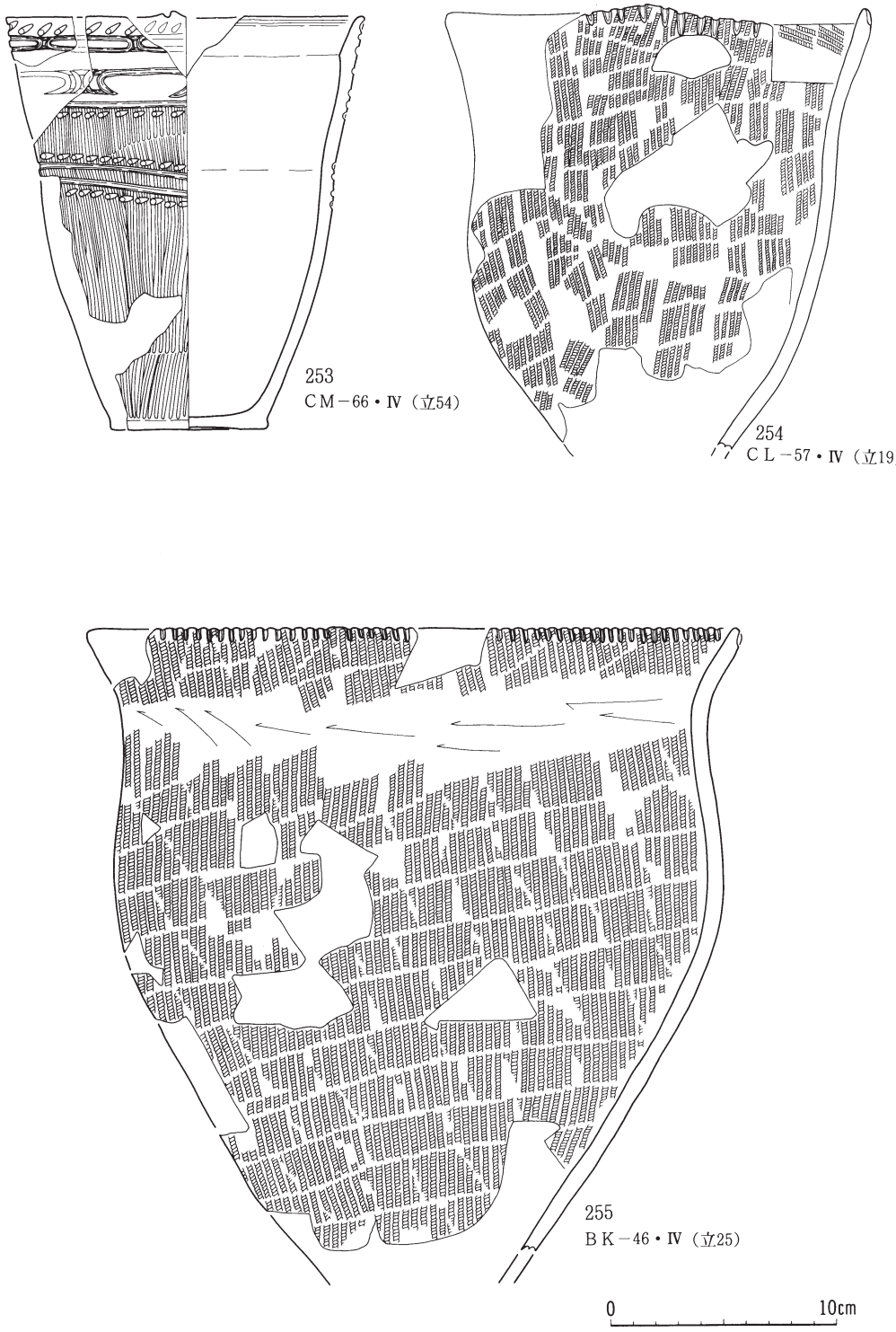
251
ＢＨ－50・Ⅳ（立51）



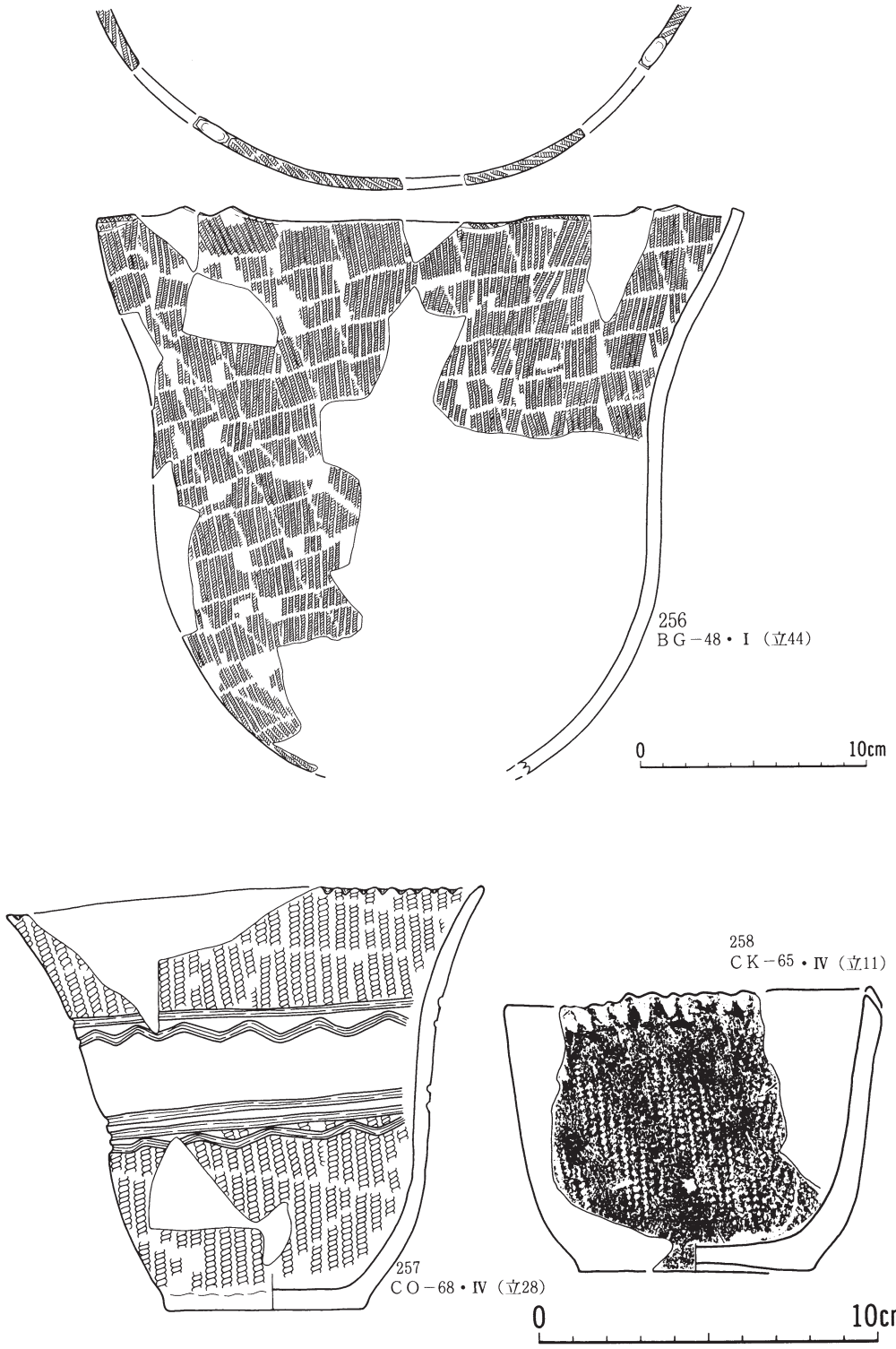
252
ＢＮ－58・Ⅳ（立36）

0　10cm

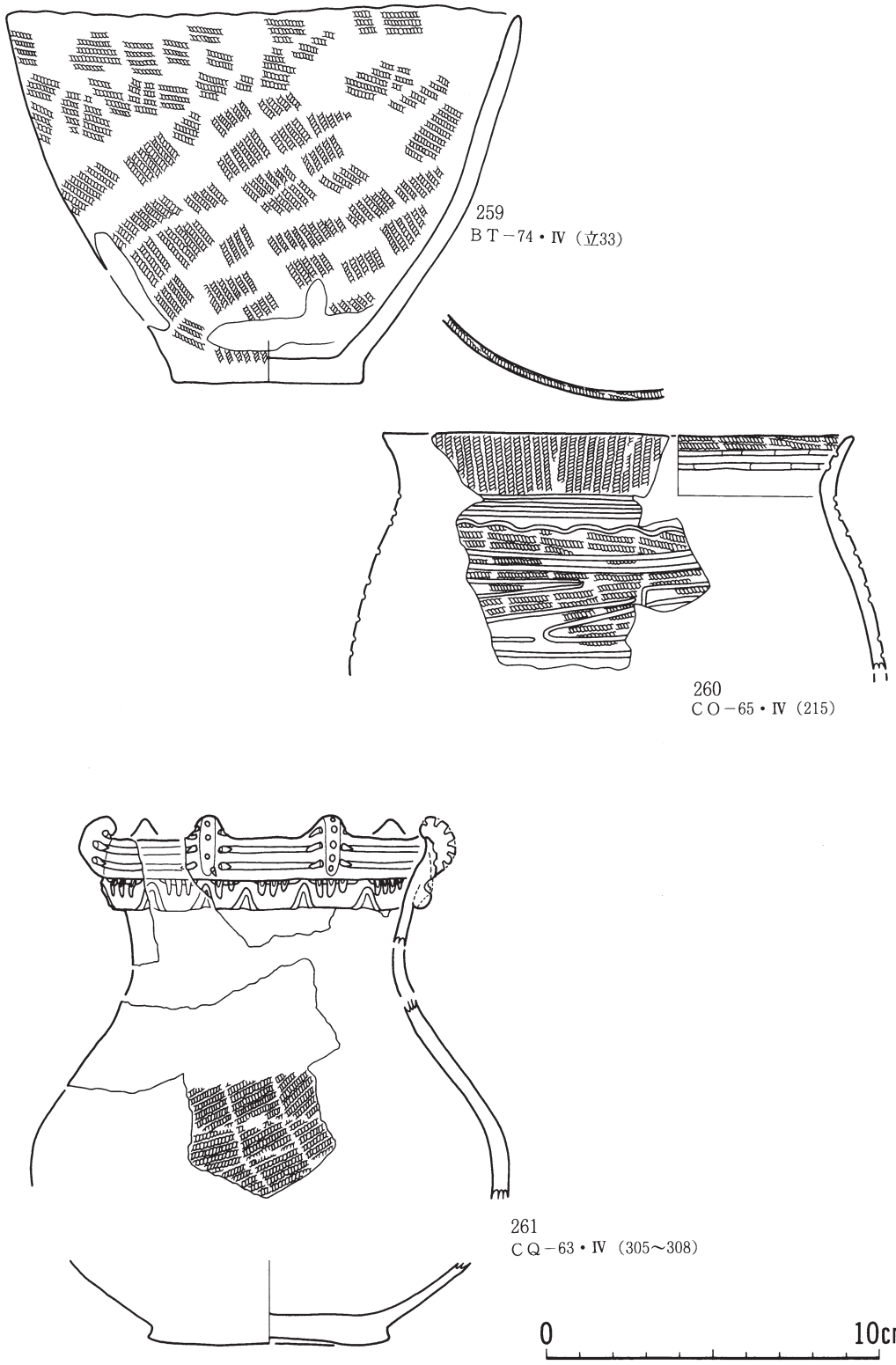
第97図　遺構外出土（第Ⅷ群土器ア）



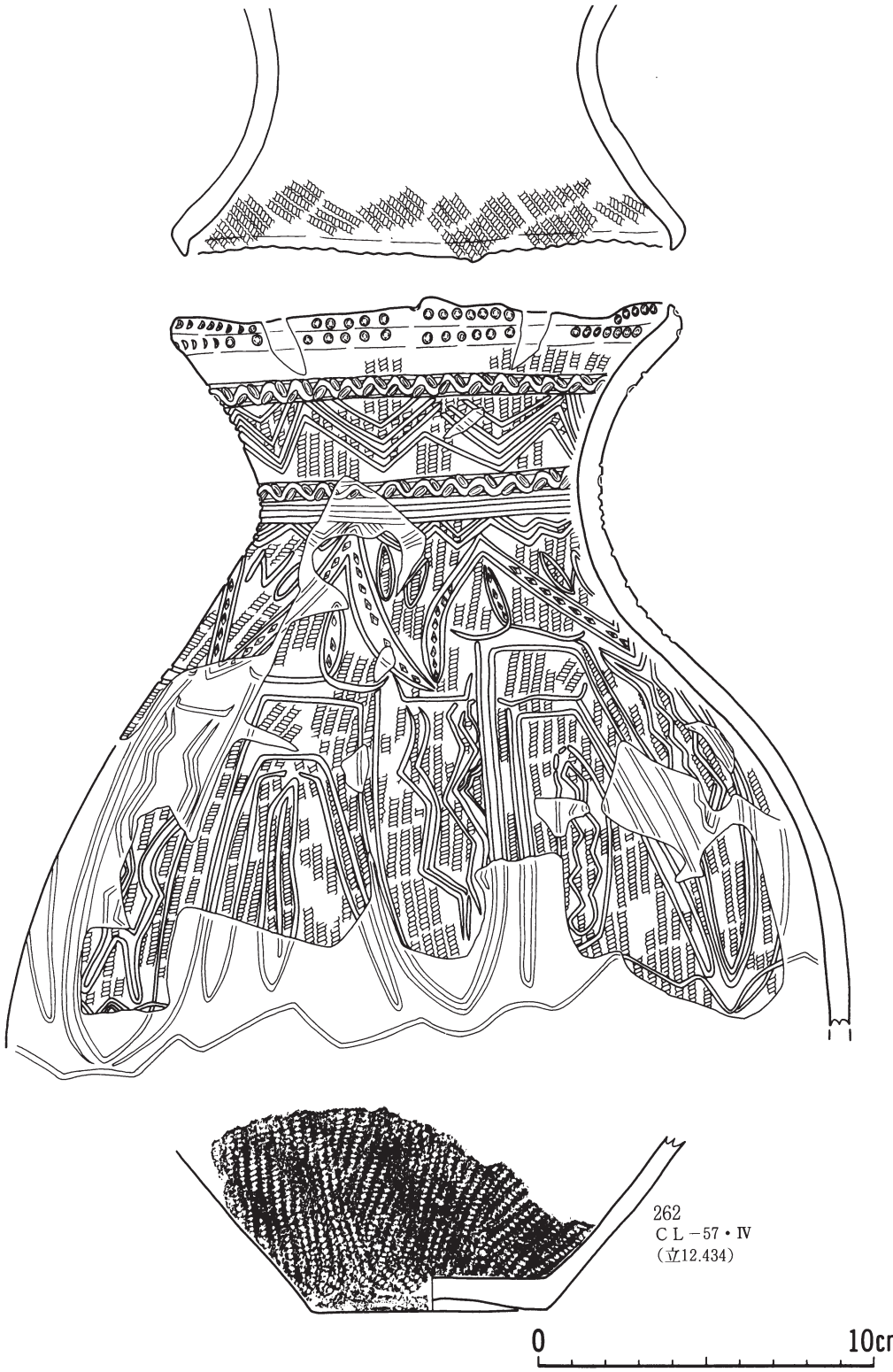
第98図　遺構外出土（第Ⅷ群土器ア）



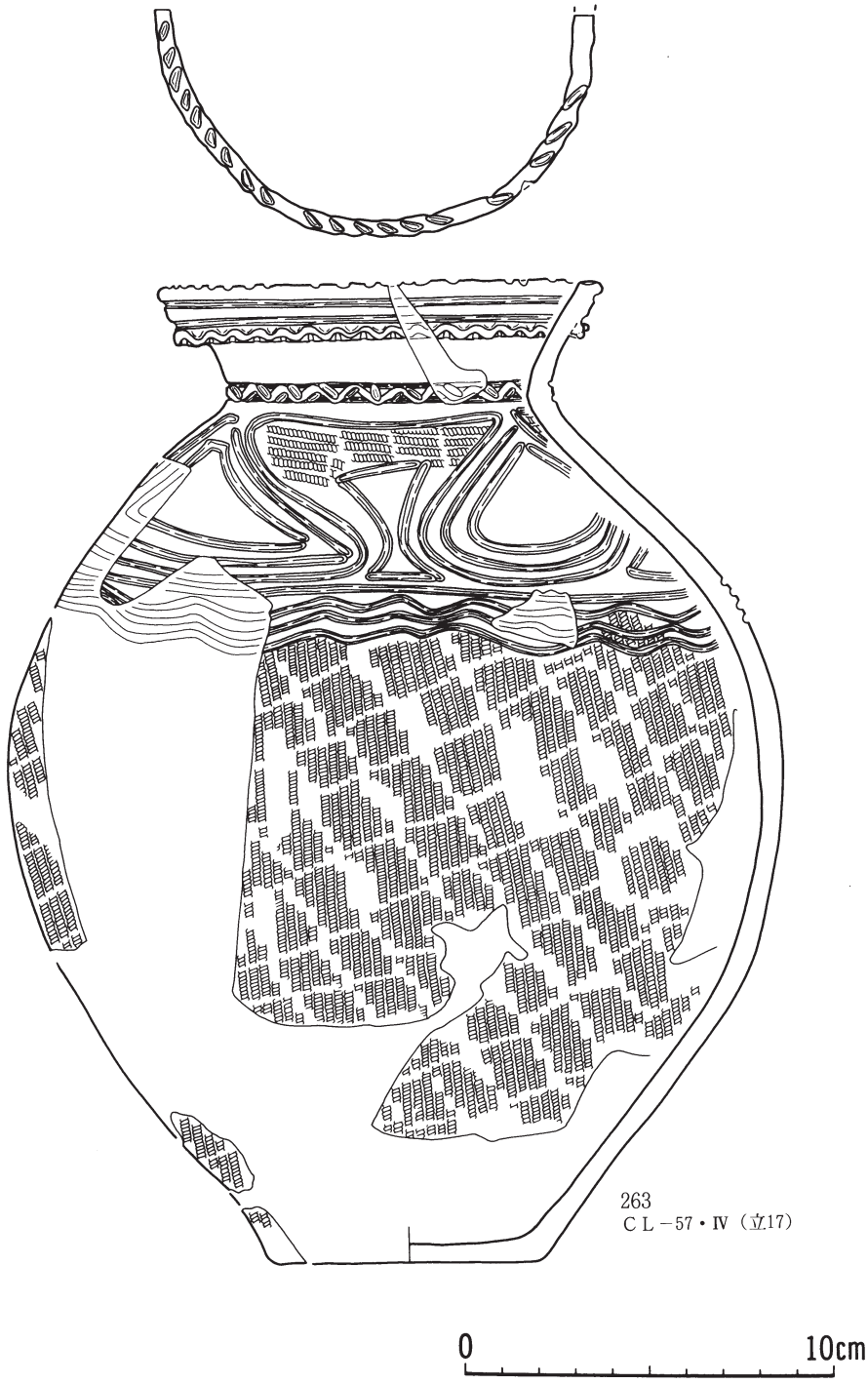
第99図　遺構外出土（第Ⅷ群土器ア・イ）



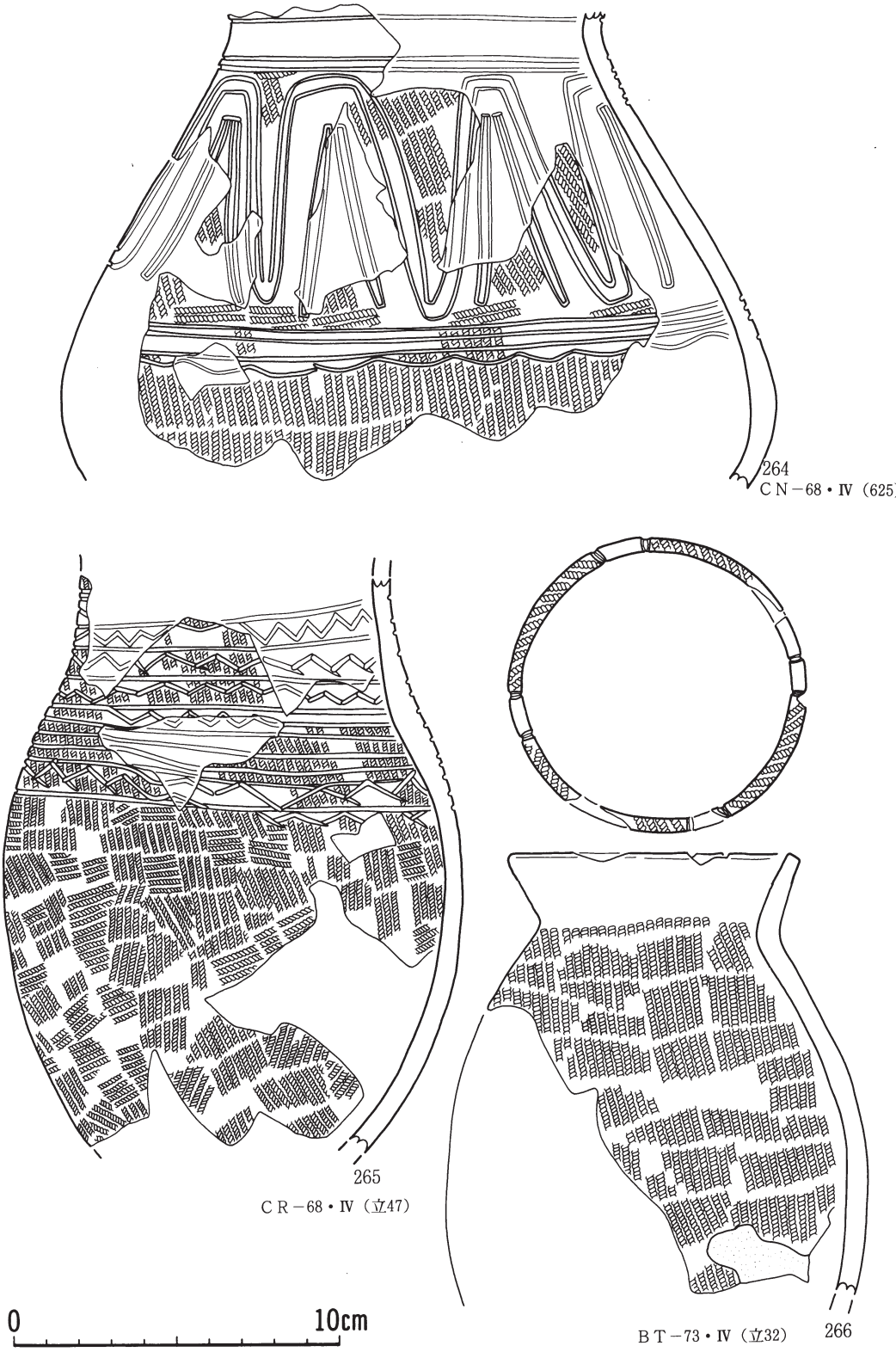
第100図　遺構外出土（第Ⅷ群土器イ・ウ）



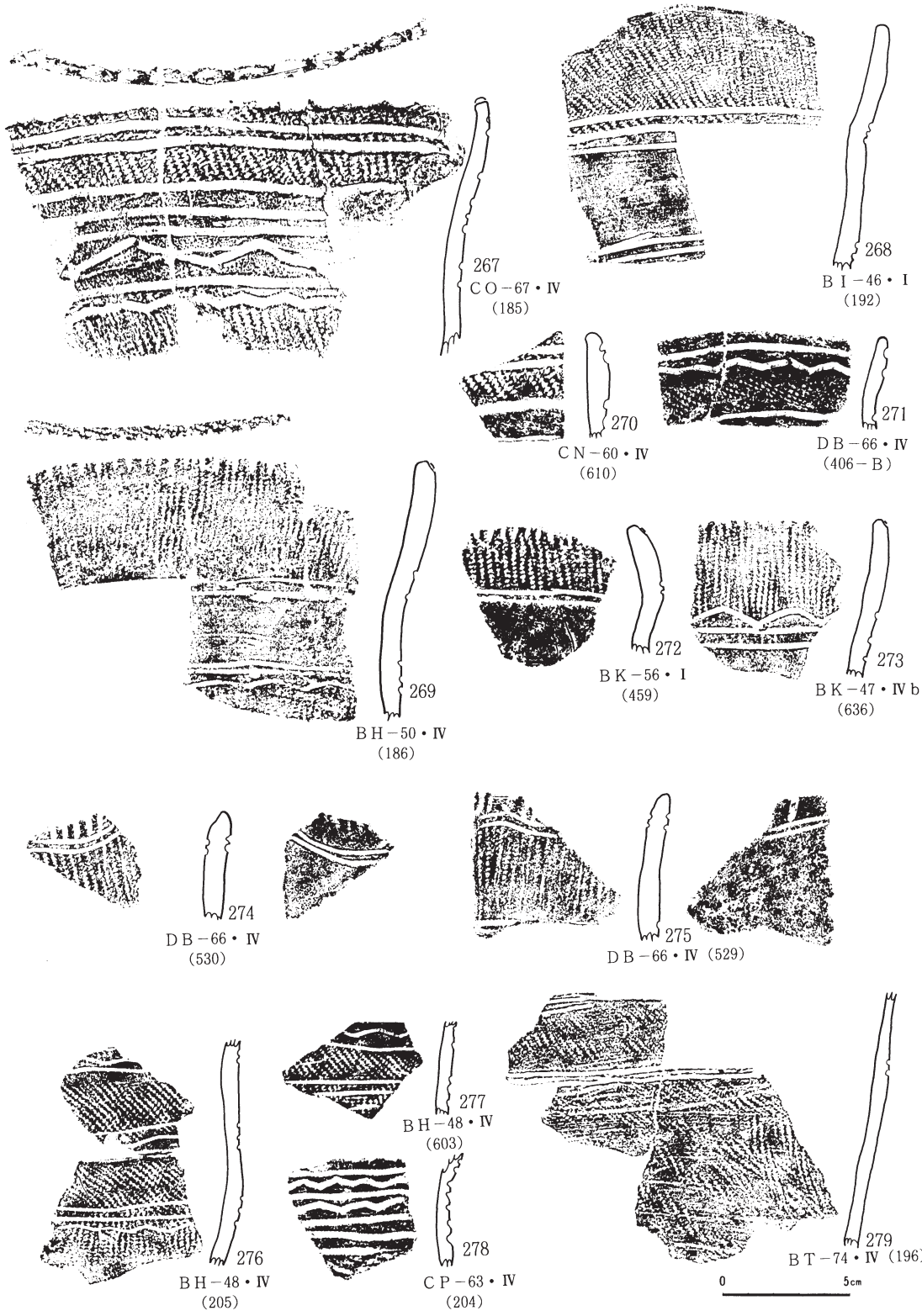
第101図　遺構外出土（第Ⅷ群土器ウ）



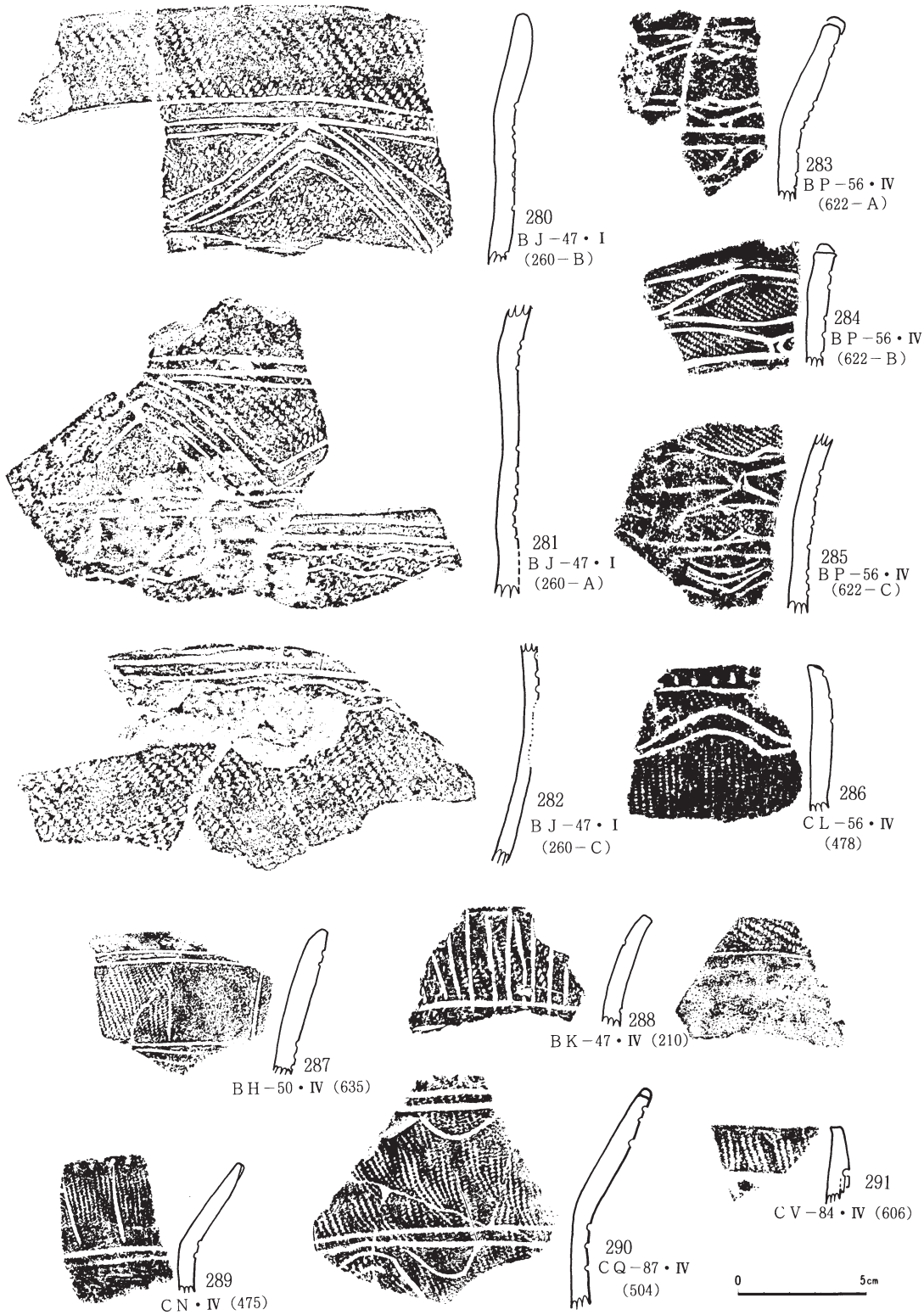
第102図　遺構外出土（第Ⅷ群土器ウ）



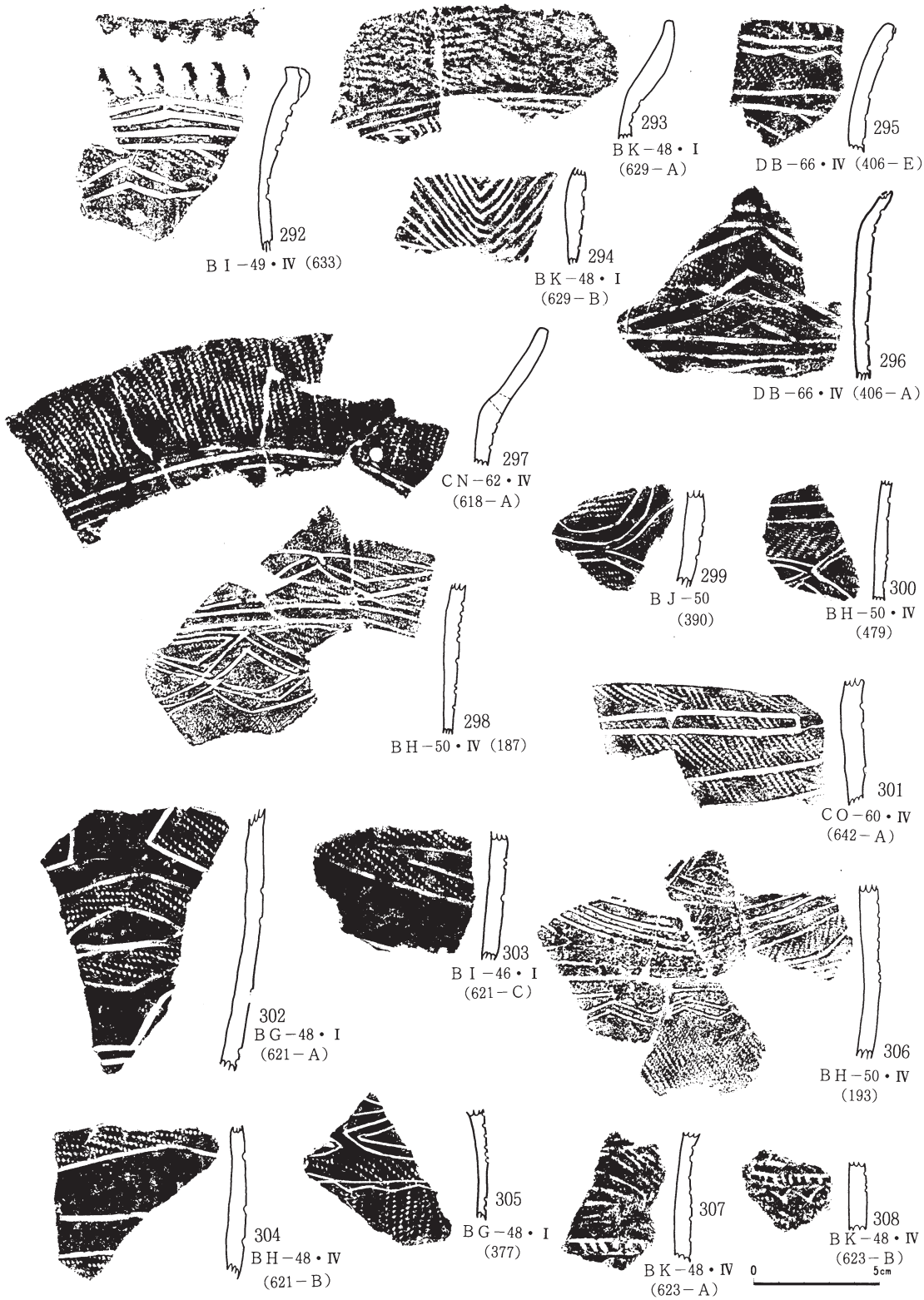
第103図　遺構外出土（第Ⅷ群土器ウ）



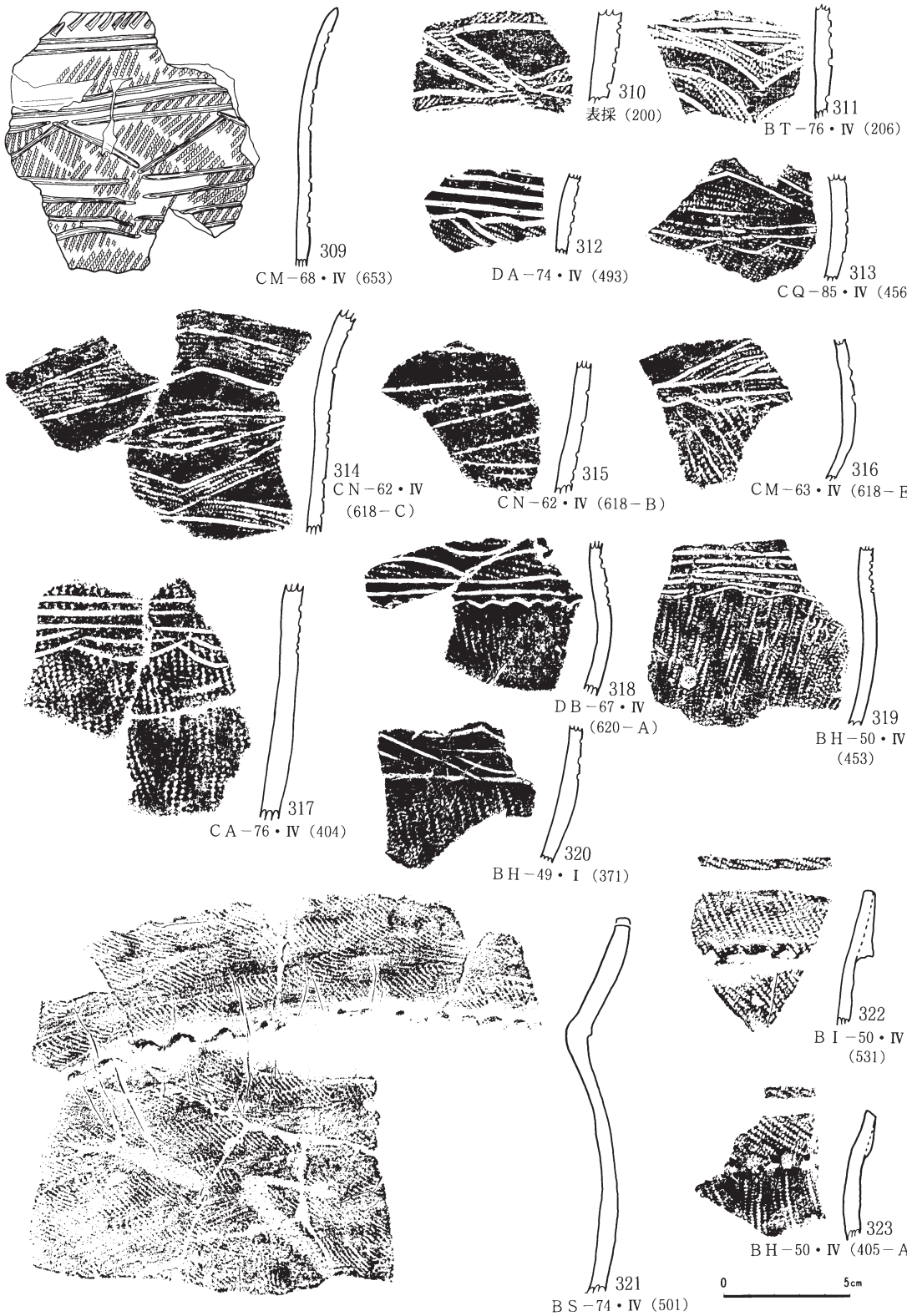
第104図　遺構外出土（第Ⅷ群土器ア）



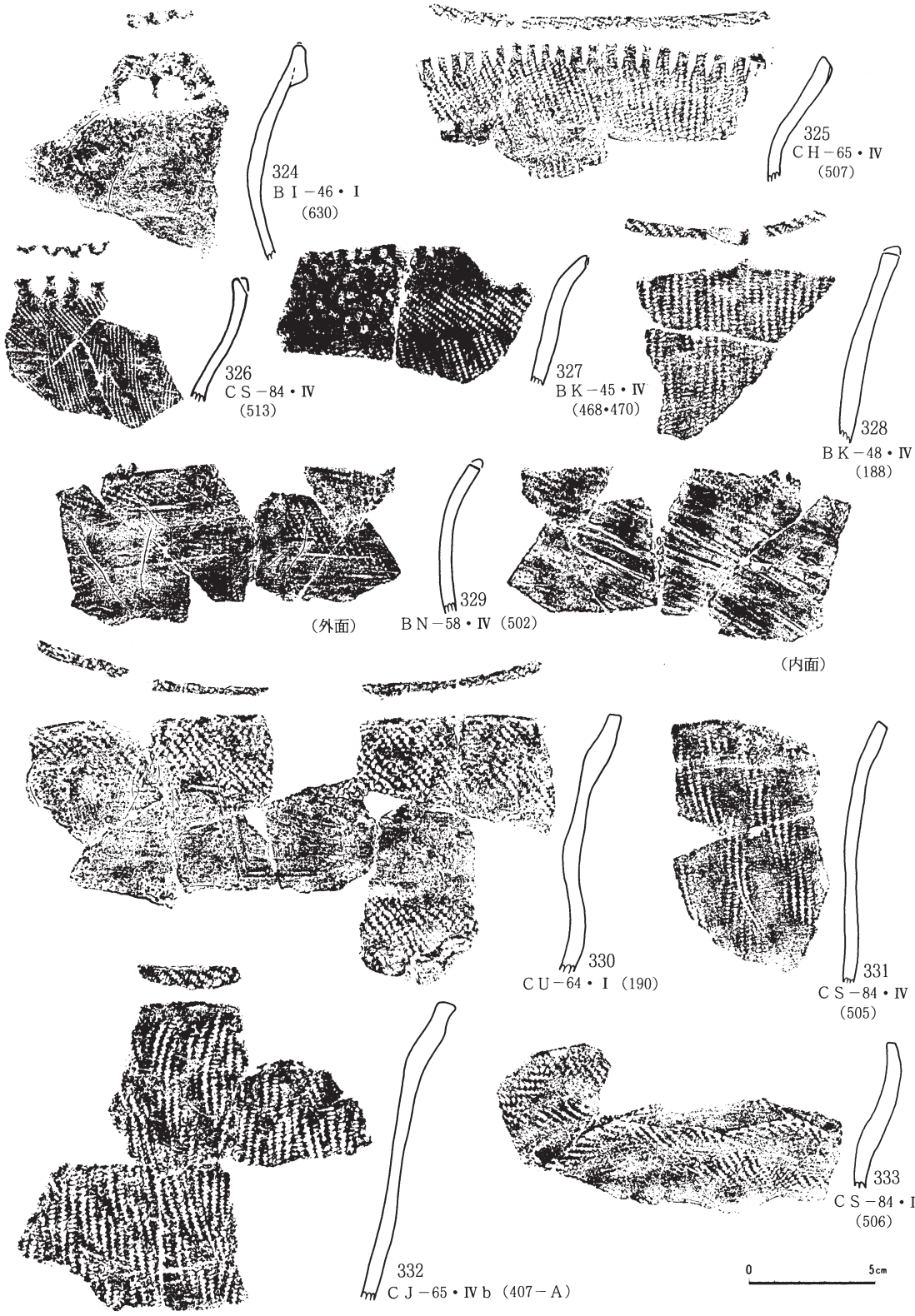
第105図　遺構外出土（第Ⅷ群土器ア）



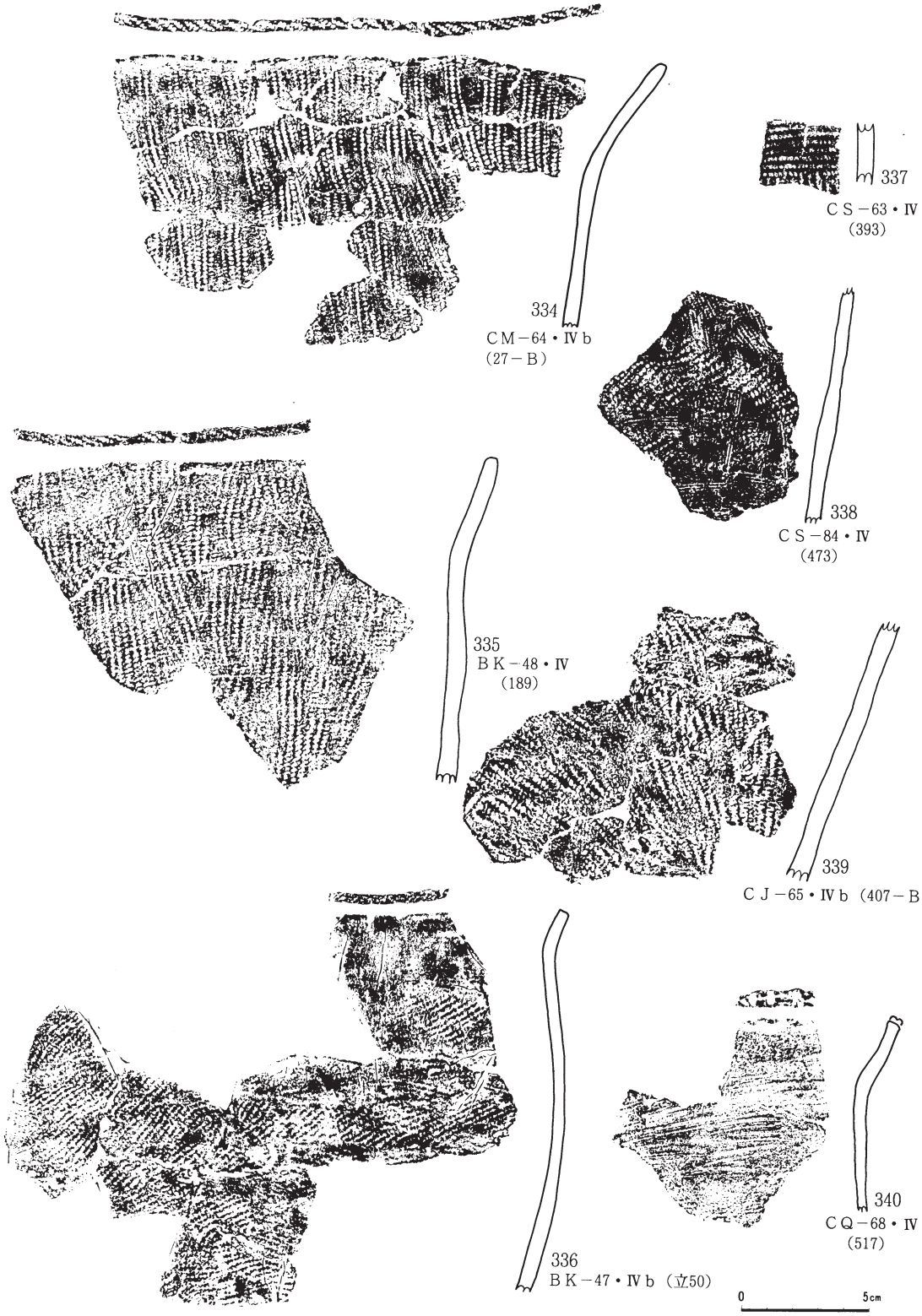
第106図　遺構外出土（第Ⅷ群土器ア）



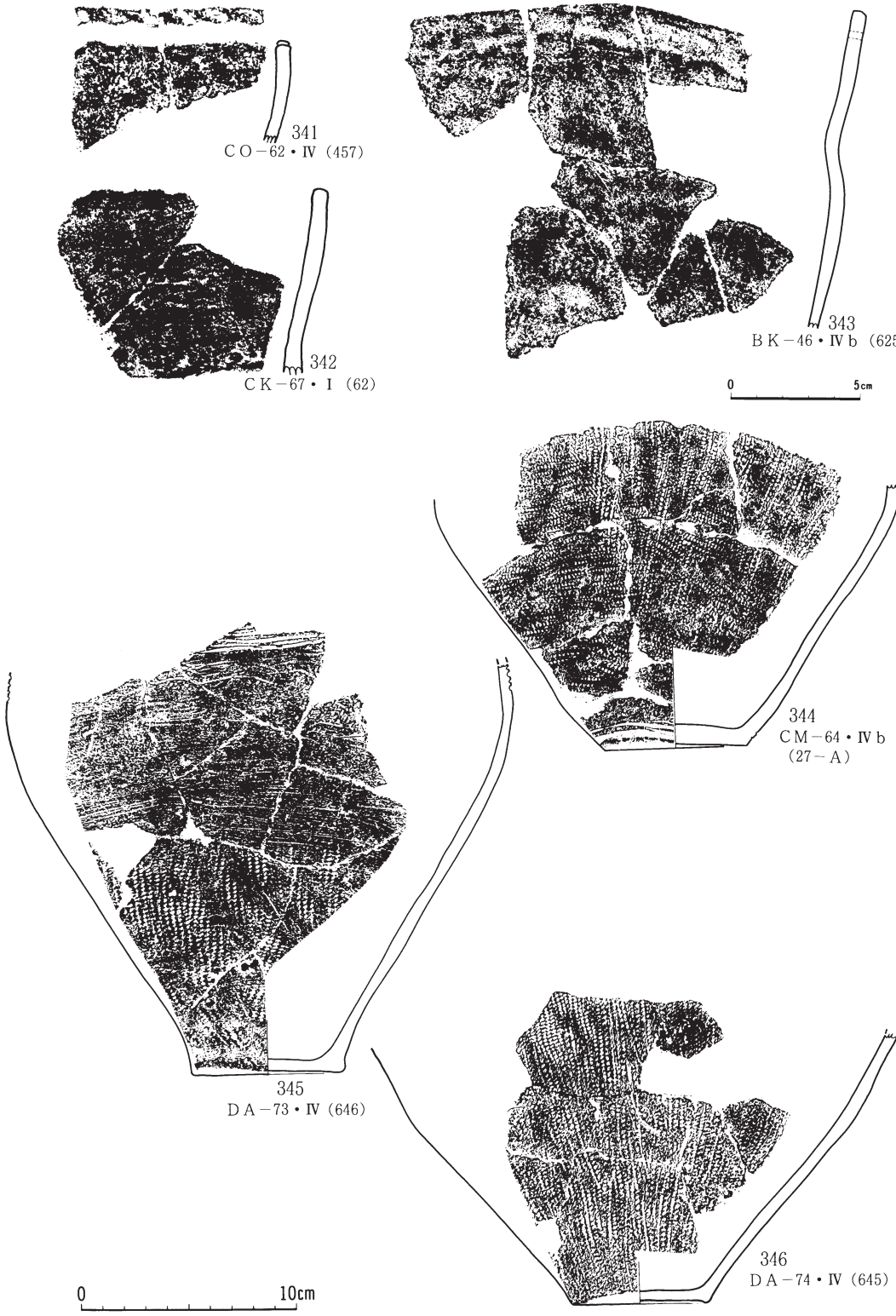
第107図　遺構外出土（第Ⅷ群土器ア）



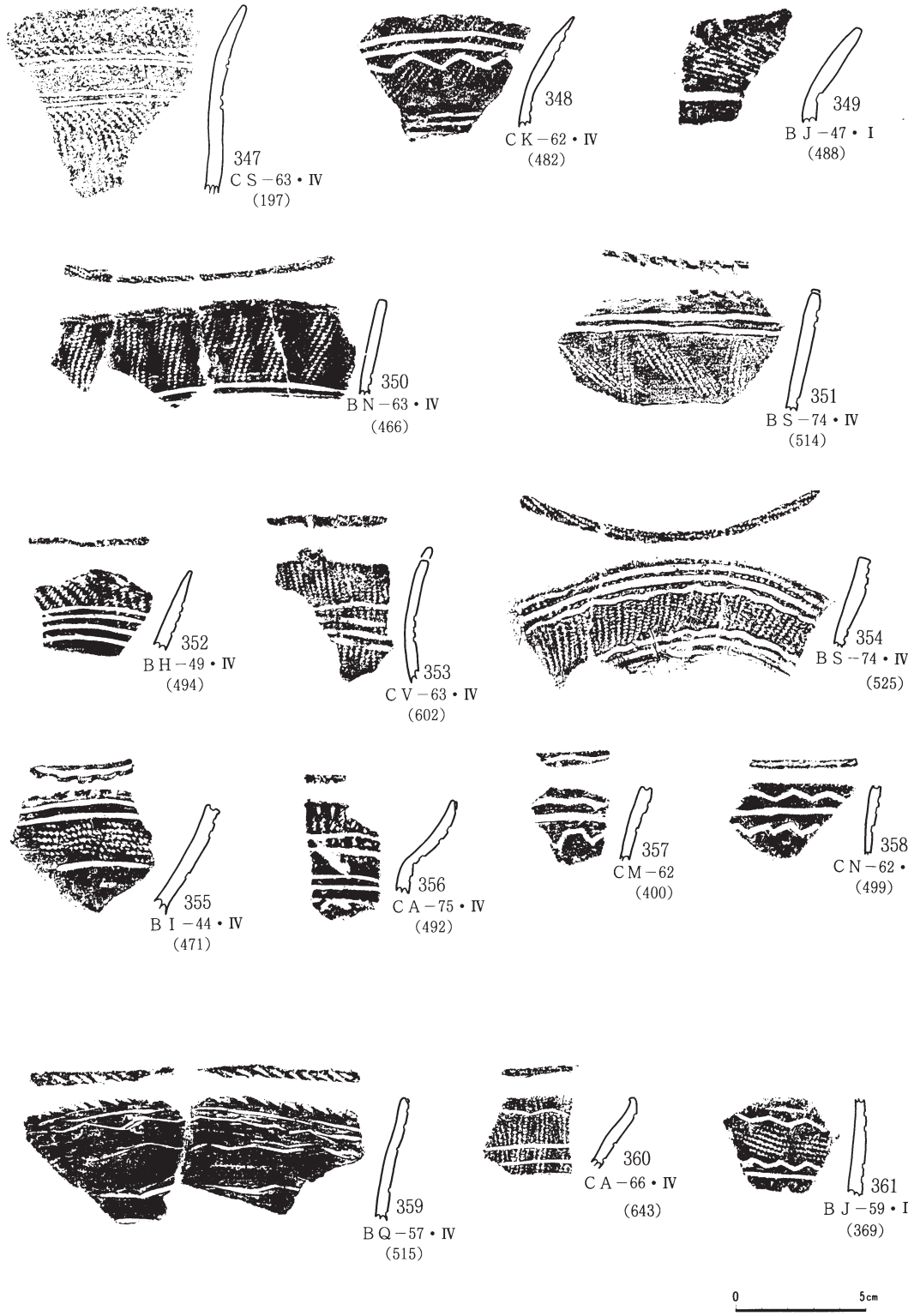
第108図　遺構外出土（第Ⅷ群土器ア）



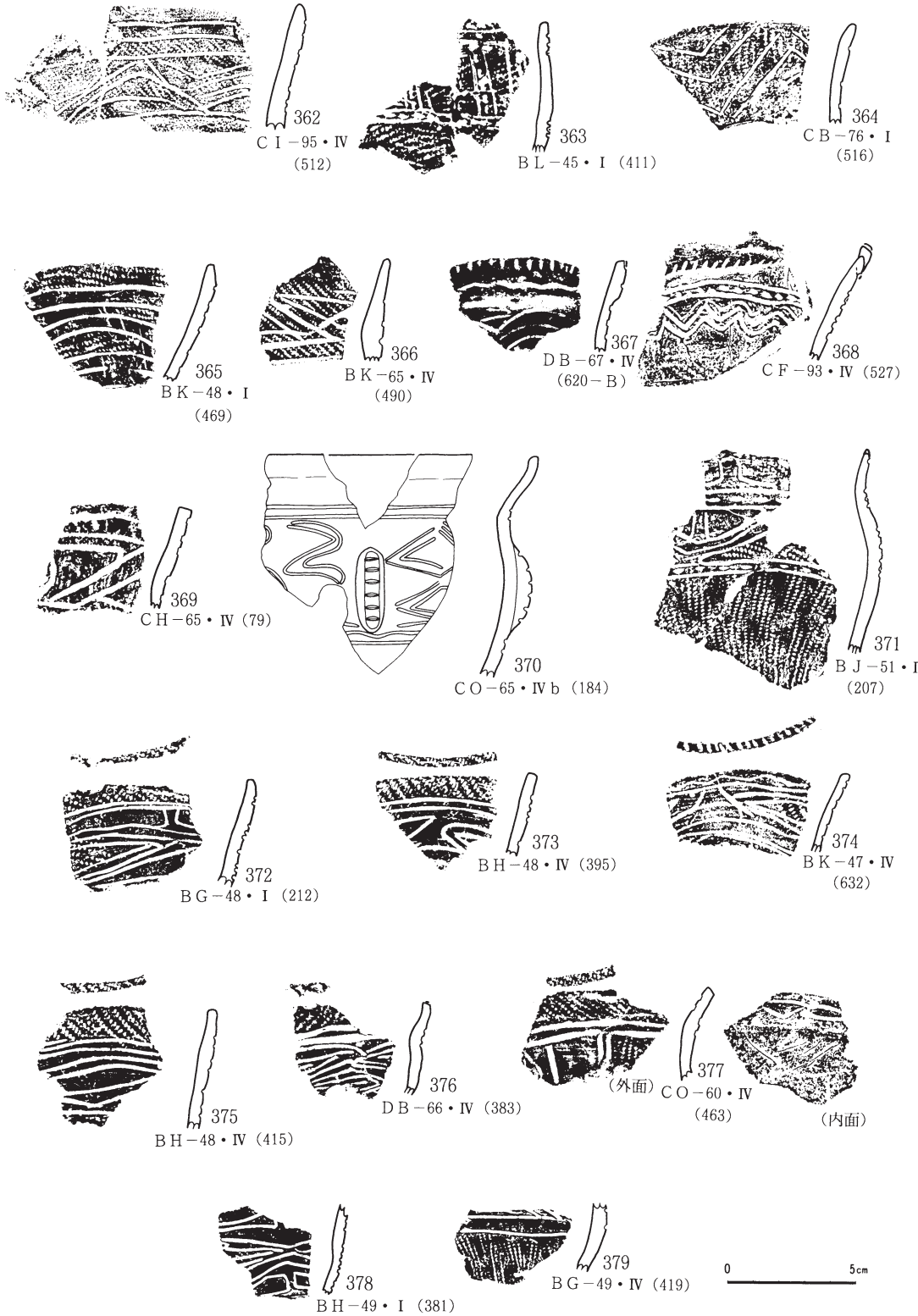
第109図　遺構外出土（第Ⅷ群土器ア）



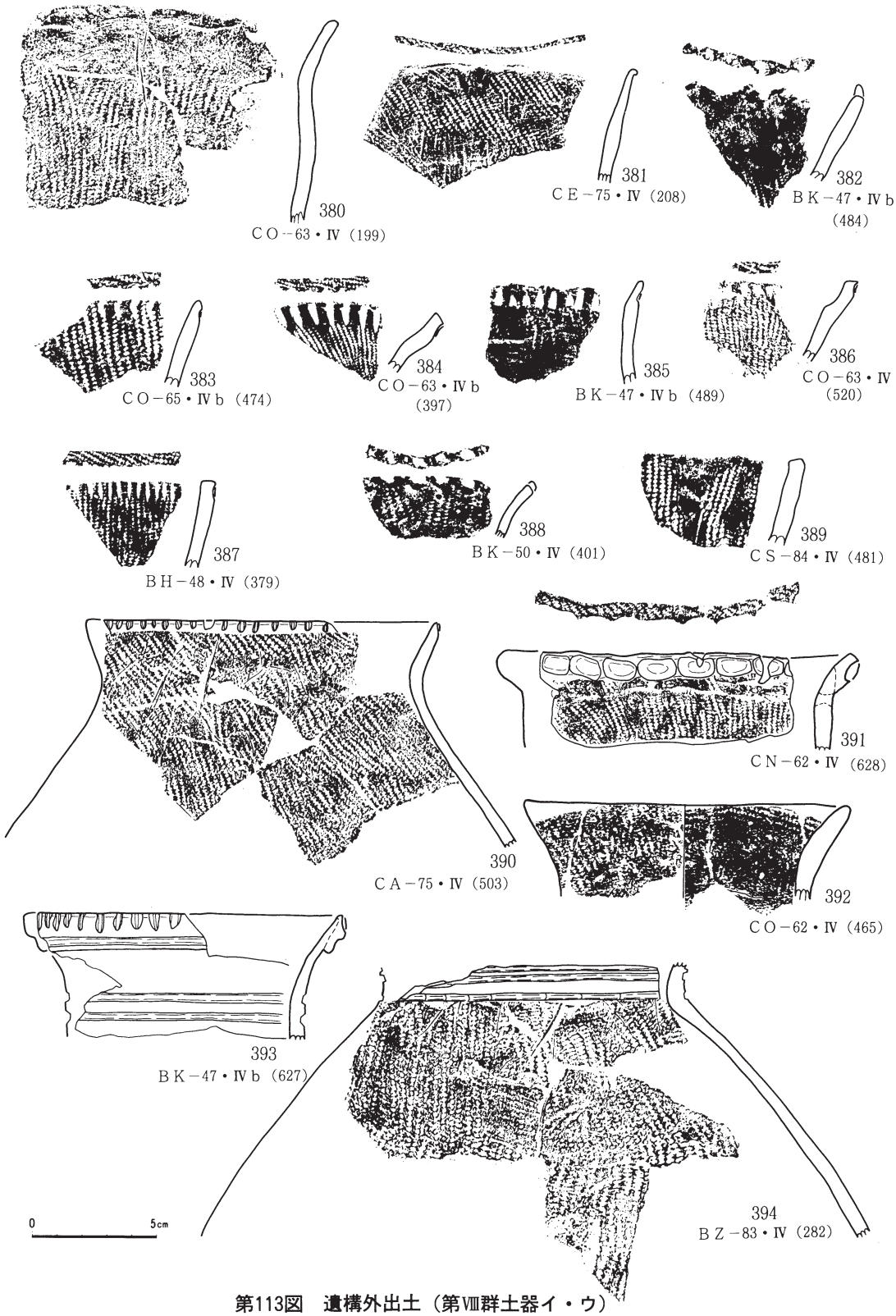
第110図　遺構外出土（第Ⅷ群土器ア）



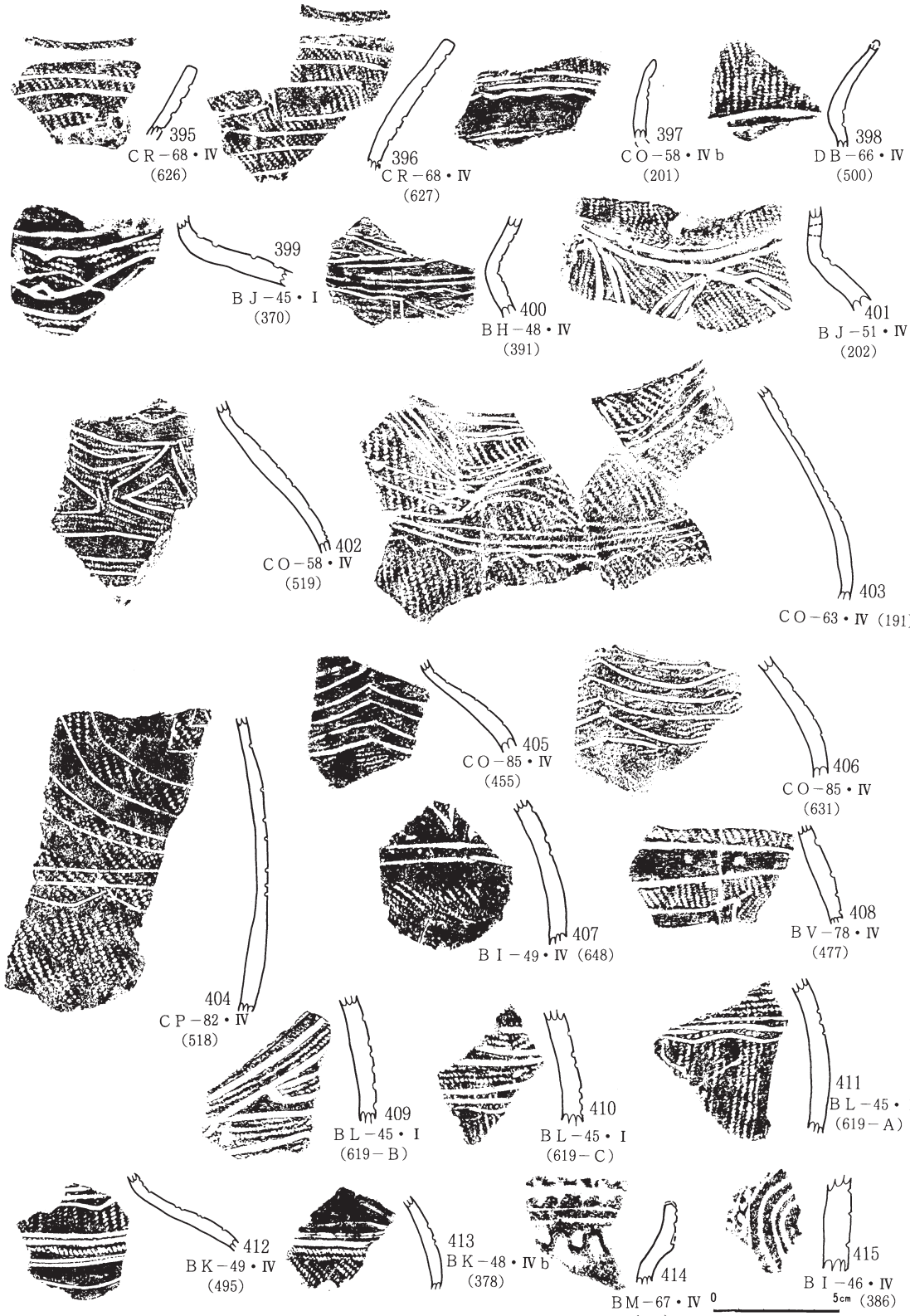
第111図　遺構外出土（第Ⅷ群土器イ）



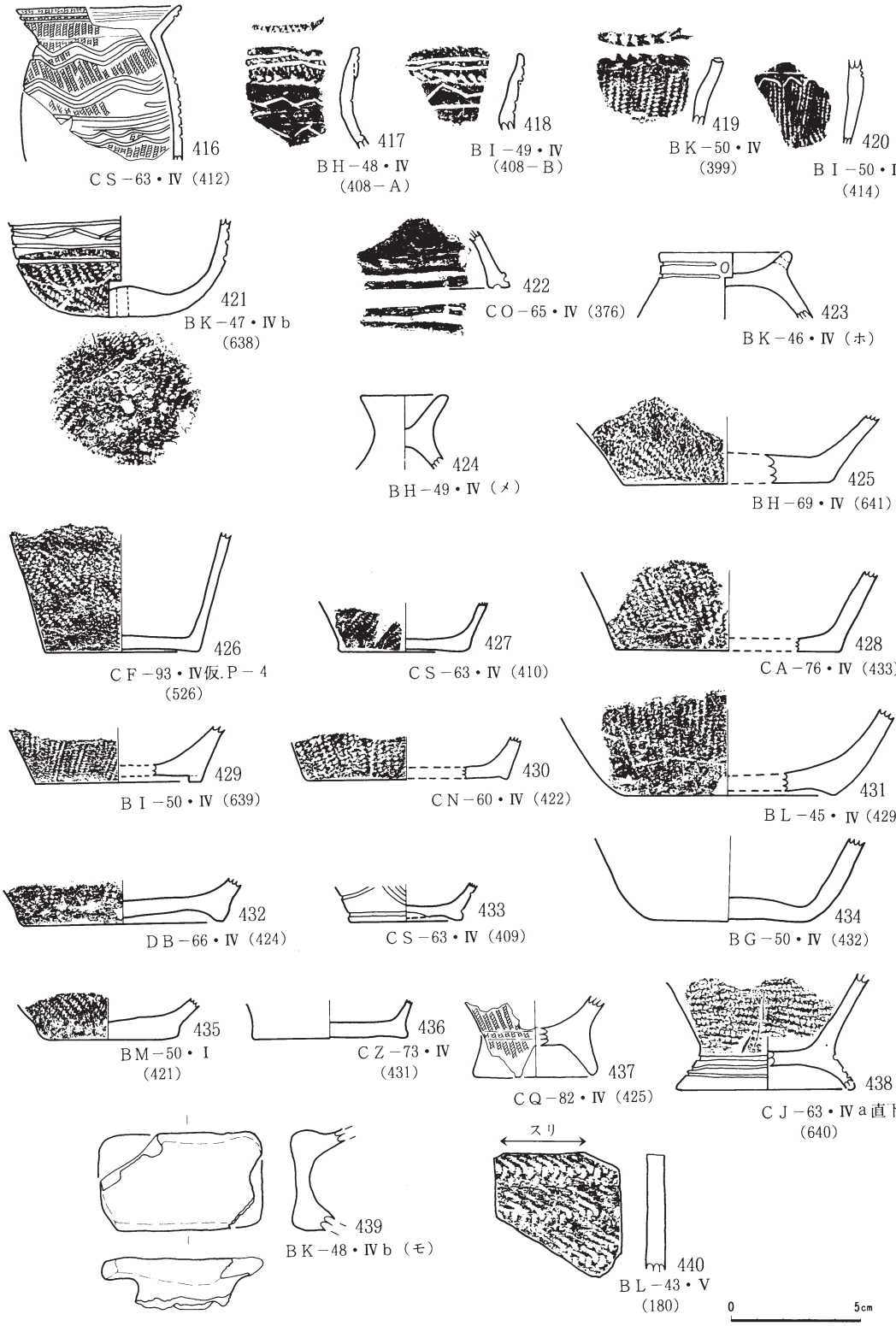
第112図　遺構外出土（第Ⅷ群土器イ）



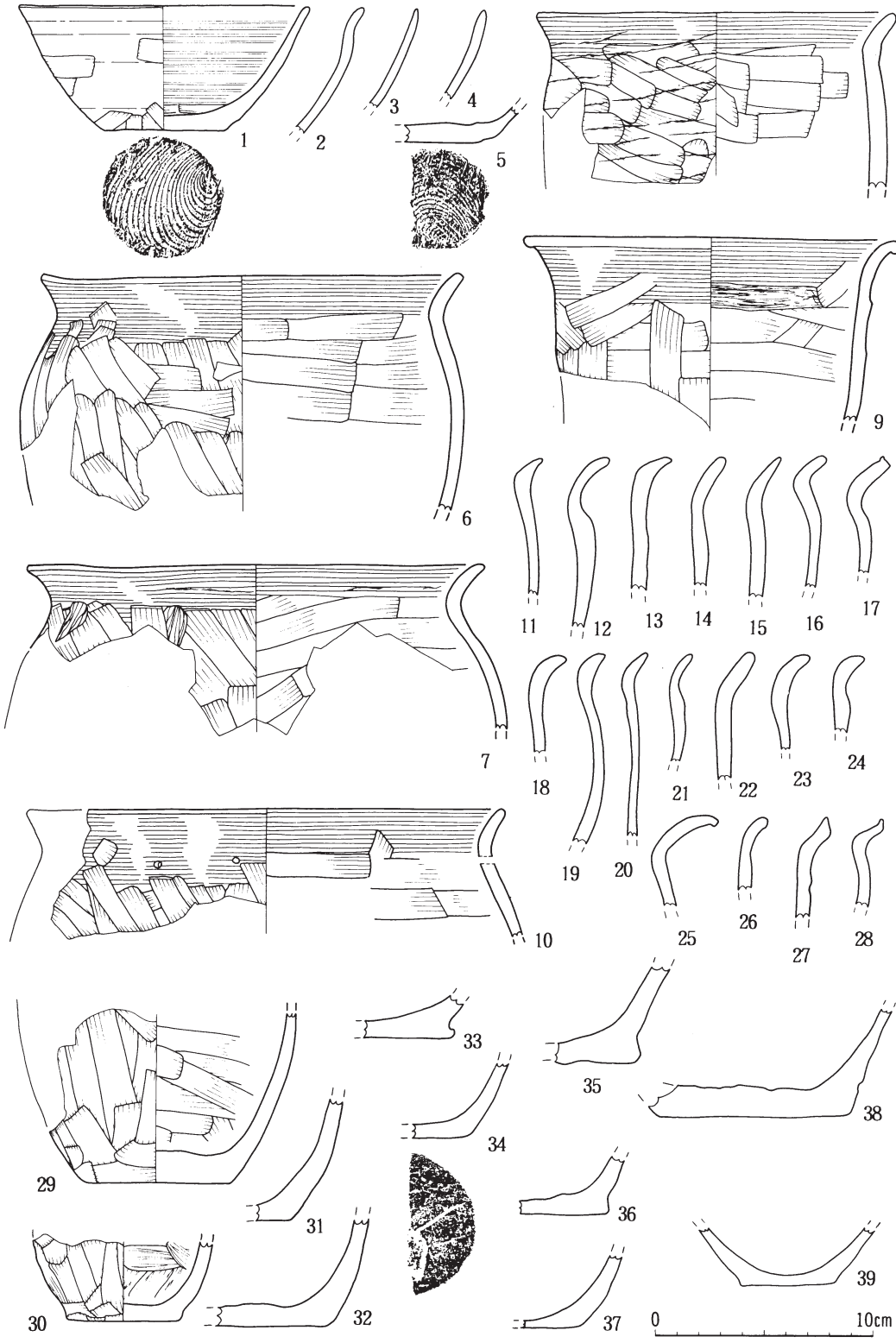
第113図　遺構外出土（第Ⅷ群土器イ・ウ）



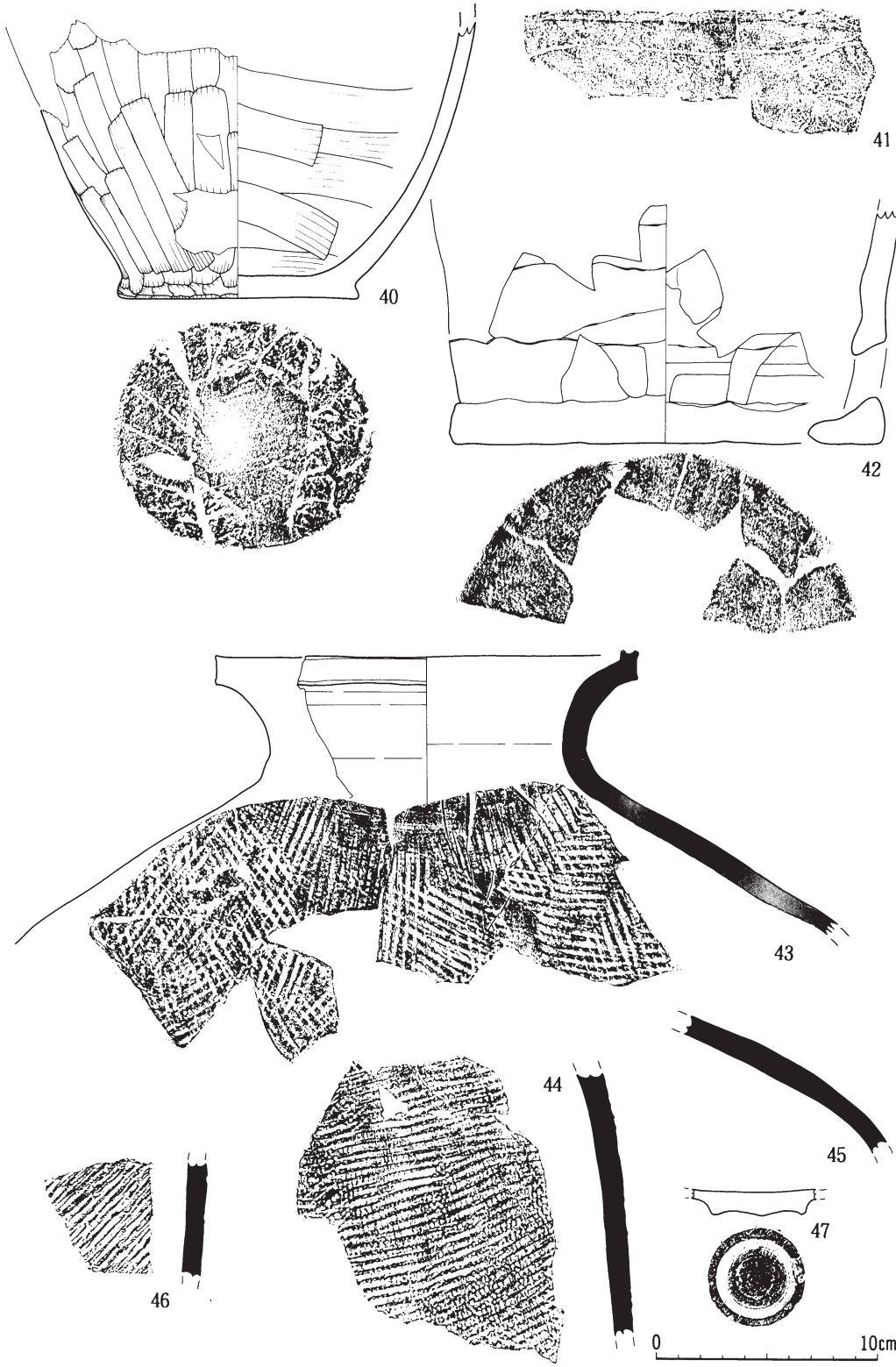
第114図　遺構外出土（第Ⅷ群土器ウ）



第115図　遺構外出土（第Ⅷ群エ・オ・カ・第Ⅸ群土器）



第116図　遺構外出土（第Ｘ群土器）



第117図　遺構外出土（第Ｘ群土器）

（2）石　　器

本遺跡からの遺構外出土石器は、平成４年度・５年度合わせて、246点である。その内訳は、石鏃12点、石錐１点、石槍８点、石匙35点、石篦24点、不定形石器60点、石核１点、磨製石斧12点、打製石斧11点、敲磨器類67点、台石１点、石皿２点、石錘12点となっている。出土層位は主にⅤ層を主体とする。Ⅴ層は、縄文時代に対応する層であり、特に縄文時代の出土土器は、早期後半から前期初頭の時期（早稲田５類～表館式）、また後期前半の時期（牛ケ沢式～十腰内Ⅰ式）土器に大きく二分される。石器は、どちらかの時期に所属するものと思われる。第Ⅳ層からは弥生時代の土器が出土しているので、第Ⅳ層出土の石器は、弥生時代の可能性も考えられるが、明確に弥生時代の土器に伴うと判断されるものはほとんど見られない。

石鏃（１～12）

12点の出土である。折損しているものは２点ある。これらは次のような形態が見られる。

Ⅰ類　無茎鏃

１種　凹基無茎鏃（１）

２種　平基無茎鏃（３・５）

Ⅱ類　有茎鏃

１種　平基有茎鏃（７・12・10）

２種　凸基有茎鏃（６・８・９・11）

Ⅲ類　尖基鏃（12）

石錐（13）

石錐は、１点のみの出土である。細長く棒状に調整され、つまみ部は作られていない。

石槍（14～21）

８点の出土である。20・21は折損している。14・15・16・18は、すべて基部が尖基を呈しており、最大幅は器体の中央付近にある。長さは、8.4cm～9.6cmとほぼ均一な大きさである。

石匙（22～28・29～37・38～46・47～56）

35点の出土である。そのうち折損しているのは10点ある。22の横型石匙を除いてすべて縦型石匙である。縦型石匙は、片面に主要な調整加工を施しているのがほとんどであるが、なかには51・52のように裏面にも調整加工を施しているものもある。また、55のように表面に主要剥離を施さず、裏面の周縁のみに調整加工をしているのも見られる。ただし、裏面に微細な調整剥離を部分的に施す例は多い。51は、つまみ部が二又状になっている。

石篦（57～64・65～72・73・80）

石篦として一括したものは、24点数える。そのうち折損しているものは７点である。中に

は形態上石箆としがたい57のような幅がなく細身のものもある。しかし、やや肉厚で側縁が対照的に調整され、刃部が欠損しているが頭部に比べて若干の幅が感じられるので石箆の類に含めた。石箆の多くは、片面主体の調整を施しているが、裏面は周縁を粗く剥離を加えている。刃部は片刃であるが、両面加工を施しているものには59などがある。刃部の形態を見ると湾曲しているもの59・60～66と刃部が直線的なもの67～72・74・75・79とに大きく分かれる。

不定形石器（81～88・89～98・99～108・109～119）

以上の記載した定形石器以外の剥片石器を一括してまとめる。

Ⅰ類　3cm～5cmほどの小剥片の周縁を細部調整している類。（85・86・87・88・89）

89は、ほぼ円形に調整剥離を施している。87は、黒曜石の剥片を使用して調整加工している。

Ⅱ類　剥片の一部の側縁に細部調整を施している類。（97・100・101・103・105・106・108・109・114）

Ⅲ類　石鏃または石槍とは異なるが先端を尖頭状に調整している類。（90・92・93・116・118）

石核（120）

原石は、珪質頁岩で一部表皮を残している。

磨製石斧（121～132）

12点の出土である。そのうち折損しているものは6点ある。122・123は小型の磨製石斧である。128は、擦り切りの痕跡が残っている。121は、刃部に敲打痕が見られる。石斧の形態については、大半のものは最大幅が刃部に見られ、基部が刃部に比して狭い。しかし、127・129は刃部と基部の幅の差があまりない。126は、片刃として刃部を作出し、弥生時代の石斧の可能性が高い。

打製石斧（133～143）

11点の出土である。そのうち4点は折損している。

打製石斧のほとんどは、長楕円形の偏平円礫を利用し、主に片面に粗い剥離を施し刃部を作出している。そのため片面は、自然面を残している。141は、刃部のみに剥離を加え器体のほとんどに自然面を有する。

敲磨器類（144～189）

いわゆるスリ石、タタキ石、凹石の類で67点が出土した。石質は安山が多く使われている。

Ⅰ類　スリ石の類。（144～170）

1種　球状、楕円状を呈する礫を利用し、ほぼ全面にスリの痕跡が認められる類。(144～152) 9点出土している。144・149は、部分的にタタキ痕も見られる。

2種　三角状磨石とも言われ、三角柱状の礫で断面が三角形に近く、三角形の礫の細長い側面にスリ面が認められる類。縄文時代早期後半から前期初頭の時期によく出土する。(153～166・168・169・188)

Ⅱ類　タタキ石 (172・173～180)

1種　平面が偏平、楕円形で断面も偏平の礫を使用し、長軸の側縁及び先端部にタタキ痕が見られる。(172・173)

2種　従来凹石と言われて来たもので1種よりも凹部が明瞭となっている類。(174～180)

Ⅲ類　タタキとスリとが複合して使用されている類 (178～187・189)

タタキ痕は主に長軸の両端に見られ、スリは礫の側面を使用している。

台石 (171)

石皿 (202・203)

202は、石質が安山岩で、折損しているが裏には脚が2個見られる。203は、砂岩で完形品である。石皿の周縁は縁取りをしている。

石錘 (190～201)

12点出土している。円礫、楕円礫の長軸の両端を打ち欠いて抉りを設けている。

石器観察表

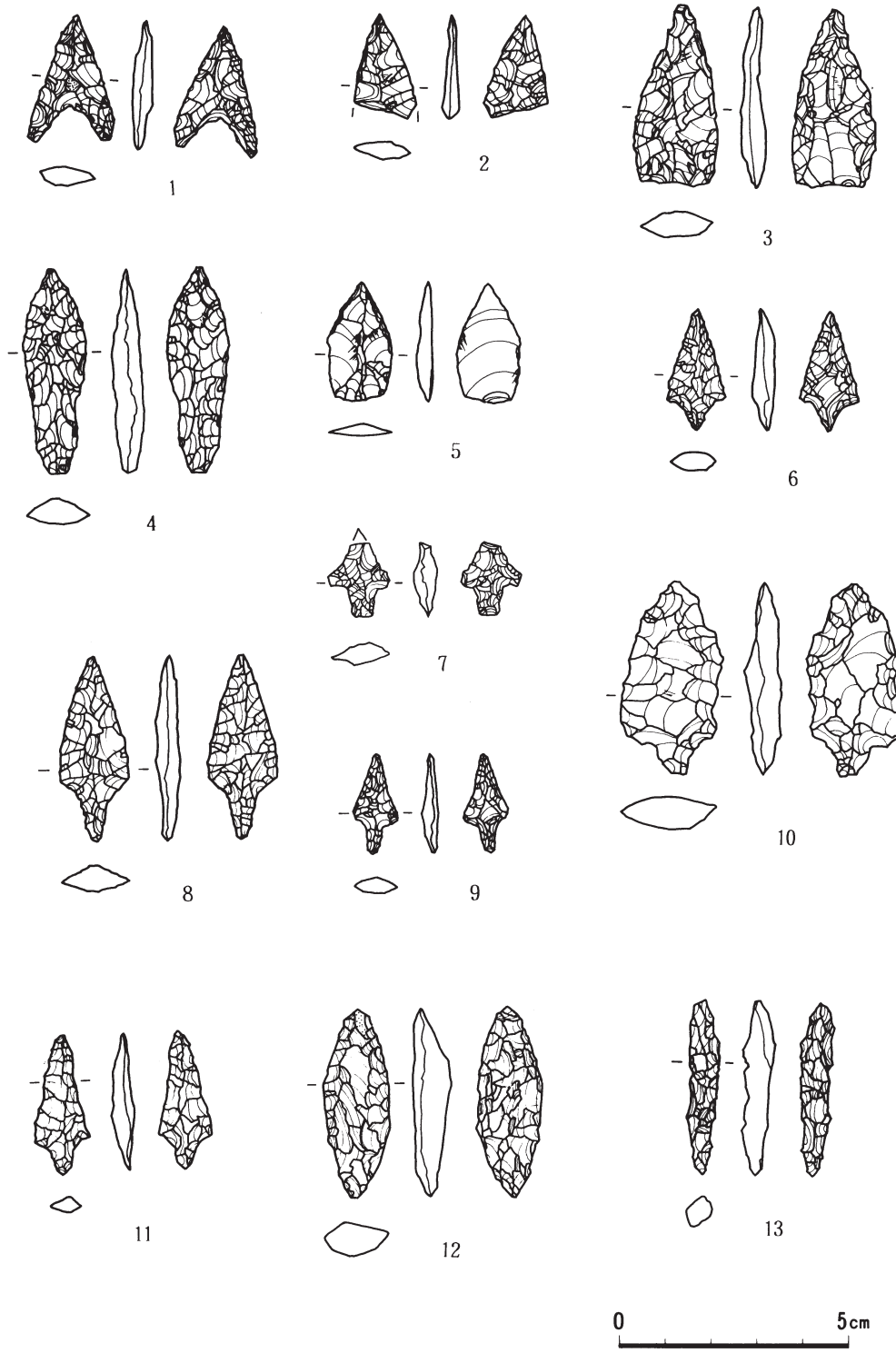
図版番号	器種	出土グリッド	層	計測値 長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	整理番号	備考
第118図 1	石鏃	CH−78	V	(28.5)	19.0	4.0	(1.3)	珪頁	1	
〃 2	〃	CV−84	Ⅳ	22.5	13.5	3.5	0.8	〃	2	折損
〃 3	〃	BN−67	表土	4.0	18.0	6.0	3.9	〃	3	
〃 4	〃	CN−56	V	45.0	14.0	7.0	3.5	〃	10	
〃 5	〃	BH−63	V	26.0	14.5	3.5	1.2	〃	8	
〃 6	〃	BI−46	I	27.0	13.0	4.5	1.0	〃	6	
〃 7	〃	BN−58	Ⅳ	12.0	13.0	5.0	0.6	玉髄	4	
〃 8	〃	CK−56	Ⅳ	41.0	15.0	6.0	2.2	〃	7	
〃 9	〃	CH−65	Ⅳ	22.0	10.0	4.0	0.4	珪頁	12	
〃 10	〃	BM−56	V	42.0	22.0	7.0	5.5	〃	11	
〃 11	〃	CP−62	Ⅳb	30.0	11.5	5.0	1.0	〃	9	
〃 12	〃	BQ−57	V	42.0	15.0	8.0	4.5	〃	5	
〃 13	石錐	BR−69		38.0	7.0	6.5	1.7	玉髄	162	
第119図 14	石槍	BG−61	V	84.0	24.0	8.0	14.2	珪頁	76	
〃 15	〃	BG−64	V	93.0	27.0	13.0	23.4	〃	75	
〃 16	〃	BU−77	表採	91.0	22.0	9.0	15.3	〃	73	
〃 17	〃	BJ−52	V	96.0	31.0	10.0	31.9	〃	77	
〃 18	〃	BH−50	I	90.0	24.0	9.0	17.0	〃	79	
〃 19	〃	BK−50	Ⅳ	96.0	33.0	17.0	36.6	〃	78	
第120図 20	〃	CI−63	V	(142.0)	37.0	17.0	77.0	〃	74	
〃 21	〃	BH−50	Ⅳ	(53.0)	25.0	10.0	(12.3)	〃	80	折損
〃 22	石匙	CH−78	V	32.0	33.0	6.0	5.3	〃	18	
〃 23	〃	CM−61	V	(49.0)	25.0	5.0	(5.0)	〃	27	折損
〃 24	〃	CE−78	表採	77.0	25.0	7.5	13.0	〃	17	
〃 25	〃		表採	63.0	28.0	11.0	11.9	〃	21	
〃 26	〃	BH−53	V	(65.0)	19.0	10.0	(8.1)	〃	35	折損
〃 27	〃	BH−72	V	63.0	21.5	9.0	10.3	〃	14	
〃 28	〃	BI−59	V	(58.0)	22.0	5.5	(7.8)	〃	45	折損
〃 29	〃	BJ−63	V	56.0	17.0	5.5	4.7	〃	51	
第121図 30	〃	CL−63	V	54.0	23.0	5.0	7.0	〃	29	
〃 31	〃	BI−48	Ⅳ	67.0	13.0	12.0	9.8	〃	43	
〃 32	〃	BG−60	V	83.0	25.0	7.0	14.2	〃	41	
〃 33	〃	CL−61	V	86.0	28.0	12.0	19.8	〃	39	
〃 34	〃	BH−61	V	70.0	29.0	7.0	10.7	〃	48	
〃 35	〃	BI−46	V	68.0	25.0	5.0	8.6	〃	37	
〃 36	〃	BM−56	V	55.0	14.0	14.0	10.1	〃	47	
〃 37	〃	CR−58	V	66.0	27.0	9.0	9.7	〃	50	
第122図 38	〃	BG−62	V	79.0	15.0	6.0	6.2	〃	46	
〃 39	〃	CB−76	I	71.0	29.0	6.5	11.2	〃	16	
〃 40	〃	BJ−63	V	52.0	26.0	9.0	10.7	珪頁	44	
〃 41	〃	BM−58	V	55.0	25.0	5.0	7.2	〃	20	

図版番号	器種	出土グリッド	層	計測値 長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	整理番号	備考
第122図 42	石匙	BN−56	V	64.0	33.0	8.0	12.2	珪頁	33	
〃 43	〃	CM−63	V	57.0	23.0	5.0	5.2	〃	28	
〃 44	〃	BJ−48	I	44.0	21.0	8.0	5.0	〃	32	
〃 45	〃	BI−49	ベルト	42.0	23.5	5.0	4.5	〃	31	
〃 46	〃	BJ−51	V	(58.0)	32.0	10.5	(18.0)	〃	56	折損
第123図 47	〃	CB−82	V	94.0	37.0	6.5	21.0	〃	15	
〃 48	〃	BJ−47	V	(56.0)	20.0	9.0	(7.9)	〃	24	折損
〃 49	〃	BH−72	V	51.0	24.0	4.0	6.9	〃	13	
〃 50	〃	BJ−70	V	48.0	12.0	5.0	4.3	〃	26	
〃 51	〃		表採	69.0	20.0	6.5	9.2	〃	22	
〃 52	〃	BJ−45	I	(55.0)	27.0	10.0	(14.8)	〃	25	折損
〃 53	〃	BF−62	Vb	48.0	24.0	5.0	5.7	〃	152	折損
〃 54	〃	BL−67	V	(51.0)	20.5	6.0	(7.4)	〃	19	折損
〃 55	〃	CI−72	Vb	(46.0)	18.5	4.0	(3.8)	黒曜	23	折損
〃 56	〃	BG−61	V	(56.0)	25.0	5.0	(8.5)	珪頁	30	折損
第124図 57	石篦	CP−61	V	81.0	19,5	7.0	12.0	〃	55	折損
〃 58	〃	BH−63	V	80.0	35.0	13.0	28.4	〃	62	
〃 59	〃	CK−55	IVb	58.0	27.0	11.5	18.2	〃	57	
〃 60	〃	BL−65	表土	(40.0)	38.0	11.0	(17.9)	〃	52	折損
〃 61	〃	BM−56	V	(39.0)	35.0	11.0	(17.2)	〃	53	折損
〃 62	〃	BQ−57	V	53.0	37.0	9.0	20.7	〃	54	
〃 63	〃	BK−55	V	(50.0)	35.0	14.0	(24.9)	頁岩	60	折損
〃 64	〃	BH−52	V	(45.0)	42.0	17.0	(20.9)	珪頁	67	折損
第125図 65	〃	BM−67	V	75.0	39.0	13.0	42.5	頁岩	72	
〃 66	〃	BQ−57	V	64.0	45.0	13.0	50.0	砂岩	91	
〃 67	〃	BK−50	IV	64.0	38.0	9.0	22.2	頁岩	58	
〃 68	〃	BE−66	V	52.0	39.0	12.0	31.0	珪頁	64	
〃 69	〃	BL−53	V	65.0	34.0	12.0	27.0	〃	65	
〃 70	〃	BJ−51	V	75.0	48.0	15.0	40.0	頁岩	90	
〃 71	〃	BJ−51	V	72.0	53.0	15.0	71.5	珪頁	89	
〃 72	〃	BI−49	V	65.0	37.0	16.0	34.2	〃	68	
第126図 73	〃	BJ−53	V	88.0	39.0	20.0	55.2	〃	70	
〃 74	〃	BK−53	V	59.0	37.0	16.0	25.3	〃	63	
〃 75	〃	BJ−51	V	58.0	32.0	10.5	18.0	〃	56	
〃 76	〃	CQ−68	V	83.0	49.0	15.0	60.7	頁岩	59	
〃 77	〃	BH−52	V	60.0	(27.0)	10.0	(15.4)	珪頁	66	折損
〃 78	〃	BR−58	V	68.0	39.0	13.0	38.6	〃	69	
〃 79	〃	BK−50	V	64.0	42.0	12.0	38.4	緑細	71	
〃 80	〃	BJ−62	V	(60.0)	32.0	11.0	(22.0)	珪頁	61	折損
第127図 81	不定形石器	BH−73	V	45.0	26.0	22.0	19.6	〃	110	
〃 82	〃	CD−84	V	32.0	25.0	10.0	7.0	玉珪	111	
〃 83	〃	BN−59	IV	33.0	23.0	7.0	4.8	〃	114	

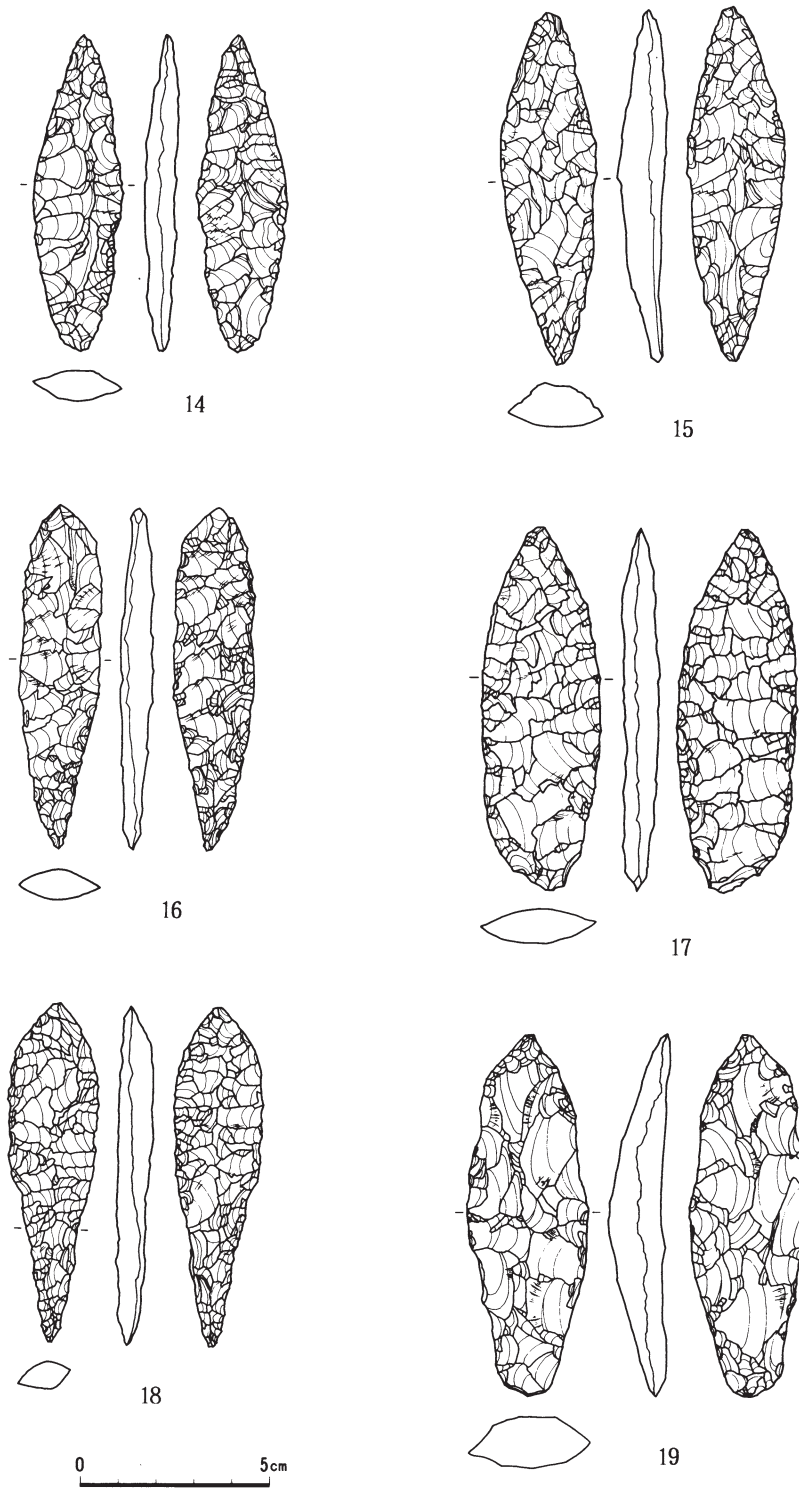
図版番号	器種	出土グリッド	層	計測値 長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	整理番号	備考
第127図 84	不定形石器	BM−59	V	41.0	27.0	6.0	7.1	珪頁	118	
〃 85	〃	BN−59	Ⅳ	45.0	22.0	10.0	12.3	〃	119	
〃 86	〃	CM−78	V	42.0	19.5	6.5	5.9	〃	130	
〃 87	〃	BG−48	I	38.0	19.0	5.0	2.0	黒曜	161	
〃 88	〃	BJ−68	V	27.0	22.0	6.5	3.4	珪頁	141	
第128図 89	〃	BM−50	V	41.0	38.0	12.0	18.3	〃	157	エンドスクレッパー
〃 90	〃	BH−71	V	46.0	22.0	6.0	5.5	〃	121	
〃 91	〃	CP−63	V	52.0	23.0	10.0	10.2	〃	159	
〃 92	〃	CD−83	V	52.0	21.0	10.0	12.1	〃	139	
〃 93	〃	BJ−56	I	41.0	23.0	5.5	4.9	〃	154	
〃 94	〃	BI−46	V	30.0	22.0	7.5	4.4	〃	155	
〃 95	〃	BN−60	V	37.0	31.0	10.0	11.7	〃	116	
〃 96	〃	BN−59	Ⅳ	33.0	33.0	7.0	8.9	〃	115	
〃 97	〃	BM−68	V	43.0	32.0	13.0	15.9	〃	117	
〃 98	〃	BH−72	V	44.0	38.0	11.0	13.7	〃	120	
第129図 99	〃	BK−50	V	61.0	42.0	16.0	37.4	〃	156	
〃 100	〃	CD−84	V	46.0	48.0	11.0	23.9	〃	131	
〃 101	〃	BH−73	V	48.0	55.0	12.0	28.7	〃	134	
〃 102	〃	BJ−66	表土	61.0	30.0	13.0	22.3	〃	132	
〃 103	〃	BL−65	表土	81.0	47.0	14.0	36.7	〃	137	
〃 104	〃	BJ−60	V	29.0	27.0	7.5	6.5	〃	127	
〃 105	〃	CL−77	V	40.0	49.0	9.0	16.9	〃	136	
〃 106	〃	BL−65	表土	39.0	43.0	12.0	16.3	〃	133	
〃 107	〃	BG−72	V	32.0	38.0	8.5	10.3	〃	123	
〃 108	〃	BM−58	V	69.0	43.0	15.0	52.6	〃	135	
第130図109	〃	BH−73	V	46.0	45.0	18.0	35.2	〃	138	
〃 110	〃	CL−60	Ⅳ	39.0	37.0	12.0	15.4	〃	148	
〃 111	〃	BL−69	V	41.0	40.0	10.0	16.4	〃	128	
〃 112	〃	BL−66	表土	34.0	34.0	6.0	9.9	〃	124	
〃 113	〃	BH−73	V	30.0	22.5	5.5	4.3	〃	112	
〃 114	〃	BH−73	V	26.0	29.0	8.5	7.1	〃	126	
〃 115	〃	BL−68	V	32.0	38.0	7.0	8.8	〃	125	
〃 116	〃	BG−72	V	29.0	25.0	12.0	6.5	〃	113	
〃 117	〃	BK−65	V	56.0	23.0	15.0	13.3	〃	122	
〃 118	不定形	BK−75	V	36.0	25.0	8.0	7.2	珪頁	140	
〃 119	〃	BR−69	V	43.0	34.0	9.5	16.9	〃	129	
第131図120	石核	BI−49	Ⅳ	62.0	67.0	50.0	263.0	〃	163	
〃 121	石斧(磨)	BL−66	表土	93.0	46.0	30.0	187.0	閃緑	101	
〃 122	〃	CV−84	Ⅳ	62.0	32.0	14.0	34.0	安山	99	
〃 123	〃	BK−50	V	63.0	38.0	15.0	47.5	閃緑	103	
第132図124	〃	BP−59	V	(89.0)	51.0	23.0	(149.0)	緑細	102	折損
〃 125	〃	BI−60	V	156.0	73.0	33.0	488.5	安山	105	

図版番号	器種	出土グリッド	層	計測値 長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	整理番号	備考
第132図126	石斧(磨)	CQ−61	Ⅳ	(98.0)	37.0	29.0	(177.5)	緑細	108	折損
〃 127	〃	BQ−59	Va	113.0	45.5	30.0	225.0	閃緑	107	
〃 128	〃	SW−85	表採	(141.0)	50.0	31.0	(374.0)	緑細	98	折損
〃 129	〃	BQ−59	Va	123.0	41.0	27.5	206.0	閃緑	106	
第133図130	〃	BM−57	V	(68.0)	59.0	20.0	(101.0)	砂岩	104	折損
〃 131	〃	BN−67	V	(89.0)	58.0	24.5	(215.0)	輝凝	100	折損
〃 132	〃	BN−67	V	(86.0)	64.0	21.0	(195.0)	輝緑	97	折損
〃 133	石斧(打)	CQ−60	V	116.0	55.0	18.0	120.9	閃緑	94	
〃 134	〃	BN−63	V	(113.0)	72.0	27.0	(304.2)	輝緑	87	折損
〃 135	〃	BZ−84	V	107.0	51.0	21.0	157.4	〃	82	
第134図136	〃	BG−67	V	153.0	75.0	26.0	400.0	閃緑	93	
〃 137	〃	BG−67	V	135.0	66.0	24.0	298.0	安山	92	
〃 138	〃	BZ−75	Ⅰ	101.0	54.0	15.0	112.0	閃緑	95	
〃 139	〃	BH−73	V	95.0	55.0	14.0	95.0	砂岩	84	
〃 140	〃	BM−60	V	(90.0)	48.0	15.0	(69.0)	閃緑	85	折損
〃 141	〃	BJ−61	V	107.0	68.0	21.0	23.0	輝緑	88	
第135図142	〃	CH−77	Ⅳ	(70.0)	50.0	32.0	(160.8)	閃緑	83	折損
〃 143	〃	BG−73	V	(67.0)	53.0	15.0	(71.0)	チャ	86	折損
〃 144	敲磨器	BI−46	V	88.0	75.0	70.0	580.0	安山	93−31	スリ
〃 145	〃	BO−59	Ⅳ	52.0	46.0	40.0	123.0	〃	92−74	スリ
〃 146	〃	BL−65	表土	56.0	49.0	43.0	150.0	〃	92−73	スリ
〃 147	〃	BQ−74	Ⅳ	54.0	51.0	47.0	173.0	〃	92−76	スリ
〃 148	〃	BK−53	V	57.0	46.0	43.0	170.0	〃	93−105	スリ
〃 149	〃	BK−57	Ⅰ	63.0	62.0	62.0	325.0	〃	93−106	スリ
第136図150	〃	DA−73	Ⅳ	96.0	79.0	72.0	680.0	〃	92−69	スリ
〃 151	〃	CE−75	Ⅳ	70.0	70.0	50.0	344.0	〃	92−72	スリ
〃 152	〃	BL−65	表土	48.0	40.0	34.0	76.0	〃	92−75	スリ
〃 153	〃	CL−58	V	163.0	80.0	54.0	1070.0	閃緑	93−13	スリ
〃 154	〃	CK−58	Ⅳ	160.0	94.0	52.0	1140.0	安山	93−20	スリ
〃 155	〃	表採		70.0	58.0	34.0	190.0	チャ	93−3	スリ
〃 156	〃	BO−61	V	139.0	65.0	60.0	820.0	安山	93−15	スリ
第137図157	〃	CL−58	V	129.0	69.0	65.0	1170.0	安山	93−18	スリ
〃 158	〃	CG−76	Ⅳ	130.0	64.0	47.0	663.0	〃	92−80	スリ
〃 159	〃	BL−53	V	125.0	71.0	62.0	680.0	砂岩	93−14	スリ
〃 160	〃	BH−50	V	116.0	55.0	47.0	320.0	安山	93−22	スリ
〃 161	〃	CL−63	V	144.0	78.0	68.0	950.0	〃	93−12	スリ
〃 162	〃	CJ−72	V	96.0	60.0	40.0	266.0	〃	92−82	スリ
第138図163	〃	表採		139.0	78.0	52.0	620.0	〃	93−11	スリ
〃 164	〃	BP−56	V	165.0	80.0	69.0	1110.0	〃	93−32	スリ
〃 165	〃	CL−57	V	168.0	82.0	59.0	870.0	〃	93−41	スリ
〃 166	〃	CK−56	V	148.0	84.0	59.0	700.0	〃	93−21	スリ
〃 167	〃	BM−47	Ⅰ	92.5	57.0	47.0	340.0	〃	93−24	スリ

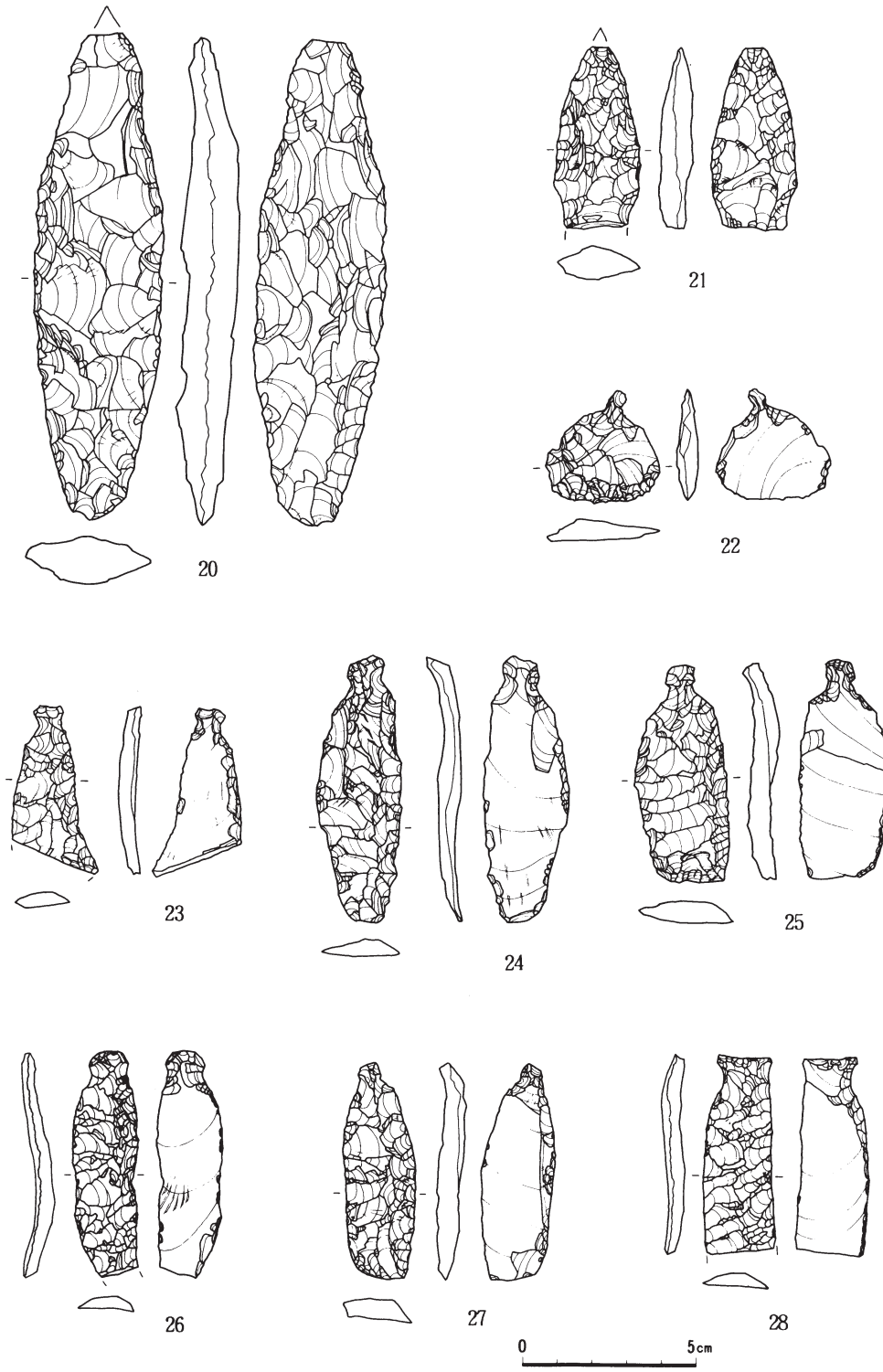
図版番号	器　種	出　土 グリッド	層	計　測　値 長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	整理番号	備　考
第138図168	敲磨器	CK−57	V	(165.0)	80.0	58.5	(970.0)	安山	93−42	折損　スリ
第139図169	〃	CG−76	Ⅳ	112.0	86.0	51.0	636.0	〃	92−81	スリ
〃　170	〃	DA−74	Ⅳ	68.0	48.0	14.0	61.0	〃	92−70	スリ
〃　171	台石	CG−76	Ⅳ	163.0	21.0	50.0	2540.0	凝灰	92−84	
〃　172	敲磨器	BL−50	Ⅳ	80.0	68.0	47.5	370.0	チャ	93−5	タタキ
〃　173	〃	BR−69	V	87.0	54.0	34.5	244.0	安山	92−83	タタキ
第140図174	〃	BU−77	V	10.6	70.0	33.0	344.0	〃	92−94	凹
〃　175	〃	CA−73	V	(73.0)	89.0	30.0	(190.0)	凝灰	93−8	折損　凹
〃　176	〃	CM−62	V	69.0	78.0	44.0	220.0	安山	93−7	凹
〃　177	〃	BE−60	V	104.0	(86.0)	82.0	(970.0)	〃	93−10	折損　凹
〃　178	〃	BH−50	Ⅳ	139.0	80.0	58.0	781.0	〃	93−38	凹＋スリ
〃　179	〃	BH−51	V	98.0	75.0	44.0	410.0	〃	93−9	凹＋スリ
〃　180	〃	BZ−77	Ⅳ	96.0	86.0	39.0	464.0	〃	93−6	凹＋スリ
〃　181	〃	BK−57	I	153.0	54.0	41.0	500.0	〃	93−19	スリ・タタキ
第141図182	〃	BL−51	V	109.0	66.5	45.0	530.0	〃	93−35	スリ・タタキ
〃　183	〃	BH−51	Ⅳ	117.0	90.0	45.0	690.0	〃	93−39	スリ・タタキ
〃　184	〃	BH−50	V	132.0	84.0	60.0	880.0	閃緑	93−17	スリ・タタキ
〃　185	〃	CL−58	V	135.0	77.0	64.0	1020.0	安山	93−48	スリ・タタキ
〃　186	〃	BK−50	V	107.0	85.0	45.0	680.0	〃	93−30	スリ・タタキ
第142図187	〃	CL−59	V	163.0	70.0	55.0	990.0	〃	93−47	スリ・タタキ
〃　188	〃	CQ−63	V	(12.4)	56.0	41.0	(350.0)	〃	93−49	折損　スリ
〃　189	〃	BJ−57	I	132.5	73.0	70.0	800.0	砂岩	93−33	スリ・タタキ
〃　190	石錘	BI−60	V	(55.0)	51.0	18.0	(79.0)	〃	93−60	折損
〃　191	〃	BR−58	V	95.0	92.0	24.0	306.0	安山	93−59	
第143図192	〃	BP−61	V	92.0	74.0	33.0	334.0	砂岩	93−51	
〃　193	〃	BQ−56	V	68.0	61.0	27.0	158.0	チャ	93−54	
〃　194	〃	BQ−57	Va	110.0	91.0	25.0	349.0	砂岩	93−58	
〃　195	〃	BP−61	V	69.0	49.0	20.0	92.0	斑糲	93−56	
〃　196	〃	BP−61	V	88.0	72.0	28.0	252.0	砂岩	93−53	
〃　197	〃	BP−61	V	83.0	65.0	22.5	169.0	頁岩	93−57	
〃　198	〃	BH−48	V	83.0	69.0	25.0	203.0	流紋	93−50	
〃　199	〃	BR−61	V	75.0	(72.0)	39.0	(261.0)	凝灰	93−55	折損
第144図200	〃	BR−58	V	64.0	74.0	22.0	152.0	砂岩	93−61	
〃　201	〃	BK−58	V	77.0	54.0	21.0	127.0	〃	93−52	
〃　202	石皿	BL−49	V	(198.0)	170.0	75.0	(1500.0)	安山	93−2	折損
〃　203	〃	CL−56	V	283.0	130.0	39.0	2090.0	砂岩	93−1	



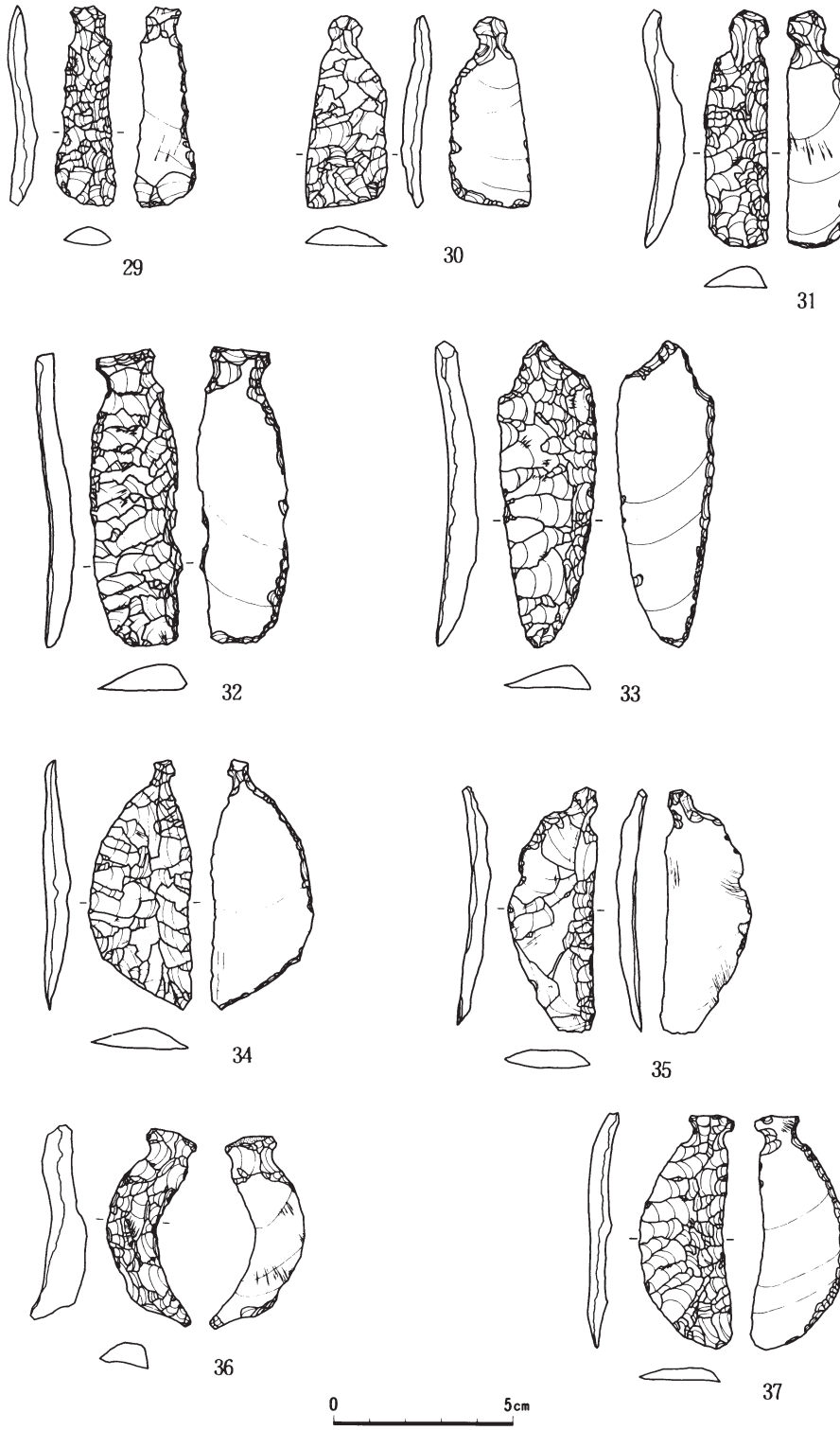
第118図　遺構外出土　石鏃（1～12）・石錐



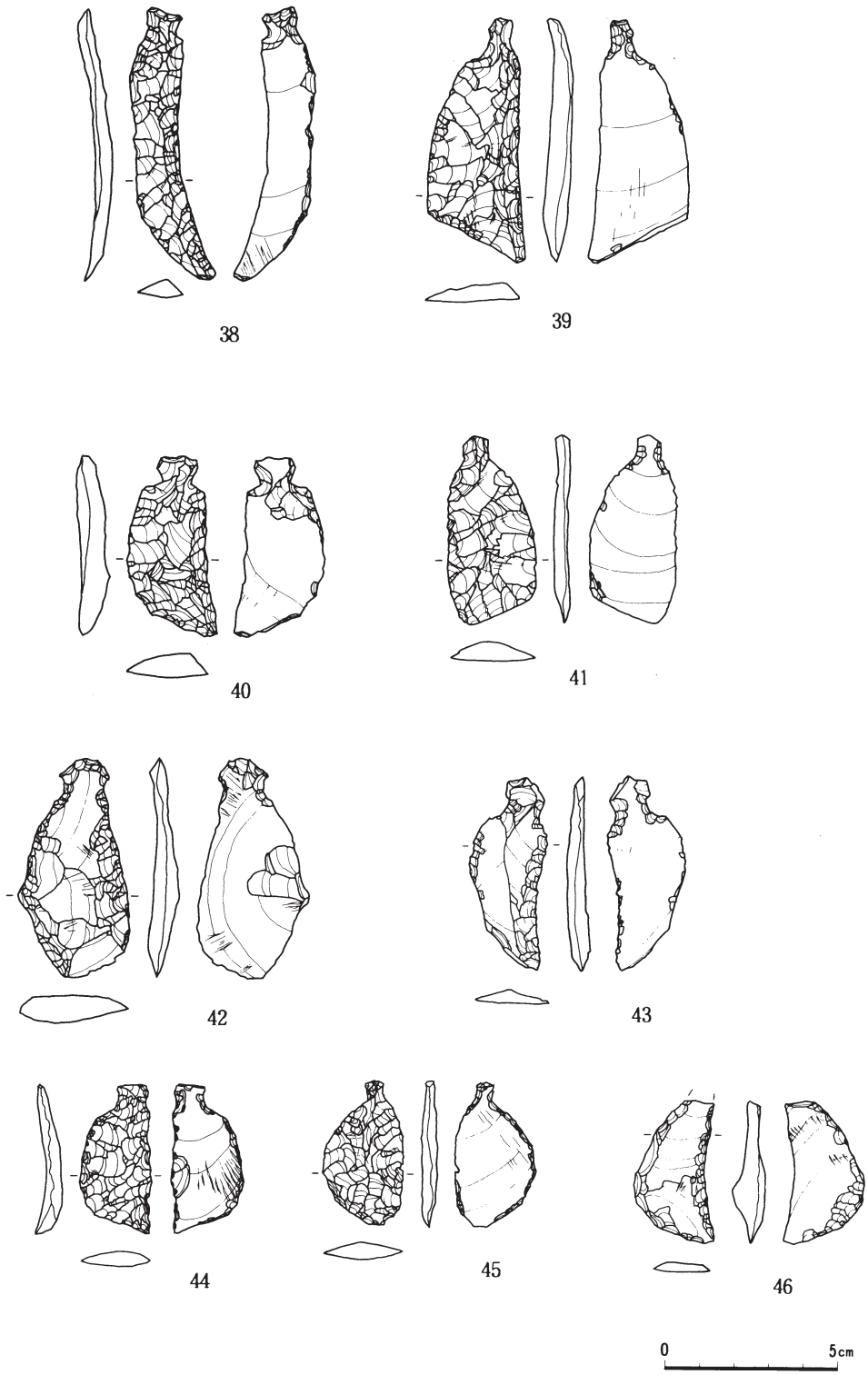
第119図　遺構外出土　石槍（14～19）



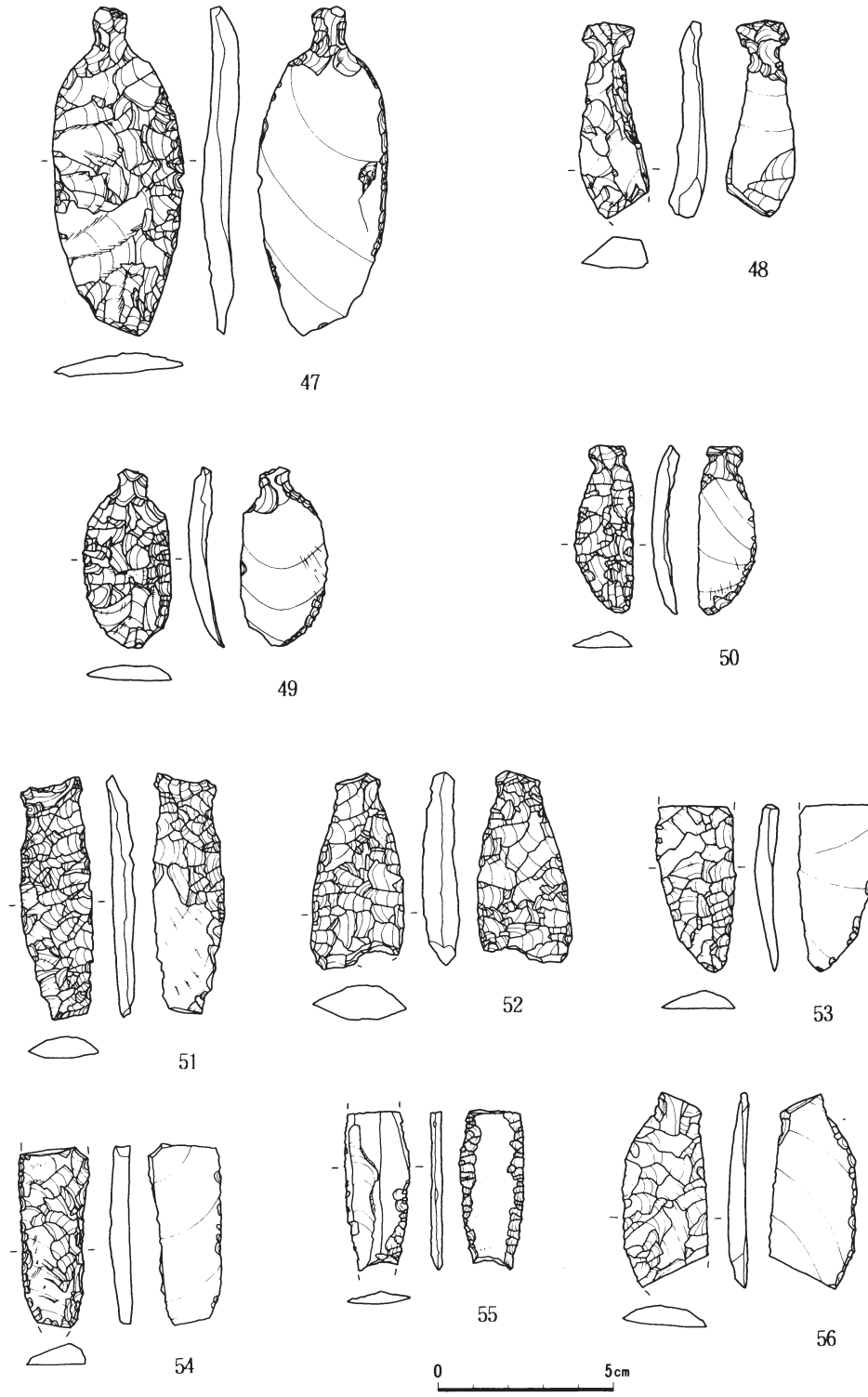
第120図　遺構外出土　石槍（20～21）石匙（22～28）



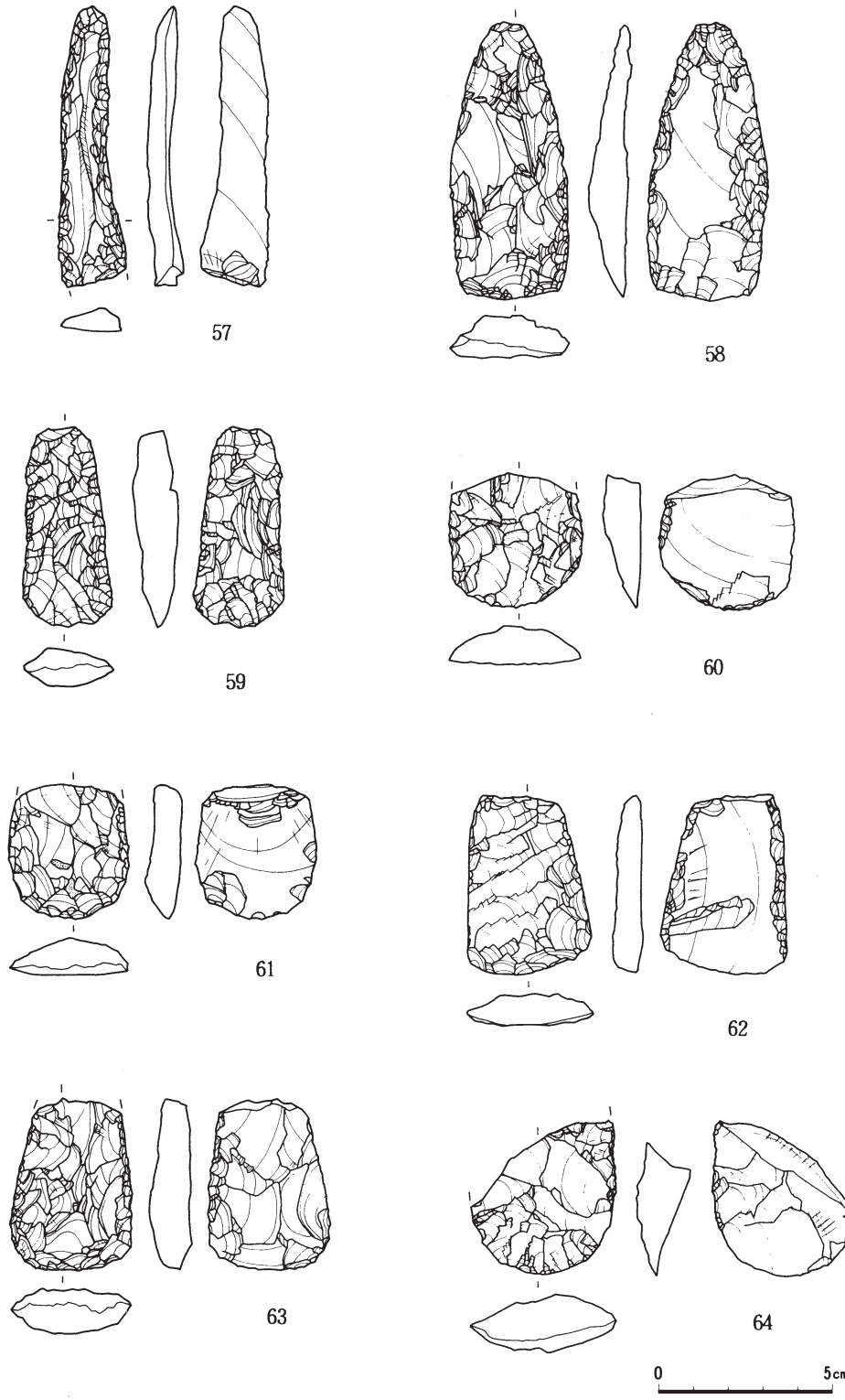
第121図　遺構外出土　石匙（29～37）



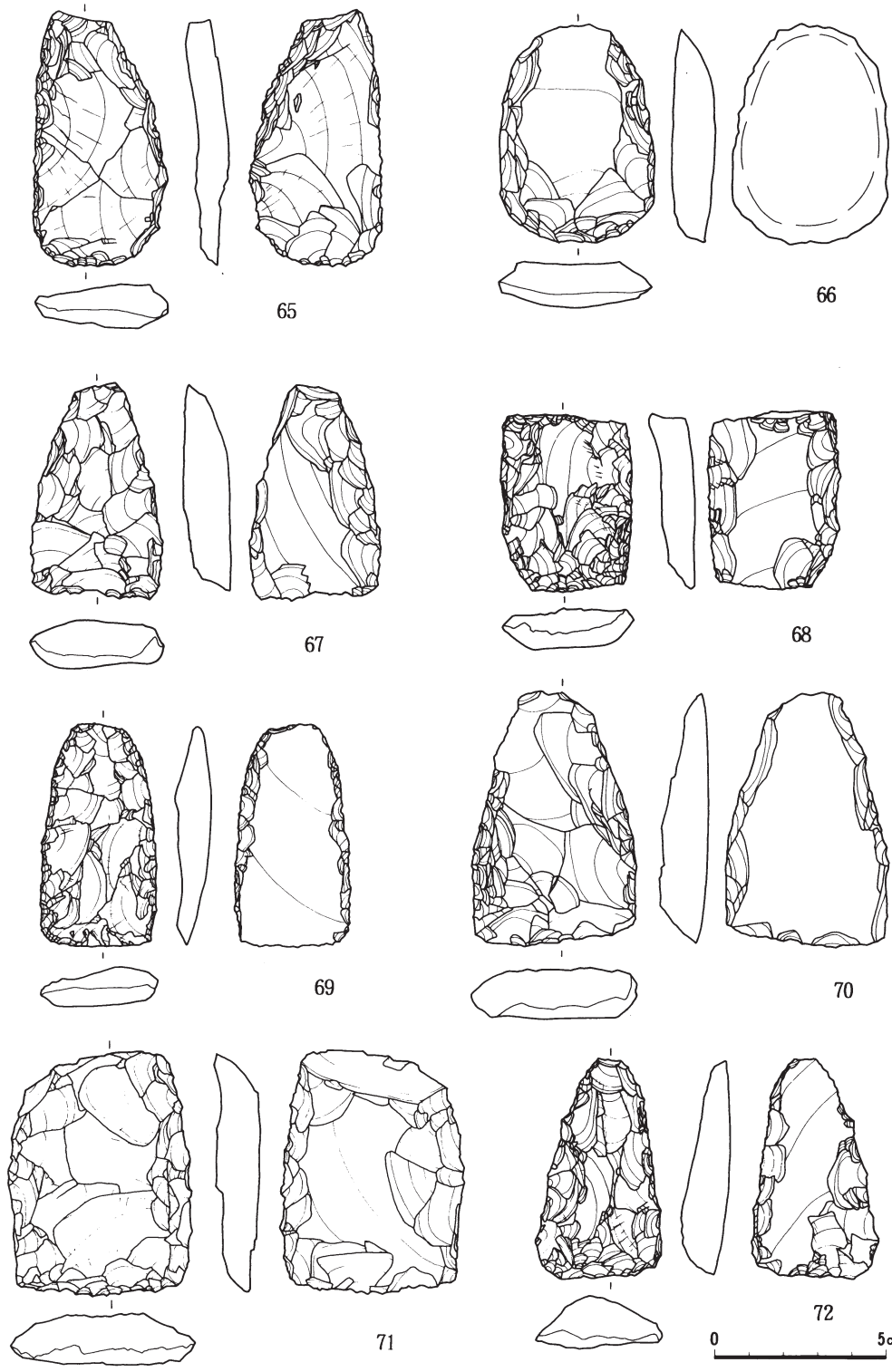
第122図　遺構外出土　(38～46)



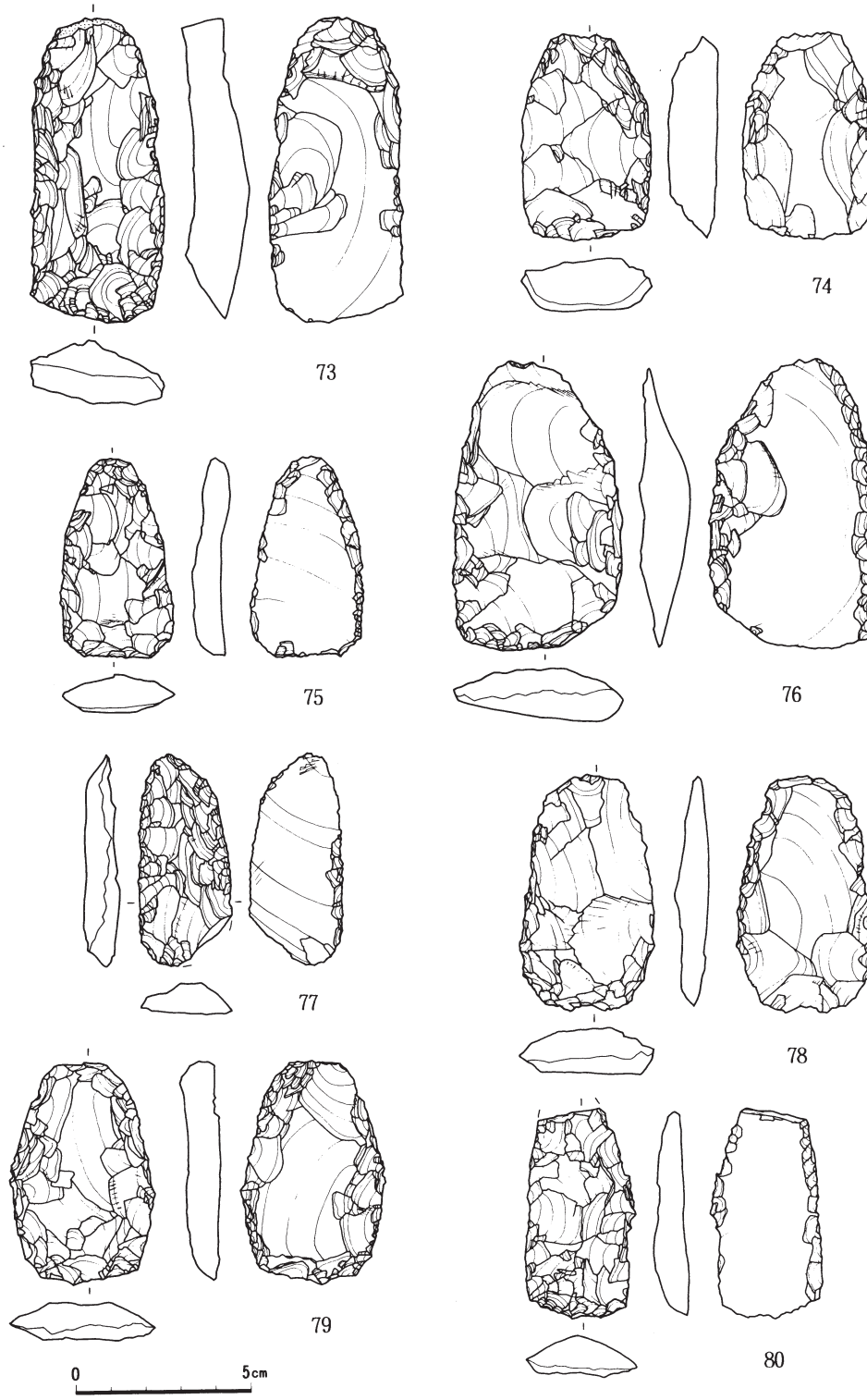
第123図　遺構外出土　(47～56)



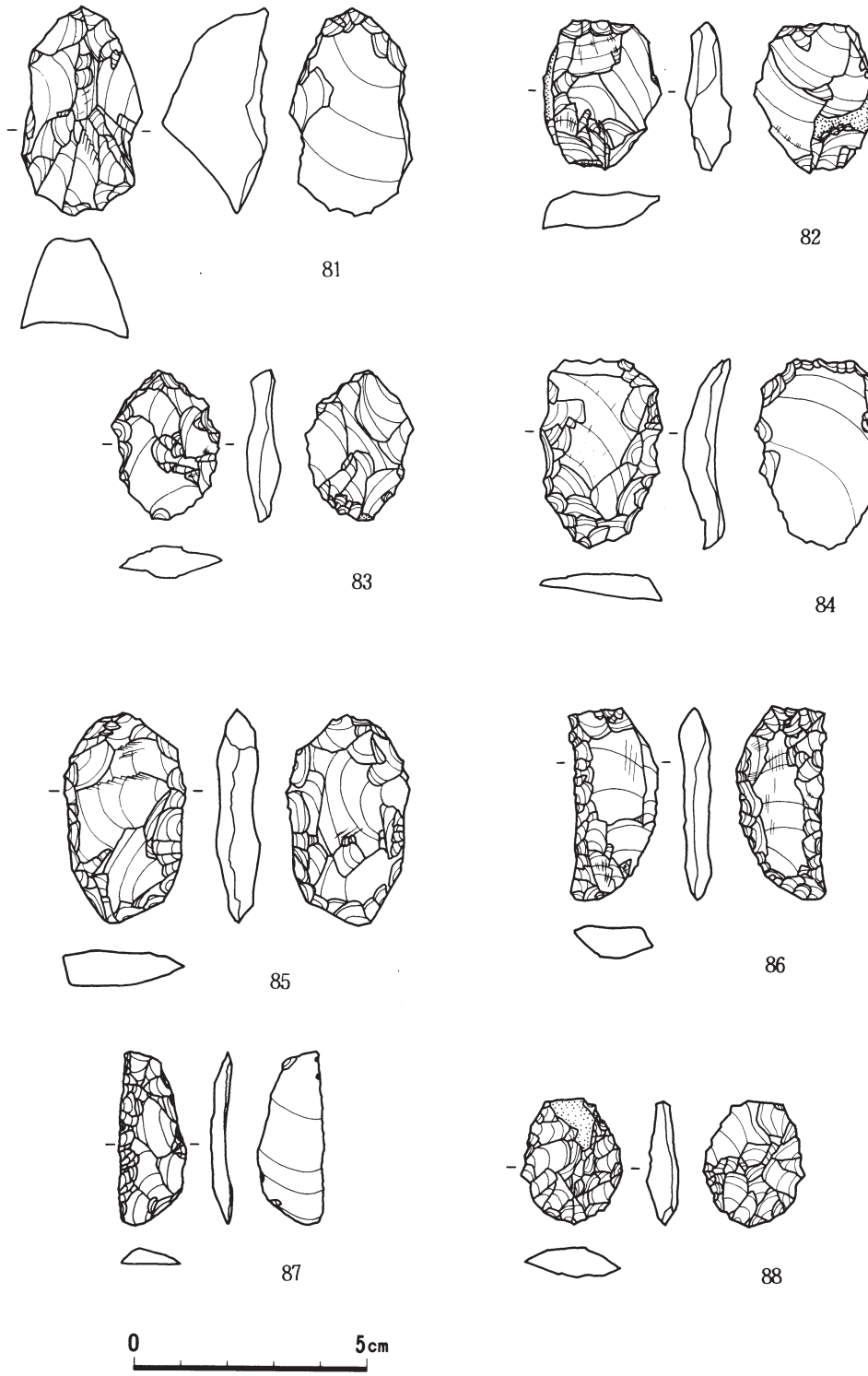
第124図　遺構外出土　石箆（57～64）



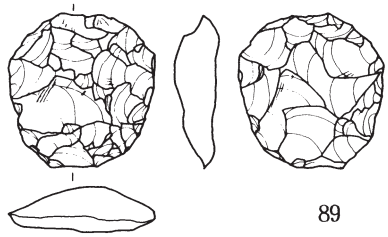
第125図　遺構外出土　石箆（65～72）

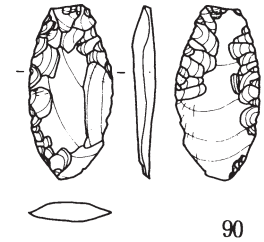


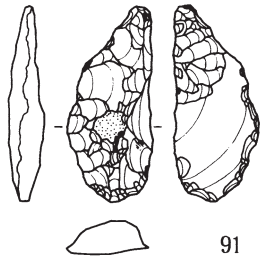
第126図　遺構外出土　石箆（73～80）

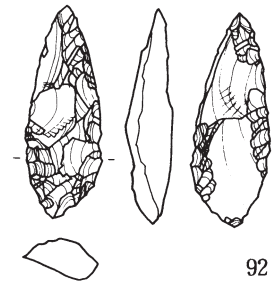


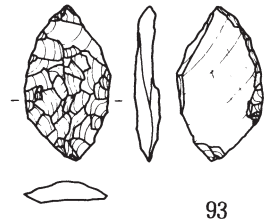
第127図　遺構外出土　不定形石器（81～88）

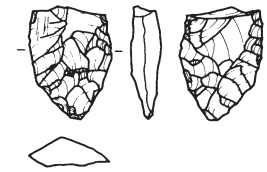


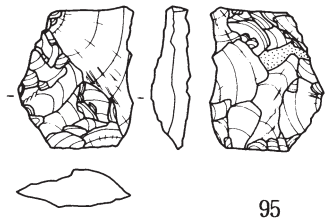


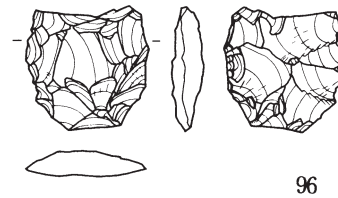


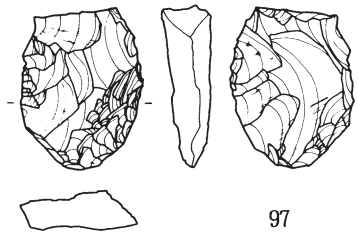


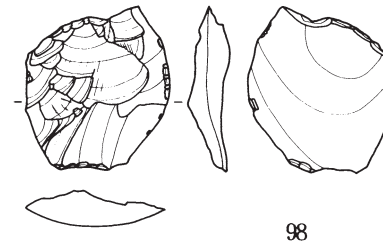




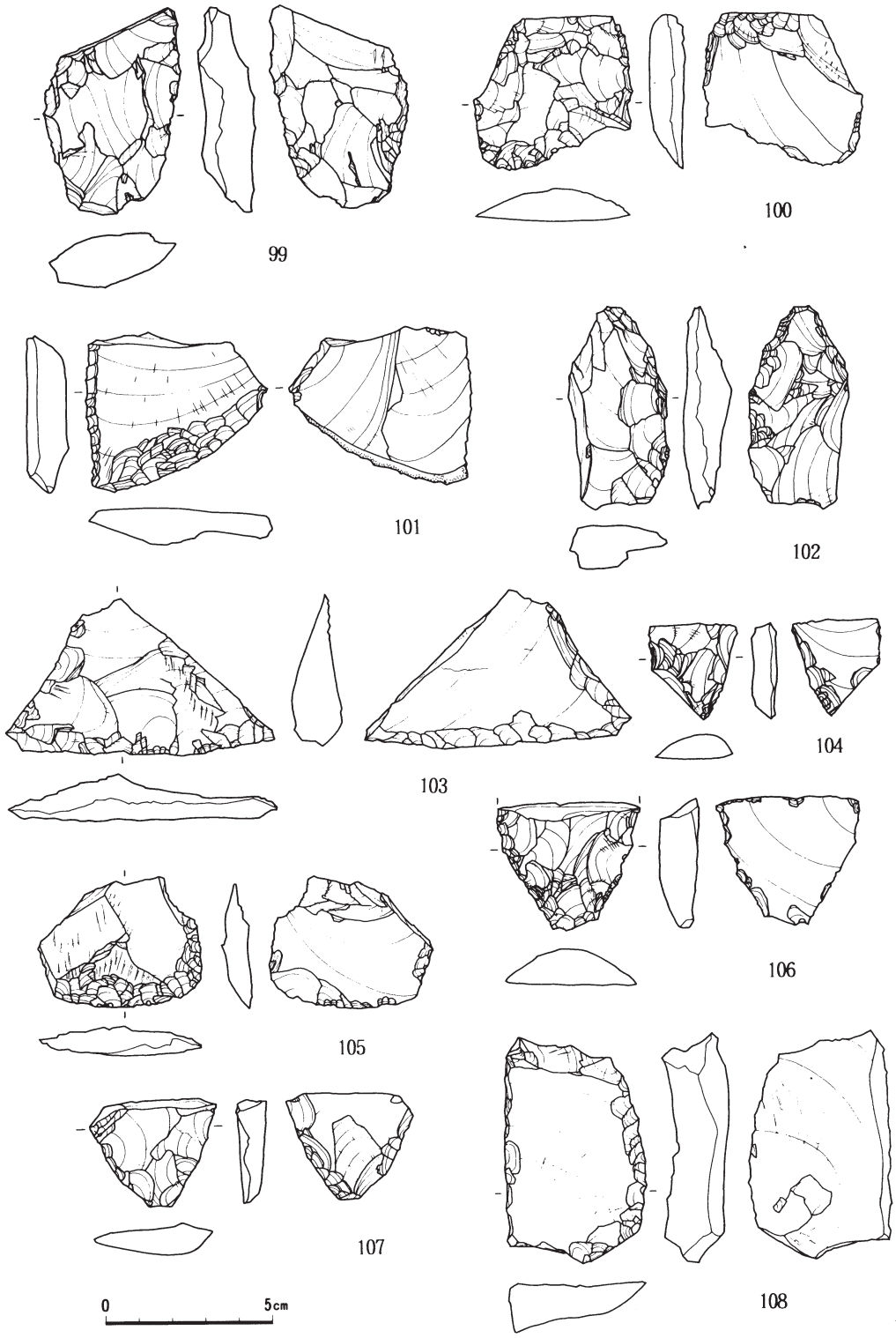




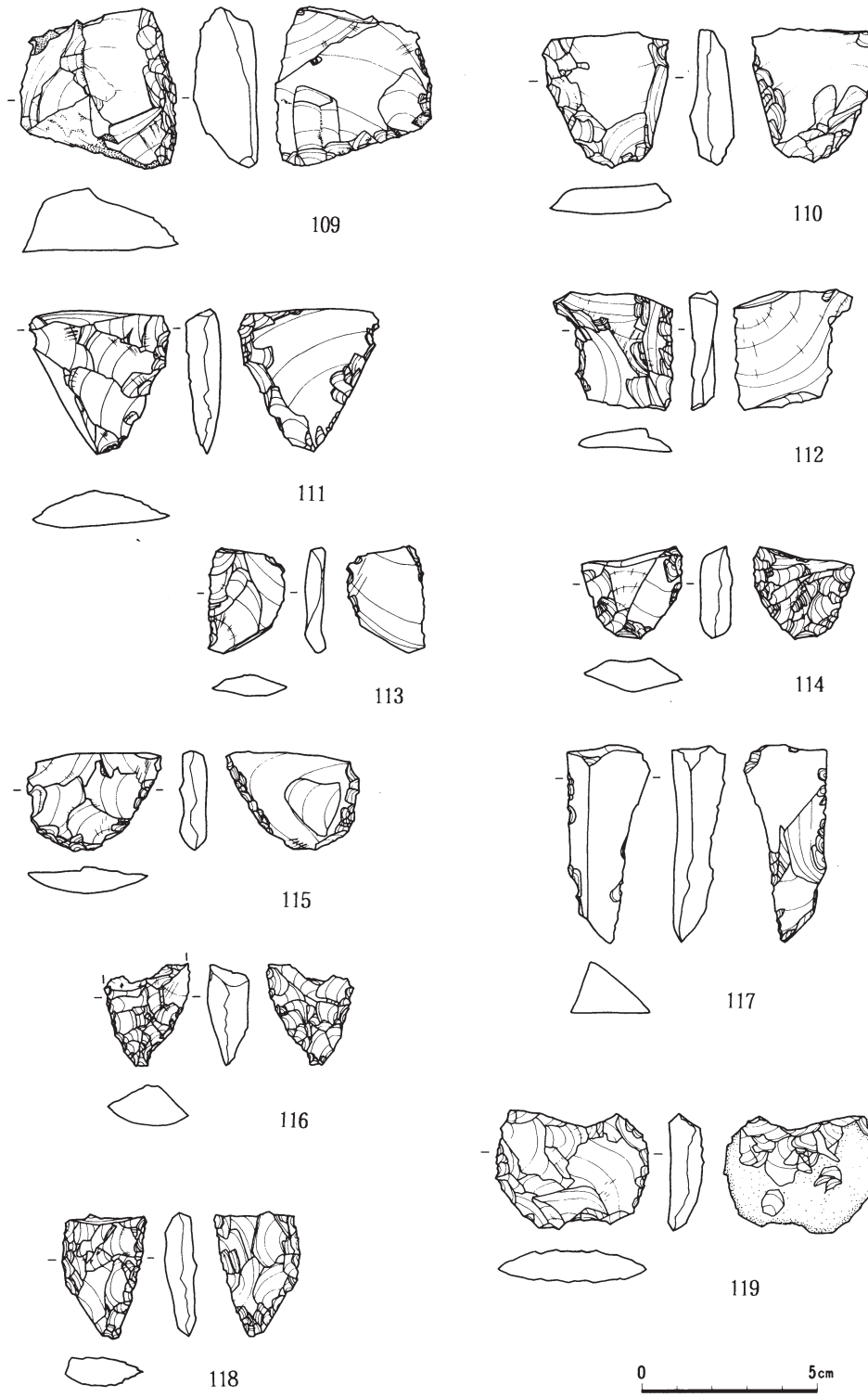




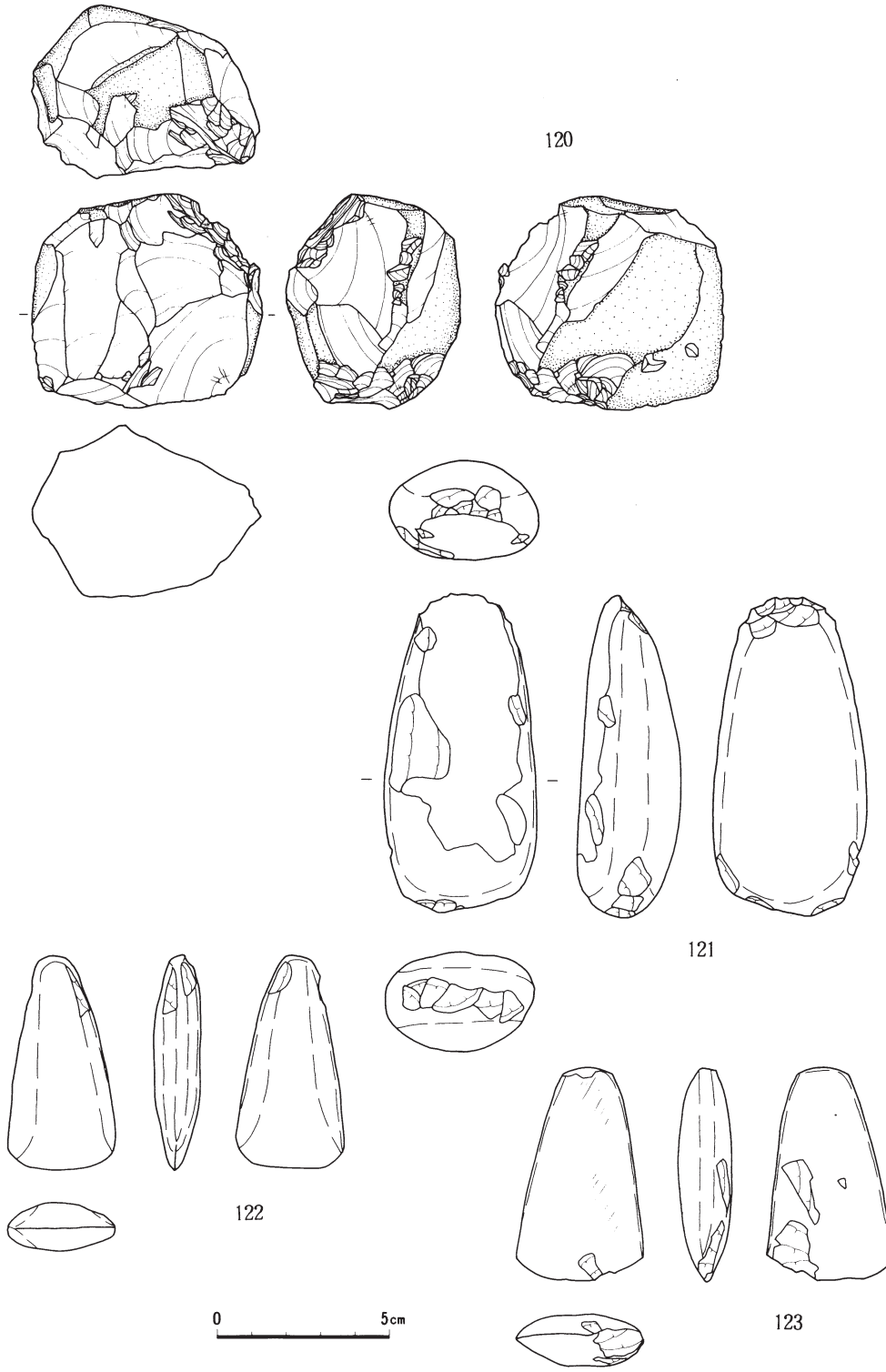
第128図　遺構外出土　不定形石器（89～98）



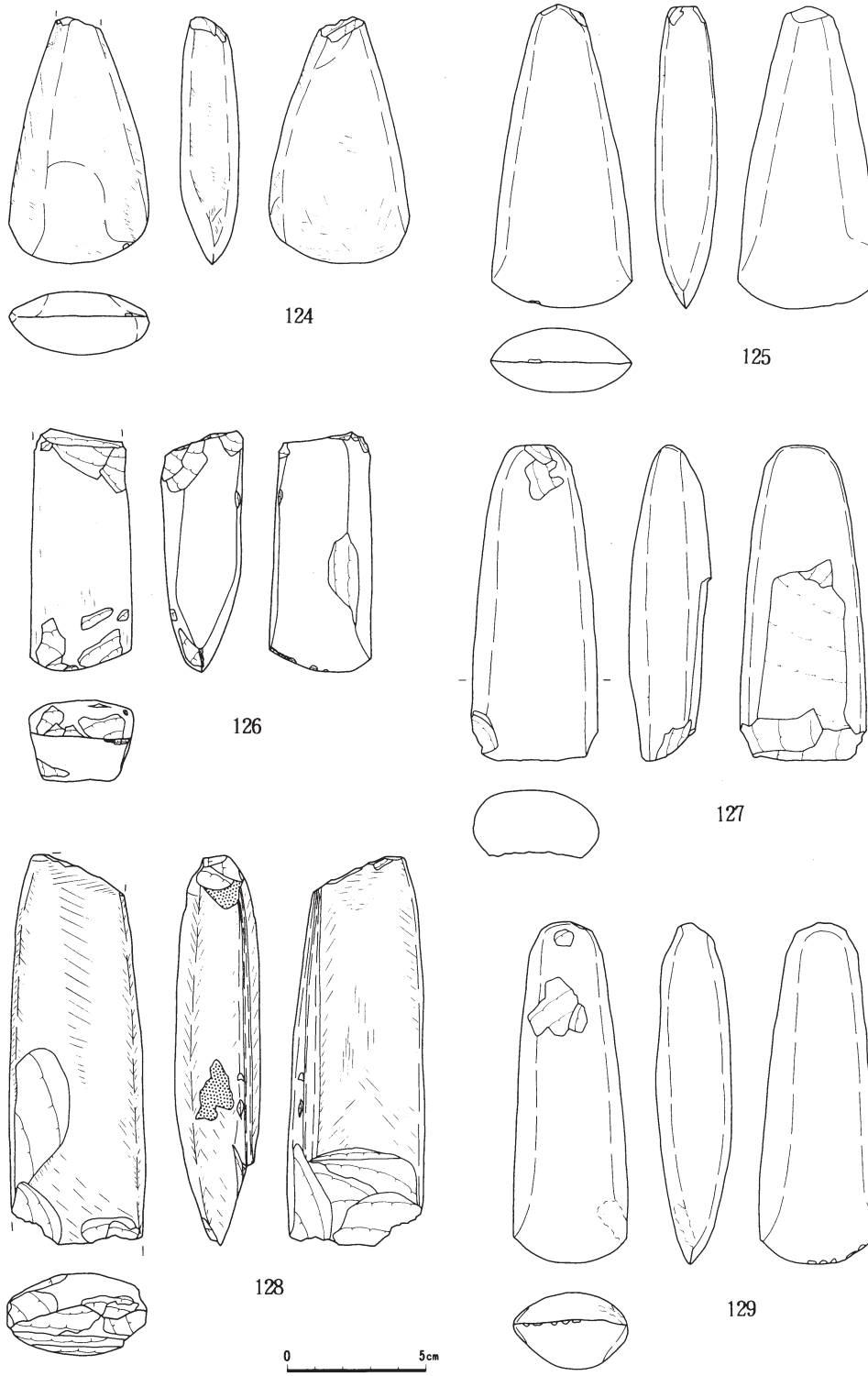
第129図　遺構外出土　不定形（99～108）



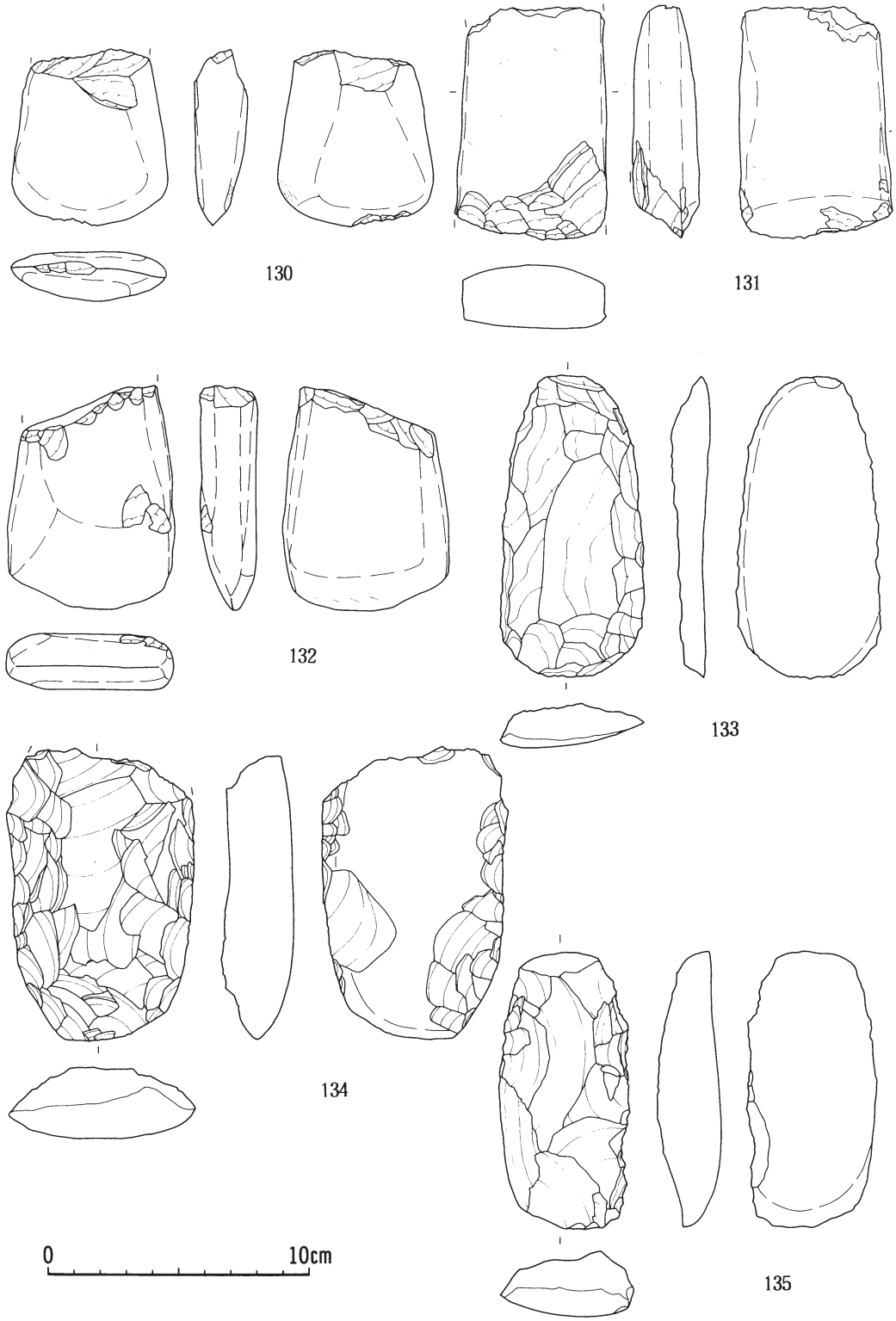
第130図　遺構外出土　不定形石器（109～119）



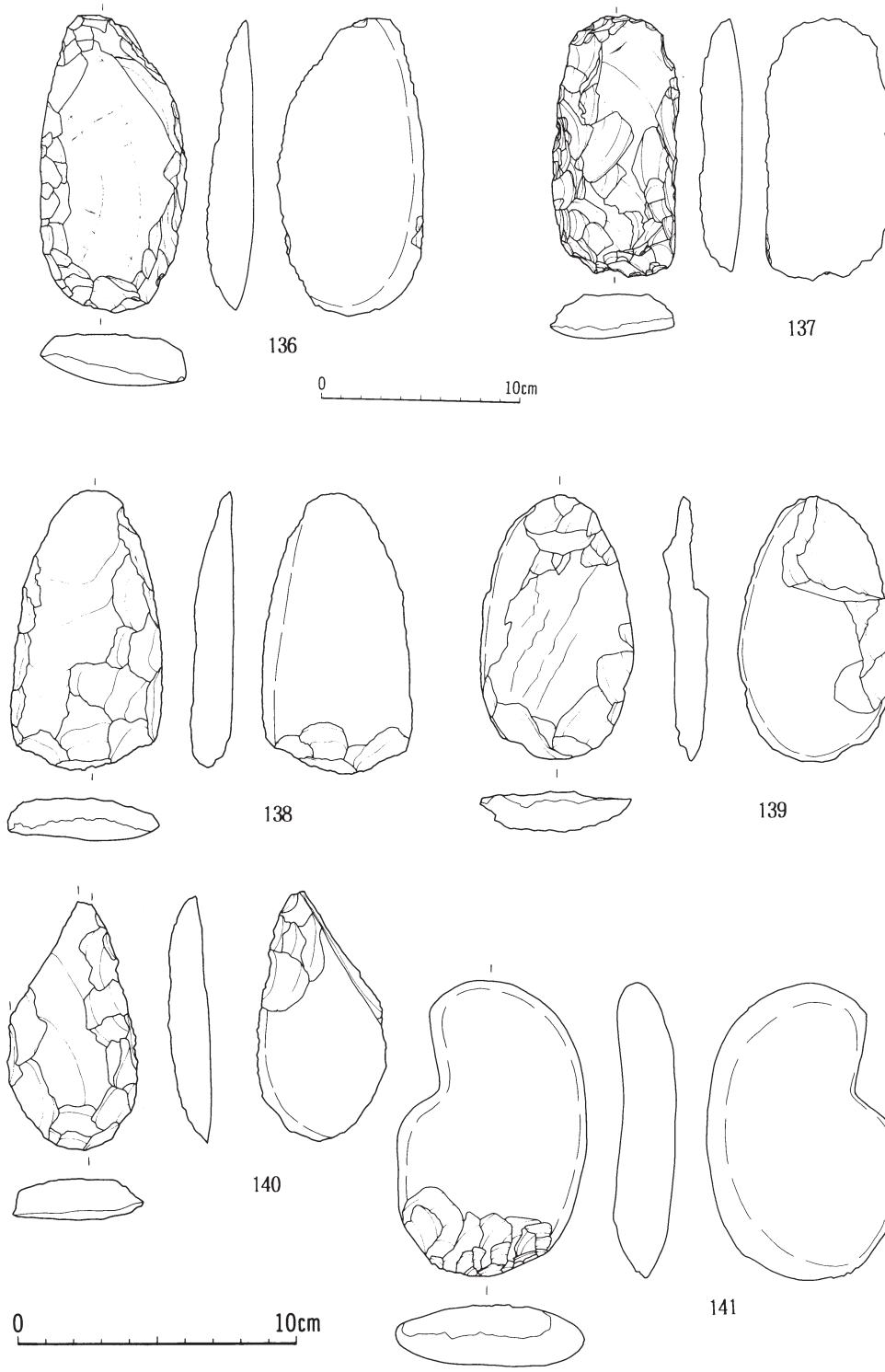
第131図　遺構外出土　石核（120）、磨製石斧（121～123）



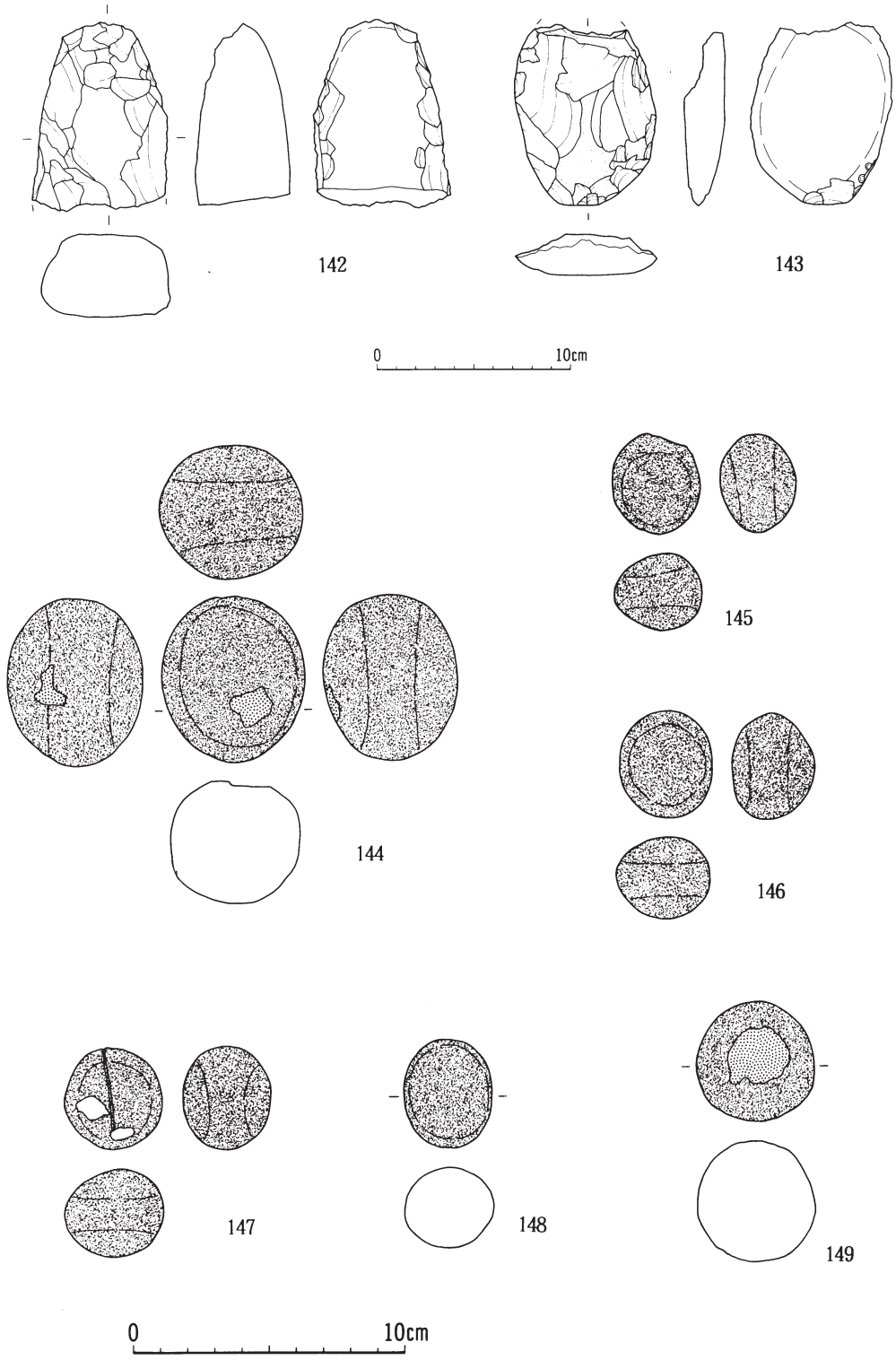
第132図　遺構外出土　磨製石斧（124～129）



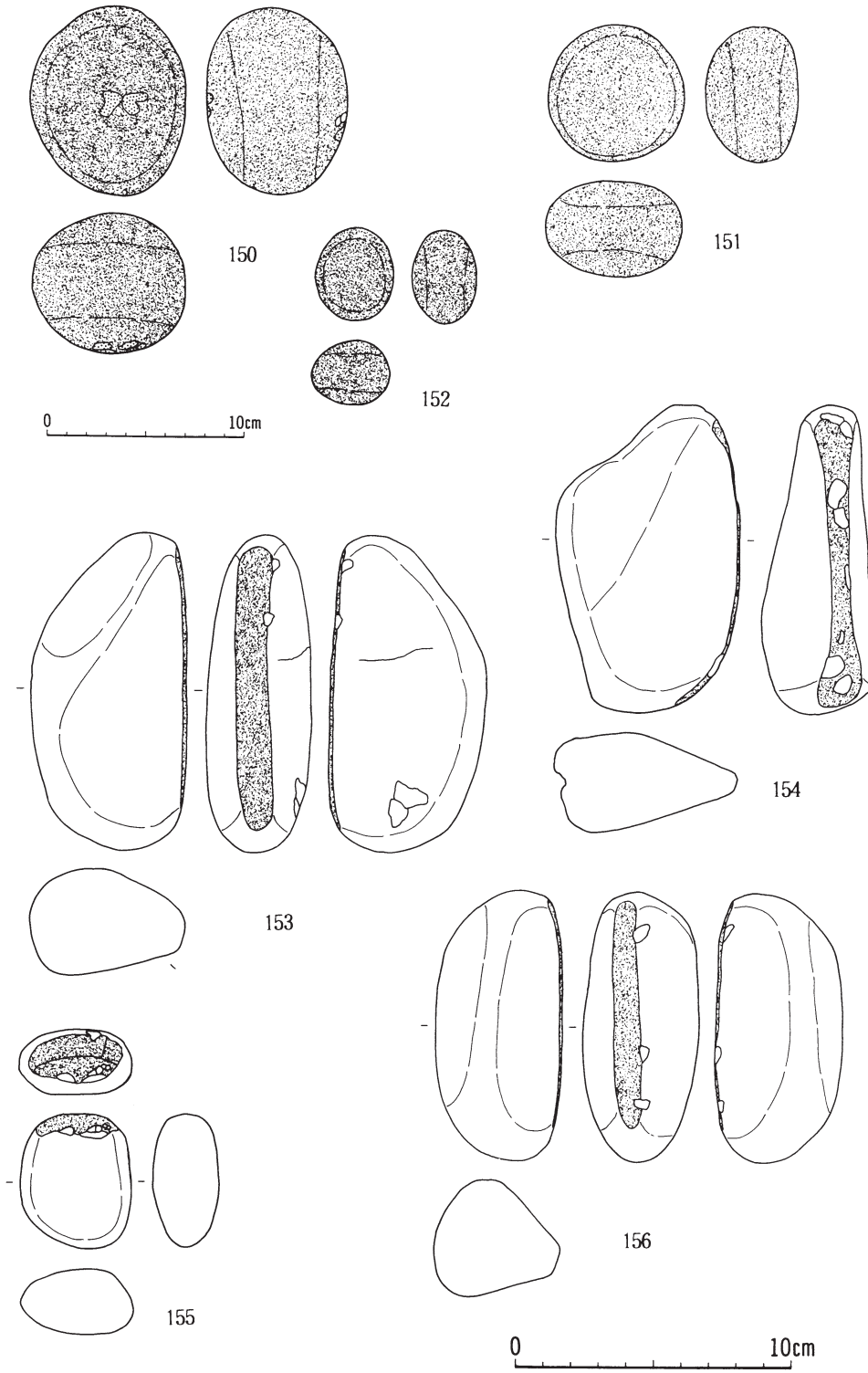
第133図　遺構外出土　磨製石斧（130～132）、打製石斧（133～135）



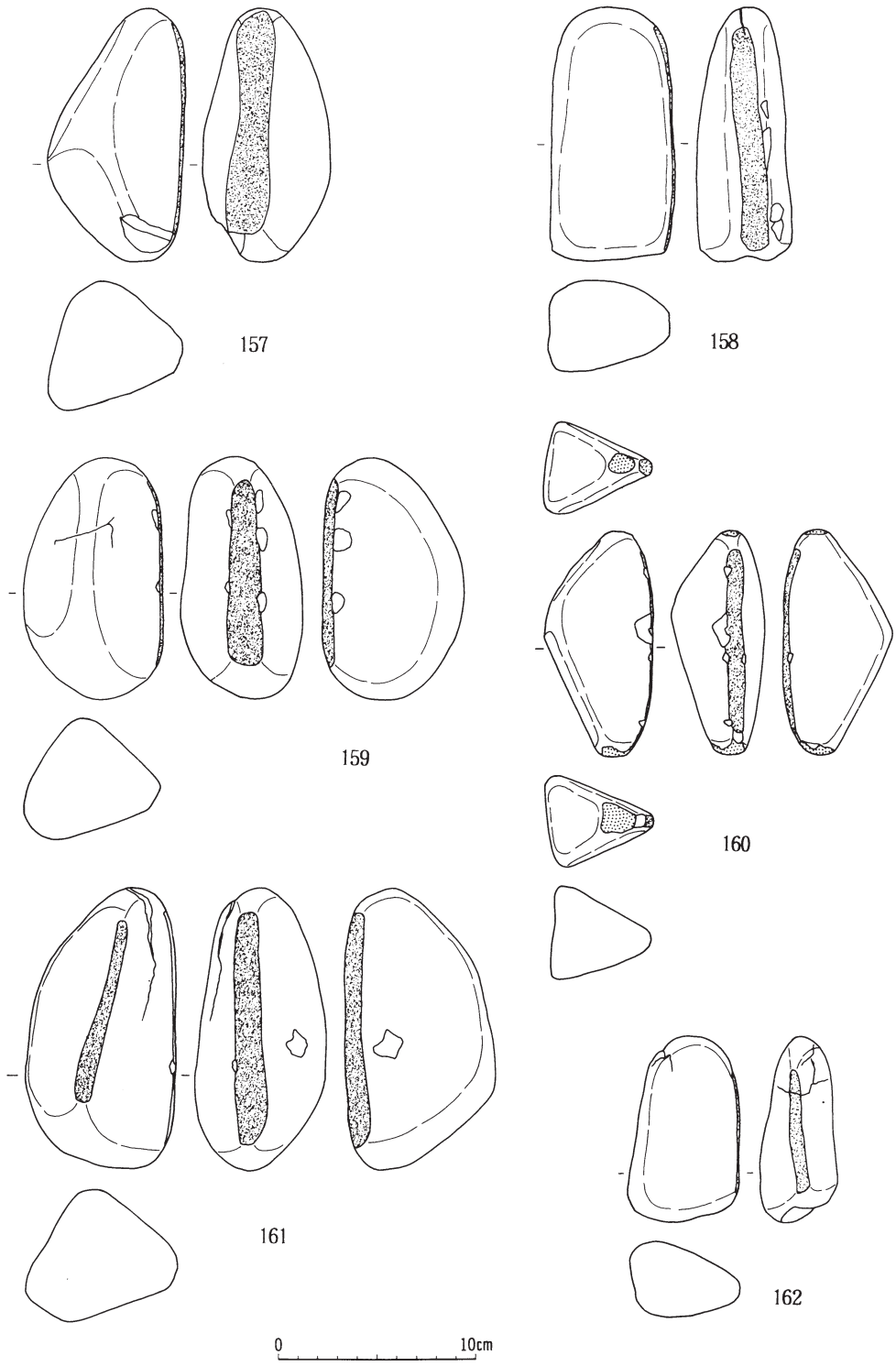
第134図　遺構外出土　打製石斧（136～141）



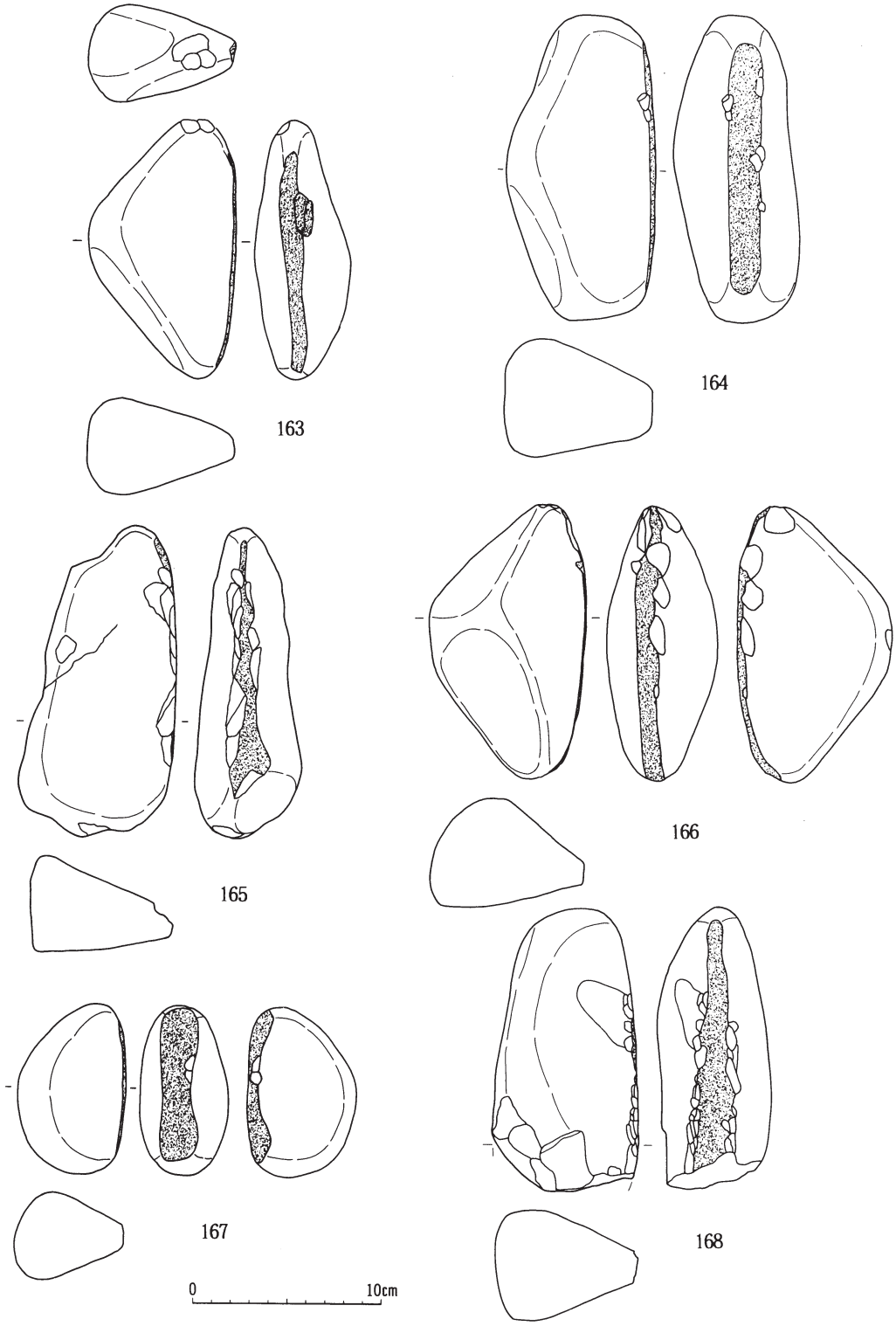
第135図　遺構外出土　打製石斧（142～143）、敲磨器（144～149）



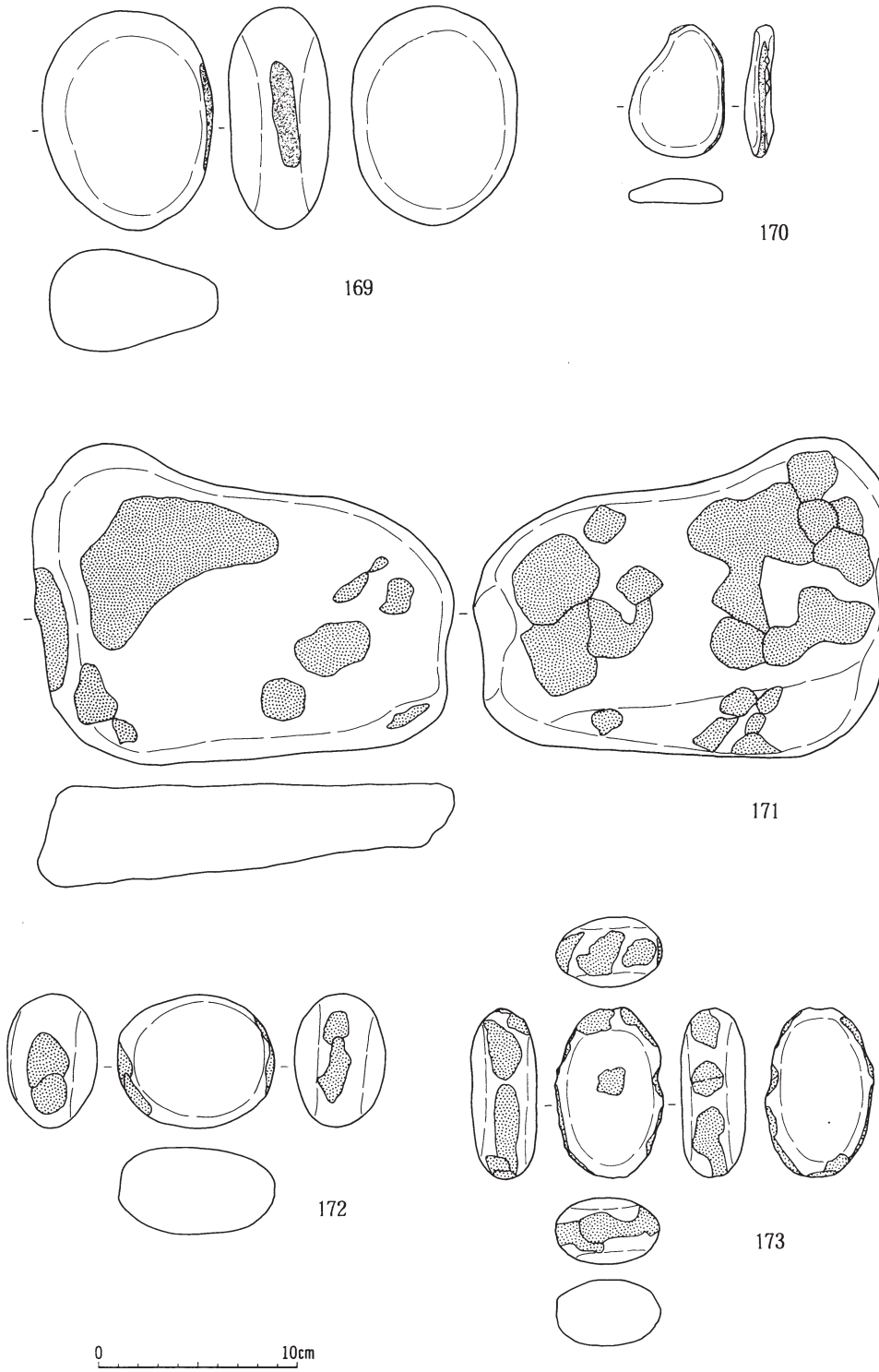
第136図　遺構外出土　敲磨器（150～156）



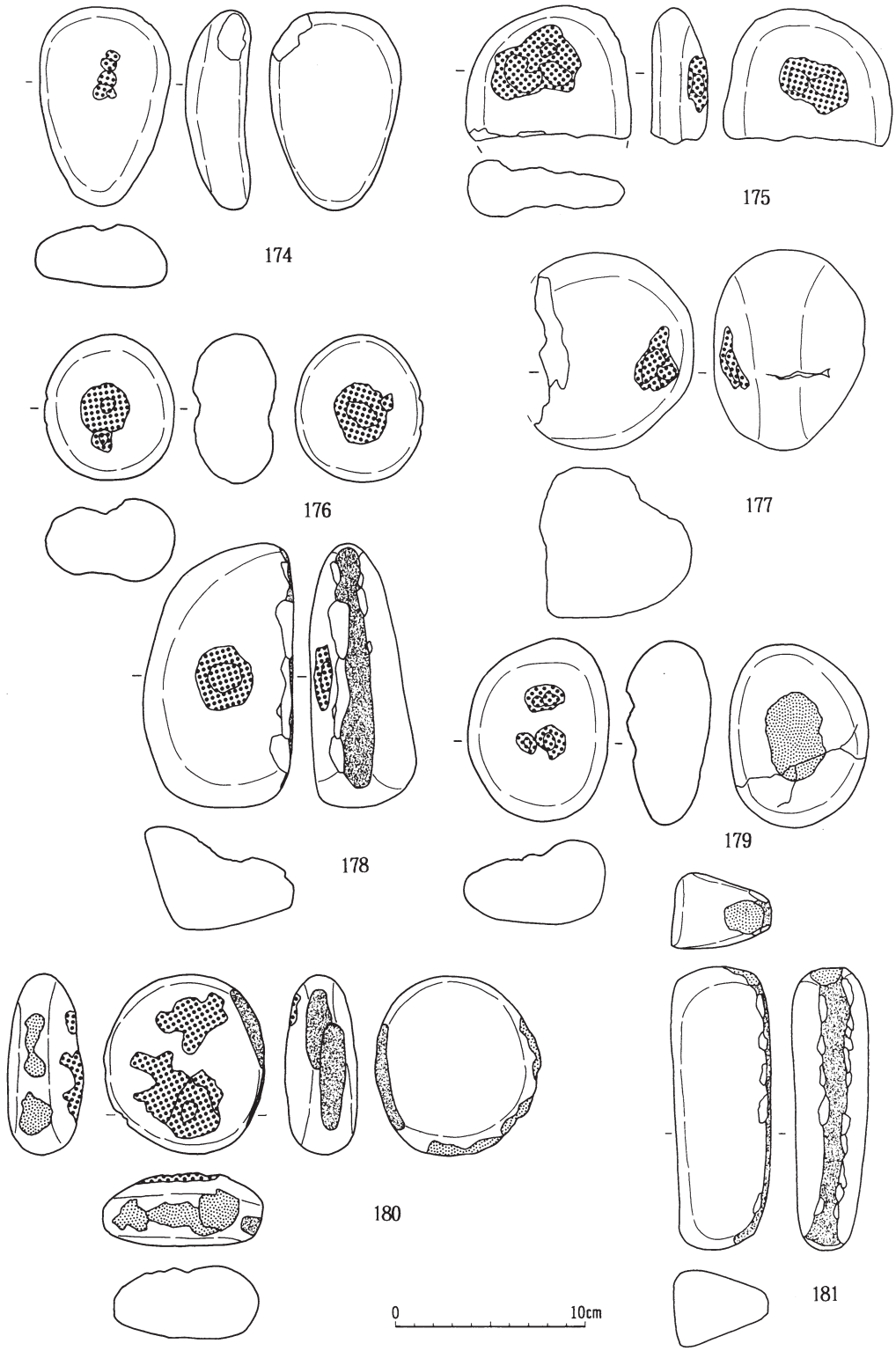
第137図　遺構外出土　敲磨器（157～162）



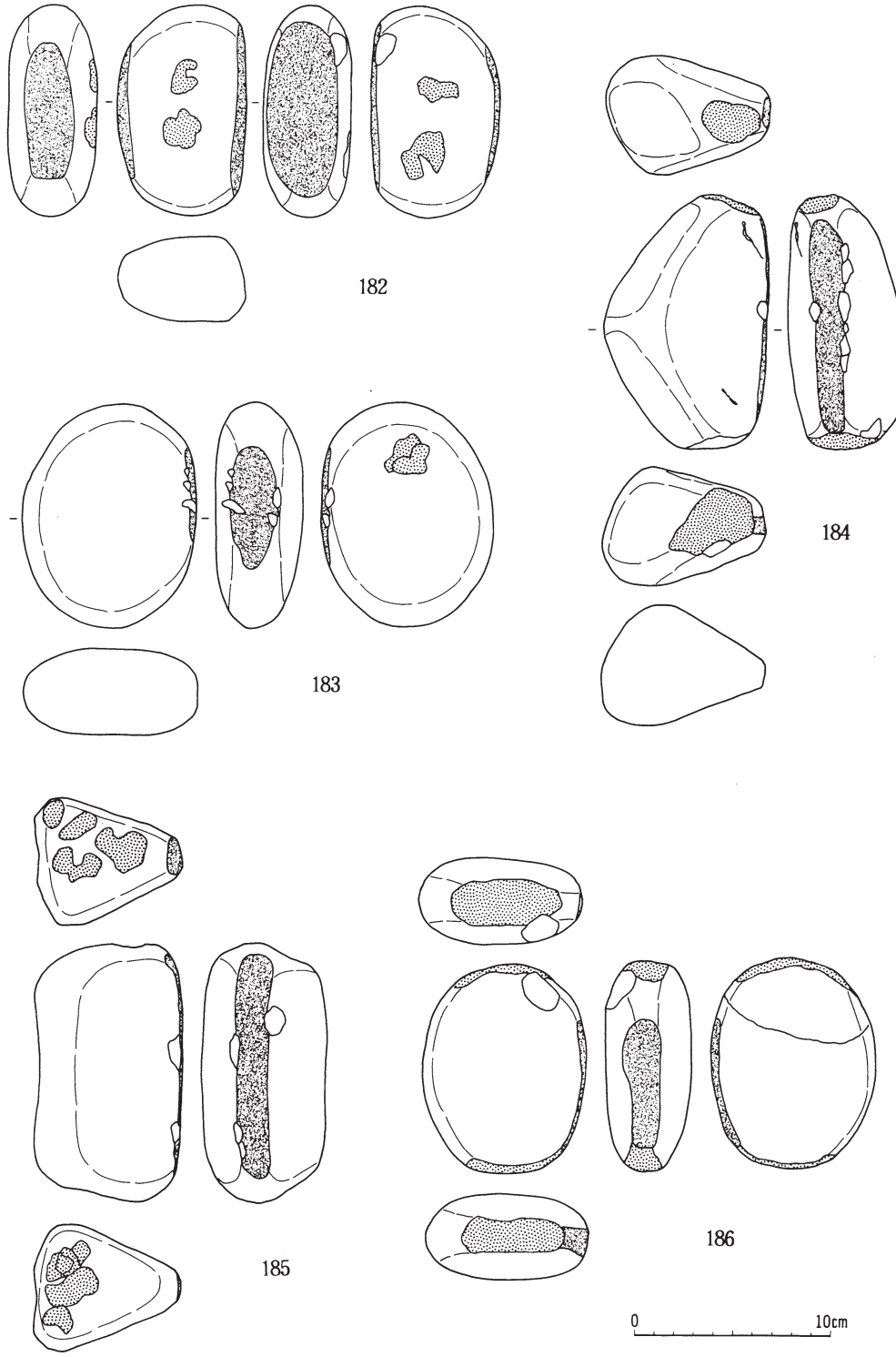
第138図　遺構外出土　敲磨器（163～168）



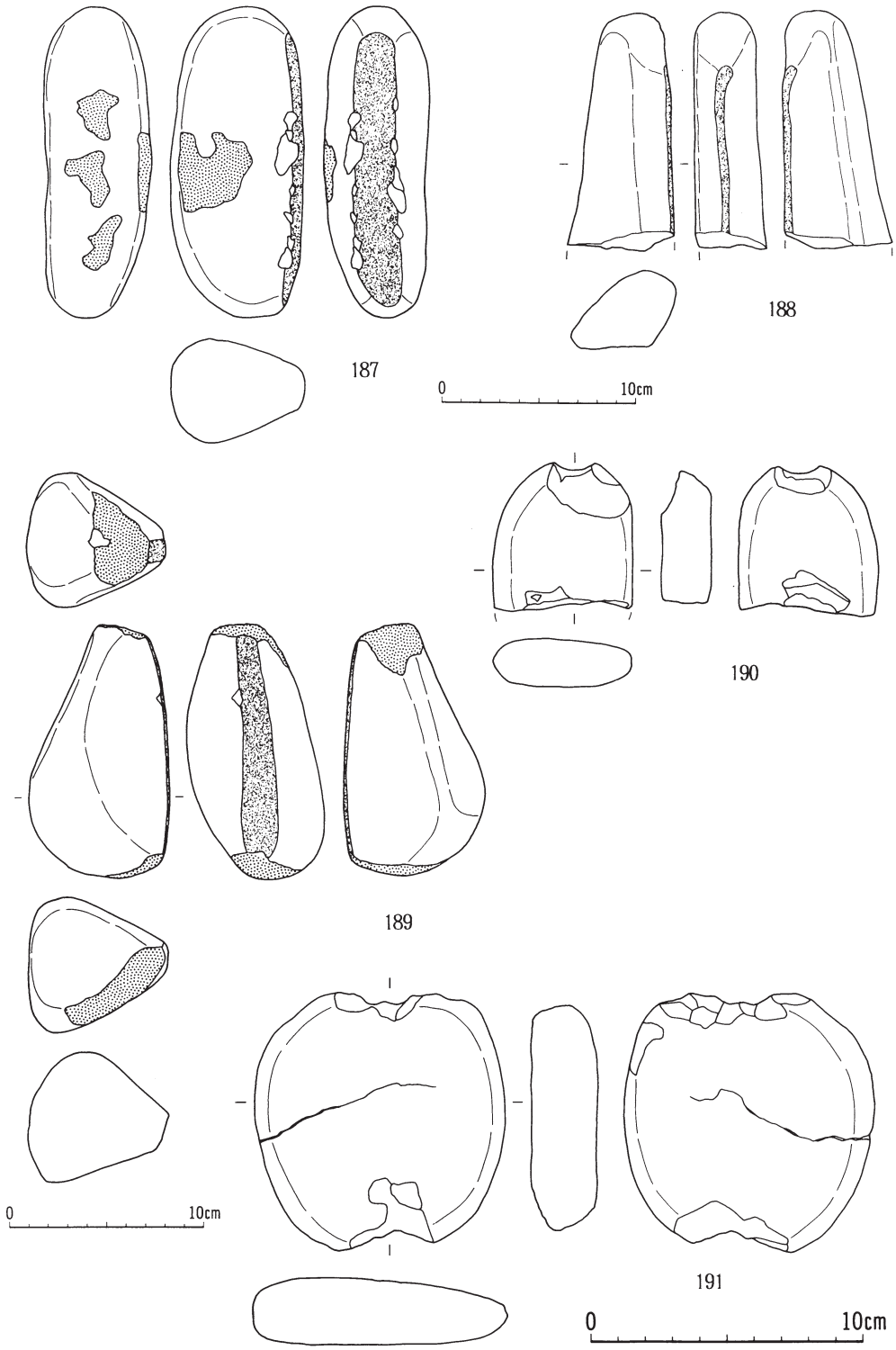
第139図　遺構外出土　敲磨器（169～170・172～173）、台石（171）



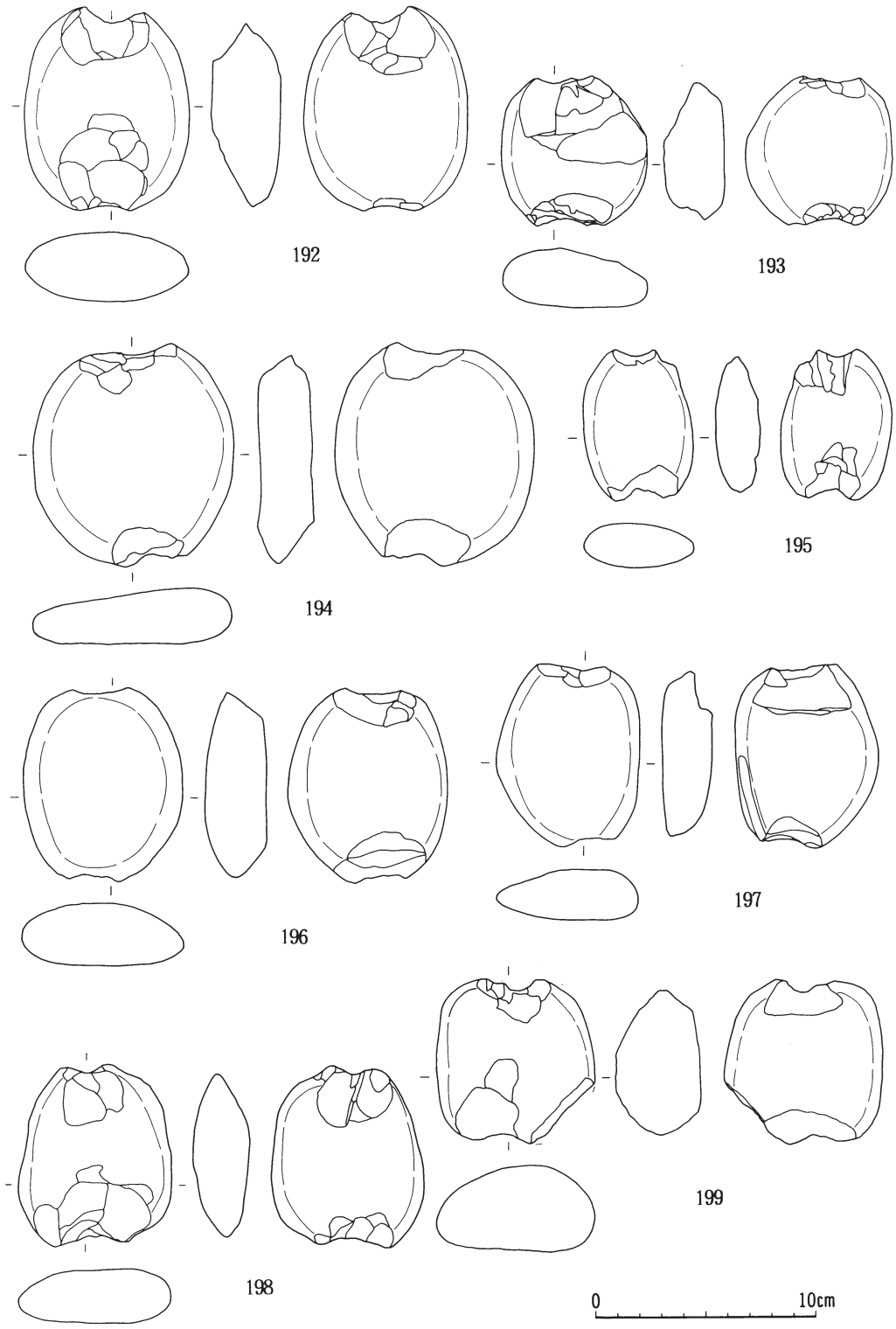
第140図　遺構外出土　敲磨器（174～181）



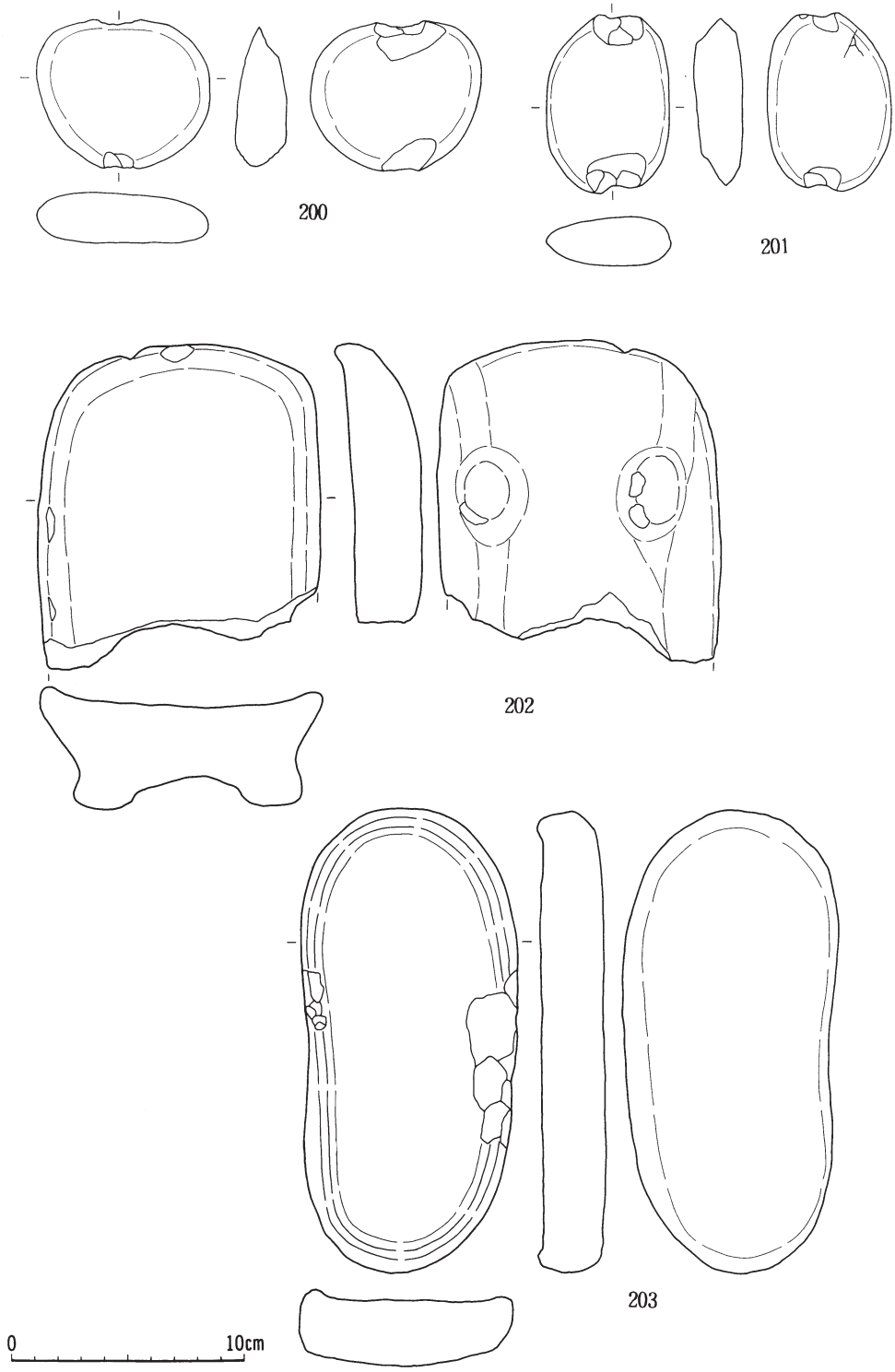
第141図　遺構外出土　敲磨器（182～186）



第142図　遺構外出土　敲磨器（187～189）、石錘（191）



第143図　遺構外出土　石錘（192～199）



第144図　遺構外出土　石錘（200～201）、石皿（202～203）

（3）土製品・石製品

円盤状土製品2点、土器片錘9点、石製品1点が出土した。これらの遺物は、遺構外でⅣ層、Ⅴ層からの出土である。

円盤状土製品（第145図1・2）

第145図1は、ＢＮ－59グリッドからの出土である。土器破片を再利用している。大きさは、径55㎜×51㎜、厚さ11㎜を測り、重さ39gである。外面には、縄文が重複され、真ん中に径7㎜ほどの穴が空けられている。胎土には、植物性繊維を混入している。縄文時代早期後半～前期初頭期のものと思われる。

第145図2は、表土からの出土である。土器破片を再利用している。大きさは、径36㎝×34㎝、厚さ8㎜を測り、重さは54.7ｇである。外面には、縄文（ＲＬ）を施文している。

土器片錘（第145図3～11）

第145図3は、ＢＱ－60グリッドからの出土である。土器破片を再利用している。大きさは、76㎜×48㎜、厚さ9㎜を測り、重さ48.9ｇである。長軸の両端に切り込みが見られる。外面には、ピッチリ縄文が施されている。胎土には、植物性繊維を混入している。縄文時代前期初頭期のものと思われる。

第145図4は、ＢＪ－59グリッドからの出土である。土器破片を再利用している。大きさは、72㎜×45㎜、厚さ9㎜を測り、重さは48.6ｇである。長軸の片面に明瞭な切り込みが見られる。外面には、縄文（ＲＬ）が施されている。胎土には、植物性繊維が含まれている。縄文時代早期後半～前期初頭期のものと思われる。

第145図6は、ＢＨ－72グリッドからの出土である。土器破片を再利用している。大きさは、72㎜×54㎜、厚さ、9㎜を測り、重さは54.7ｇである。長軸の両端に切り込みが見られる。外面は、ピッチリ縄文が施されている。胎土には、植物性繊維を混入している。縄文時代前期初頭期のものと思われる。

第145図7は、ＢＲ－61グリッドからの出土である。土器破片を再利用している。大きさは、72㎜×68㎜、厚さ9㎜を測り、重さは69.7ｇである。長軸の片面に切り込みが見られる。外面には、結束羽状縄文が施されている。胎土には、植物性繊維を混入している。縄文時代前期初頭期のものと思われる。

第145図8は、ＢＲ－61グリッドからの出土である。土器破片を再利用している。大きさは、85㎜×57㎜、厚さ9㎜を測り、重さは48.5ｇである。片方に切り込みが見られるが、それに対するもう一方の切り込みは破損のため確認できない。外面には、押し引き沈線文と結束羽状縄文が施されている。早稲田6類の時期の所産と考えられる。

第145図9は、ＢＲ－61グリッドからの出土である。土器破片を再利用している。大きさは、

75㎜×70㎜、厚さ９㎜を測り、重さは46.1ｇである。切り込みが片方に見られるが、それに対する切り込みは破損のため見られない。
外面には、結束羽状縄文が施され、胎土には植物性繊維をが混入している。縄文時代前期初頭期のものと思われる。

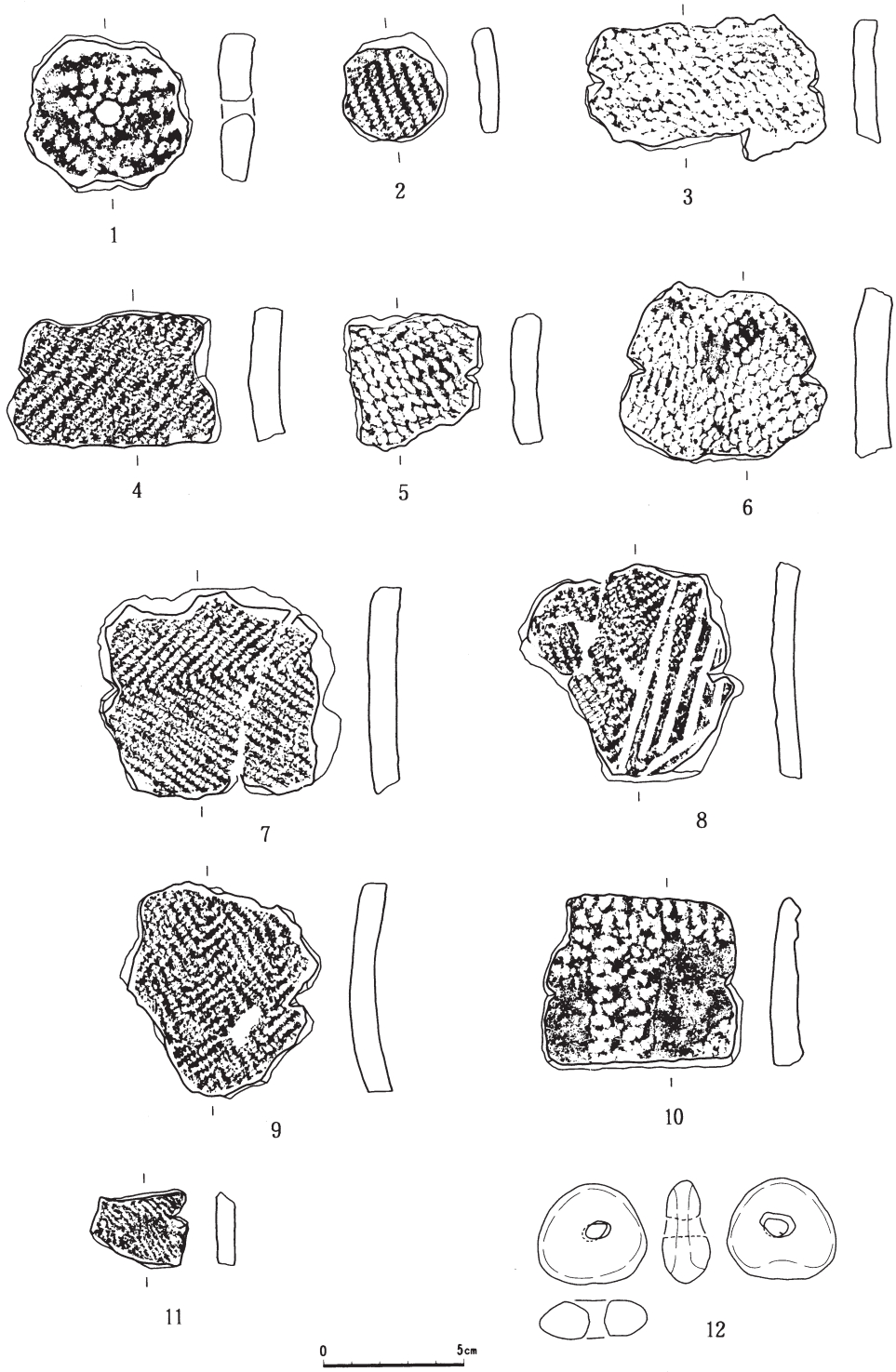
第145図５は、ＢＯ－60、第145図11はＣＥ－77グリッドからの出土である。二個体とも土器破片を再利用している。共に切り込みの箇所が見られるが、大きく破損していて本来の大きさは推定できない。第145図５は、ピッチリ縄文を施し、胎土には植物性繊維を混入している。縄文時代前期初頭期のものと考えられる。

第145図10は、ＢＱ－65グリッドからの出土である。口縁部の破片を利用している。大きさは、66㎜×59㎜、厚さ９㎜、重さは、54ｇを図る。切り込みは、土器破片の両端に見られる。土器の表面には、口端部に刻みを加え、さらに口縁に沿って一条の縄の圧痕と縦にも２条施している。時期は、縄文時代前期初頭期のあたりと思われる。

石製品（第145図12）

39㎜×35㎜×16㎜を測る不整円形の形をしたチャート質の自然小礫に５㎜×8㎜の小孔を空けている。

（大湯　卓二）



第145図　土製品・土器片錘・石製品

第V章　自然科学的分析

家ノ前遺跡出土火山灰の蛍光X線分析

奈良教育大学教授　三　辻　利　一

同一地域内の遺跡に堆積する火山灰を元素分析によって容易に相互識別できる唯一の例が白頭山火山灰と十和田a火山灰である。前者にはカリ長石が多く、後者には斜長石が多い。そして、有色鉱物にも相違がある。その結果、K、Ca、Rb、Sr、Fe因子で両者は相互識別できるようになる。既に、青森県を中心にして、北海道南部地域、岩手・秋田両県の北部地域の遺跡に両者がセットになって堆積している例が数多く報告されている。その場合、必ず、白頭山火山灰が上位である。したがって、これらの火山灰は土器の編年観を与える上からも役に立ち、さらには、これらの地域における須恵器、土師器の伝播・流通の研究を推進する上にも重要な役割をもつ。

本報告では家ノ前遺跡で採取された17点の火山灰試料の蛍光X線分析の結果について報告する。

試料は例によって、電気乾燥機の中で150℃で数時間乾燥したあと粉砕した。粉末試料はプレスして、内径20㎜、厚さ3～5㎜の錠剤試料にして蛍光X線分析を行った。波長分散型のスペクトロメーター（理学電気製　3270型機）でK、Ca、Fe、Rb、Sr、Naの6元素を定量分析した。標準試料には岩石標準試料JG－1を使用した。この結果、分析値はJG－1による標準化値で表示した。

表1には分析データが示されている。はじめに、Rb-Sr分布図を第146図に示す。この分布図で両火山灰は明確に分かれる。NO7、9、12、15、17の5点は十和田a領域に分布するが、他の12点は白頭山領域に分布する。両領域はこれまでの分析データに基づいて描かれた定性的な領域である。第146図より、NO7、9、12、15、17は十和田a火山灰である可能性をもち、他の12点の火山灰は白頭山火山灰である可能性をもつ。この可能性は他の因子によっても確かめられる。

第147図にはK－Ca分布図を示す。NO4を除いて他のすべての試料は第146図のRb－Sr分布図と同じ可能性を示す。白頭山領域を少しずれたNO4は風化が進んだ火山灰である可能性をもつ。

Na因子は風化度を示す尺度の一つとして役に立つ。白頭山火山灰に比べて十和田a火山灰

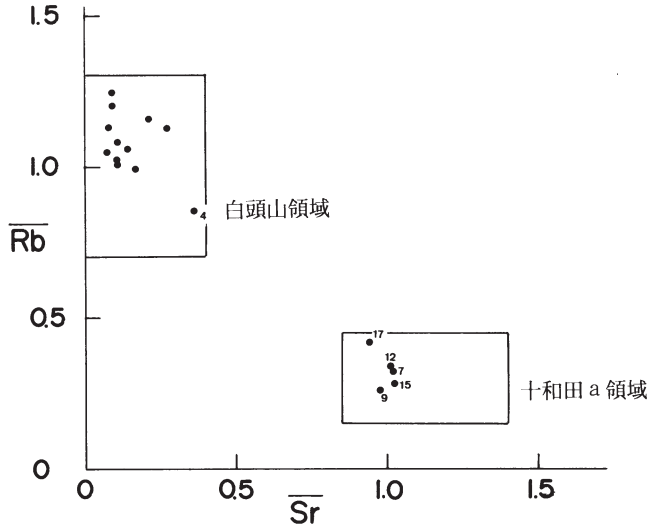
表１　家ノ前遺跡出土火山灰の分析データ

試料番号		K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	推定結果
1	１Ｈ	0.975	0.387	2.71	0.992	0.172	1.10	白頭山
2	〃	0.915	0.342	2.63	1.16	0.216	1.11	〃
3	２Ｈ	1.07	0.373	2.58	1.01	0.110	1.21	〃
4	４Ｈ	0.834	0.379	2.99	0.856	0.363	0.905	〃
5	〃	1.00	0.348	2.62	1.06	0.147	1.18	〃
6	５Ｈ	1.05	0.344	2.55	1.08	0.111	1.21	〃
7	６Ｈ	0.399	1.11	1.64	0.326	1.02	0.820	十和田ａ
8	〃	1.04	0.294	2.50	1.25	0.097	1.25	白頭山
9	７Ｈ	0.351	1.07	1.81	0.258	0.976	0.697	十和田ａ
10	〃	1.03	0.361	2.60	1.02	0.108	1.18	白頭山
11	８Ｈ	1.10	0.336	2.50	1.13	0.082	1.31	〃
12	９Ｈ	0.378	1.13	1.67	0.342	1.01	0.799	十和田ａ
13	〃	1.11	0.364	2.49	1.05	0.077	1.34	白頭山
14	10Ｈ	1.04	0.310	2.56	1.20	0.095	1.24	〃
15	〃	0.393	1.17	1.51	0.283	1.02	0.817	十和田ａ
16	ＣＯ－79	1.03	0.296	2.65	1.13	0.278	0.708	白頭山
17	ＣＷ－85	0.443	1.06	1.81	0.416	0.937	0.837	十和田ａ

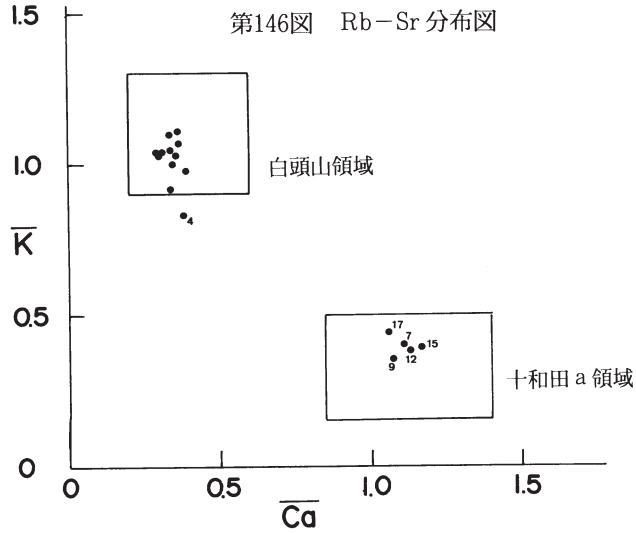
中には、Ｎａ量はやや少ない。しかも、風化の余り進んでいない火山灰では両者とも、標準化値にして0.8～1.4の領域に分布する。表１を点検すると、多くの試料のＮａの分析値は上記の領域に入ることがわかる。Ｎｏ９、16にはやや少ないこともわかる。風化が進むと、風化によって残存するＦｅ因子が増加する傾向がある。そこで、Ｆｅ因子の比較が必要となる。

第148図にはＦｅ因子を比較してある。第146、147図から予想されるように、ＮＯ７、９、12、15、17は十和田ａ領域によく対応しており、また、ＮＯ４を除く他の試料も白頭山領域によく対応していることがわかる。ＮＯ４はＮａ因子はそれほど少なくないが、Ｆｅ因子では白頭山領域を少しずれており、Ｋ、Ｒｂ、Ｓｒ因子でも他の白頭山火山灰とは少し異なる。周囲の土壌による汚染が若干あったためと思われる。

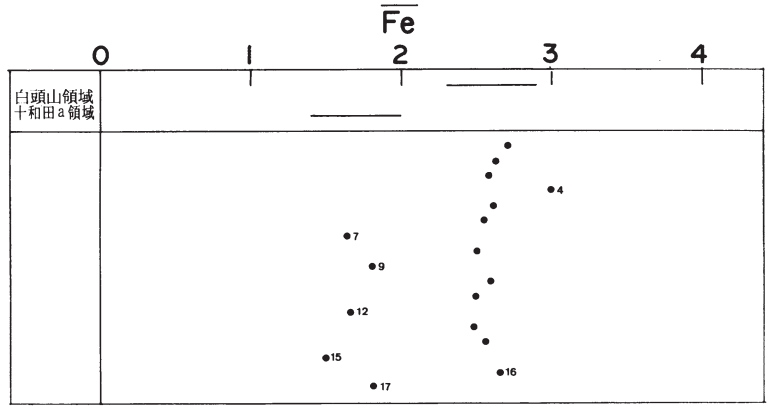
以上の結果、ＮＯ１、２、３、４、５、６、８、10、11、13、14、16の12点の試料は白頭山火山灰であり、ＮＯ７、９、12、15、17の５点は十和田ａ火山灰と判断さた。



第146図　Rb－Sr 分布図



第147図　K－Ca 分布図



第148図　Fe 因子の比較

第Ⅵ章　調　査　の　成　果

第１節　縄文時代の土坑について

土坑は、平成４年28基、平成５年に35基が検出され、２年間の発掘調査において63基が確認された。これらの土坑は、調査区域の北側において造られているが南側にはまったく検出されなかった。土坑の構築時期については、２号土坑から縄文時代早期末葉期の表館Ⅻ群土器に比定される復元可能土器が１点出土している。19号土器も同じく表館Ⅻ群に並行する復元可能な土器が出土した。33号土坑の覆土から縄文時代後期後半の十腰内Ⅳ式土器に比定される小型完形土器が１固体出土している。34号土坑からは、縄文時代後期前半の十腰内Ⅰ式土器の復元可能土器が４固体出土した。また、51、52、53号土坑からは、縄文時代早期末葉期の早稲田５類の土器破片が多く出土した。その他の土坑については、土坑観察一覧表に記載した通り、土器破片が数点出土したのに止まる。これらの土坑の多くは、縄文時代早期後半期～前期初頭期の時期の土器を混入しているものが中心であるが、ほとんどの土器は、覆土中であり、その土坑の時期を決定づける条件を満たしていない。周辺地区から出土している土器は、縄文時代の早期前半、前期前半、後期前半、晩期、弥生時代後期、平安時代までの各時期が見られ、そのなかでも早稲田５類、十腰内Ⅰ式に前後する時期が多かった。

また、土坑の形態的類似性については、規模及び形態がそれぞれ一定せず、ひとつの土坑のタイプを見いだすことは困難である。さらに、土坑からまったく出土遺物が見られないものが多くあり、その機能については不明とするものが多い。

ここでは、以上のような状況にある土坑の中から気になるいくつかの土坑を取り上げてみたい。

(1)　石を有する土坑

石を有する土坑は、15基検出している。しかし、ここで取り上げる土坑は、何らかの意図をもって石を共伴させたと考えられる土坑で、第３号、第８号、第９号、第10号、第11号の５基を対象とする。これらの土坑は、ＢＰ～ＢＲ－72～76グリッド（144㎡）内の近い位置からそれぞれ検出している。

この５基の土坑から出土した石は以下のような状態であった。

第３号土坑は、径95㎝、深さ65㎝を測り、平面形は、不整円形を呈する。土坑中からは、斜めに立石させたような状態で30㎝ほどの細長い割れた石が埋設していた。

第８号土坑は、径130㎝×115㎝、深さは25㎝を測る。平面形は不整円形を呈し、土坑の確認

面及び覆土さらに底面から20cm～40cm大の石が７個ほど出土した。この中には、長さ34cmほどの台石も出土している。

第９号土坑は、径190cm×180cm、深さ25cmを測る。平面形は、不整円形を呈し、土坑の確認面からは板状（40cm大）の石及び拳大の石が数個出土した。土坑内からの遺物は、スリ石が１点と石鏃が西壁ぎわの２層から１点出土したが、石鏃は調査中に紛失した。

第10号土坑は、径280cm×240cm、深さ35cmを測る。平面形は、不整楕円形を呈し、土坑の確認面から北壁と南壁に対するように40cm大の方形の石が斜めに立たせたような状態で置かれていた。10～40cm大の石は、覆土中からこの他にも数点見られた。

第11号土坑は、径155cm×100cm、深さは23cmを測る。平面形は、不整楕円形を呈している。石は、確認面から土坑の縁に巡らしているように置かれていた。また、南壁に近い壁に接して３個の石が置かれていた。

以上の土坑は、いずれも石を有している。しかしながら、その土坑の規模、形態は一様ではない。さらに石の置き方や石の大きさも一定していない。このことは、それぞれの土坑が、個々に異なった機能をもっていたと解釈されないこともない。ただ、ここに上げた土坑は、ＢＰ～ＢＲ－72～76グリッド（144㎡）の近位置から検出されている。つまり、一定の狭い範囲でまとまって検出されていることから特定の集団が利用したと見ることもできよう。土坑の機能として、第８号土坑は、石の投げ込みとも考えられるが、第10号土坑は、石が目印のような形で土坑の南端と北端に立っており、墓標的な感じも受ける。第９号土坑は、土坑の上面に板状の石が２個被せた状態で出土し、破砕された石及び拳大の石もまばらに出土しているので、石の投げ込みという見方も出来ると思うが、完形の石鏃が出土している点を考えあわせると副葬品の一部とも推測される。第３号土坑は、径95cmほどの土坑であるが、細長い石が斜めに立ったような形で埋設しており、意図的に立たせたと考えられる。しかし、成人の埋葬とするための墓としては規模が小さい。

ここでは、以上のことから推測としておよそ二つのことが考えられる。一つは、墓であり、一つは石の投げ捨てた遺構という解釈である。しかし、この推測は(2)の石器を出土する土坑とも関連するので次に記載する土坑も加味して検討を加えたい。

(2)　石器を出土する土坑

土坑内遺物については、土器・石器・土製品観察一覧表に記載されている通りであるが、この中で石器を出土している土坑は、18基を数える。中でもＢＰ～ＢＲ－72～76グリッド区域内の土坑内から石器を出土している土坑を取り上げ、石を有する土坑との関わりを見てみたい。

この地区の石器を出土している土坑をもう一度、整理すると以下の通りである。

第１号土坑は、径170cm×110cm、深さ15cmを測る。平面形は、楕円形を呈している。土坑内

から石鏃が５点、石匙２点出土した。すべて完形品である。

第２号土坑は、径160㎝×130㎝、深さ50㎝を測る。平面形は、不整円形を呈する。土坑内から石匙が１点出土している。この縦形の石匙は、折損したものを再調整して使用したものである。また、表館XII群土器が１固体出土している。

第６号土坑は、径205㎝×180㎝、深さ25㎝を測る。平面形は、不整円形を呈する。石器は、石鏃１点、石匙１点、石箆１点で計３点出土した。すべて完全形品である。

第８号土坑は、先の石を伴う土坑で記載した。この土坑からは、石皿と思われる石器が出土している。

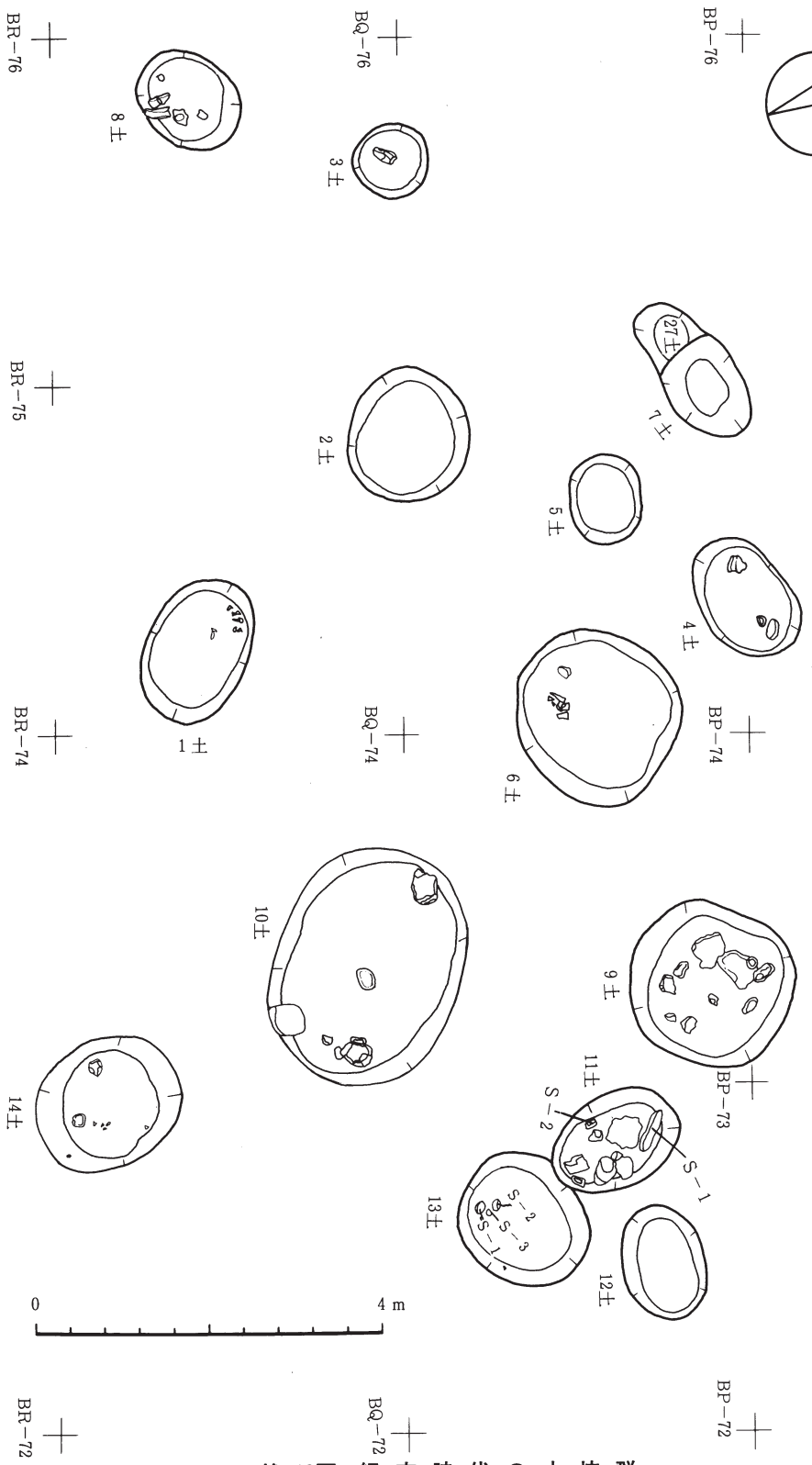
第９号土坑は、第８号土坑と同様に石を伴う土坑で記載した。

第14号土坑は、径170㎝×150㎝、深さ50㎝を測る。平面形は、不整円形を呈する。石器は、石鏃２点、不定形石器６点、打製石斧１点、計９点の石器が出土している。石鏃は完形品である。

以上の６基の土坑を見ると、先述した石を伴う土坑を検出したＢＰ～ＢＲ－72～76グリッド（約144㎡内）周辺から検出している。このことは、石を伴う土坑とも深く関連していると思われる。また、これらの土坑（第１号、第６号、第９号、第14号、）からは、完形の石鏃が出土している点に注意される。第１号土坑は、５点と点数が多くこれに石匙なども出土している。また、第２号土坑、第６号土坑から石匙がそれぞれ出土している。

以上の石を有する土坑と石器を出土する土坑とは、ほぼ144㎡の狭い地区にまとまって検出され、これらは関連する土坑群ではないかと思われる。石器が完形で出土している状況などを考え合わせると土坑に石器を投げ捨てたとは考え難い。つまり副葬品として置かれた可能性があるのではないか。また、石を伴う土坑の第９号からも石鏃が出土していることから、石を伴う土坑も墓としての可能性が考えられる。これらの土坑の時期については、第２号土坑が縄文時代早期末の表館XII群にあたる土器が１点出土しているので該時期のあたりに造られた可能性が考えられる。

（大湯　卓二）



第149図　縄文時代の土坑群

第２節　縄文時代の土器について

縄文時代前期に位置すると思われる第Ⅲ群第５類土器について述べることとする。

本遺跡出土第Ⅲ群第５類土器は、従来早稲田遺跡出土第６類土器や表館式土器に比定されてきていたものであるが、本報告ではこれらと分離した。

本土器群は、地文縄文が多様であるが次の点において大略は一致していると考える。①焼成が堅緻で硬質であること、②地文縄文の他には口唇部周辺の指頭圧痕、刻み、そして両者を組み合わせたもの以外の装飾要素がみられないこと、という２点においてである。また、水平あるいは内傾するように口唇部を面取りする点も特徴として挙げられる。

本遺跡出土のものは破片資料ばかりであるが、全体の器形はおそらく次のようになるものと思われる。口縁形態は平口縁のものが多いが、左側が落ち込む段がつく口縁のもの、波状口縁のものもある。口縁部は垂直に近い角度で立ち上がってきて、口端部が外反するものもある(133) が、やや内湾気味になるものと直立したままのものがほとんどである。底部は124によれば丸底かそれに近い平底となるものと思われる。

これらの特徴を有する土器は、青森県内でみてみると、東部地域では六ケ所村表館遺跡、上尾駮(２)遺跡、大石平遺跡、弥栄平(４)遺跡、東通村前坂下(13)遺跡、大間町小奥戸(１)遺跡があり、西部地域では今別町山崎遺跡、平舘村尻高(4)遺跡などが挙げられる。

本土器群では地文縄文に結束第１種（羽状縄文）がみられることから早稲田６類と、口端部に刻みが施文されることから表館式との関連が考えられる。小奥戸(1)遺跡では半截竹管による押し引き沈線文が施文される早稲田６類土器が伴わず、表館式土器が多数出土していることを考え合わせると、より表館式に近い位置を占めるものと思われる。また、「ピッチリ縄文」が組縄縄文であることを解明した高橋亜貴子氏（1992年）は組縄縄文の使用時期については、「早稲田６類ｃ」の時期としながら「早稲田６類ｂ」および「大木２ａ式・円筒上層ａ式（中略）頃まで使用された可能性を持つ」としている。岩手県滝沢村耳取遺跡や仏沢Ⅲ遺跡では組縄縄文の面取りされた口唇部に指頭圧痕を施すものが多数出土しており、本遺跡出土の指頭圧痕と縦位刻みを組み合わせたものが、これらに対する一地方のバリエーションとみることもできると思われる。

しかし、従来考えられていた「早稲田６類→表館式」という両土器型式の前後関係について近年見直すべきであるとの見解が相次いで提示されており（註)、縄文時代前期前半の編年観を再検討する必要が生じている。したがって、地文縄文、口唇部形態において多様である本土器群も、既知の数型式にまたがる、あるいは分割されて使用されたとみることも想定可能であり、早稲田６類と表館式の編年観が確立されていない現状においては編年的位置づけを論じる

ことはできない。そこで、本土器群を早稲田6類、表館式とは分離することによって問題提起とし、資料の蓄積を待つこととする。

（註）早稲田6類と表館式の編年的研究史は高橋論文（1992年）に詳述している。

第3節　弥生時代の土器について

本節では、量的に多く出土した弥生時代後期にあたると思われる第Ⅷ群土器について述べることとする。

家ノ前遺跡から出土した弥生時代後期の土器の器種は、甕・鉢・壺・小型土器・蓋がある。台付鉢の可能性があるものも1点ある。浅鉢、高坏、皿形などはないようである。本報告では器種によって大別し、文様要素によってさらに類別したため、器種によって類番号が異なっている。そこで器種と文様要素との対応を以下に示す。

弥生土器類別対応表

文様構成＼器種			甕	鉢	壺	小型	蓋
交互刺突文なし	沈線文あり	平行沈線、鋸歯文のみのもの	1類	1類	2類1種	類別せず	類別せず
		区画帯内に沈線文様を施すもの	2類	2類	2類1種		
		条痕文のもの	3類	—	—		
	縄文のみのもの		4類	3類	2類2種		
	無文のもの		5類	—	—		
交互刺突文のあるもの			—	—	1類		

では、全体の器形・文様構成等をある程度把握できた甕・鉢・壺の3器種の特徴を、器形と文様について列記することとする。

○甕の特徴

＜器形＞

・全体の器形は曲線的に変化するものが主体をなしており、頸部の屈曲は弱く、「く」字状に屈曲するものはわずかである。これは沈線文を施文しない土器に顕著にみられる。底部まで接合したものは少ないが、全体的に胴長となり、径の小さい底部となるようである。

・頸部がくびれるものは、口径と胴部上半の径が同じくらいで最大径となっている。

・頸部のくびれがかなり弱く、口縁に近い位置に頸部がくるものは、最大径が外反する口径にあるものがみられ、胴部が垂直に近い立ち上がりを呈している。

・内面に明瞭な稜を有するものは口縁部に近い部分にあり、口縁部分が狭く、口唇部が薄くなっ

ている。

・口縁部が肥厚するものが破片資料にある。

・底部から口縁まで屈曲をほとんど持たず、開き気味に立ち上がるものがある。

＜文様＞

・沈線文等による文様は胴部上半部までに限られるものが多く、下半にまで及ぶものはない。

・口縁部・頸部・胴部の3文様帯を保有するものと、頸部（胴部）文様帯が消滅しているものの二つの文様構成パターンが想定できる。

・縄文を主体文様とするものは、頸部もしくは口縁部が無文帯となるのはごくわずかで、全体に地文縄文が施されるものがほとんどである。また、回転方向を変えて条の流れに変化をつけるものも少ない。

・地文縄文で、縦走するものと横走するものとが混在しているものがある。

・地文に刷毛目文をもつものがある。

○鉢の特徴

＜器形＞

・器形は甕をそのまま小型化したものと、底部から口縁までまっすぐ立ち上がり屈曲のないものとがある。

・最大径は口縁にあるものが多い。

・口縁の突起は甕に比べて少ないが、その代わり小波状口縁となるものがあるようである。

＜文様＞

・文様帯は器高の関係により、胴部下半まで施文されるものがある。

・胴部に、刻みを有する縦位の貼り付けをもつものがある。

・破片資料には、細めの多条沈線が密に施文されるものが多い。

○壺の特徴

＜器形＞

・器形は多様であるが、頸部の屈曲が強いものが多いようである。

・最大径は胴部中央部にあるものと、胴部下半にあるものとがある。

・広口壺・長頸壺の類も存在する。

＜文様＞

・文様帯は最大径のある胴部中央部まで下がるようである。

・交互刺突文を施文するものが存在する。

・縄線文を施文するものが存在する。

・他の器種にはない壺形土器特有の文様モチーフとして、横に連なる風構え状沈線文、三角状

懸垂文などがある。

○家ノ前遺跡第Ⅷ群土器の特徴

＜内面調整＞

内面調整はナデ・ヘラナデが主流であるが、刷毛目様のものもわずかにある。

＜口縁部＞

口唇部（註１）の形態は平坦に調整されるものや、外面に丸みを帯びてやや内湾するものが多い。他にきれいな面取りが施されるもの（252・343他）、つまみ出して先細りするもの（245・259）、強く外反する口縁によって幅広の口唇部となるもの（244）などがある。内面調整とも関連するが、内面の口縁から２cm内外に稜線を持つものがある。また、口唇部を平坦に調整するものには縄文が施文されるものが多く、外面が丸みを帯びてやや内湾するものには口端部に縦位の刻みあるいは単沈線に近い刻みを施すものが多い。これらの特徴は、甕・鉢において顕著にみられる。口唇部には他に指頭圧痕・刺突・刻み・沈線なども施される。

口縁部内面に施文されるものは縄文のみのものが多く、縄文と沈線の組み合わせ、沈線のみといった類はごく少数存在するだけである。

突起の形態として、頂部に刻みを加えた山形突起が多く、貼り付けによるもの、指頭圧痕と組み合わせたもの、刻みを加えない山形突起などもある。

＜文様帯の構成＞

文様帯は口縁部・頸部・胴部の３文様帯があるものと、口縁部・胴部（頸部）の２文様帯があるものとがある。胴部（頸部）文様帯の下端は胴部上半にあるものと胴部中央にあるものがあり、器種によって異なるようである。また、244・250の様に整然とした沈線文が描かれる土器がある一方で、246・265の様に沈線文のみならず区画帯もが雑に施文されるものもある。特に246は区画文としての直線文がそのまま山形文になり、さらに山形文がそのまま区画文となる直線文になっており、口縁から底部へ向かって割り付けをほとんどしないで施文したものと思われる。

口縁部文様帯、頸部文様帯、胴部文様帯の区画文には、多い順に

①平行沈線文と鋸歯状文の組み合わせ

②平行沈線文のみ

③列点文を内部にもつ平行沈線文

④交互刺突文

⑤連弧文

といった区画文が用いられている。圧倒的に①平行沈線文を鋸歯状文の組み合わせによるものが多い。

頸部文様帯あるいは胴部文様帯の区画帯内に描かれる沈線文と縄文の関係は、

①沈線文を施文後、縄文を充塡するもの

②地文縄文を全面に施文後沈線文を施して縄文を磨り消さないもの

③無文地に沈線文を施文するだけのもの

がある。③は鉢の破片資料に比較的多くある。また、区画帯内に沈線文も縄文も施文しないもの、縄文のみを施文するものもある。

＜沈線文による文様＞

文様区画帯内に描かれる沈線文は、波状文・大波状文、菱形文・重菱形文、山形文、眼鏡状文・ブーメラン状文・連弧文・ハ字状文・縦位の山形文などの多様な沈線文が施されており、それらの中には特定の器種に用いられる文様モチーフもあるようである。また、文様帯全体に平行沈線文と鋸歯状文を重積させるものもある。

＜磨消縄文・充塡縄文＞

沈線文を施した後縄文部分を磨り消す磨消縄文の手法はほとんどみられず、沈線の文様内に縄文を充塡する充塡縄文の手法が主体的に用いられている。

＜地文縄文＞

地文縄文は、密に施文されるものや整然とした縞縄文が施されるものは少なく、まばらな縄文、帯縄文が施文されるものが多い。また、縞縄文の技法によって山形状の文様を表出するものもある。縄文は圧倒的に単節ＲＬ縄文が多く、ＬＲ縄文は少ない。撚糸文はなく、附加条縄文らしいものが若干ある。条は縦走・斜行するものが多く、横走するものも少数ある。

＜その他の手法による文様＞

交互刺突文は壺形土器にのみ用いられている。本遺跡において出土した交互刺突文は、肥厚した口縁下端に立体的に施文されるものは２個体で、３個体は平面的に施文される。また、交互刺突文とは異なるが、甕の頸部に細い粘土紐を貼り付けて上下への押圧を加えたり、折り返し状口縁の下端に押圧を加える、あるいは棒状工具によって押し上げる等の手法によって、立体的な波状隆線文を呈する文様も施文されている。

隆帯（突起）として粘土の貼り付けがなされるものは次のようなものがある。

①甕の口唇部に円形の粘土粒が貼り付けられ、２～３条の短沈線が施される。(244)

②鉢の胴部に縦位の長円形の粘土塊が貼り付けられ、横位の刻みが６条施される。(370)

③壺の口縁部に長円形の粘土塊が貼り付けられ、４～６の刺突が施される。(261)

＜底部形態＞

底部は平底になるものと上げ底風のものがあり、後者がやや多いようである。しかし、器種は不明であるが、上げ底のものもある。

○家ノ前遺跡第Ⅷ群土器の編年的位置付けについて

本遺跡の弥生時代後期に属すると思われる第Ⅷ群土器（以下「家ノ前Ⅷ群」とする）の器種構成は、すでに述べているように甕、鉢、壺、小形土器、蓋の5器種である。台付甕・台付鉢・高坏・注口土器等は欠落するようである。

本遺跡においても他遺跡においても数量的に最も多く普遍的な器形である甕形（今回は「深鉢形」と同義に用いることとする）土器を中心に考察を進めたい。その中でも沈線文の施文される甕形土器第1類、第2類について全体の器形をみてみると、（A）頸部が比較的すぼまり、屈曲部の上部がゆるやかに外反していく器形と、（B）頸部であまりすぼまらず、胴部が垂直に近い立ち上がりをみせ、口縁部がそのまま外反するものとがある。いずれの器形であってもそのフォルムは曲線的といえ、両者は時間的に近い位置にあるものと思われる。また、文様帯の構成はこれらの器形と関係があり、（A）の器形を呈するものは口縁部・頸部・胴部の3文様帯が存在し、（B）のものでは、頸部（胴部）文様帯が消滅して口縁部・胴部（頸部）の2文様帯があるだけとなる。

家ノ前Ⅷ群の文様帯は、これら2つの文様帯パターンがあるものと思われる。前者をA類、後者をB類として、器形と文様帯の関係から述べてみたい。B類においては、胴部（頸部）文様帯の上端の区画文は頸部の最もくびれる部分に、下端の区画文は胴部最大径のある胴部上半に施文され、全体の器形の屈曲と一致する傾向がある。一方A類では、最もくびれた位置を頸部文様帯として挟みこむように区画文が施されるもの（242・247・246）がみられ、文様帯を決定付ける区画文の施文される位置が、器形の屈曲とは必ずしも一致していないことが指摘できる。そして相対的に器形に占める区画文による文様帯の幅は、3文様帯を有するA類では広く、2文様帯を有するB類では狭いものとなっている。

A類とB類についてはこれらの相違があり、これに区画文（註2）の構成要素等を加味して考察を続ける（土器構成要素表(1)、(2)参照）。

A類の区画文は、2～4条の平行沈線と鋸歯状文を組み合わせたもの、6条の平行沈線文によるもの、などというように区画文自体が多条化しており、口縁部・頸部・胴部の各文様帯を明瞭に分割している。

これに対してB類の区画文は、平行沈線文と鋸歯状文の組み合わせは250のみで、重連弧文(249)、連弧文と平行沈線文・列点文の組み合わせ（248）といった連孤文が施文されるものと、ただ単に平行沈線文によって区画されるもの（243・245・252）がある。250は、文様帯の下端に鋸歯状文が施文されているが、口縁部・胴部（頸部）の2文様帯しかないこと、胴部（頸部）文様帯の下端には鋸歯状文が伴っているものの、上下共に多条沈線ではなく単沈線によって区画されており、区画帯の貧弱化が進んでいるものと思われることからB類と考えられる。さら

に区画帯内に施文されている沈線文は眼鏡状沈線文であり、後で述べるが天王山式土器に用いられている文様モチーフであり、やや新しい段階のものであると考えられる。

つまり区画文に鋸歯状文を伴っているものでも、A類からB類へと鋸歯状文を伴う平行沈線文が、多条沈線文から平行沈線文もしくは単沈線文へと区画文の簡素化が行われると同時に鋸歯状文が省略化されると考えられる。文様帯を分割する区画文が簡素化されることは、念仏間式土器の多条沈線文によるものとは一線を画する必要があるものと思われる。

注目しておきたい技法に、内面に観察できる稜線がある。実見してはいないが実測図によれば、北海道瀬棚町に所在する瀬棚南川遺跡出土第Ⅳ群土器内面にも稜線はみられる。この稜線は整形する際にヘラ状工具等によって最もくびれた部分から口縁部にかけて内面を横位方向になでることによって形成されるものと思われ、稜線は器形の屈曲と一致した部位に示されている。ところが家ノ前Ⅷ群では器形の屈曲とは一致をみない稜線が施されている。

家ノ前Ⅷ群の内面に稜線を有する甕形土器を挙げてみると、A類では247、B類では243・245・250に施文され、B類に多く用いられている手法であるといえる。また、253の内面にも稜線がある。243以外の稜線は、器形を形作るというよりむしろ、口縁部内面を整形する際に発生した調整技法とみることができる。これは245において顕著にみられる。245は全体の内面調整はヘラケズリともいえるもので、混入物である砂粒がヘラ状工具によって大きく動かされている痕跡を止めているが、その後口縁から2cm内外を口縁に沿って横位にヘラナデ調整が加えられている。この調整される幅は243以外の各土器はほぼ一定しており、ヘラ状工具を器面に対して一定の角度で傾けて調整したものと思われる。つまり器形上の屈曲を意識したものではなく、口縁部内面調整の一手法と考えられるのである。

しかし243の稜線は器形と一致していることに加えて、口縁部が内湾しながら立ち上がるものであること、口縁が先細りするようなものではないことから、他の土器の稜線とは明らかに様相が異なっている。この稜線は、天王山式土器にみられる受口状の口縁をつくりだす、成形段階において生じる稜線と考えられる。

そして突起形態をみてみると、A類には山形突起をはじめ、6個体中4個体に突起が施されている。B類では1個体に山形突起が確認できるものの、他には突起はあまり施されないようである。しかし、口縁部が広い範囲で接合した土器が少ないため、この点について即断することはできない。ただ、248では口端部の一部にまとまった縦位の刻みが施されており、突起の代用といった考え方もできるかもしれない。

家ノ前Ⅷ群に用いられている地文は、RL縄文が圧倒的に多く、LR縄文・付加条縄文がわずかにみられる。また、撚糸文は交互刺突文を施文する壺形土器にもまったくみることがきでず、地文が縄文である時期に交互刺突文の手法が持ち込まれていることが確認できる。また、

復元実測した土器の他に破片資料も含めて、文様区画帯内に施文される縄文は磨消縄文ではなく、ほとんど充塡縄文であることも本土器群の重要なポイントと思われる。この点は、石川日出志氏（石川：1990年）が東北地方天王山式土器の特徴として「磨消縄文は厳密にいえば充塡縄文手法である」としていることと符合する。

以上、家ノ前Ⅷ群について、器形・文様構成・文様帯区画文等について分析を行った。これらに、先に述べた特徴とを加えてまとめたのが構成要素表（１）である。

文様帯の区画に用いられる区画文は、念仏間式にみられる多条沈線文（鋸歯状文を含む）による区画文から、家ノ前Ａ群において鋸歯状文の省略・区画文の簡素化が行われる。そして２本の平行沈線となり、さらには連弧文による区画（天王山式土器文化の波及？）がなされるようになると思われる。鋸歯状文が区画文に用いられず、区画文の簡素化が進むと頸部文様帯と胴部文様帯は一体化し、Ａ類の口縁部・頸部・胴部の３文様帯構成からＢ類の口縁部・（胴部）頸部の２文様帯構成へとその幅を狭小化させる。この文様帯構成の変化は器形の屈曲と密接に関係を持つようになり、器形によって文様帯が規制されていくものと思われる。

また、器形では頸部のくびれがなくなって胴部上半は垂直もしくはやや開き気味になり、口縁部がさらに外反して口縁が最大径を持つ245のような器高の低いものや、253の頸部の屈曲のほとんどない底部から口縁まで直線的に立ち上がる器形が用いられる。これらに加えて、口縁部が外反するものの口端部が内湾する受口状口縁の土器（123）もある。

ここで天王山式土器と関連があると思われる事象について述べることとする。

交互刺突文を施文する261の壺形土器の口縁部突起である。これは六ケ所村発茶沢（1）遺跡、上尾駮（2）遺跡から出土した甕の口縁部に、これに類する貼り付け（隆帯）がある。また、この手法は、370の縦位の貼り付け（隆帯）にも通じるものがあると考えられる。そして口縁部下端に施文されている交互刺突文は、佐藤信行氏が交互刺突文の祖形としている岩手県水沢市兎Ⅱ遺跡出土の土器と酷似する。だが、全体的に家ノ前Ⅻ群甕形Ｂ類におけ口縁部突起の発達は、顕著にはみられるず、248などは、部分的に縦位の刻みを施しており、突起の形骸化したものとみることもできる。

沈線による文様の中で注目すべきは、先に触れた眼鏡状沈線文である。これは、本遺跡において器種構成上主要となる甕（283～295）・鉢（372・378）・壺（399）の3器種に施文されている。眼鏡状沈線文は、岩手県新里村に所在する和井内東遺跡にその祖形となりうる文様が台付甕に施文されているが、文様帯の幅、施文位置、モチーフのつながり・密度など多くの点で相違がある。その他眼鏡状沈線文は福島県会津坂下町能登遺跡において、交互刺突文と眼鏡状沈線文が同一個体に施文されている甕・壺・広口壺等が出土しており、むしろこちらに近いものと思われる。この文様モチーフは報告文（福島県教委：1990、P97・ℓ18）中において「2

重連弧文の系統で理解される」としているものである。連弧文によるバリエーションを持つ土器は家ノ前XⅢ群にはわずかであることから、この地で複雑・多様化して発展していったものとは考えられず、天王山式土器文化によって直接的に持ち込まれた文様モチーフであると思われる。能登遺跡の器形は、天王山式土器に顕著にみられる胴部が直立し強い屈曲をもった受口状口縁そのものであり、家ノ前XⅢ群Ｂ類のものとは口縁形態が全く異なっている。これは時期差とみるより地域差とみる方が妥当であり、土着の土器である家ノ前XⅢ群Ｂ類土器の器形に天王山土器の文様モチーフを施文したものと理解される。

すでに述べているように家ノ前XⅢ群の甕形土器には交互刺突文を施文するものはなく、壺形土器に見つけることが出来るだけである。この壺形土器の地文は、いずれも縦走する単節ＲＬ縄文であり、これまで青森県内に知られている撚糸文を地文にもって交互刺突文を施文する土器よりも古手のものと思われる。遺構外の出土ではあるが、交互刺突文を施文するこれら地文縄文の壺形土器と、交互刺突文を施文しない同じく地文縄文の甕形土器が同時期に使用されていた可能性も十分考えられるのではないであろうか。逆にいえば、北海道の影響を多分に受けるこの地にあっては、交互刺突文土器のみを使用する時期はほとんどないこともあり得ると思うのである。

だがこれらのことを断定するには本遺跡の遺物を含めて天山式期およびその前後する時期の資料が少なく、なお一層の資料蓄積がなされてはじめて論議できる問題であろう。

青森県における天王山式土器の実態が解明されていない現状においては、次のような変遷過程を考えることができると思う。

縄文時代晩期から定型的に用いられていた平行沈線文による文様帯区画文は、田舎館2群になって区画文としての鋸歯状文をこれに附加させると共に、平行沈線文を多条化させることを採用する。この区画文は時には主体文様となって、田舎館3群、念仏間式と、連綿と継続されていき、文様区画帯内に施文される文様に対して、磨消縄文手法の主体的な導入、文様モチーフの多様化などが行われる。そして大石平Ⅰ群期には充塡縄文手法・帯縄文手法が恵山文化の影響の基に導入され、縄文を磨り消すという比較的容易な技法から、縄文を文様モチーフの中に入れ込み（充塡縄文手法）、地文には帯縄文（縞縄文）を施文するという、より高度な縄文施文技法の向上がなされるのである。縄文施文技法の高度化によって、「地文の走る方向（回転方向）を変化させたときにできる地文と地文の重なり部分を消去するための技法」（青森県教委：1985ａ、Ｐ475・ℓ10）である重平行沈線・鋸歯状文・重鋸歯状文等による多条の区画文が不必要となり、家ノ前Ⅷ群にみられる平行沈線と鋸歯状文→単沈線と鋸歯状文→平行沈線というような区画文の簡素化が進むと解釈できる。これと同時に地文縄文は密に施文されなくなり、施文したのち縄文を消し去ったり、初めから粗く施文するなどして、地文縄文への意識が

弱まっていくものと思われる。また、家ノ前Ⅷ群にみられる恵山文化的色彩の強い事象として、南川Ⅳ群のような曲線的な器形、口縁部外面に施文される縦位の刻み・内面の斜行縄文、口唇部縄文などが挙げられ、この時期にも頻繁に用いられるのである。

こういった青森県の地域性の強い土器に恵山文化の流入が認められる一方で、東北地方南部に広く分布する、交互刺突文を施文する天王山式土器の影響がこれらに融合していくものと考えられる。それの一つは、文様帯の減少・狭小化が挙げられる。だが天王山式土器では「頸部の一部を横帯状に素文化する手法」(馬目：1983) がとられて3文様帯を維持するようであり、天王山式土器で頸部文様帯の消滅がみられるものは一部の土器であることから、これらと家ノ前Ⅷ群とを直結するのには躊躇せざるを得ない。むしろ東北地方中部域、とりわけ秋田・岩手両県辺りの影響によって、新たな文様帯の構成概念が持ち込まれた可能性も考えられる。そして文様帯区画文には、単沈線と鋸歯状文の組み合わせ、平行沈線文といった土着のものに、天王山式土器の区画文である下向き連弧文が加わることとなるのである。また、口端部が内湾する受口状口縁、メルクマール文様である交互刺突文、連弧文から派生するといわれる眼鏡状沈線文といった、天王山式土器の主体となる器形・文様モチーフといった緒要素が導入されていくことは看過できないことである。

これらの事象をふまえると、家ノ前Ⅷ群土器は、念仏間式土器と天王山式土器の両特徴を具備しているものと考える。家ノ前Ⅷ群土器は、縄文時代晩期以来続いてきた土着の土器文化に、小川原湖湖沼群という流通・交流に関わる地理的条件が加担したことによって、北海道の恵山文化と東北地方南部の天王山式土器文化を相取り入れ、それら二つの文化の接点となっているものと思われる。

主観的憶測を多分に含んで述べてしまったが、こういった見方もできるのではないかという仮説であるので、御批判・御指導を願いたい。

○家ノ前遺跡出土弥生式土器の問題点

本報告においては弥生時代後期と思われる土器を第Ⅷ群土器として一括してその特徴について述べてきた。だが、次の三点において現時点においては回避できない問題点がある。即ち、①遺構に伴った一括性・一時性の強い資料ではなく、すべて遺構外の遺物であること、②本遺跡の遺構外出土遺物が縄文時代早期・前期・中期・後期・晩期、弥生時代前期・後期、平安時代と、途中時期的に断絶はするものの人間の活動した痕跡が連綿と続いており、弥生時代後期の土器も細分され得る可能性があること、③復元できた個体数が絶対的に少ないこと、が挙げられる。これから、第Ⅷ群土器についても時期幅がある可能性もあり、一方では一時期のものである可能性もある。したがって、本土器群の存在時期を把握するのには慎重を要すべきであることを記しておく。

甕形土器の変遷について試案を提示したが、器種には他に壺・鉢、小型土器があり、これらを包括した土器編年を確立する必要がある。そして天王山式土器にみられる台付鉢や注口土器といった器種は青森県地域に存在するのかどうかについては、以後の資料の増加を待ちたいと思う。

家ノ前遺跡既報告の中に口縁部貼り付け帯に刺突と指頭圧痕の組み合わせによる交互刺突文風のものや（青森県教委：1993ａ、Ｐ89・第62図２～４）粘土紐の貼り付けに指頭圧痕を加えたもの（同、Ｐ89・第62図１他）など、交互刺突文との関わりを考える上で看過することができない資料が含まれており、既報告を含めた家ノ前遺跡の弥生式土器群の性格についてさらなる検討を加える必要がある。

本遺跡が接している尾駮沼周辺は、弥生時代後期に属するといわれる土器を出土した遺跡が多い地域である。本遺跡から３㎞内に大石平遺跡・上尾駮（２）遺跡があり、尾駮沼の対岸には発茶沢（1）遺跡・沖附（1）遺跡が位置している。家ノ前遺跡の10㎞南西には、千歳（13）遺跡がある。これら尾駮沼を中心とした狭い地域での土器の変遷をまずは確立する必要があると思われる。

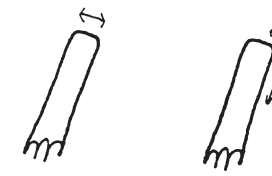
そしてさらには、既に提示したように、恵山文化と天王山式土器文化という北と南の双方の文化の交流が認められることから、時期決定の尺度となる広域土器編年は勿論のこと、これをもとにして背景にある文化流通・生業のかかわり合いを明らかにすることが必要であろう。

弥生時代後期の土器様相が、地域性の強い後期前半期から、交互刺突文の分布が示すように斉一性が強まって広域性のある土器型式が確立される段階の後期後半にかけての複雑な時期の土器様相・ひいては文化様相を解明する糸口を尾駮沼周辺地域の土器群は内在していると考える。この期の文化解明の一助となることがきでれば幸いである。

註　1　本報告においては、口縁部の文様等の記載について「口唇部」、「口端部」を用いたが、次のように区別した。

「口唇部」…内面にも外面にも属さない口縁の上面部分

「口端部」…「口唇部」の外面に接する部分から外面口縁にかかる部分



「口唇部」　「口端部」

2　口縁部・頸部・胴部といった各文様帯を区画する、器面全面をめぐる文様を「区画文」とする。すなわち、これによって器面を横位に分割する帯状の空間が「文様区画帯」（口縁部・頸部・胴部など部位によってこれらを冠する）となる。

（神　　康夫）

家ノ前遺跡第Ⅷ群土器構成要素表（1）

事実記載分類	番号	文様帯		区画文			口縁部				特徴的な地文	その他	考察記載分類
		3文様帯	2文様帯	①	②	③	内面稜線	内面縄文	突起形態	口唇部（唇） 口端部（端）			
1類	241	○		○									A類
	242	○		○						端一縦位刻み			A類
	243		○		○	○			山形状小突起				B類
	244	○		○					貼付小突起	端一縦位刻み			A類
2類	245		○		○		○	○		端一指頭圧痕			B類
	246	○			○				張り出し突起	唇一縦位刻み	下半ミガキ		A類
	247	○		○			○	○	山形状小突起				A類
	248		○			○			刻み(突起代用?)	唇一縦位刻み	縞縄文		B類
	249		○			○				小波状口縁			B類
	250		○		○		○					眼鏡状文	B類
	251	○		○					山形状小突起	唇一付加条縄文	附加条縄文		A類
	252		○		○					口唇面取り			B類
3類	253	○					○		山形状小突起		刷毛目		
4類	254							○	張り出し突起	端一縦位刻み			
	255	○								端一縦位刻み			
	256								指頭圧痕突起				

本表は甕形土器のみを対象にしている。
区画文の番号は以下の内容である。
①平行沈線文と鋸歯状文の組み合わせによるもの　②平行沈線文のみのもの　③区画文に連弧文があるもの

家ノ前遺跡第Ⅷ群土器構成要素表（2）

考察記載分類	番号	文様帯 3文様帯	文様帯 2文様帯	区画文 ①	区画文 ②	区画文 ③	口縁部 内面稜線	口縁部 内面縄文	口縁部 突起形態	口縁部 口唇部（唇）口端部（端）	特徴的な地文	その他	事実記載分類
A類	241	○		○									1類
	242	○		○						端－縦位刻み			1類
	244	○		○					貼付小突起	端－縦位刻み			1類
	246	○			○				張り出し突起	唇－縦位刻み	下半ミガキ		2類
	247	○		○			○	○	山形状小突起				2類
	251	○		○					山形状小突起	唇－付加条縄文	附加条縄文		2類
B類	243		○		○		○		山形状小突起				1類
	245		○		○		○	○		端－指頭圧痕			2類
	248		○			○			刻み(突起代用?)	唇－横位刻み	縞縄文		2類
	249		○			○				小波状口縁		眼鏡状文	2類
	250		○		○		○						2類
	252		○		○					口唇面取り			2類

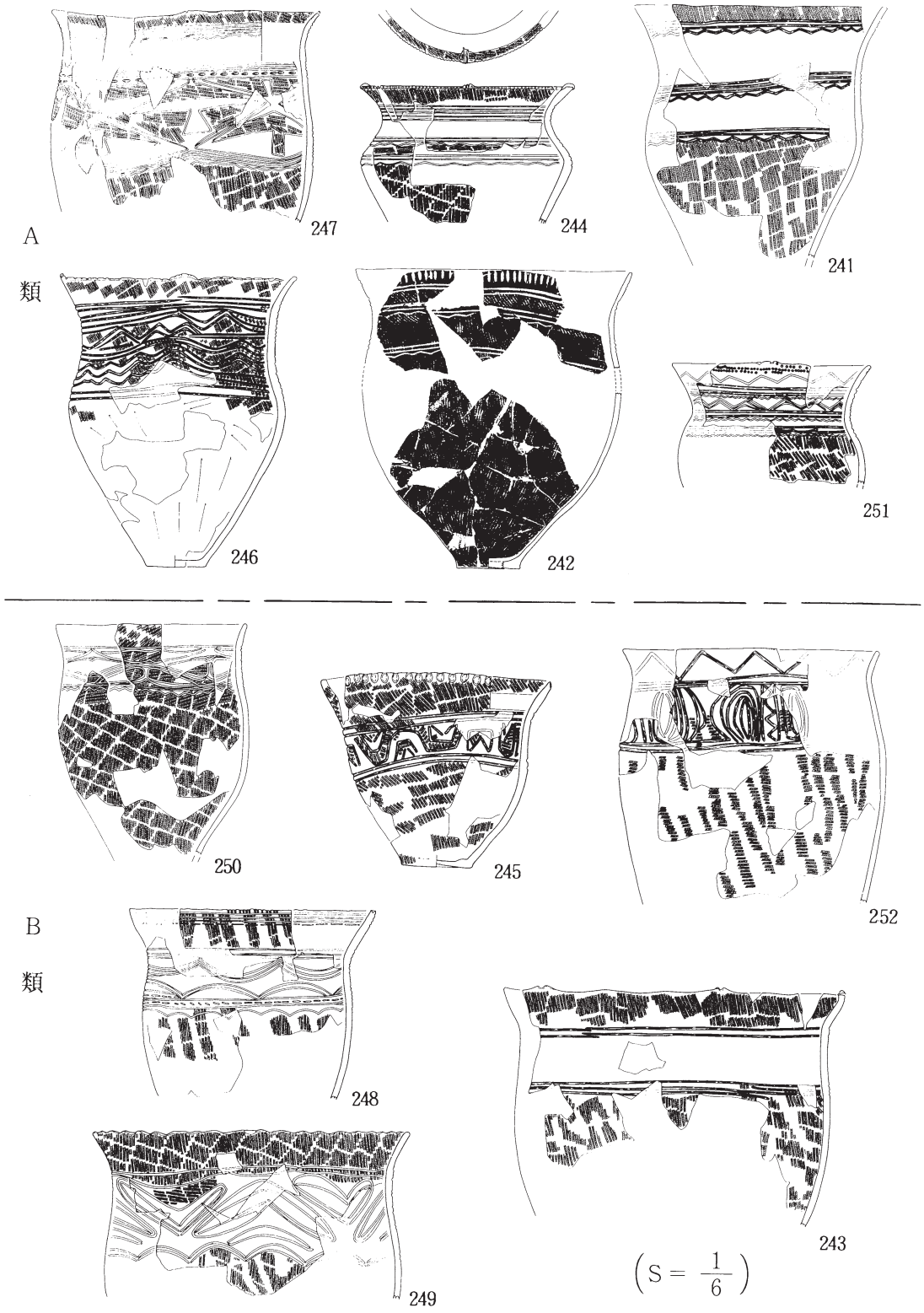
本表は甕形土器第1類・第2類のみを対象にしている。

区画文の番号は以下の内容である。

①平行沈線文と鋸歯状文の組み合わせによるもの　②平行沈線文のみのもの　③区画文に連弧文があるもの

家ノ前遺跡第Ⅷ群土器の類別構成要素対比表

	A類	B類
器形	頸部が比較的すぼまって曲線的に変化していくもの	頸部であまりすぼまらず胴部上半が垂直に近いもしくは開き気味で立ち上がって口縁部がさらに外反する。頸部はかなり口縁に近い位置に押し上げられる
文様帯構成	口縁部・頸部・胴部の3文様帯がある	口縁部と胴部あるいは頸部の2文様帯しかない
文様帯区画文	鋸歯状文と平行沈線文の組み合わせによるもの	平行沈線文のみのもの、連弧文を施すもの
	＊鋸歯状文と平行沈線文の組み合わせのうち、同一個体の区画文が部分的に鋸歯状文を欠くものはA類・B類ともに存在する。 ＊A類の方が、1区画文あたりの幅が広くなっている（多条沈線による）。	
口縁部内面の稜線	247の1個体	245・250の2個体
突起形態	多い（山形状状突起・貼り付け小突起・張り出し突起）	少ない（刻みによる突起の代用と思われるものがある）
磨消縄文と充塡縄文	磨消縄文はほとんどなく、充塡縄文の手法が主体的に用いられている。	
地文	RL縄文がほとんどで、極わずかにLR縄文、附加条縄文がある。	



第150図　第Ⅷ群土器分類図（壺形１類・２類土器のみ）

第4節　平安時代の遺物と遺構

1　平安時代の遺物と遺構

平成4・5年度の調査で出土した平安時代の出土遺物はダンボール箱で20箱程度で、土師器が大半を占める。これらのうち遺構外出土のものは破片資料に留まったので、ここでは遺構内出土の土師器についてのみ、器形ごとに分類基準を以下に記載する。

(1)　坏

坏に分類された器形のものは総数11点出土で、内住居跡出土のものは6点である。出土したものは全てロクロ使用のものである。ロクロ使用の後に調整を加えたものと、加えないものによって2つに分類した。

Ⅰ類－　ロクロ使用の後。調整を加えたもの。これらのうち内面黒色処理を施したものが第6号住居跡覆土から出土している。

Ⅱ類－　ロクロ使用の後に調整を加えないもの。

(2)　甕

本器形に分類されるものが最も多く出土した。図上復元を含む完形品は、12個体であった。器高と底径の相関グラフ（第150図）から大きく3分類された。分類基準はⅠ類－器高が25cm以上のもの、Ⅱ－器高が18cm以上25cm未満のもの、Ⅲ類－器高が18cm未満のものとした。この大きさは、甕の用途によるものと思われる。また、製作技法からロクロ使用のものと、非使用のもので以下のように細分した。

Ⅰ類a－　器高が大きいものでロクロ使用のもの

Ⅰ類b_1－　器高が大きいものでロクロを使用しておらず、口縁部が長く外反するもの。

Ⅰ類b_2－　器高が大きいものでロクロを使用しておらず、口縁部の長さはb_1より短いもので頸部に段差を有する。

Ⅰ類b_3－　器高が大きいものでロクロを使用しておらず、口縁部の長さはb_1より短いもので頸部には段差を持たない。

Ⅱ類a－　中ぐらいの器高でロクロ使用のもの

Ⅱ類b－　中ぐらいの器高でロクロ非使用のもの

Ⅲ類a－　器高が小さいものでロクロ使用のもの

Ⅲ類b－　器高が小さいものでロクロ非使用のもの

(3)　鉢

第7号住居跡内から出土したもの1個体である。底部直上に緩い段差を持ち、底部は粗いケズリの後にナデを加えており、はっきりとした平底にはならずやや丸底に近い様相を呈する。

以上の土師器のほかに、遺構内からは土製支脚４点（第４・５・７・９号住居跡）、鉄製品（第４号住居跡）、口縁部が緩く外反することから木製椀と思われる木製品（第11号住居跡）、土製紡錘車（第11号住居跡）、製塩土器（第７・９号住居跡）等が出土している、遺構外のものは須恵器・灰釉陶器等も出土しているが第Ⅳ章第２節遺構外出土遺物で記載している。

２　平安時代の検出遺構

尾駮沼に望む台地の中央部から南側の縁辺部にかけての比較的狭い範囲において、10軒の住居跡群が検出された。第151～153図は、住居跡平面図と床面及びカマド内等の生活時期決定に係わる土師器を図化したものである。（住居跡１／100，遺物１／50）。さらに、住居跡一覧表は十和田ａ・白頭山火山灰との関係を記したものである。

〔遺物、カマド位置・方向から〕

住居跡内から出土した土器は、須恵器を含まず全て土師器で構成されている。それらのうち特徴的なものは、第７・８号住居跡から出土している口縁部が長く外反傾向を見せる土師器で、７・８世紀の流れをくみ古い要素を有している。しかし、同一住居内から出土しているロクロ使用の甕の口縁部を見ると、須恵器の影響を受けたと見られ、外に開いた後、先が直立するものが存在することから、９世紀中頃から後半期に掛けてのものに比定できそうである。

これらと同様に、比較的古い様相を呈する土師器を出土した住居では、第４・５号住居跡があげられる。いずれもカマド方向はほぼ東北東を向き、カマド位置も東壁中央付近に位置することから、第７・８号住居跡と同様に９世紀中頃から後半期のものではないかと思われ、第４・５・７・８号住居跡の４軒が小集落を形成していたと考えられる。

前述の４軒以外の住居跡は、カマド方向がほぼ真南に向くものが３軒（９・11・13Ｈ）、東南東をむくものが１軒（６Ｈ）、南々東１軒（10Ｈ）、北々西１軒（12Ｈ）とばらつきが見られる。しかし、床面、カマド内の土器接合関係からみると第６号住居跡－第11号住居跡、第11号住居跡－第12号住居跡のものが接合していることから、これらには大きな時代差は認められないと思われる。さらにこれらに共通するものとしては、土師器の口縁部が比較的短い外反に留まり９世紀のものと比較すると新しいものと思われる。また、カマドの位置も中央から左右どちらかにずれる傾向が認められることも併せて考えると、おおよそ10世紀初頭から第２四半期あたりと思われる。時代が新しい住居ではカマド方向に違いが生じることは、これまでにも認められており、これら６軒の住居はほぼ同時存在の集落として捉えても間違いはないであろう。

〔火山灰から〕

十和田ａ火山灰は、文献等にも登場し従来から言われているとおり西暦915年に降下したと思われ、白頭山火山灰は、分析結果では幅があるものの土器形式から凡そ10世紀半ばに降下したのではないかということで、現在は落ち着きを見せているようである。

本遺跡から検出された歴史時代の住居跡には、埋まり切らなかった住居跡ばかりでなく、第Ⅵ層で確認した第４・５・６号住居跡内においても明らかに自然堆積と思われる白頭山火山灰が総当量で検出されている。このことから、確実に白頭山火山灰降下以前に廃棄されたものであることが言える。

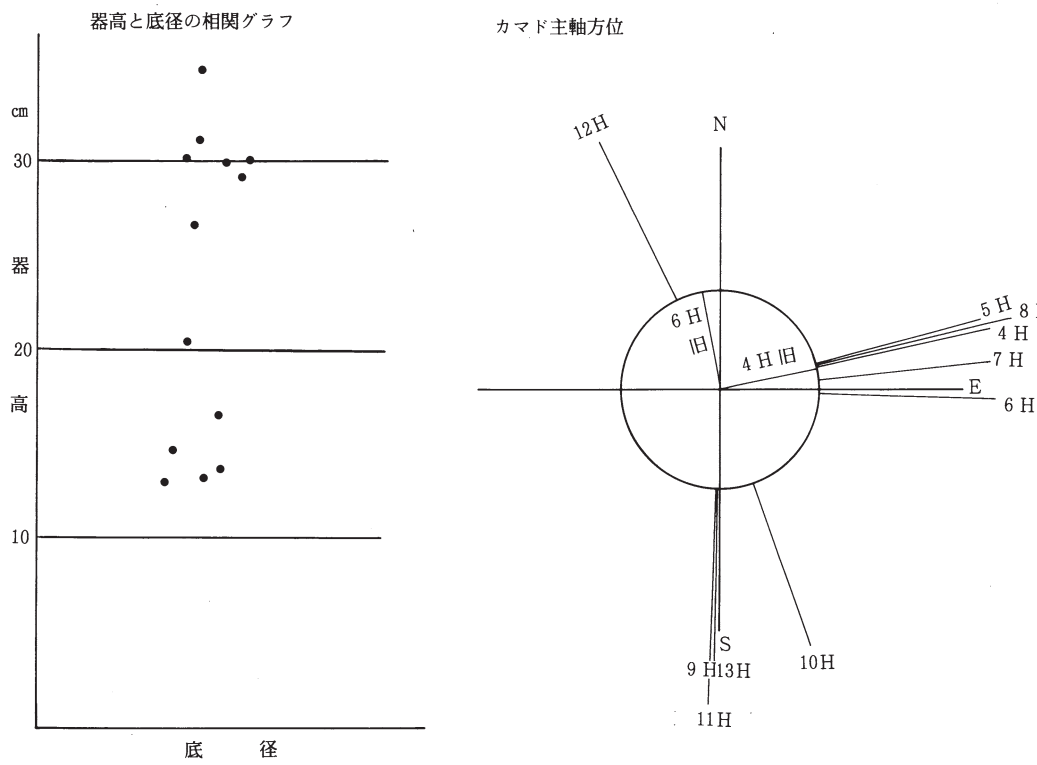
ここで問題になってくるのが十和田ａ火山灰との係わりである。住居跡内で十和田ａ火山灰が検出されたのは第９・12・13号住居跡である。第９号住居跡の覆土下層は、ロームブロックを多量に含み人為的堆積の痕跡を見せるものの中に、十和田ａ火山灰（分析済＝三辻氏）が混在する。すなわち、十和田ａ火山灰が降下した後に周辺の十和田ａ火山灰を含む土で住居跡を埋め戻し、その後に白頭山火山灰が自然堆積したものと思われる。しかもこの台地は風が強く、住居跡群周辺では台地縁辺部に位置する第10号住居跡周辺以外では、十和田ａ火山灰は微量にしか検出されていないことから、十和田ａ火山灰降下直後に廃棄・埋め戻しの作業が行われた可能性が高い。

第12・13号住居跡内で検出された十和田ａ火山灰は、白頭山火山灰の堆積状態と比較するとごく少量である。特に第13号住居跡内のものは、粒径20mmほどのものが散在する程度で、検出状況を図化できるものではなかった。従って、純粋に住居を廃棄した後に十和田ａ火山灰が１次堆積をしたとは断定しがたく、住居跡周辺に残されていた微量のものが廃棄後に雨水・風等により覆土中に２次堆積を見せた可能性も考えられる。よって、ここでは十和田ａ火山灰が覆土中から検出された住居跡についても、十和田ａ火山灰降下前（西暦915年）という断定は避けたい。

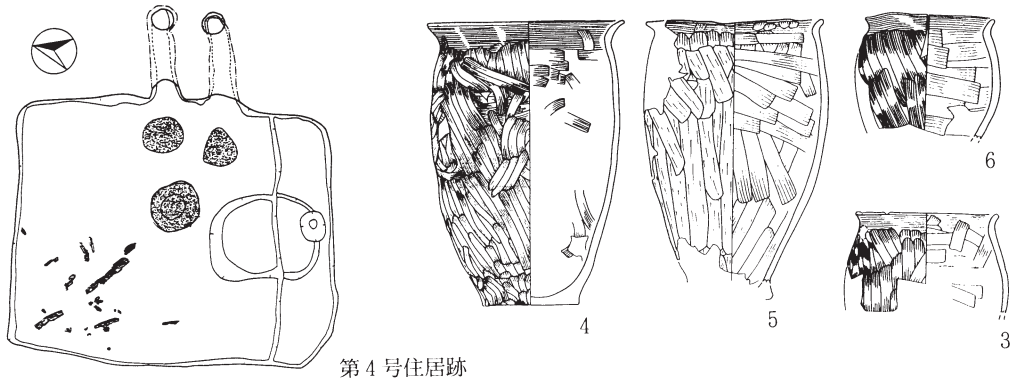
また、第10号住居跡は周辺から多量の十和田ａ火山灰が検出されている。この住居跡は台地の最南端縁辺部に位置することから、風の影響か何らかの理由で周辺にのみ堆積が顕著である。調査当時は周堤の可能性を考えて堆積範囲を図化したが、カマド煙出し方向にも堆積していること、どこまでもだらだらと堆積が続くこと、堆積状態の断面観察からも周堤の様相が認められないことから自然堆積のものと考えた。住居跡周辺に多量の堆積が認められているにも係わらず、覆土中からは検出されなかったことから、十和田ａ火山灰降下後に構築され、白頭火山灰降下前に廃棄されたものであると思われる。したがって、火山灰から極めて限られた期間を特定できる住宅跡であると言える。

以上の２点から住居跡構築時期についてのアプローチを試みたが、遺物・カマドに見られる住居跡構造・火山灰からはこれまでの土師器の編年に矛盾は認められなかった。また、十和田ａ・白頭山火山灰の堆積状況から、極めて限られた時期を特定できる資料も検出できたことは成果と言えよう。

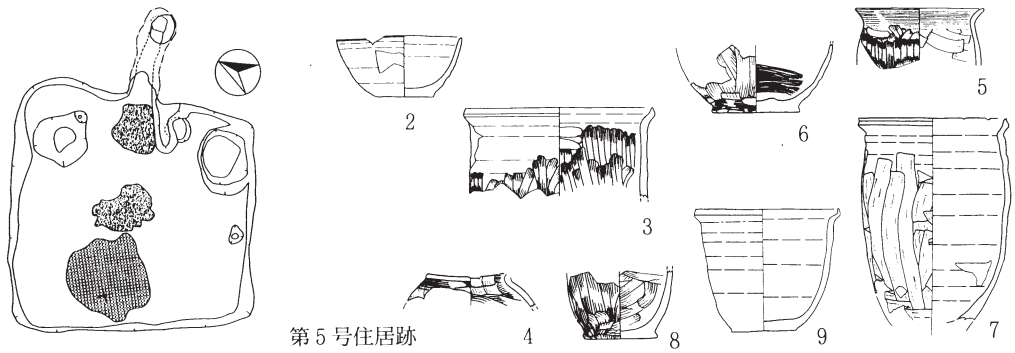
（増尾　知彦）



第151図　器高と底径の相関グラフ及びカマド主軸方位

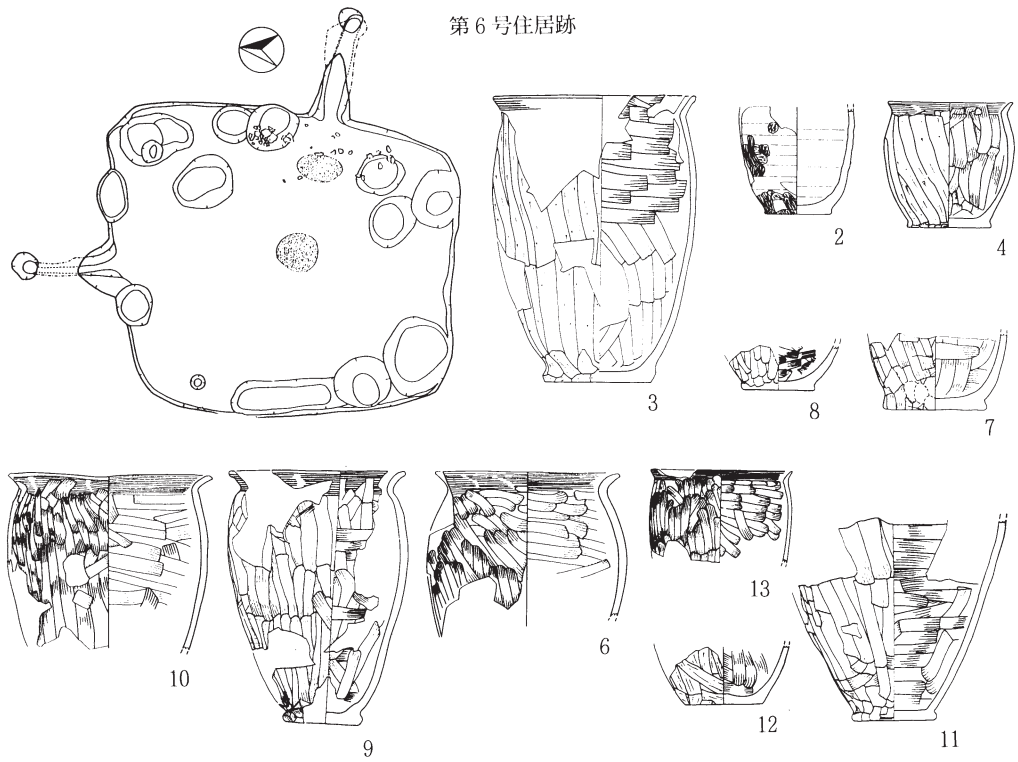


第4号住居跡

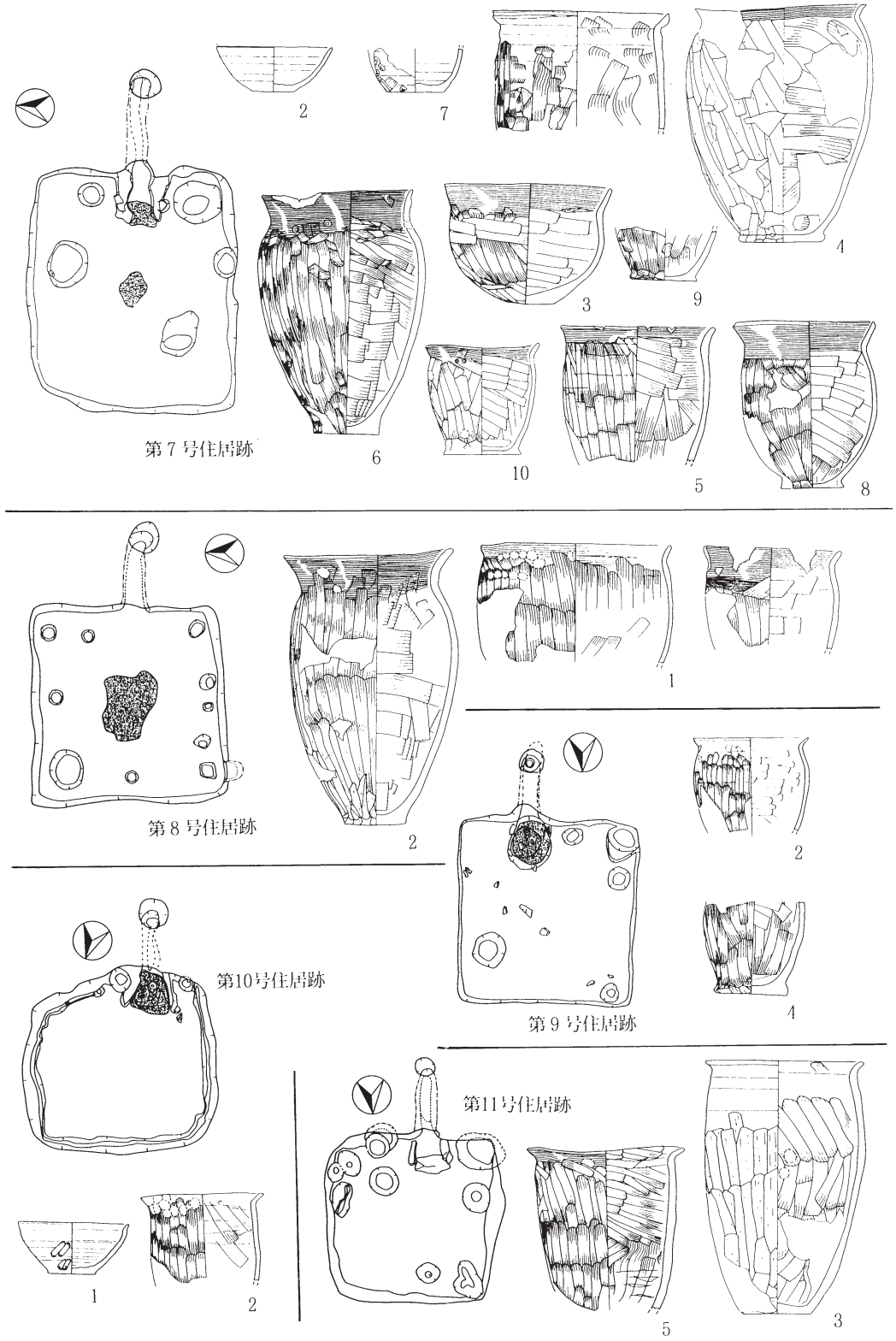


第5号住居跡

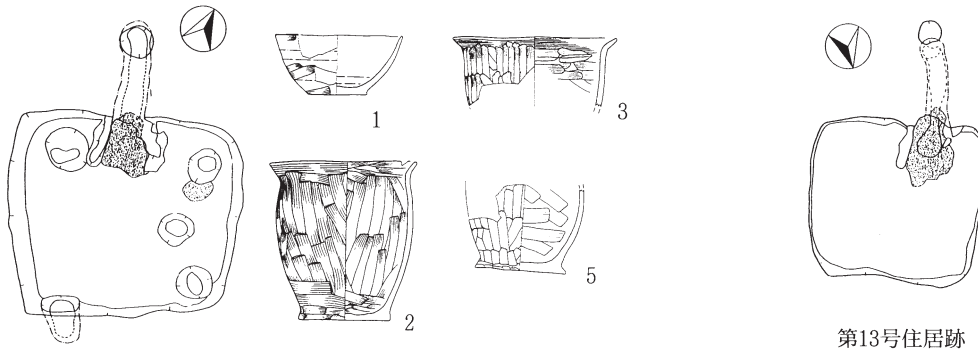
第6号住居跡



第152図



第153図



第154図

住居跡	平面形	面積 ㎡	主軸 方位	かまど 位置	かまど 煙道部	付属施設	周溝	降下火山灰	時期 (旧<新)を示す
4	長方形	11.19	N－77－E	東壁中央 東壁南側	旧 地下式 新 地下式	床面焼土	×	覆土中に白頭山火山灰	<白頭山火山灰 9c中～9c後半
5	台形	8.50	N－75－E	東壁中央	地下式	床面焼土	×	覆土中に白頭山火山灰	<白頭山火山灰 9c中～9c後半
6	隅丸方形	16.13	N－10－W S－88－E	北壁中央 東壁南側	旧 地下式 新 地下式	床面焼土	×	覆土中に白頭山火山灰	<白頭山火山灰 10c初～10c第2四半期
7	長方形	10.26	N－85－E	東壁中央	地下式	床面焼土	×	覆土中に白頭山火山灰	<白頭山火山灰 9c中～9c後半
8	方形	7.85	N－76－E	東壁中央	地下式	床面焼土 南壁に横穴	×	覆土中に白頭山火山灰	<白頭山火山灰 9c中～9c後半
9	方形	7.24	S－2－W	南壁東側	地下式		×	覆土中に十和田a人為 白頭山火山灰 自然	十和田a～白頭山までに廃棄 10c初～10c第2四半期
10	隅丸方形	6.28	S－20－E	南壁西側	地下式		○	十和田aを切って構築 覆土中に白頭山火山灰	十和田a以降構築白頭山までに廃棄 10c前～10c中
11	隅丸方形	5.59	S－2－W	南壁中央	地下式		×	覆土中に白頭山火山灰	<白頭山火山灰 10c初～10c第2四半期
12	台形	6.07	N－26－W	北壁中央	地下式	南壁に横穴	×	覆土中に十和田a・白頭山火山灰	<十和田a火山灰 10c初～10c第2四半期
13	方形	3.86	S－1－W	南壁西側	地下式		×	覆土中に十和田a・白頭山火山灰	<十和田a火山灰 10c初～10c第2四半期

平安時代の住居跡一覧表

《引用・参考文献》

青森県教育委員会　1975　『むつ小川原開発予定地域関係埋蔵文化財試掘調査概要』
青森県埋蔵文化財調査報告書　第24集

青森県教育委員会　1976　『千歳(13)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第27集

青森県教育委員会　1979　『むつ小川原開発予定地域埋蔵文化財試掘調査概要』
青森県埋蔵文化財調査報告書　第48集

青森県教育委員会　1980　『長七谷地貝塚』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第57集

青森県教育委員会　1981 a　『表館遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第61集

青森県教育委員会　1981 b　『鷹架遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第63集

青森県教育委員会　1984 a　『弥栄平(2)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第81集

青森県教育委員会　1984 b　『和野前山遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第82集

青森県教育委員会　1984 c　『牛ケ沢(3)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第86集

青森県教育委員会　1985 a　『大石平遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第90集

青森県教育委員会　1985 b　『表館遺跡Ⅱ』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第91集

青森県教育委員会　1985 c　『売場遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第93集

青森県教育委員会　1985 d　『発茶沢遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第96集

青森県教育委員会　1986 a　『大石平遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第97集

青森県教育委員会　1986 b　『沖附(1)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第100集

青森県教育委員会　1986 c　『沖附(2)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第101集

青森県教育委員会　1986 d　『大石平遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第103集

青森県教育委員会　1987　『弥栄平(4)(5)遺跡』
青森県埋蔵文化財調査報告書　第106集

青森県教育委員会　1988 a　『上尾駮(1)遺跡A地区』
青森県埋蔵文化財調査報告書　第112集

青森県教育委員会　1988 b　『上尾駮(1)遺跡C地区』
青森県埋蔵文化財調査報告書　第113集

青森県教育委員会　1988 c　『上尾駮(2)遺跡Ⅰ』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第114集

青森県教育委員会　1988 d　『上尾駮(2)遺跡Ⅱ』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第115集

青森県教育委員会　1988 e　『発茶沢(1)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第111集

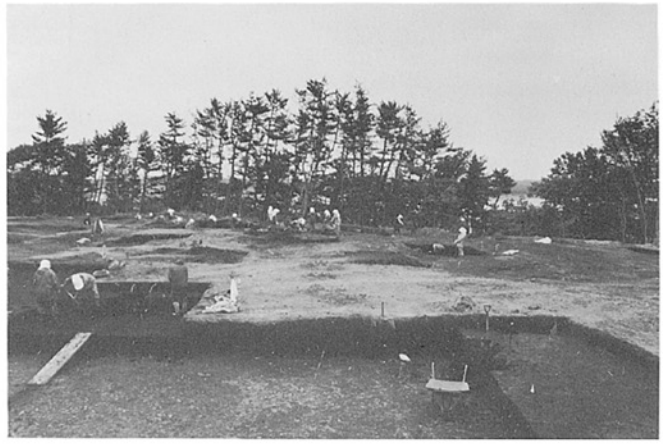
青森県教育委員会　1989 a　『表館(1)遺跡Ⅲ』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第120集

青森県教育委員会　1989 b　『発茶沢(1)遺跡Ⅳ』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第120集

青森県教育委員会　1990　『中野平遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第134集

青森県教育委員会　1993 a『家ノ前遺跡・幸畑(７)遺跡Ⅱ』
青森県埋蔵文化財調査報告書　第148集
青森県教育委員会　1993 b『小奥戸(1)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第154集
青森市蛍沢遺跡発掘調査団　1979　『蛍沢遺跡』
秋田県教育委員会　1990　『はりま館遺跡発掘調査報告書』
秋田県文化財調査報告書　第192集
石川日出志　1990　「天王山武士器編年研究の問題点」『北越考古学』第３号
一戸町教育委員会　1982　『上野遺跡』　一戸町文化財調査報告書　第　集
一戸町教育委員会　1984　『上野遺跡』　一戸町文化財調査報告書　第７集
一戸町教育委員会　1985　『上野遺跡』　一戸町文化財調査報告書　第13集
伊東　信雄　1960 a「東北地方の弥生式文化」『第２巻第４号
伊東　信雄　1960 b「東北北部の弥生式土器」『文化』第24巻第１号
大沼　忠春　1982　「後北式土器」『縄文土器大成』５　続縄文
小田野哲憲　1985　「岩手県新里村和井内東遺跡出土の土器」『日高見国』
小田野哲憲　1987　「岩手の弥生式土器編年試論」
『岩手県立博物館研究報告』第５号
菊池　徹夫　1982　「恵山式土器」『縄文土器大成』５続縄文
斉藤　邦雄　1993　「岩手県にみられる後北式土器と在地弥生土器について」
『岩手考古学』第５号
佐藤　信行　1976　「東北地方の後北式文化」『東北考古学の諸問題』
佐藤　嘉広　1991　「土器」岩手考古学会研究大会発表資料
佐藤　嘉広・伊藤　博幸　1992　「岩手県水戸市橋本遺跡出土土器について」
『岩手県立博物館研究報告』第10号
澤　四郎　1982　「北海道の続縄文文化」『縄文土器大成』５　続縄文
縄文文化検討会　1986　『東北地方北部の縄文時代中期末葉～後期前半の
土器編年について』
縄文文化検討会　1987　『東北地方の弥生式土器の編年について』
縄文文化検討会　1989　『東北・北海道における縄文時代早期中葉から
前期初頭にかけての土器編年について』
須藤　隆　1970 a「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」
『考古学雑誌』第56巻第２号

須藤　　隆　　1970ｂ「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」
『文化 』第33巻33巻第３号
須藤　　隆　　1982　「北辺の弥生文化」『縄文土器大成』５　続縄文
須藤　　隆　　1983　「弥生文化の伝藩と恵山文化の成立」『考古学古代史論叢Ⅰ』
須藤　　隆　　1990　「東北地方における弥生文化」『考古学古代史論攷』
瀬棚町教育委員会　1983　『瀬棚南川』
高橋亜貴子　　1992　「東北地方縄文時代前期前葉組縄縄文について」
『東北文化論のための先史学歴史学論集』
滝沢村教育委員会　1986ａ『湯舟沢遺跡』　　滝沢文化財調査報告書　第２集
滝沢村教育委員会　1986ｂ『耳取遺跡』　　滝沢村文化財調査報告書　第３集
滝沢村教育委員会　1987　『仏沢Ⅲ遺跡』　　滝沢村文化財調査報告書　第５集
橘　　善光　　1977　『下北の古代文化』下北の歴史と文化を語る会
橘　　善光　　1983　「東北北部」『弥生土器Ⅱ』佐原　真編、ニューサイエンス社
（初出『考古学ジャーナル』NO160、162、166、168の各号に掲載）
千代　　肇　　1982　「道南地方の土器」『縄文文化の研究』６縄文・南島文化
坪井　清足　　1953　「福島県天王山遺跡の弥生式土器－東日本弥生文化の性格」
『史林』第36巻第１号
東北考古学　　1982　『瀬野遺跡』
中村　五郎　　1976　「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』
中久井文明　　1971　「青森県芦野遺跡の土器群について」『考古学雑誌』
第57巻第２号
成田　滋彦　　1986　「切断蓋付土器考」『弘前大学考古学研究』第３号
福島県教育委員会　1990　「能登遺跡」『東北横断自動車遺跡調査報告10』
福島県文化財調査報告書　第242号
福島県教育委員会　1991　「和泉遺跡」『東北横断自動車遺跡調査報告13』
福島県文化財調査報告書　第263号
福島県立博物館　　1993　『東北から弥生文化』
馬目　順一　　1983　「東北南部」『弥生土器Ⅱ』佐原　真編、ニューサイエンス社
（初出『考古学ジャーナル』NO148、151、154、156、159の各号に掲載）
山内　清男　　1979　『日本先史土器の縄文』先史考古学会
弥生時代研究会　　1990　『天王山式期をめぐって」の検討会記録集』
陸前高田市教育委員会　1986　『山崎遺跡発掘調査報告書』



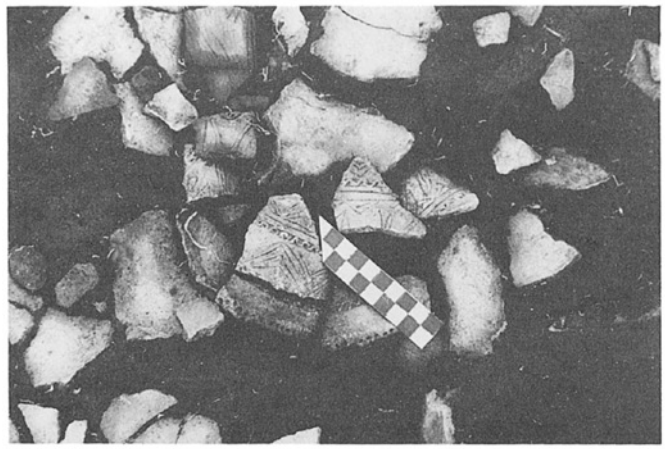
作業風景

全　　景

土　坑　群
（第１号～第15号土坑）

作業風景・土坑群

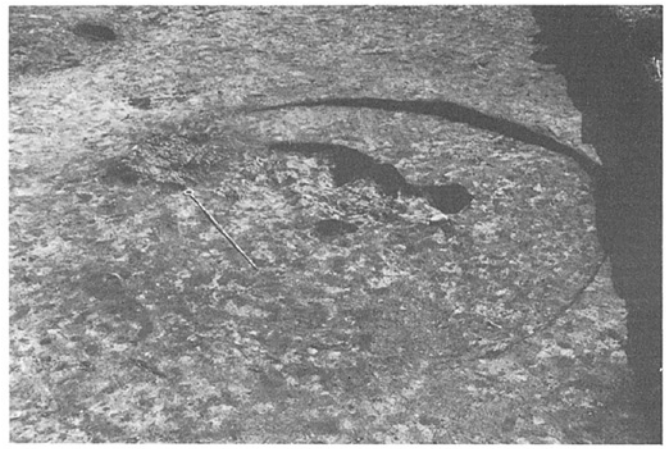
第１号集石



遺物出土状況
（弥生時代・壺形土器）

遺物出土状況

第１号集石・遺物出土状況



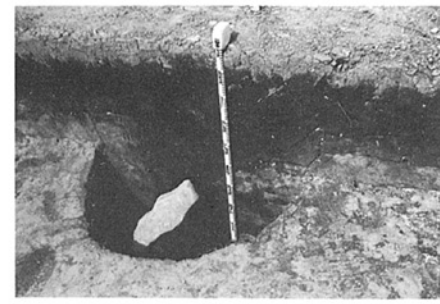
第１号住居跡

第２号住居跡

第２号住居跡
ピットのセクション

第１号・第２号住居跡

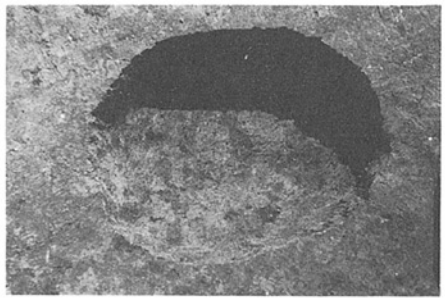
第3号土坑



第3号セクション

第2号土坑

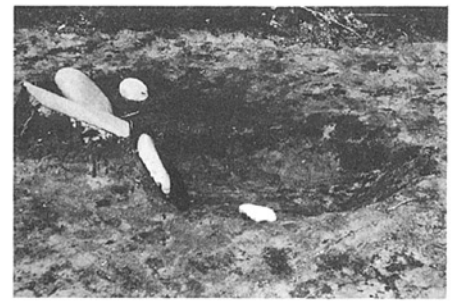
第4号土坑



第5号土坑

第6号土坑

第8号土坑

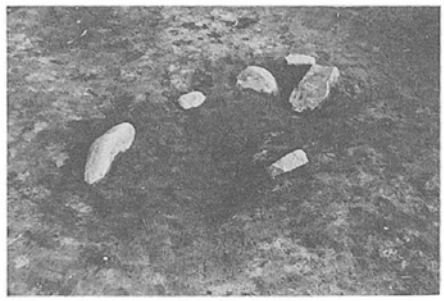


第8号土坑セクション

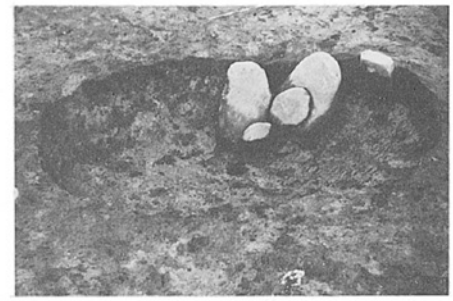
第2号・3号・4号・5号・6号・8号土坑

第９号土坑確認面

第９号土坑

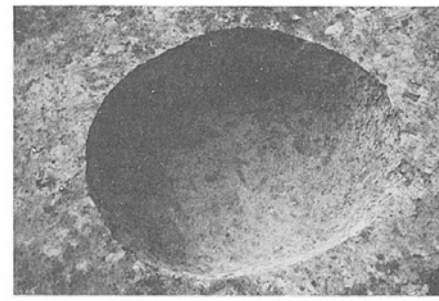


第11号土坑確認面

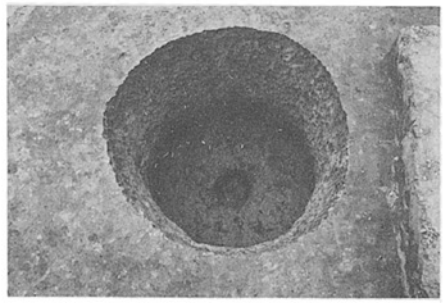


第11号土坑

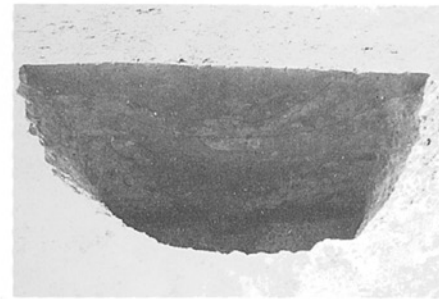
第12号土坑



第14号土坑



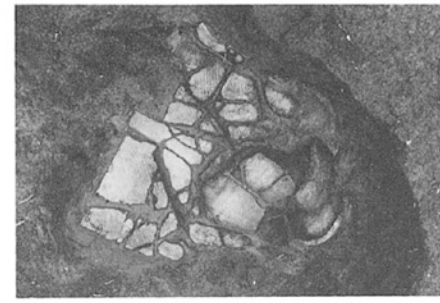
第61号土坑



第61号土坑セクション

第９号・11号・12号・14号・61号土坑

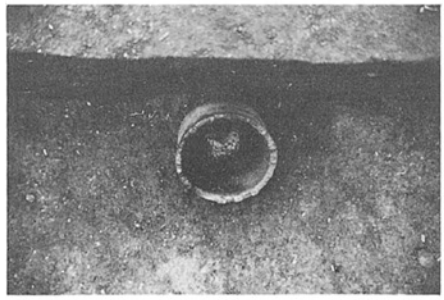
第34号土坑



第34号土坑土器出土状況

第43・44号土坑

第43号土坑

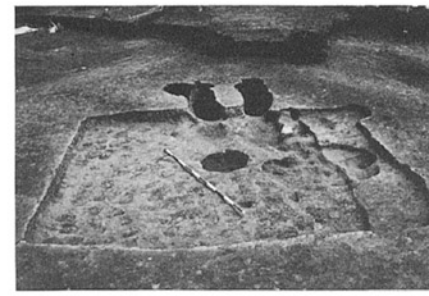


第33号土坑土器出土状況

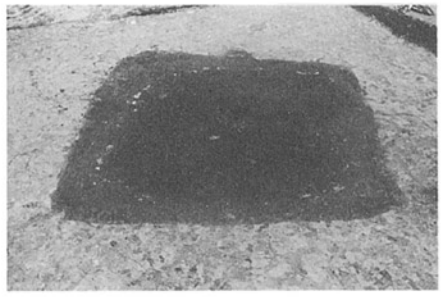
第19号土坑

第34号・43号・33号・19号土坑

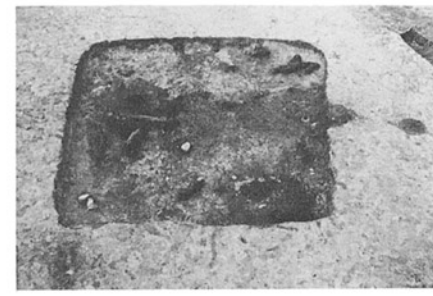
第４号住居跡　炭化物出土状況



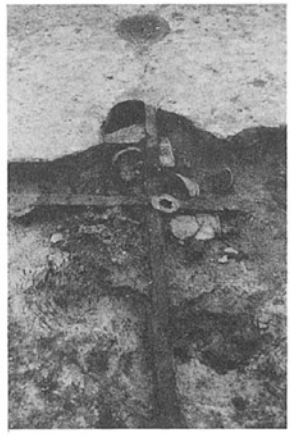
第４号住居跡　完掘



第５号住居跡　確認状況



第５号住居跡　炭化物出土状況

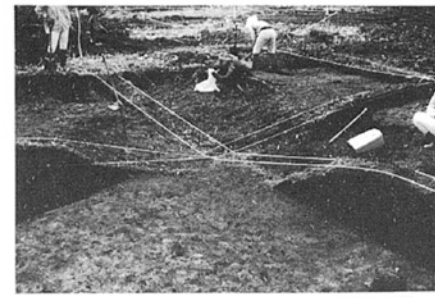


第５号住居跡　カマド

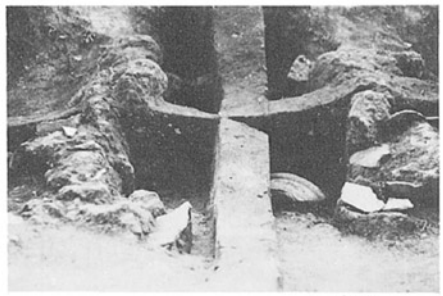
第６号住居跡　完掘

第４号・５号・６号住居跡

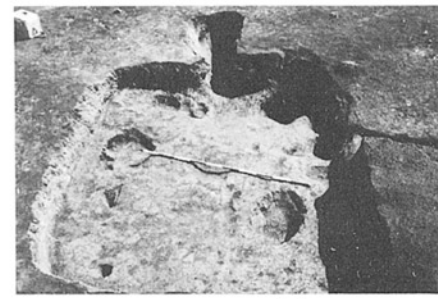
埋まりきらない住居跡群



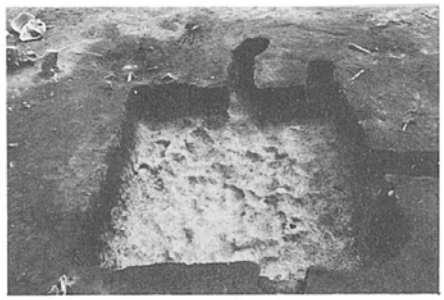
埋まりきらない住居跡（第７号住居跡）



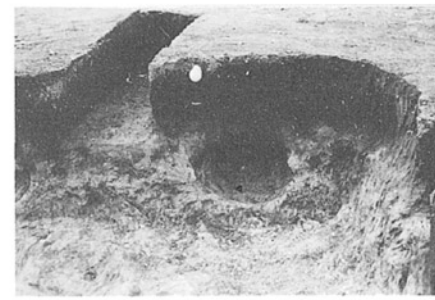
第７号住居跡　カマド遺物出土状況



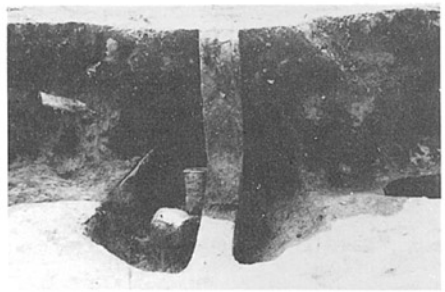
第７号住居跡　完掘



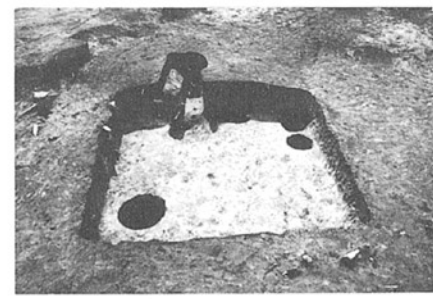
第８号住居跡　完掘



第８号住居跡　横穴



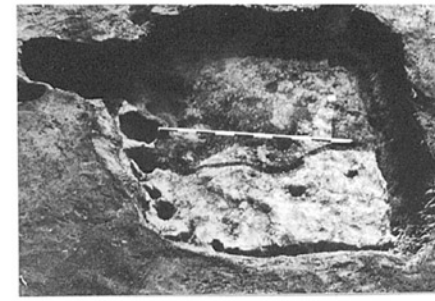
第９号住居跡　カマド支脚



第９号住居跡　完掘

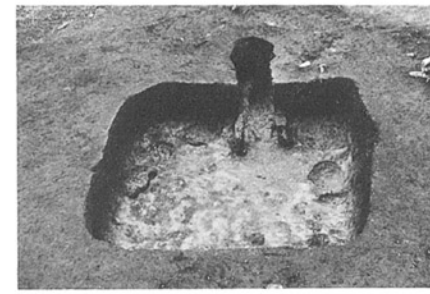
第７号・８号・９号住居跡

第10号住居跡　カマド支脚(坏)

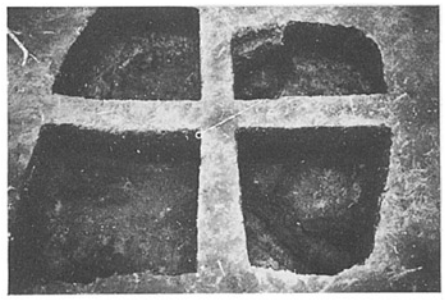


第10号住居跡　完掘

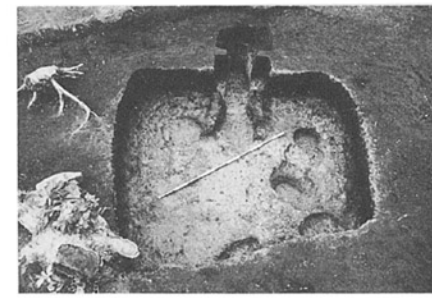
第11号住居跡　カマド



第11号住居跡　完掘



第12号住居跡　炭化物出土状況

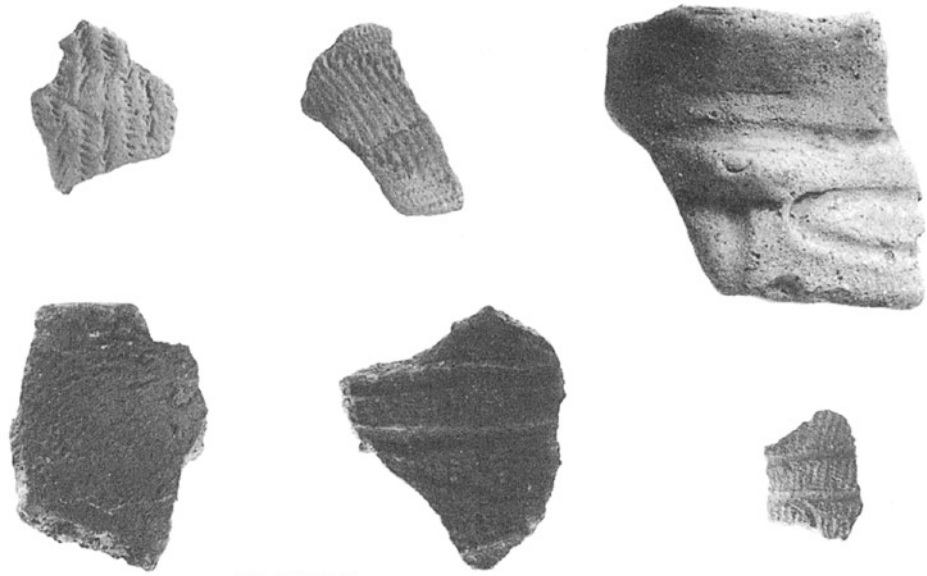


第12号住居跡　完掘

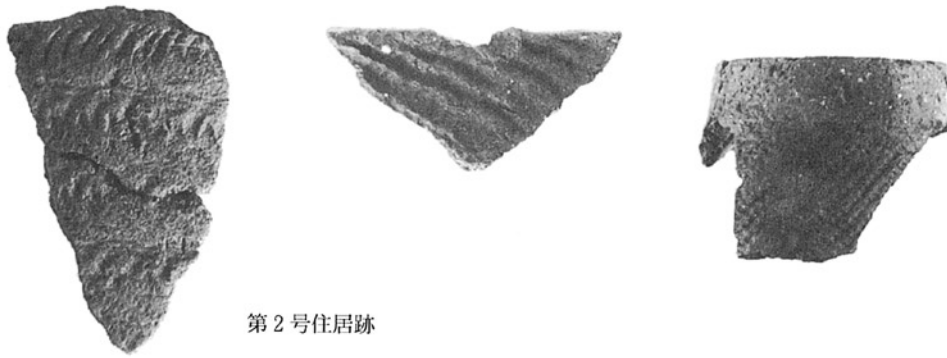
第13号住居跡　火山灰検出状況
(白いのが白頭山火山灰)

第13号住居跡　完掘

第10号・11号・12号・13号住居跡



第 1 号住居跡



第 2 号住居跡

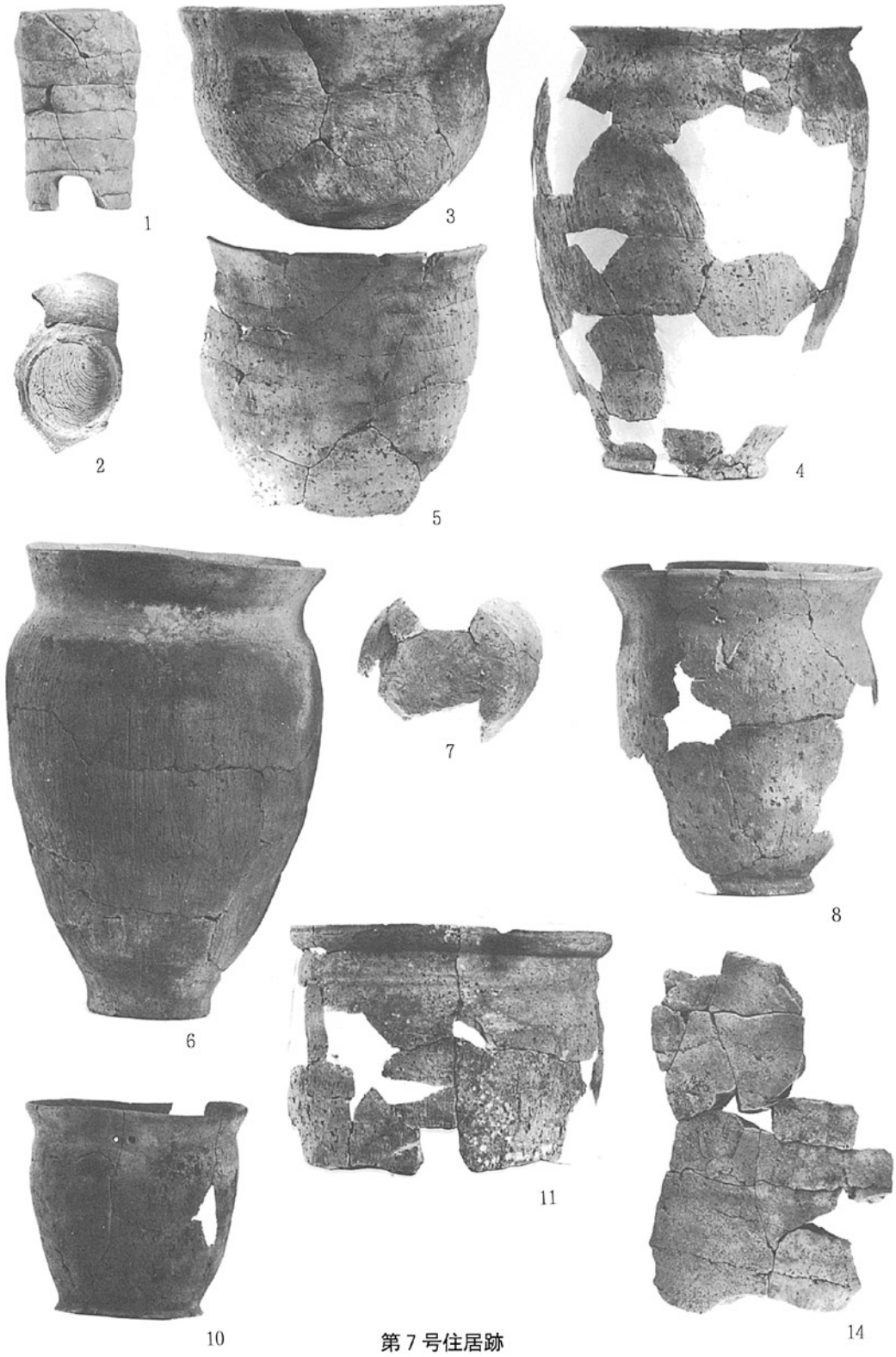
第 3 号住居跡

第 1 号～第 3 号住居跡

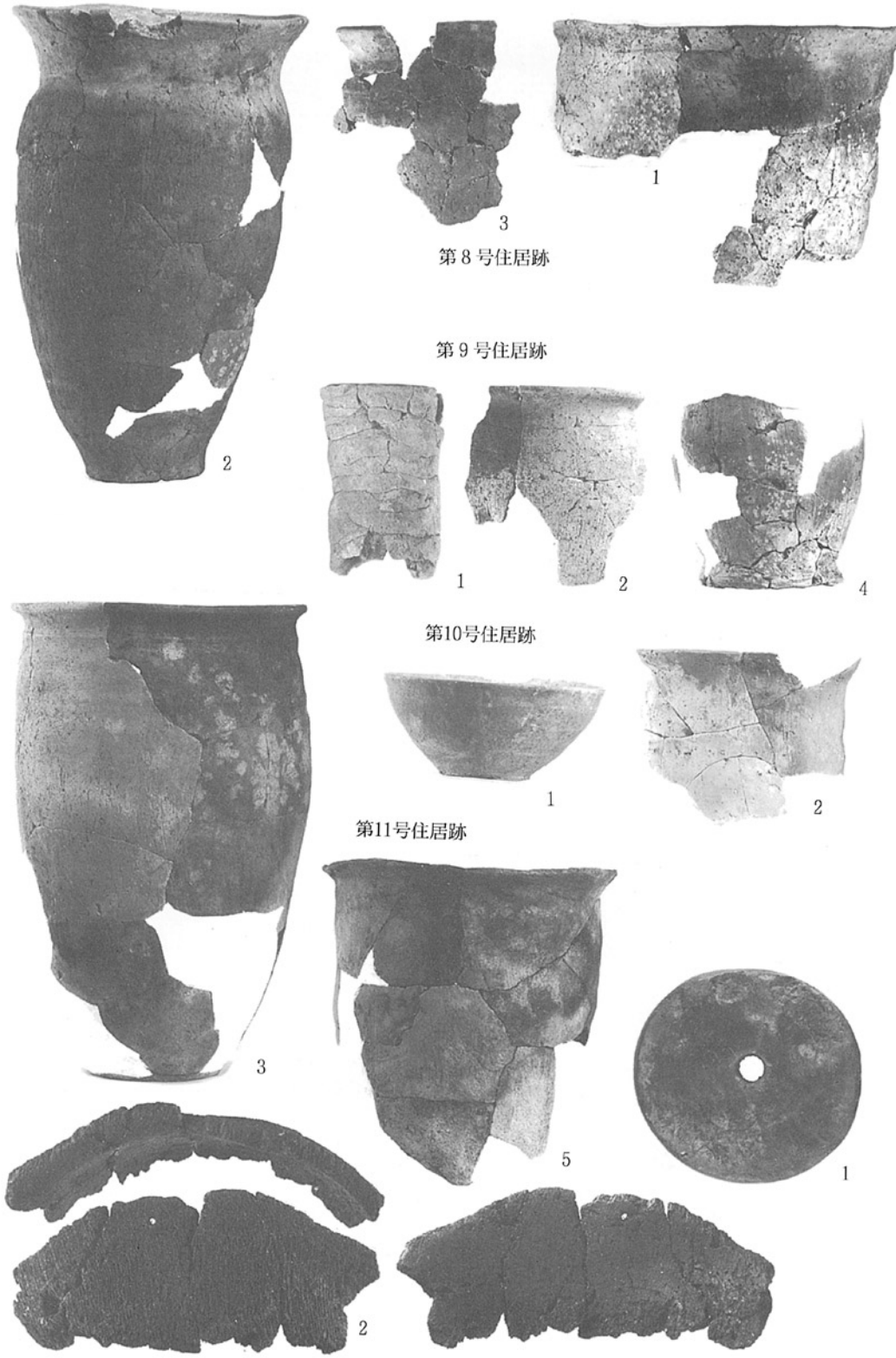
第４号住居跡

第５号住居跡

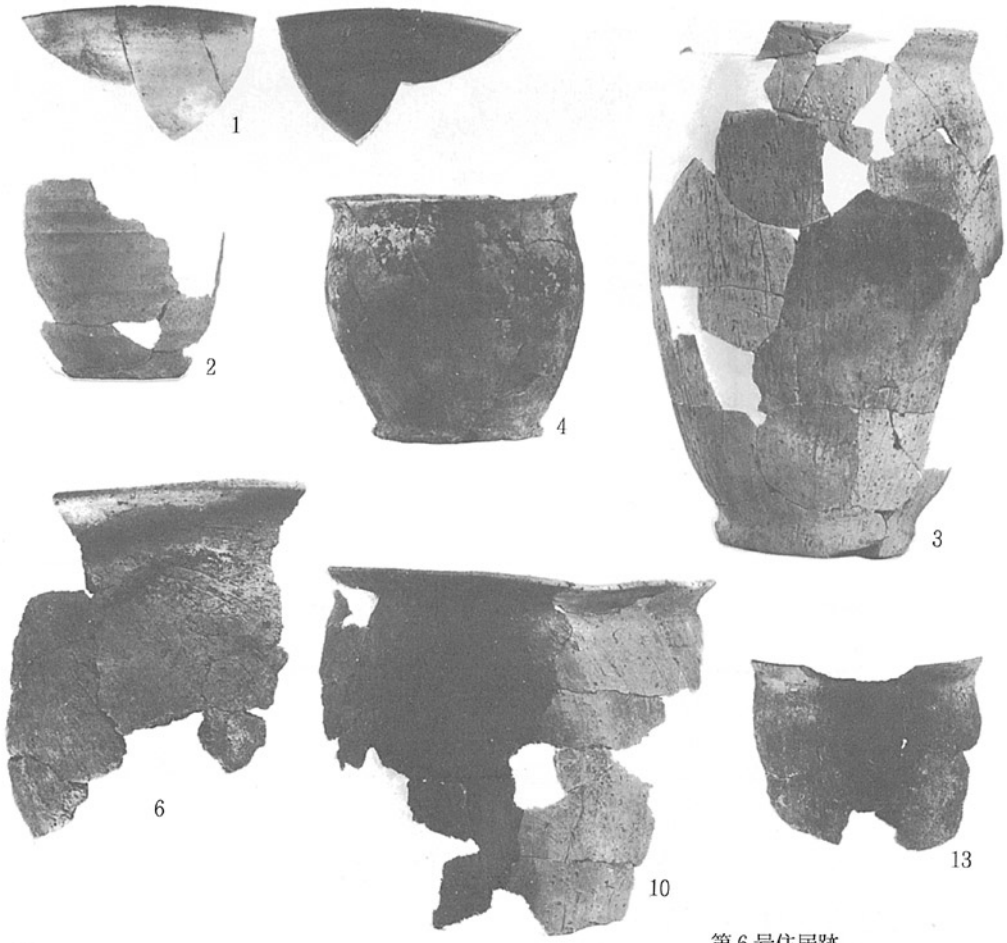
第４号・５号住居跡



第７号住居跡



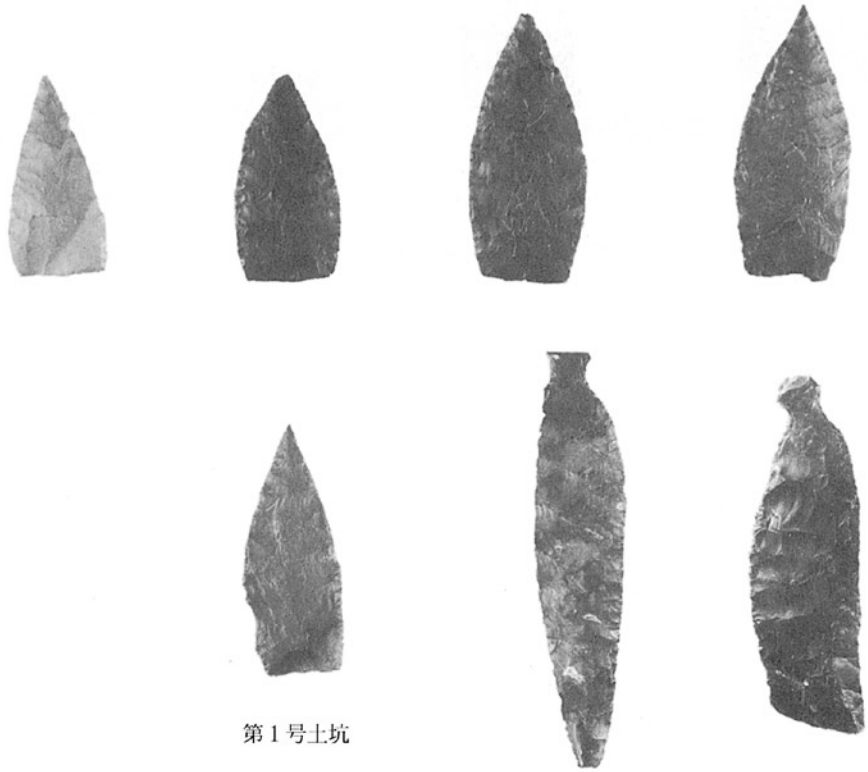
第８号・９号・10号・11号住居跡



第６号住居跡

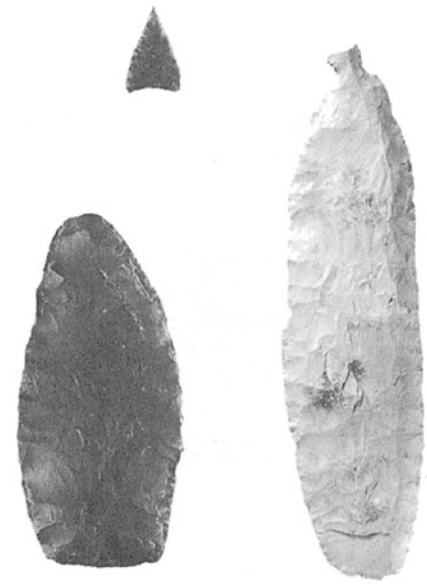
第12号住居跡

第６号・12号住居跡



第１号土坑

第２号土坑

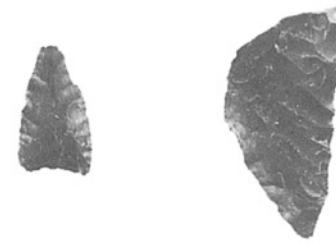


第６号土坑

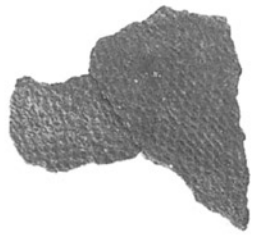
第１号・第２号・第６号土坑

第８号土坑

第９号土坑



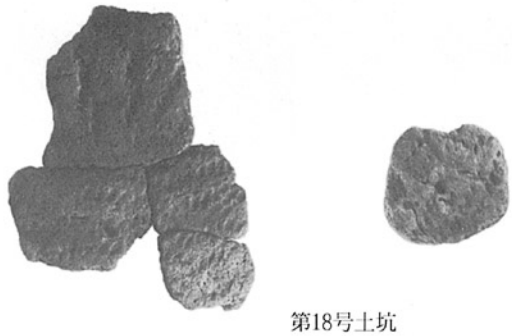
第14号土坑



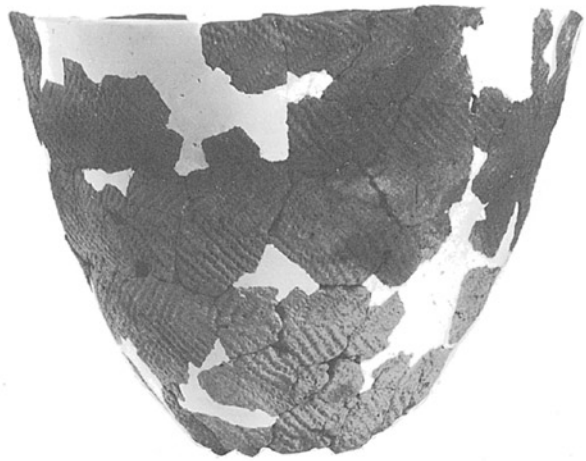
第15号土坑

第16号土坑

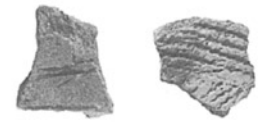
第８号・第９号・第14号～第16号土坑



第18号土坑



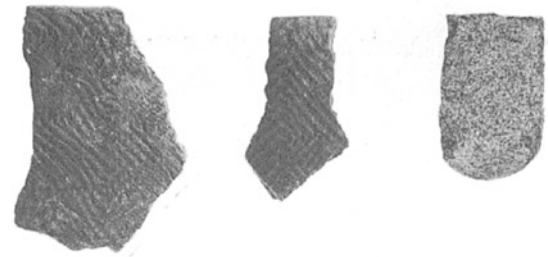
第19号土坑



第20号土坑

第18号～第20号土坑

第22号土坑

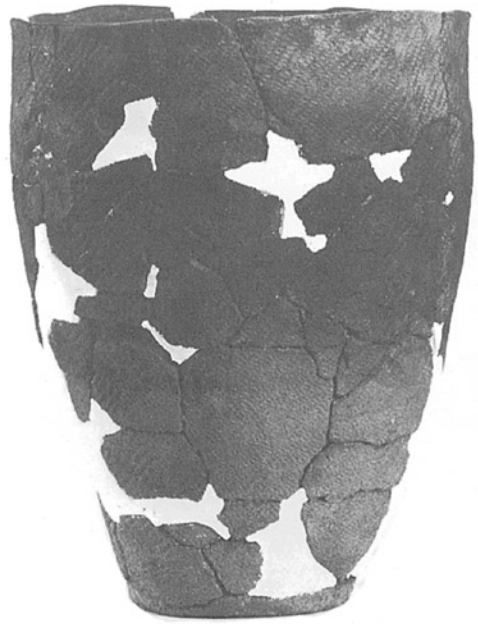


第29号土坑

第33号土坑

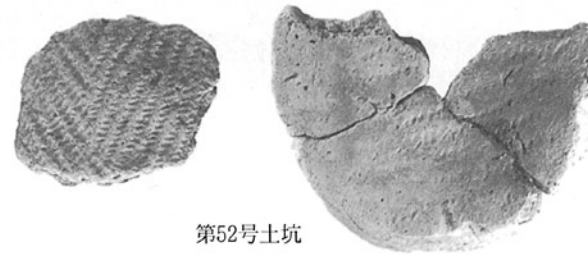
第34号土坑

第22号・第29号・第33号・第34号土坑



第34号土坑

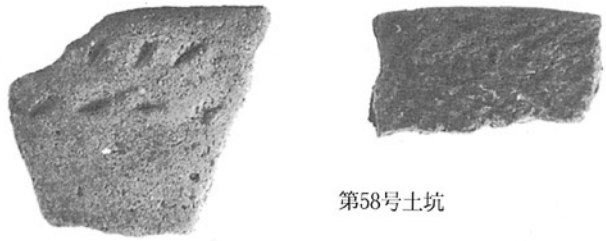
第46号土坑



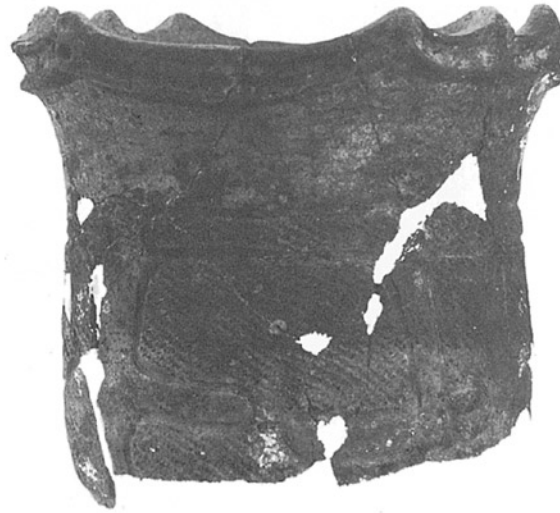
第52号土坑

第56号土坑

第57号土坑

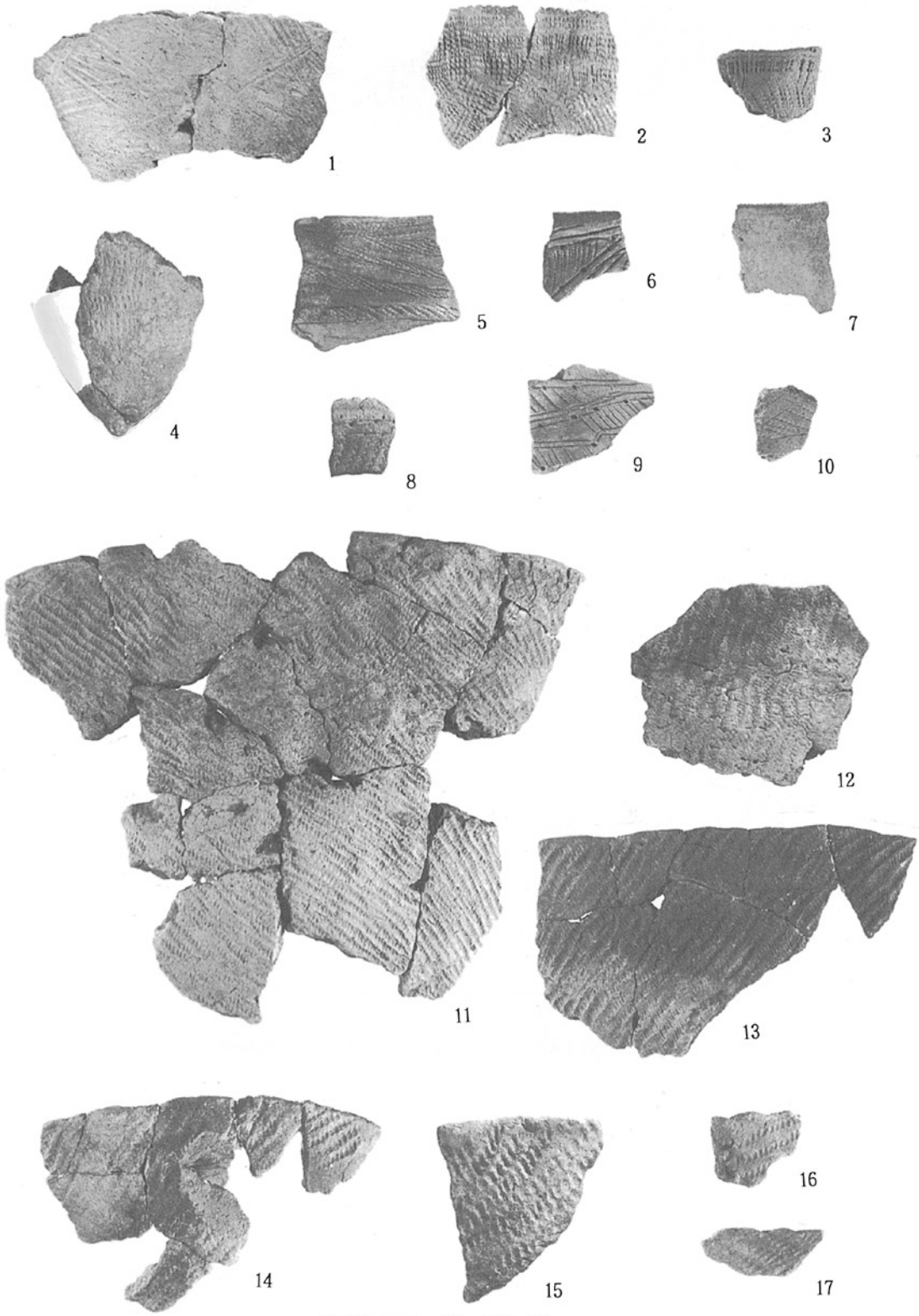


第58号土坑

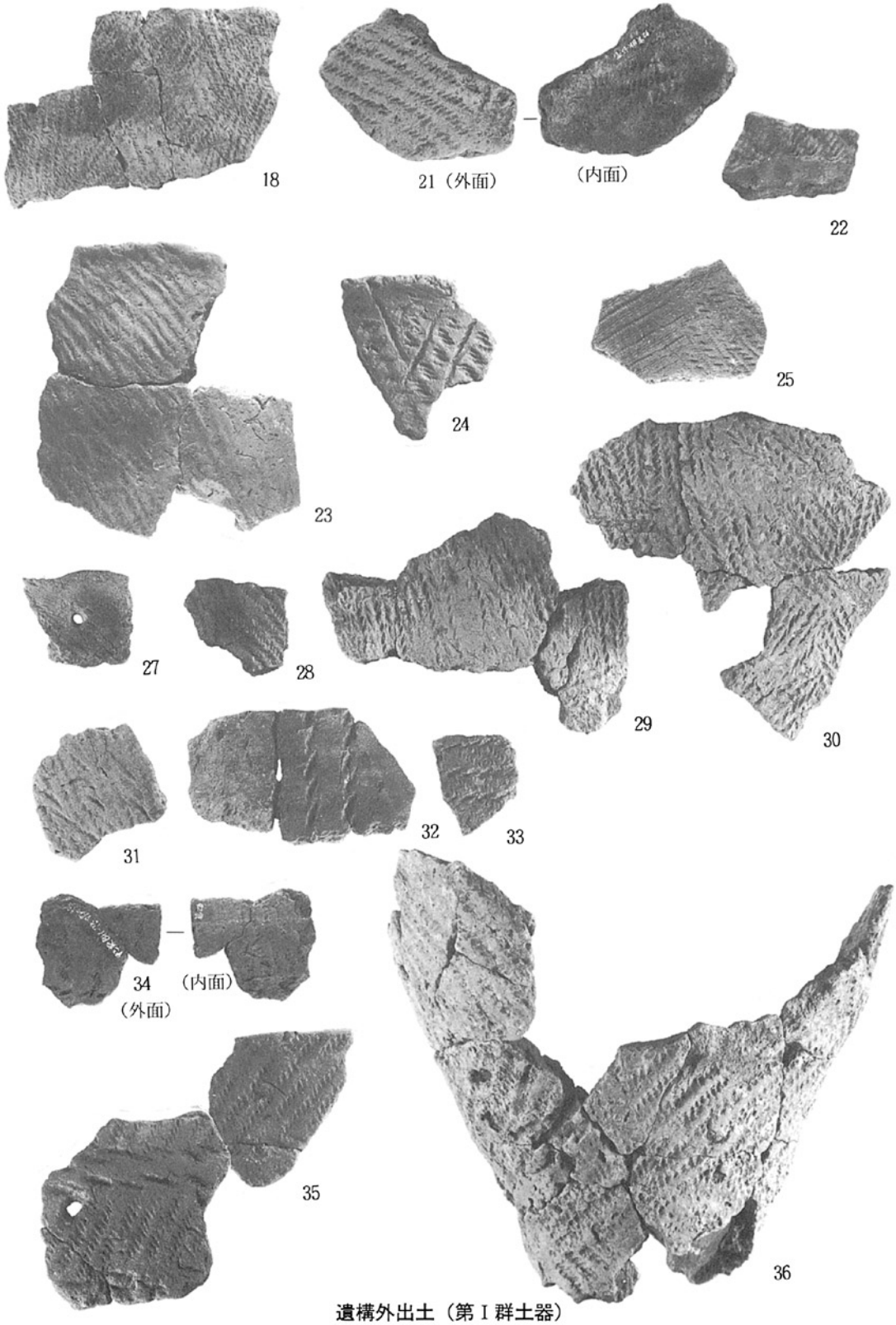


第１号埋設土器

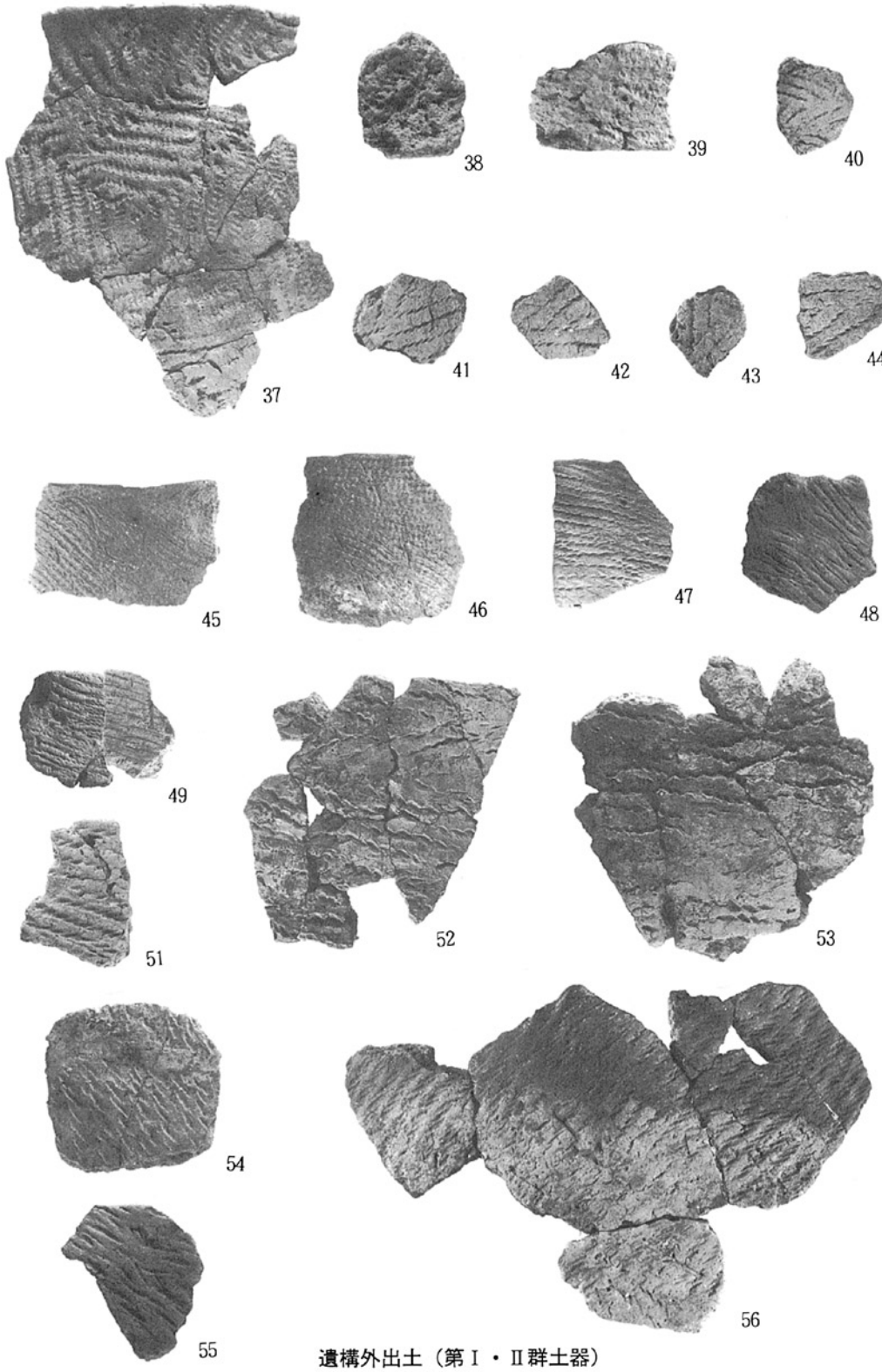
第46号・第52号・第56号・第58号土坑・第１号埋設土器



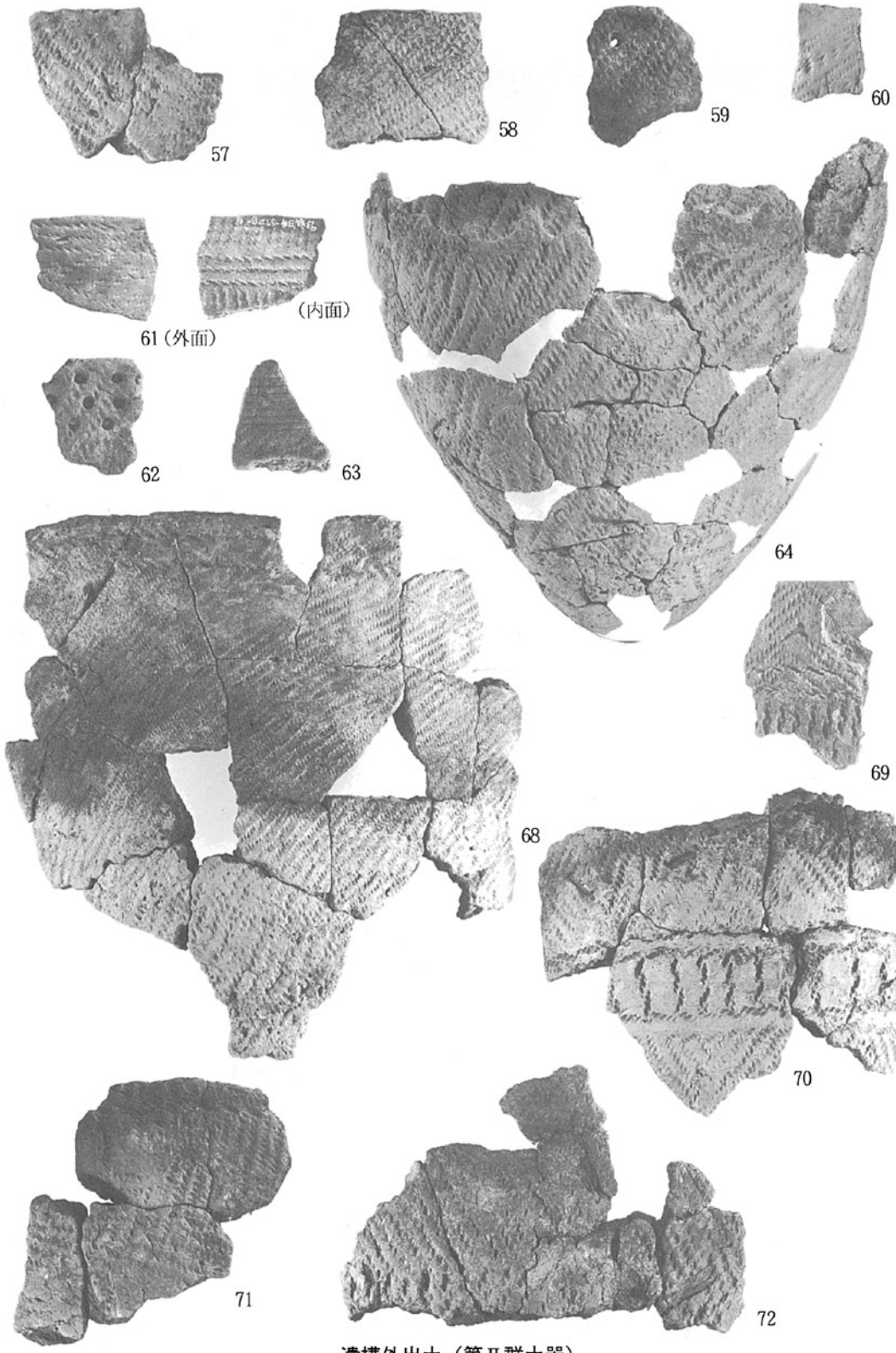
遺構外出土（第Ⅰ群土器）



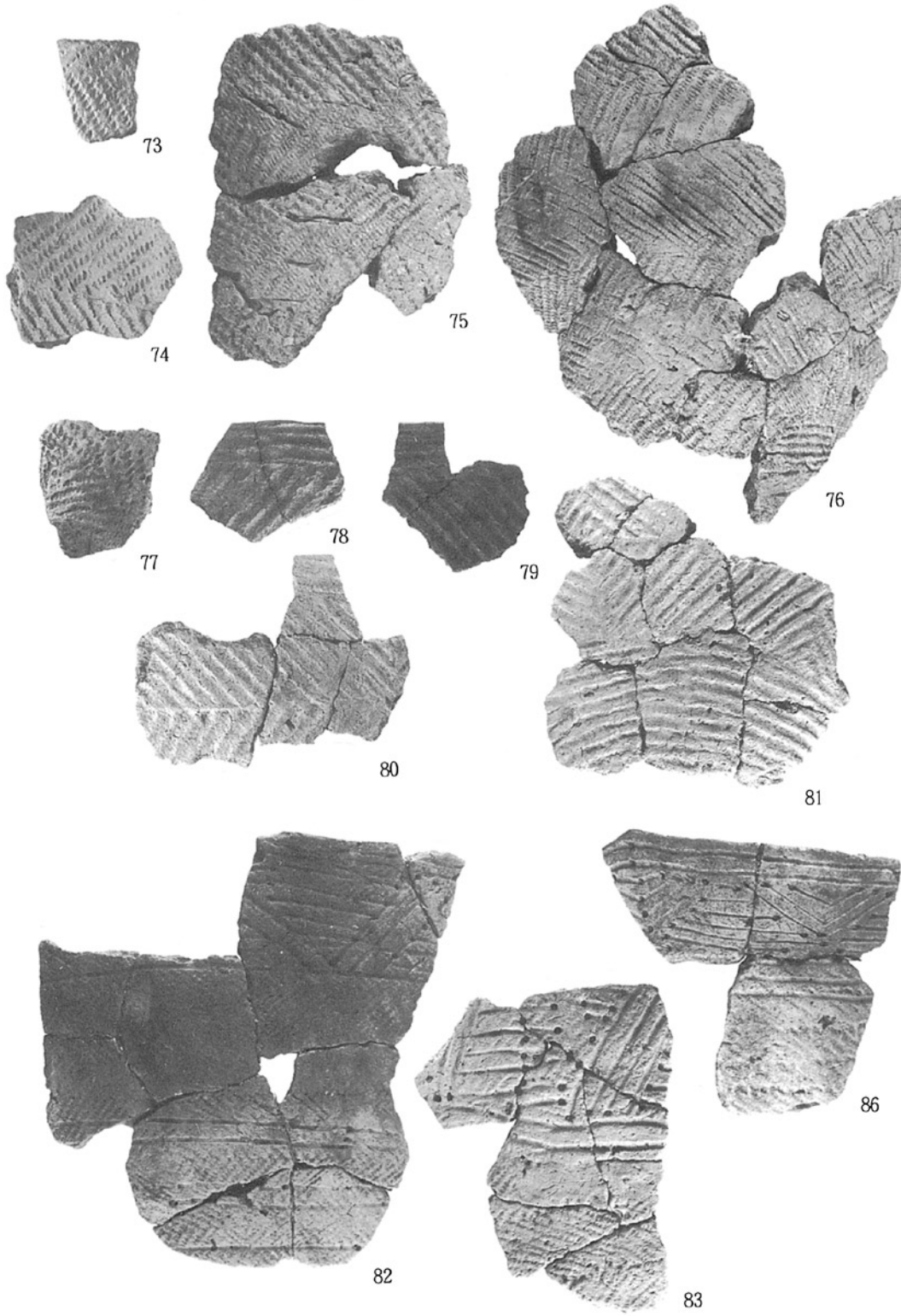
遺構外出土（第Ⅰ群土器）



遺構外出土（第Ⅰ・Ⅱ群土器）

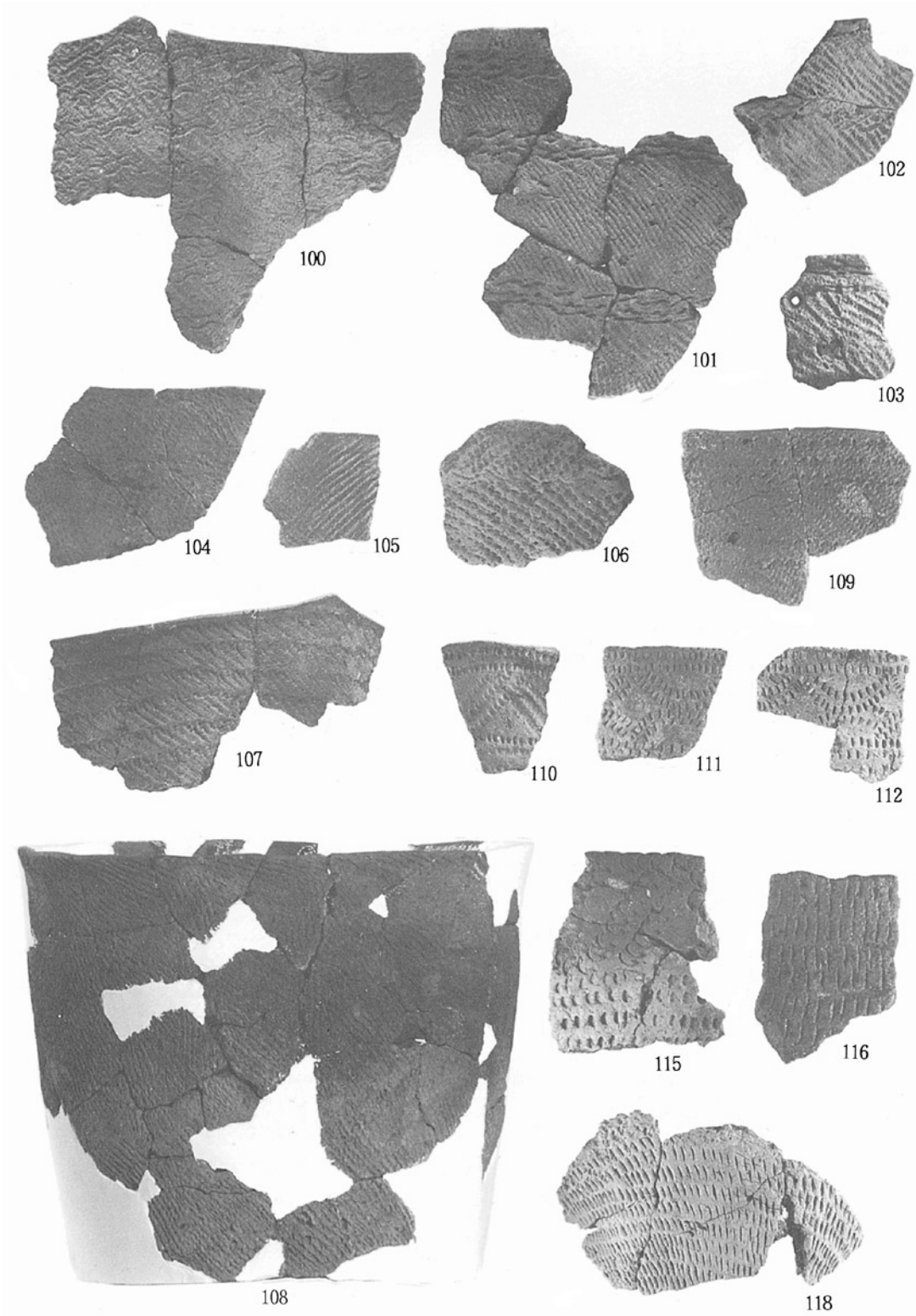


遺構外出土（第Ⅱ群土器）

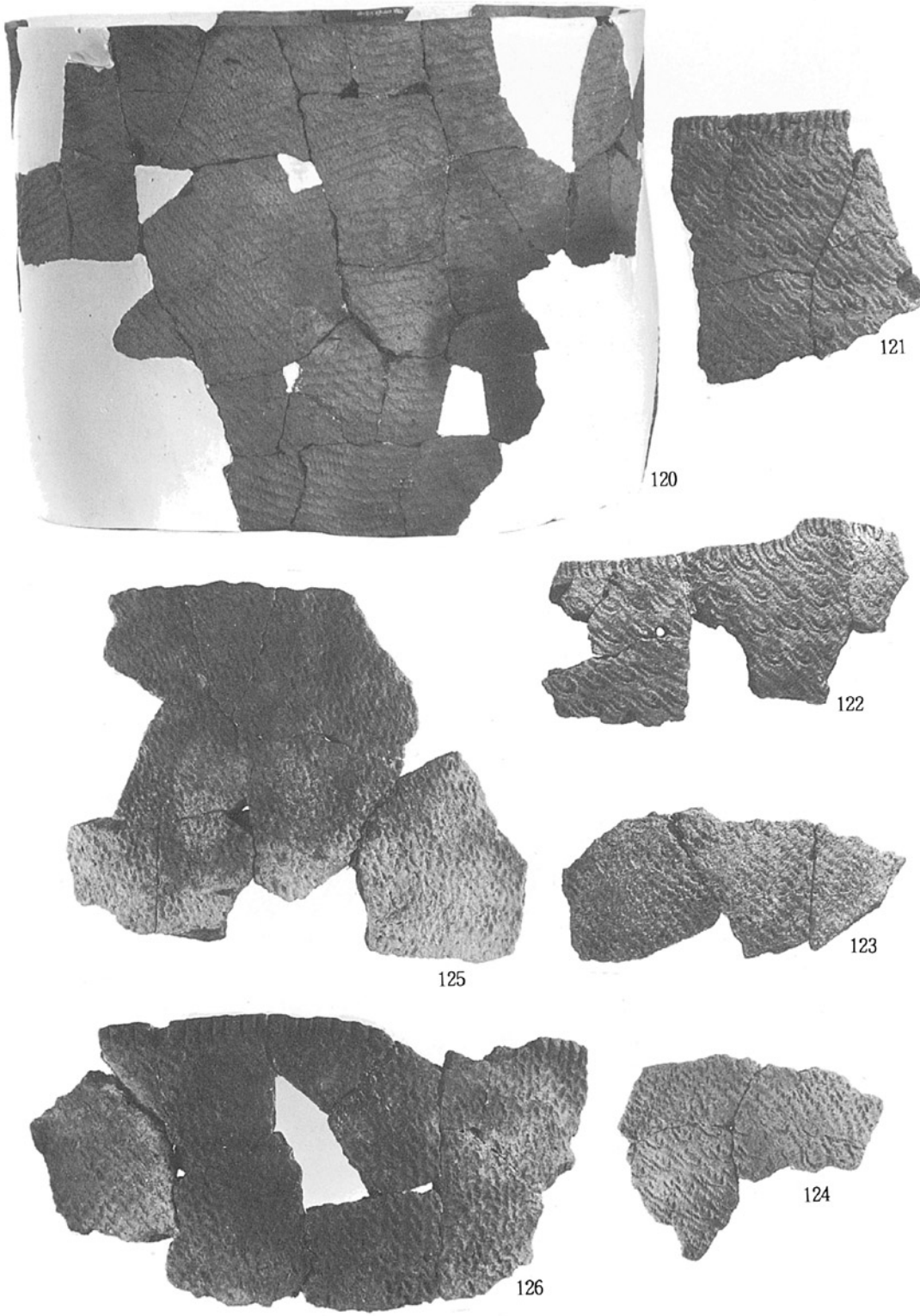


遺構外出土（第Ⅱ・Ⅲ群土器）

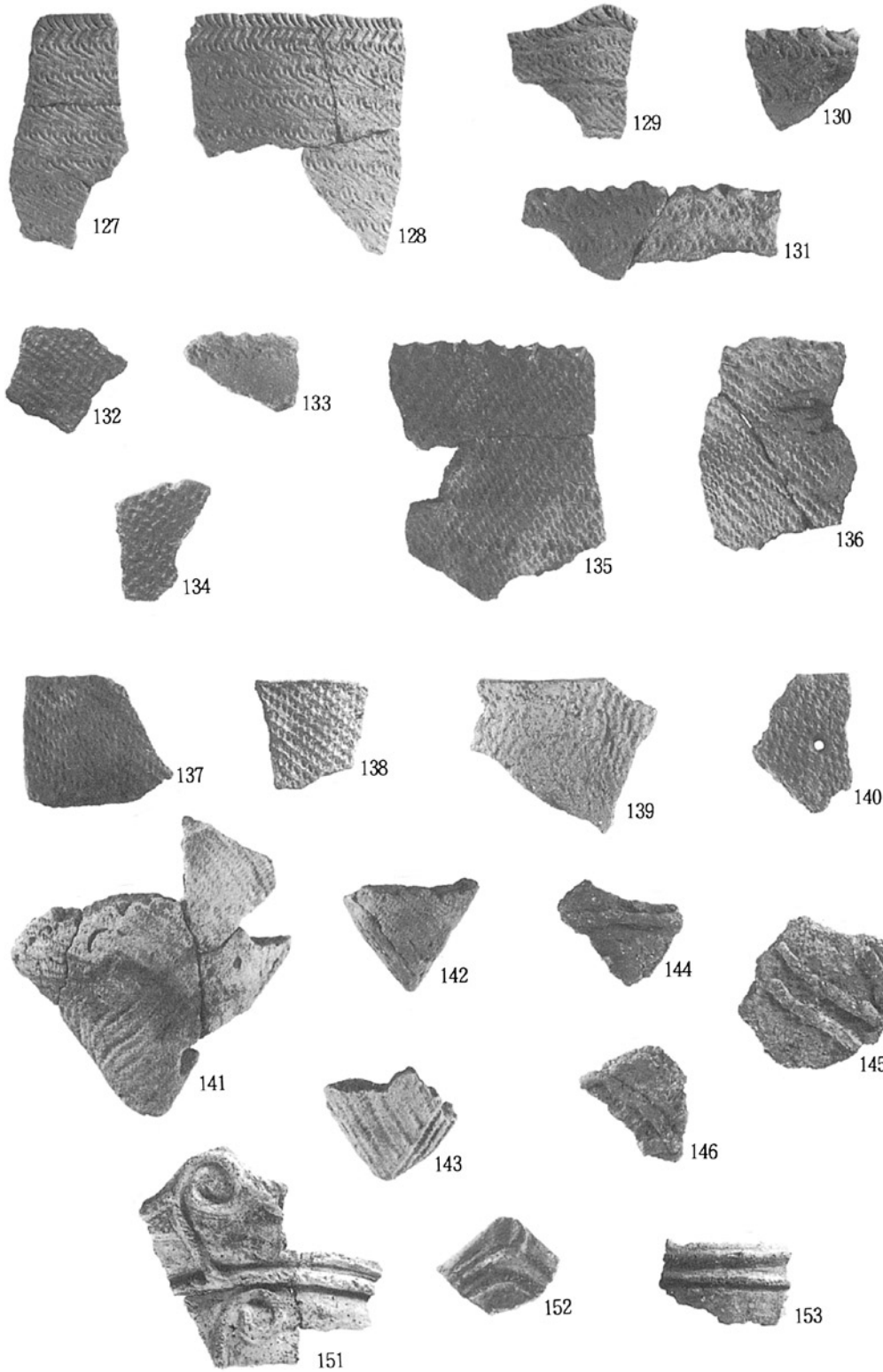
遺構外出土（第Ⅲ群土器）



遺構外出土（第Ⅲ群土器）



遺構外出土（第Ⅲ群土器）



遺構外出土（第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ群土器）

157

158

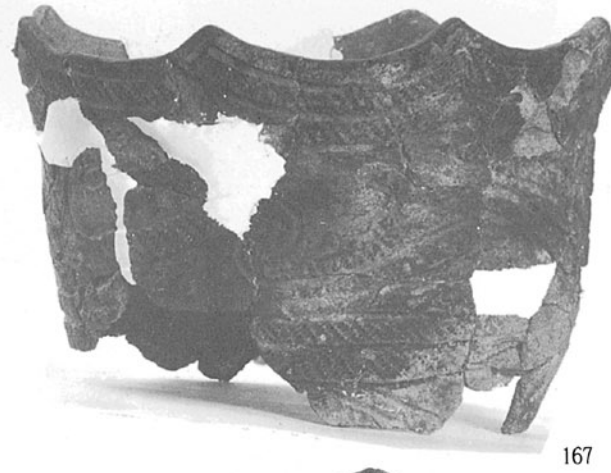
160

161

162

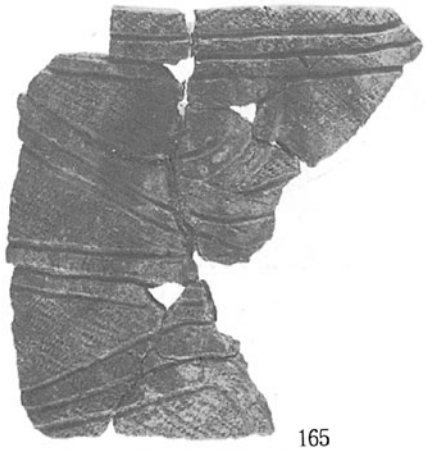
遺構外出土（第Ⅴ群土器）

163


167

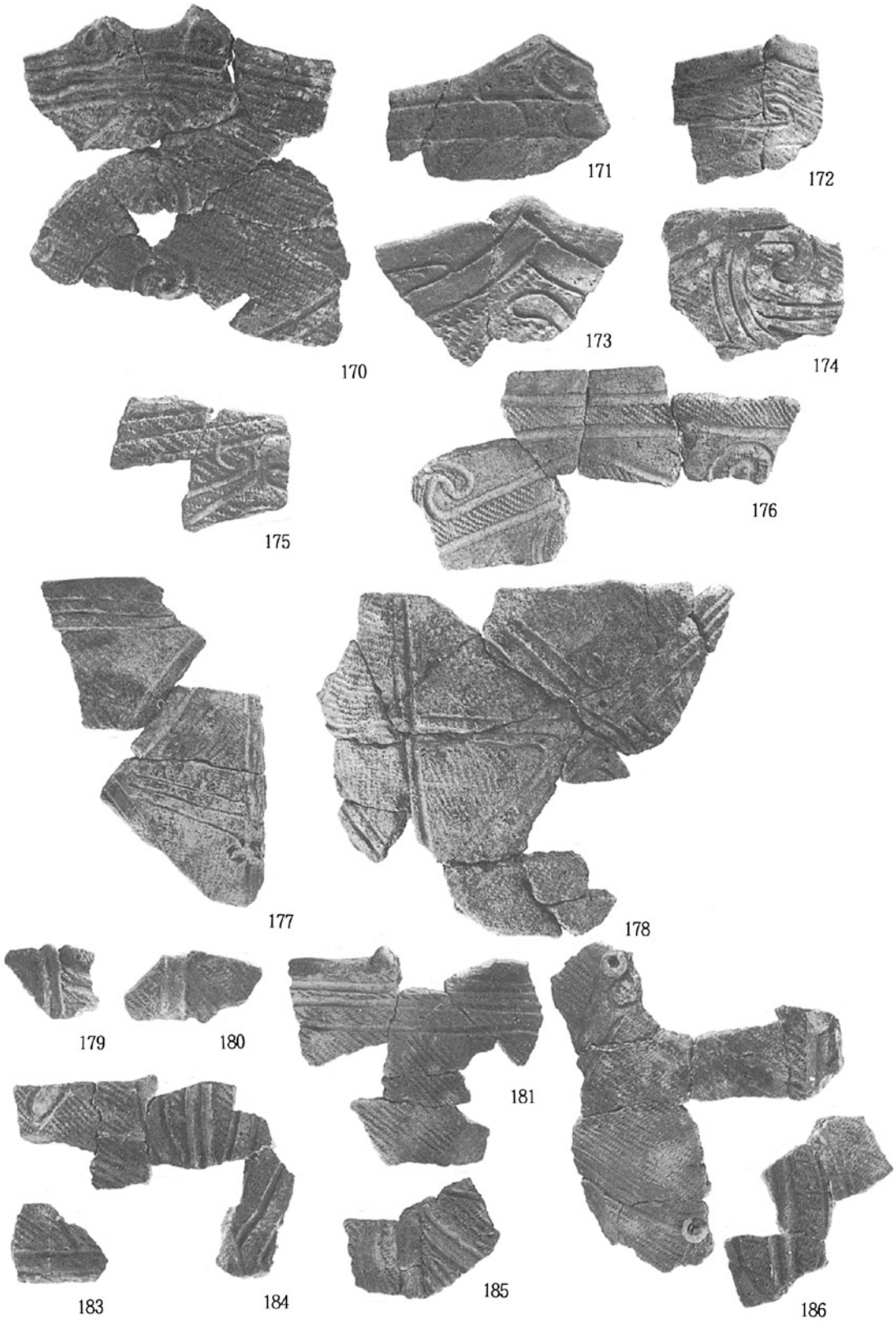
164

168


165

169

遺構外出土（第Ⅴ群土器）



遺構外出土（第Ⅴ群土器）

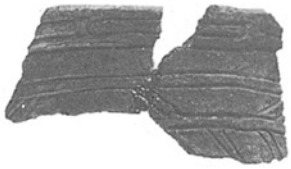
194

189

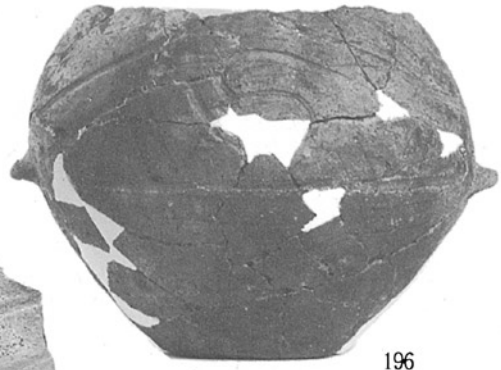
190

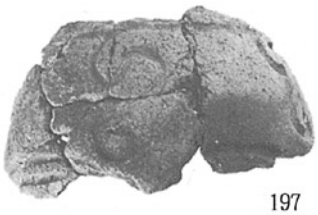
191

192


193

195

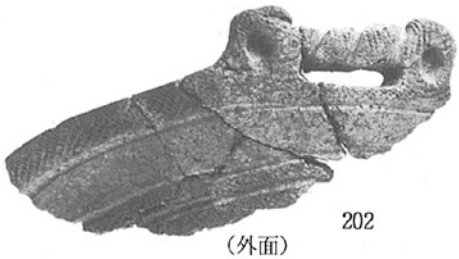

196

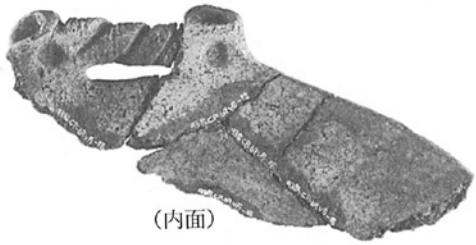

197

198

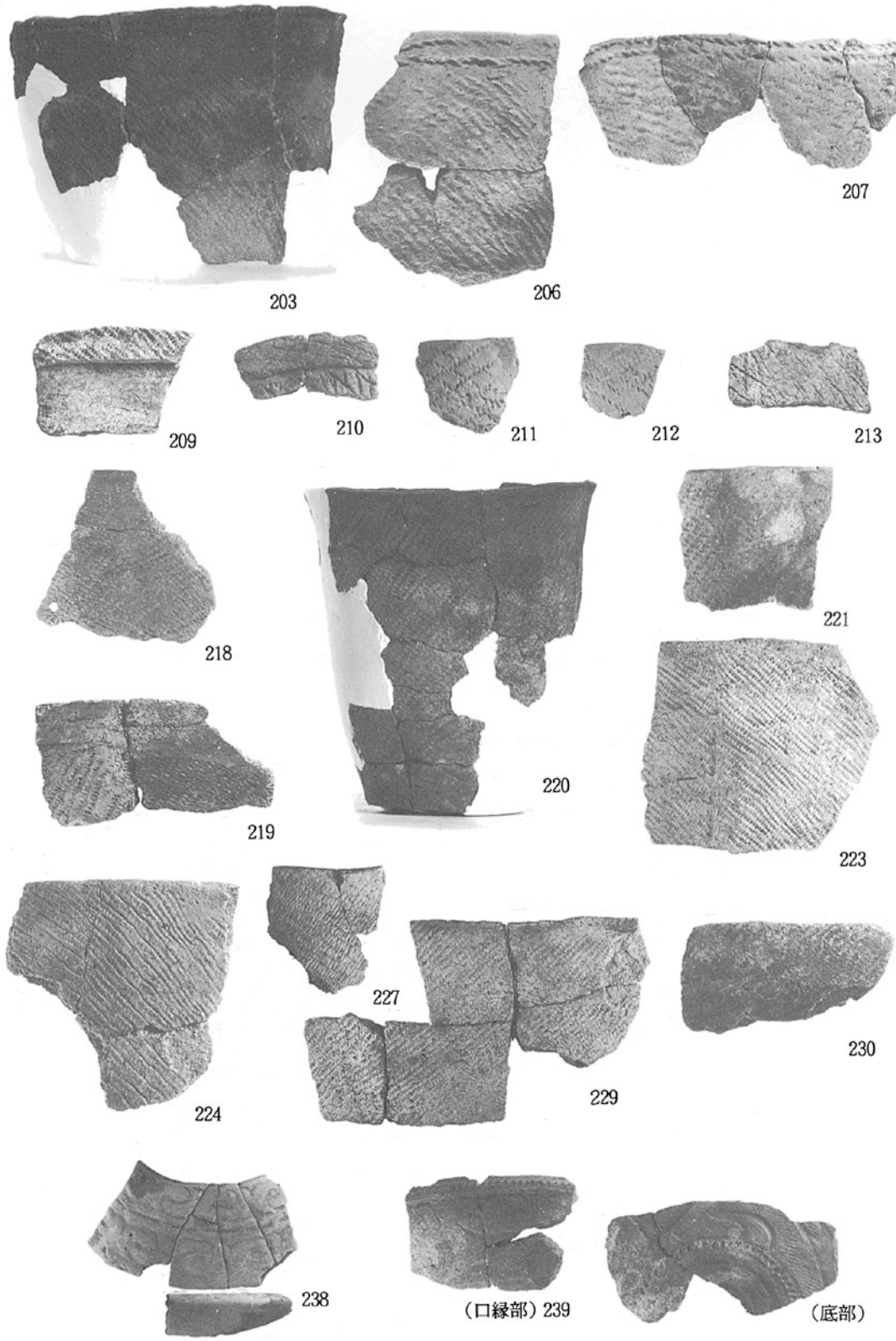
200

201

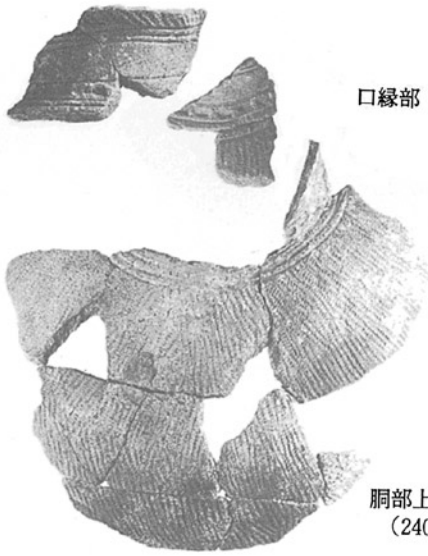

202
（外面）


（内面）

遺構外出土（第Ⅴ群土器）



遺構外出土（第Ⅴ・Ⅵ群土器）



口縁部（240）

胴部上半
（240）

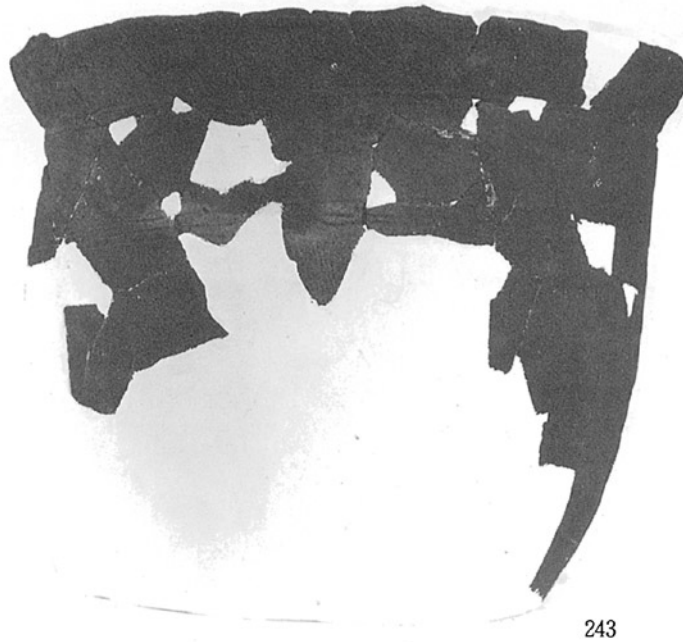
胴部

240

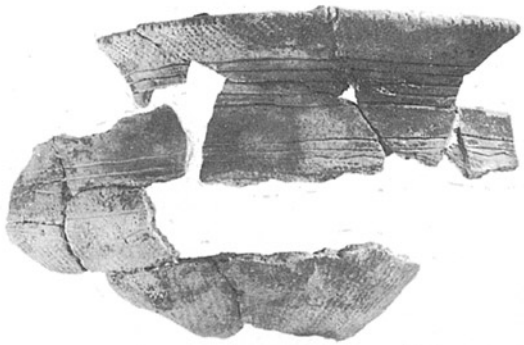
241

242

遺構外出土（第Ⅶ・Ⅷ群土器ア）



243

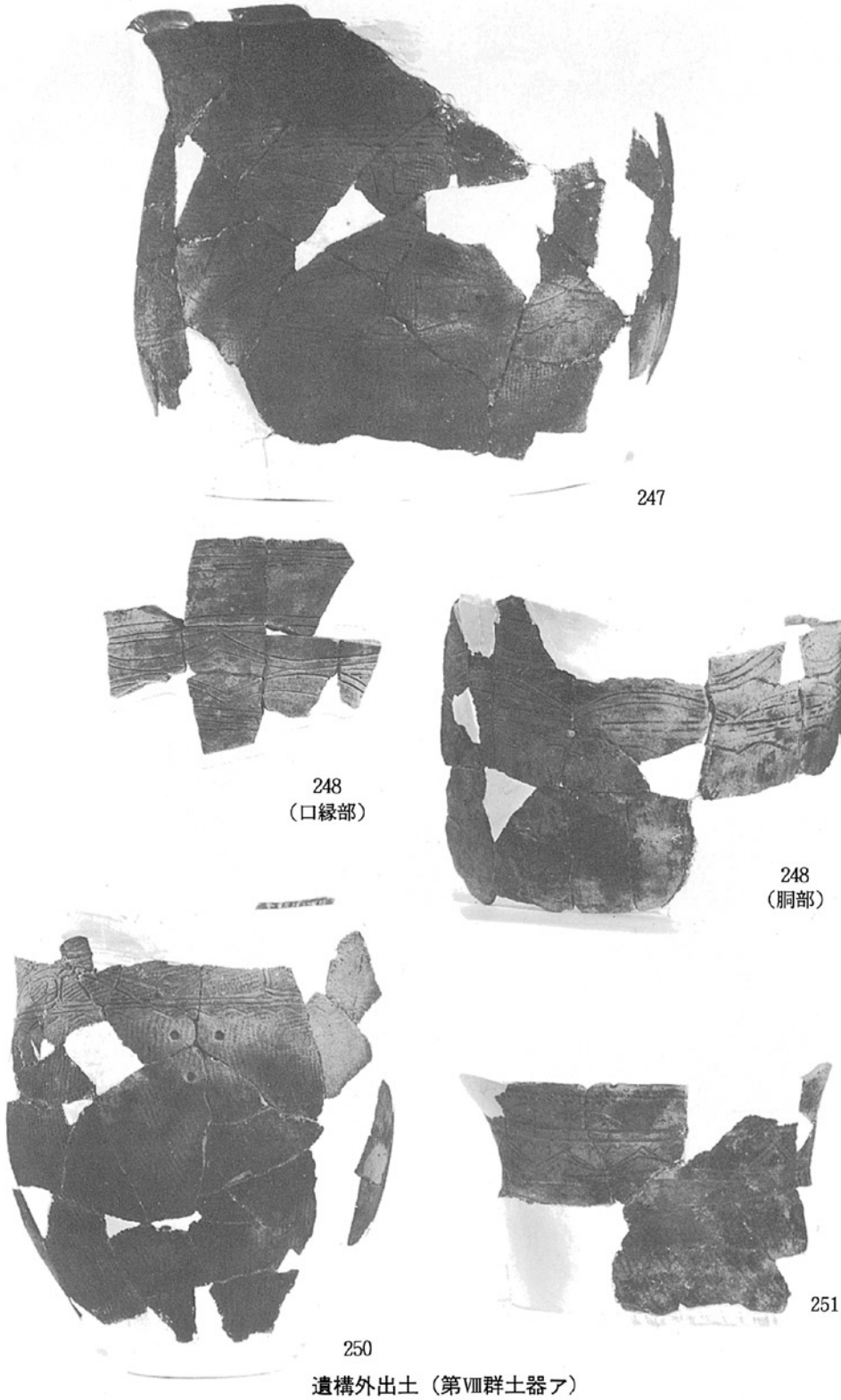


244

246

245

遺構外出土（第Ⅷ群土器ア）



遺構外出土（第Ⅷ群土器ア）

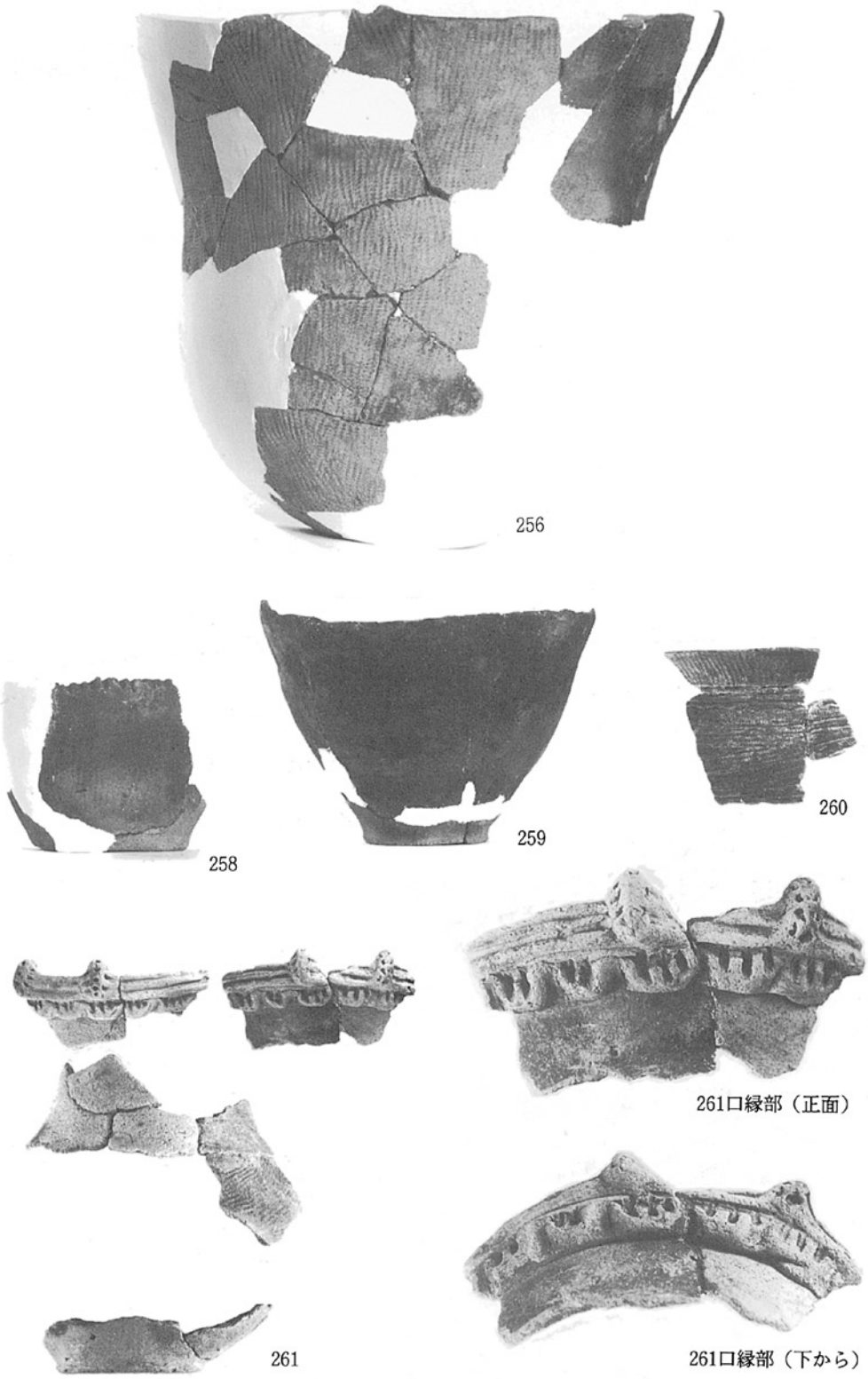
252

253

254

255

遺構外出土（第Ⅷ群土器ア）



遺構外出土（第Ⅷ群土器ア・イ・ウ）

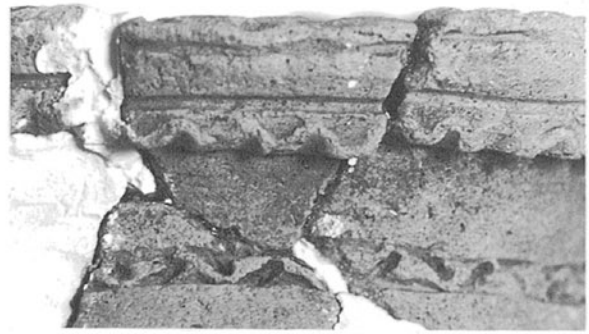
262

口縁部の交互刺突文

頸部の交互刺突文

遺構外出土（第Ⅷ群土器ウ）

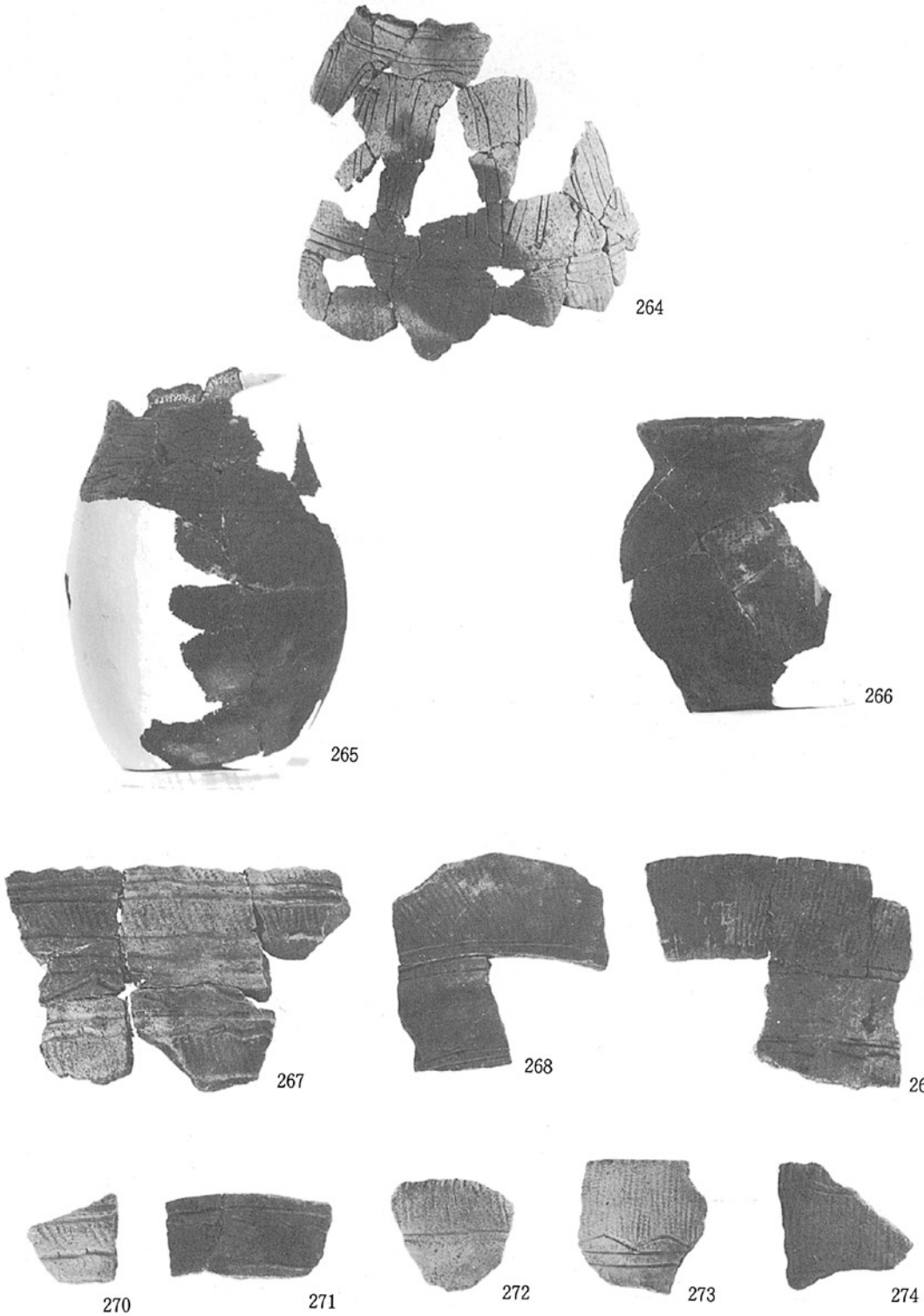
263



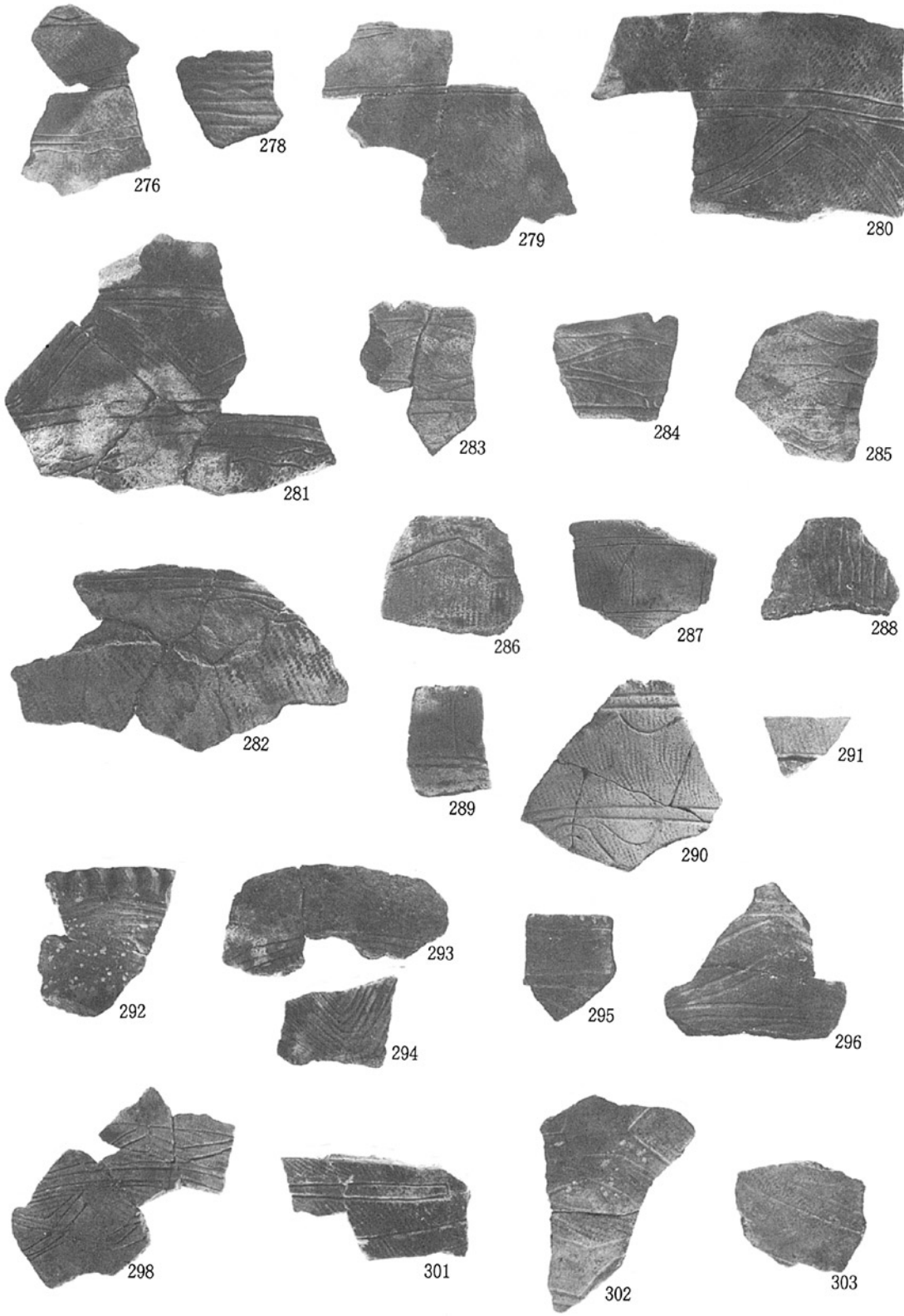
頸部の交互刺突文

口縁部（下から）

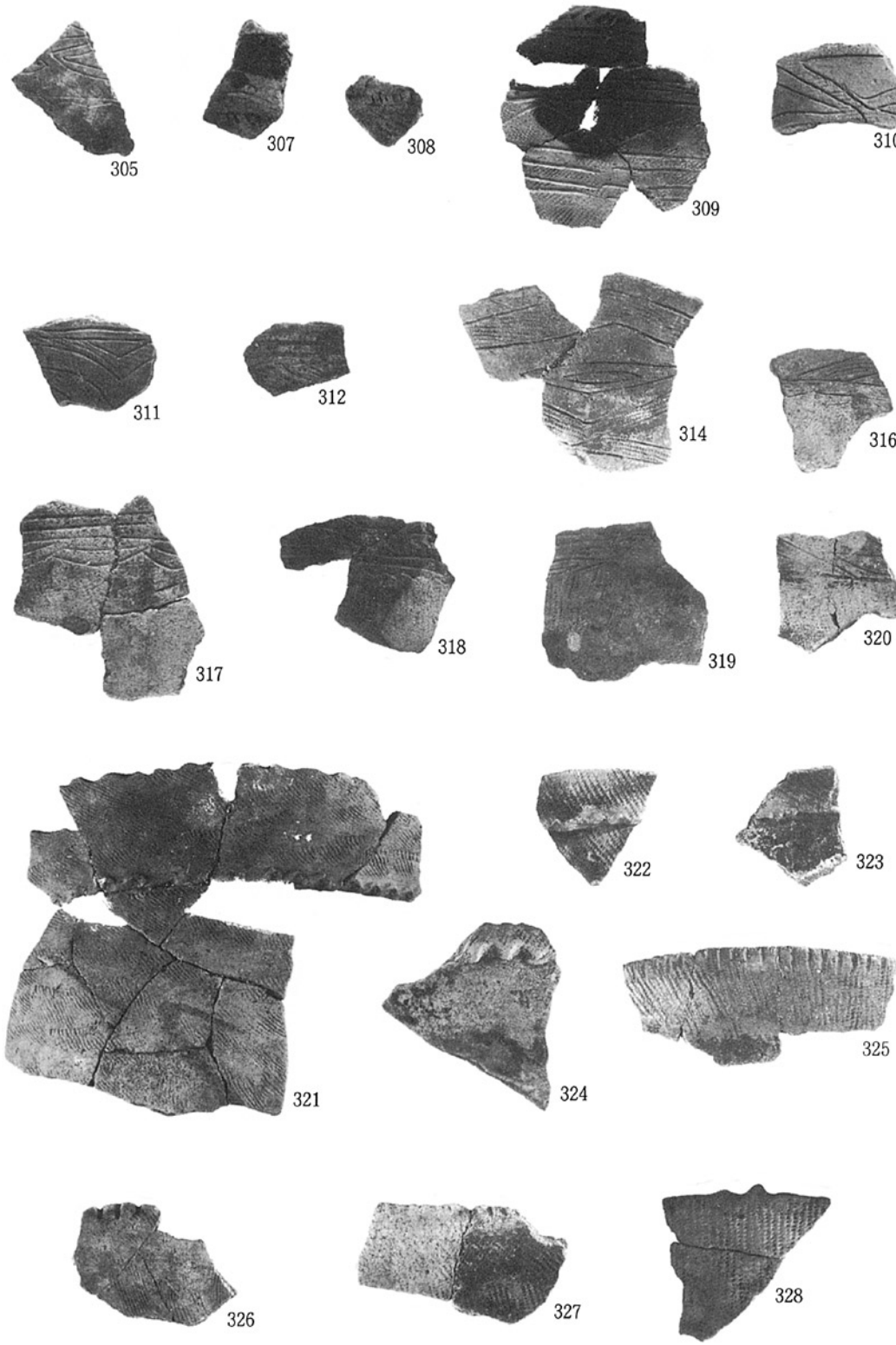
遺構外出土（第Ⅷ群土器ウ）



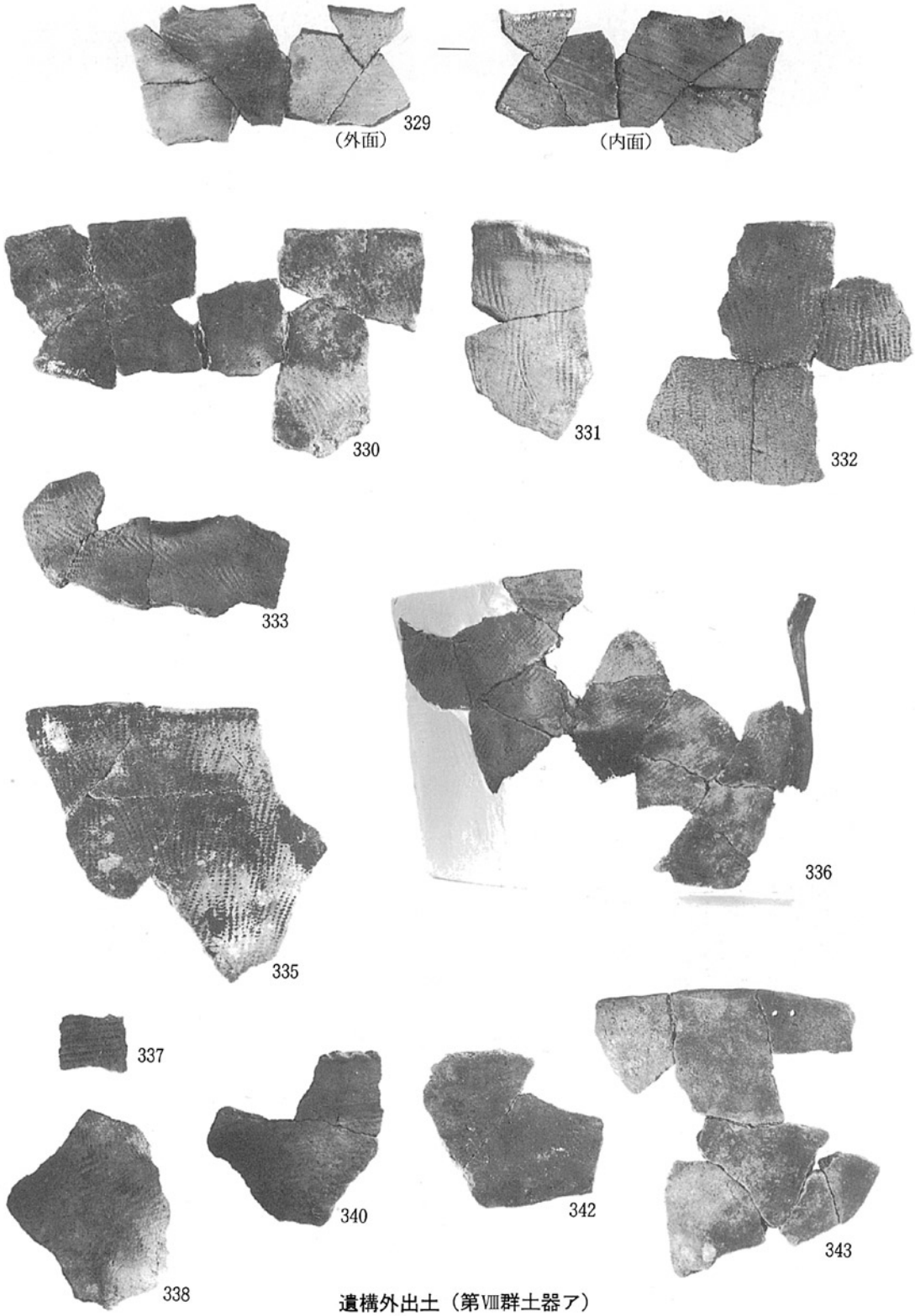
遺構外出土（第Ⅷ群土器ウ・ア）



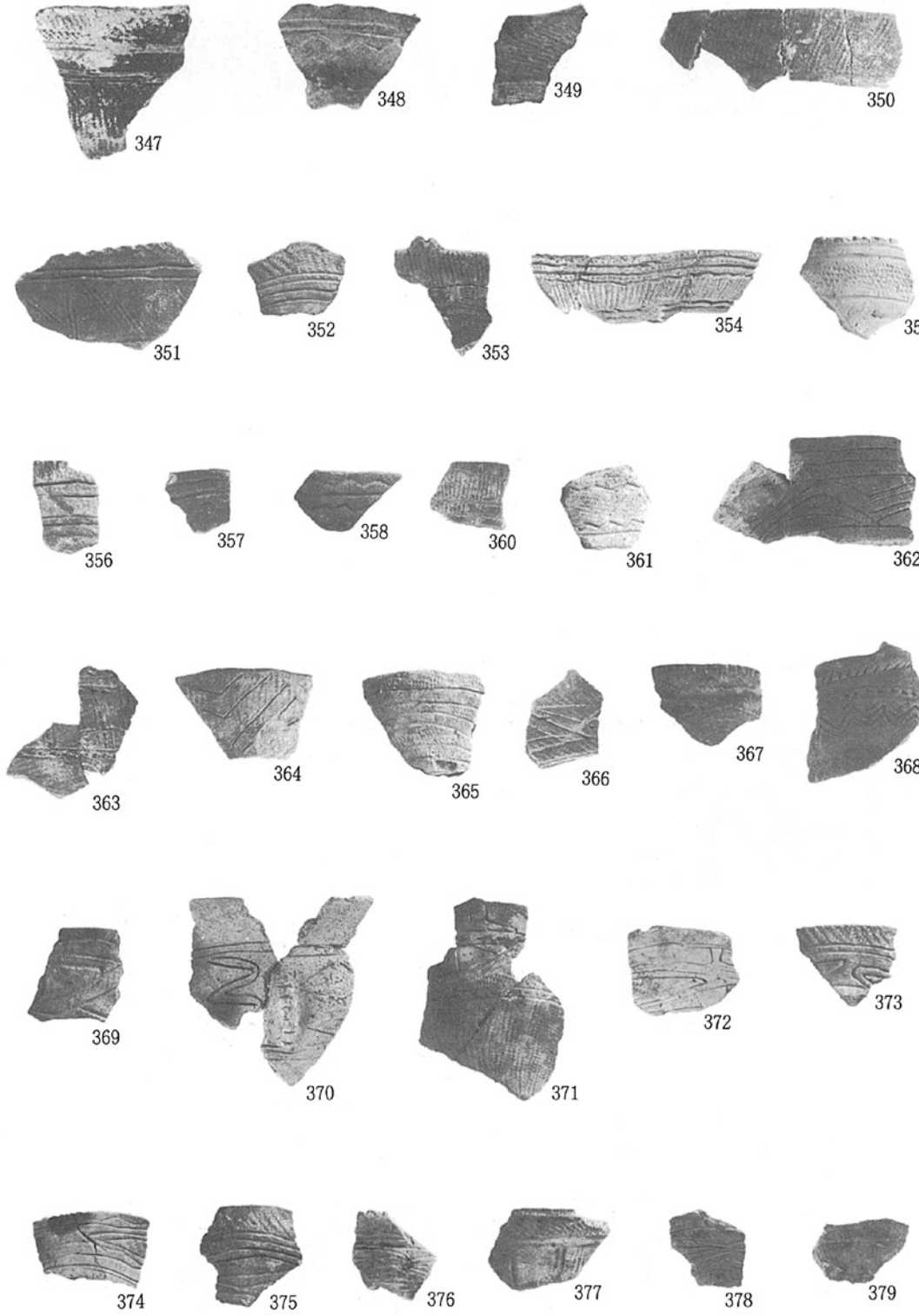
遺構外出土（第Ⅷ群土器ア）



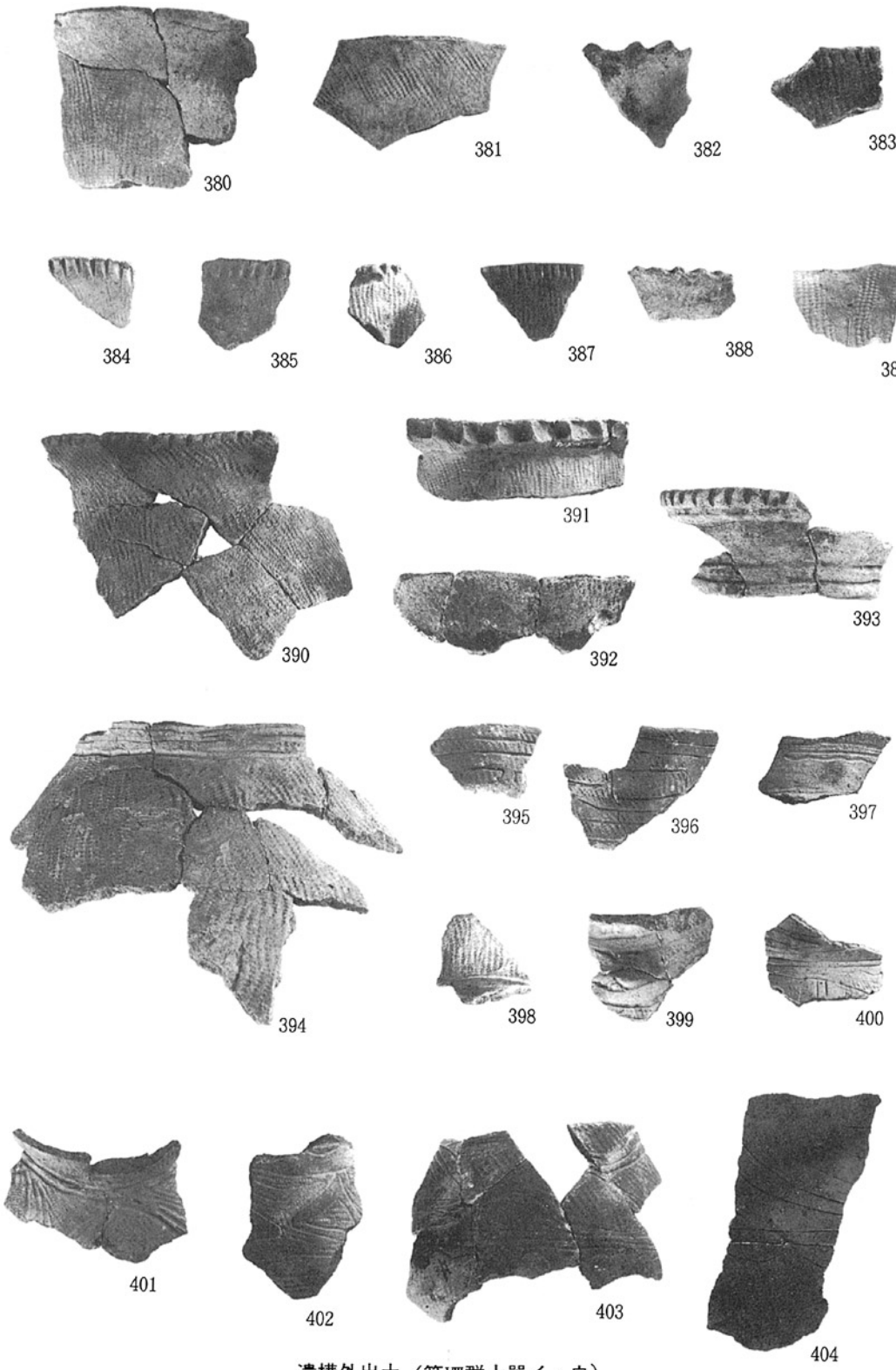
遺構外出土（第Ⅷ群土器ア）



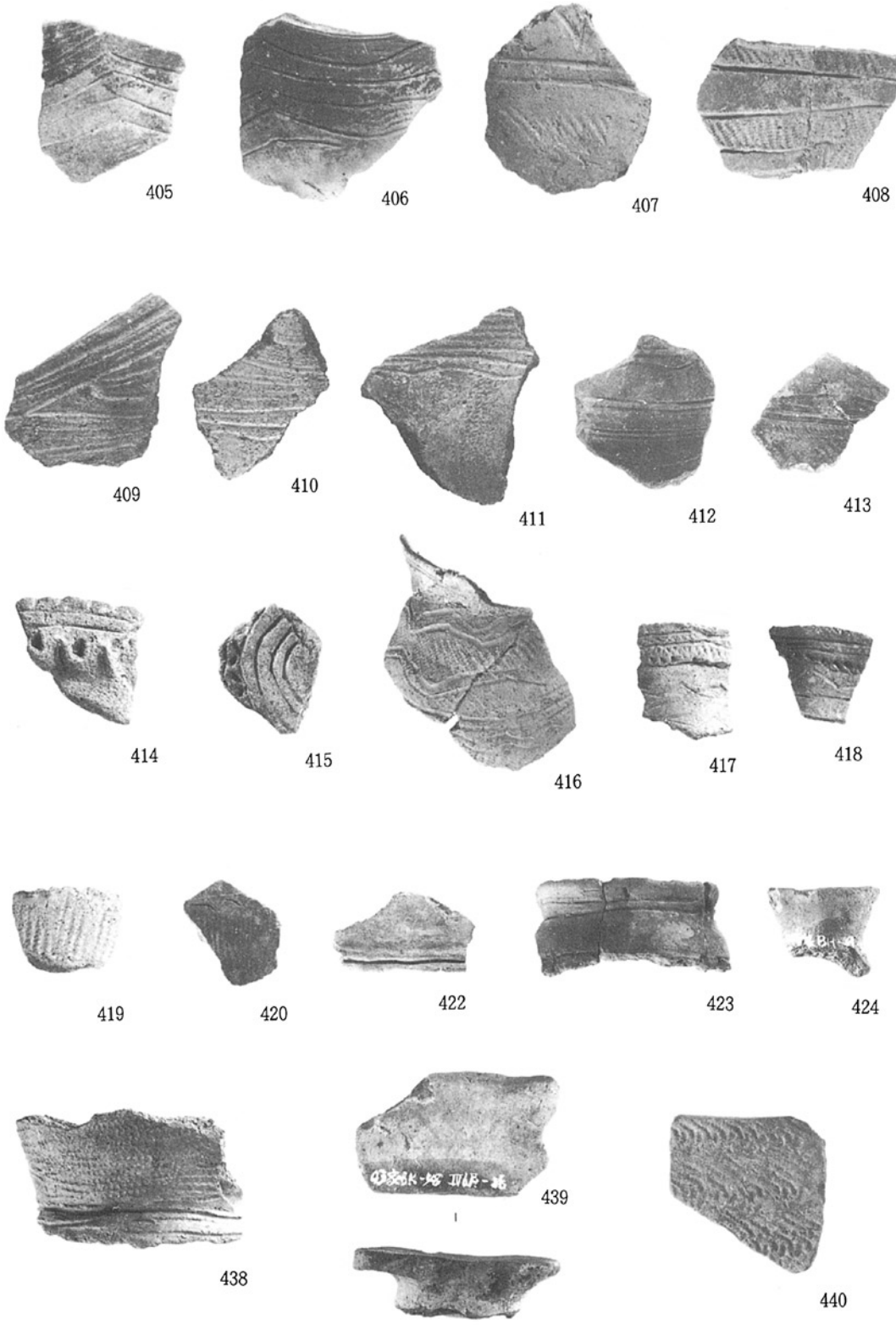
遺構外出土（第Ⅷ群土器ア）



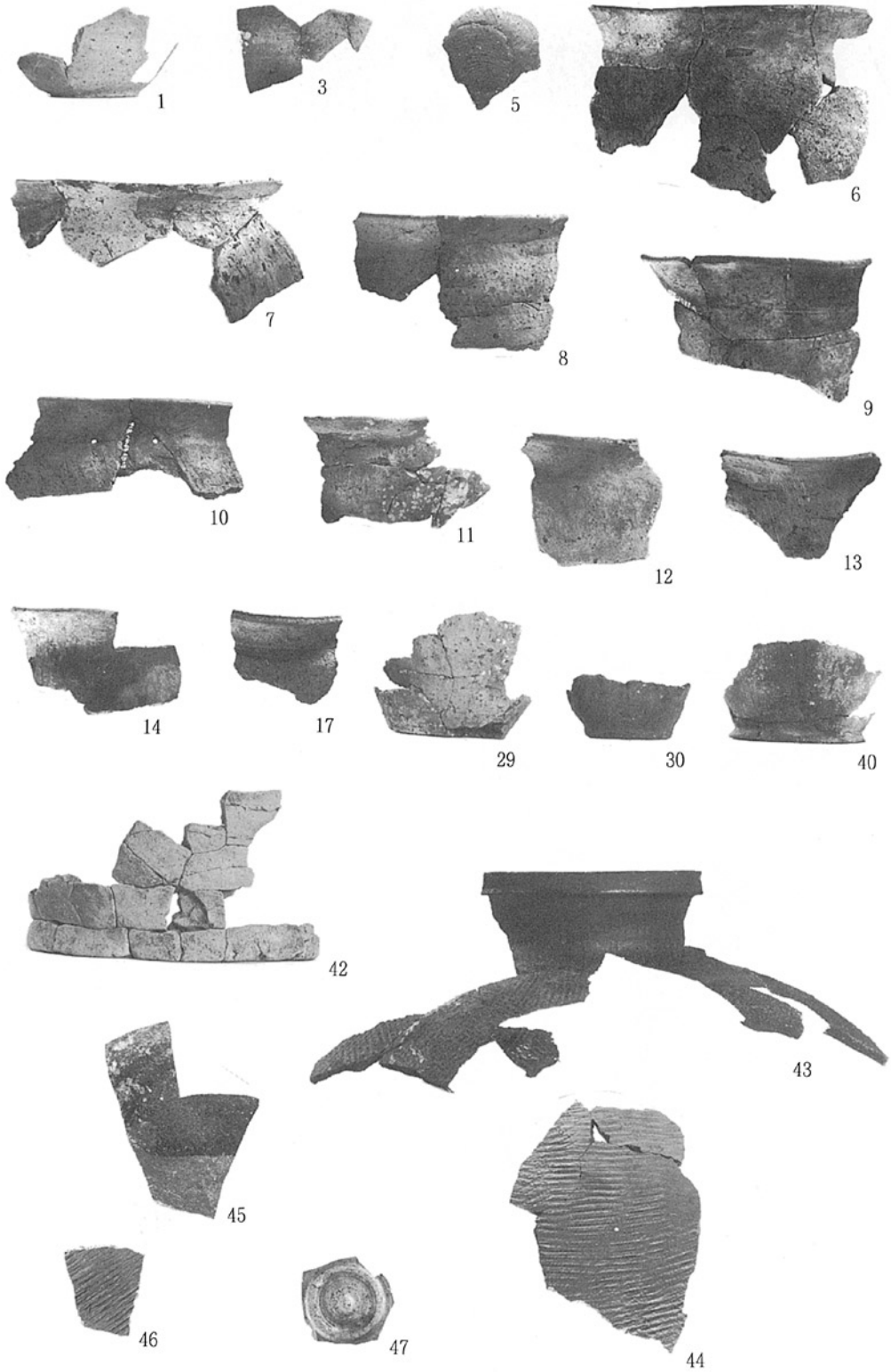
遺構外出土（第Ⅷ群土器イ）



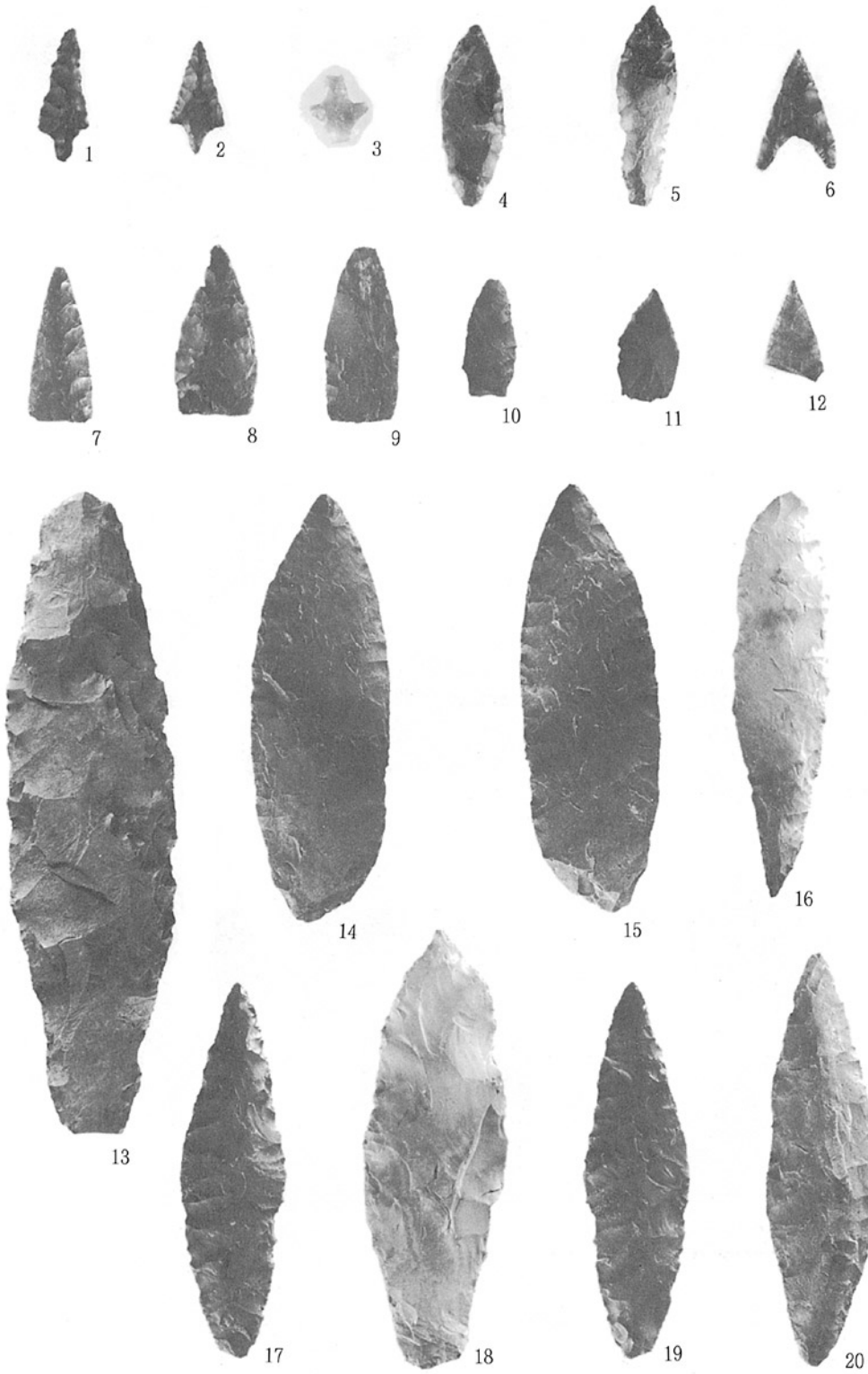
遺構外出土（第Ⅷ群土器イ・ウ）



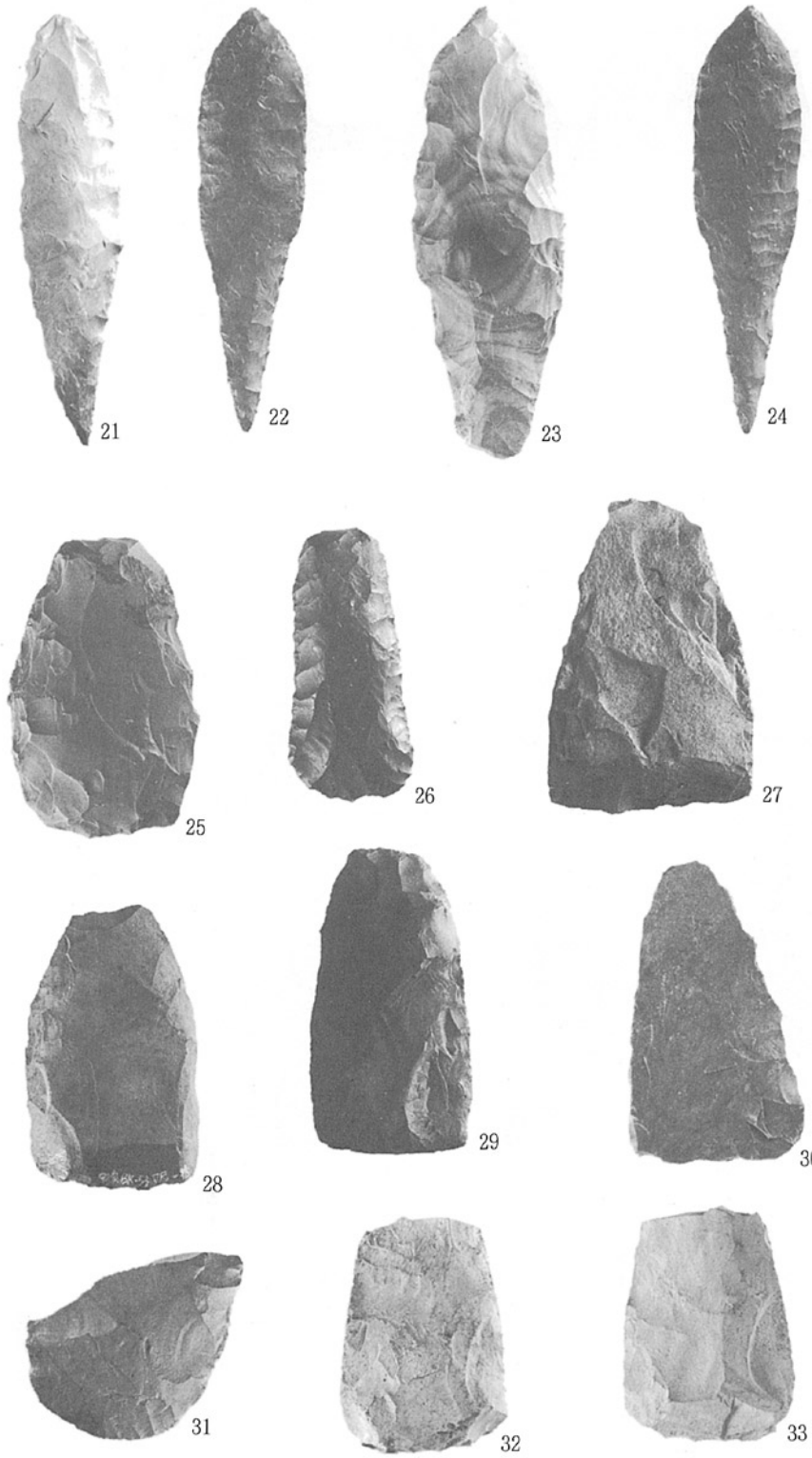
遺構外出土（第Ⅷ群土器ウ・エ・オ・カ、第Ⅸ群土器）



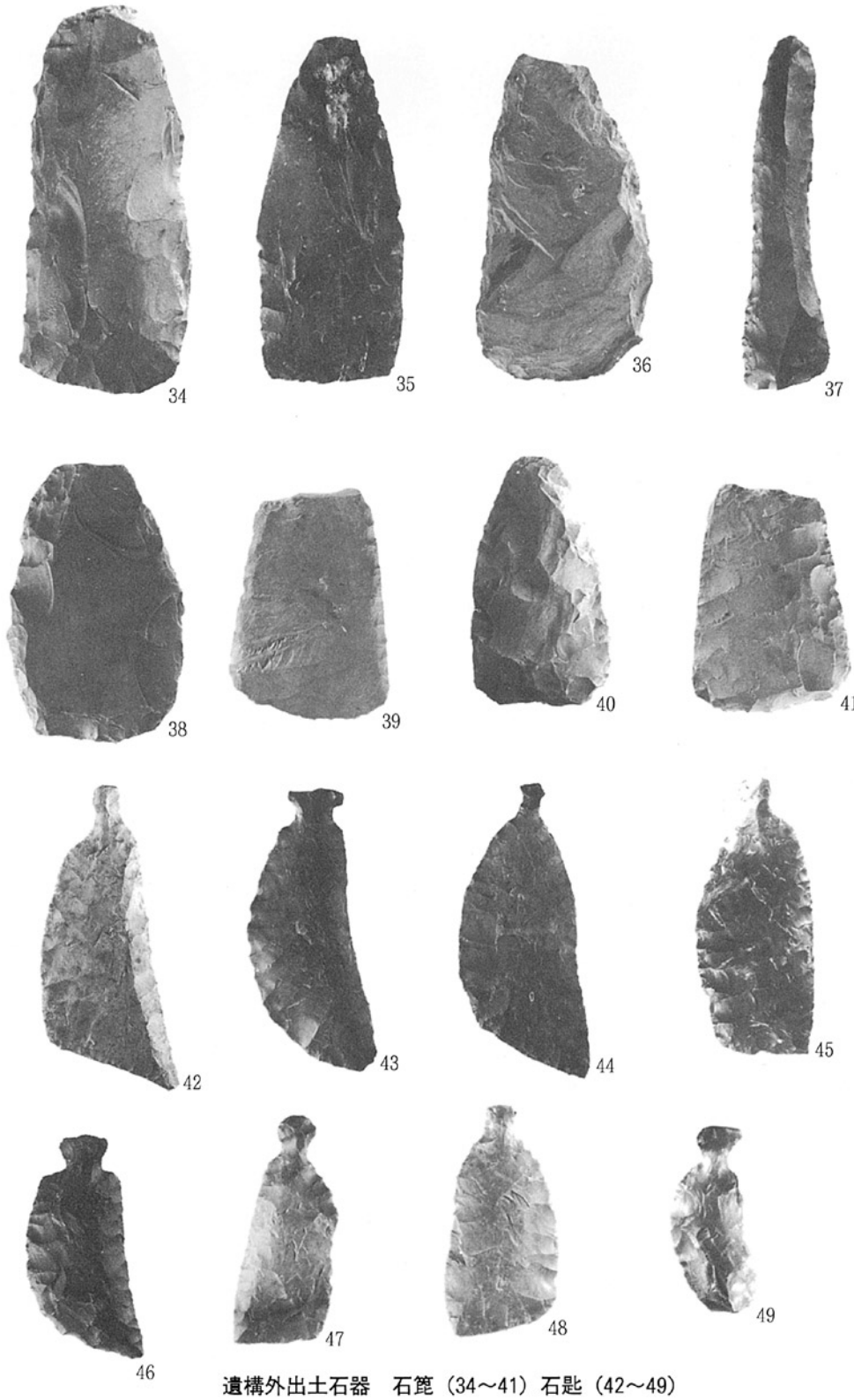
遺構外出土土師器須恵器他



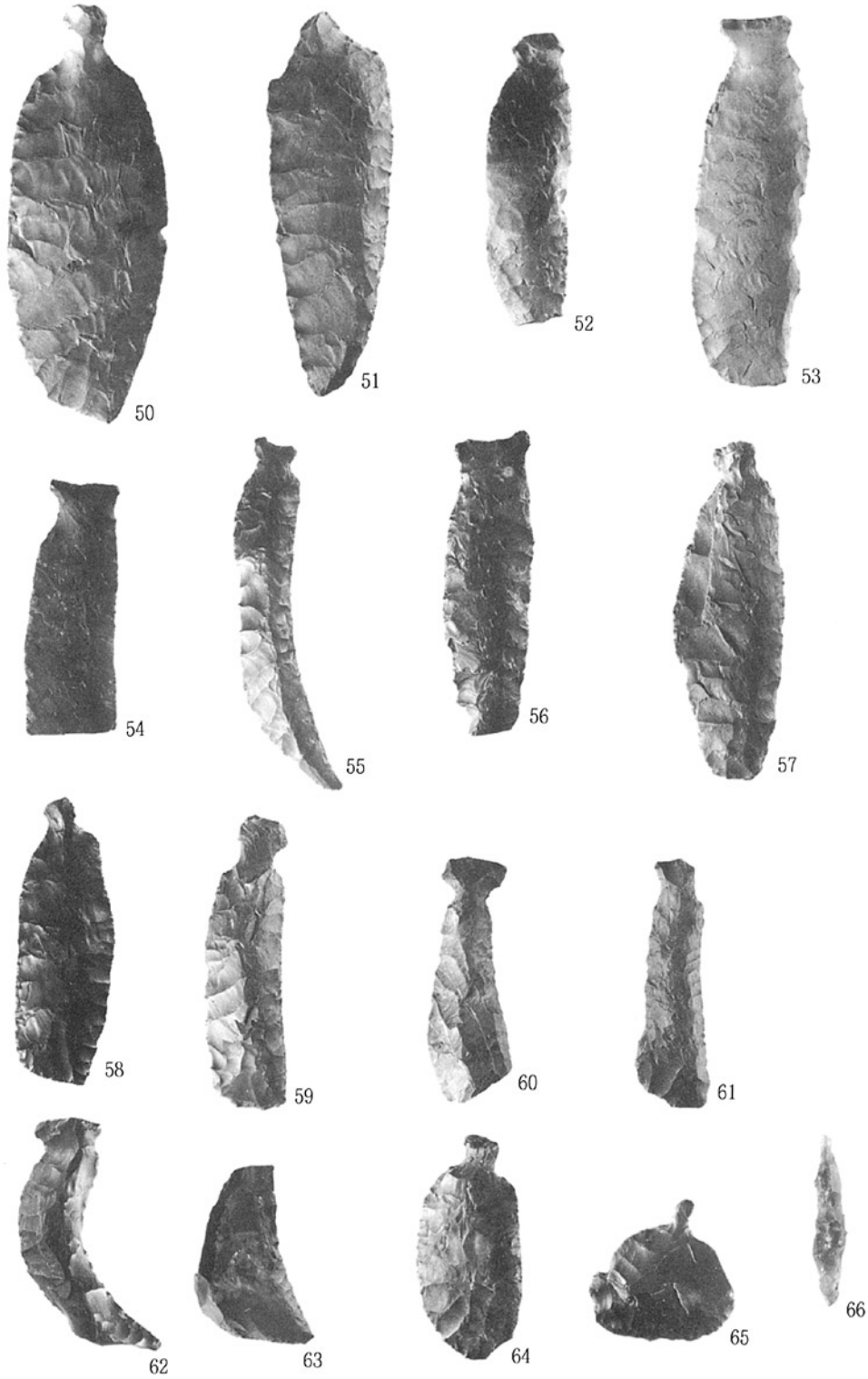
遺構外出土石器（石鏃１～12・石槍13～20）



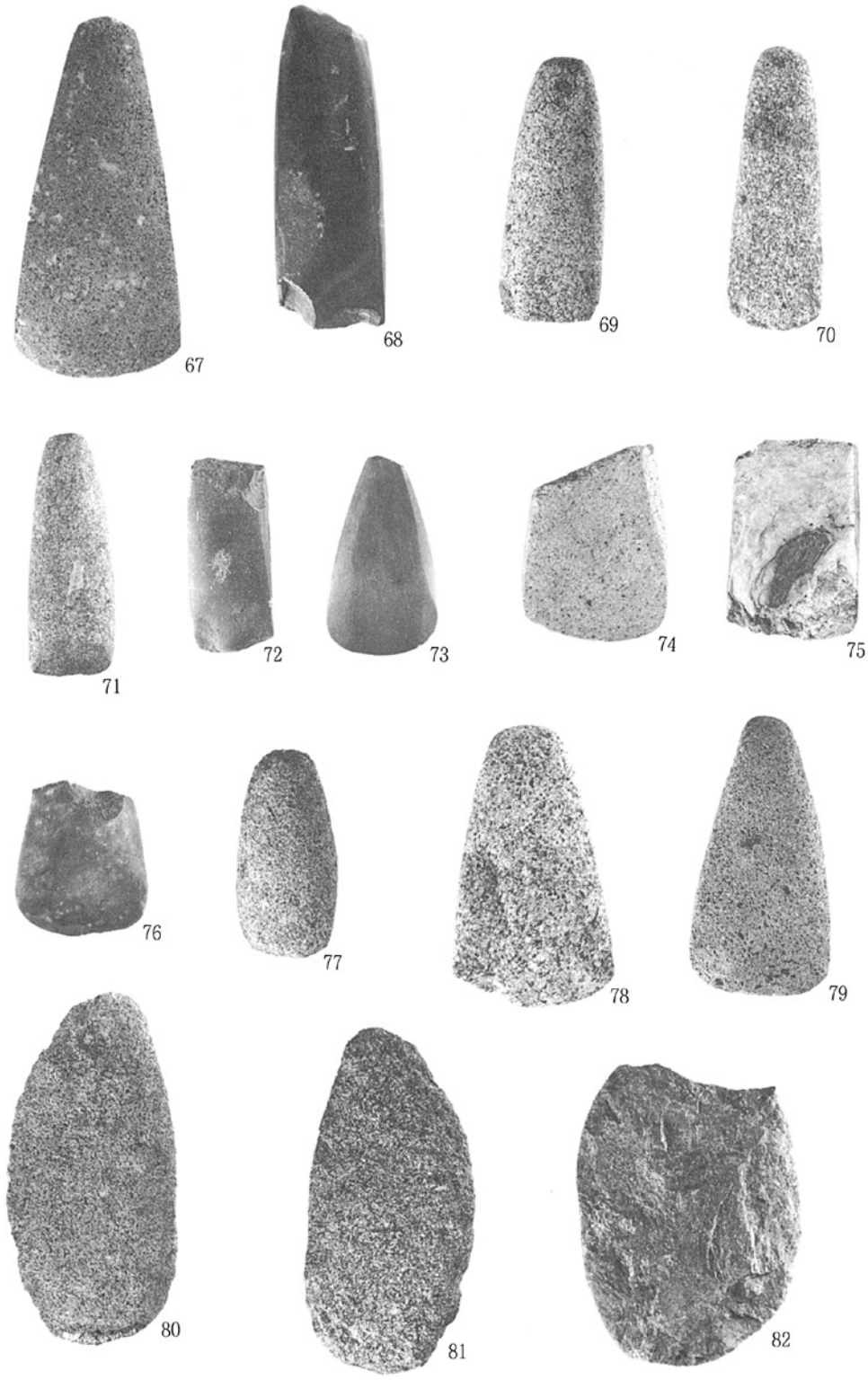
遺構外出土石器　石槍（21～24）石箆（25～33）



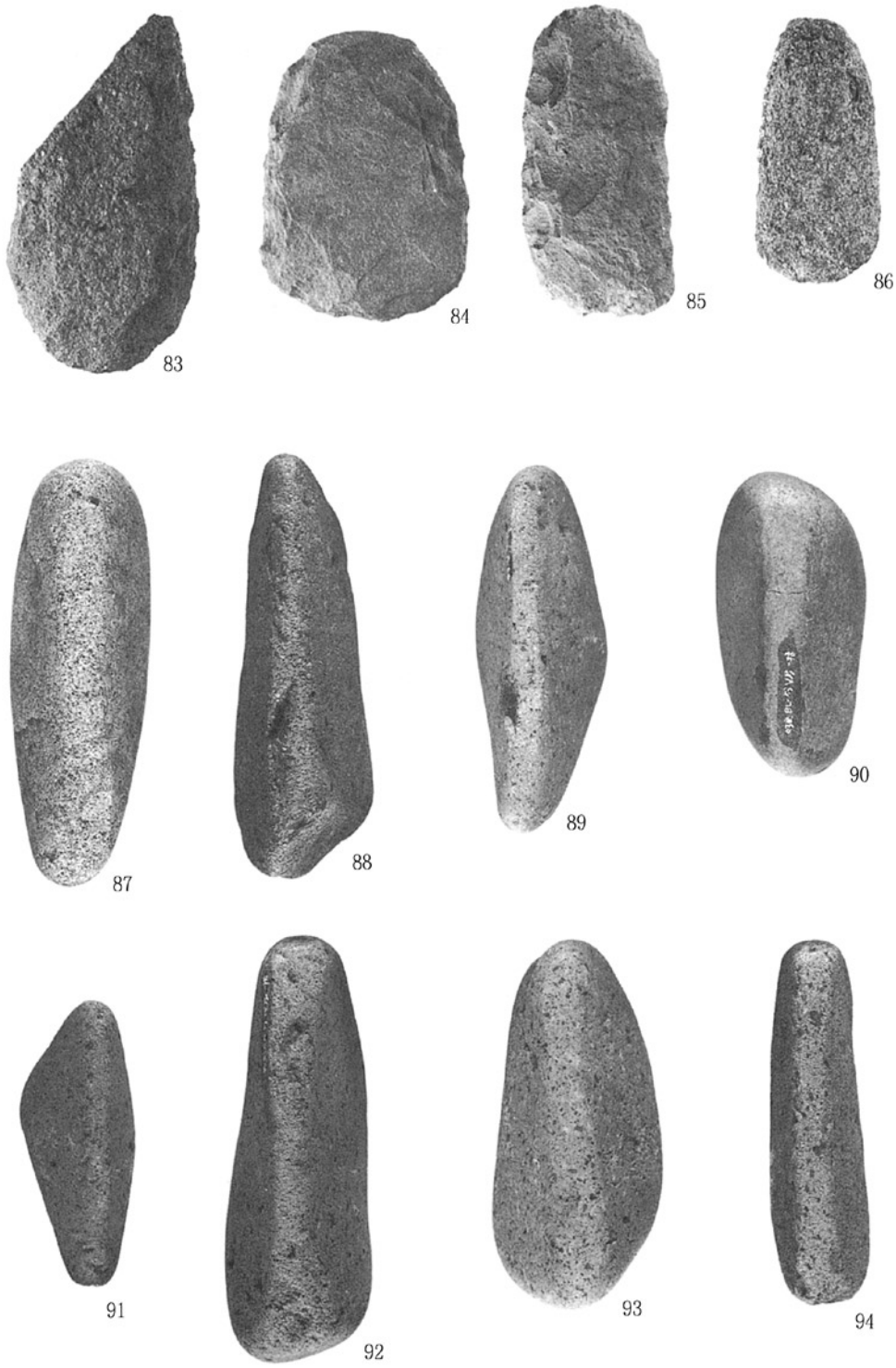
遺構外出土石器　石箆（34～41）石匙（42～49）



遺構外出土石器　石匙（50～65）石錐（66）



遺構外出土石器　磨製石斧（67～79）打製石斧（80～82）



遺構外出土石器　打製石斧（83～86）敲磨器（87～94）

95

96

97

98

99

100

101

102

103

104

105

106

107

108

109

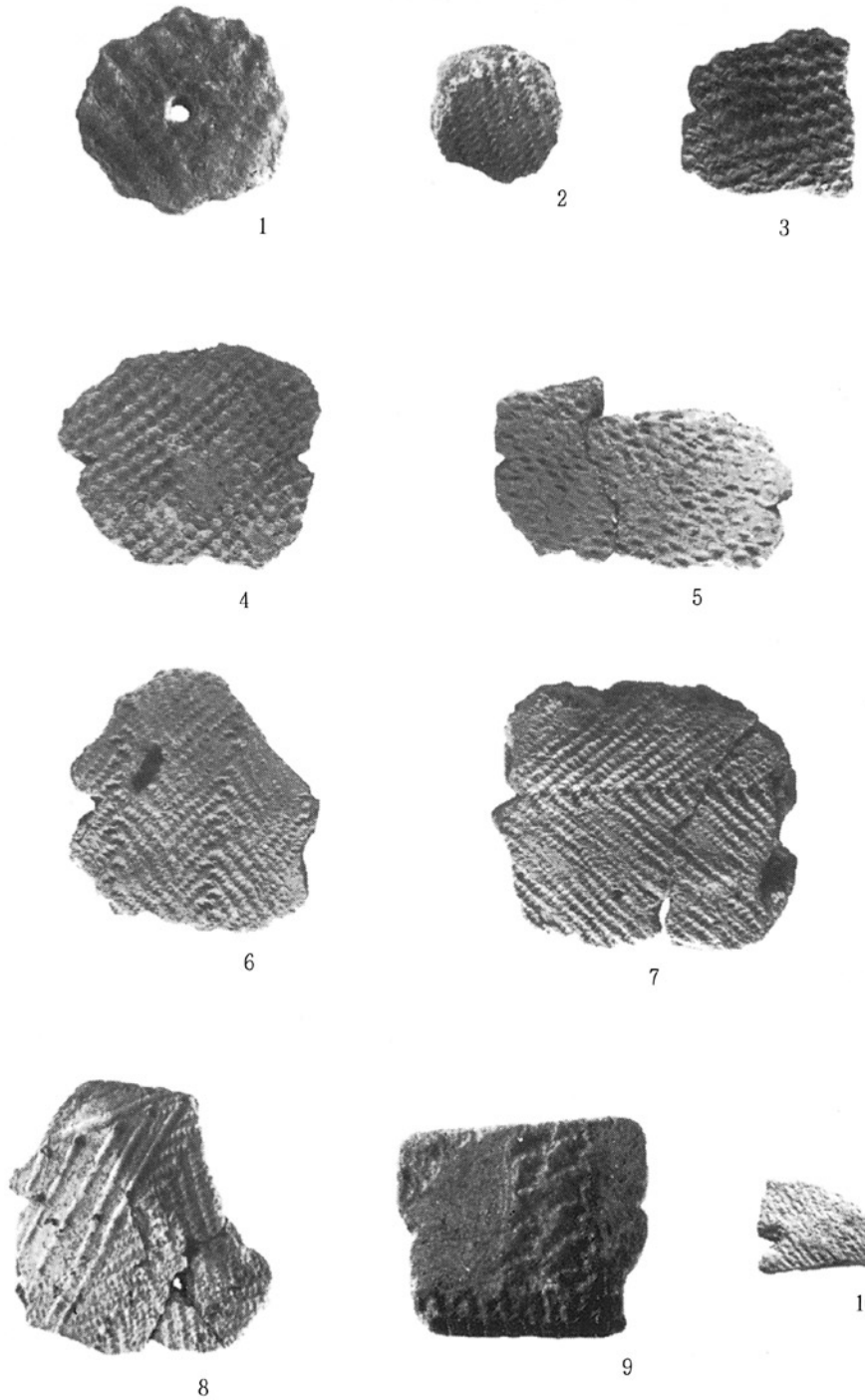
遺構外出土石器　敲磨器（95～101）石錘（102～109）

110

111

112

遺構外出土石器　石皿（110～111）石製品（112）



遺構外出土　円盤状土製品（1～2）土器片錘（3～10）

鷹架遺跡 II

目　　次

第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項
第１節　調査に至る経過…… 1
第２節　調査要項…… 2

第Ⅱ章　調査の方法と経過
第１節　調査の方法…… 4
第２節　調査の経過…… 5

第Ⅲ章　遺跡と周辺地域の地形・地質…… 6

第Ⅳ章　試掘調査の成果
第１節　遺　　構 …… 13
(1)　住 居 跡…… 13
(2)　土　　坑…… 30
(3)　溝状土坑…… 30
(4)　焼　　土…… 31
(5)　貝　　塚…… 31
第２節　遺　　物…… 34
(1)　土　　器…… 34
(2)　石　　器…… 47
(3)　その他の遺物 …… 61

第Ⅴ章　ま　と　め…… 62

引用・参考文献

写 真 図 版…… 63
付　　図

第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項

第１節　調査に至る経過

昭和44年度に新全国総合開発計画が発表され、むつ小川原地域が大規模工業開発の予定地とされた。その後、昭和46年度には、第一次基本計画として「むつ小川原地域開発構想の概要」が発表され、以来、これに伴って開発予定地内の埋蔵文化財分布試掘調査及び発掘調査が実施されて来た。

鷹架遺跡については、昭和53年度に臨海道路計画の一部として幹線連絡道路（国道338号）建設するにあたり、県土木部港湾課から鷹架遺跡が路線内にある旨の通知をされた。そのため県教育委員会では県土木部港湾課から正式な発掘調査の依頼を受けて昭和54年４月20日から10月31日の期間で13,150㎡を対象に発掘調査が行うことになった。

調査の結果、鷹架遺跡からは、縄文時代の遺構が18基検出され、中には甕棺墓とされる土坑も検出されている。遺物は、主に縄文時代前期初頭（早稲田６類）及び縄文時代後期前半（十腰内Ⅰ式）期の土器、石器が出土した。

平成４年度には、むつ小川原株式会社から東西に走る幹線道路を挟んで遺跡の北側地域について遺跡が将来開発されるに先立ち、事前に規模及び範囲を確定する必要性から県教育委員会へ試掘調査の依頼があった。県教育委員会は、これを受け、県埋蔵文化財センターが調査を担当することとし、約50,000㎡を対象に、平成５年８月19日から10月22日までの期間で試掘調査を実施することとなった。

（三浦　圭介）

第2節　調　査　要　項

1　調査目的

むつ小川原開発事業の実施に先立ち、当該地区に所在する埋蔵文化財の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財活用に資する。

2　調査期間　　平成5年8月19日～平成5年10月22日

3　遺跡名及び所在地　鷹架遺跡

上北郡六ケ所村大字鷹架字道ノ下58－15外、4

試掘対象面積　50,000平方メートル

調査面積　4,880平方メートル

5　調査委託者　　むつ小川原開発株式会社

6　調査受託者　　青森県教育委員会

7　調査担当機関　　青森県埋蔵文化財調査センター

8　調査協力機関　　六ケ所村　六ケ所村教育委員会　上北教育事務所

9　調査参加者

調査指導員

村越　　潔　　弘前大学教授（考古学）

調査協力委員

橋本　　壽　　六ヶ所村教育委員会教育長

調査員

瀧澤　幸長　　八戸市文化財審議委員（考古学）

松山　　力　　八戸市文化財審議委員（地質学）

市川　金丸　　青森県立郷土館学芸課課長補佐（考古学）

天間　勝也　　平内町立茂浦小学校教頭（考古学）

10　調査担当者

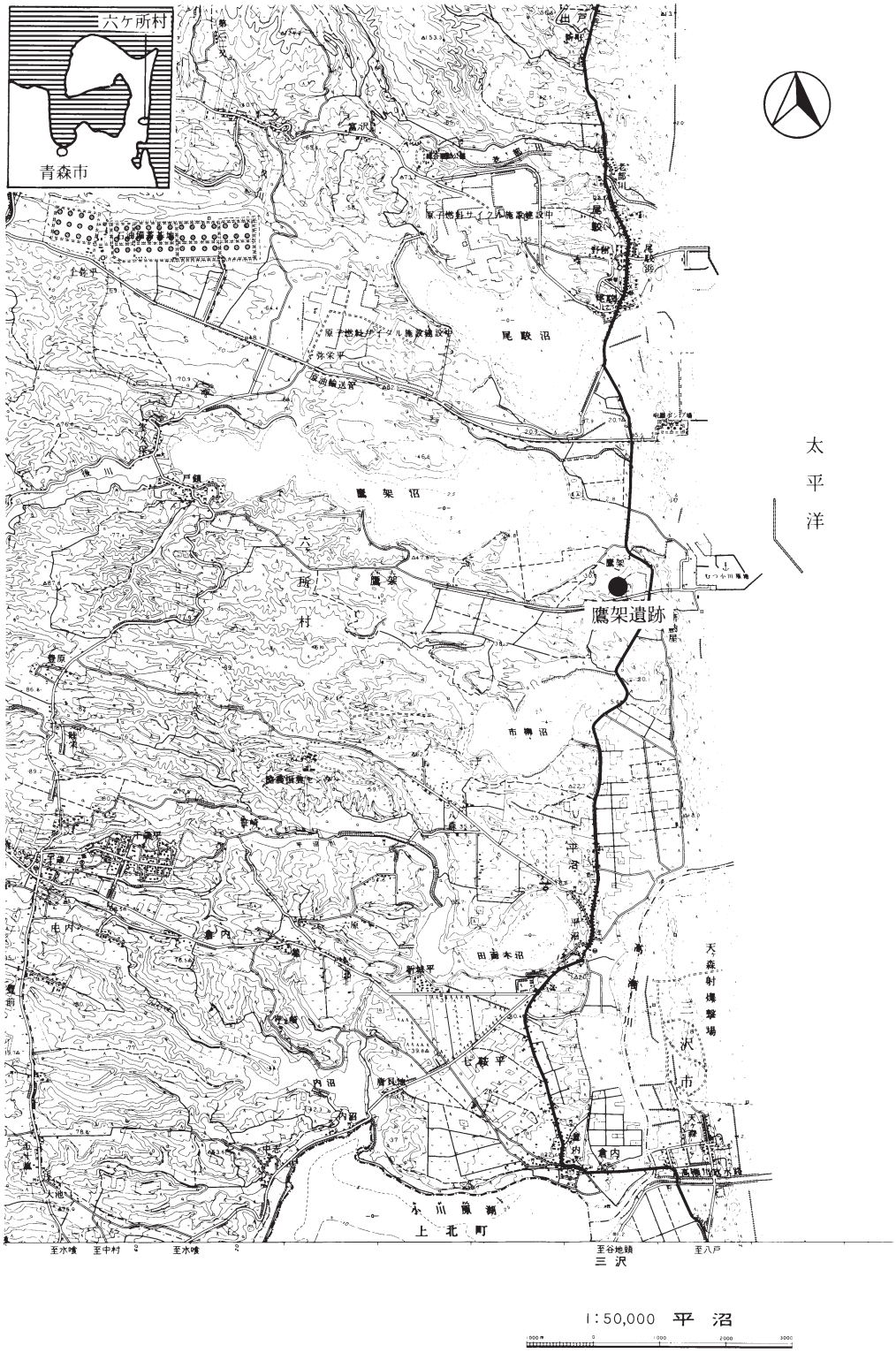
青森県埋蔵文化財調査センター

調査第二課長　三浦　圭介

主　幹　大湯　卓二

主　事　神　　康夫

調査補助員　　工藤　朝之　本間　修　山田　尚美


六ケ所村
青森市
太平洋
鷹架遺跡
尾駮沼
鷹架沼
市柳沼
田面木沼
小川原湖
上北町
三沢市
至水喰
至中村
至水喰
至谷地頭
至八戸
1:50,000 平沼

第1図 遺跡位置図

第Ⅱ章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

本遺跡は、鷹架沼の南岸に形成された標高20ｍ前後の低段丘に位置する。地形は、東西両端と中央部に谷地形が発達しており、段丘面は、東側、西側及び北側の先端部が舌状を呈している。

今回は、東西（約500ｍ）、南北（500ｍ）に帯状に延びた段丘（約５万㎡）の遺跡全体を試掘調査し、その主体部及び遺跡の性格を確定するために調査を実施した。

グリッドは、南北に基準線を設け、４×４ｍを１単位として西から東へと算用数字（たとえば101、102、103）を増やし、南から北には、アルファベット（たとえばＣＡ、ＣＢ、ＣＣ）とを付して表した。呼称については、東西ラインと南北ラインの交点に当たる南西隅をグリッド名とした。

実際の調査に当たっては、東西、南北に８ｍごとにグリッド杭を打ち込み、遺跡全体にメッシュ（碁盤目状に杭を打った）を被せた。発掘調査に当たっては、基本的に８ｍごとに２×８ｍ（原則として南北８ｍとしたが、地形や雑木林などの障害がある場合は地形に合わせた）の試掘坑を設けて調査を進めた。これによって、遺跡のなかでの遺構の検出率及び遺物の出土率の割合が地区によって偏在しないように努めた。さらに、遺物、遺構が発見された場合は、その周辺を拡張してそれらの状況及び性格を把握することに努めた。

遺構の調査に当たっては、住居跡は四分法を基本として、規模の小さい遺構は二分法を用い、掘り下げに当たっては層位ごとに掘り進めるように努めた。遺構の実測には、原則として20分１としたが、必要に応じて10分１で行う方法もとった。

遺物については、遺構外のものはグリッド一括として、層位ごとに取り上げたが、遺物がまとまった出土状況のものは微細図を作成した。

写真は、カラーリバーサルとモノクロネガの２種類を使用した。

（大湯　卓二）

第２節　平成５年度調査の経過

８月19日から鷹架遺跡の試掘調査を開始した。当初、鷹架遺跡の現状は、遺跡全体が笹に覆われ、その丈の高さも２ｍ近くにまで達してた。そのため、グリッド設定はおろか、粗掘りを進めることも困難であるため、重機によって笹を除去することからスタートした。

試掘は、南側から北側方向に向かって進められた。遺物は、縄文時代早期の土器破片がグリッド内から数点出土したが、遺構と思われるものは溝状土坑が数基のみであった。

９月初旬には、ＣＱ－119グリッドから第１号住居跡が検出される。そこから、さらに東に30ｍほどの地点（ＣＲ－125グリッド）から１ｍほどの円形の土坑が検出した。

９月中旬、第１号住居跡を精査した結果、床面から貝殻文系土器（物見台式期）及び石鏃などが出土したため、縄文時代早期の住居跡であることが確認された。

９月下旬には、調査を北東方向の台地に延ばすとＥＫ－128グリッドから第２号住居跡（平安時代）が検出した。そこからさらに北東にグリッドを30ｍほど延ばすと杉林となっており、ＥＷ－148グリッドの第Ⅱ層上面から50㎝ほどの小ブロックの貝塚が検出する。貝層から、煙管並びに陶器破片が出土していることから近世のものであることが確認され、その貝塚の下をさらに掘り下げると３ｍ四方に広がる方形の黒色土の落ち込みを検出した。東壁に当たる位置から煙り出しが見られることから平安時代の住居跡であることが推測された。

10月初旬、さらに北東の台地の先端部近く（ＦＧ－58グリッド）から十和田ａ火山灰層の広がりが見られたので、トレンチを入れたところ、平安時代の住居跡の一部を確認した。また、この時期、西側台地に調査区を移動して調査を進める。西側台地の縁辺部からは縄文時代の早期後半期及び後期初頭期の土器、石器が多く出土した。さらに、周辺から焼土が見られた。また縄文時代に構築されたと思われる土坑も確認した。

10月22日には、西側台地の調査を終え、試掘調査を終了する。検出した遺構は以下の通りであった。

住居跡４軒、土坑11基、溝状土坑７基、焼土１基。

（大湯　卓二）

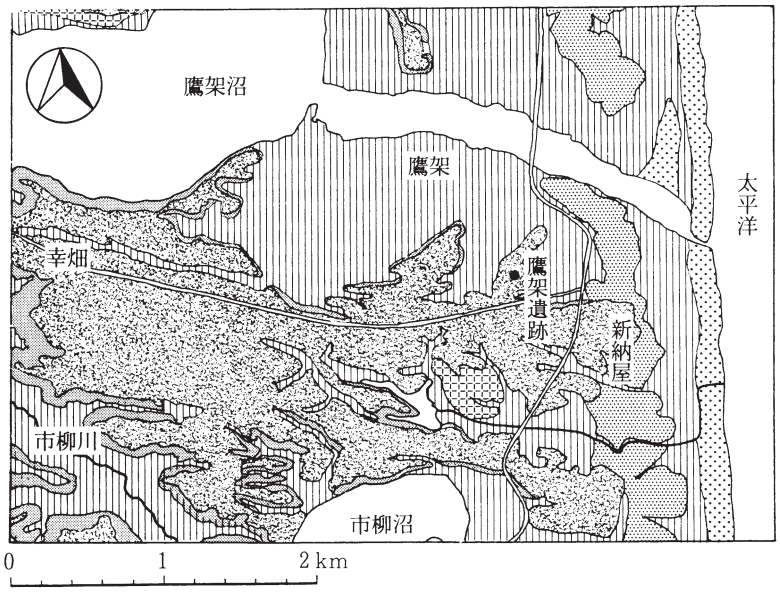
第Ⅲ章　遺跡と周辺地域の地形・地質

松　山　　力

1．遺跡の地理的環境

太平洋と陸奥湾の間を９～18㎞の幅で、50㎞の距離を北にのびる下北半島の頸部は、六ケ所村の老部川（おいべがわ）注1下流路を東西にのばす線を境に、南部の丘陵地帯と、中央部から北部までの山地帯に分けて見ることができる。南部の丘陵地帯の東側（太平洋側）には、小川原湖、内（うち）沼、田面木（たもぎ）沼、市柳（いちやなぎ）沼、鷹架（たかほこ）沼、尾駮（おぶち）沼など、大小の湖沼群が連なる。中央部から北部にかけての山地帯には、吹越烏帽子岳（ふっこしえぼしだけ、標高508m）、金津山（標高　520m）、石川台（標高　339m）など、標高200～500m余の三稜が続き、陸奥湾側山麓には比較的幅の広い台地が並行するが、太平洋側の山麓の平地は幅が狭く、中間には山塊斜面が海岸に迫り、断崖となっている部分がある。

遺跡は、半島頸部を山地帯と丘陵地帯に分ける老部川下流路の南方約６㎞（間に尾駮沼がある）、太平洋岸から西へ1.5㎞弱（陸奥湾岸から約13㎞）の地点を中心に鷹架沼東部水路の出口方向へ、南西方から半島状に突き出す段丘面上、500～900mの範囲に広がっている。



第２図　地形区分図

第２図[注2]は、鷹架遺跡の周辺の、東西５km、南北ほぼ3.5kmの範囲の地形区分図である。

図の上部の鷹架沼は、下北半島頸部の一連の湖沼群のうち、北方の尾駮沼についで北から２番目にあたる湖沼で、東部の幅150～300m、長さ2.5kmの太平洋に抜ける水路部を除いて、長さ5.5km、幅500～1100m、面積5.9km²、周囲18.4kmの規模をもっている。最大水深６mの浅い汽水湖で、かつてはサケ・マス・ウグイ・シジミカイなどの魚介類が生息したが、太平洋岸から１kmほどのところに堰堤ができてから淡水化し、石油備蓄基地・核燃料サイクル施設の設置に伴うむつ小川原工業港建設のため、堰堤付近まで広く掘り込まれて、地貌が一変した。鷹架沼西端部には、千歳の西方から５kmほど北上し、千樽付近で東方へ向きを変えて2.5kmほどで湖岸に達する後川が流入する。

遺跡の南南西方およそ1.5km付近から南西方にかけて、市柳沼が広がっている。市柳沼は西南西方への長さが約2.2km、直行する方向での最大幅が2.2km、面積1.7km²、周囲７km弱の規模をもち、最大水深が４m程度の沼である。アシとヤナギに囲まれた沼には、フジマリモの生息が確認されているほか貴重な動物群が見られるため、工業開発から除外されている。市柳沼には、西方の豊原付近に源を発し、６kmほど流れて湖岸に達する市柳川が流入する。

上北地方の丘陵は、中川久夫（1969）によって、上位から吹越烏帽子段丘（標高100～140m）、長者久保段丘（90～130m）、甲地段丘（60～100m）、七鞍平段丘（15～50m）の４段に区分されたが、山口義伸（青森県教育委員会. 1976）は、六ケ所村周辺の甲地段丘に相当する段丘を、千歳段丘と命名して南方地域と区別している。そのうち、鷹架遺跡の周辺地域には、千歳段丘と七鞍平段丘とが分布する。

千歳段丘は、吹越烏帽子岳より南の半島中軸部を構成する段丘である。遺跡付近では、尾駮沼の西端と南方の鷹架沼の中央部を南北に結ぶ線の西側、および市柳沼西岸以西の地域に分布している。段丘面の高度は、半島頸部の中軸部で80～90m、西と東に高度を下げて、東側の七鞍平段丘に接する段丘縁では45～55m程度になる。千歳段丘は関東地方の多摩段丘、八戸付近の天狗岱段丘に対比できるであろう。

七鞍平段丘は田面木沼と小川原湖の間の七鞍平に広い平坦面をもつ段丘で、尾駮沼付近から田面木沼付近では緩やかに東に傾斜し、段丘面高度は千歳段丘に接する部分で45～50m前後、東縁で12～15m程度になる。七鞍平段丘は関東の下末吉・武蔵野段丘、八戸付近の高館段丘・根城段丘に対比できるものと考えられる。

遺跡の西方から遺跡周辺までの地域（鷹架沼と、市柳川・市柳沼との間の台地）の段丘群は鷹架沼の中央部南側の幸畑付近（第２図の西側区画線）を境に、西方の千歳段丘と、東方の七鞍平段丘とに分けられる。第２図には七鞍平段丘の全貌が示されている。

この地域の七鞍平段丘は、図中の北東へ踊るような形で半島状に突き出す３箇所を除いて、

幅１～1.5km、長さ（東西方向）４kmと比較的広い。全体的には東へ緩く傾斜しているが、西部は傾斜がやや大きくて（15m／１kmの勾配）南北に波状に起状し、中部は平坦面がよく残されてほとんど水平に近く、東部と中部の南側では侵食されてやや複雑な起伏をもっている。

市柳沼北岸の北数400mほどを中心に小規模な沼があり、沼を含めて東から西へ七鞍平段丘を縦断する谷には、下流方で最大幅500mの沖積地が開けている。沼の北西側の沖積地には、小規模な沖積上位段丘が平坦面を残している。市柳川の下流は幅300m前後の沖積地を伴っている。

東から縦断する谷で南北に分けられた七鞍平段丘の東縁と太平洋岸との距離は、北部で約500m、南部で約700mあるが、いずれも砂丘の西側部分に潜り込んで重複する。

鷹架沼東部と七鞍平段丘との間には、最大幅１km余、東西方向2.5kmの沖積地が広がり、この沖積地に食い込むように、七鞍平段丘から３つの半島状の台地が北西方に突き出し、そのうち、東側の突き出し部分に遺跡が立地している。

海岸線から300～500mに東縁をもつ砂丘は、海岸に並行して、300～600mの幅で南北に連なっている。砂丘は洪積世末以降に形成されたと見られ、下北半島北端から三沢付近まで、海岸に沿って並行して続く砂丘の一部で、その頂部の標高はところどころで20mを越す。文末の※２に述べているように、現世の砂丘と区別しがたいところが多いので、今後の精査が残された課題である。鷹架沼と北方の尾駮沼中部との間にも平坦面のよく残された七鞍平段丘が東西に細長くのびていて、その東端は砂丘下に潜り込んでいる。

２．地質の概要

遺跡周辺の基盤は、第三紀中新世の鷹架層、鮮新世の浜田層、第四紀の野辺地層で、その上に砂礫層・褐色火山灰層・新旧の砂丘砂層などの段丘構成層がのっている。

鷹架層は比較的硬質な塊状の砂質シルト岩やシルト岩を主とする地層で、西方の戸鎖付近では、浮石質凝灰岩や角礫凝灰岩を挟んでいる。鷹架層は、鷹架沼の湖岸に迫る段丘崖や、遺跡西側までの七鞍平段丘縁、市柳沼の東部を除く西方の地域の段丘崖の下部に存在する。

浜田層はおもに半固結状態の砂岩と砂質シルトの互層で、湖岸や河川に沿う段丘崖の随所に露出している。野辺地層は、おもにやや固結した砂岩層・シルトや粘土などの泥岩層で構成されている。浜田層と野辺地層とは周辺地域にもっとも広く分布する地層である。遺跡の直近地域では、鷹架層は沖積面下に没しているため、その上に不整合にのる野辺地層だけが崖下に露出する場所が多い。

段丘構成層のうち、褐色火山灰層は１m未満と薄い。そのうち、最上部の黄褐色ラピリ質浮石層（千曳浮石層）は、ほぼ全域に連続的ないし断続的に分布している。千曳浮石層の降下絶

対年代については直接の測定例がなく、十和田湖東方域に広く分布する八戸火山灰層の一部とされたこともあったが、最近の各地での調査からみて、八戸火山灰層以後の降下砕屑物とした方が諸資料と調和する。

褐色火山灰の上位は黒色土（腐植土）層群に漸移する。黒色土層中には飛砂層（厚いところは砂丘砂層）が挟まれるほか、十和田ａ降下火山灰層や苫小牧火山灰層をレンズ状あるいは塊状に挟む部分がある。

3．遺跡の地形と層序

今回の発掘調査は、鷹架沼と市柳沼との間に西から続く七鞍平段丘から北東に突き出す東側半島状段丘基部（新設道路部分）で実施された発掘調査（1980年度報告書）に引き続き、北側に隣接して、上半身を東に向けて手を合わせ、首を北東に伸ばして頭を突き出すような形状の半島状地の全域に実施された。

半島状地をこのように西から続く段丘主部を土台に膝を組んで座る人の形に例えれば、膝組みの部分の東西の幅と厚さはそれぞれ500ｍ、70～100ｍ、くびれた胸腹部の厚さと高さがそれぞれ150ｍ、220ｍ、東に突き出た腕から手先までの長さと幅はそれぞれ180ｍ、150～90ｍ、首から頭までの距離と幅がそれぞれ300ｍ、70～120ｍ程度になり、基部の底から頭までの距離は600ｍ程度になる。

段丘面の標高は、首状に細長く突き出した部分では、中程が14～15ｍと低く、北と南に高くなるが、先端部には16ｍ～18ｍの高地がある。中部では16ｍ程度の平坦面がよく残るが、北部との間の部分と、東に突き出す部分に、それぞれ22ｍ、21ｍのドーム状高地がある。南部は17～26ｍで基部（南）に向けて高度を増している。基部の標高は西から東へ、25ｍから21ｍと次第に低くなっている。

北側から鷹架沼までの沖積地は４～７ｍで、これに接する段丘崖の落差は10～15ｍである。

遺跡における土層序を第３図の標準土層図に示した。

Ⅰ層は厚さ15～30cmの黒色（10YR2／1）ないし黒褐色（10YR2／2）の粘性に乏しい土層で、耕作土にあたる。

Ⅱ層は黒色（10YR2／1）ないし黒褐色（10YR2／2）土層で、厚さはふつう５～20cmであるが遺跡の東北端付近では２～40cmというように大きく変動するとともに、黒褐色土の色調が灰黄褐色（10YR4／2）に変化し、上部に厚さ２～４cmのにぶい黄褐色（10YR5／4）ないしにぶい黄橙色（10YR7／3）の細粒火山灰層が、断続してレンズ状に含まれるところがある。細粒火山灰層は十和田ａ火山灰層に相当する。

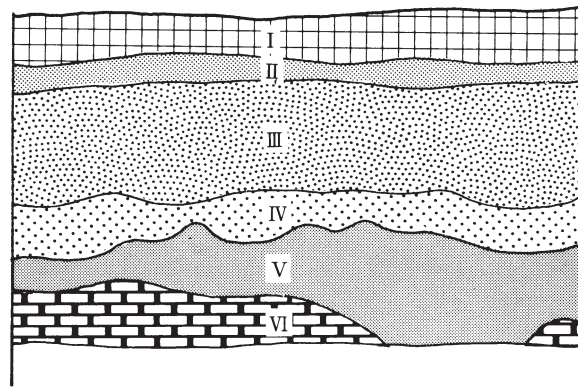
Ⅲ層は厚さ25～90cmの黒色（10YR2／1）土層で、粒径１～７㎝の暗褐色（10YR3／3）土

塊を含む部分があり、また粒径１cm以下のにぶい黄橙色浮石や明黄褐色浮石が散在している。

Ⅳ層は厚さ10～40cm、黒褐色（10YR2／2～3／2）ないし暗褐色（10YR3／3）の土層で、随所で上位のⅢ層と下位のⅤ層に由来する粒径が１～10cmの土塊が斑状に含まれ、特に下方に集中的に集まっている。

Ⅴ層はしまりのよい砂粒大の浮石質火山灰を基質とした明黄褐色（10YR6／6～6／8）ラピリ質浮石層で、多くの場所で中部に粒径0.3～0.7cmの黄橙色（10YR8／6）の浮石が集中的に含まれ、下部にも同様の浮石がかなり多く含まれ、上部では浮石はまばらになる。この浮石層は千曳浮石層に相当する。浮石層が下方に膨らむ部分では、随所で、下底に横方向の径が16～21cm程度の平たい明黄褐色（5YR5／8）粗粒砂塊（芯の部分は黄橙色＝10YR7／8）が含まれる。単層として連続する部分や、Ⅳ層が下方に垂れ下がって寸断され、浮石塊となって断続する部分など、産状は複雑に変化する。厚さは、10～50cm以上と変化に富む。

Ⅵ層は厚さ40cm以上の明黄褐色（10YR6／6）ローム層や明褐色（7.5YR5／8）砂混じりローム層、明黄褐色（10YR6／6）中粒砂層など、場所によって変化する土台の地層を一括したものである。



第３図　鷹架遺跡の基本層序

注１　六ケ所村の北に隣接する東通村にも同文字の老部川（おいっぺがわ）があるので要注意。

注２　地形区分にあたっては、鷹架沼の東部から海岸にかけて、むつ小川原港の建設によって原地形が失われているので、現地調査結果と1970年測量による国土庁発行の２万５千分の１地形図を作図と記述の基準にした。また、砂丘とした部分は、調査データに乏しく、調査者によって区分のしかた・基準が異なっている。本図では、ほとんどが洪積世末以降の砂丘砂層で、ふつうの沖積地や段丘とは地貌を異にする、標高おおむね５～20ｍ起状地帯を一括して砂丘とした。

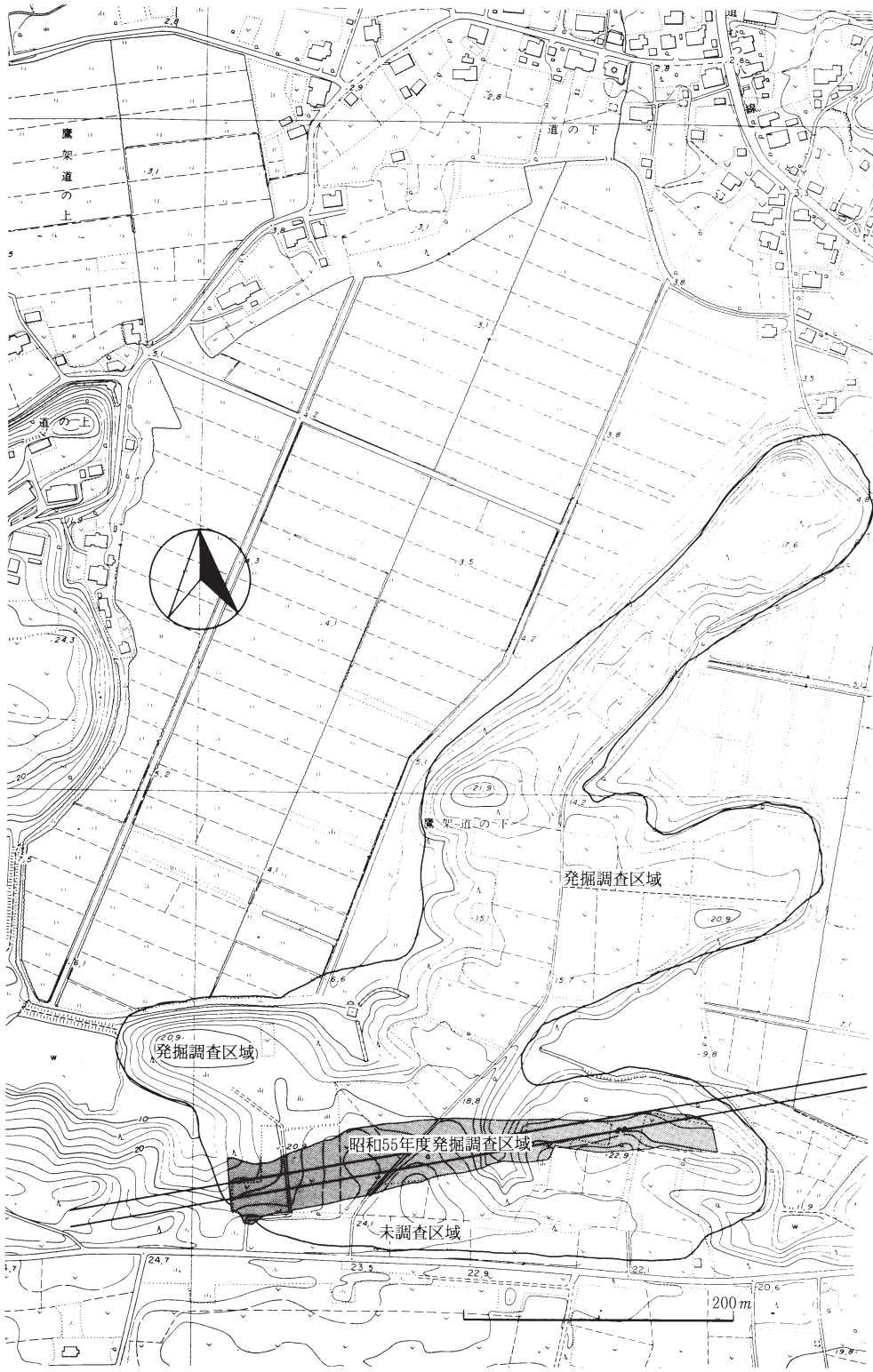
引用・参考文献

中川久夫．1969．南部中央地区地質調査報告書．その１．東北農政局計画部．

青森県．1970．むつ小川原開発地域「土地分類基本調査」平沼．国土調査．

青森県教育委員会．1976．千歳遺跡(13)発掘調査報告書．青森県文化財調査報告書第27集．

青森県教育委員会．1980．鷹架遺跡発掘調査報告書．青森県文化財調査報告書第63集．



第4図　鷹架遺跡発掘調査区域図

第Ⅳ章　平成５年度鷹架遺跡試掘調査の成果

鷹架遺跡は、昭和54年に臨港道路計画の一部として幹線連絡道路（通商鷹架南線）の建設に伴い幅55ｍ、長さ380ｍの路線内を発掘調査している。ここからは、縄文時代早期から後期に渡る各時期の土器・石器の出土及び18基の土坑を検出している。

今回は、建設された道路の北側の段丘約５万ｍ²を対象に試掘調査を実施した。

調査の結果、遺跡は、遺構配置図及び遺物分布（付図）に見るような遺物の出土および遺構の検出が認められた。時期は、縄文時代早期の貝殻文系（蛍沢式、物見台式）の時期、ムシリ式期、縄文時代前期の早稲田６類期、縄文時代後期前半（十腰内Ⅰ式）期、平安時代の各時期に渡っている。出土した遺物の量は、ダンボール箱で20箱程度である。

遺構は、住居跡４軒（縄文時代早期（物見台式）１軒、平安時代３軒）、土坑が11基、溝状土坑７基、焼土１基、貝塚のブロック３基を検出した。

精査を実施した遺構は、第１号住居跡（縄文時代早期）、第２号住居跡（平安時代）、第１号土坑、第11号土坑、第１号～４号溝状土坑、第１号焼土である。

検出遺構及び出土遺物については、以下に記載する。

第１節　遺　　構

（１）住　居　跡

鷹架遺跡の試掘調査においては、縄文時代早期の竪穴住居跡１軒、平安時代のもの３軒の計４軒の住居跡が確認された。

南区では、ＣＱ－118グリッドで縄文時代早期物見台式期に営まれた第１号竪穴住居跡が検出された。北区ではＥＫ－128、ＥＷ－148、ＦＧ－158の各グリッドにおいて、それぞれ第２号、第３号、第４号竪穴住居跡が確認された。北区で確認された３軒の竪穴住居跡はいずれも平安時代のものと思われる。

第１号および第２号住居跡の２軒は調査を終えたが、第３号竪穴住居跡は確認面までの状況を記録し、第４号住居跡については位置を確認するに留めた。

以下に第１号、第２号、第３号竪穴住居跡について個々に記すこととする。

(1)　第１号住居跡（第５～13図）

＜位置と確認＞ＣＲ－118、ＣＳ－118グリッドにまたがるトレンチを粗掘り中に、ＣＲ－118グリッドにおいて遺物が集中して出土した。また、床面と思われる踏み固められた面が検出されたことから住居跡と断定して精査を行った。そのため、本住居跡の北東部の壁は粗掘り中に失

われてしまい、遺存していない。

＜平面形・規模＞平面形は不整な円形で東西３ｍ84㎝、南北３ｍ69㎝を測る。

＜壁＞北側は壁高10㎝、北西の壁は15㎝で、しっかりと立ち上がる。南半分の壁は壁高20～25㎝で比較的緩やかに立ち上がる。

＜床面＞Ｖ層を利用して北側にわずかに傾斜しているが、全体的に凹凸が少ない堅緻な床面を造成している。

＜柱穴・ピット＞ピットは18個確認できた。以下に各ピットの深さを記す。

P_1…16㎝、P_2…16㎝、P_3…12㎝、P_4…9㎝、P_5…8㎝、P_6…9㎝、P_7…29㎝、P_8…28㎝、P_9…27㎝、P_{10}…26㎝、P_{11}…22㎝、P_{12}…43㎝、P_{13}…39㎝、P_{14}…8㎝、P_{15}…72㎝、P_{16}…36㎝、P_{17}…36㎝、P_{18}…24㎝

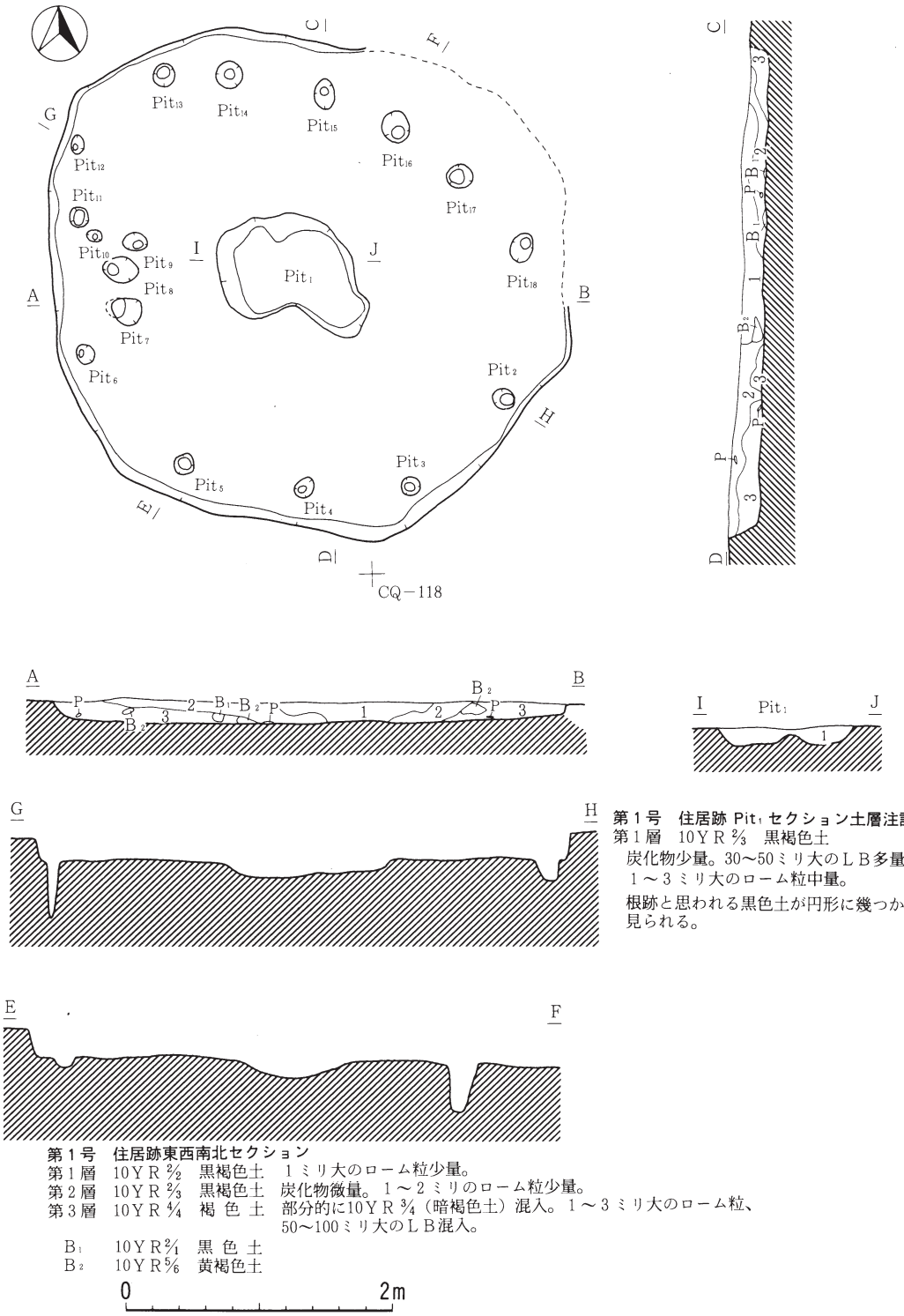
柱痕を確認できたピットはなかったが、北半の壁沿いに巡るP_{11}、P_{12}、P_{13}、P_{15}、P_{16}、P_{17}、P_{18}は、壁付近に配置される側柱穴の可能性がある。南半には比較的浅いピットのP_2、P_3、P_4、P_5、P_6が造られている。中央部に位置するP_1と、西側に集中しているピット群の目的は不明である。

＜付属施設＞中央部に深さ16㎝で、長軸１ｍ25㎝、短軸60㎝ほどのいびつな平面形態を有するP_1が検出された。本住居跡の堆積土と土質が近似しており、住居廃棄後の埋没過程において住居跡と共に埋没したものと思われる。

＜堆積土＞３層に分層され、人為的堆積の可能性がある。

＜出土遺物＞床面、床面直上、および覆土中から、全面的に土器、石器、フレーク等が多量に出土した。土器は全体を復元できたものはないが、貝殻腹縁圧痕文を特徴とする物見台式土器が出土した。貝殻腹縁圧痕文を施さないものでは、刺突列をなすもの（22・23）沈線のみのもの（26～30）、無文のもの（24・25）もみられる。石器は、石鏃12点、石匙１点、不定形石器５点、石錘２点が出土した。他に頁岩、黒燿石等のフレークおよびチップが全面からディスクトレイ１箱分出土している。

＜時期＞縄文時代早期中葉にあたる物見台式期の住居跡と思われる。



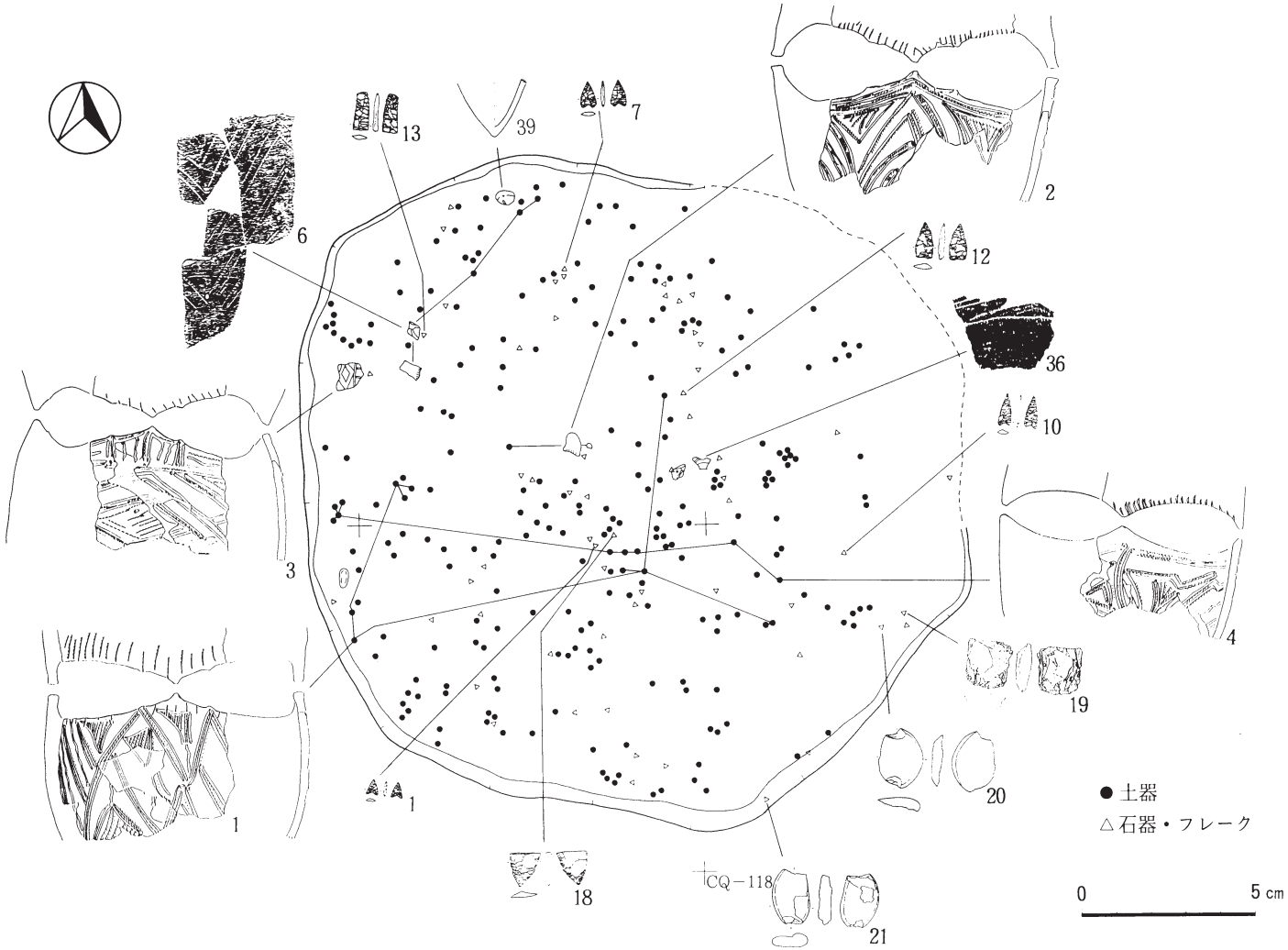
第１号　住居跡 Pit₁ セクション土層注記
第１層　10ＹＲ ⅔　黒褐色土
炭化物少量。30～50ミリ大のＬＢ多量。
１～３ミリ大のローム粒中量。
根跡と思われる黒色土が円形に幾つか見られる。

第１号　住居跡東西南北セクション
第１層　10ＹＲ ⅔　黒褐色土　１ミリ大のローム粒少量。
第２層　10ＹＲ ⅔　黒褐色土　炭化物微量。１～２ミリのローム粒少量。
第３層　10ＹＲ ⅔　褐 色 土　部分的に10ＹＲ ⅔（暗褐色土）混入。１～３ミリ大のローム粒、50～100ミリ大のＬＢ混入。

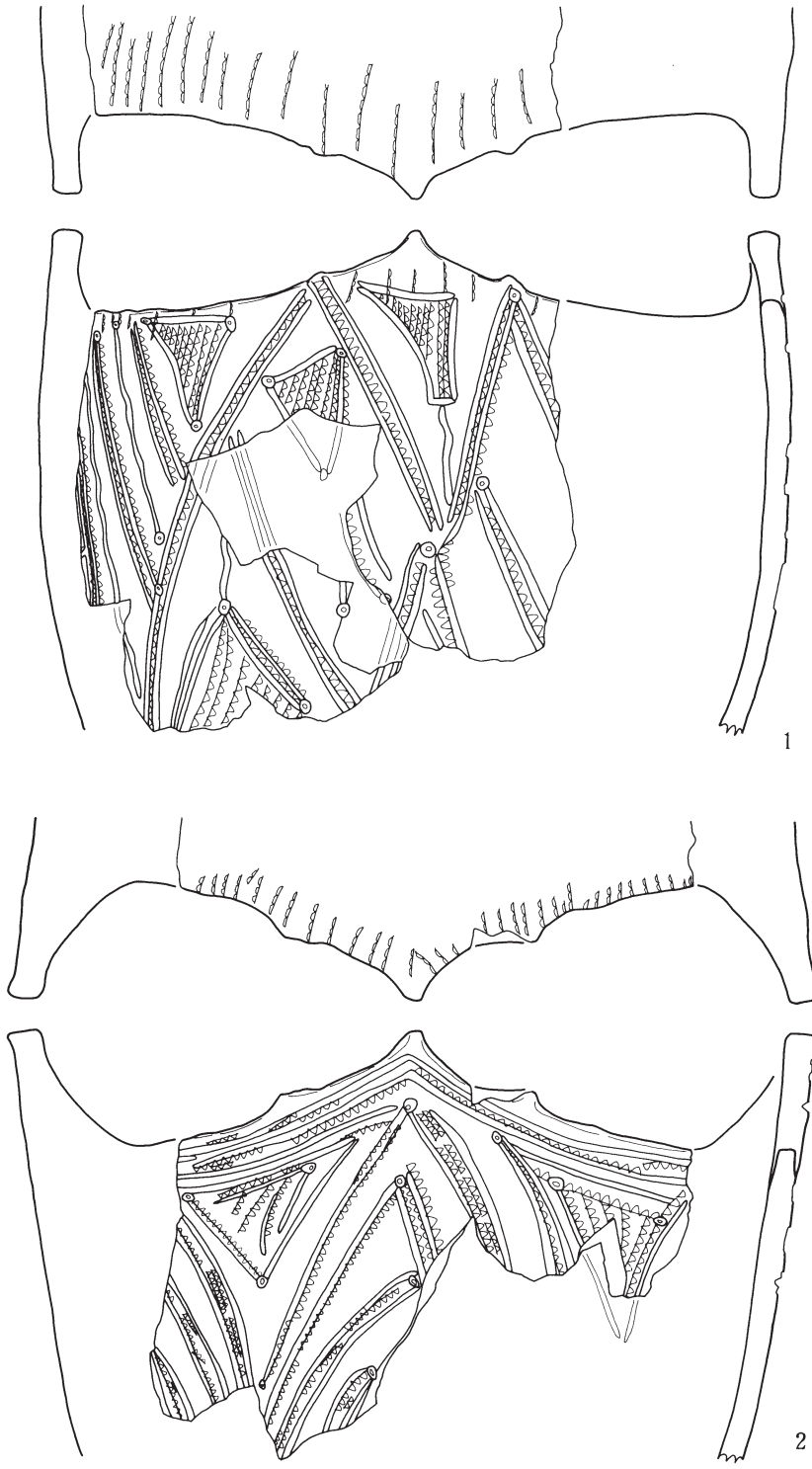
B_1　10ＹＲ⅔　黒 色 土
B_2　10ＹＲ⅚　黄褐色土

0　2m

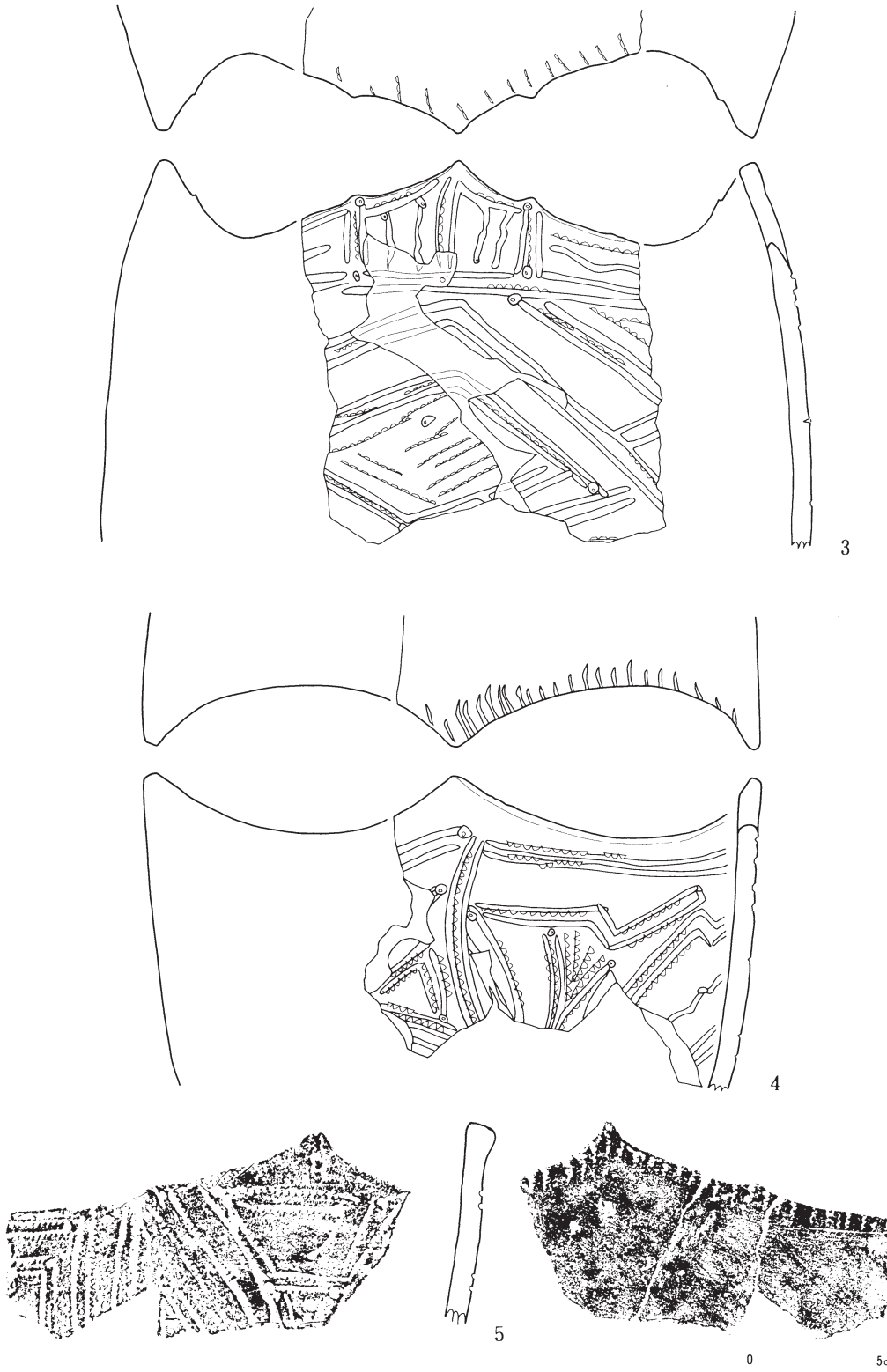
第５図　第１号住居跡（１）



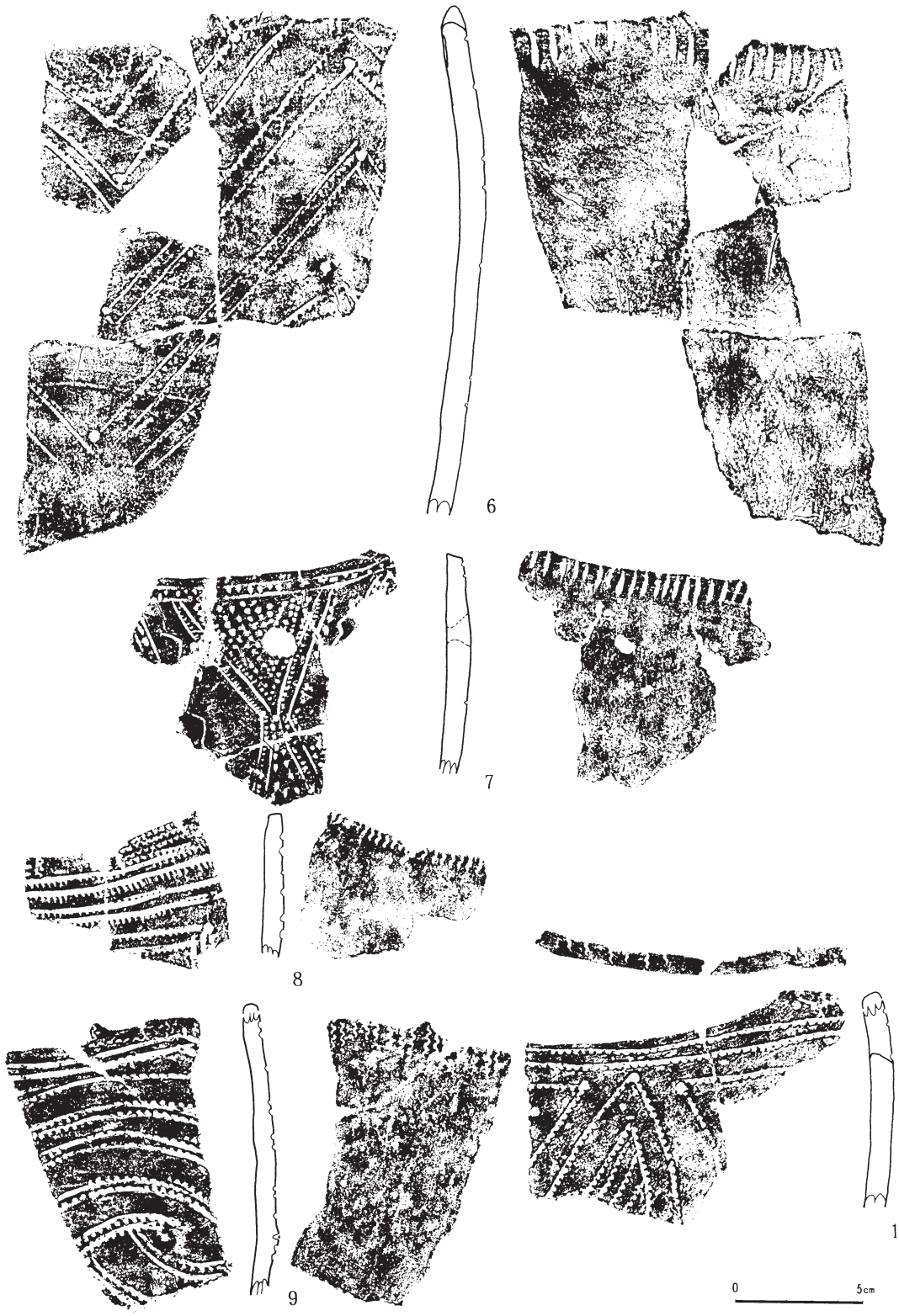
第６図　第１号住居跡（２）遺物出土状況



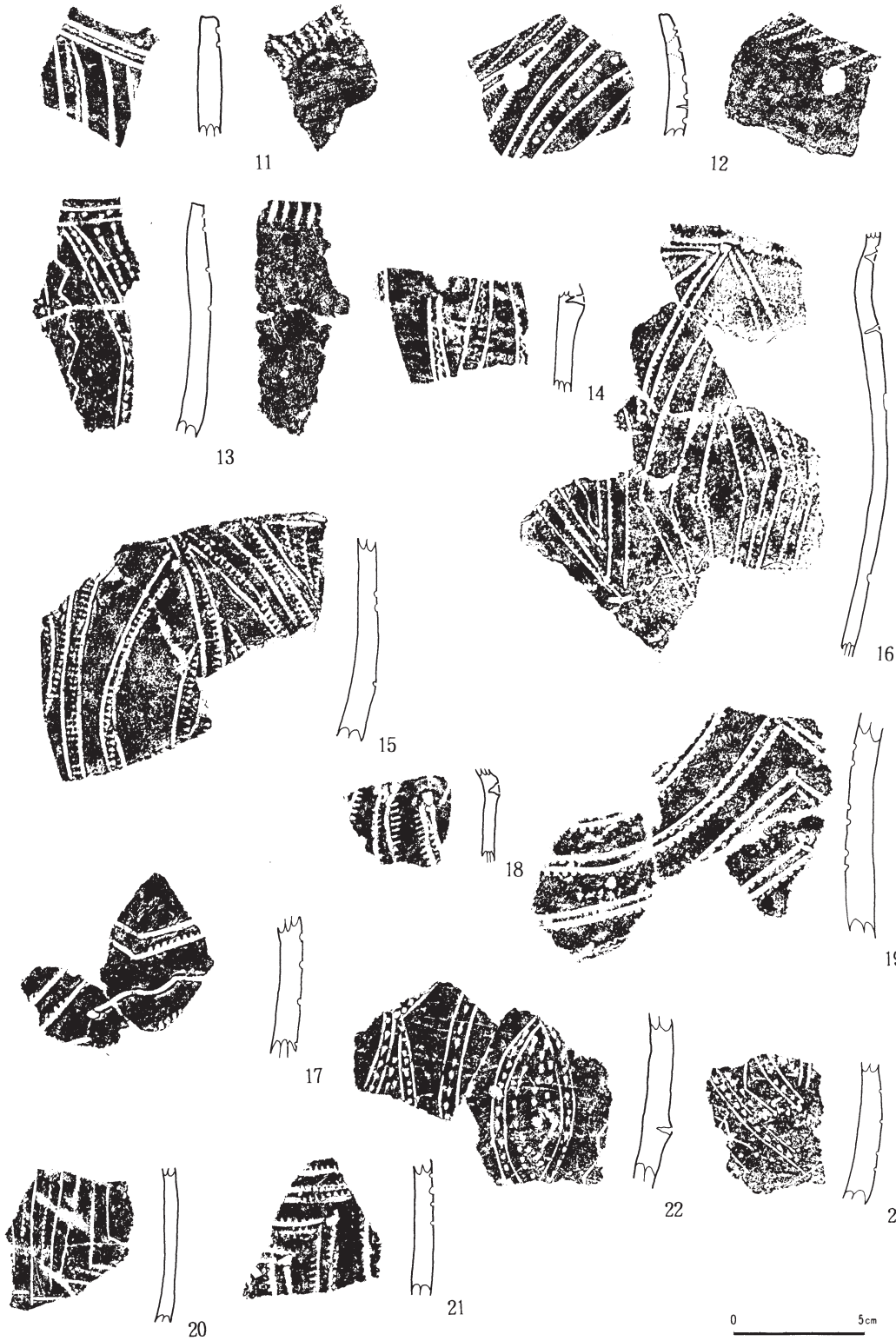
第７図　第１号住居跡（３）出土土器



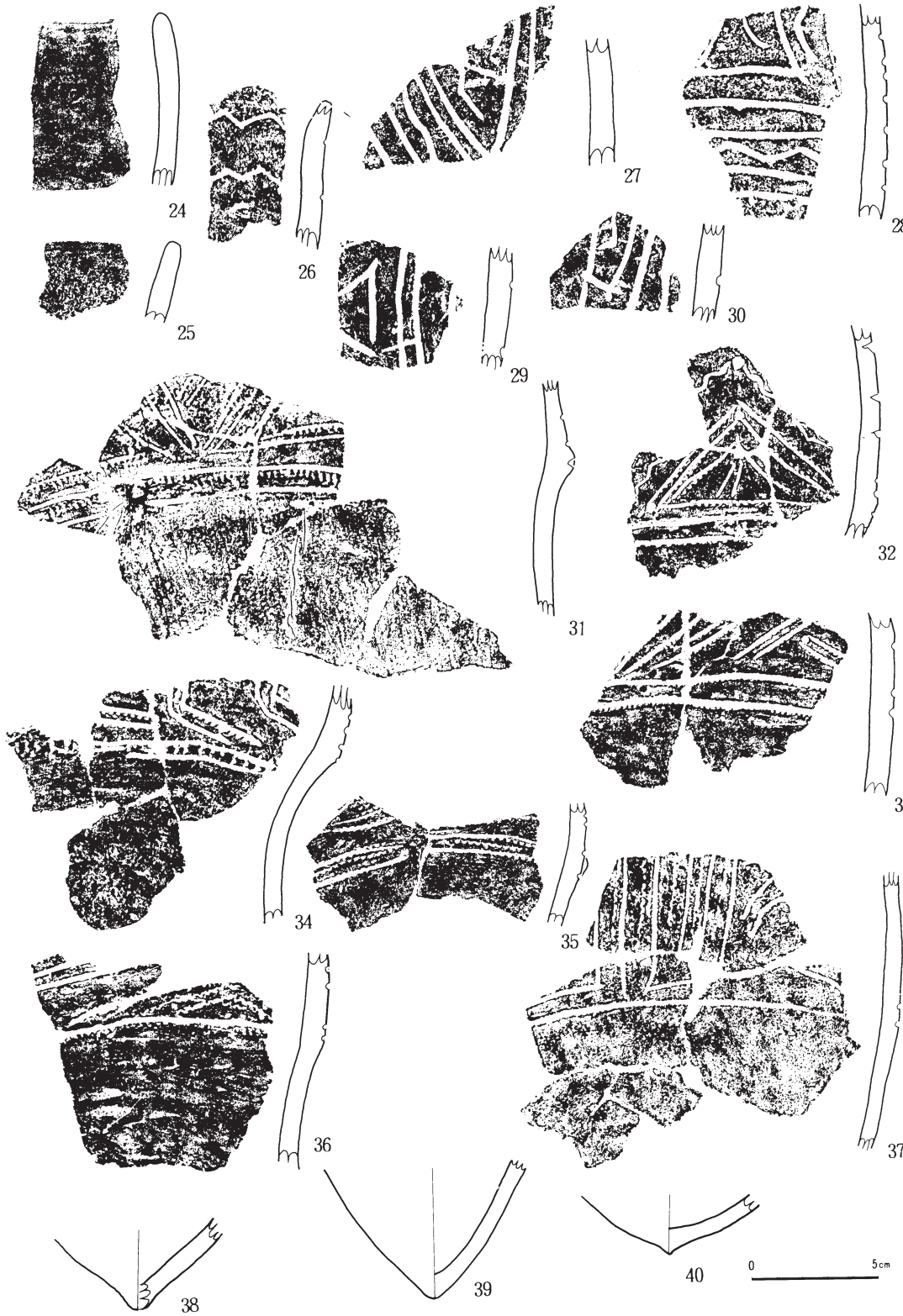
第８図　第１号住居跡（４）出土土器



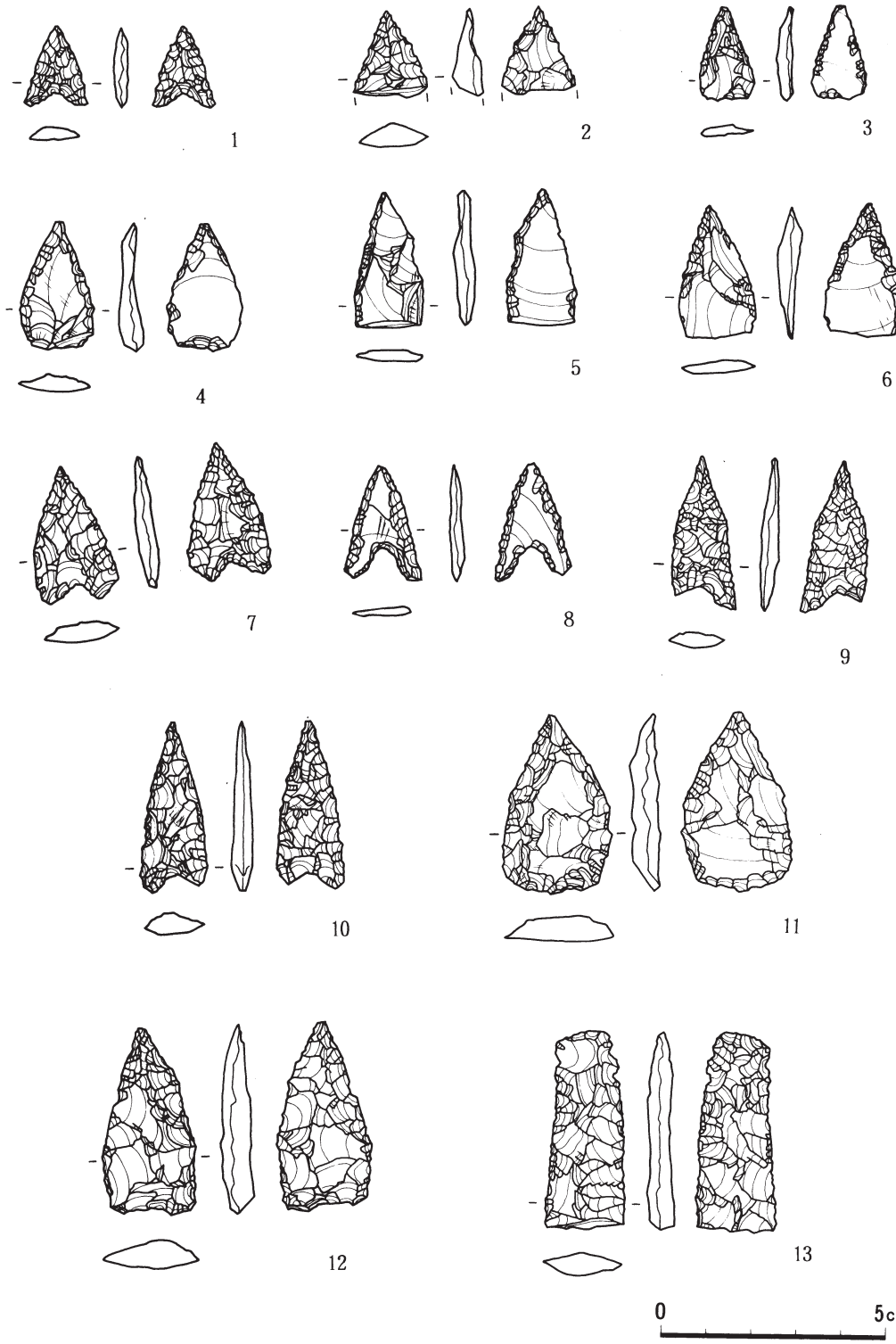
第９図　第１号住居跡（５）出土土器



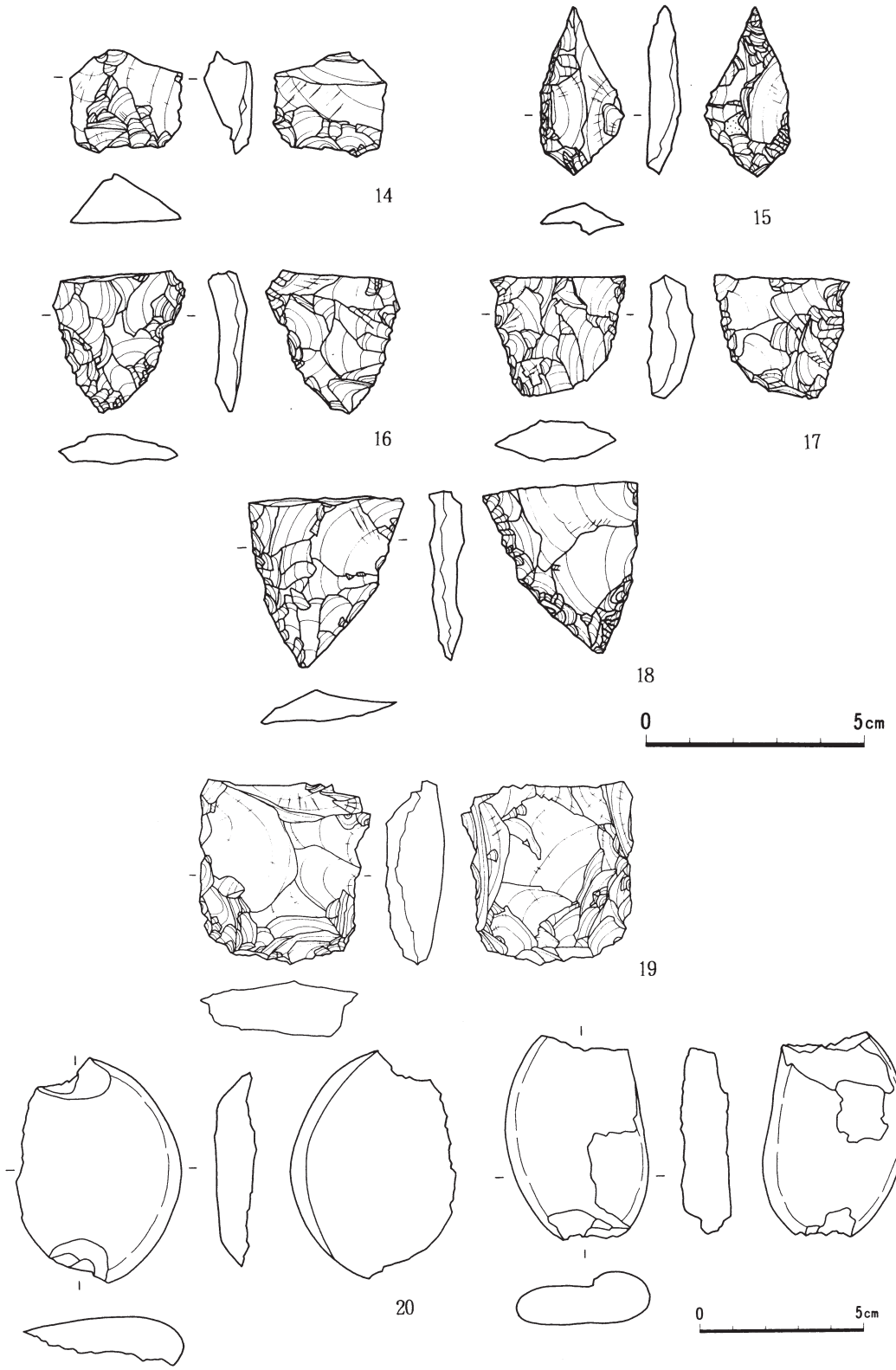
第10図　第１号住居跡（６）出土土器



第11図　第１号住居跡（７）出土土器



第12図　第１号住居跡（８）出土石器



第13図　第１号住居跡（９）出土石器

第１号住居跡内出土土器観察表

番号	地区・層位	部　位	主　た　る　外　面　施　文　文　様	口縁部内面文様	備　　考	整理番号
1	１Ｈ 床面	口縁部	鋸歯状文（貝殻腹縁文）、三角状文、円形刺突文、波状口縁	貝殻腹縁圧痕文		（４）
2	１Ｈ 床直	口縁部	山形状文（貝殻腹縁文）、平行多重文、円形刺突文、波状口縁	貝殻腹縁圧痕文		（３）
3	１Ｈ 床面	口縁部	菱形状文・三角文（貝殻腹縁文）、円形刺突文、波状口縁	貝殻腹縁圧痕文		（５）（６）
4	１Ｈ 床面	口縁部	弧状文・Ｚ字状文（貝殻腹縁文）、円形刺突文、波状口縁	貝殻腹縁による弧状圧痕文		（１）（２）
5	１Ｈ 床直	口縁部	山形文・方形文（貝殻腹縁文）、円形刺突文、波状口縁	貝殻腹縁圧痕文		（７）
6	１Ｈ 床直	口縁部	山形文（貝殻腹縁文）、円形刺突文、波状口縁	縦位短沈線		Ｐ－79
7	１Ｈ 床面	口縁部	山形文（貝殻腹縁文）、鋸歯状文、押し引き状・円形刺突文、平口縁、突起	貝殻腹縁による弧状圧痕文	補修孔	Ｐ－129
8	１Ｈ 床面	口縁部	平行多重文・方形文（貝殻腹縁文）、円形刺突文、波状口縁	貝殻腹縁圧痕文		Ｐ－133
9	１Ｈ 床直	口縁部	渦巻き文（貝殻腹縁文）、円形刺突文、波状口縁	貝殻腹縁圧痕文		Ｐ－141
10	１Ｈ 覆土	口縁部	縦位弧状文（貝殻腹縁文）、円形刺突文、波状口縁			（16）
11	１Ｈ 床面	口縁部	斜位直線文（貝殻腹縁文）、円形刺突文、波状口縁、突起	貝殻腹縁圧痕文		Ｐ－183
12	１Ｈ 床面	口縁部	斜位直線文（貝殻腹縁文）、円形刺突列、波状口縁	貝殻腹縁圧痕文	補修孔	Ｐ－167
13	１Ｈ 床直	口縁部	押し引き状刺突列、弧状・鋸歯状文、平縁	貝殻腹縁による弧状刺突文		Ｐ－117
14	１Ｈ 床面	胴部	弧状文（貝殻腹縁文）、円形刺突文			Ｐ－74
15	１Ｈ 床面	胴部	弧状文（貝殻腹縁文）、円形刺突文			Ｐ－121
16	１Ｈ 床面	胴部	縦位菱形文（貝殻腹縁文）、波状文、円形刺突文			Ｐ－127
17	１Ｈ 床面	胴部	Ｚ字状文（貝殻腹縁文）、波状文、円形刺突文			Ｐ－118
18	１Ｈ 床直	胴部	弧状文（貝殻腹縁文）、円形刺突文			Ｐ－160
19	１Ｈ 床面	胴部	山形文（貝殻腹縁文）、円形刺突文			Ｐ－71
20	１Ｈ 床面	胴部	方形文、貝殻腹縁文、			Ｐ－144
21	１Ｈ 床直	胴部	方形文（貝殻腹縁文）、円形刺突文			Ｐ－174
22	１Ｈ 床面	胴部	弧状文、押し引き状刺突列、鋸歯文、円形刺突文			Ｐ－160
23	１Ｈ 床直	胴部	弧状文、押し引き状刺突列、鋸歯文、円形刺突文			Ｐ－97
24	１Ｈ 覆土	口縁部	〔無文〕平口縁			Ｐ－38
25	１Ｈ 床直	口縁部	〔無文〕平口縁			Ｐ－43
26	１Ｈ 覆土	口縁部	鋸歯文、平口縁			Ｐ－37
27	１Ｈ 床直	胴部	弧状文、鋸歯文、多重沈線、円形刺突文			Ｐ－86
28	１Ｈ 床面	胴部	多重沈線、方形状文、鋸歯文			Ｐ－7
29	１Ｈ 床直	胴部	方形状文、鋸歯文			Ｐ－80
30	１Ｈ 床面	胴部	多重沈線、鋸歯文			Ｐ－69
31	１Ｈ 床面	胴部下半	斜位直線文（貝殻腹縁文）、円形刺突文		下半部縦位調整	（11）
32	１Ｈ 床面	胴部下半	三角文（貝殻腹縁文）、波状文、円形刺突文			Ｐ－122
33	１Ｈ 床直	胴部下半	斜位直線文（貝殻腹縁文）、円形刺突文			Ｐ－89
34	１Ｈ 床直	胴部下半	Ｚ字状文？（貝殻腹縁文）			Ｐ－39
35	１Ｈ 床面	胴部下半	弧状文(貝殻腹縁文)、貼り瘤			Ｐ－152
36	１Ｈ 床面	胴部下半	三角文(貝殻腹縁文)			Ｐ－129
37	１Ｈ 床直	胴部下半	方形文(貝殻腹縁文)、波状文、円形刺突文			Ｐ－18
38	１Ｈ 床直	底部	〔無文〕			Ｐ－26
39	１Ｈ 床面	底部	〔無文〕			Ｐ－68
40	１Ｈ 床直	底部	〔無文〕乳房状突起			Ｐ－142

第１号住居跡内出土石器観察表

図版番号	器　種	出　土 グリッド	層	計　測　値 長さ(mm)	幅（mm）	厚（mm）	重（g）	石　質	整理番号	備　　考
1	石　鏃	１Ｈ 床　面		18	4	4.0	0.5	珪　頁	2	Ｓ－10
2	〃	フク土	３　層	(20)	17	5.0	(11)	〃	8	Ｓ－29　折損
3	〃	床　面		21	12	3.0	0.7	〃	19	
4	〃	フク土	３　層	29	17	4.5	1.4	〃	4	Ｓ－13
5	〃	フク土	３　層	30	16	4.0	1.6	〃	5	Ｓ－14　折損
6	〃	床	直　上	29	17	5.0	1.6	〃	13	Ｓ－48
7	〃	床	直　上	30	18	4.0	1.7	〃	7	Ｓ－27
8	〃	床　面		26	17	3.0	0.7	〃	14	Ｓ－55
9	〃	床　面	直　上	34	15	4.0	1.3	〃	3	Ｓ－11
10	〃	フク土	３　層	38	15	5.0	1.9	〃	1	Ｓ－８
11	〃	床　面		40	25	6.0	5.7	〃	9	Ｓ－36　再利用
12	〃	フク土	３　層	42	21	7.0	5.5	〃	6	Ｓ－19

図版番号	器種	出土グリッド	層	計測値 長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	整理番号	備考
13	石匙	床面	上	(44)	18	7.0	(5.0)	珪頁	17	S－40 折損
14	剥片	床面		24	25	11.0	4.8	黒曜石	12	S－44
15	不定形	床面	直上	39	20	8.0	3.2	〃	10	S－37
16	〃	床面		37	31	9.0	6.2	珪頁	11	S－43
17	〃	フク土	2層	28	30	11.0	8.3	〃	21	S－45
18	〃	フク土	1層	39	36	7.0	9.0	〃	20	S－23
19	〃	床面		(57)	53	13.0	(63.8)	〃	18	S－2
20	石錘	床面		70	51	14.0	53.1	安山	15	S－3 片面ワレ
21	〃	フク土	3層	(53)	44	16.0	(48.4)	凝灰岩	16	S－7

(2) 第２号住居跡（第14～15図）

＜位置と確認＞ＥＩ－128、ＥＪ－128グリッドにまたがるトレンチを粗掘り中、ＥＪ－128グリッドにて黒色土の落ち込みを確認した。そこでトレンチの周囲を拡張して平面プランを確認し、セクションベルトを残して精査を行った。本住居跡はⅡ層下部から掘り込み、Ⅴ層に床面を造成している。

＜平面形・規模＞ 平面形は東西がやや長い隅丸長方形を呈し、壁長は東壁2m40cm・西壁２m62cm・南壁3m04cm・北壁2m91cmを測る。床面積は9.274㎡である。

＜壁＞各壁は北から10～15度ほど東に偏向している。壁高は、東壁と西壁が掘り込み面からそれぞれ72cm、86cmで、北壁と南壁は確認面からそれぞれ28cm、20cmを測る。立ち上がりはおおむね80度から90度であるが、ピットが壁際に構築されている北東部分などでは、壁下部が奥へ広がって、オーバーハングを呈する部分もある。

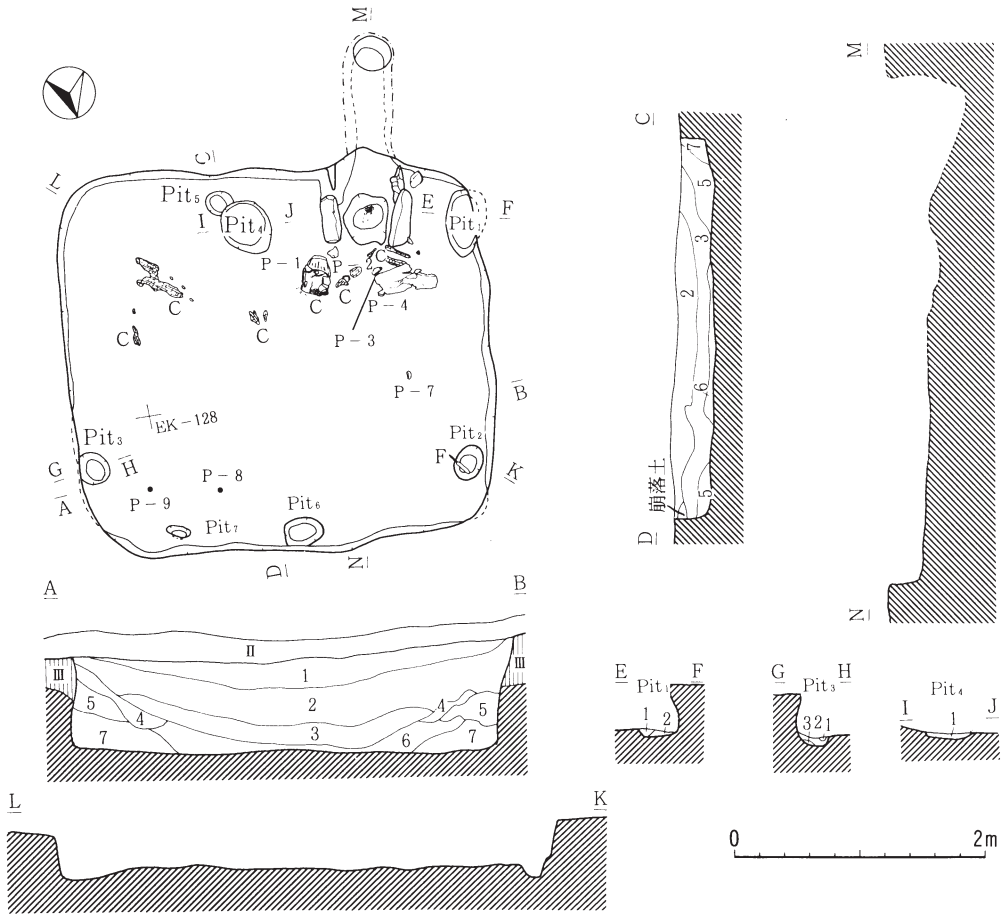
＜床面＞Ⅴ層に平坦な床面を構築している。全面において、8～15cmで黄褐色火山灰と黒色土の混土に、炭化物が若干混入されたものを踏み固めて貼床としている。

＜柱穴・ピット＞ 検出されたピットは７個である。以下に各ピットの深さを記す。

P_1…９cm、P_2…12cm、P_3…12cm、P_4…6cm、P_5…24cm、P_6…11cm、P_7…9cm

いずれも壁際において検出されたが、柱痕が確認できたものはなく、柱穴となるかどうかは不明である。またP_1とP_4は、他のピットとは平面規模、深さ共に異なっており、機能的な相違があったのではないかと思われる。カマドに接近していることから、カマドでの作業に伴う機能が想定できるかもしれない。

＜カマド＞ カマドは、南壁の西側に寄った部分に構築されており、長軸方向はＳ－16°－Ｅである。カマドの遺存状況は非常に良好で、カマド内に完形の小型甕（８）が口縁部を住居跡内部方向に向けて出土した。両袖部は、シルト質泥岩を用いている。幅44cm、長さ16cm、厚さ５cmで、中央部分に半円状の抉りが施されている泥岩がカマド内の煙道部寄りにおいて検出された。また、西側袖部の北側にも幅50cm、長さ18cm、厚さ６cmの火熱を受けた泥岩が検出されており、これも天蓋として用いられていたものが崩落したものと思われる。煙道部はトンネル式で、



第２号　住居跡 Pit₁ セクション土層注記

第１層	10ＹＲ ²⁄₂	黒褐色土	炭化物、ローム粒中量。
第２層	10ＹＲ ⁴⁄₃	にぶい黄褐色土	炭化物中量。ローム粒多量。

第２号　住居跡 Pit₃ セクション土層注記

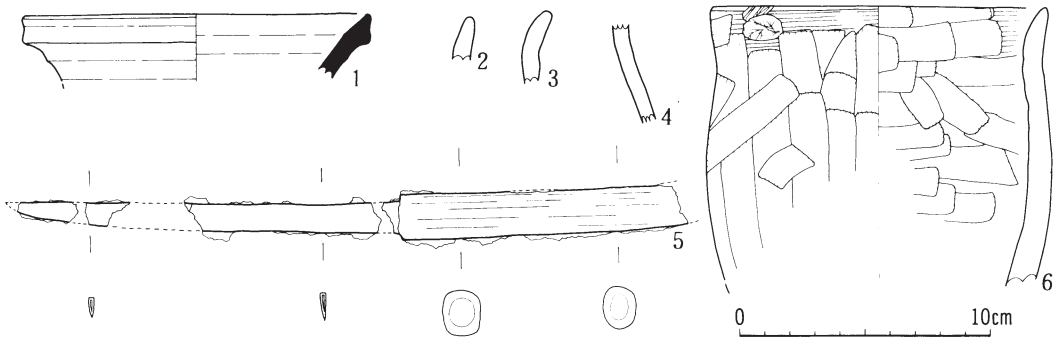
第１層	10ＹＲ ²⁄₂	黒褐色土	炭化物、ローム粒中量。
第２層	10ＹＲ ⁴⁄₃	にぶい黄褐色土	炭化物微量。ローム粒少量。
第３層	10ＹＲ ⁴⁄₄	褐 色 土	ローム粒多量。

第２号　住居跡 Pit₄ セクション土層注記

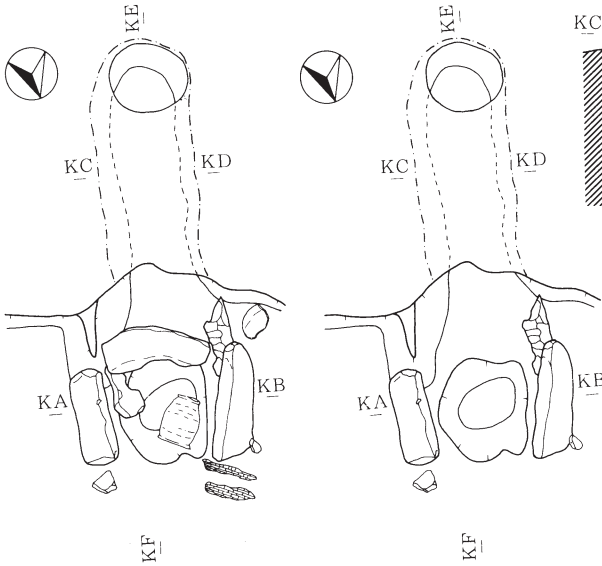
第１層	10ＹＲ ³⁄₂	黒褐色土	炭化物、ローム粒中量。焼土粒少量。

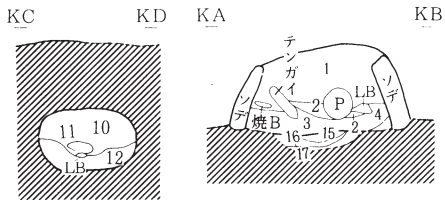
第２号　住居跡　東西南北セクション土層注記

第１層	10ＹＲ ³⁄₁	黒褐色土	炭化物、ローム粒微量。
第２層	10ＹＲ ³⁄₂	黒褐色土	炭化物微量。ローム粒少量。
第３層	10ＹＲ ²⁄₁	黒 色 土	炭化物中量。ローム粒少量。
第４層	10ＹＲ ⁴⁄₂	灰黄褐色土	炭化物少量。ローム粒多量。
第５層	10ＹＲ ²⁄₃	黒褐色土	炭化物、ローム粒中量。
第６層	10ＹＲ ²⁄₂	黒褐色土	炭化物中量。10ミリ大ＬＢ微量。ローム粒少量。
第７層	10ＹＲ ²⁄₂	黒褐色土	炭化物中量。ローム粒少量。



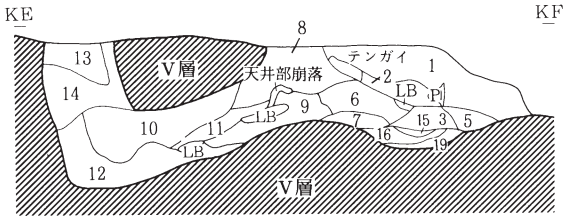
第14図　第２号住居跡（１）





第２号　住居跡カマドセクション土層注記

第１層	10ＹＲ 2/2	黒褐色土	焼土Ｂ、ＬＢ少量。
第２層	10ＹＲ 3/4	暗褐色土	ＬＢ、ローム粒少量。
第３層	10ＹＲ 3/4	暗褐色土	焼土Ｂ少量、焼土粒中量。
第４層	10ＹＲ 3/3	暗褐色土	ローム粒少量。
第５層	10ＹＲ 3/4	暗褐色土	炭化物、焼土粒少量。
第６層	10ＹＲ 3/3	暗褐色土	焼土粒微量、ローム粒中量。
第７層	10ＹＲ 4/6	褐　色　土	焼土粒、ローム粒少量。
第８層	10ＹＲ 2/3	黒褐色土	ローム粒多量。
第９層	7.5ＹＲ 4/4	褐　色　土	焼土粒多量。
第10層	10ＹＲ 3/2	黒褐色土	炭化物、焼土粒少量。ローム粒中量。
第11層	10ＹＲ 2/2	黒　色　土	炭化物少量、焼土粒微量。
第12層	10ＹＲ 3/3	暗褐色土	炭化物、焼土粒中量、ローム粒多量。
第13層	10ＹＲ 2/3	黒褐色土	ローム粒中量。
第14層	10ＹＲ 2/1	黒　色　土	ローム粒少量。
第15層	5ＹＲ 4/8	赤褐色土	焼土層。硬い。
第16層	5ＹＲ 4/6	赤褐色土	焼土層。硬い。
第17層	10ＹＲ 4/6	褐　色　土	焼土層。焼土粒中量。



第15図　第２号住居跡（２）

燃焼部から煙出しに向けて20度ほど傾斜し、煙出し底面部分が最も深くなっている。

＜堆積土＞７層に分層され、自然堆積の状況を呈している。火山灰の混入は認められない。

＜出土遺物＞カマド付近で床面から完形の土師器甕１点(７)、カマド内から完形の小型土師器甕１点(８)、住居跡北東隅床面から須恵器壷の口縁部破片１点が出土した。他に覆土から図上復元できた土師器２点、土師器の破片３点が出土した。また、Ｐ$_2$覆土から木製柄の付いた鉄製刀子(５)が出土している。

＜時期＞出土遺物から、９世紀後半から10Ｃ前半の時期の住居跡と思われる。

第２号住居跡　土師器観察表　（単位：cm）

番号	出土層位	器種	部位	口径	底径	器高	外面	内面	底部	備考
2	覆土３層	甕	口縁部				ナデ	ナデ		
3	覆土３層	甕	口縁部				ヨコナデ	ヨコナデ		
4	覆土３層	甕	口頸部				ヘラナデ	ヘラナデ		
6	覆土３層	甕	口縁部	(13.4)			ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ		
7	床面	甕	完形	18.5	9.8	28.7	ヘラナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	砂底	Ｐ－１
8	カマド	甕	完形	14.3	9.4	18.8	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ	ナデ	
9	カマド	甕	口縁部	(18.7)			ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ		

第２号住居跡　須恵器観察表　（単位：cm）

番号	出土層位	器種	部位	口径	底径	器高	外面	内面	底部	備考
1	床面	壷	口縁部	(13.8)						Ｐ－９

第２号住居跡　鉄製品観察表　（単位：cm）

番号	出土層位	種類	遺存状態	長さ	幅	厚さ	備考
5	ピット覆土	刀子	欠損	(15.7)	1.2	0.3	木製柄付

（３）第３号竪穴住居跡（第16図）

＜位置と確認＞ＥＷ－148、ＥＹ－148グリッドにまたがるトレンチを粗掘り中、黒色土の落ち込みを確認した。そのため、土層観察用のベルトを残して、南側のＥＶ－148グリッド部分を掘り下げたところ、本住居跡の煙出し部分と思われる30cmほどの円形の黒色土の落ち込みを確認した。なお本住居跡は、平面プラン、確認面までの堆積状況を記録するに留め、確認面以下は未調査である。したがって、以下に記載する事項はすべて確認面において把握し得た状況である。

＜重複＞堆積土第１層下部で、直径70cm、厚さ10cmほどの円形に分布するシジミを主体とする貝層が確認された。本住居跡廃棄後、埋没がかなり進んだ後形成された貝層であり、貝層が新しい。

＜改築＞確認面において改築は確認できなかった。

＜平面形・規模＞平面形は、不整な方形を呈している。北壁の壁長は、２m16cm、東壁および

西壁は南側がベルト内に続いており、壁長は把握できなかった。

＜壁＞各壁はそれぞれ東西南北方向を向いており、方位とほぼ一致する。壁高は、床面までは不明であるが確認面までで68cm掘り込まれている。

＜床面＞未調査である。

＜柱穴・ピット＞未調査である。

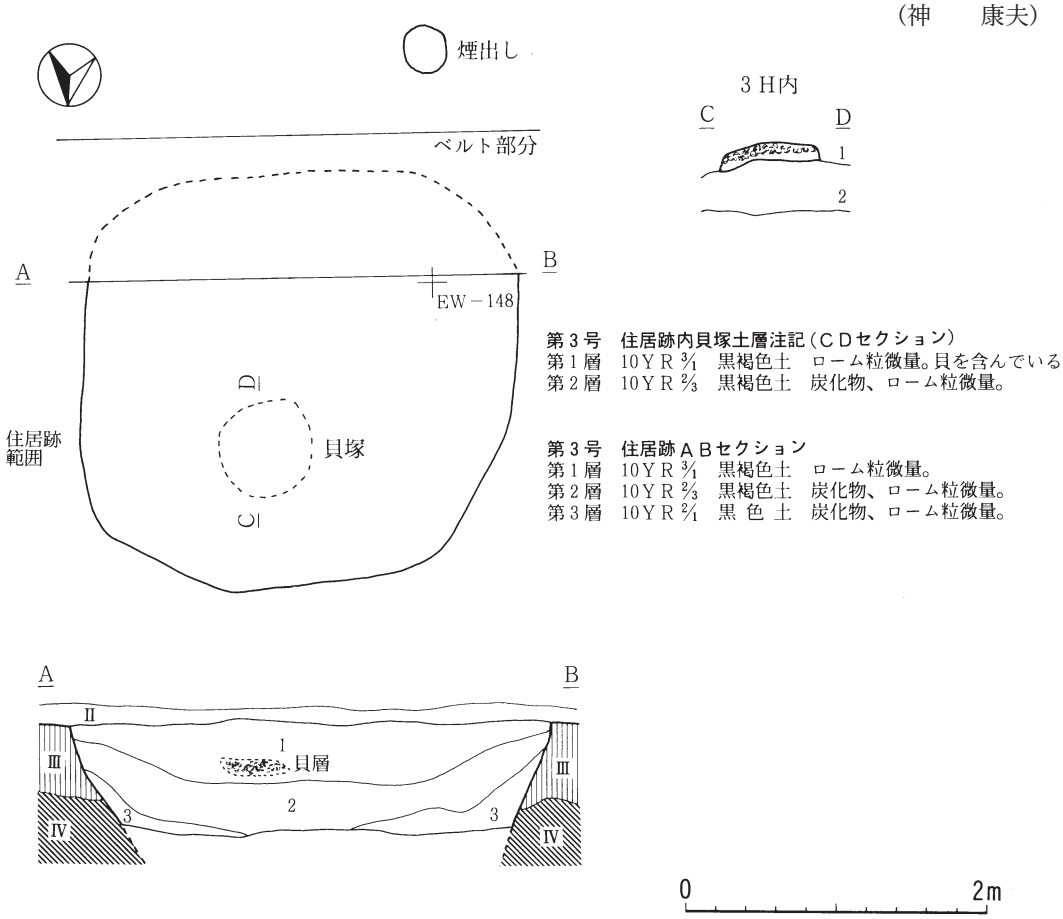
＜カマド＞煙出しと思われる黒色土の落ち込みが南西方向に確認されたことから、南壁の西より部分にカマドが構築されているものと思われる。煙道部はトンネル式である。

＜堆積土＞確認面までは３層に分層されるが、いずれも黒色ないしは黒褐色土の均質な堆積土であり、自然堆積したものと思われる。

＜出土遺物＞確認面までは、遺物は出土しなかった。

＜時期＞住居の平面形態が不整ではあるが方形を呈していること、煙出しと思われる黒色土の落ち込みが南壁の西寄り部分に見つかっていることから、平安時代の住居跡と思われる。

（神　　康夫）



第16図　第３号住居跡

（2）土　　坑

土坑は、遺構配置図（付図）に示した通り11基検出した。土坑は、ＤＷ－114グリッドから第１号土坑、ＢＹ－36グリッドから第２号～第４号が土層観察用のベルトを設けた際に土坑が切り合いの状態で検出された。ＣＢ－46グリッドからは、第５土坑、ＢＷ－44グリッドから第６号土坑、ＣＲ－125グリッドから第７号土坑、ＣＵ－118グリッドから第８号土坑、ＦＤ－142グリッドから第９号土坑、ＦＥ－148グリッドから第10号土坑、ＣＢ－36グリッドから第11号土坑が検出した。土坑は、平面形が不整円形を呈し、径約１m50cmほどのものがほとんどであった。これらの土坑のうち第１号土坑及び第11号土坑は、精査を行った。

第１号土坑（第17図）

土坑は、第Ⅵ層（砂質ローム層）で確認した。平面形は、不整円形を呈し、開口部での大きさは、径140cm×130cm、底部では、115cm×100cm、深さ28cmを測る。土坑内からは、遺物は出土しなかった。

第11号土坑（第17図）

本土坑は、焼土及び５個の礫が周辺に認められ、その下層から検出された。焼土は、暗褐色土と焼土が混在している状態で、火床面とは認められない。土坑の平面形は、長径155cm×短径150cmを測る。平面形は、不整円形を呈し、深さ20cmを測る。おそらく焼土は、土坑が廃棄された後の投げ込みと思われる。

（3）溝状土坑

溝状土坑は、７基検出した。溝状土坑は、ＣＺ－98グリッドから第1号溝状土坑、ＤＣ－98から第２号溝状土坑、ＤＣ－92グリッドから第３号溝状土坑、ＣＭ－102グリッドから第４号溝状土坑、ＥＣ－119グリッドから第５号溝状土坑、ＥＯ－128から第６号溝状土坑、ＥＲ－130グリッドから第７号溝状土坑が検出した。

これらの溝状土坑のうち第１号～第４号溝状土坑は、精査を行った。

第１号溝状土坑（第18図）

確認面（第Ⅵ層）での平面形は、長楕円形を呈する。開口部での大きさは、260cm×50cm、底部では295cm×20cm、深さは95cmを測る。底面は、長軸の両先端部がオーバーハングしている。長軸方位は、Ｎ－34°－Ｗである。

第２号溝状土坑（第18図）

確認面（第Ⅵ層）での平面形は、長楕円形を呈する。開口部での大きさは、370cm×40cm、底部では405cm×25cm、深さ80cmを測る。底面は、長軸の両先端部がオーバーハングしている。長軸方位は、Ｎ－71°－Ｗである。

第３号溝状土坑（第18図）

確認面（第Ⅵ層）での平面形は、長楕円形を呈する。開口部での大きさは、270㎝×55㎝、底部では、300㎝×25㎝、深さは85㎝を測る。底面は、長軸の両先端部は、オーバーハングしている。長軸方位は、Ｎ－40°－Ｗである。

第４号溝状土坑（第18図）

確認面（第Ⅵ層）での平面形は、長楕円形を呈する。開口部での大きさは、345㎝×25㎝、底部では、320㎝×10㎝を測る。長軸方位は、Ｎ－22°－Ｗである。

（４）焼　　土

焼土遺構は、ＣＢ－36から１基検出した。

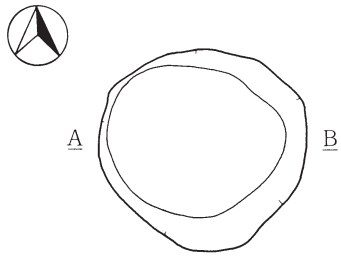
第１号焼土（第17図）

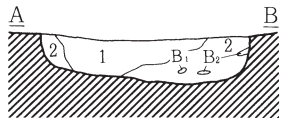
第Ⅳ層上面から焼土が確認された。焼土は、平面形が不正方形に広がり、長径130㎝×短径80㎝を測る。焼土の厚さ15㎝ほどであるが褐色土が混じっている。当時の生活面に焼土の投げ捨てをしたものと思われる。

（５）貝　　塚

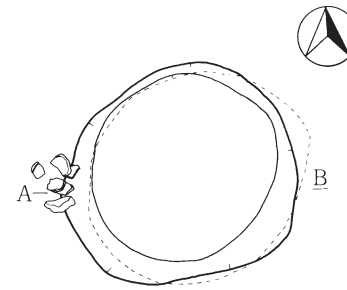
ＥＷ－148グリッド、ＥＹ－154グリッド、ＦＤ－158グリッドの３ケ所から50㎝～70㎝ほどの範囲の貝塚の小ブロックが見られた。これらは、いずれもⅡ層中から検出している。貝層の厚さは10㎝～20㎝ほどである。ＥＷ－148グリッドから出土した貝塚小ブロックは、第２号住居跡（平安時代）の上層から検出した。ＥＷ－148グリッドの貝塚ブロックは、ヤマトシジミ（corbicula japonica）である。

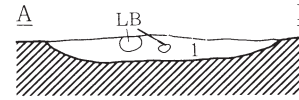
（大湯　卓二）



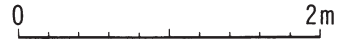


第１号土坑



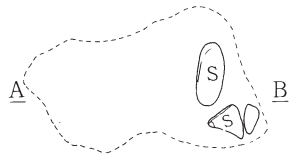


第11号土坑

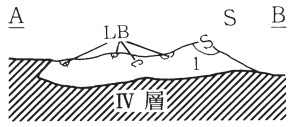


第１号　土坑土層注記
第１層　10ＹＲ 2/1　黒 色 土　ローム粒子微量。
第２層　10ＹＲ 2/2　黒褐色土　ローム粒子中量。
　B1　7.5ＹＲ 6/8　橙 色 土　砂質。
　B1　10ＹＲ 4/6　褐 色 土　砂質。

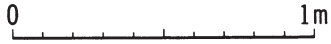
第11号　土坑土層注記
第１層　10ＹＲ 4/6　褐 色 土　５ＹＲ 5/6（明赤褐色）焼土Ｂ、暗褐色土混入、炭化物、焼土粒微量。



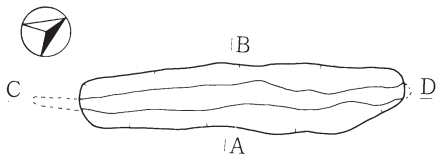
第１号　焼土土層注記
第１層　10ＹＲ 4/4　褐 色 土　炭化物微量、焼土に褐色土を含んでいる。

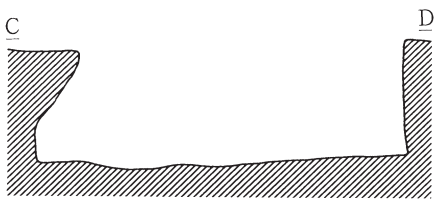


第１号焼土

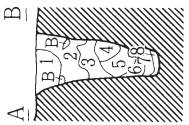


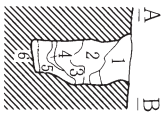
第17図　第１・11号土坑　第１号焼土





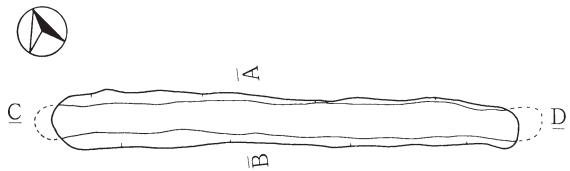
第１号溝状土坑





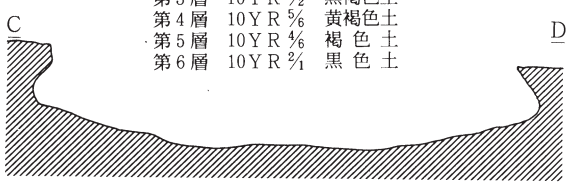
第１号　溝状土坑土層注記

第１層	10ＹＲ ½	黒　色　土
第２層	10ＹＲ ⅘	暗褐色土
第３層	10ＹＲ ⅜	黒褐色土
第４層	10ＹＲ ⅔	黒褐色土
第５層	10ＹＲ ⅚	黄褐色土
第６層	10ＹＲ ⅙	褐　色　土
第７層	10ＹＲ ⅙	褐　色　土
第８層	10ＹＲ ⅗	暗褐色土

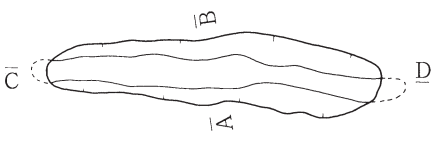


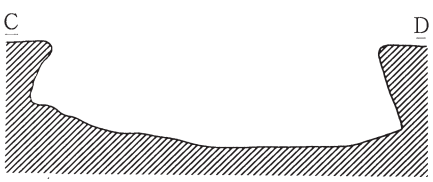
第２号　溝状土坑土層注記

第１層	10ＹＲ ⅔	黒　色　土
第２層	10ＹＲ ⅔	黒褐色土
第３層	10ＹＲ ⅔	黒褐色土
第４層	10ＹＲ ⅚	黄褐色土
第５層	10ＹＲ ⅙	褐　色　土
第６層	10ＹＲ ⅔	黒　色　土

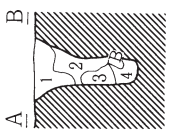


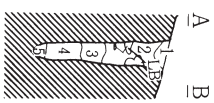
第２号溝状土坑





第３号溝状土坑

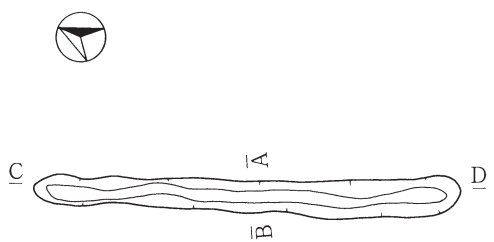




第３号　溝状土坑土層注記

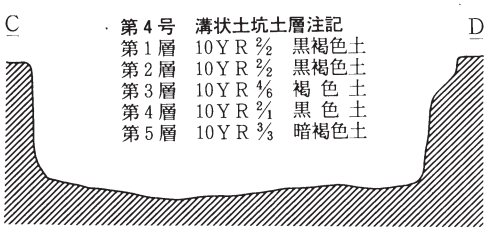
第１層	10ＹＲ ⅔	黒　色　土
第２層	10ＹＲ ⅔	黒褐色土
第３層	10ＹＲ ⅔	黒褐色土
第４層	10ＹＲ 1⅔	黒　色　土

0　　2m



第４号　溝状土坑土層注記

第１層	10ＹＲ ⅔	黒褐色土
第２層	10ＹＲ ⅔	黒褐色土
第３層	10ＹＲ ⅙	褐　色　土
第４層	10ＹＲ ⅔	黒　色　土
第５層	10ＹＲ ⅗	暗褐色土



第４号溝状土坑

第18図　溝　状　土　坑

第2節　遺　　物

遺構外から出土した遺物は、ダンボール箱20箱程度である。出土土器・石器については、観察表に一括して記載した。

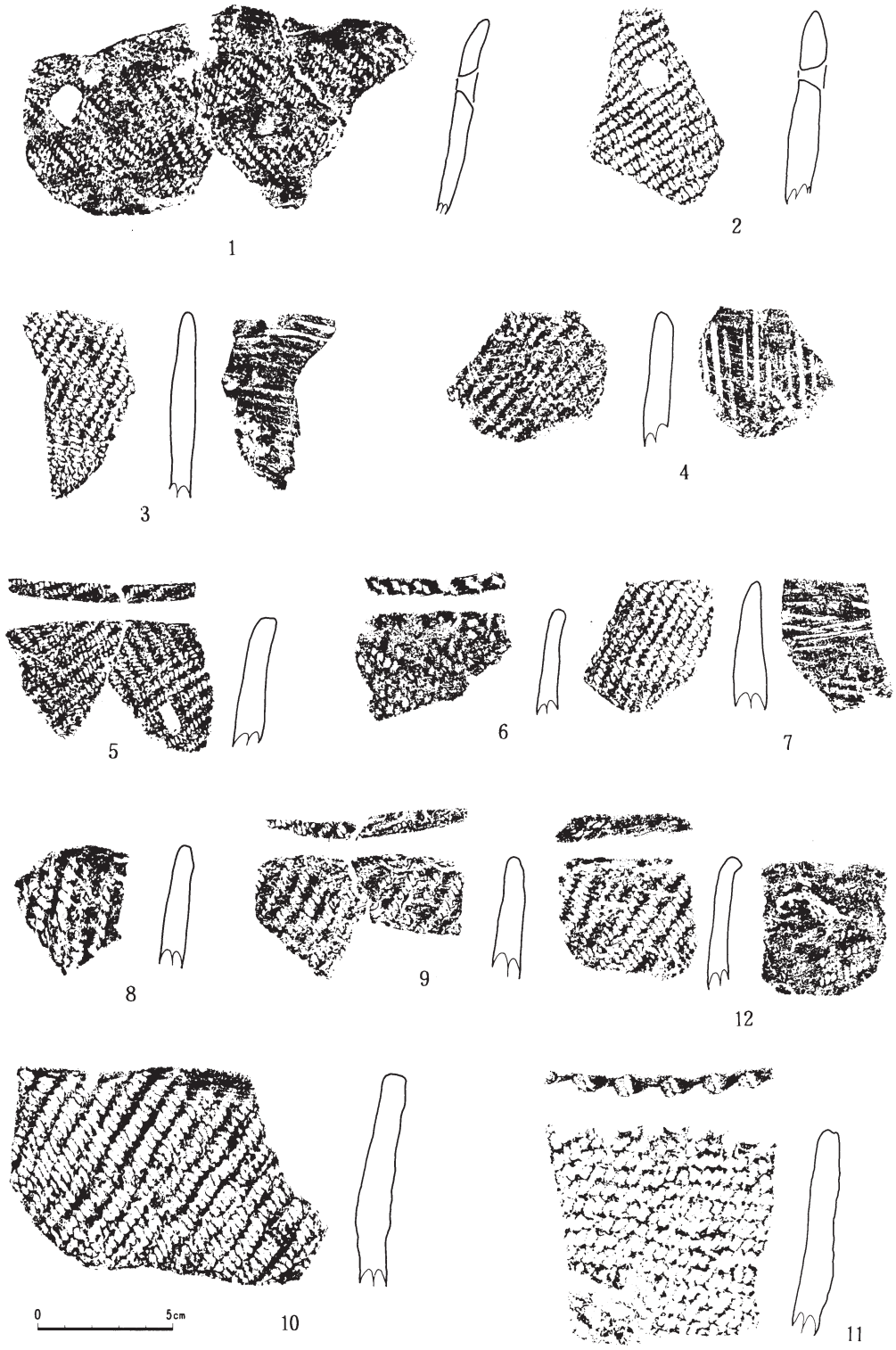
（大湯　卓二）

(1) 土　　器

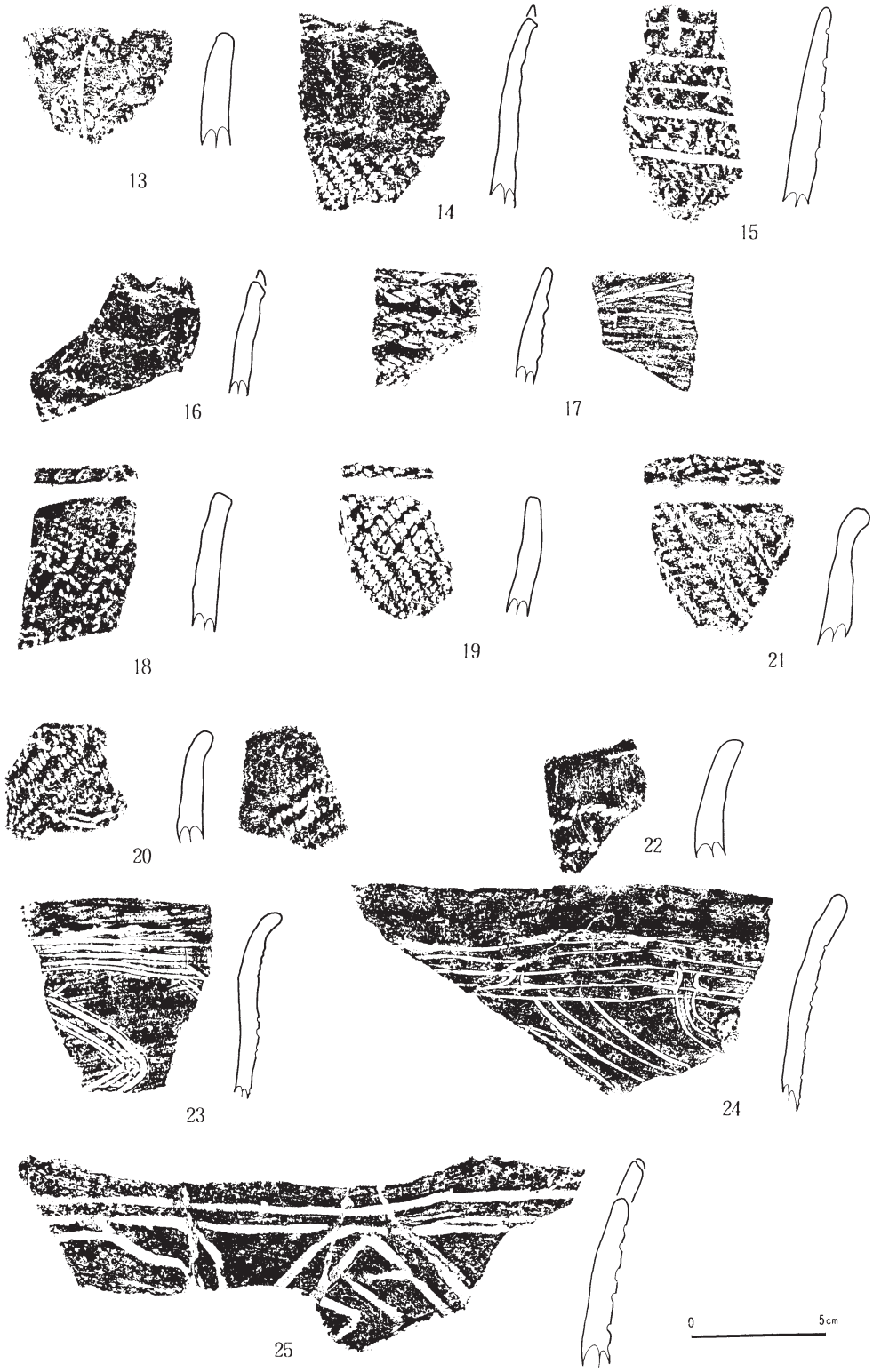
出 土 土 器 観 察 表

図版番号	グリッド	層	部位	施文文様	内面	時期	備考
第19図1	ＢＸ－42	Ⅲ	口縁部	口唇部に指頭による刻み　ＲＬヨコ	オサエ・ナデ	縄文早期後半	
2	ＢＸ－42	Ⅲ	口縁部	補修孔　ＬＲヨコ	ナデ	縄文早期後半	植物繊維
3	ＢＺ－36	Ⅲ	口縁部	ＬＲヨコ	条痕	縄文早期後半	植物繊維
4	ＢＸ－44	Ⅲ	口縁部	ＬＲヨコ・タテ	ナデ・オサエ	縄文早期後半	植物繊維
5	ＢＺ－36	Ⅲ	口縁部	ＬＲヨコ・タテ	ナデ	縄文早期後半	植物繊維
6	ＣＡ－36	Ⅲ	口縁部	口唇部に縄の押捺	ナデ	縄文早期後半	植物繊維
7	ＢＺ－36	Ⅲ	口縁部	ＬＲヨコ	条痕	縄文早期後半	植物繊維
8	ＢＺ－50	Ⅲ	口縁部	ＬＲヨコ	オサエ	早稲田５類	植物繊維
9	ＢＸ－44	Ⅲ	口縁部	ＬＲ(０段多条)ヨコ	ナデ	縄文早期後半	植物繊維
10	ＢＸ－38	Ⅲ	口縁部	ＬＲ(０段条痕)ヨコ	ナデ	早稲田５類	植物繊維
11	ＣＢ－40	Ⅲ	口縁部	口唇部に刻み　ＬＲ（０段多条)ナナメ	ナデ	縄文早期後半	植物繊維
12	ＢＹ－50	Ⅲ	口縁部	口唇部に縄の押捺　ＬＲヨコ	ナデ	縄文早期後半	植物繊維
第20図13	ＢＹ－38	Ⅲ	口縁部	ＬＲヨコ	ナデ	早稲田５類	植物繊維
14	ＣＢ－46	Ⅲ	口縁部	口唇部に縄の押捺　撚糸圧痕(ＲＬ）ＲＬヨコ	オサエ	表館Ｘ群	植物繊維
15	ＢＹ－38	Ⅲ	口縁部	口唇部に指頭押捺　縄文に平行沈線文	オサエ	表館Ｘ群	植物繊維
16	ＣＢ－46	Ⅲ	口縁部	口唇部に指頭押捺　撚糸圧痕(ＲＬ)	オサエ・ナデ	表館Ｘ群	植物繊維
17	ＣＢ－40	Ⅲ	口縁部	撚糸圧痕(ＲＬ)文	条痕	縄文早期後半	植物繊維
18	ＢＸ－40	Ⅲ	口縁部	口唇部刻み　結節回転文	オサエ・ナデ	縄文早期後半	
19	ＣＡ－36	Ⅲ	口縁部	口縁部に縄文　ＬＲヨコ・タテ	ナデ	縄文早期後半	植物繊維
20	ＢＹ－50	Ⅲ	口縁部	ＬＲヨコ	縄文	縄文早期後半	植物繊維
21	ＢＺ－48	Ⅲ	口縁部	口唇部に縄の回転　附加縄文	オサエ	早稲田５類	植物繊維
22	ＣＡ－38	Ⅲ	口縁部	撚糸圧痕(ＲＬ)文	オサエ	早稲田５類	植物繊維
23	ＣＢ－44	Ⅲ	口縁部	櫛歯状沈線文	ナデ	十腰内Ⅰ式	
24	ＣＢ－40	Ⅲ	口縁部	折り返し口縁　平行沈線文	ナデ	十腰内Ⅰ式	
25	ＢＳ－44	Ⅲ	口縁部	口縁に突起　沈線文	ナデ	十腰内Ⅰ式土器	
第21図26	ＣＢ－46	Ⅲ	口縁部	平行、入り組み(沈線文）磨消縄文　ＬＲヨコ	ナデ	十腰内Ⅰ式土器	スス状炭化物
27	ＢＺ－36	Ⅲ	口縁部	無文に平行＋カギ状(沈線文)	ナデ	十腰内Ⅰ式土器	スス状炭化物
28	ＢＹ－48	Ⅲ	口縁部	無文に平行＋孤文(沈線文)	ナデ	十腰内Ⅰ式土器	
29	ＢＶ－52	Ⅲ	口縁部	櫛歯状沈線文	ナデ	十腰内Ⅰ式土器	
30	ＢＶ－52	Ⅲ	口縁部	無文に平行・孤文(沈線文)	ナデ	十腰内Ⅰ式土器	
31	ＢＸ－40	Ⅲ	口縁部	口唇部に縄の押捺文　ＲＬヨコ	ナデ	十腰内Ⅰ式土器	
32	ＢＹ－52	Ⅲ	口縁部	櫛歯状沈線	ナデ	十腰内Ⅰ式土器	
33	ＢＹ－50	Ⅲ	口縁部	無文に平行＋楕円形(沈線文)	ナデ	十腰内Ⅰ式土器	
34	ＣＢ－44	Ⅲ	口縁部	櫛歯状沈線文	ナデ	十腰内Ⅰ式土器	
35	ＢＹ－52	Ⅲ	口縁部	無文に沈線文	ナデ	十腰内Ⅰ式土器	スス状炭化物
36	ＣＡ－40	Ⅲ	口縁部	口唇部に刻み　無文	ナデ	十腰内Ⅰ式土器	スス状炭化物
37	ＢＳ－44	Ⅲ	口縁部	無文	ナデ	十腰内Ⅰ式土器	スス状炭化物
38	ＣＢ－38	Ⅲ	口縁部	口端部に刻み　ＲＬヨコ	ナデ	十腰内Ⅰ式土器	
39	ＣＡ－38	Ⅲ	口縁部	口唇部に竹管状工具の刺突　沈線　ＬＲヨコ	ナデ	十腰内Ⅰ式土器	
第22図40	ＣＢ－44	Ⅲ	口縁部	無文	ナデ	十腰内Ⅰ式土器	スス状炭化物
41	ＢＸ－38	Ⅲ	口縁部	口唇部に指頭状刻み　沈線文	ナデ	十腰内Ⅰ式	
42	ＢＹ－52	Ⅲ	口縁部	口唇部に指頭状刻み　沈線文	ナデ	十腰内Ⅰ式	
43	ＢＺ－40	Ⅲ	口縁部	無文	ナデ	十腰内Ⅰ式	
44	ＢＹ－52	Ⅲ	口縁部	波状口縁　磨消縄文　ＬＲヨコ	ナデ	十腰内Ⅰ式	
45	ＢＹ－48	Ⅲ	口縁部	口唇部に指頭状刺突　磨消縄文　Ｌヨコ	ナデ	十腰内Ⅰ式	
46	ＢＹ－50	Ⅲ	口縁部	無文に沈線文	ナデ	十腰内Ⅰ式	
47	ＢＺ－36	Ⅲ	口縁部	無文に太い平行沈線文	ナデ	十腰内Ⅰ式	スス状炭化物

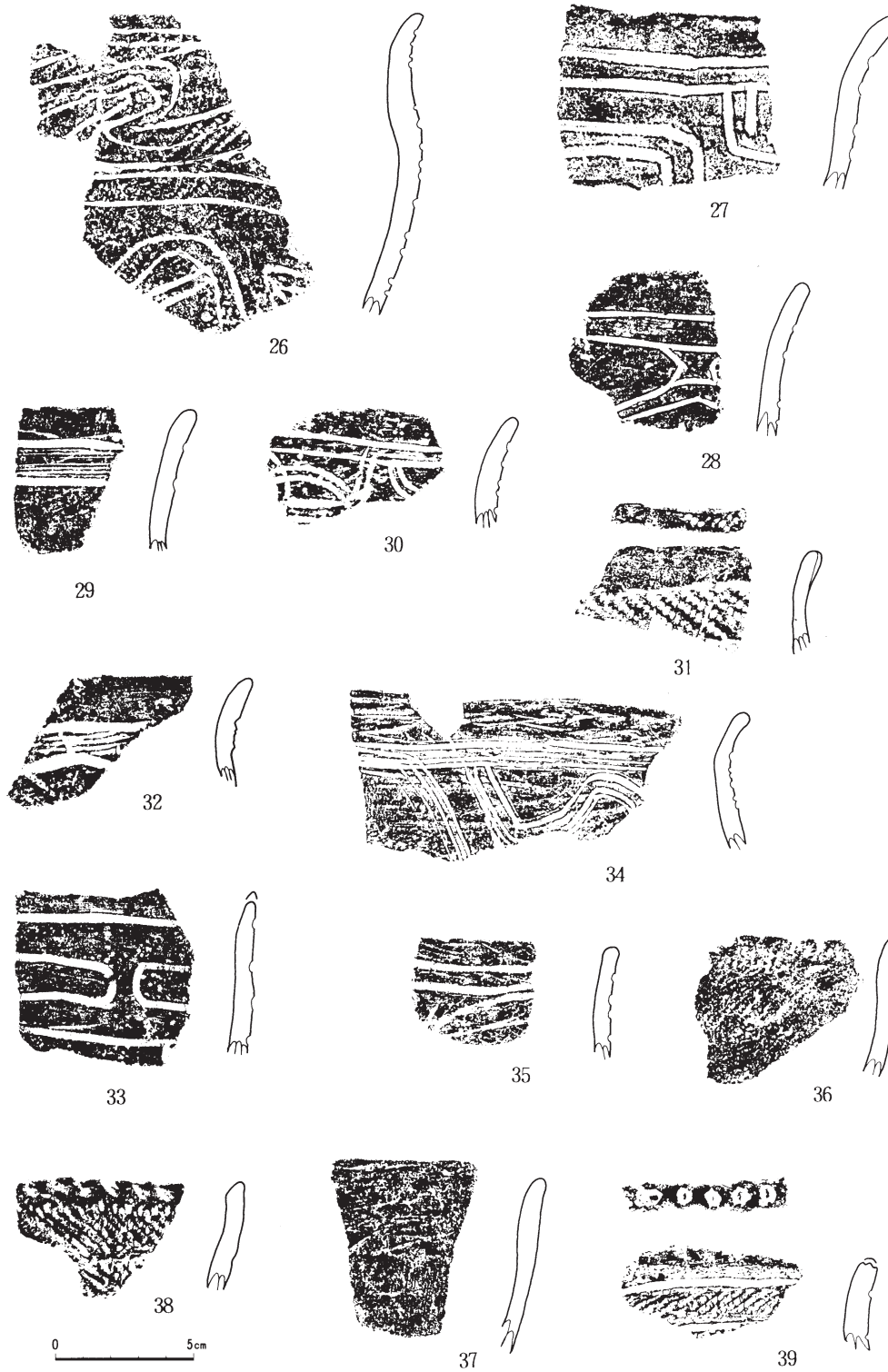
図版番号	グリッド	層	部位	施文文様	内面	時期	備考
48	ＢＹ－52	Ⅲ	口縁部	無文	ナデ	十腰内Ⅰ	
49	ＣＢ－44	Ⅲ	口縁部	無文	ナデ	十腰内Ⅰ式	壷
50	ＢＺ－48	Ⅲ	口縁部	無文	ナデ	十腰内Ⅰ式	壷
51	ＢＺ－36	Ⅲ	底部	無文	ナデ	十腰内Ⅰ式	
52	ＢＷ－40	Ⅲ	底部	無文	ナデ	十腰内Ⅰ式	
第23図53	ＣＭ－92	Ⅲ	口縁部	口端部に刻み　条痕文	ナデ	物見台式	補修孔
54	ＣＫ－94	Ⅰ	口縁部	無文	ナデ	物見台式	補修孔
55	ＣＤ－102	Ⅲ	口縁部	爪状工具による刺突文	ナデ	白浜式	
56	ＣＮ－106	Ⅰ	口縁部	沈線　貝殻腹縁文　刺突文	貝殻腹縁文	物見台式	
57	ＣＮ－106	Ⅰ	口縁部	沈線文　貝殻腹縁文　刺突文　刻目	貝殻腹縁文	物見台式	
58	ＣＰ－117	Ⅰ	口縁部	沈線文　貝殻腹縁文	貝殻腹縁文	物見台式	
59	ＣＲ－102	Ⅰ	口縁部	沈線文　貝殻腹縁文	ナデ	物見台式	
第24図60	ＣＯ－108	Ⅰ	口縁部	沈線文　貝殻腹縁文	貝殻腹縁文	物見台式	
61	ＣＲ－102	Ⅰ	口縁部	沈線文　貝殻腹縁文	ナデ	物見台式	59と同一固体
62	ＣＶ－112	Ⅰ	口縁部	沈線文　貝殻腹縁文	貝殻腹縁文	物見台式	
63	ＣＰ－117	Ⅲ	口縁部	沈線文　貝殻腹縁文	貝殻腹縁文	物見台式	
64	ＣＮ－114	Ⅲ	口縁部	沈線文　貝殻腹縁文　刺突	貝殻腹縁文	物見台式	
65	ＣＳ－106	表採	口縁部	沈線文　貝殻腹縁文	ナデ	物見台式	
66	ＣＲ－102	Ⅰ	口縁部	沈線文　貝殻腹縁文	貝殻腹縁文	物見台式	
67	ＣＶ－110	Ⅰ	口縁部	沈線文　貝殻腹縁文	貝殻腹縁文	物見台式	
第25図68	ＣＵ－102	Ⅰ	口縁部	口唇部刻み　沈線文　貝殻腹縁文	ナデ	物見台式	
69	ＣＶ－110	Ⅰ	口縁部	平行沈線	ナデ	ムシリⅠ式	
70	ＣＶ－94	Ⅰ	口縁部	ＲＬヨコ　沈線文	ナデ	早稲田６類	
71	ＤＨ－104	Ⅰ	底部	乳房状突起　条痕	条痕	吹切沢	
72	ＣＶ－94	Ⅰ	口縁部	結束羽状縄文	ナデ	早稲田６類	
73	ＥＪ－122	Ⅳ	口縁部	貝殻腹縁文	ナデ	蛍沢式	
第26図74	ＥＪ－122	Ⅳ	口縁部	貝殻腹縁文	ナデ	蛍沢式	
75	ＥＥ－122	Ⅲ	口縁部	貝殻腹縁文	条痕	蛍沢式	
76	ＥＥ－122	Ⅲ	口縁部	貝殻腹縁文	ナデ	蛍沢式	
77	ＥＦ－122	Ⅲ	口縁部	条痕	条痕	蛍沢式	
78	ＥＦ－122	Ⅲ	口縁部	貝殻腹縁文　条痕	条痕	蛍沢式	
79	ＥＦ－121	Ⅲ	口縁部	条痕	条痕	蛍沢式	補修孔
80	ＥＥ－122	Ⅲ	口縁部	連続刺突文	条痕	縄文早期	
81	ＥＦ－122	Ⅲ	口縁部	口唇部に貝殻腹縁文　貝殻腹縁文	貝殻腹縁	蛍沢式	
82	ＥＥ－122	Ⅲ	口縁部	口唇部に貝殻腹縁文　貝殻腹縁文	条痕	蛍沢式	
第27図83	ＥＥ－122	Ⅲ	口縁部	貝殻腹縁文	条痕	蛍沢式	
84	ＥＡ－116	Ⅲ	口縁部	条痕	条痕	縄文早期	
85	ＥＥ－122	Ⅲ	口縁部	条痕	ナデ	ムシリⅠ式	
86	ＥＦ－122	Ⅲ	口縁部	沈線文と条痕	条痕	ムシリⅠ式	
87	ＥＥ－122	Ⅳ	復元可	貝殻腹縁文　条痕	条痕	蛍沢式	
第28図88	ＥＦ－122	Ⅳ	口縁部	山形状沈線文	ナデ	蛍沢式	
89	ＥＩ－126	Ⅲ	口縁部	条痕　沈線文	条痕	縄文早期	
90	ＥＥ－122	Ⅲ	胴部	連続刺突文　沈線文	条痕	縄文早期	
91	ＥＮ－126	Ⅲ	胴部	条痕	条痕	縄文早期	
92	ＥＦ－116	Ⅲ	口縁部	貼付帯にＲＬの撚糸圧痕　沈線文　刺突文	ナデ	ムシリⅠ式	
93	ＥＦ－121	Ⅳ	口縁部	条痕→ＲＬ撚糸圧痕→ＬＲヨコ	条痕	縄文早期	
94	ＥＦ－122	Ⅲ	底部	条痕	ナデ	縄文早期	
第29図95	ＥＪ－122	Ⅳ	底部	無文	ナデ		
96	ＥＦ－122	Ⅲ	底部	条痕	ナデ	縄文早期	
97	ＥＥ－122	Ⅲ	底部	無文	ナデ	縄文早期	
98	ＥＲ－148	Ⅲ	口縁部	折り返し口縁　網目状撚糸文	ナデ	縄文後期	
99	ＣＢ－46	Ⅲ	半完形	平行・Ｓ字状沈線	ナデ	十腰内Ⅰ式	壷
100	ＦＥ－148	Ⅲ	胴部	須恵器	ロクロ	平安時代	
101	ＥＸ－148	Ⅰ	胴部	陶器　灰釉	ロクロ	近世	壷　貝層上面
102	ＥＸ－148	Ⅰ	胴部	須恵器	ロクロ	平安時代	
103	ＥＸ－148	Ⅰ	底部	陶器　自然釉	ロクロ	中世	



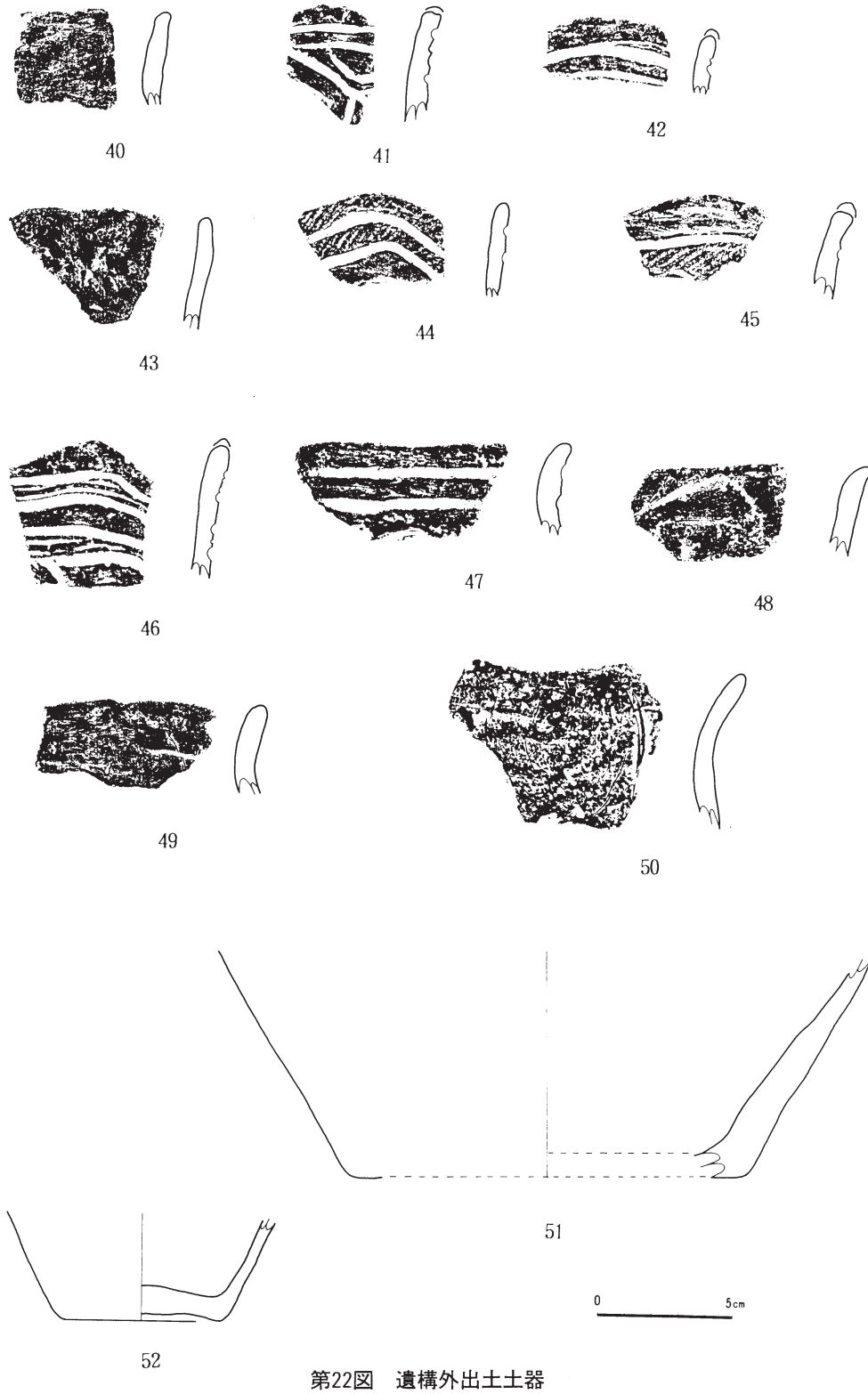
第19図　遺構外出土土器



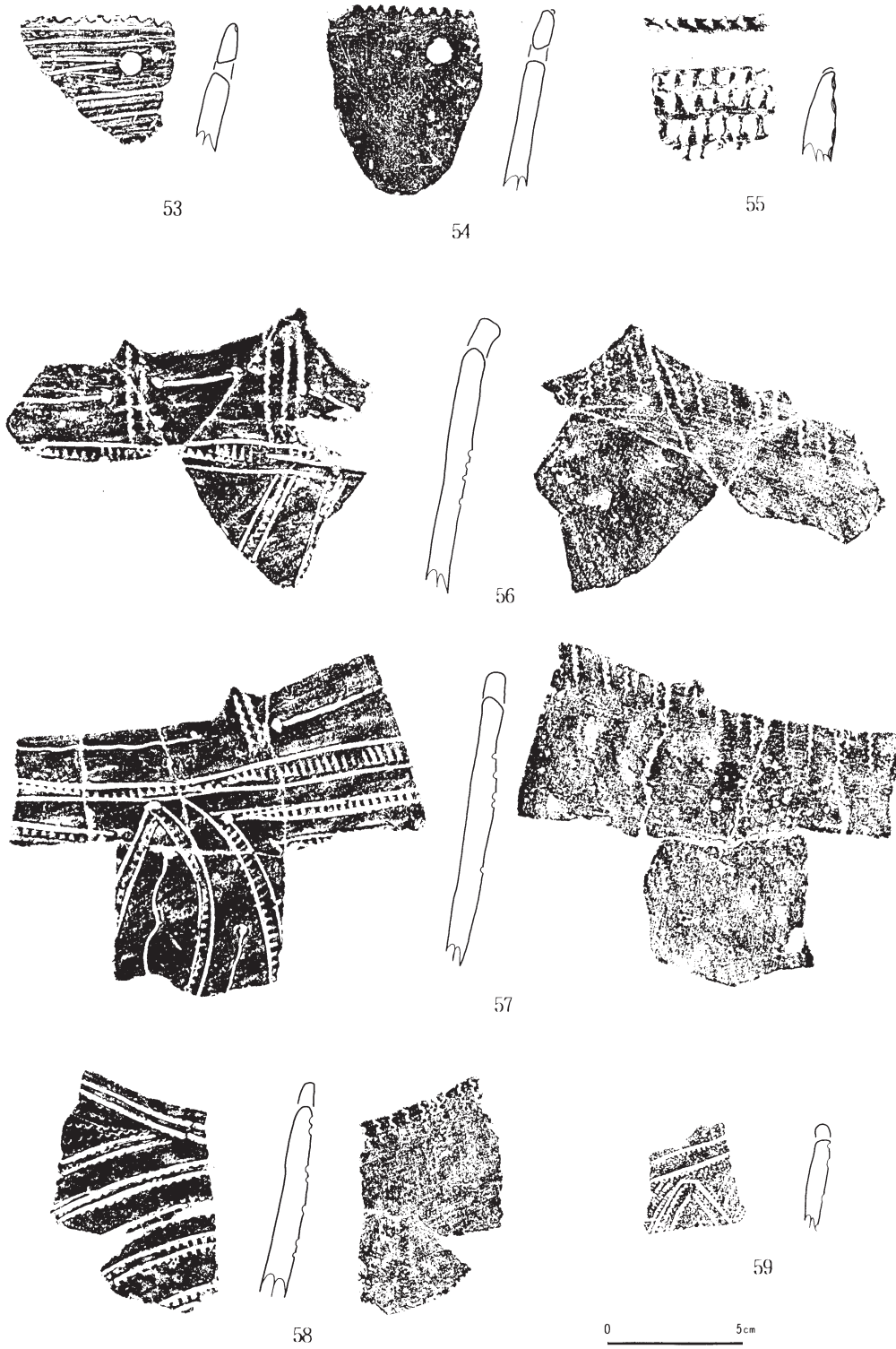
第20図　遺構外出土土器



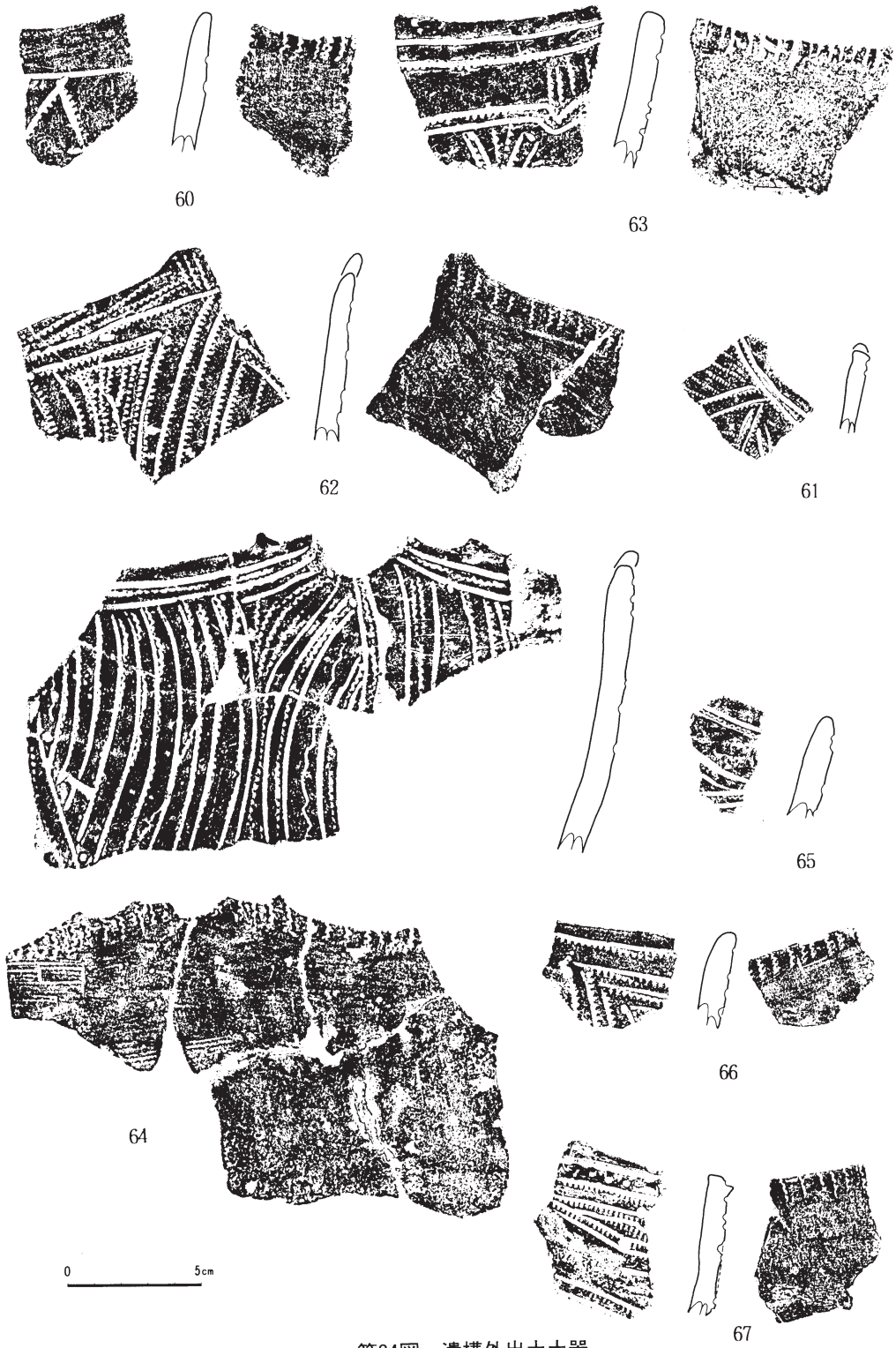
第21図　遺構外出土土器



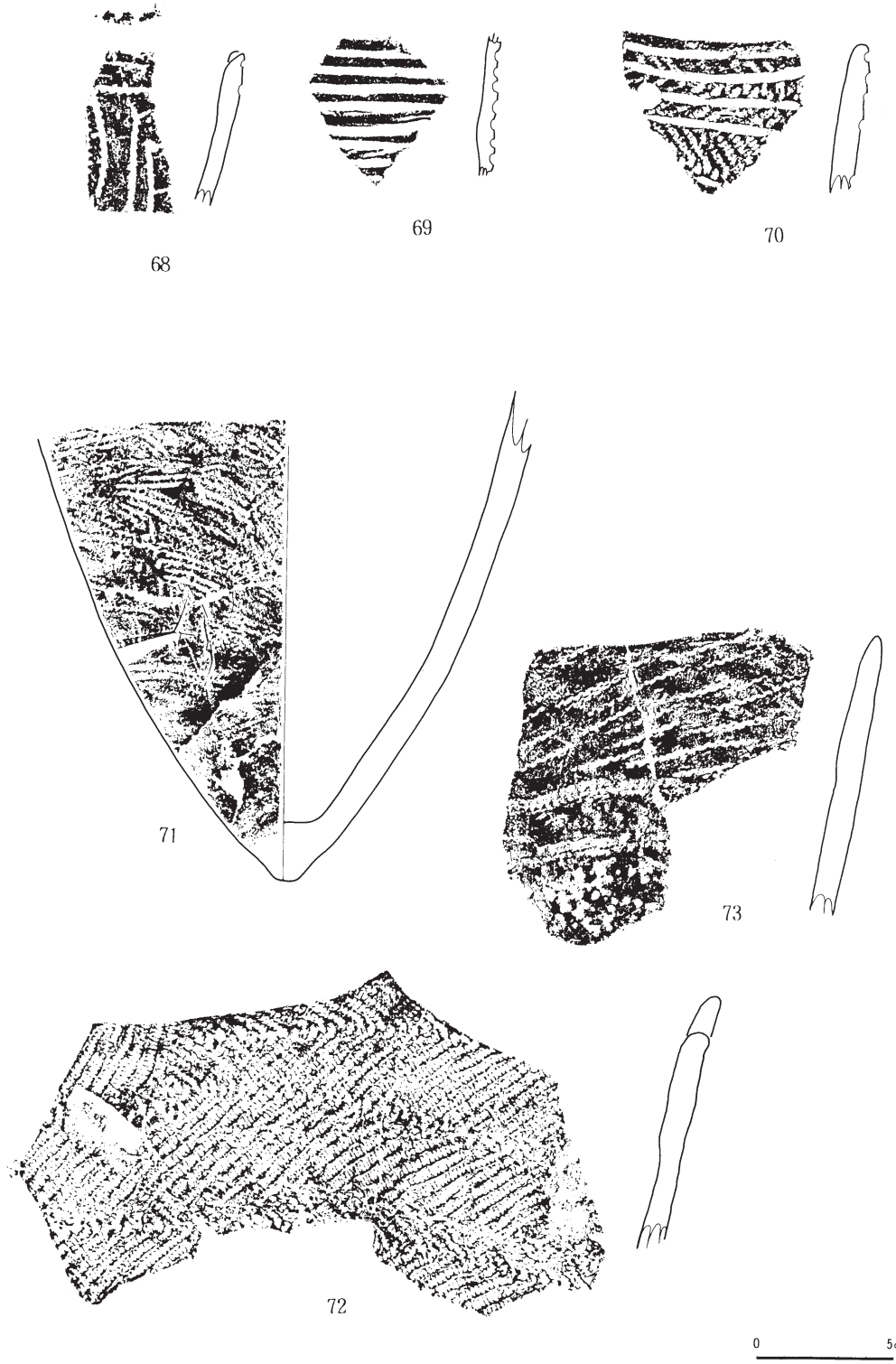
第22図　遺構外出土土器



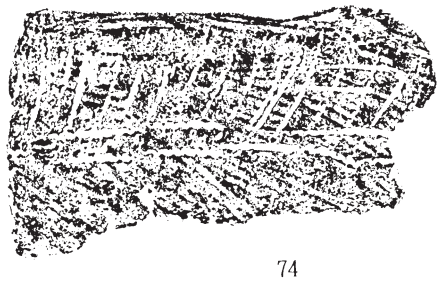
第23図　遺構外出土土器



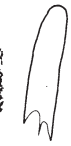
第24図　遺構外出土土器



第25図　遺構外出土土器



74

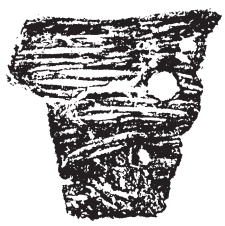


75

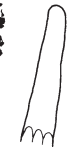
76

77

78



79

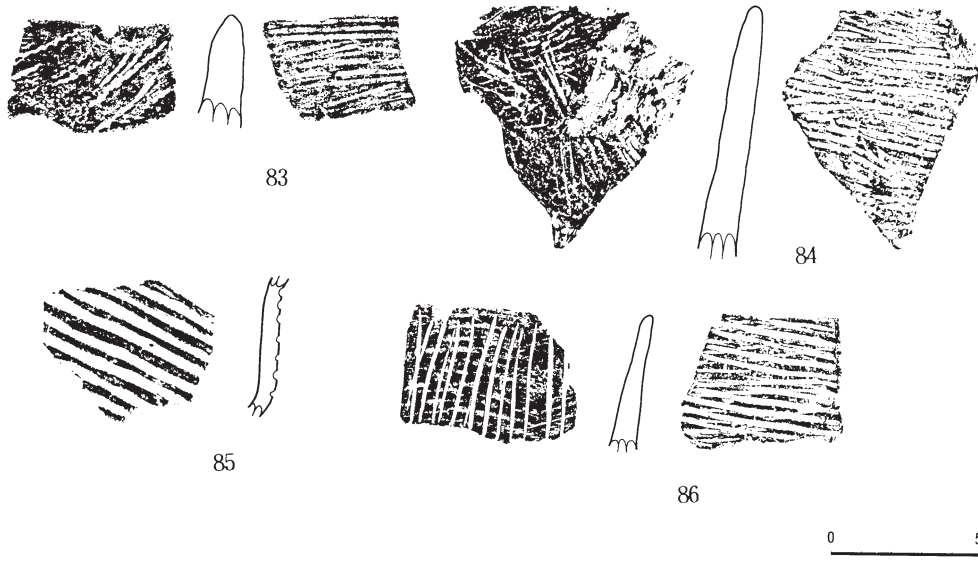


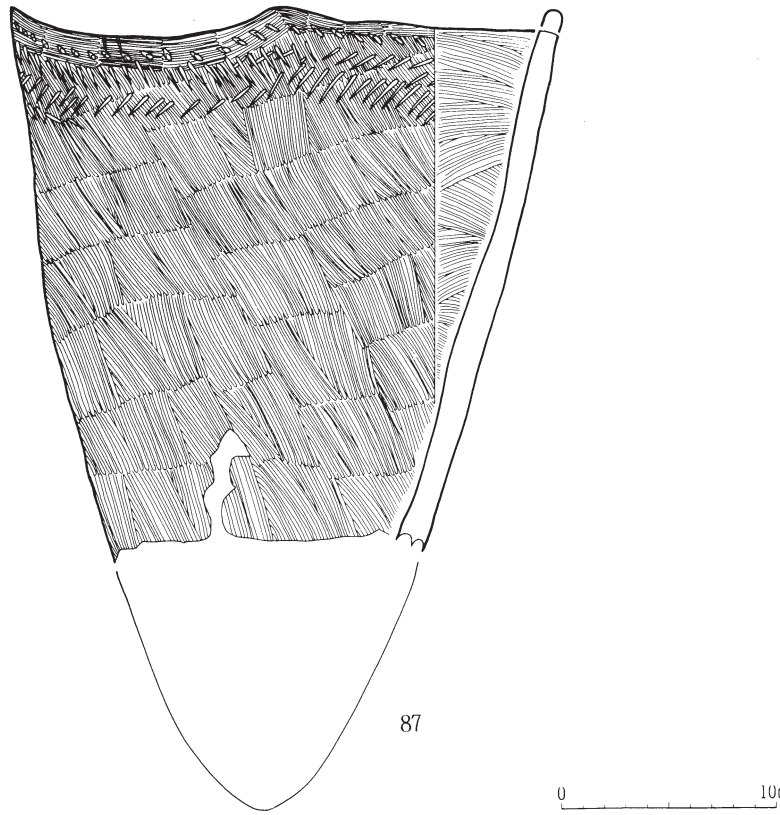
81

80

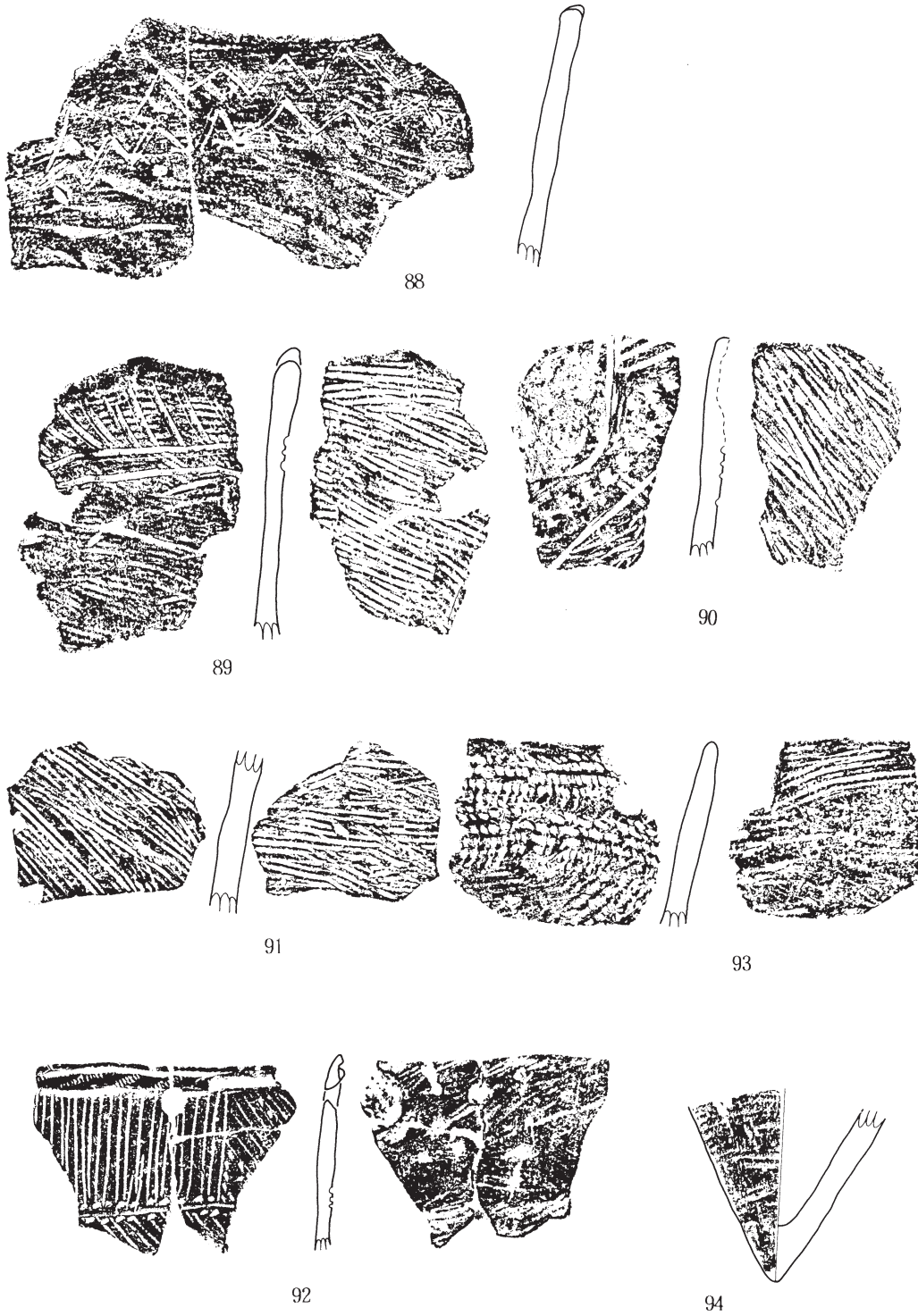
82

第26図　遺構外出土土器

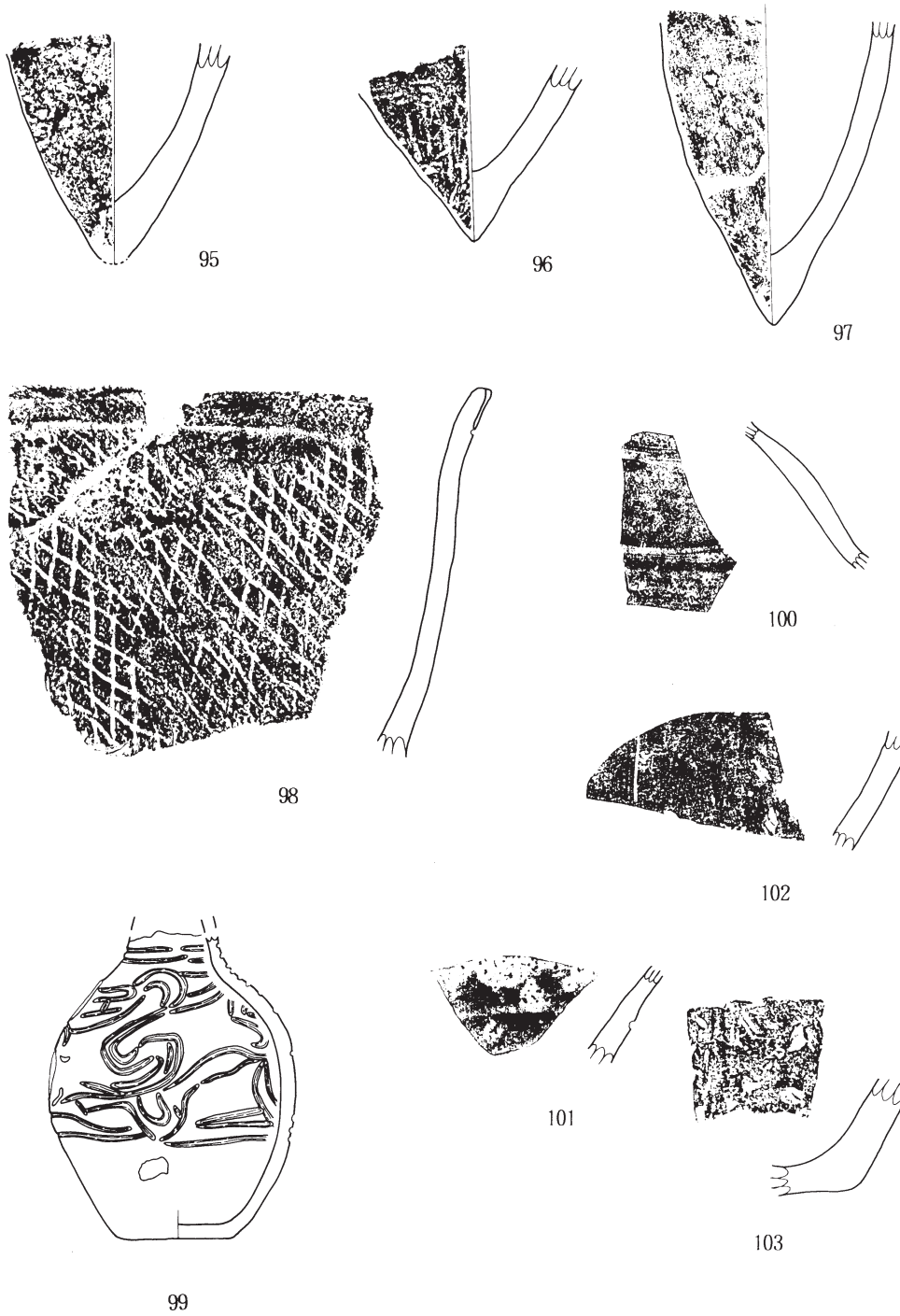




第27図　遺構外出土土器



第28図　遺構外出土土器



第29図　遺構外出土土器

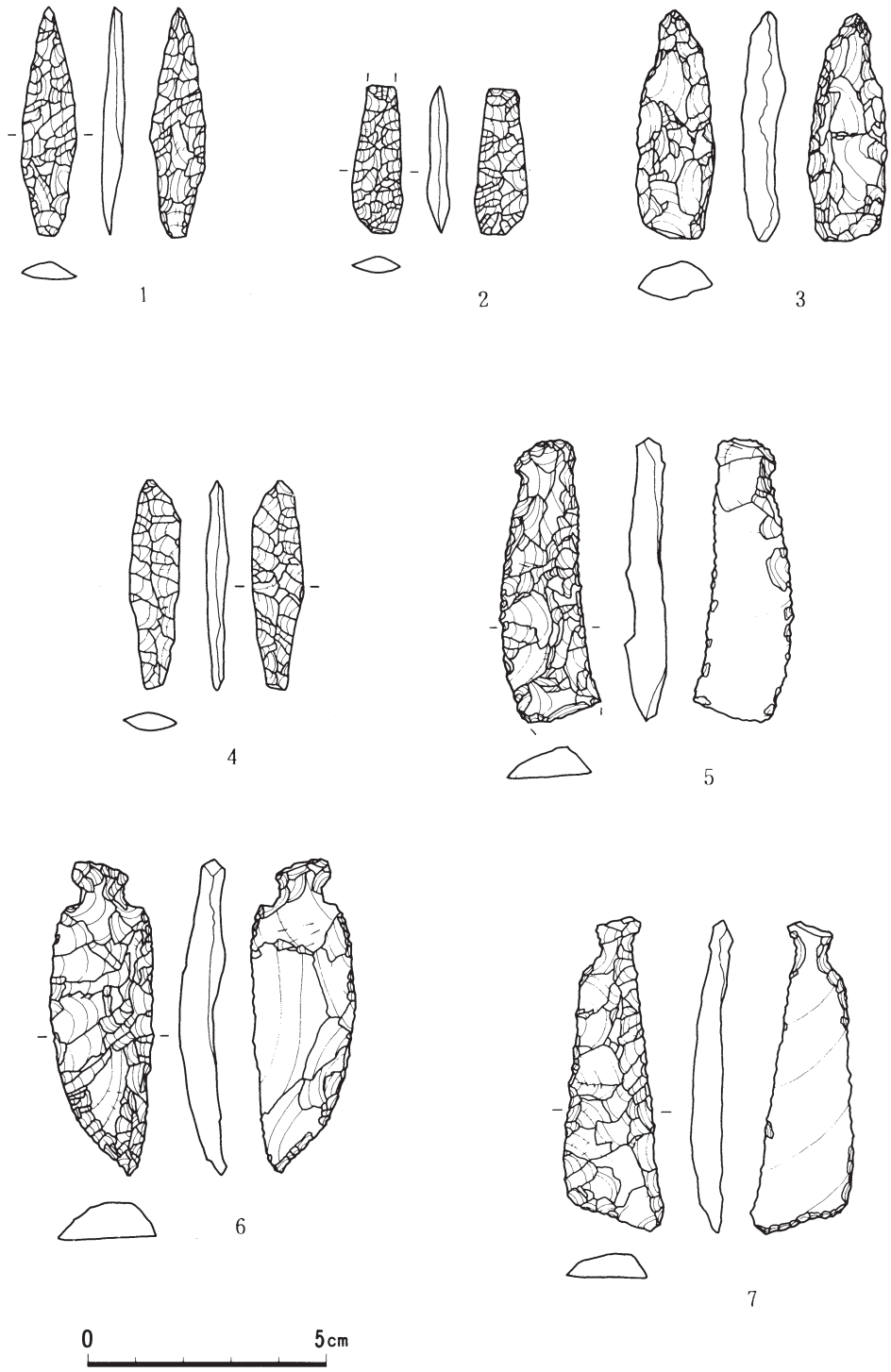
(2) 石　　器

出 土 石 器 観 察 表

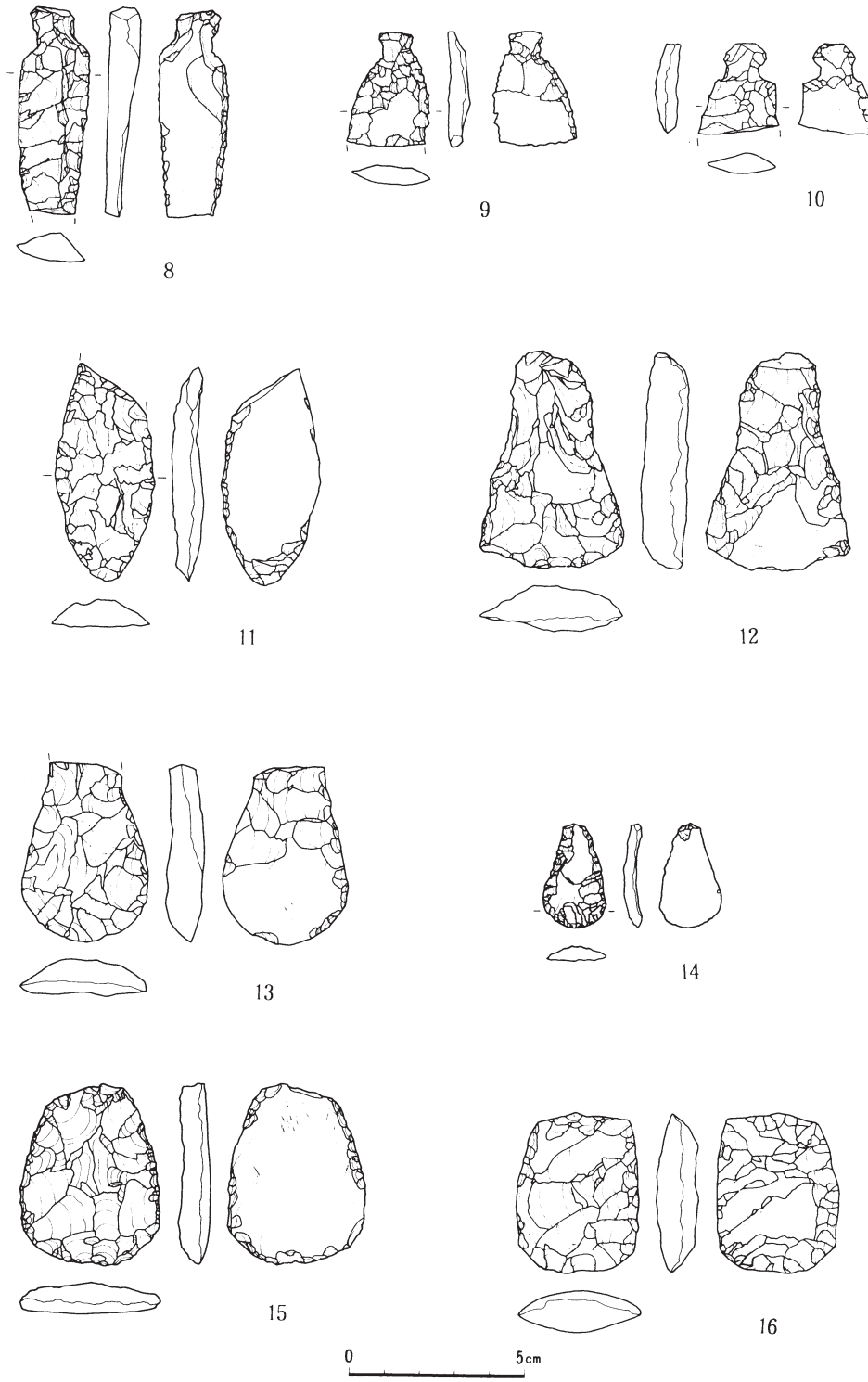
図版番号	分　類	出　土 グリッド	層	計測値 長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石　質	整理番号	備　考
第30図1	石鏃	BX−42	Ⅲ	49	11	3	2.3	珪頁	1	無茎
2	〃	CA−40	Ⅲ	(31)	11	5	(1.3)	〃	2	先端部折損・無茎
3	〃	EE−122	Ⅲ	48	16	9	7.1	〃	3	無茎
4	〃	CB−46	Ⅲ	44	11	5	1.9	〃	4	無茎
5	石匙	CU−94	Ⅲ	(60)	22	7	(9.0)	〃	5	先端部折損・縦型
6	〃	BX−38	Ⅰ	66	23	10	11.4	〃	6	縦型
7	〃	CB−46	Ⅲ	66	22	5	6.9	〃	7	縦型
第31図8	〃	BZ−38	Ⅲ	(59)	19	9	(10.0)	〃	8	先端部折損・縦型
9	〃	BZ−40	Ⅲ	(33)	24	5	(4.2)	〃	9	先端部折損・縦型
10	〃	BX−44	Ⅲ	(26)	23	6	(3.4)	〃	10	折損・縦型
11	〃	BX−44	Ⅲ	(62)	28	9	(13.7)	〃	11	折損縦型
12	石箆	CA−38	Ⅲ	62	41	13	28.2	〃	12	
13	〃	CB−38	Ⅲ	(51)	36	11	(20.1)	〃	13	基部折損
14	〃	CA−40	Ⅲ	29	17	5	1.9	〃	14	小型
15	〃	CA−38	Ⅲ	52	40	9	21.4	〃	15	
16	〃	CZ−110	Ⅰ	46	35	12	23.8	〃	16	両面加工
第32図17	不定型石器		表採	62	46	17	46.6	〃	17	
18	〃	CA−38	Ⅲ	35	61	12	17.5	〃	18	
19	〃	EB−116	Ⅲ	60	45	14	26.1	〃	19	
20	〃	CZ−110	Ⅰ	(42)	18	8	(1.0)	〃	20	折損・石箆？
21	〃	EF −122	Ⅱ	(40)	18	9	(4.4)	〃	21	折損・石箆？
22	〃	BZ−40	Ⅲ	48	24	10	12.5	〃	22	
23	〃	CQ−17	Ⅰ	35	31	13	15.1	〃	23	
24	〃	EF−122	Ⅱ	59	39	10	13.6	〃	24	
第33図25	磨製石斧	BS−44	Ⅳ	(35)	44	26	41.6	凝灰	25	折損・刃部のみ
26	敲磨器	BY−40	Ⅲ	126	54	31	301	流紋	26	磨製品石斧の転用？
27	磨製石斧	BY−40	Ⅲ	(94)	42	33	(218)	輝緑	27	折損
28	〃	CS−114	Ⅲ	132	42	28	269	ホル	28	
29	〃	EJ−122	Ⅳ	(8.5)	42.5	16	(28.5)	輝緑	29	基部折損
30	〃	BZ−40	表採	102	43	24	164	輝緑	30	
31	〃	BS−44	Ⅳ	(67)	36	16	(59)	頁岩	31	欠損
32	磨斧の残材	CU−104	Ⅰ	66	29	17	41	輝凝	32	擦り切り痕が見られる
第34図33	打製石斧	BY−38	Ⅲ	124	70	35	351	輝緑	33	一部自然面を残す
34	敲磨器	CZ−42	Ⅲ	(89)	50	50	(253)	凝灰	34	折損・スリ
35	〃	CA−40	Ⅲ	96	53	36	325	砂	35	スリ＋タタキ
36	〃	EF−122	Ⅲ	119	62	35	345	砂	36	スリ
37	〃	EE−116	Ⅲ	101	75	62	556	砂	37	スリ＋タタキ
38	〃	CA−40	Ⅲ	143	72	50	692	凝灰	38	スリ＋タタキ
39	〃	CP−114	Ⅲ	(76)	58	60	(277)	安山	39	
第35図40	〃	EF−122	Ⅲ	154	60	59	844	安山	40	スリ＋タタキ
41	〃	BW−40	Ⅲ	148	82	61	895	〃	41	スリ＋タタキ
42	〃	BX−42	Ⅲ	86	55	54	347	〃	42	スリ
43	〃	EE−124	Ⅲ	(89)	59	55	(461)	〃	43	折損　スリ＋タタキ
44	〃	CA−40	Ⅲ	140	54	45	485	〃	44	スリ＋タタキ
45	〃	CA−40	Ⅲ	115	54	44	492	〃	45	スリ＋タタキ
第36図46	〃	CA−40	Ⅲ	119	47	41	403	〃	46	スリ＋タタキ
47	〃	CB−44	Ⅲ	(87)	58	47	(356)	流紋	47	折損　スリ＋タタキ
48	〃	EX−124	Ⅲ	(85)	75	55	(502)	安山	48	折損・スリ
49	〃	BX−42	Ⅲ	217	71	50	1154	閃緑	49	スリ
50	〃	CA−40	Ⅲ	136	91	61	954	安山	50	スリ
51	〃	BT−46	Ⅲ	90	66	38	365	閃緑	51	スリ
第37図52	〃	CB−40	Ⅲ	121	73	52	627	砂岩	52	スリ＋タタキ
53	〃	EF−122	Ⅲ	(102)	73	48	(451)	安山	53	折損　スリ＋タタキ

図版番号	分類	出土グリッド	層	計測値 長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	整理番号	備考
54	敲磨器	CB－44	Ⅲ	(88)	79	61	(516)	安山	54	折損 スリ
第38図55	石錘	EE－122	Ⅲ	73	49	17	92	凝灰	1	
56	〃	EA－118	Ⅲ	64	63	18	112.5	砂岩	2	
57	〃	EE－122	Ⅲ	68	57	17	95	〃	3	
58	〃	EF－121	Ⅳ	60	55	19	80	〃	4	
59	〃	EE－122	Ⅳ	65	55	19	87.6	安山	5	
60	〃	EE－122	Ⅲ	55	49	12	56	砂岩	7	
61	〃	EF－122	Ⅲ	54	52	17	64	〃	10	
62	〃		表採	60	50	21	94	〃	12	
63	〃	EE－122	Ⅲ	65.5	65	14	94	〃	23	
64	〃	EF－120	Ⅲ	66	64	29	112	〃	26	
第39図65	〃	EA－118	Ⅲ	81	70	27	216	安山	28	
66	〃	CS－109	表採	77	64	23	112.5	砂岩	43	
67	〃	EF－122	Ⅲ	83	62	18	127.5	安山	46	
68	〃	ER－148	Ⅲ	74	76	31	255	安山	48	
69	〃	EB－118	Ⅲ	91	85	29	320	砂岩	58	
70	〃	EF－121	Ⅳ	103	80	31	349.5	〃	62	
71	〃	EF－122	Ⅲ	70	69	29	207.5	〃	35	
第40図72	〃	EA－120	Ⅲ	84	84	38	310	礫岩	59	
73	〃	CZ－110	Ⅰ	101	72	29	327.5	凝灰	63	
74	〃	EF－122	Ⅲ	97	91	31	382.5	砂岩	67	
75	〃	BM－64	Ⅲ	126	83	44	520	安山	68	
	〃	EM－124	Ⅱ	(59)	(38)	13	(48)	流紋	6	折損
	〃	EE－122	Ⅲ	58	43	5	27.5	砂岩	8	折損
	〃	ER－148	Ⅲ	62	47	15	55	安山	9	
	〃	DA－106	表採	48	46	17	65.5	チャ	11	
	〃	EE－122	Ⅲ	59	52	15	84	砂岩	13	
	〃	EB－120	Ⅲ	59	56	14	91	閃緑	14	
	〃	CB－44	Ⅲ	65	50	16	91	凝灰	15	
	〃	EO－128	Ⅲ	59	56	19	101.5	頁	16	
	〃	EE－122	Ⅲ	66	50	20	101	閃緑	17	
	〃	EF－122	Ⅲ	71	46	13	72	砂岩	18	
	〃	EO－128	Ⅲ	62	50	15	86	頁	19	
	〃	EE－121	Ⅲ	(30)	56	20	(55)	砂岩	20	折損
	〃	EB－118	Ⅲ	60	56	20	124	閃緑	21	
	〃	EF－122	Ⅲ	60	60	18	124	砂岩	22	
	〃	CP－112	Ⅳ	65	60	20	127.5	閃緑	24	
	〃	EJ－122	Ⅳ	61	60	(20)	123	頁	25	折損
	〃	EF－122	Ⅲ	65	63	23	156	安山	27	
	〃	EA－116	Ⅲ	(58)	48	12	(77.5)	砂岩	29	折損
	〃	CR－102	Ⅰ	64	50	25	142.5	チャ	30	
	〃	EA－118	Ⅲ	72	54	20	115	砂岩	31	
	〃	DA－106	表採	76	58	20	137.5	チャ	32	
	〃	EA－118	Ⅲ	68	50	20	121.5	チャ	33	
	〃	EM－124	Ⅱ	76	59	22	158	チャ	34	
	〃	CT－100	表採	(65)	64	26	192.5	凝灰	36	折損
	〃	EM－124	Ⅲ	67	58	22	127.5	〃	37	
	〃	EF－122	Ⅲ	75	58	15	102.5	頁	38	
	〃	EF－122	Ⅲ	(34)	(55)	21	101	砂岩	39	折損
	〃	EE－122	Ⅲ	72	65	20	116.5	安山	40	
	〃	CD－116	Ⅳ	65	54	25	182.5	チャ	41	
	〃	EE－122	Ⅲ	(82)	67	28	209.5	頁	42	折損
	〃	EF－122	Ⅲ	75	55	20	140.5	流紋	44	
	〃	CS－110	表採	75	64	25	196.5	頁	45	
	〃	EM－124	Ⅱ	82	72	20	189	チャ	47	
	〃	EF－122	Ⅲ	10	55	23	202.5	流紋	49	

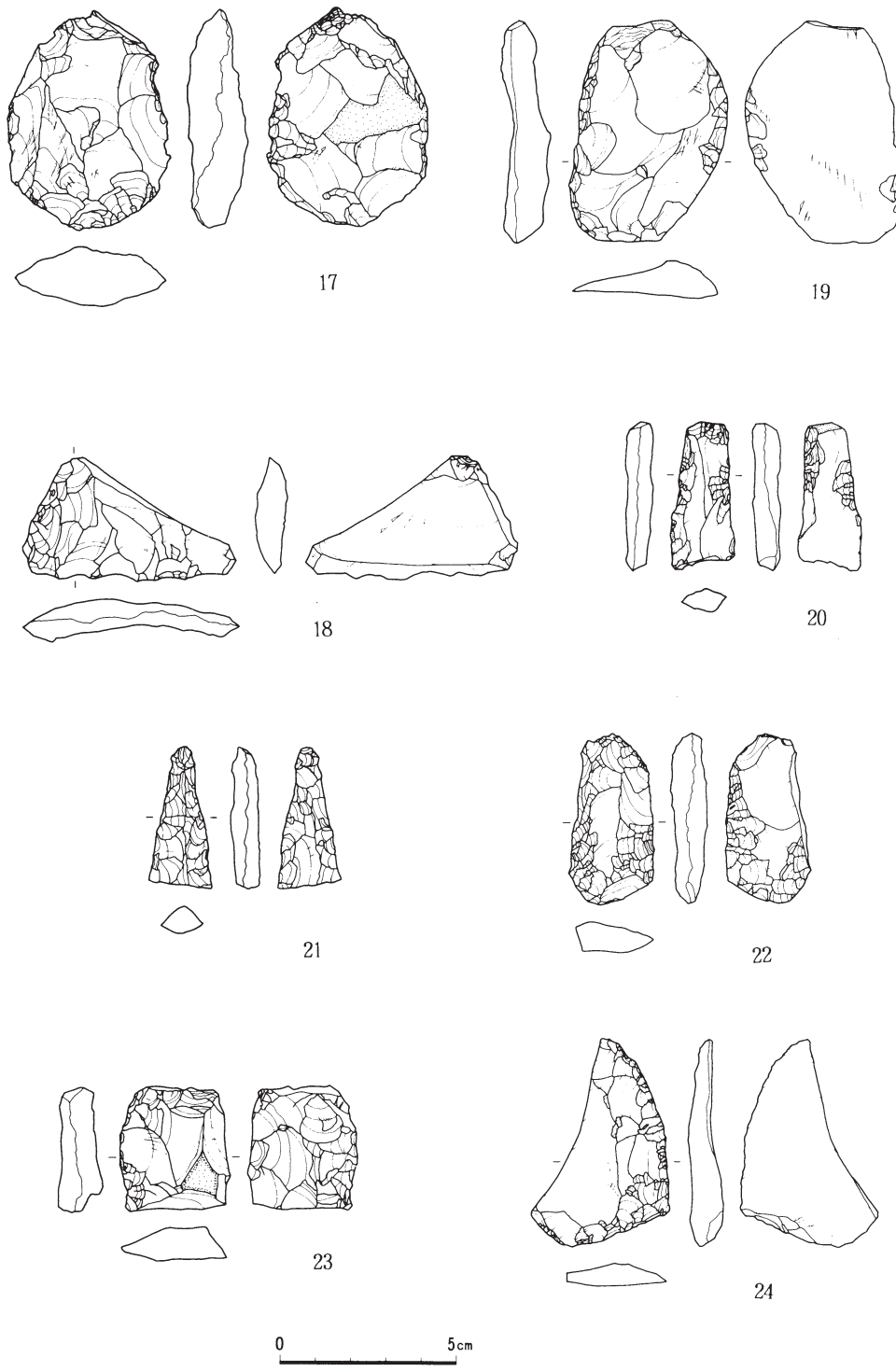
図版番号	分　類	出　土 グリッド	層	計　測　値				石　質	整理 番号	備　考
				長さ(mm)	幅（mm）	厚（mm）	重（g）			
	石錘	ＥＥ－116	Ⅲ	76	70	33	266	安山	50	折損
	〃	ＥＭ－124	Ⅱ	(75)	71	26	235	凝灰	51	折損
	〃	ＥＢ－118	Ⅲ	97	67	26	245	砂岩	52	
	〃	ＥＥ－122	Ⅲ	(45)	75	22	127.5	凝灰	53	折損
	〃	ＥＯ－128	Ⅲ	70	76	24	194	流紋	54	
	〃	ＣＰ－114	Ⅲ	78	78	33	347.5	チャ	55	
	〃	ＣＯ－114	Ⅰ	80	76	25	271	礫岩	56	
	〃	ＣＰ－114	Ⅲ	92	61	33	268	チャ	57	
	〃	ＥＭ－124	Ⅱ	(60)	71	26	(202)	砂岩	60	折損
	〃	ＣＰ－112	Ⅳ	92	67	27	266	チャ	61	
	〃	ＥＦ－122	Ⅲ	84	70	25	245	凝灰	64	
	〃	ＣＵ－104	Ⅰ	66	(46)	19	(105)	砂岩	65	折損
	〃	ＥＡ－116	Ⅲ	(45)	65	23	(150)	流紋	66	折損
	〃	ＥＥ－120	Ⅲ	94	85	30	374.5	凝灰	69	
	〃	ＣＺ－110	Ⅰ	107	82	31	401	砂岩	70	
	〃	ＥＦ－122	Ⅲ	107	97	34	450	〃	71	
	〃	ＥＦ－122	Ⅲ	62	46	15	67	〃	72	



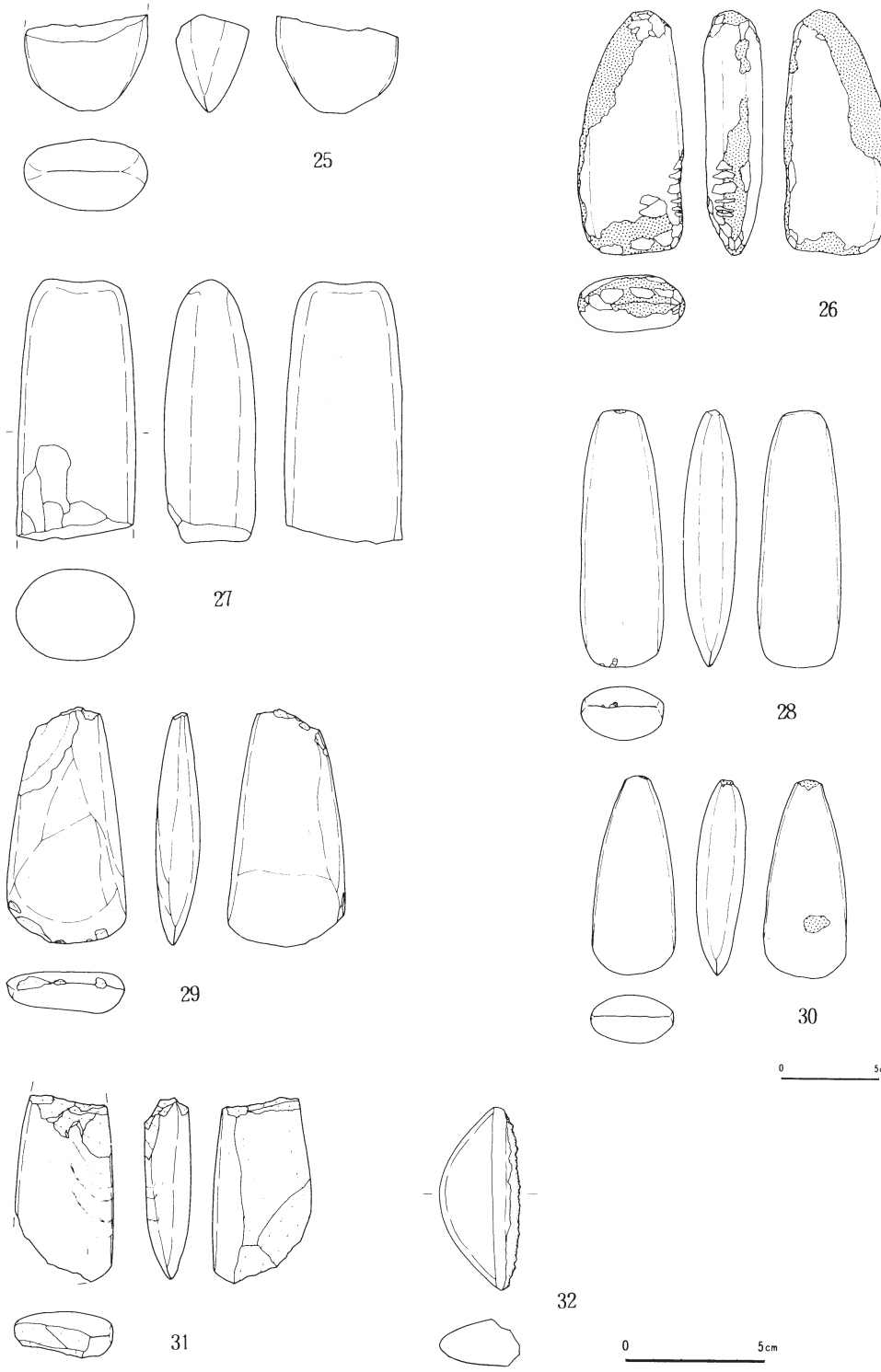
第30図　遺構外出土石器



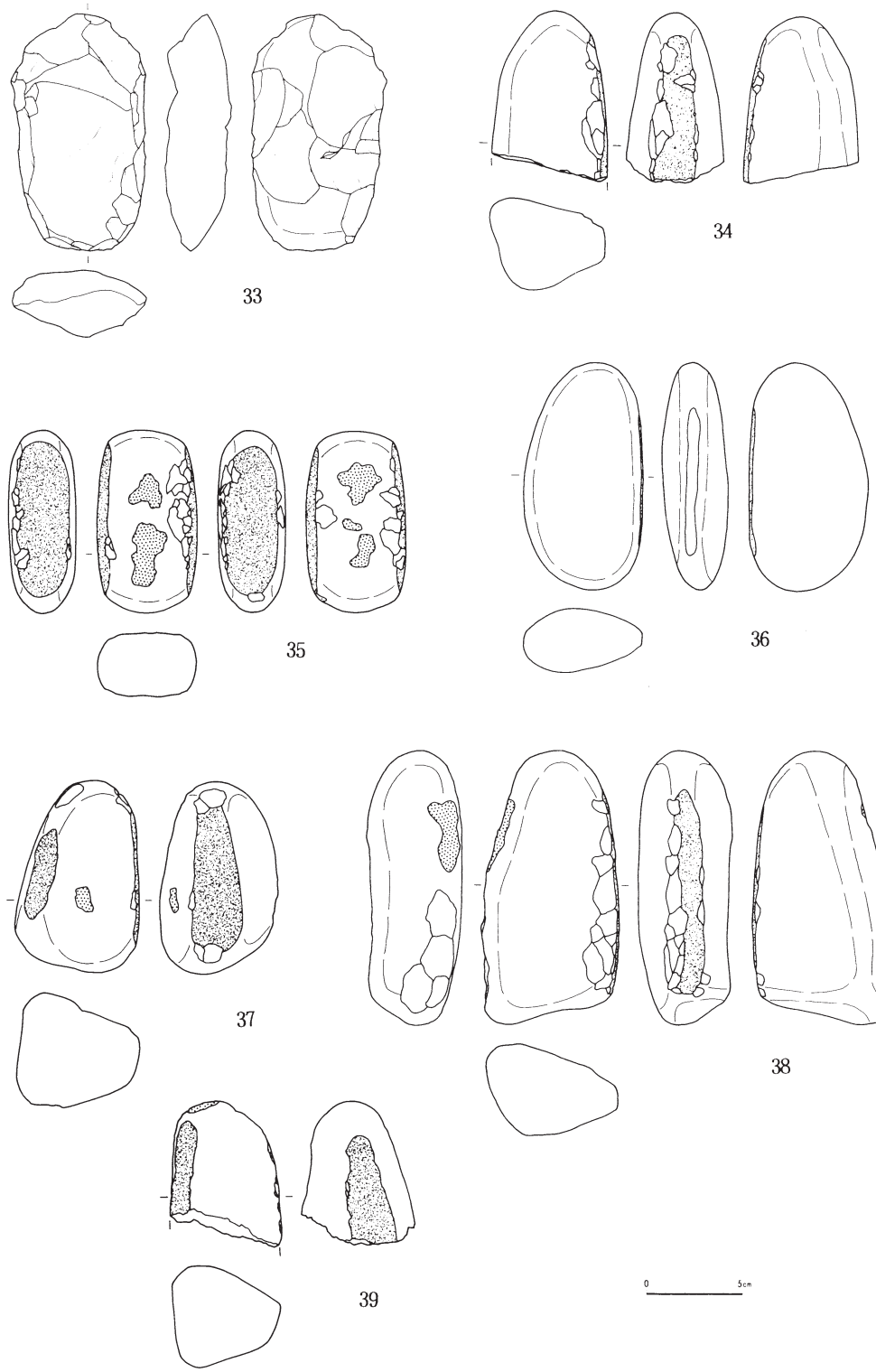
第31図　遺構外出土石器



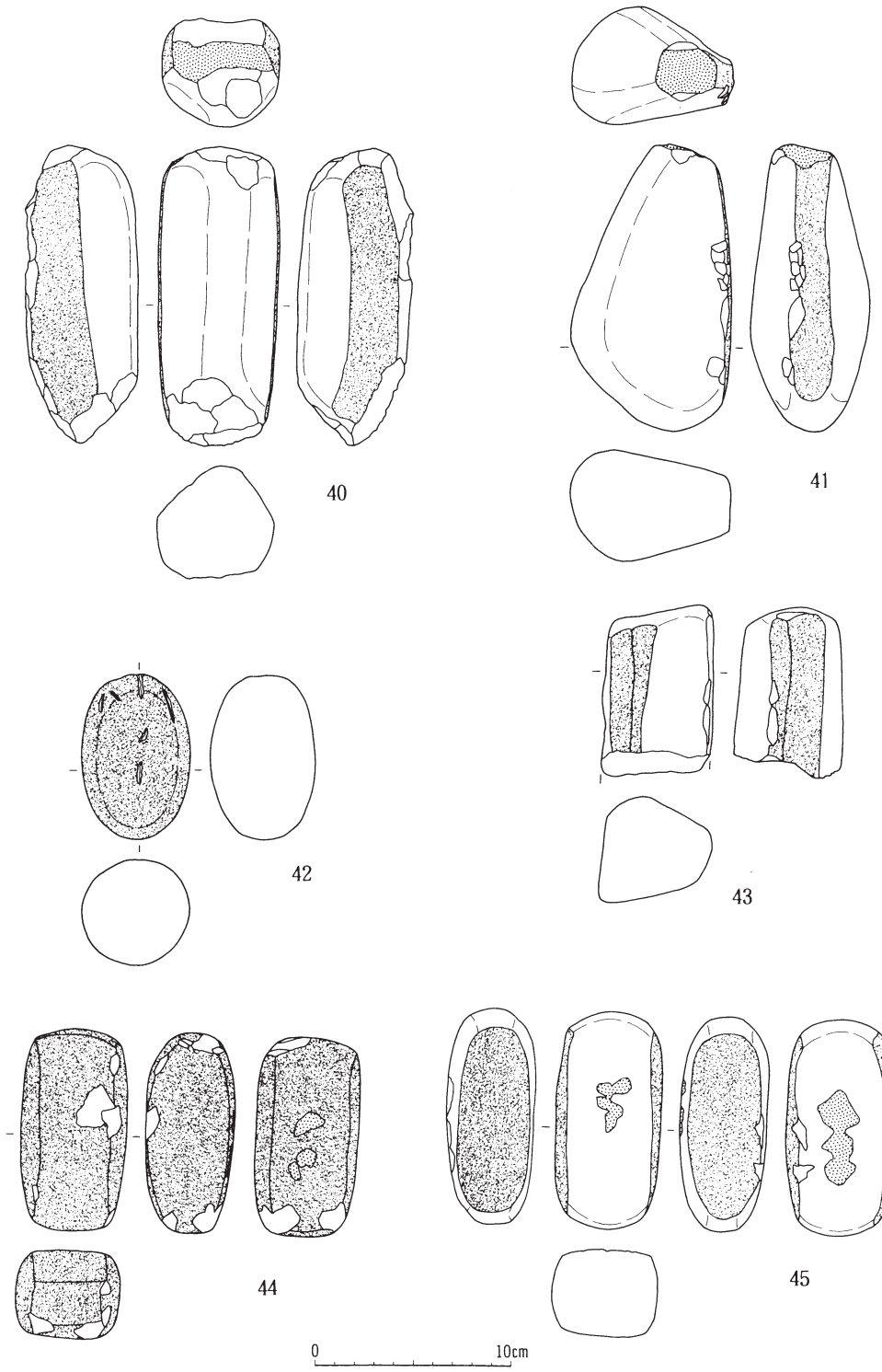
第32図　遺構外出土石器



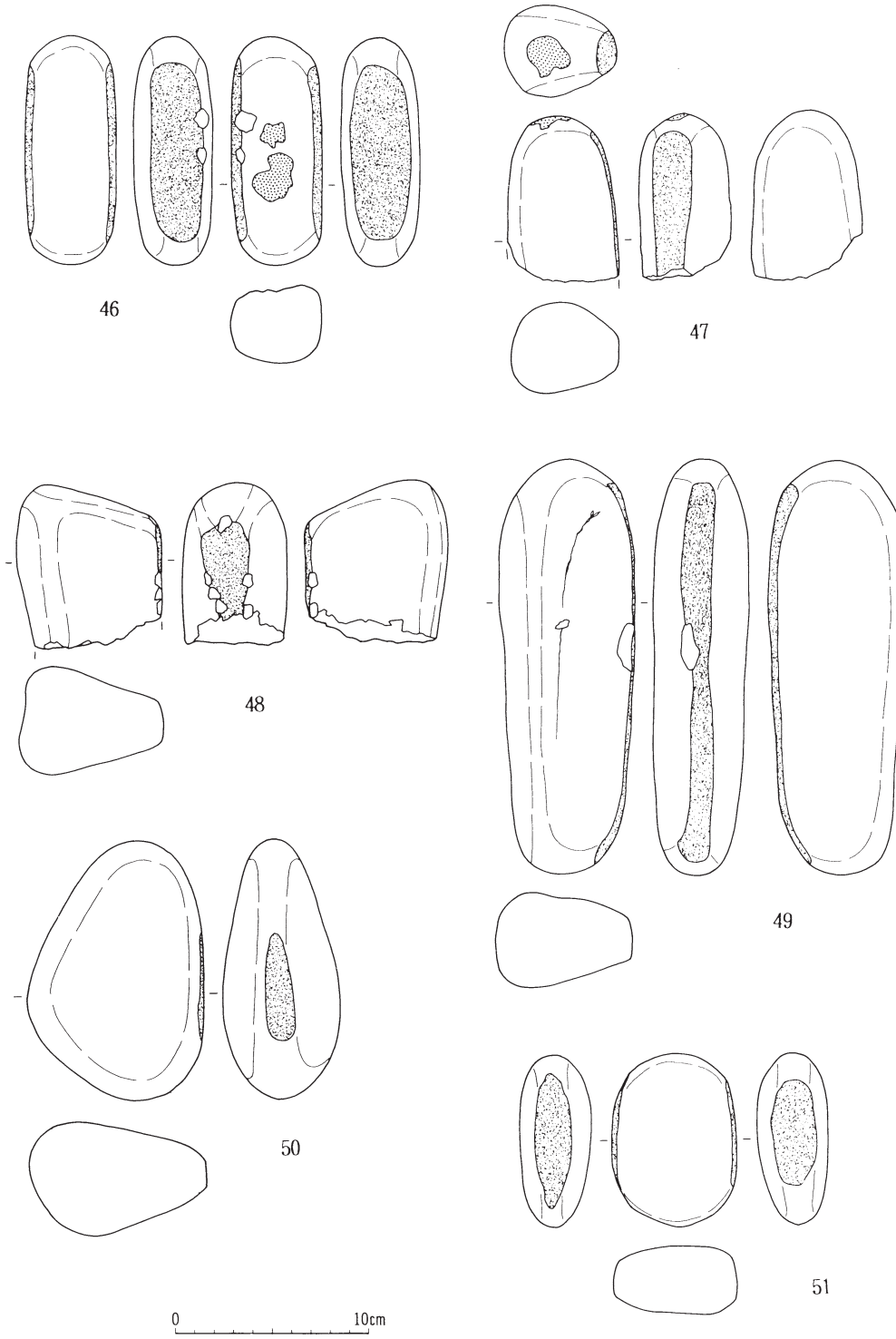
第33図　遺構外出土石器



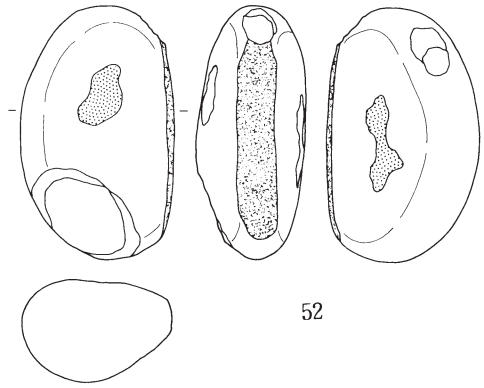
第34図　遺構外出土石器



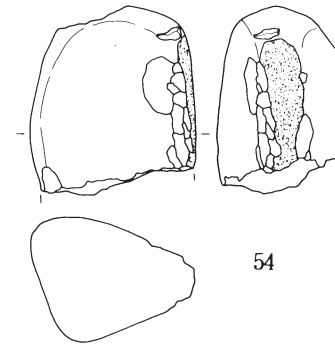
第35図　遺構外出土石器



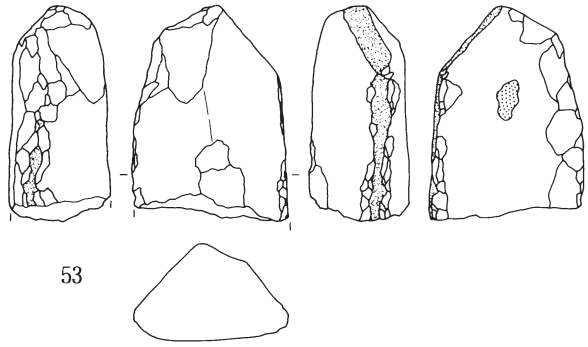
第36図　遺構外出土石器



52



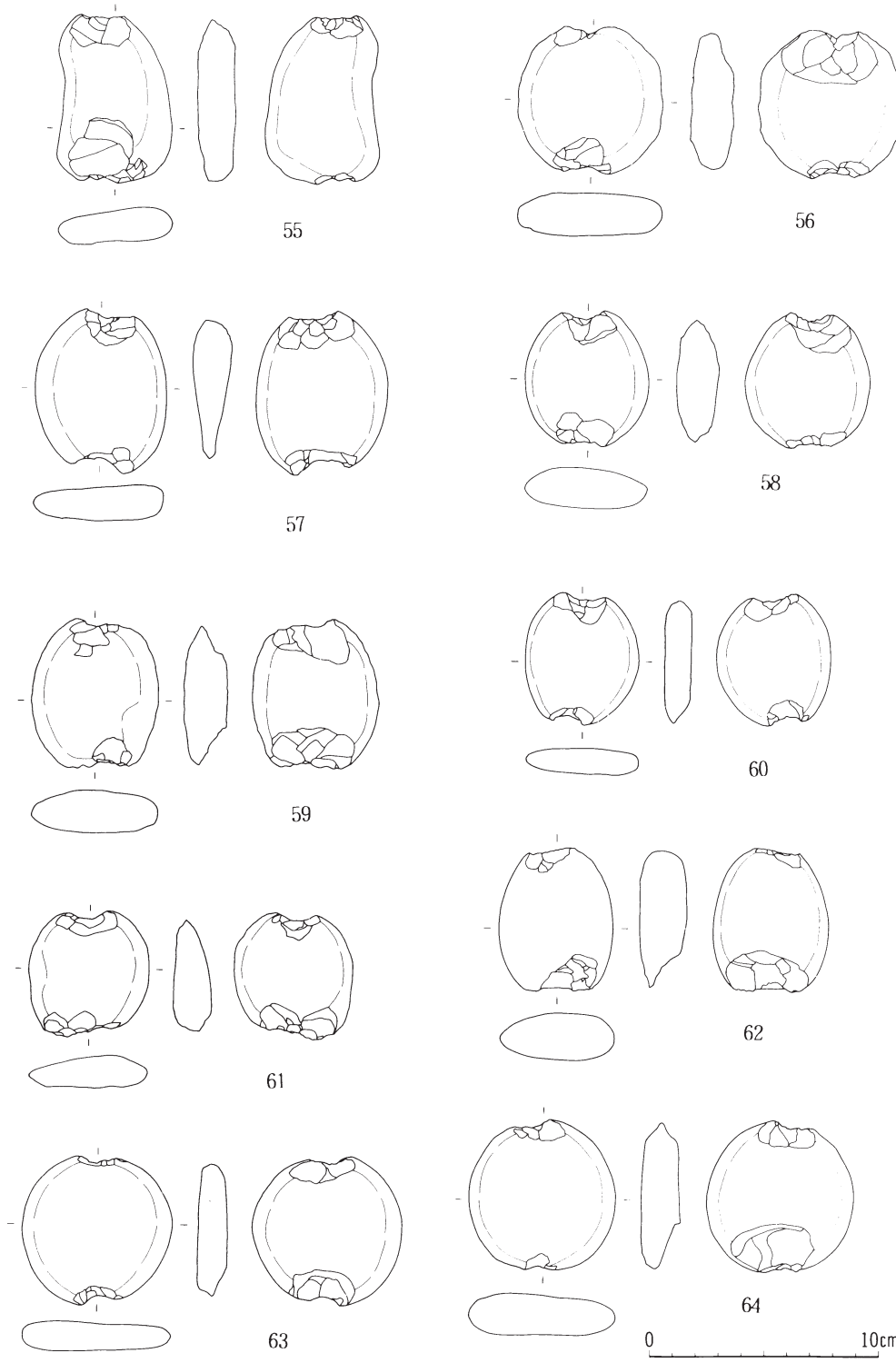
54



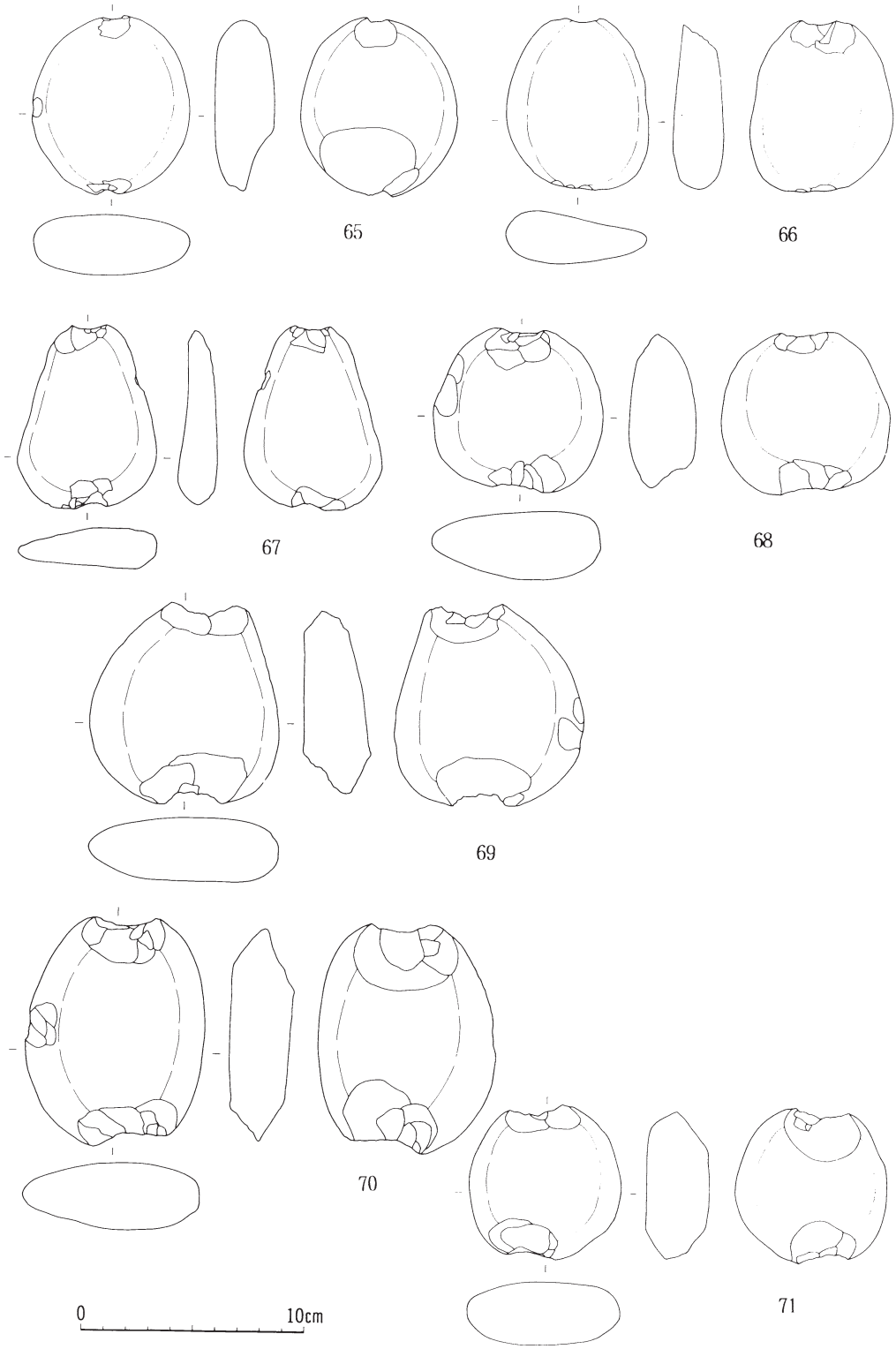
53

0　　10cm

第37図　遺構外出土石器



第38図　遺構外出土石器



第39図　遺構外出土石器

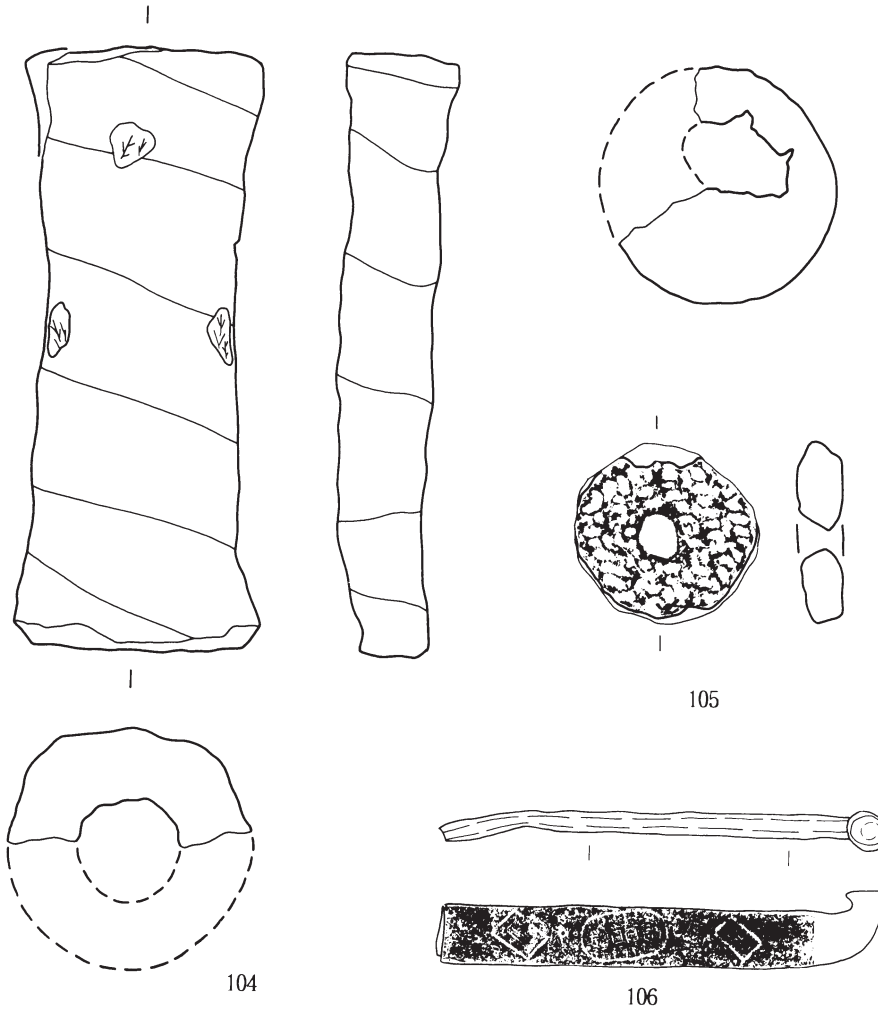
第40図　遺構外出土石器

(3) その他の遺物

（第31図104）は、ＦＤ－158グリッド、第Ｉ層から出土した平安時代の支脚である。大きさは、高さ160㎝、径60㎝を測り、真ん中に1.7㎝の穴が空けられている。全体的に火を受けている。

（第31図105）は、ＣＡ－40グリッド、第Ⅲ層から出土した縄文時代の円盤状土製品で土器破片を再利用したものであろう。大きさは、径５㎝、厚さは1.2㎝を測る。真ん中に1.1㎝ほどの穴が空けられている。外面には、縄文（ＲＬ）が施されている。おそらく縄文時代後期前半期のものであろう。

（第31図106）は、ＥＸ－148グリッド、第Ｉ層の貝塚ブロックの上面から出土した。近世の煙管である。煙管には、小判の図柄、また一分銀、一朱銀が彫りこまれている。



第41図　その他の遺物

第V章　ま　と　め

鷹架遺跡の試掘調査では、縄文時代早期貝殻文系（蛍沢式、吹切沢、物見台式）の時期、条痕文系（ムシリ式）の時期、早期縄文系（早稲田５類、表館Ｘ群）の時期、前期（早稲田６類）の時期、後期（十腰内Ｉ式）の時期、平安時代、中世、近世にわたる各時代の遺物が出土した。

特に遺跡西側の舌状台地に当たる西区は、縄文時代後期前半期の十腰内Ｉ式及び縄文時代早期後半期の土器・石器が見られ、それらと関連する土坑及び焼土がこの地区から検出している。

細長く北東に突き出した台地北東区からは、縄文時代早期（蛍沢式）、縄文時代後期（十腰内Ｉ式）の土器・石器が出土して見られる。さらに、平安時代の住居跡が３軒検出している。

南区からは、縄文時代早期の物見台式を主体とする土器・石器及び物見台式期の住居跡も１軒検出している。また、この地区から円形の土坑も検出している。

以上のことから、今回試掘調査をした鷹架遺跡の台地には、大きく西区、北区、南区の三地区が遺跡の中心となると推定される。

（大湯　卓二）

《参考文献》

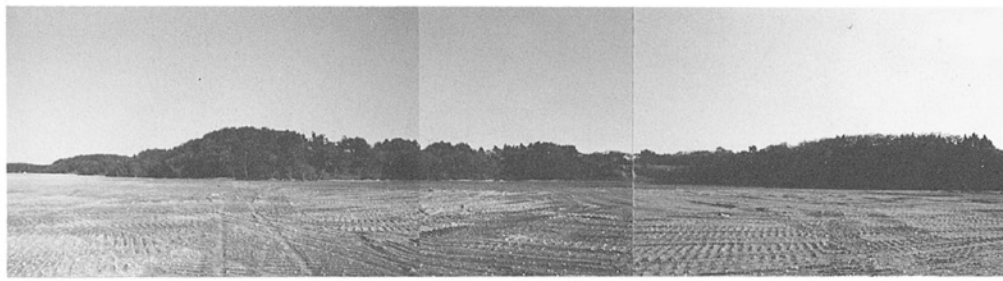
青森県教育委員会　1979『千歳(13)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第27集

青森県教育委員会　1981『新納屋遺跡(２)』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第62集

青森県教育委員会　1981『鷹架遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第63集

青森県教育委員会　1984『弥栄平(４)(５)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第106集

八戸市教育委員会　1987『田面木平遺跡(１)』　八戸市埋蔵文化財調査報告書　第20集

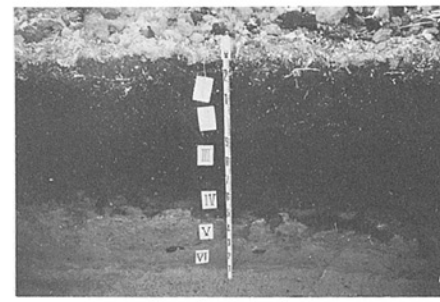


鷹架遺跡の遠景

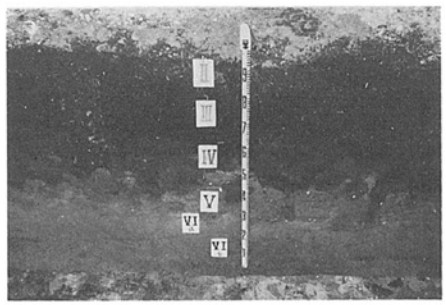
南区の発掘調査区

東南区の発掘調査区

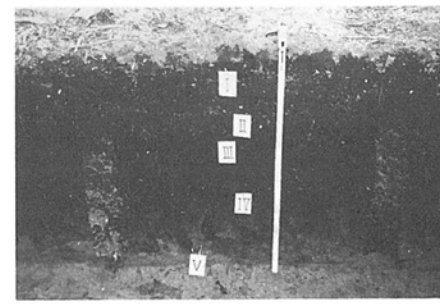
西区の発掘調査区



基　本　層　序

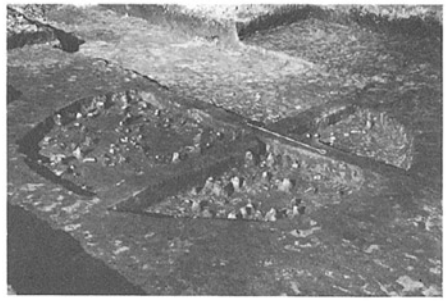


基本層序（CM－114～CO－114）

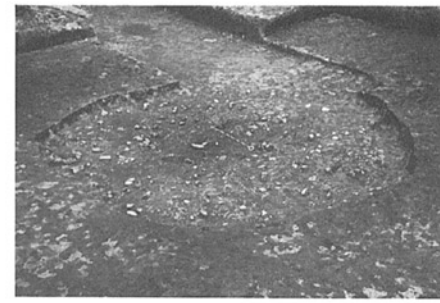


基本層序（EA－118～EB－118）

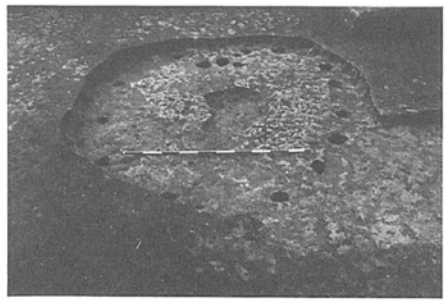
遺跡の遠景及び遺跡の基本層序



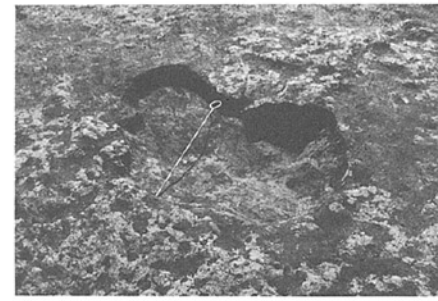
第１号住居跡



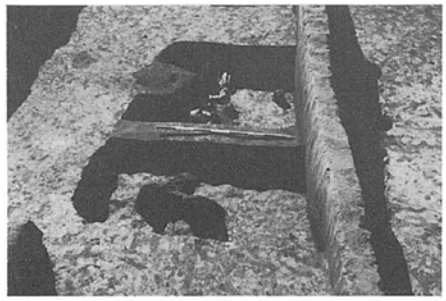
第１号住居跡



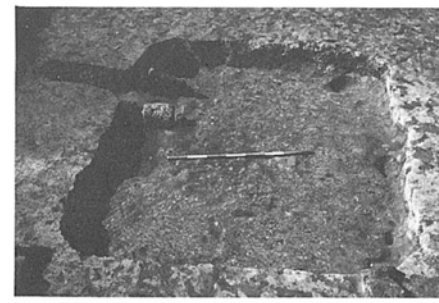
第１号住居跡



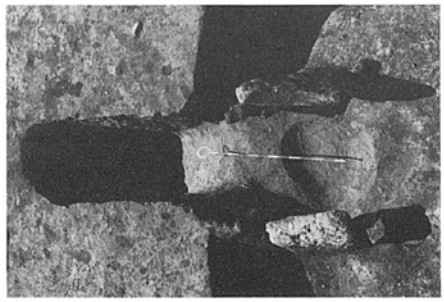
第１号住居跡　ピット１



第２号住居跡



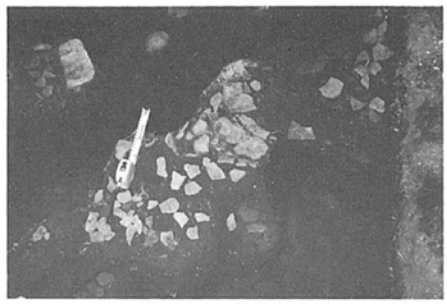
第２号住居跡



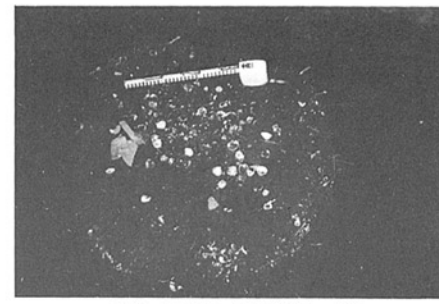
第２号住居跡　カマド

第２号住居跡　カマド

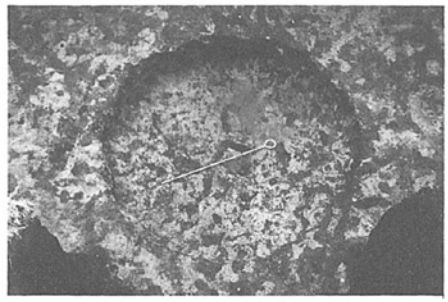
第１号・第２号住居跡



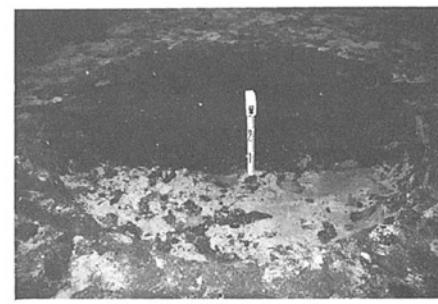
遺物出土状況



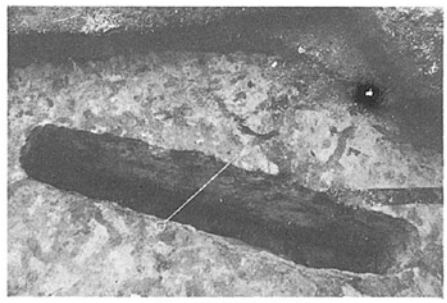
貝塚（ＥＸ－148グリッド）



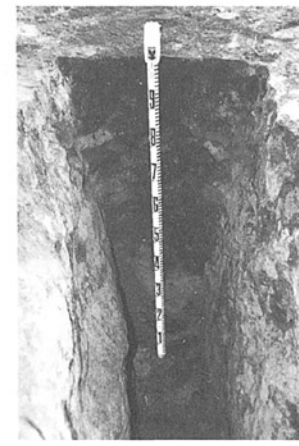
第 1 号 土 坑



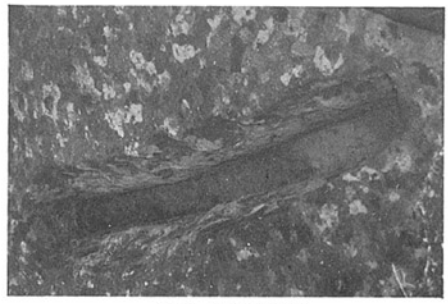
第１号土坑セクション



第１号溝状土坑

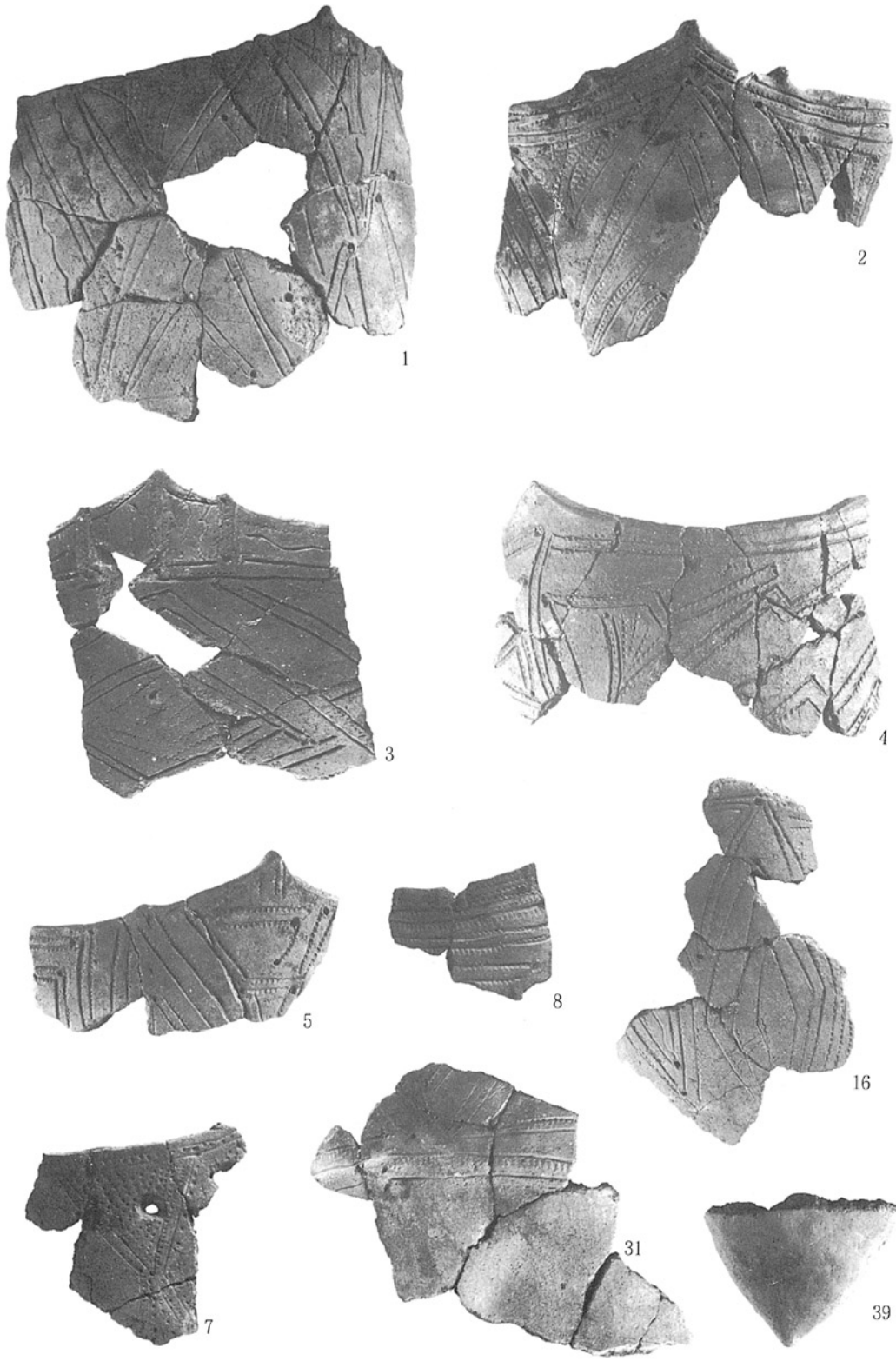


第１号溝状土坑セクション

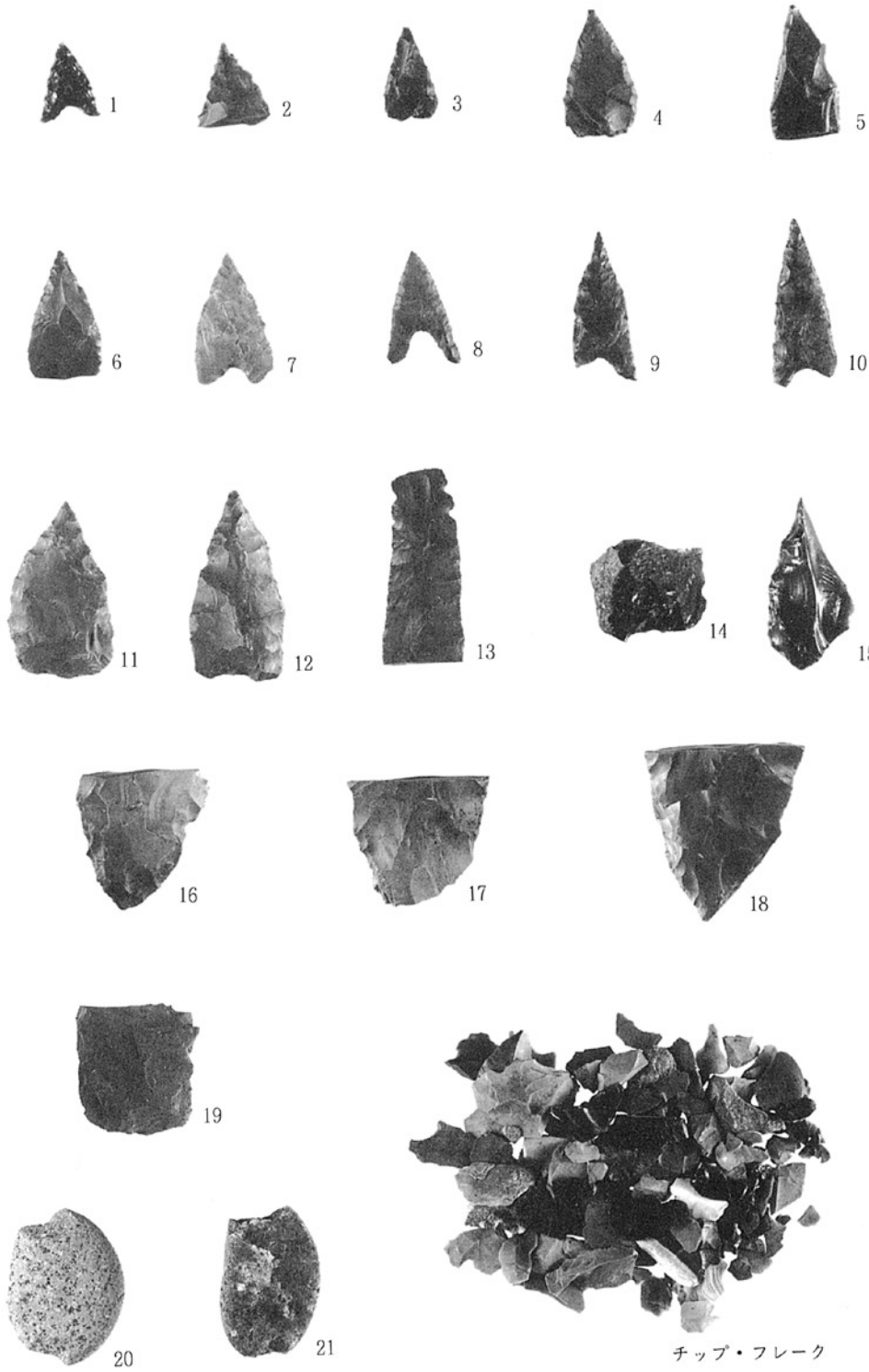


第３号溝状土坑

遺物の出土状況及び検出遺構

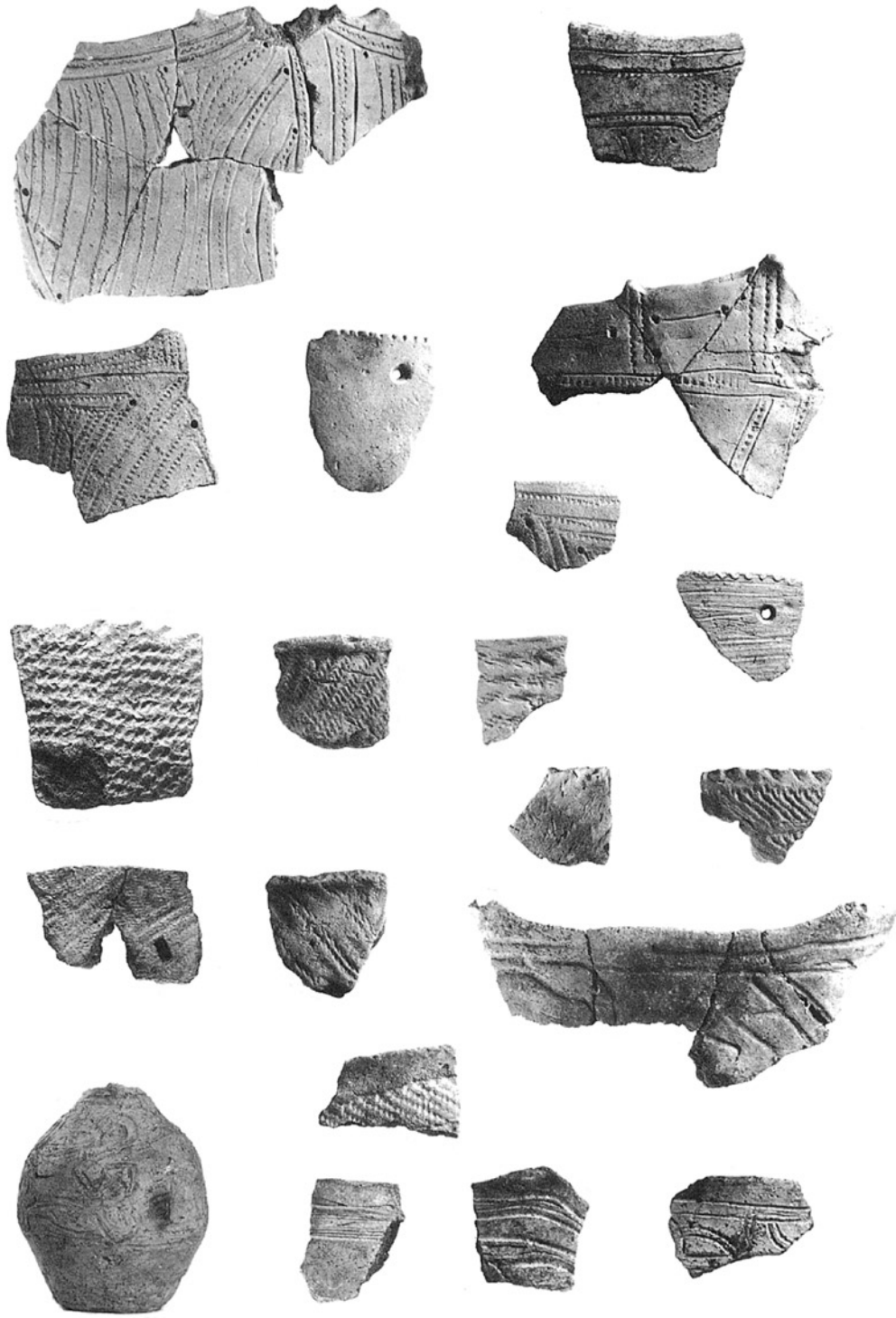


第１号住居跡　出土土器



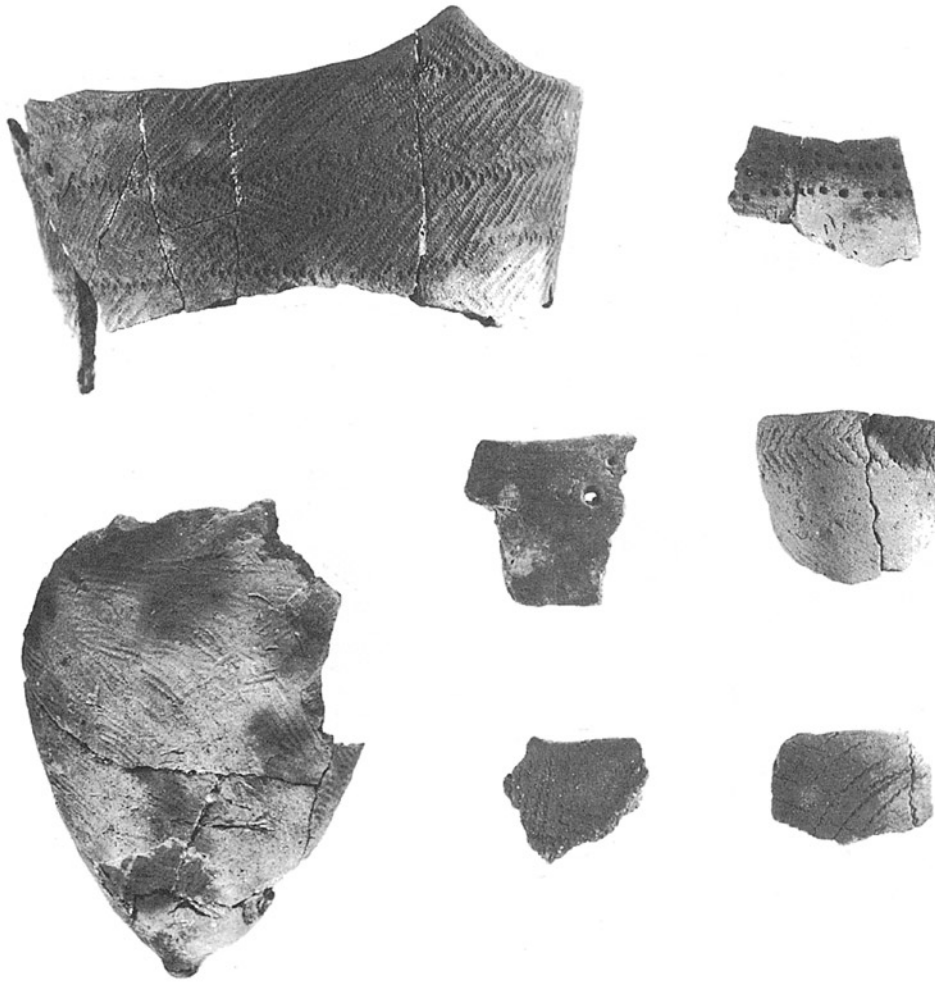
第１号住居跡　出土石器

第２号住居跡　出土遺物（土師器・須恵器・鉄製品）

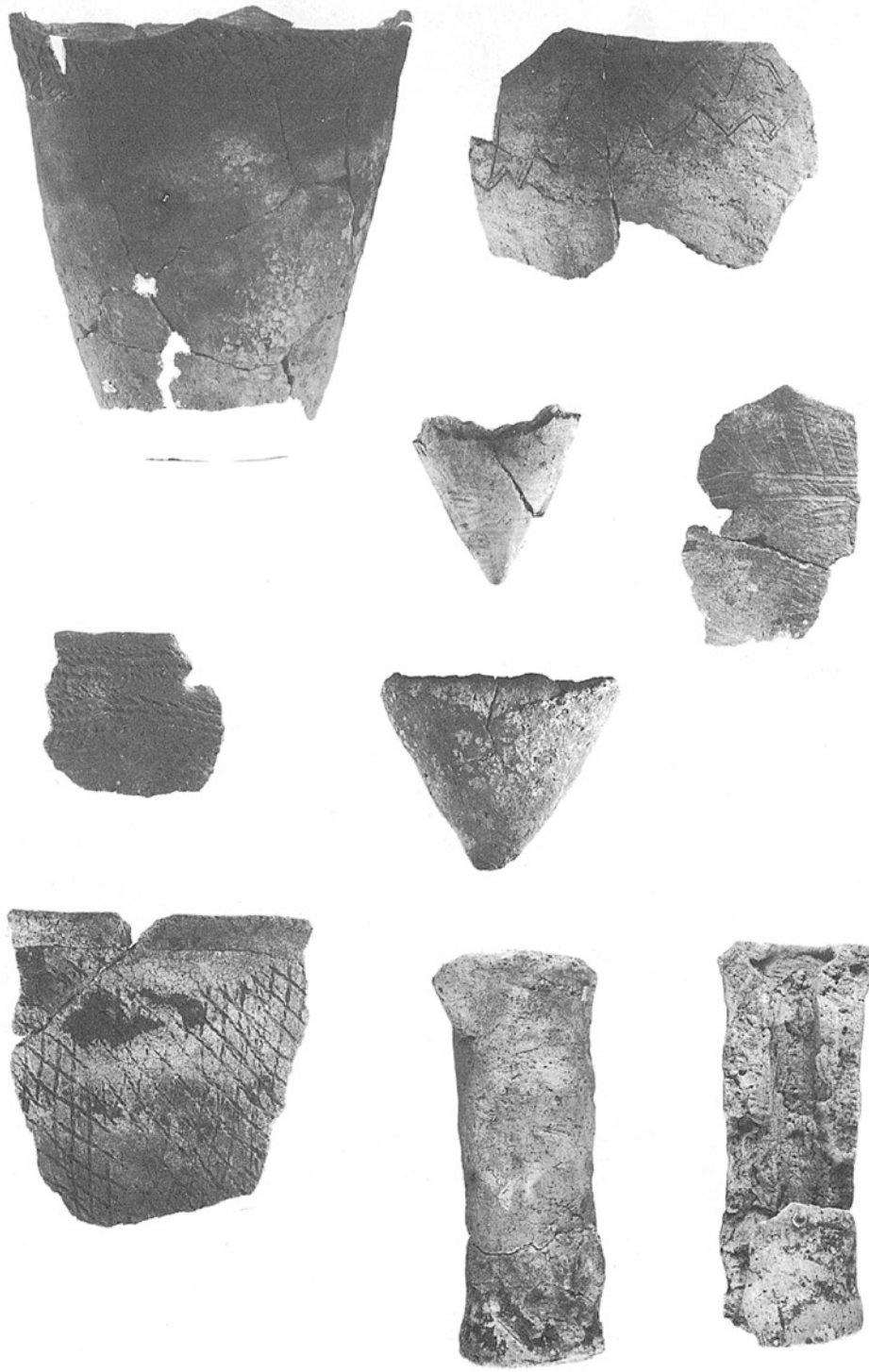


遺構外出土土器（西区）

出土土器（西区）



遺構外出土土器（南区）



遺構外出土土器・平安時代の支脚（北区）

遺構外出土石器

遺構外出土石器

報告書抄録

ふりがな	いえのまえいせきに　たかほこいせきに
書名	家ノ前遺跡Ⅱ・鷹架遺跡Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第160集
編著者名	大湯　卓二　増尾　知彦　神　康夫
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒038 都道府県 青森市大字新城字天田内152－15 TEL 0177－88－5701
発行年月日	西暦　1994年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
家ノ前（いえのまえ）	青森県上北郡六ヶ所村大字尾駮字家ノ前4－1外	411	50096	40°57′40″	141°21′56″	1992 68～1992 1028 1993 512～1993 1022	14,500 8,000	むつ小川原開発に伴う事前調査
鷹架（たかほこ）	青森県上北郡六ヶ所村大字鷹架道ノ下58－15外	411	50038	40°55′15″	141°22′35″	1993 819～1993 1022	4,880	むつ小川原開発に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
家ノ前	集落 落し穴	縄文時代 早期・前期 後期・晩期	住居跡　3軒 土坑　63基 溝状土坑　10基	土器、石器 土器片錘	縄文時代、弥生時代、平安時代の複合遺跡
		弥生時代 後期		土器、石器	
		平安時代	住居跡　10軒	土師器、紡錘車	
鷹架	集落 落し穴	縄文時代 早期・後期	住居跡　1軒 溝状土坑　7基 土坑　11基	土器、石器	縄文時代、平安時代の複合遺跡
		平安時代	住居跡　3軒	土師器、鉄製品	

青森県埋蔵文化財調査報告 第160集

家ノ前遺跡Ⅱ
鷹架遺跡Ⅱ
発掘調査報告書

発行年月日　平成6年3月31日
発　　行　青森県教育委員会
編　　集　青森県埋蔵文化財調査センター
〒038
青森市大字新城字天田内152-15
電　話　0177－88－5701番
印　　刷　東奥印刷株式会社
〒030 青森市古川二丁目17－5
☎ 0177－76－5361